

岐阜県教育文化財団文化財保護センター
調査報告書 第91集

重竹遺跡・上西田遺跡

【第2分冊・付篇 洞雲戸遺跡】

2005

財団法人 岐阜県教育文化財団

しげ たけ かみ にし だ
重竹遺跡・上西田遺跡

【第2分冊・付篇 ほらうんど
洞雲戸遺跡】

2005

財団法人 岐阜県教育文化財団



上西田遺跡第一調査面（上が東）

D13



上西田遺跡第二調査面（同上）

D14



洞雲戸遺跡レキ群検出状況（東から）

D 15



洞雲戸遺跡出土遺物

D 16

目次 (第2分冊)

目次

第1部 重竹遺跡

第7章 出土遺物

- 第1節 土器・土製品……………(長谷川) 1
- 第2節 石製品……………(長谷川) 117
- 第3節 金属製品・鍛冶関連遺物……………(長谷川) 134
- 第4節 木製品……………(長谷川) 140

第2部 上西田遺跡

- 第1章 調査の経過と方法……………(長谷川) 191

第2章 遺跡の環境

- 第1節 地理的環境……………(長谷川) 196
- 第2節 歴史的環境……………(長谷川) 196

- 第3章 基本層序……………(長谷川) 197

第4章 調査の成果

- 第1節 検出した遺構……………(長谷川) 199
- 第2節 出土遺物……………(長谷川) 203

第3部 自然科学分析

- 第1章 鍛冶関連遺物の分析……………(大澤・鈴木) 205

- 第2章 鍛冶遺構出土粘土塊の分析……………(藤根) 227

- 第3章 プラントオーバーの分析……………(鈴木) 230

- 第4章 花粉分析……………(新山) 234

第5章 樹種同定

- 第1節 重竹遺跡出土炭化材の樹種同定……………(植田) 235
- 第2節 重竹遺跡出土井戸の丸太で組まれた横棧の樹種同定……………(植田) 239

- 第6章 AMSによる放射性炭素年代測定……………(山形) 241

第7章 土器付着漆質物等の材質分析	(藤根) 243
-------------------	----------

第4部 考察・まとめ

第1章 重竹遺跡のまとめ

第1節 重竹遺跡における遺構の変遷	(長谷川) 247
第2節 重竹遺跡B地点・旧地籍図との比較	(長谷川) 253
第3節 出土遺物の分析	(長谷川) 259
第4節 まとめ	(長谷川) 276

第2章 上西田遺跡のまとめ	(長谷川) 279
---------------	-----------

付篇 洞雲戸遺跡

写真図版

挿入図版目次

図217 土器類の部位名称……………2	図256 遺構出土遺物(中近世)㉞……………67	図295 石製品㉞……………129
図218 遺構出土遺物(中近世)㉟……………3	図257 遺構出土遺物(中近世)㊱……………69	図296 石製品㊱……………130
図219 遺構出土遺物(中近世)㊲……………6	図258 遺構出土遺物(中近世)㊳……………70	図297 石製品㊳……………131
図220 遺構出土遺物(中近世)㊴……………8	㊴259 遺構出土遺物(中近世)㊴……………72	図298 石製品㊴……………132
図221 遺構出土遺物(中近世)㊵……………9	図260 遺構出土遺物(中近世)㊵……………74	図299 石製品㊵……………133
図222 遺構出土遺物(中近世)㊶……………11	図261 遺構出土遺物(中近世)㊶……………76	図300 鉄製品が出土した遺構……………135
図223 遺構出土遺物(中近世)㊷……………13	図262 遺構出土遺物(中近世)㊷……………78	図301 金属製品①……………136
図224 遺構出土遺物(中近世)㊸……………14	図263 遺構出土遺物(中近世)㊸……………79	図302 金属製品②……………137
図225 遺構出土遺物(中近世)㊹……………17	図264 遺構出土遺物(中近世)㊹……………81	㊹303 金属製品③および鍛冶関連遺物……………139
㊹226 遺構出土遺物(中近世)㊹……………18	図265 遺構出土遺物(中近世)㊹……………82	図304 木製品①……………141
図227 遺構出土遺物(中近世)㊺……………19	図266 遺構出土遺物(中近世)㊺……………84	図305 木製品②……………142
図228 遺構出土遺物(中近世)㊻……………21	㊻267 遺構出土遺物(中近世)㊻……………86	図306 上西田遺跡の位置……………191
図229 遺構出土遺物(中近世)㊼……………22	㊼268 遺構出土遺物(中近世)㊼……………89	図307 V層・VII層を確認したトレンチ……………192
図230 遺構出土遺物(中近世)㊽……………24	㊽269 遺構出土遺物(中近世)㊽……………90	㊽308 V層・VII層を検出したトレンチ層位図……………193
図231 遺構出土遺物(中近世)㊾……………26	図270 遺構出土遺物(中近世)㊾……………92	図309 上西田遺跡調査区のグリッド配置……………195
㊾232 遺構出土遺物(中近世)㊾……………27	図271 遺構出土遺物(中近世)㊿……………94	図310 上西田遺跡調査区壁面層位……………198
図233 遺構出土遺物(中近世)㊿……………28	図272 遺構出土遺物(中近世)㊿……………95	図311 上西田遺跡調査区の遺構断面……………201
図234 遺構出土遺物(中近世)㊿……………30	㊿273 包含層出土遺物(中近世)①……………97	図312 包含層出土遺物……………202
図235 遺構出土遺物(中近世)㊿……………32	図274 包含層出土遺物(中近世)②……………98	㊿313 Fe O 系平衡状態図……………220
㊿236 遺構出土遺物(中近世)㊿……………34	図275 遺構出土遺物(古代)①……………100	図314 鍛造刮片3層分離型模式図……………220
㊿237 遺構出土遺物(中近世)㊿……………35	図276 遺構出土遺物(古代)②……………102	図315 358号トレンチ試料のプラント・オパール分布図……………231
㊿238 遺構出土遺物(中近世)㊿……………37	図277 遺構出土遺物(古代)③……………104	図316 335号・288号トレンチ試料のプラント・オパール分布図……………231
図239 遺構出土遺物(中近世)㊿……………39	㊿278 遺構出土遺物(古代)④……………105	図317 試料No 1とNo 2の赤外線吸収スペクトル図……………244
図240 遺構出土遺物(中近世)㊿……………41	図279 遺構出土遺物(古代)⑤……………107	図318 試料No 3とNo 4の赤外線吸収スペクトル図……………244
図241 遺構出土遺物(中近世)㊿……………43	図280 遺構出土遺物(古代)⑥……………109	図319 試料No 5とNo 6の赤外線吸収スペクトル図……………244
図242 遺構出土遺物(中近世)㊿……………44	図281 遺構出土遺物(古代)⑦……………110	図320 試料No 7の赤外線吸収スペクトル図……………244
図243 遺構出土遺物(中近世)㊿……………45	図282 遺構出土遺物(古代)⑧……………112	図321 山茶碗内側付着赤色物(試料No 8)の蛍光X線スペクトルと半定量分析結果……………245
図244 遺構出土遺物(中近世)㊿……………47	図283 遺構出土遺物(古代)⑨……………113	
図245 遺構出土遺物(中近世)㊿……………49	図284 包含層出土遺物(古代)……………114	
㊿246 遺構出土遺物(中近世)㊿……………51	図285 縄文～古墳時代の遺物……………116	
㊿247 遺構出土遺物(中近世)㊿……………52	図286 石製品①……………119	
図248 遺構出土遺物(中近世)㊿……………53	図287 石製品②……………120	
㊿249 遺構出土遺物(中近世)㊿……………55	図288 石製品③……………121	
図250 遺構出土遺物(中近世)㊿……………57	図289 石製品④……………122	
図251 遺構出土遺物(中近世)㊿……………59	図290 石製品⑤……………123	
図252 遺構出土遺物(中近世)㊿……………60	図291 石製品⑥……………124	
図253 遺構出土遺物(中近世)㊿……………62	図292 石製品⑦……………126	
図254 遺構出土遺物(中近世)㊿……………63	㊿293 石製品⑧……………127	
図255 遺構出土遺物(中近世)㊿……………55	図294 石製品⑨……………128	

図322 3期の遺構配図	247	図329 A～D区の調査結果と地籍図との比較	258	図337 地点別種別土器組成比	269
図323 遺構の変遷A～F区①	250	図330 古代前期遺構出土遺物構成比	260	図338 白瓷系陶器の地点別出土量	270
図324 遺構の変遷A～F区②	251	図331 種別別遺物散布状況	261	図339 調査区全体から出土した播鉢の時期別出土量	272
図325 遺構の変遷G～I区	252	図332 白瓷系陶器碗 ……里原の産地別出土量	263	図340 地点別の播鉢の時期別出土量	272
図326 重竹遺跡B地点との位置関係	253	図333 重竹遺跡出土土師器皿の分類	266	図341 地点別時期別中国陶磁器出土量構成比	273
図327 重竹遺跡B地点の遺構との比較	254	図334 土師器皿の分類別法量散布	267	図342 上西田周辺の旧地籍図と調査区的位置	278
図328 F～I区の調査結果と地籍図との比較	256	図335 出土遺構別の土師器皿の注量	267		
		図336 遺物集計を行った範囲	268		

表目次

表76 土器観察表(1)	144	表104 土器観察表09	172	表132 層別別出土土器一覧表	202
表77 土器観察表(2)	145	表105 土器観察表00	173	表133 上西田遺跡土器観察表	204
表78 土器観察表(3)	146	表106 土器観察表01	174	表134 上西田遺跡土師器皿観察表	204
表79 土器観察表(4)	147	表107 土器観察表02	175	表135 上西田遺跡土製品観察表	204
表80 土器観察表(5)	148	表108 土器観察表03	176	表136 上西田遺跡金属製品観察表	204
表81 土器観察表(6)	149	表109 土器観察表04	177	表137 伊試材の履歴と調査項目	220
表82 土器観察表(7)	150	表110 土器観察表05	178	表138 伊試材の組成	221
表83 土器観察表(8)	151	表111 土器観察表06	179	表139 出土遺物の調査結果のまとめ	221
表84 土器観察表(9)	152	表112 土器観察表07	180	表140 試料と微細遺物の検出状況	227
表85 土器観察表00	153	表113 土器観察表08	181	表141 微細遺物および粒子の半定量分析結果	228
表86 土器観察表01	154	表114 土器観察表09	182	表142 試料1区当たりのプラント・オパール個数	231
表87 土器観察表02	155	表115 土器観察表00	183	表143 D区井戸の花粉化石産出一覧表	234
表88 土器観察表03	156	表116 土師器皿観察表(1)	183		
表89 土器観察表04	157	表117 土師器皿観察表(2)	184	表144 重竹遺跡出土炭化材樹種同定結果	237
表90 土器観察表05	158	表118 土師器皿観察表(3)	185		
表91 土器観察表06	159	表119 土師器皿観察表(4)	186	表145 重竹遺跡井戸挿樹種	239
表92 土器観察表07	160	表120 土製品観察表(1)	186	表146 放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果	242
表93 土器観察表08	161	表121 土製品観察表(2)	187	表147 試料の詳細と同定結果	245
表94 土器観察表09	162	表122 磁石観察表	187	表148 散布図に表示した遺物の出土点数①	261
表95 土器観察表00	163	表123 石製品観察表	188	表149 散布図に表示した遺物の出土点数②	261
表96 土器観察表01	164	表124 金属製品観察表(1)	189	表150 古代前期遺構出土の土師器	263
表97 土器観察表02	165	表125 金属製品観察表(2)	190	表151 土師器皿の調整による分類の組み合わせと点数	266
表98 土器観察表03	166	表126 鏡貨観察表	190		
表99 土器観察表04	167	表127 輪の羽口観察表	190		
表100 土器観察表05	168	表128 木製品観察表	190		
表101 土器観察表06	169	表129 上西田遺跡の試掘トレンチ	193		
表102 土器観察表07	170	表130 岡市周辺の洪水の記録	195		
表103 土器観察表08	171	表131 VII層水田跡観察表	200		

表152 地点別土器出土量 ……………269	表156 地点別漆器出土量 ……………272	表160 地点別石制別の硯・砥石出土点数 ……………275
表153 調査区全体の片口鉢の出土量 271	表157 出土した中国陶磁器一覧表 ……273	表161 各地点の鍛冶関連遺物出土量 275
表154 地点別種別別片口鉢出土量 ……271	表158 地点別中国陶磁器出土点数 ……273	表162 各地点から出土した硯形鍛冶滓の線部分別出土量 ……………272
表155 調査区全体から出土した種別の口鉢部分別出土量 ……………272	表159 地点別分類別の硯・砥石出土点数 ……………275	平均重量 ……………275

挿図図版写真目次

写真2 梶形鍛冶滓(含鉄)・鍛冶滓・鉄塊物の顕微鏡組織 222	写真6 鉄塊系遺物・鑄造鉄片(板状・棒状)・鍛造鉄片(方柱状・鉄鋼片・板状)のマクロ組織 ……………226
写真3 鍛造鉄片(板状・棒状)・鍛冶滓片・鉄塊遺物・鍛造鉄片(方柱状・板状)の顕微鏡組織 ……………223	写真7 遺構出土微細遺物類のマイクロスコープ写真 ……229
写真4 鑄造鉄片(鉄鋼片・板状)・鍛造鉄片(板状・棒状)の顕微鏡組織 ……………224	写真8 重竹遺跡のプラント・オーバー ……233
写真5 梶形鍛冶滓の顕微鏡組織 ……………225	写真9 重竹遺跡出土炭化材樹種 ……238
	写真10 重竹遺跡出土井戸枠の木材樹種 ……………240
	写真11 漆質物等が付着した遺物の付着状況写真 ……………246

写真図版

図版1 重竹遺跡調査前全景・重竹遺跡周辺衛星撮影写真(昭和23年当時)	図版11 E780(鍛冶関連遺構)レキ検出状況・E780竪堀検出状況・E780河岸石敷き施設検出状況・E780の被熱部分・E835(鍛冶関連遺構)砂利敷き検出状況・E835粘土塊検出状況・E747(鍛冶関連遺構)SK1検出状況・E747完掘状況
図版2 A区・B区の遺構配置	図版12 A3・A4・B132・B542・C120・E100・E245・F568・F60(大型土坑)完掘状況状況
図版3 C区・D区の遺構配置(東調査区・中央調査区)・(西調査区)	図版13 G605・G644・G645(大型土坑)完掘状況・G635(竪穴建物)完掘状況・G635竪上検出状況・H100(大型土坑)レキ検出状況・H318完掘状況・I4(大型土坑)レキ検出状況・I308(大型土坑)完掘状況・I250(大型土坑)レキ検出状況
図版4 E区・F区の遺構配置	図版14 遺物埋納遺構遺物検出状況1～3・遺物埋納遺構完掘状況・A100(井戸跡)検出状況・A100断ち割りの状況・B725(井戸跡)検出状況・B725断ち割りの状況
図版5 G区(VI・VII層上面)・H区北調査区・II区南調査区・I区の遺構配置	図版15 B639(井戸跡)検出状況・B639埋土堆積状況・D6(井戸跡)レキ検出状況・D6完掘状況・D186(井戸跡)完掘状況・D100(井戸跡)断ち割りの状況・D460(井戸跡)堆積状況・D460完掘状況
図版6 SH1・B区軍跡区画内遺構・B523(SII12柱穴)層位・B749(SH14柱穴)完掘状況・SH22・23・SH26・SH31・SH34・SH35	図版16 C132(地下式坑)完掘状況・C132壁面の工具痕・C132堆積状況・C132入り口のレキ検出状況・H355(地下式坑)堆積状況・H355(地下式坑)完掘状況
図版7 SH33・SH38・SH39・SH47・48・SH53・SH54・SH55・SH59・60	
図版8 F区ピット列とSH52・G区ピット列・B区土塁下部遺構完掘状況・B387(南北の堀跡)遺物出土状況・B413(東西の堀跡)完掘状況・B413層位	
図版9 C71(東西の堀跡)・C72土塁完掘状況・C71層位・C72地上の状況・C72地上断ち割り・C72下面遺構	
図版10 E300(鍛冶関連遺構)完掘状況・E830(鍛冶関連遺構)SK1レキ検出状況・炭化物検出状況・E830SK1炭化物検出状況・E830SK2完掘状況・E830完掘状況・E831(鍛冶関連遺構)レキ検出状況・E831完掘状況・E831・E780・E835(鍛冶関連遺構)完掘状況	

図版17 B区道路状遺構・B113(波板状遺構)検出状況・波板状遺構断面・H15(特殊土坑)完掘状況・H108(特殊土坑)検出状況・H108石積の様子・H137(特殊土坑)完掘状況

図版18 H302(特殊土坑)埋土堆積状況・H302完掘状況・H398(特殊土坑)埋土堆積状況・H398完掘状況・A390(不明遺構)横木検出状況・A390完掘状況・B114(不明遺構)完掘状況・B114遺物出土状況

図版19 D115(不明遺構)完掘状況・D110(不明遺構)埋土堆積状況・D110完掘状況・A1(溝跡)・A390(不明遺構)埋土堆積状況・A2(溝跡)溝内配石遺構検出状況・A380(溝跡)地状部分完掘状況・A435(溝跡)埋土堆積状況・B139・B140(溝跡)レキ検出状況

図版20 B134(溝跡)土師器遺出土状況・B134・B141埋土堆積状況・B262(溝跡)遺物出土状況・B743(溝跡)と掘立柱建物跡完掘状況・C123・C215(溝跡)完掘状況・C123・C215西側の硬化層・C123・C215底面の工具痕

図版21 C55(溝跡)埋土堆積状況・C56(溝跡)埋土堆積状況・D4(溝跡)レキ検出状況・D410(溝跡)埋土堆積状況・D410完掘状況・F732(溝跡)埋土堆積状況・F848(溝跡)埋土堆積状況

図版22 F368・F369(溝跡)埋土堆積状況・F210・F281・F301・F293(溝跡)完掘状況・G39・40(溝跡)埋土堆積状況・G831周辺完掘状況・G831(溝跡)土坑状部分完掘状況・H1・H4・H5(溝跡)埋土堆積状況・H1狹犬脚部出土状況・H1(溝跡)飛び石状遺構検出状況

図版23 I260(溝跡)レキ堆積状況・I260完掘状況・I275(溝跡)レキ検出状況・I275レキ堆積状況・I715(溝跡)埋土堆積状況・B区北調査区CC6～CD7グリッド周辺の土坑群・B456(土坑)遺物出土状況

図版24 C93(土坑)焼土検出状況・C93完掘状況・C137(土坑)埋土堆積状況・C137完掘状況・D区西調査区方形の土坑配置・D60(土坑)レキ検出状況・E区東調査区の土坑群

図版25 E761(土坑)層位・F738(土坑)レキ検出状況・F683(土坑)炭層堆積状況・F39(土坑)レキ検出状況・F39完掘状況・F242(土坑)遺物出土状況・F255(土坑)遺物出土状況・F243(土坑)配石検出状況

図版26 G155(土坑)レキ検出状況・H82(土坑)土師器面出土状況・H337(土坑)完掘状況・I145(土坑)粘土検出状況・I区中央調査区二列に配置された土坑群・I区南調査区集中する土坑群

図版27 I460(土坑)完掘状況・層位・I705(土坑)遺物出土状況・G区GⅢ層上面遺構検出状況・G区GⅣb層上面遺構検出状況・SI.5(集石土坑列)検出状況・G1(道路状遺構)検出状況

図版28 G1(道路状遺構)検出状況・G1断面層位・G7(土坑)検出状況・G13(不明遺構)検出状況・G13遺物出土状況・G37(不明遺構)レキ検出状況・G37遺物出土状況・G37完掘状況

図版29 G39(溝跡)レキ検出状況・G39埋土堆積状況・G39完掘状況・G38(不明遺構)レキ検出状況・F区竪穴住居跡群・F4(竪穴住居跡)検出状況・F4貼床面検出状況

図版30 F4(竪穴住居跡)完掘状況・F4カマド断り部状況・F4段状遺構・F189(竪穴住居跡)完掘状況・F284(竪穴住居跡)完掘状況・F374(竪穴住居跡)完掘状況・F374カマド検出状況・F374P2遺物出土状況

図版31 F384(竪穴住居跡)完掘状況・F384カマド付近遺物出土状況・F384埋土堆積状況・F477(竪穴住居跡)内遺構検出状況・F477SK4付近焼土・遺物検出状況・F477完掘状況・F478(竪穴住居跡)完掘状況・F529(竪穴住居跡)遺物出土状況

図版32 F529(竪穴住居跡)完掘状況・F575(竪穴住居跡)検出状況・F575貼り床・カマド検出状況・F575完掘状況・SH41・SH42検出状況・SH144・SH45・SH46検出状況・SH49検出状況・F1(SH49柱穴)埋土堆積状況

図版33 SH52検出状況・F771(土坑)遺物等出土状況・F779(土坑)完掘状況・F1143(土坑)遺物出土・F794(堀納ピット)遺物出土状況・F799(堀納ピット)遺物出土・G868(道路状遺構)検出状況

図版34 G868(道路状遺構)断面層位・G41(溝跡)完掘状況・G201(溝跡)遺物出土状況・G617(溝跡)埋土堆積状況・H7(溝跡)埋土堆積状況・H3・H4(溝跡)埋土堆積状況・H区北調査区溝跡完掘状況・F区中央東調査区畝状遺構検出状況

- 図版35 D420(溝跡)遺物出土状況1・2・D420埋土層積状況・
F区中央西調査区地山確認トレンチ層位・F区中央西
調査区地山確認トレンチ遺物出土状況1・2・G
530(ピット)遺物出土状況・F635(溝跡)遺物出土状況
- 図版36 中近世遺構出土遺物(1)
- 図版37 中近世遺構出土遺物(2)
- 図版38 中近世遺構出土遺物(3)
- 図版39 中近世遺構出土遺物(4)
- 図版40 中近世遺構・包含層出土遺物(5)
- 図版41 中国陶磁器(白磁)
- 図版42 中国陶磁器(青磁)
- 図版43 中国陶磁器(染付)・磁石の磁面顕微鏡拡大写真
- 図版44 中近世遺構出土遺物(6)
- 図版45 中近世遺構出土遺物(7)
- 図版46 中近世遺構出土遺物(8)
- 図版47 孤立柱礎物跡、その他のピット出土遺物(1)・(2)
- 図版48 土塁、南北の堀跡出土遺物・東西の堀跡出土遺物(1)
- 図版49 東西の堀跡出土遺物(2)・(3)
- 図版50 東西の堀跡出土遺物(4)・上取下部遺構出土遺物・鍛冶
関連遺構出土遺物
- 図版51 中近世遺構出土遺物(9)
- 図版52 中近世遺構出土遺物(10)
- 図版53 鍛冶関連遺構、大型土坑出土遺物(1)・(2)・(3)
- 図版54 大型土坑出土遺物(4)・土器埋納遺構(F24)出土遺物・
井戸跡出土遺物(1)
- 図版55 井戸跡出土遺物(2)・地下式坑出土遺物・道路状遺構の
側溝出土遺物・特殊土坑出土遺物
- 図版56 不明遺構出土遺物(1)・(2)・不明遺構、溝跡出土遺物(1)
- 図版57 中近世遺構出土遺物(1)
- 図版58 中近世遺構出土遺物(2)
- 図版59 溝跡出土遺物(1)・(2)
- 図版60 溝跡出土遺物(3)・(4)
- 図版61 溝跡出土遺物(5)・(6)
- 図版62 溝跡出土遺物(7)・(8)
- 図版63 溝跡出土遺物(9)・土坑出土遺物(1)・(2)
- 図版64 土坑出土遺物(3)・(4)
- 図版65 中近世遺構出土遺物(3)
- 図版66 中近世遺構出土遺物(4)
- 図版67 上坑出土遺物(5)・土坑、G区GIII層水田出土遺物・G
区GIII・IV層上面道路状遺構、不明遺構出土遺物
- 図版68 G区GIV層上面不明遺構出土遺物(1)・(2)・G区GV
層上面溝跡出土遺物
- 図版69 G区GV層上面不明遺構出土遺物(1)・(2)・包含層出土
中近世遺物
- 図版70 墨書土器
- 図版71 古代遺構出土土器(1)
- 図版72 古代遺構出土土器(2)
- 図版73 竪穴住居跡出土土器(1)・(2)
- 図版74 竪穴住居跡出土土器(3)・溝跡出土遺物・孤立柱礎物跡、
埋納ピット出土土器・道路状遺構、溝跡出土遺物(1)
- 図版75 溝跡出土遺物(2)・(3)
- 図版76 その他の時代の遺物
- 図版77 土器(1)・中磁・黄磁(1)・(2)・(3)・(4)
- 図版78 刺片石器・打製石斧・石鎌・蔵石・磨石
- 図版79 摩耗礫・その他の石製品・木製品
- 図版80 金属製品・金属製品、鍛冶関連遺物・銭貨
- 図版81 上西田遺跡調査前風景・上西田遺跡の基本層序(調査区
西壁)・上西田遺跡の基本層序(調査区北壁)・第1調査
面検出状況・欽溝跡の完掘状況
- 図版82 第2調査面検出状況・取水溝の状況1・2・水口の状
況・水口・尻水口の状況・立石の状況・足跡検出状況・
足跡完掘状況
- 図版83 上西田遺跡出土遺物

※調査戸遺跡の本文、挿図、表、写真図版の目次は付録内の目次を参照

第7章 出土遺物

第1節 土器・土製品

ここで抽出した遺物は、①残りがよく全容が把握できるもの、②ある程度残りがよく図示に耐え得るもの、③細片であるか時期や性格の特定が可能なものに分けられる。原則として①は完形実測、②は反転実測、③は破片実測で図示している。その目安は、遺物観察表に示した口縁残存が6/12～12/12のものが①、5.9/12～1/12のものが②、1/12未満が③である。残存状況を中心に遺物を抽出したため、中近世とした遺構でも、他時代の遺物のみを掲載している場合がある。各遺物の詳細については表76～132に示した遺物観察表に記載し、本文中では観察表に記載していない特徴を中心に述べる。遺物の詳細については原則として掲載番号順に述べたが、一つの遺構から多数掲載した場合は種別ごとに記述した。本文中に用いた土器の部位名称については、図217に示したように統一した。

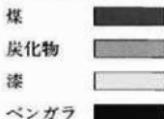
遺物実測図について

遺物実測図は原則として1/3の大きさに掲載したが、以下のものについては破片実測を行った細片でも縮尺を変えて掲載した。

土器類 大型の鉢類・甕類 (楕鉢・深皿・大皿・常滑の甕等) 1/4

須恵器 壺・甕類 1/4

煤・炭化物、漆、ベンガラ等の付着物については、以下のトーンを用いて付着範囲を表現した。



土器の回転削りの稜線は一点切りで表現した。土師器等の削り調整については、の記号を用いて削りの方向を表した(●のある方が削りの方向)。また、軸葉の施軸範囲は一点破線で、二重にかかっている場合は二点破線で表現した。土師器皿については、実線でナデの範囲を図示し、わかるものについては回転方向を矢印で示した。

遺物観察表について

遺物の分類：原則として表3～5で示した分類を記述した。

形態分類：上記で示した分類等や既存の研究で行われている分類を記載した。既存の研究による場合は、研究者の名前を分類の前に付した。なお、分類についての認識は報告者のものであり、記載に対する責任は報告者にある。

法量：欠損したものについて、土器類については復元値を、土製品・石製品については残存値を()を付して記載した。土器類のうち、土師器皿や鍋類など底部の範囲を認定し、がたいものに関しては、底径を記載しなかった。

口縁残存：完形を12として数えた残存値を記載した¹⁾。

胎土色調・釉調：『新版標準土色帖』(前掲)から近い色調のものを選択して記載した。

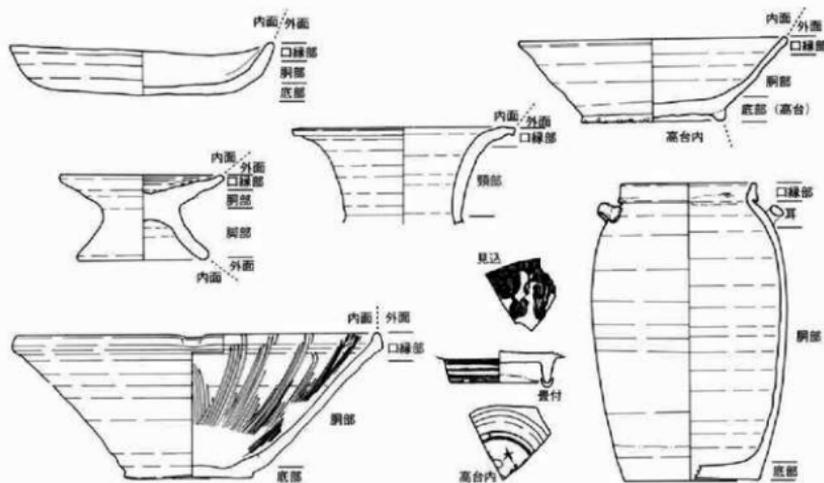


図217 土器類の部位名称

型式・様式：既存の研究をもとに分類し、図16で示した編年あるいは年代を掲載した。

中近世の遺構から出土した土器・土製品

掘立柱建物跡 (図218)

SH 6 1は白瓷系陶器の碗である。柱穴A272から出土した。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。

SH 7 4は土師器皿である。柱穴A60から出土した。内面のナデは不明瞭で判別できない。

SH16 2は土錘である。柱穴B784から出土した。片方の端部が欠損している。最大径が中央付近にみられる。

SH20 3は白瓷系陶器の碗である。柱穴D198から出土した。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。

SH23 5は白瓷系陶器の碗である。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。6は古瀬戸の甕の底部と考える。胎土が精良で黄灰色を呈する。いずれも柱穴D159から出土した。

SH24 7は土師器皿である。柱穴D302から出土した。内面のナデは不明瞭で判然としませんが、口縁部を意識しないナデが内面に施されていると思われる。

SH26 8は白瓷系陶器の碗である。建物の中心にある大型土坑D430から出土した。北部系8型式の大畑大洞4号窯式に分類した。9～13は土錘である。8と同じくD430から出土した。いずれも中心付近に最大径がみられ、つくりや胎土も似ている。

SH30 14は白瓷系陶器の碗である。柱穴E519から出土した。北部系11型式脇之島3号窯式に分類した。

螺旋柱建物跡・柱穴列

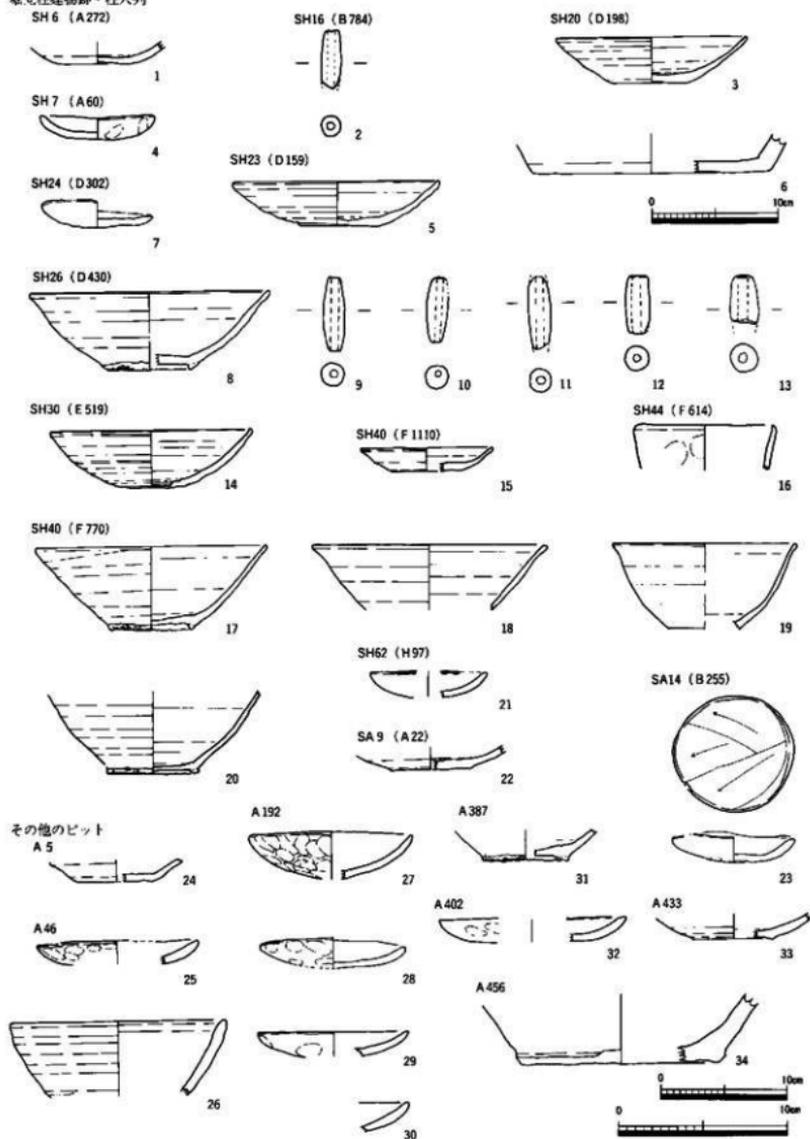


図218 遺構出土遺物(中近世)① (S = 1/3、6・34はS = 1/4)

4 第7章 出土遺物

SHI40 15は白瓷系陶器の皿である。柱穴F1110から出土した。北部系7型式以降としたが、若干器高が高く、7型式以降の中で古手の可能性がある。17~20は白瓷系陶器の碗である。F770から出土した。いずれも北部系8型式大畑大洞4号窯式に分類できるが、19は他のものより口縁径が小さく、器形も若干異なっている。また内面に漆が付着している（第3部第7章参照）。

SHI44 16は古代土師器の焼塩土器である。柱穴F614から出土した。薄手のタイプで口縁端部が尖り、やや内湾する。

SH62 21は土師器皿である。柱穴H97から出土した。内面のナデ痕を調整によって消している可能性がある。煤が付着しており灯明皿と考える。

柱穴列跡

SA9 22は白瓷系陶器の碗である。柱穴A22から出土した。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。

SA14 23は土師器皿である。柱穴B255から出土した。内面のナデは直線的に3方向に施される。

その他のピット

A区 (図218)

24は白瓷系陶器の皿である。A5から出土した。北部系7型式以降に分類した。25・26はA46から出土した。25は土師器皿である。内面のナデは不明瞭で判然としないが、口縁部を意識しないナデが内面に施されていると思われる。26は大窯の天目茶碗と考える。胴部の丸味が弱く、口縁部がわずかに外反するが、屈曲は弱い。外面下端にわずかに銷軸がみられる。大窯1期に比定される。27~30はA192から出土した。いずれも土師器皿である。27は胴部外面の指頭痕が、底部から見て時計回りに巡る。内面のナデは不明瞭で判然としない。28は口縁部の一部にタールのようなものが付着しており、灯明皿と考える。胴部と底部の外面に多数の指頭痕が残る。31は白瓷系陶器の碗である。A387から出土した。若干焼きが甘く、表面に赤っぽい発色がみられる。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。32は土師器皿である。A402から出土した。口縁端部を面取りする特徴がある。33は白瓷系陶器の碗である。A433から出土した。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。34は常滑の甕あるいは壺の底部である。A456から出土した。

B区 (図219)

35は中国陶磁器の染付である。器種は皿であろう。B9から出土した。口縁部がやや外反し、外面の模様は牡丹唐草のような植物文の可能性がある。36は中国陶磁器の龍泉窯系青磁である。器種は香炉の可能性が考えられる。B21から出土した。口縁部下外面に一条の沈線が施している。口縁部には融着痕が見られる。37・38は古瀬戸の卸皿である。B71から出土した。口縁部内面に突帯状の拡張が見られる。灰釉は口縁端部内外面のみに施される。古瀬戸後IV古期に比定される。39は土師器皿である。B230から出土した。ほぼ完形で出土しており、埋納の可能性もある。全体につくりが丁寧で、B262清跡出土のものに類似している。外面の横ナデに対応するように、口縁端部に面取り状のナデがめぐる。内面はナデ消しというよりミガキに近い。40は白瓷系陶器の碗である。B697から出土した。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。41は土師器皿である。B723から出土した。底部に丸みがあり、口縁部にいたって直線的に開く特異な形態を持つ。煤が付着しており灯明皿と考える。近世の土師器皿である可能性がある。42は中国陶磁器の染付皿である。B730から出土した。破損断面が摩耗

しており、人為的に研磨した可能性がある。壺付のみ露胎となる。43は連房陶器の反皿である。B764から出土した。口縁部がわずかに外反する。見込に円錐ビンの痕跡が4ヶ所残り、胴部下半から底部外面にかけて露胎となる。連房第4小期に比定される。44は古瀬戸の摺鉢である。B737から出土した。口縁部分類の5類に分類した。45は土鉢である。B789から出土した。最大径は中央付近にある。46は大窯の摺鉢である。B811から出土した。口縁部分類6B類に分類した。

C区 (図219)

47は白瓷系陶器の碗である。C26から出土した。北部系11型式の生田2号窯式に分類した。48は古瀬戸の摺鉢である。C38から出土した。口縁部分類の4類に分類した。

D区 (図219)

49は土師器皿である。D180から出土した。口縁部内面には二段の横ナデが施され、外面には指頭痕が残る。50は白瓷系陶器の皿である。D338から出土した。底部が低い円柱状になる。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。51・52はD449から出土した。いずれも白瓷系陶器の碗である。51を北部系7型式の明和1号窯式、52を北部系9型式の大谷洞14号窯式に分類した。

E区 (図219)

53～55はE14から出土した。53は白瓷系陶器の皿である。身が深く器壁が厚い。南部系5型式に分類した。54は白瓷系陶器の碗である。径が大きい幅広い低い高台が付される。北部系5型式に分類した。55は白瓷系陶器の碗である。内外面に黒いシミのようなものが付着している。低い潰れた高台が付され、内面の胴部と底部の境に明瞭な段がある。南部系6型式に分類した。56は中国陶磁器の龍泉窯系青磁碗である。E446から出土した。内面に片切り彫りで二重の蓮弁文が描かれる²⁾。57は白瓷系陶器の碗である。E520から出土した。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。58は中国陶磁器の白磁碗である。E757から出土した。口縁部が外反し、端部が平らになる。胎土は灰色がかかった色調であり、大宰府分類の白磁碗V類の可能性³⁾がある。59は白瓷系陶器の碗である。E762から出土した。南部系5型式に分類した。60は中国陶磁器の龍泉窯系青磁碗である。外面に片切り彫りによって蓮葉文が描かれる。上田分類のB I類に比定した。61は白瓷系陶器の碗である。E800から出土した。高台径が大きく、胴部下半に丸味があり、口縁部が外反する。南部系4型式に分類した。62は白瓷系陶器の皿である。E824から出土した。南部系5型式に分類した。63は中国陶磁器の龍泉窯系青磁碗である。E829から出土した。丁寧に調整された角高台をもち、底部の器壁が非常に厚い。見込には片切り彫りによって花文が描かれ、外面の胴部と高台の境に連続した刻みが見られる。釉薬は薄く、色は黄色味がかかった緑色を呈する。高台の壺付より内側が露胎となる。大宰府分類龍泉窯系青磁碗I類に比定される。64は白瓷系陶器碗である。E839から出土した。北部系5型式に分類した。

F区 (図219・220)

65は土鉢である。表面に炭茶が吸着して黒光りしている。胴部中程に最大径がある。F9から出土した。66は白瓷系陶器の碗である。F16から出土した。内面がやや摩耗している。南部系5型式に分類した。67はロクロ土師器の小皿である。F33から出土した。土器埋納遺構F24出土のもの⁴⁾と比べて胴部に丸味がある。68は古代土師器の焼塩土器である。F449から出土した。厚手であり、口縁部付近を肥厚して端部を面取りしている。69は白瓷系陶器の碗である。F469から出土した。南部系5型式に分類した。70はロクロ土師器の杯である。F1356から出土した。底部の器壁が非常に厚い。底面に板

6 第7章 出土遺物

その他のビット

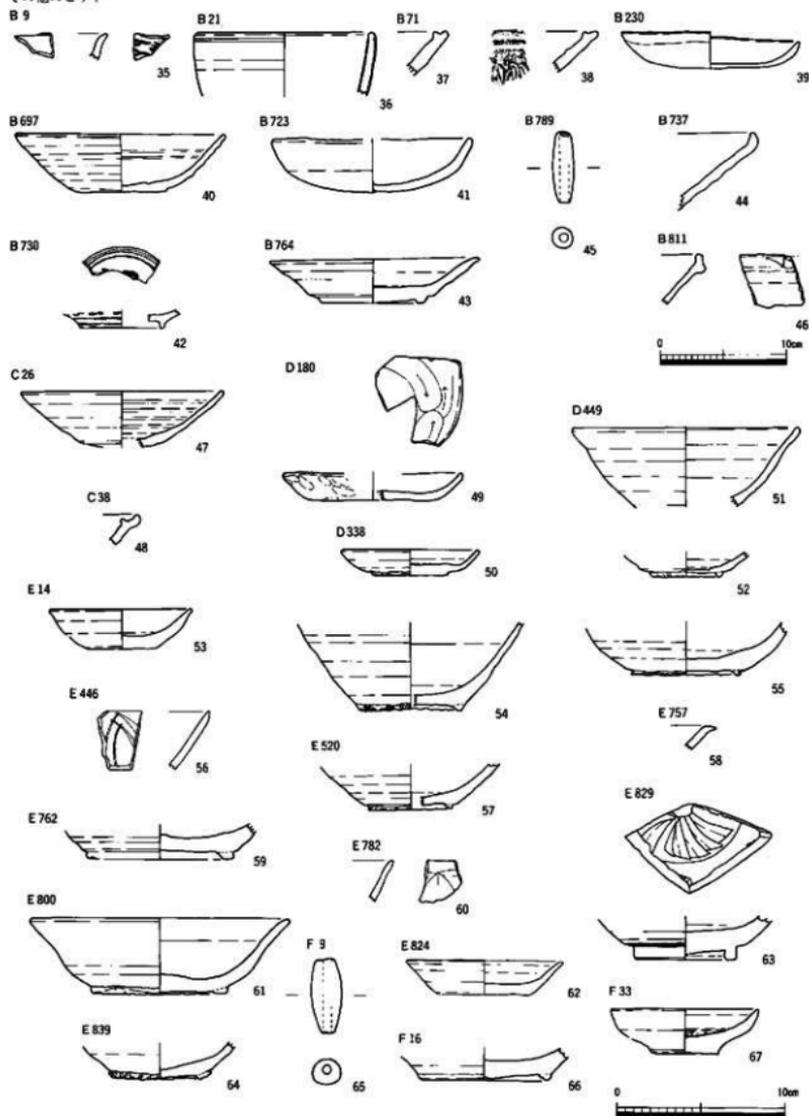


図219 遺構出土遺物（中近世）②（S = 1/3、44・46・48はS = 1/4）

ナデのような跡が見られる。71は白瓷系陶器の碗である。F1387から出土した。北部系5型式に分類した。72は白瓷系陶器の皿である。F1442から出土した。南部系5型式に分類した。

G区 (図220)

73は土師器皿である。G9から出土し、包含層GII層から出土したものと接合した。内面に全くナデの痕跡が残っていない。74は白瓷系陶器の碗である。G60から出土した。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。75は大窯の天目茶碗である。G88から出土した。胴部下半から底部外面にかけて露胎になる。大窯3期に比定される。76は古瀬戸の卸目付大皿である。G127から出土し、包含層GII～III層から出土したものと接合した。口縁部が受け口状に屈曲し、胴部下内面が摩耗している。口縁部内外面に灰釉が施される。古瀬戸後IV新期に比定される。77は古瀬戸の播鉢である。G166から出土した。口縁部分類の3類に分類した。78は白瓷系陶器の碗である。G211から出土した。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。79は須恵器の杯身B類である。G397から出土し、包含層GIV層から出土したものと接合した。見込のほぼ中央に「美濃国」刻印がみられる。老洞窯跡のA-I-2類と同じ形であるが、胎土やつくりは老洞窯跡というより美濃須恵の諸窯から出土するものに類似している。938の刻印と形状・大きさが一致する。80は古瀬戸の天目茶碗である。G526から出土した。胴部に丸味があり、口縁端部が屈曲する。古瀬戸後IV新期に比定される。81は土師器皿である。G646から出土した。外面に煤が付着あり、灯明皿と考えた。82は須恵器の甕B類の把手と考える。胴部の中央付近に付されていたと考えられ、裏面に叩き目が転写されている。83は土師器皿である。G812から出土した。口縁端部をつまむように回転ナデが施され、端部が尖り気味になる。

H区 (図220)

84は中国陶磁器の白磁杯と考える。H176から出土した。破損断面を人為的に打ち欠いた加工凹盤である。見込外側の釉薬が輪状に掻き取られている。釉調や形態から16世紀前半に属する可能性がある。85は大窯の建水の可能性がある。H326から出土した。胎土が精良で無釉の焼締陶器である。86は連房陶器の丸皿である。H347から出土した。胴部に強い丸みがあり、全体に器壁が厚い。胴部下半から底部にかけて露胎となる。連房第1～2小期に比定される。

I区 (図220)

87は白瓷系陶器の碗である。I10から出土した。径が大きく断面が三角形になる高台が付される。南部系4型式に分類した。88は古瀬戸の腰折皿である。I36から出土した。胴部下半に明瞭な稜がある。底部外面周縁が露胎となる。古瀬戸後IV新期に比定される。89は白瓷系陶器の小碗である。I142から出土した。北部系3型式の矢戸上野2号窯式としたが、胎土はやや粗い。90は白瓷系陶器の玉縁碗である。I144から出土した。大宰府分類白磁碗II類の口縁部に似た玉縁状の口縁部形状を呈する。胎土から北部系と考える。91は土師器皿である。I195から出土した。口縁部内外面に横ナデを施している。92は白瓷系陶器の碗である。I208から出土した。底部内面に炭化物が付着している。北部系9型式の大谷洞14号窯式に分類した。93は白瓷系陶器の碗である。I229から出土した。北部系11型式の生田2号窯式に分類した。94は古瀬戸の播鉢である。I235から出土した。口縁部分類3類に分類した。95は古瀬戸の四耳壺の口縁部である。I382から出土した。古瀬戸前III期に比定される。96は土師器の鍋の口縁部と考える。I389から出土した。羽付鍋や内耳鍋のように内傾する口縁をもつ鍋類と考える。胎土はやや粗で砂粒が多い。97・98はI706から出土した。いずれも土師器皿である。97は口縁部内外

8 第7章 出土遺物

その他のピット

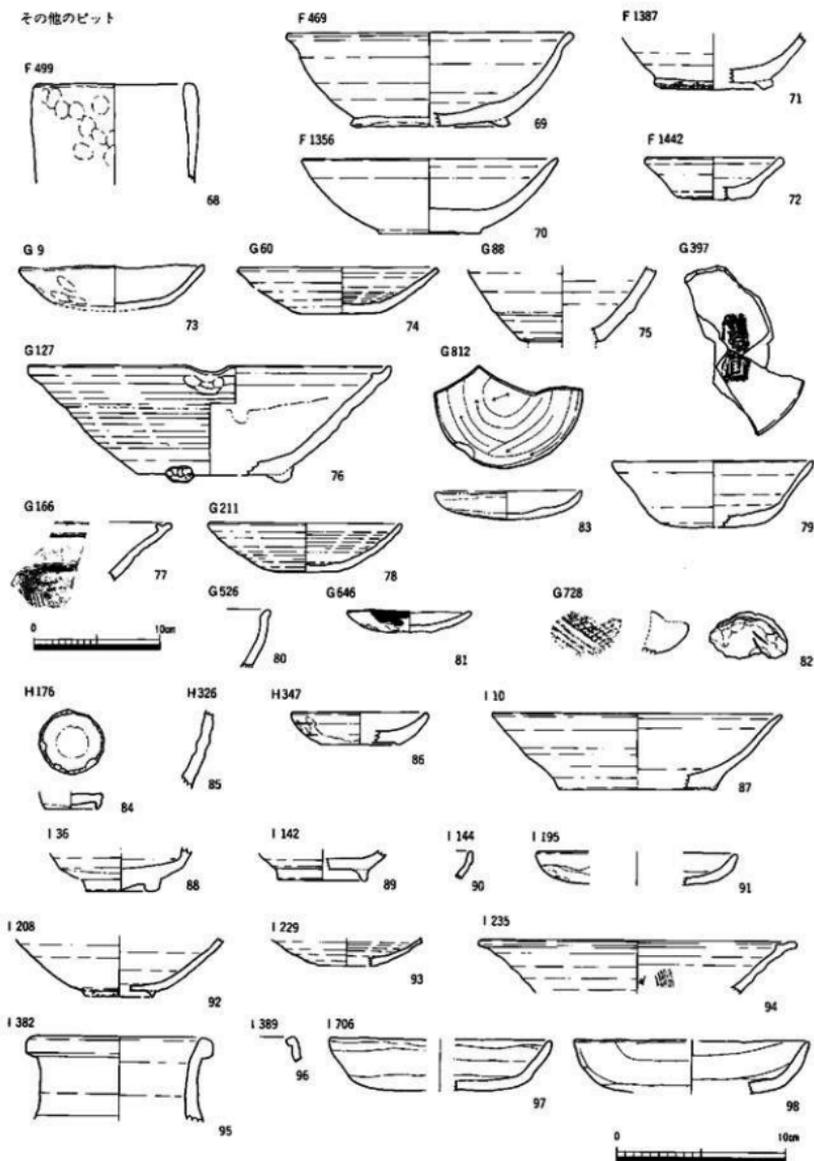
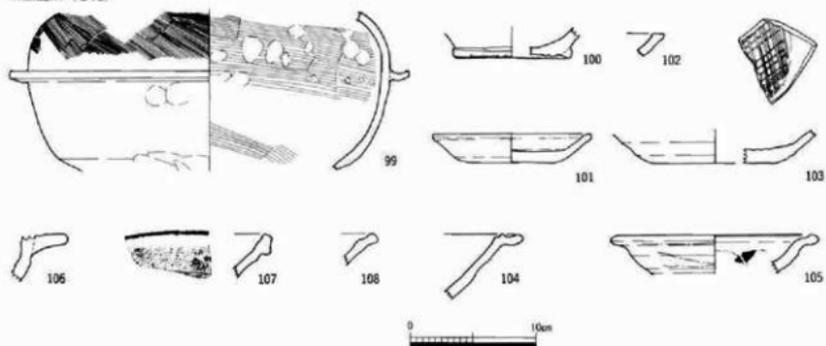


図220 遺構出土遺物（中近世）③（S = 1/3、76・77・94はS = 1/4）

土器盛土 (C72)



南北の廻跡
B387 土師器類

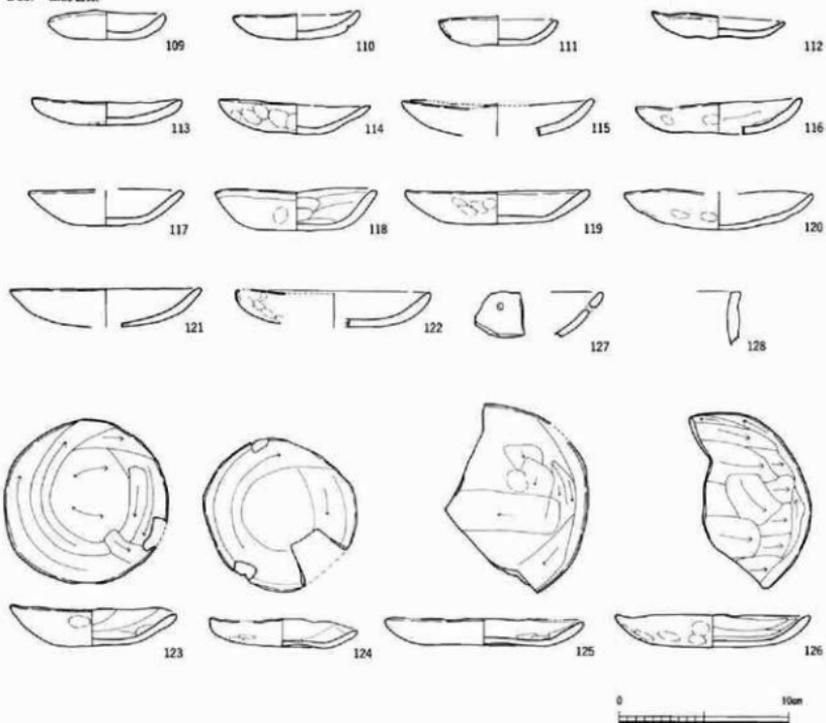


図221 遺構出土遺物 (中近世) ④ (S=1/3、104・107・108はS=1/4)

面に横ナデが施され、口縁端部がつまみ上げたように尖り気味になる。98も口縁部内外面に丁寧な横ナデを施している。胎土が密で砂粒がほとんど混入しない。

土壘 (C72) 盛り土内 (図221)

中世七師器 (99) 99は羽付の茶釜である。土壘下から検出した溝跡C219から出土したものと接合した。内外面に残るハケ調整痕は、それぞれ違う工具が用いられている。外底面の削り痕は、底部から見て時計回りに施される。外面全体に煤が付着している。

白瓷系陶器 (100) 100は碗である。南部系5型式に分類した。

古瀬戸 (101~104・106) 101は緑釉小皿である。胎土が緻密で焼成が良く、北部系白瓷系陶器に似ている。口縁部内外面に灰釉が施される。古瀬戸後IV古期に比定される。102・103は卸皿である。102は形状から古瀬戸後III期に比定される。103は底部破片である。使用された痕跡はない。104は折縁深皿である。胴部内面が露胎となる。古瀬戸後III期に比定される。106は茶釜である。全面に鎔釉が施される。古瀬戸後IV古期に比定される。

大窯 (107) 摺鉢の口縁部破片である。9 B類に分類した。

連房陶器 (105・108) 105は折縁鉄絵皿である。鉄絵を施した後、灰釉を施している。胴部外面が一部を除いて露胎となる。連房第2~3小期に比定される。108は摺鉢の口縁部破片である。14 C類に分類した。

南北の堀跡 (B387、図221~223) 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに記載する。

中世七師器 (109~128) 七師器皿と茶釜が出土している。109~127は七師器皿である。口縁径が7.0~11.6cm程度であり、大型品は見られない。110は外面に植物が抜けたような痕跡が残る。111は口縁部に沿うように切れ込み痕が見られるが、製作時のものかどうかは不明である。116は内面に板状と思われる工具の痕跡が残る。118は外面の横ナデが口縁端部のみに見られる。内面には、口縁部からみて時計回りに横ナデが施される。123の内面ナデは二段になっており、両者ともにナデ抜かれている。124は内面に口縁部を意識しないナデが6の字状に施される。125は内面のナデの単位が細かく、工具の角の痕跡が残存している。口縁端部内面の横ナデは調整の最後に施されている。126は125とほぼ同じ整形をしている。127は口縁部下に穿孔があるが、製作段階で開けられたものか不明である。128は茶釜の口縁部である。外面に煤が付着している。

白瓷系陶器 (129・130) いずれも白瓷系陶器の皿である。129は北部系7型式以降に分類した。130は器壁がやや厚めで、口縁端部に丸みがあり、わずかに外反する。北部系6型式の白土原1号窯期に分類した。

古瀬戸 (131・142) 131は底卸皿である。見込の中央に同心円状の文様、高台内に押し目が付けられる。使用された痕跡はなく、全く摩耗していない。古瀬戸中II期に比定される。142は筒形の香炉である。鉄釉は、胴部外面のみ施される。古瀬戸後IV古~後IV新期に比定される。

大窯 (132~136・139・140・144~146) 132・133は灯明皿である。いずれも焼締タイプである。132は大窯2期、133は大窯3期に比定される。134・135は端反皿である。134は胴部下半に丸みがなく、口縁部の外反もやや弱い。高台内に輪ドチ痕が残る。大窯1期に比定される。135は胴下部に丸みがあり器高が低く、扁平な印象を受ける。底部が突出しており中央部は高台の接地する高さ付近まで下がっている。高台内の中央には輪ドチの痕跡がある。大窯1期に比定される。136はやや大型の丸皿もしくは

南北の環跡
B387 陶器類

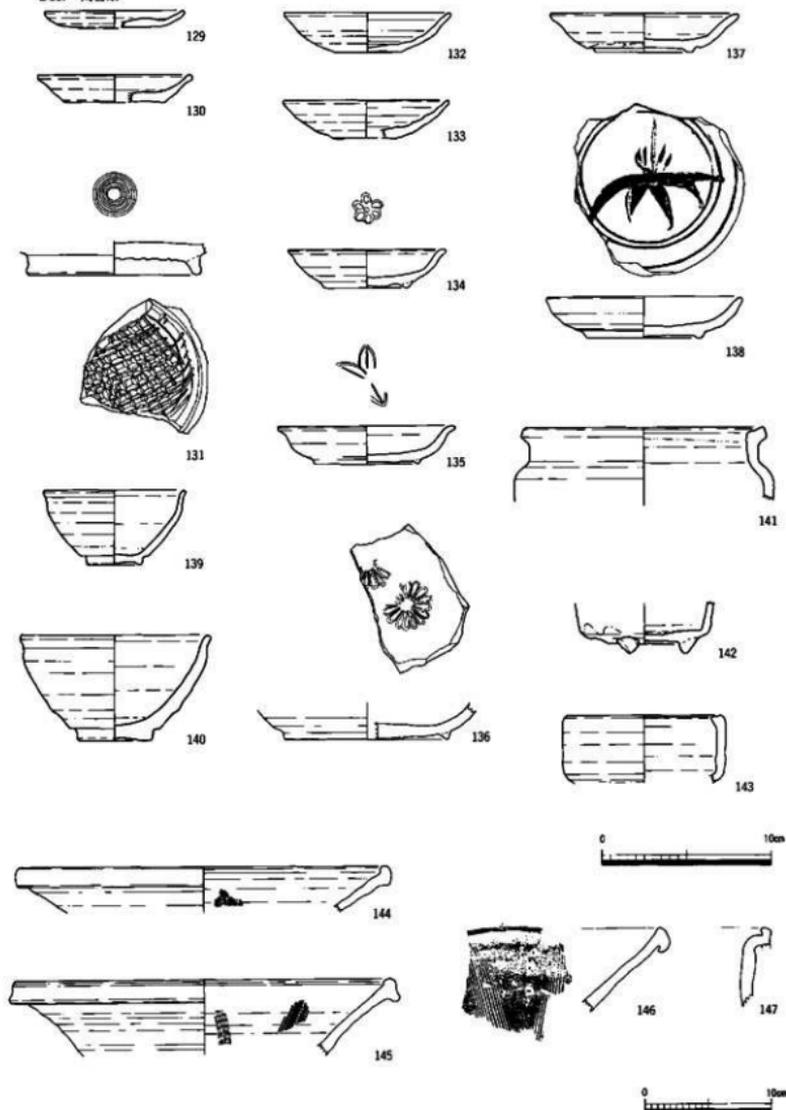


図222 遠構出土遺物（中近世）⑤（S = 1/3、144~147は S = 1/4）

は端反皿になると思われ、見込に菊の印花文が2ヶ所見られる。大窯1～2期に比定される。139は小天目茶碗である。大窯1期に比定される。140は天目茶碗である。口縁部の外反と胴部上半の張り出しが強い。鉄軸は透明感があり光沢がある。底部外面周縁が露胎となる。大窯3期前半に比定される。

144～146は播鉢の口縁部破片である。それぞれ9B類、13A類、9A'類に分類した。146は緑帯の下端部が内側に折り返される。144は大窯3期後半、145は大窯4期前半、146は大窯3期前半に比定される。連房陶器(137・138・141) 137は志野丸皿である。口縁部が若干外反し、底部外面周縁が露胎となる。連房第1～2小期に比定される。138は鉄絵皿である。高台内に円錐ピンと考えられる痕跡が3ヶ所ある。長石釉が全面に施釉される。連房第2小期に比定される。141は袴腰形の香炉である。黄褐色の独特の発色を呈する鉄釉で施釉されている。内面には鉄釉が施されている。

産地不明近世陶器(143) 143は匣鉢である。底部外面周縁が露胎になると思われる。

常滑(147) 147は常滑の甕の口縁部破片である。6～8型式に比定される。

中国陶磁器(148～152) 148は白磁の皿である。無高台の皿で、胴部内面と底部の境に段を有する。口縁部はないが、底部周縁の形状が大宰府分類の白磁皿IX類に似る。149は白磁の杯である。軸が薄く貫入が多く見られる。焼成も不良である。森田分類のD群に比定される。150は龍泉窯系青磁の碗と考える。底部に厚みがあり、高台は外側で面取りされている。軸は厚く、高台内のみ露胎となる。周囲を打ち欠いて加工した痕跡がみられる。151・152は染付の皿である。おそらく削込高台の皿になると思われる。小野分類の染付皿C群に比定される。

その他(153～157) 153～157は土鈴である。完形品は出上しなかった。袋状にした粘土の口を絞って形を作り、乾いてから穿孔や切れ込みを入れたと思われる。154・155のように楯形になるものと153・156・157のように肩が張るものがある。

東西の堀跡(B413、図223～228) 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに記載する。

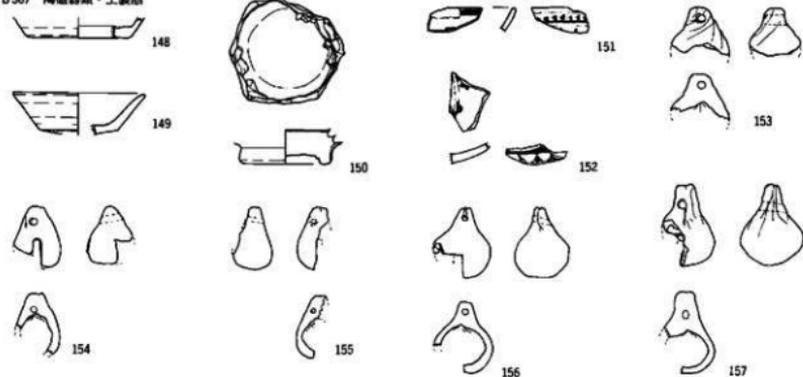
中世土師器(158～175) 158～174は土師器皿である。口径が8cm前後、11.5cm前後、14.5cm前後という3段階の法量に分けることができる。159は外面の一部に繊維状のものでなれたような痕跡が残る。165は底部に比して口縁部に厚みがある。平面形のゆがみが激しい。168は内面に約1.2cmの幅をもつ工具によって不定方向のナデが施される。169は内面に板状工具の角と考えられる痕跡が残る。170は口縁部から胴部内面にかけての横ナデが二段になっており、両者ともナデ抜けがある。下段のナデはナデを開始した位置が明瞭に残る。胎土に赤褐色の砂粒が混入しており、他の土師器皿とは雰囲気異なっている。171は170と同様の砂粒が混入する。172は内面の横ナデが二段になっており、胴部と底部の境のナデには器面から工具を離した際の痕跡が残っている。内底面のナデは、単位は不明瞭であるが不定方向に施されている。173は角のある工具によって内面のナデ調整を行っている。外面にも一部工具によると思われるナデが見られる。174は外面に切れ込み痕が残る。175はロクロ土師器の皿である。底部に回転糸切り痕が残る。

須恵器(176) 176は須恵器の杯蓋C類である。頂部から胴部にかけてやや扁平で、返りの端部に若干丸みがある。

白瓷系陶器(177～181・232) 177～181は碗である。177・178・180を北部系7型式の明和1号窯式期、179を北部系5型式、181を北部系11型式の鶴之島3号窯式期に分類した。232は水注の注口部である。注口の接合部の周囲には刻みによる加飾が見られる。内面に注口に向けて穿孔した痕跡が残る。

南北の地

B387 陶磁器類・土製品



東西の塚跡

B413 土師器類

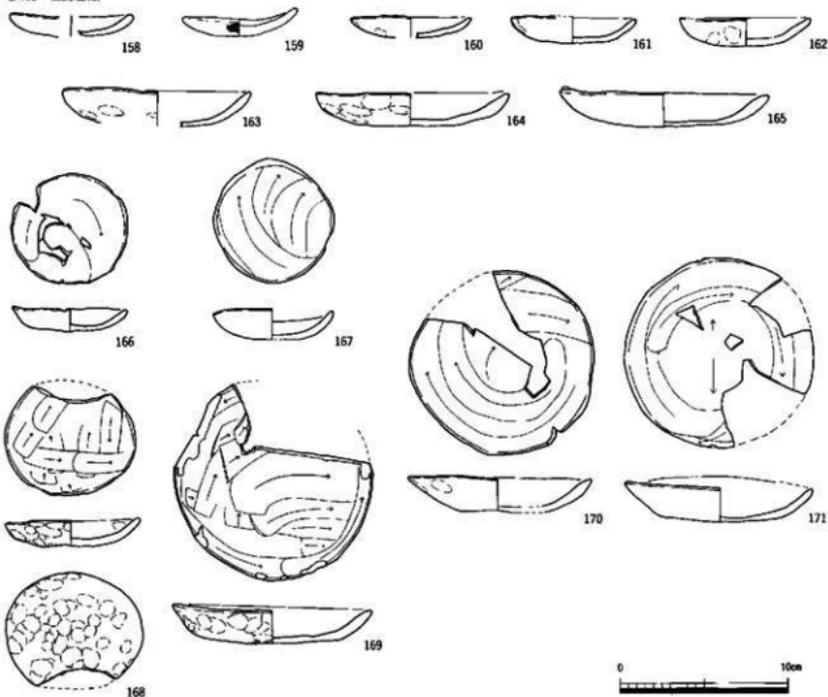
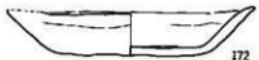
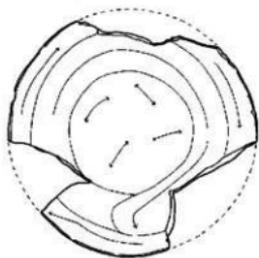


図223 遺構出土遺物（中近世）⑥（S = 1/3）

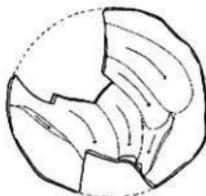
14 第7章 出土遺物

東西の埴輪

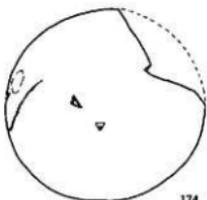
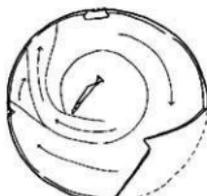
B413 土師器類



175

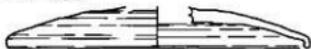


173



174

東西の埴輪
B413 須恵器



176

東西の埴輪

B413 陶器類



177



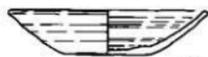
178



179



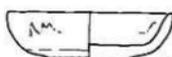
180



181



182



183



184



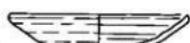
185



186



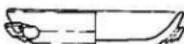
187



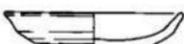
188



189



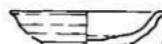
190



191



192



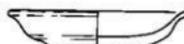
193



194



195



196



図224 遺構出土遺物（中近世）㊦（S=1/3、184はS=1/4）

外面に灰釉を施軸し、内面に露胎となる。北部系5型式段階の美濃須歯産と考えられる。

古瀬戸 (182~184・211~213・225・227・230・231・236~238・251)

182・183は緑釉小皿である。182は古瀬戸後Ⅲ~後Ⅳ古期に比定される。183は胴部に丸みがあり、口縁部がほぼ直立する。灰釉は口縁部内外面に施軸されている。古瀬戸後Ⅳ新期に比定される。184は即日付大皿である。口縁部の内側が突起状になる。胴下部内面が摩耗している。鉄軸は口縁部内外面に施軸される。古瀬戸後Ⅳ新期のものであろう。211~213は天目茶碗である。211は口縁端部が尖り気味で屈曲が強い。胴部に強い丸みがある。212は口縁端部が尖り気味で、強く屈曲する。器壁は薄く回転ナデ削り痕が細かい。底部から胴部下半外面の銷軸が濃く黒っぽく発色している。213は口縁端部の屈曲が強く、胴部下半が直線的に開く。器壁は全体に薄めで、丁寧に作られている。胴下部から底部にかけての銷軸は濃い。いずれも古瀬戸後Ⅳ新期に属すると考える。225は袴腰型香炉である。底部の内外面に露胎となる。古瀬戸後Ⅳ古~後Ⅳ新期に比定される。227は尊式花瓶の底部である。底部と胴部が張り合わせて作られている。外面に一条の沈線がある。胴下部と底部外面が露胎となる。古瀬戸後Ⅳ古期の底部に最も形状が似ている。230は祖母悽壺の口縁部である。縁部が玉縁状になり端部が丸みを帯びて下に垂れる。胎上が緻密である。古瀬戸後期のものと考えられる。231は茶釜である。内外面に銷軸が施軸される。古瀬戸後Ⅳ古期に比定される。236~238・251は搦棒である。236は外面は工具による回転ナデの痕跡が明瞭である。口縁部分類の3類に分類した。237は口縁部分類の4類に分類した。238は図示していないが、片口部の破片である。口縁部分類の5類に分類した。251は内面と破損断面に煤が多く付着しており、火鉢のような用途に転用された可能性がある。

大窯 (185~197・199・210・214~217・219・220・226・234・239~248・250)

185~189は灯明皿である。185~188は焼締タイプである。185・186は大窯2期、187・188は大窯1期に比定される。189は陶胎タイプであり、大窯4期に比定される。190・191・199は丸皿である。190は外面に重ね焼き時に付着した口縁部破片(丸皿)が付着している。高台内にはトチンの痕跡が残る。191は口縁部がわずかに外反し、胴部に丸みがある。底部から胴部にかけて広い範囲の軸が剥落している。190・191は大窯2期、199は大窯3期後半に比定される。192は椀皿である。大窯3期に比定される。194は丸皿か端反皿と思われる。見込の中央に菊の印花文が付されるが、半分は釉薬によって見えなくなっている。底部外面が高台より突出し、その周囲に輪ドチ痕が残る。大窯1~2期に比定される。193・195・196は端反皿である。193は口縁部が外反し、底部が高台よりも突出する。195は口縁部の外反は弱めで、胴部下半の器壁が厚い。底部が突出して椀付とほぼ同じ高さになる。196は口縁部が強く外反し、胴部の器壁が厚く突出しているように見える。底部の器壁も厚く、底部外面中央がほぼ椀付と同じ高さになる。高台内には輪ドチ痕が残る。いずれも大窯1期に比定される。197は椀皿としたが、底部から胴部にかけての丸みは丸皿に近い。高台内に輪ドチ痕、内面に釉薬の溶着痕が見られる。大窯2期に比定される。210・214~217・219は天目茶碗である。210は口縁端部が尖り気味であり、外面がわずかに窪む。胴部には丸みがある。大窯1期に比定される。214は胴部に施軸された鉄軸は黄灰色に発色している。銷軸の色は薄い。大窯3期後半に比定される。215は口縁部の屈曲が強く、胴部上半の張り強い。底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。胴部下半から底部外面の銷軸は薄く、部分的に露胎になっている。大窯3期前半に比定される。216は口縁端部の屈曲が強く、胴部上半に丸みがある。胴部下半が露胎となる。大窯4末期に比定される。217は口縁部から胴部上半にかけてS字

状に強く屈曲する。外面の回転削り痕が非常に顕著に残る。胴下半から底部外面にかけて露胎となる。大窯2期に属すると考える。219は胴部に強い丸みがあり、鉄軸は褐色と黒色が斑になった発色を呈する。底部外面周縁が露胎となる。大窯4期前半に比定される。220は筒形碗の底部と考える。底部から胴部にかけてが平らな形状になる。鉄軸は艶消しの褐色を呈し、高台外面の下部から高台内が露胎となる。大窯4期前半に比定される。226は仏具である。底部外面周縁から底面が露胎となる。大窯1期に比定される。234は皿であろう。胴部が底部から口縁部にかけて大きく開き、口縁部が屈曲して内径する。削出高台をもち、全面に長石釉が施される。内面の模様は旗のようにも見えるが不明である。大窯4期後半に比定される。239~248・250は楕鉢である。239・240・246は9A類、241は8B類、242は9A類、244を13B類、245を14B類、247・248を14C類に分類した。248は口縁部の面取りが顕著で、内面の突起が降帯状に見える。このタイプは1363を始め一定量出土している。

連房陶器 (198・200~209・218・221~224・228・229・233・235・249)

198・201・203・204は志野丸皿である。198は口縁部が外反し、削出高台をもつ。連房第3小期に属すると考える。201は高台径が大きく、扁平な形状になる。一部を除いて高台内が露胎となる。連房第2小期に比定される。203は口縁部が外反し、削出高台をもつ。部分的に銅緑釉が落とされている。204は口縁部が強く外反し、胴部に丸みがある。高台は低く底面が高台よりも突出している。見込には円錐ピンの痕跡が3ヶ所残る。胴部下半外面が露胎となる。203・204ともに連房第1小期に比定される。200は丸皿である。胴部下半から底部外面が露胎となる。連房第1小期に比定される。202は反皿である。連房第3小期に比定される。205・209は折縁鉄絵皿である。205は胴部外面が露胎となる。209は折縁鉄絵皿とした一群の中でも器壁が薄く、口縁の屈曲が少ない点で特徴的な個体である。長石釉を内面に、また灰釉を施釉後口縁部外面から内面にかけて施しており、胴部から底部外面にかけて露胎となる。いずれも連房第2~3小期に比定される。206~208は鉄絵皿である。内面に團縁と唐草文が描かれるもので、連房第1小期に比定される。また、208は器高が低く扁平な形状を呈する点に特徴がある。207は見込の蘭竹文が簡略化されていない。218は天目茶碗である。口縁端部が緩やかに外反し、胴部には強い丸みがある。胴部下半から底部外面にかけて露胎となる。連房第2小期に比定される。221~224は丸碗である。221は胴部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部がわずかに外反する。灰釉の流し掛けは内面のみに見られる。222は内外面とも丁寧な調整が施される。高台周辺は銅軸が施釉されている可能性がある。223は工具によると考えられる外面調整に特徴がある。底部外面周縁が露胎となる。224は胴部から底部にかけての外面が露胎となる。221・222・224は連房第3~4小期に、223は連房第1小期に比定される。228は筒型向付である。底部から口縁部にかけて緩やかに内傾する器形をもつ。鉄絵は口縁部から螺旋状につながっている可能性が高い。底部内面の一部と底部外面周縁が露胎となる。連房第1小期に比定される。229は徳利である。胴部中程に最大径がある。他の部分に比べて胴部下半内面の鉄軸が薄い。連房第3~4小期に比定される。233は片口鉢の底部と考える。底部内面に円錐ピンの痕跡が残る。高台外面下半から高台内にかけてが露胎となる。連房第5~7小期に比定される。235は大皿と考える。底部外面が高台より突出する。中央で銅軸と長石釉が掛け分けられており、高台内の銅軸が拭き取られている。鉄絵は何を表現しているか不明である。連房第1小期に属すると考える。249は楕鉢である。口縁部分類14C類に分類した。しかし、口縁端部を外に向かって肥厚しており、内面はやや窪んで段状になるため、14C類とは別の形態と考える必要があるかもしれ

東西の遺跡
B413 陶器類

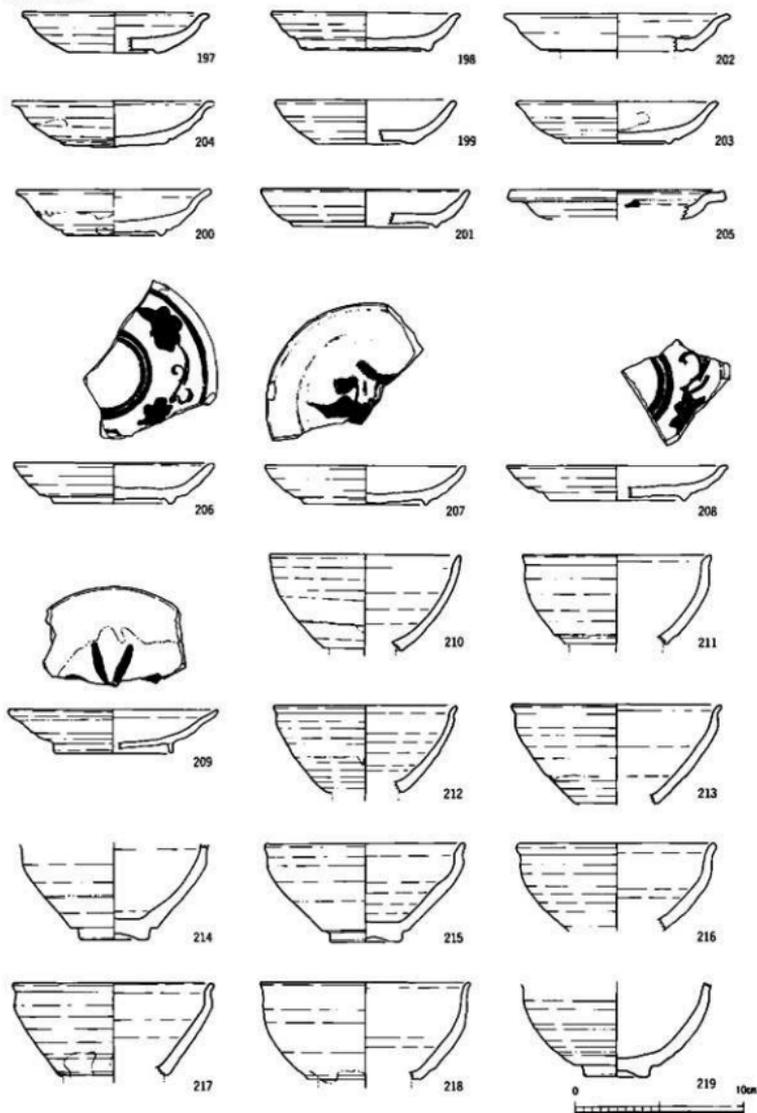


図225 遺構出土遺物（中近世）⑧（S = 1 / 3）

東西の須賀
B413 陶器類

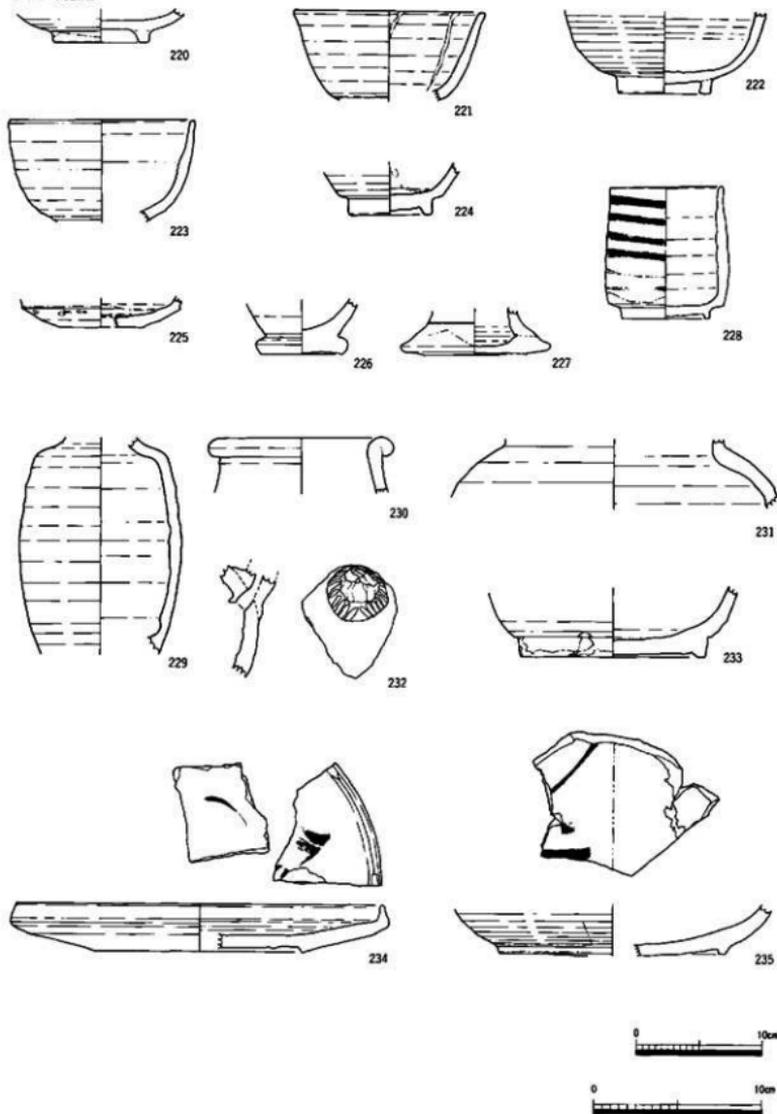


図226 遺構出土遺物（中近世）◎（S = 1/3、235はS = 1/4）

東西の地誌
B413 陶器類

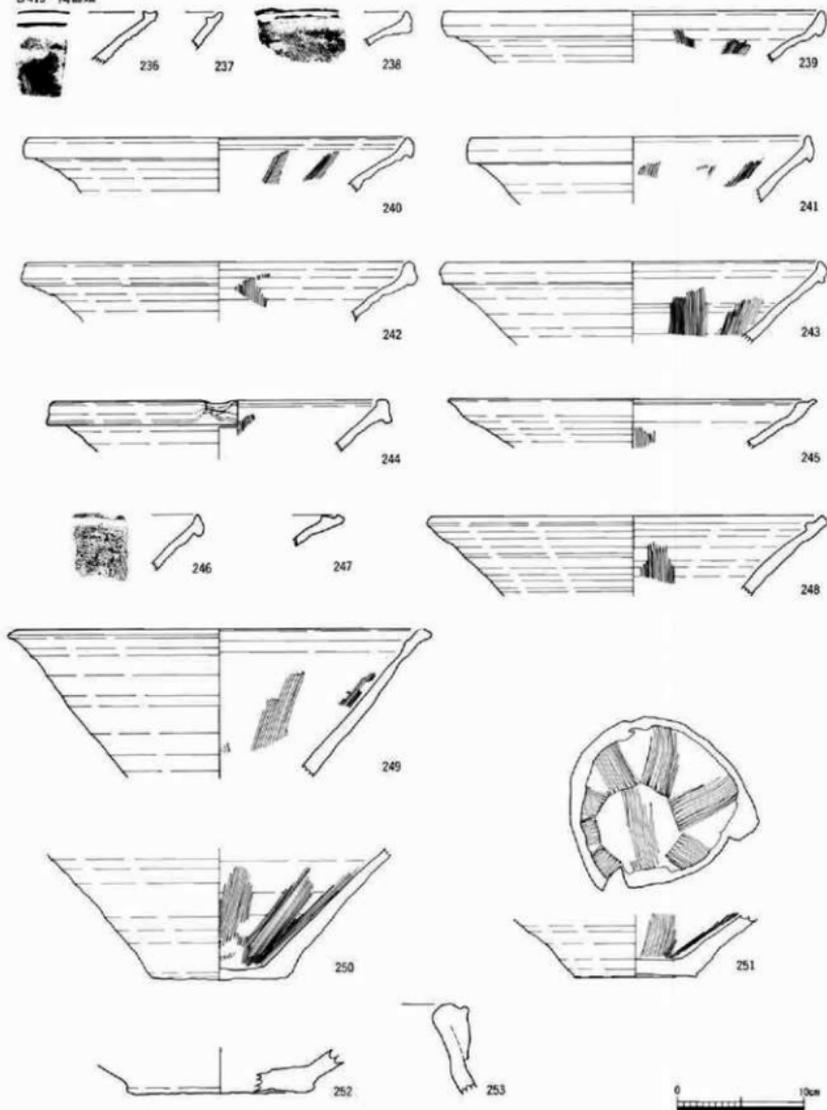


图227 遺構出土遺物（中近世）⑩（S = 1/4）

ない。

常滑 (252・253) 252・253は甕である。252は底部の破片である。253は口縁部の緑帯が頸部に完全に接着している。緑帯上部はやや外傾した突帯になっている。常滑9型式に比定される。

中国陶磁器 (254~262) 254・255は白磁の皿である。見込に高台と同じ形状の重ね焼き痕(目跡)が残る。釉薬は細かい貫入が多く見られ、焼成も悪い。森田分類D群に比定される。255は畳付に溶着の痕跡が残る。森田分類のE群に属する可能性がある。256は龍泉窯系青磁の椀皿である。口縁部に連続した押し痕がめぐり、内面に唐草文がみられる。257~259は龍泉窯系青磁碗である。257は鏝のない蓮弁文が外面にみられる。上田分類のB I'かB II類に属すると考える。258は底部の器壁が非常に厚く、底部から胴部にかけて若干丸みをもって立ち上がる。外面の蓮弁文は鏝部分が丸彫りによる彫り込みで表現されている。見込には「順氏」銘の印刻文が刻まれている。高台は小さく畳付のみ露胎となり、軸との境が赤く発色している。上田分類B I類に比定される。259は底部の器壁が厚く、高台端部に面取りが施される。釉薬は厚く、高台の畳付から高台内にかけて露胎となり、その周縁が赤く発色している。破損部に加工痕が残る。加丁円盤であった可能性がある。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗I類に属する可能性がある。260は染付皿である。削り込みによって成形された高台の周縁が露胎となる。小野分類の皿C群に属すると考える。261・262は染付碗である。261は胴部から口縁部にかけて広く開き、見込が高台内に窪む。高台端部に溶着痕があり、露胎となる。小野分類の碗C群に属すると考える。262は底部の器壁が厚く、高台が内傾している。高台端部が面取りされて露胎となる。破損した部分に加工痕が残る。加工円盤である可能性がある。

東西の壺跡 (C71、図228~230) 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに記載する。

中世土師器 (263) 263はロクロ土師器の皿である。口縁端部がやや内湾する。煤が付着しており灯明皿と考える。近世の遺物である可能性もある。

白瓷系陶器 (271) 271は有耳壺(四耳壺)である。北部系(美濃須衛型)6型式併行期⁹⁾のものに形が似ている。

古瀬戸 (264・266) 264は卸皿である。灰釉は口縁部内外面のみ見られる。古瀬戸後IV古期に比定される。266は折縁深皿である。古瀬戸中I期に比定される。

連房陶器 (265・267~270・272~283・285~290)

265は筒形香炉である。内面が露胎となる。連房第7小期に比定される。267~269は灯明皿である。267は油皿であり、見込に刀削ビンの痕跡が5ヶ所残る。底部外面の錆軸が拭い取られている。268は油皿であり、内面見込みに輪ドチ痕が残る。全面に錆軸が施軸されるが、底部外面の軸薬は拭い取られている。269は受皿である。焼締陶器のような灰色の胎土色調がみられる。底部外面に輪ドチの痕跡が残る。底部周縁の鉄軸が拭い取られる。いずれも連房第9小期に比定される。270は小杯である。文様は銅緑釉で描かれている可能性がある。連房第10~11小期に比定される。272は碗類の壺と考える。かえりはなく、輪状の柄をもつ。柄周縁から胴部中程まで鍍手の手法で裝飾されている。鍍手の周辺のみ錆軸が施軸され、他は鉄軸である。連房第8小期に比定される。273は腰錆茶碗である。器高が低く裝飾が簡略化されている。連房第8小期に比定される。274は染付の湯呑である。胴部外面の丸文は2単位見られ、磁器製品と比べてかなり簡略化されているように見える。酸化焼成しており、胎土が赤みがかっている。連房第10小期に比定される。275~277はいわゆる炆器と呼ばれるタイプの陶器で

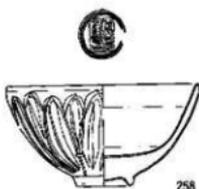
東西の壺跡
B413 組器類



254



255



258



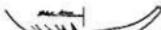
256



257



259



260

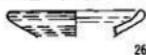


261



262

東西の壺跡
C71土師器・陶磁器類



263



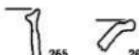
271



264



272

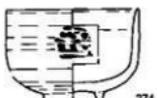


265

266



273



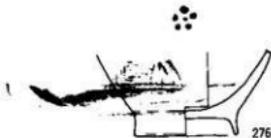
274



275



267



276



277



268



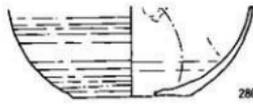
269



278



279



280



図228 遺構出土遺物(中近世)① (S=1/3、266はS=1/4)

東西の痕跡
C71 陶磁器類

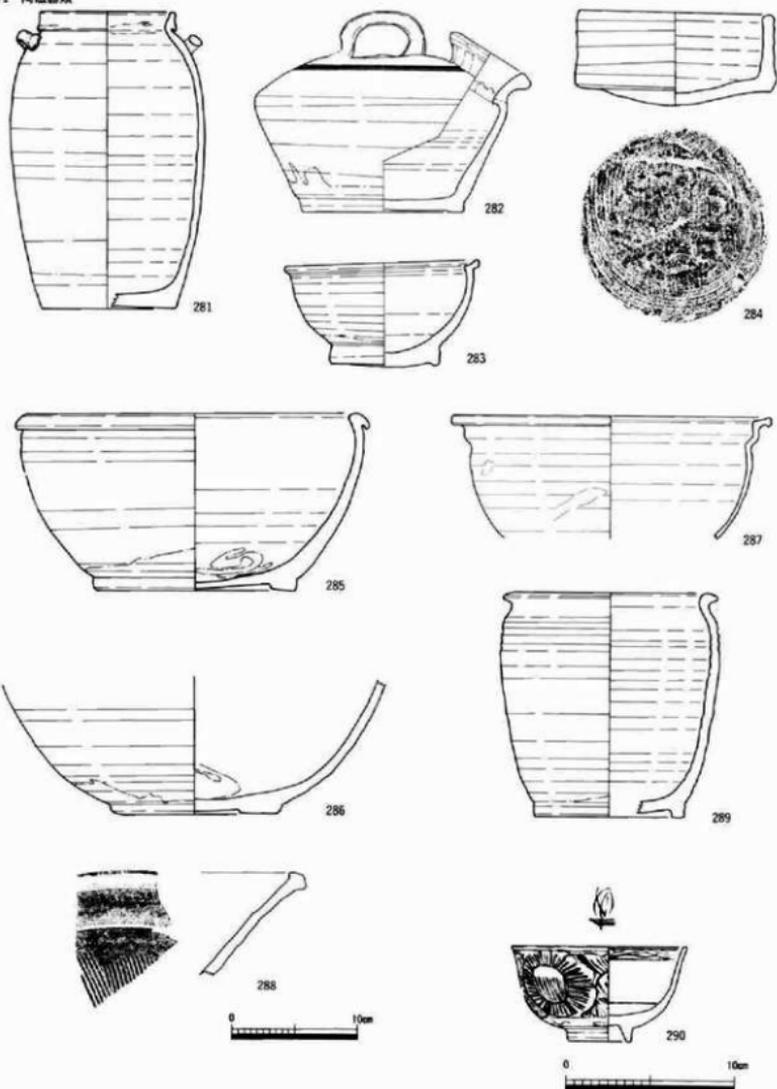


図229 遺構出土遺物（中近世）⑫（S=1/4、290はS=1/3）

ある。275・277は染付碗である。275は内外面の文様構成は肥前磁器によく似たものがあるが、かなり簡略化されている⁹⁾。277は底部内面中央が盛り上がる形状をとる。見込の文様は船頭を表現したものと思われる。畳付周縁が露胎となる。いずれも連房第10～11小期に比定される。276は広東茶碗である。外面には船らしきものが描かれる。連房第10小期に比定される。278は仏具である。脚の接地面が露胎となる。連房第8～9小期に比定される。279は土瓶の蓋である。鑄軸は外面のみ施釉されている。280は土瓶である。底部外面に煤が付着している。鑄軸は底部周縁の外面と内面の一部が露胎となる。内面の釉薬は縦方向で直線的に塗られていない部分があり、ハケ塗りであることを窺わせる。いずれも連房第8～9小期に比定される。281は有耳壺である。双耳壺として図示したが、三耳壺の可能性もある。底部外面周縁が露胎となる。連房第10～11小期に比定される。282は漫瓶である。胴部の屈曲部の上下を別々に作成し、後で接合して整形している。把手下の内面には工具による回転ナデ痕が残る。胴部下半から底部にかけての外面が露胎となる。連房第8小期以降に属すると考えられる。283は片口鉢である。片口部は欠損している。内面見込にはなんらかの窯道具痕が残る。高台周縁が露胎となる。連房第10小期に比定される。285・286は練鉢である。いずれも瀬戸産である。285は内面に緑釉を点のように落としている部分が3ヶ所、底部内面に釉薬を円形に拭い取った部分が5ヶ所ある。連房第10小期に比定される。286は内面に円形の露胎部が見られる。また底部外面周縁が露胎となる。連房第10～11小期に比定される。287は土鍋である。本来は吊り手があると考えられる。連房第8～9小期に比定される。288は播鉢である。瀬戸産であり、口縁部分類の27類に分類した。連房第11小期に比定される。289は半胴甕である。内外面ともロクロ目が顕著に残る。内底面にはトチンの痕跡(3ヶ所)があり、高台周縁が露胎となる。瀬戸産であり、連房第10～11小期に比定される。

連房磁器(290) 290は染付碗である。胴部に丸味があり、口縁部が外反する。口縁部内面に簡略化された四方禪文が配される。連房第11小期に比定される。

産地不明近世陶器(284) 284は匣鉢である。底部が突出する形状になっているが、おそらく布を敷いた型に押しつけて整形した痕跡と思われる。内面には高台の融着痕があり、灰釉のかかった製品が内部に入れられていた痕跡が残る。

近世常滑(291・292) 291・292はいわゆる「赤物」と呼ばれる陶器である。いずれも甕であり、口縁部内外面と鈎状の突帯部分を回転ナデで整形しているが、胴部内面には指頭痕が多数残る。

土製品(293～295) 293は陶鉢である。粘土板を丸めて整形している。294・295は十能である。ともに連房製品であり、瀬戸産と考えられる。294はロクロによって筒状の器形を作った後、糸などの工具で縦に2つに切り分けた後に整形している。そのため、柄を差し込む部分との接合部には回転糸切痕が残る。また、柄と接続するためにあけられた穴には鉄釘が残存している。295は内面に形状を整えるためのナデが残る。先端は高熱を受けて変色している。いずれも瀬戸産であり、連房第8小期に比定される。

東西の遺跡
C71 陶器類

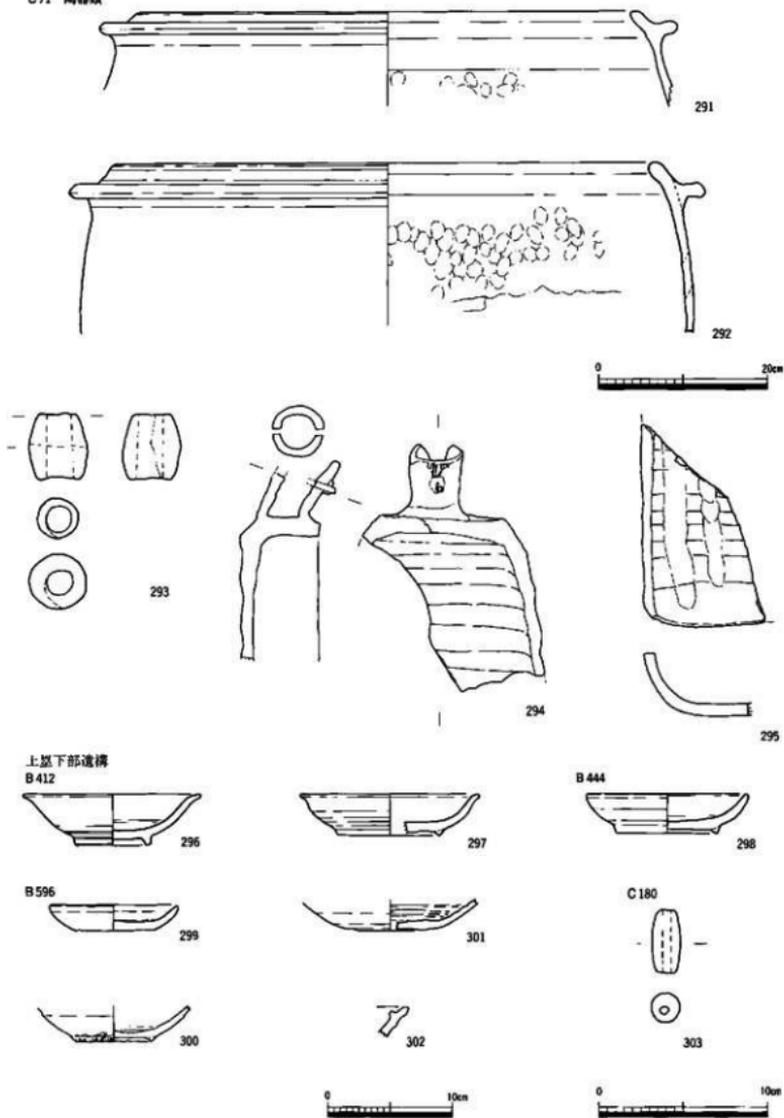


図230 遺構出土遺物(中近世)⑬ (S=1/3、302はS=1/4、291・292はS=1/6)

土壘下部遺構 (図230)

B412 296は白磁皿である。口縁部が外反し、胴部と高台の間に2条の沈線が見られる。釉は光沢があり、高台内の一部を残して施釉される。森田分類E群に比定される。297は大窯の端反皿である。口縁部の外反が強く、胴部下半に丸みがある。高台内に輪ドチの痕跡が残る。大窯1期に比定される。

B444 298は大窯の丸皿である。胴部に丸みがあり、やや身が浅い。大窯前期に比定される。

B596 299は白瓷系陶器の皿である。底部内面が平坦で静止ナデはない。北部系5型式に比定される。300・301は白瓷系陶器の碗である。300は北部系8型式の大畑大洞4号窯式、301は北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。302は古瀬戸の楕鉢である。口縁部分類の4類に分類した。

C180 303は土鉢である。最大径が中央付近にあり、やや幅が広い。

鍛冶関連遺構 (図231～233)

E500 304～307は土師器皿である。305は外面の横ナデが明瞭でないが存在する可能性が高い。胎土に赤褐色の砂粒が混入している。307は内面の横ナデが口縁部上端へ抜ける痕跡が残る。308は大窯の楕鉢の口縁部である。口縁部分類の6A類に分類した。

E830 309は土師器皿である。全体に厚ぼったいつくり。調整痕は不明である。310・311は白瓷系陶器の皿である。310は底部内面が摩耗している。北部系5型式に分類した。311は南部系5型式に分類した。312は白瓷系陶器の小碗である。南部系4型式に分類した。313～316は白瓷系陶器の碗である。313・314は南部系5型式、315・316は北部系5型式に分類した。

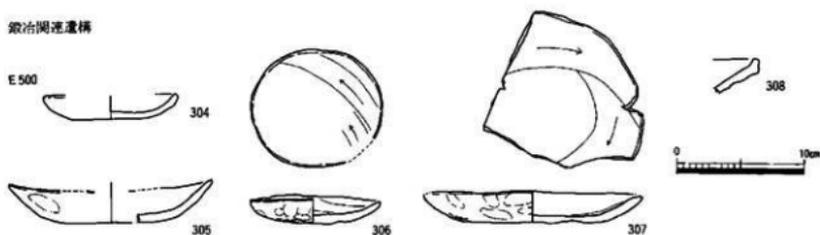
E831 317は白瓷系陶器の碗である。底部内面周縁に重ね焼き時の椀殻痕が残る。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。318は古瀬戸の片口鉢である。口縁部が外面にわずかに肥厚する。胴部下半外面の回転削りは、底部から見て時計回りに施される。白瓷系陶器の南部系5型式に併行する段階のものとする。

E780 319～321は土師器皿である。319は痕跡が不明瞭であるものの、口縁部を指で挟み込むようにして横ナデを施している。胎土がやや粗い。320は口縁部を指で挟み込むようにして内外面に横ナデを施している。322は白瓷系陶器の片口小皿とした。口縁部が大きく垂んで片口状になっている。胎土が粗く底部の回転系切り痕がナデ消されていることから、南部系5型式以前のものとする。323～327は白瓷系陶器の皿である。いずれも北部系であり、323・324を5型式、325～327を6型式の白土原1号窯式に分類した。328～332は白瓷系陶器の碗である。いずれも北部系であり、328・329を5型式、330・331を6型式の白土原1号窯式、332を7型式の明和1号窯式に分類した。333・334は古瀬戸の片口鉢である。334は内面が若干摩耗している。いずれも白瓷系陶器の南部系3～6型式に併行する段階のものとする。335・336は中国陶磁器の龍泉窯系青磁碗である。335は無文の青磁碗であり、角高台を有し、畳付きから高台内が露胎となる。施釉した部分と露胎部の境が赤く発色する。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗I類に比定される。336は外面に幅広の鴛蓮弁文が施文されている。上田分類のB1類に比定される。

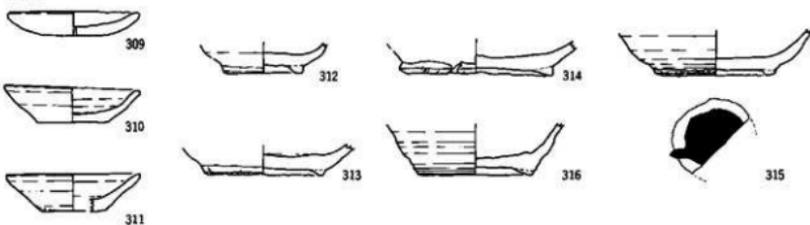
E835 337～340は土師器皿である。337は表面が荒れているため、内外面の調整は不明である。338～340は口縁部内外面に横ナデを施し、口縁部と底部の区別が明確である。341～343は白瓷系陶器の皿である。いずれも胴部と底部の境に窪みがなく、底部内面に静止指ナデがある。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。344～348は白瓷系陶器の碗である。344・345は北部系6型式の白土原1

鍛冶関連遺構

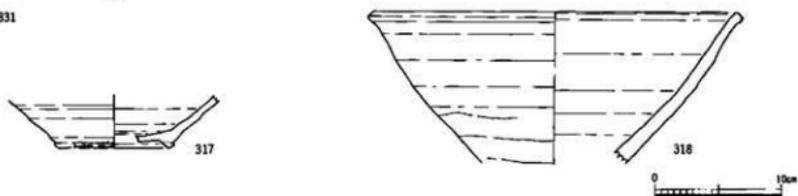
E 500



E 830



E 831



E 780 土師器・白瓷系陶器

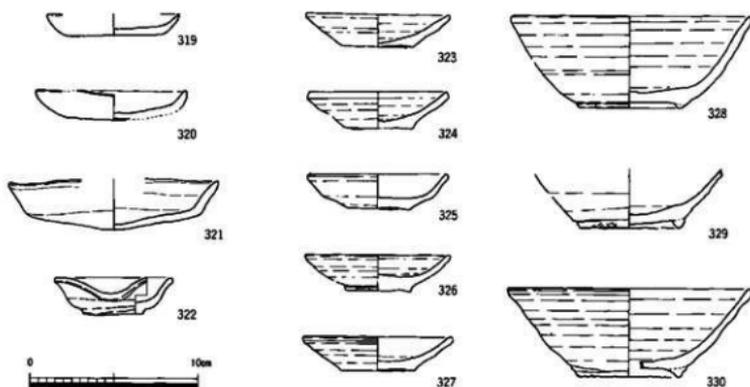


図231 遺構出土遺物（中近世）⑩（S=1/3、308・318はS=1/4）

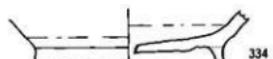
銀治岡遺構
E 780 陶磁器類



331



333



334



332

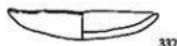


335



336

E 835



337



344



347



338



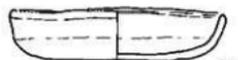
339



345



348



340



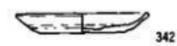
346



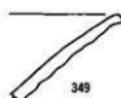
352



341



342



349



350



351



343



E 747



354



355



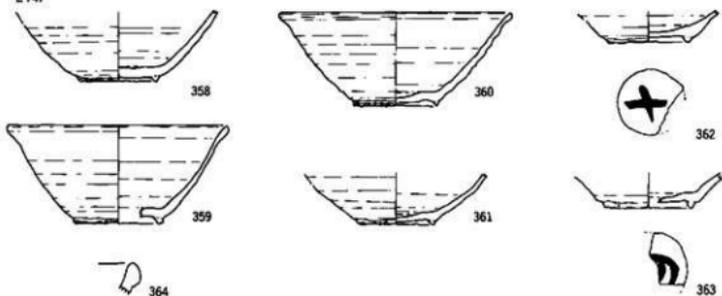
357



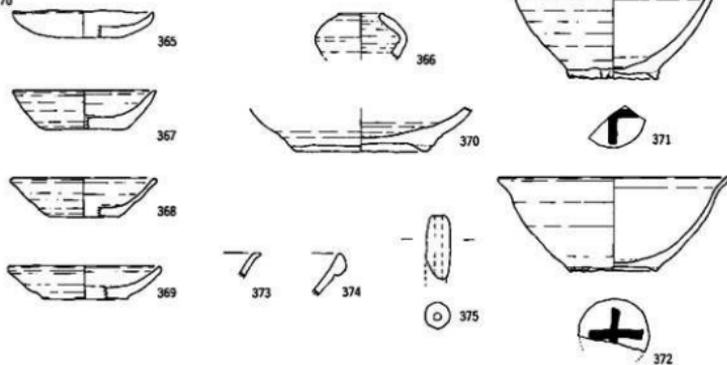
356

図232 遺構出土遺物（中近世）⑬（S = 1 / 3、333・334・349～351はS = 1 / 4）

銀台開通遺構
E 747



大型土坑
E 770



A 3

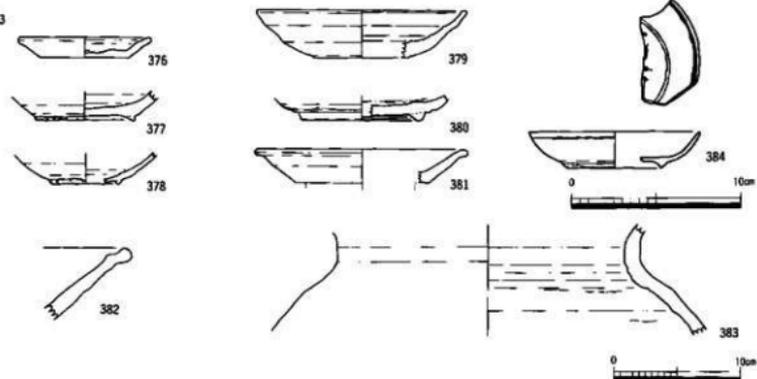


図233 遺構出土遺物（中近世）⑩（S=1/3、382・383はS=1/4）

号窯式、346～348を北部系7型式の明和1号窯式に分類した。349は白瓷系陶器の鉢と考える。北部系5～6型式併行期に属すると思われる。350・351は常滑の甕である。形状は若干異なるが、同一胴体の可能性がある。常滑3型式に比定される。352は中国陶磁器の龍泉窯系青磁碗である。外面に片切彫りによる錦蓮弁文が施文される。上田分類のB1類に比定される。353中国陶磁器の白磁皿である。胎土がやや悪く、釉薬が若干厚めにかかる。胴部下半外面が露胎となる。大宰府分類の白磁皿V類に属する可能性がある。

E747 354は中世土師器の伊勢型鍋である。口縁端部を内側に折り返して、ナデを施している。胎土に砂粒が多く混入する。355・356は白瓷系陶器の皿である。355には胴部と底部の間に窪みがあり、356にはない。また355は底部が柱状になる。355を北部系6型式の白土原1号窯式、356を北部系5型式に分類した。357～363は白瓷系陶器の碗である。357はE835から出土した破片と接合した。北部系5型式に分類した。358は北部系6型式の白土原1号窯式、359・360を北部系7型式の明和1号窯式、361～363を北部系8型式の大畑大洞4号窯式にそれぞれ分類した。364は中国陶磁器の白磁碗である。口縁部外面が玉縁状になる。大宰府分類の白磁碗IV類に比定される。

大型土坑 (図233～236)

E770 365は土師器皿である。口縁部を指で挟み込むようにして内外面に横ナデを施している可能性がある。366は白瓷の小壺である。口縁部の直立がほとんどみられない。367～369は白瓷系陶器の皿である。367を南部系5型式、368・369を北部系5型式にそれぞれ分類した。370～372は白瓷系陶器の碗である。370を南部系5型式、371・372を北部系7型式の明和1号窯式にそれぞれ分類した。373は中国陶磁器の白磁碗である。大宰府分類の白磁碗VIII類のように口縁端部を外反させ、上端を平らにしている。374は中国陶磁器の白磁碗である。口縁部外面が玉縁状になる。大宰府分類白磁碗IV類に比定される。375は土鉢である。ややすななみ形状をとる。

A3 376は白瓷系陶器の皿である。胴部と底部の内面の境に明瞭な窪みがあり、見込に静止指ナデを施している。北部系7型式以降に分類した。377・378は白瓷系陶器の碗である。377は法量的には北部系6型式に近いが、底部内面の調整などは北部系5型式に近い。378は底部内面中央に段がみられる。北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。379は大窯の灯明皿である。陶胎であり全面に銷軸が施される。大窯4期に比定される。380は連房陶器の輪弁皿である。内面の釉薬を輪状に掻き取っており、底部外面は露胎である。高台は貼付高台であるが、高台内面に回転削りの段が残る。連房第3小期に比定される。381は連房陶器の椀皿である。灰釉を全面に施している。連房第3小期に比定される。382は楕鉢である。口縁端部以外は14C類とした分類に似ている。連房第3小期の瀬戸産であると考えられる。383は常滑の甕である。胴部内面に粘土紐接合痕が残る。384は中国陶磁器の染付皿である。髹付から高台外面にかけて釉が掻き取られている。小野分類の碗E群に比定される。

A4 385は白瓷系陶器の碗である。若干焼きが甘い。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。386は古瀬戸の卸皿である。内面の突起が口縁を形成している。古瀬戸後II期に比定される。

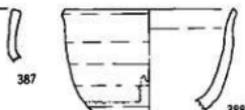
A96 387は中世土師器の茶釜の口縁部である。若干下傾している。内外面を回転ナデで整形している。388は連房陶器の丸碗である。銅緑釉を施した上に、うのふ釉の技法で施釉している。連房第1小期に比定される。389は大窯の徳利であろうか。底部内面中央に自然釉が降灰しており、口の狭い容器と考える。大窯2～3期に比定される。

大型土坑

A 4



A 96



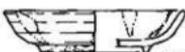
A 245



B 132



B 202



0 10cm

B 205



C 114



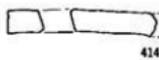
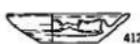
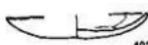
C 120



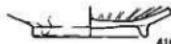
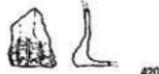
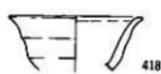
B 386



C 120



C 124



0 10cm

図234 遺構出土遺物(中近世)① (S=1/3、395・399はS=1/4)

- A245 390は白瓷系陶器の碗である。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。
- B132 391は大窯の絞皿である。鉄軸を全面に施軸している。大窯2期に比定される。392は大窯の丸皿と考える。鉄軸を施軸した後、内外面に灰軸を流し掛けている。大窯3期前半に比定される。
- B202 393は白瓷系陶器の皿である。器高が低く口縁部の立ち上がりが短い。北部系7型式以降に分類した。394は白瓷系陶器の碗である。胎土が精良である。北部系11型式の生田2号窯式に分類した。395は占瀬戸の摺鉢である。口縁部分類の5類に分類した。
- B205 396は占瀬戸の根来型瓶子の口縁部と考える。口縁部にかけて外反しながら内傾する。口縁端部は面取りされる。
- B386 397は白瓷系陶器の碗である。底部内面中央が窪む。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。
- C114 398は連房陶器の染付皿である。妬器であり、内面に呉須絵が描かれる。連房第10小期に比定される。
- C120 399は座地不明陶器の甕である。口縁部が受け口状に折り返されている。胎土が須恵器のような青灰色の色調を呈する。美濃須術産の可能性ある。400は白瓷系陶器の碗である。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。401・402は土師器皿である。401は胎土が精良で焼成が良い。口縁端部にタールのようなものが付着しており、灯明皿の可能性ある。402は胎土が若干粗いが焼成は良い。401・402ともに近世の土師器皿の可能性ある。403～412は連房陶器の灯明皿である。403は受皿である。底部外面が露胎となる。404は受皿である。底部の鉄軸が拭い取られている。405は油皿である。見込に輪ド子痕が残る。底部外面の錆軸が拭い取られる。406は油皿である。底部内外面に輪ド子痕が残る。底面の錆軸を拭い取った後、さらに錆軸を施軸している。407は受皿である。胴部から底部外面にかけて錆軸が拭い取られる。408は受皿である。胴部から底部外面にかけて錆軸が拭い取られる。409は油皿である。見込に円錐ピンの痕跡が3ヶ所残る。胴部から底部外面にかけて露胎となる。410は油皿である。見込に輪ド子痕が残る。底部外面の錆軸が拭い取られる。411は受皿である。他の灯明受皿と比較して、受けの高さが口縁部まで達している点が異なるが、つくりはさほど変わらない。底部外面周縁に輪ド子痕が残る。胴部下半外面の錆軸が拭い取られる。412は受皿である。焼締の胎土を呈する。胴部下半から底部外面にかけて露胎となる。403・405～407・409～411は連房第9小期に、404・408・412は連房第10～11小期に比定される。413は連房陶器の仏具である。杯部の外面に菊文と唐草文が呉須によって描かれる。脚の中空部は削りによって整形されている。脚の底部周縁から底部外面にかけて露胎となる。414は平瓦と考えるが、2ヶ所に円形の穿孔がある。表面が焼されており、表面が灰色を呈する。近世のものであろう。
- C124 415は連房陶器の灯明皿である。油皿であり、見込にピンの痕跡が残る。胴部から底部外面にかけて露胎となる。連房第10～11小期に比定される。416は連房陶器の菊皿と思われる。内面にソギが施され、外面が露胎となる。連房第5小期に比定される。417は連房陶器の尾呂茶碗である。口縁部内外面にうのふ軸が施される。連房第5～6小期に比定される。418は肥前の小杯と思われる。口縁部が外反する。419は連房陶器の水滴である。表面に陽刻あるいはスタンプによって木葉文が描かれる。底部外面には布目痕が残る、内面には接合時のナデ痕がみられる。連房第5～6小期に比定される。420は動物の脚部を模した土人形である。指の節と爪が表現されている。

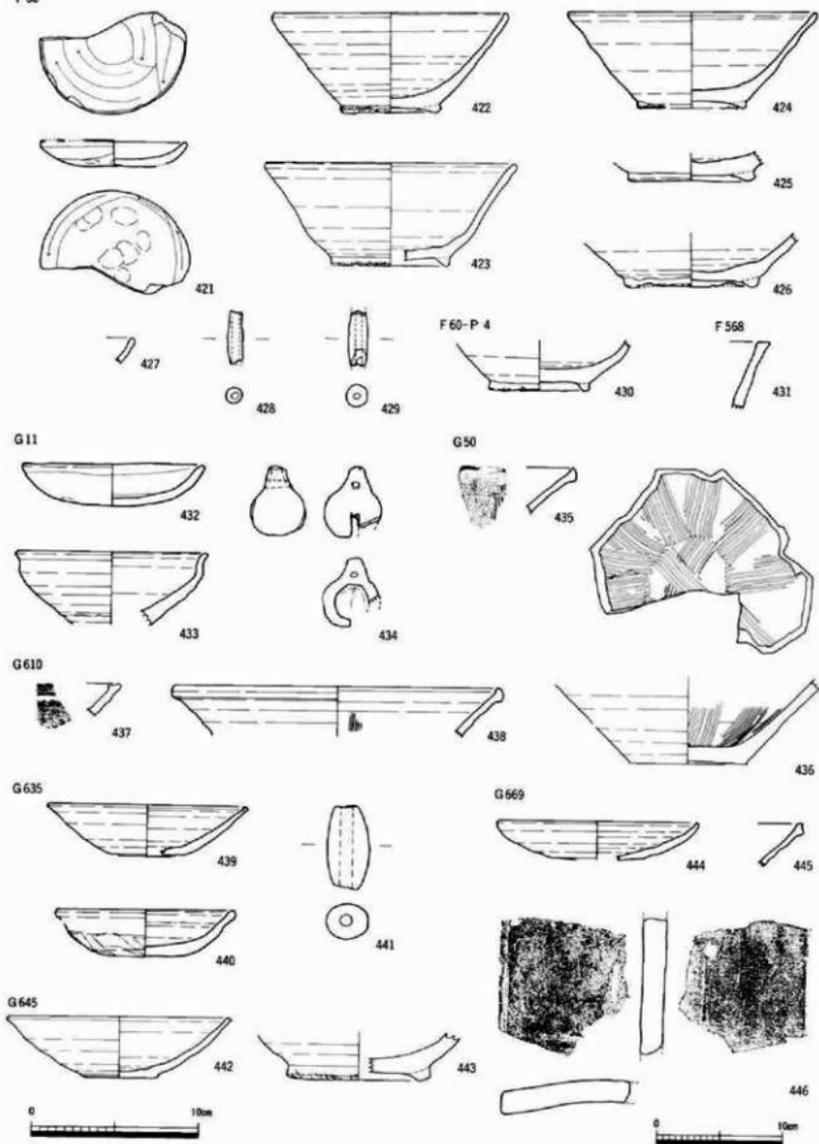


图235 遺構出土遺物 (中近世) ⑧ (S = 1/3、435・436・438・445・446は S = 1/4)

F60 421は土師器皿である。内面の横ナデは見込の内縁にも施されている。422～426は白瓷系陶器の碗である。422～424は内面の胴部と底部の境が明瞭でなく、楕鉢状になる。北部系5型式に分類視した。425は南部系5型式に分類した。426内面の胴部と底部の境に輪状の窪みが見られる。南部系6型式に分類した。427は中国陶磁器の白磁碗である。口縁部外面が玉縁状になる。大宰府分類の白磁碗Ⅱ類に分類した。428・429は土錘である。430は白瓷系陶器の碗である。F60のP4から出土した。北部系5型式に分類した。

F568 431は白瓷系陶器の洗と考える。かなり大型の器種であり、胎土が粗い。美濃須衛産の可能性がある。

G11 432は土師器皿である。内外面に煤が付着するが、破損断面にも付着しており破損後に付着したものと思われる。433は大窯の天日茶碗である。底部から胴部にかけて直線的に広がり、口縁部が直立して強く外反する。胴部下半の銚軸は濃い。大窯3期に比定される。434は土鈴である。溝跡B387から出土したもの(153～157)とほぼ同じ形態をとる。

G50 435・436は古瀬戸の楕鉢である。435は内面に砂が付着しており、器壁が非常に薄い。口縁部分類の5類に分類した。436は楕鉢の底部である。いずれも古瀬戸後Ⅳ新期に比定される。

G610 437は古瀬戸の卸皿である。口縁部内外面に鉄軸が施軸される。古瀬戸後Ⅳ古期に比定される。438は古瀬戸の楕鉢である。内面に焼成以前の砂粒が付着している。口縁部分類の5類に分類した。古瀬戸後Ⅳ新期に比定される。

G635 439は白瓷系陶器の碗である。北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。440は古瀬戸の縁軸小皿である。胴部に丸みがあり、口縁部外面下が強いナデによって窪んでいる。内面には墨痕のようなものがあり、見込が摩耗していることから転用碗の可能性が高い。鉄軸は口縁部内外面のみに施軸されており、その他は銚軸の可能性が高いが非常に発色が薄い。古瀬戸後Ⅲ期に比定される。441は土錘である。大型品であり、古代溝G201から出土した1512と似ている。

G645 442・443は白瓷系陶器の碗である。442は北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。443は内面が摩耗している。南部系4型式に分類した。

G669 444は白瓷系陶器の碗である。北部系11型式の生田1号窯式に分類した。445は大窯の楕鉢である。6B類としたが、口縁端部を面取りする点異なる⁹⁾。器壁が薄い。大窯1期に比定される。446は平瓦である。凸面側にハナレ砂が付着しており、凹面にはナデ調整が見られる。

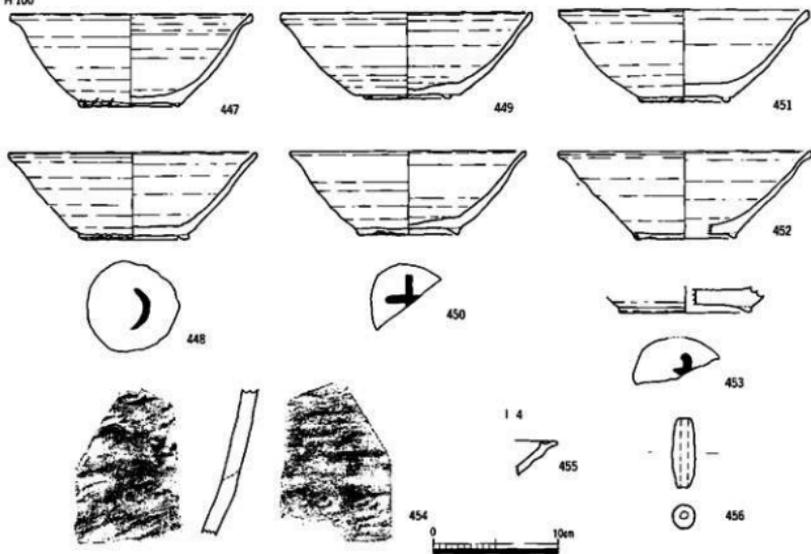
H100 447～453は白瓷系陶器の碗である。447・449・450・452は内面の胴部と底部の境に輪状の窪みがある。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。448・451は内面の窪みがないため、北部系5型式に分類した。453は胎土が粗く、低い高台が付される。南部系5型式に分類した。454は産地不明陶器の甕である。474の甕に似た調整が施される。美濃須衛産の可能性が高い。

I4 455は古瀬戸の楕鉢である。口縁部分類の3類に分類した。456は土錘である。胎土が赤く、含まれる砂粒が多い。

土器埋納遺構(F24、図236・237) 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに掲載する。

中世土師器(457～467) 457～459は土師器皿である。457は、458・459と内面ナデが二段になる点異なる。458は459に似るが、外面ナデが一段になる。口縁部の器壁は厚い。459は外面には粘土板切り込み痕が残る。外面ナデは二段になる。460～467はクロコ土師器である。460・461は小皿である。460

大型土坑
H100



土器埋納遺構
F24

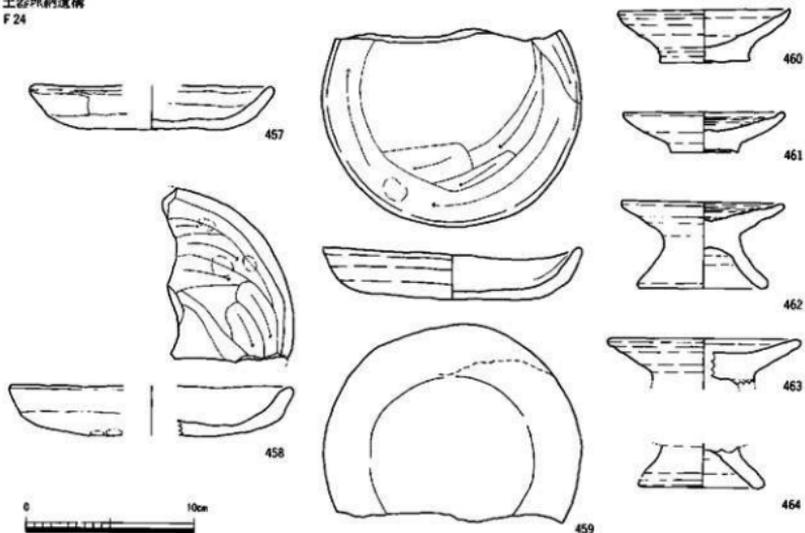
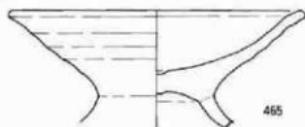
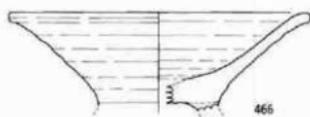


图236 遺構出土遺物(中近世)⑩ (S=1/3、454・455はS=1/4)

土器埋の遺構
F 24



465



466



467



468



469



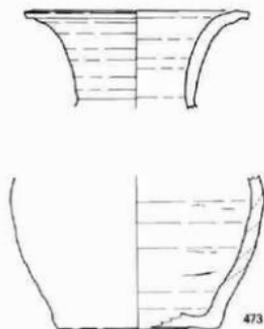
470



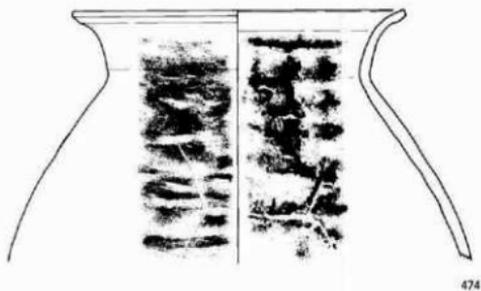
471



472



473



474



図237 遺構出土遺物（中近世）㊸（S = 1/3、473・474はS = 1/4）

は内面の回転痕はそれほど顕著ではない。焼成が良く還元質に近い。461は内面に棒状工具によると思われる渦状の回転痕が顕著に残る。462～464は小型の脚高台皿である。462は内面に棒状工具によると思われる渦状の回転痕が顕著に残る。463は杯部の底面に回転糸切り痕が残る。464は上端に杯部の回転糸切り痕が転写されている。465・466は大型の脚高台皿である。465は胴部から口縁部にかけて直線的に広がる。466は胴部から口縁部にかけて直線的に広がり、端部が外反する。内外面ともに回転痕が顕著に残る。467は杯である。同遺構から出土したロクロ土師器に比して胎土に砂が多く、赤い砂粒が混入する点異なる。

白瓷系陶器 (468～472) いずれも南部系5型式の碗である。471は比較的胎土が精良である。

産地不明陶器 (473・474) 473は広口壺である。胴部上半の破片はないが、同一個体と考える。頸部から口縁部にかけて強く外反しており、口縁端部は面取りされている。胴部下半から底部外面、破損断面に煤が付着している。内面には二次焼成による割れが見られ、輪積痕が残る。胎土の様子から、美濃須衛産の可能性が考えられる。474は甕である。焼成は須臾器に近く、撫肩の形状を取る。胴部外面には無文の甲き目、内面には同心円状の甲き目が残る。胎土の様子から、美濃須衛産の可能性が考えられる。

井戸跡 (図238)

A100 475は土師器皿である。内面のナデが不明瞭で判別できない。476は連房陶器の反皿である。溝跡A1とA100から出土したものが接合した個体である。灰釉全面施釉で見込に3ヶ所のピン痕が残る。連房第3小期に比定される。477・478は大窯の丸皿あるいは端反皿である。477は灰釉を全面に施しており、見込に貫入がある。また、外面腰部に釉が溜まっている。底部外面中央に輪ドチの痕跡がある。478は灰釉を全面に施しており、見込に貫入がある。また、外面腰部に釉が溜まっている。底部外面中央に輪ドチの痕跡がある。いずれも大窯1～2期に比定される。479は連房陶器の向付である。見込に鉄絵が描かれているが、何が描かれているかは不明である。連房第1小期に比定される。

B639 480・481は白瓷系陶器の碗である。480は北部系8型式の大畑大洞4号窯式に分類した。481は北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。482は大窯の灯明皿である。焼締陶器であり、釉薬は施釉されない。口縁部には指頭によるナデが施される。大窯1期に比定される。483は連房陶器の徳利あるいは花瓶の頸部破片である。内面に成形時のものと思われるしぼり込んだ痕が残っている。連房第3～4小期に比定される。484は常滑の甕の底部破片である。

B735 485は土師器の胴部破片である。外面に縦位と斜位のハケ目が残る。胎土はやや粗で石英等の砂粒が多く混入するが、焼成はよい。円筒形の器形になるようであるが、器種・時期は不明である。

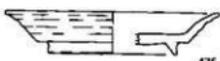
486は白瓷系陶器の碗である。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。487は大窯の播鉢である。口縁部分類の6A'類に分類した。縁帯が下に垂れない。大窯1期に比定される。488は連房陶器の播鉢である。口縁端部を若干外側に肥厚させ端部を面取りしている。口縁部分類の14C類に分類した。489・491は連房陶器の丸皿である。489は内面に重ね焼きの痕跡が残る。高台内には煤が付着している。胴部から底部外面にかけて露胎となる。491は胴部から底部外面にかけて露胎となる。いずれも連房第4～5小期に比定される。490・492は連房陶器の反皿である。490は口縁部が強く外反し、高台端部が尖る。胴部から底部外面にかけて露胎となる。492は口縁部がほとんど外反しない。底部内面に円錐ピンの痕跡が4ヶ所残る。いずれも連房第4小期に比定される。493は連房陶器の折縁鉄絵皿である。見込

井戸跡

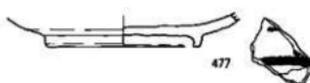
A 100



475

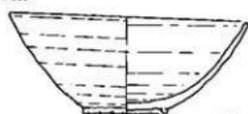


476

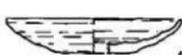


477

B 639



480



482



478

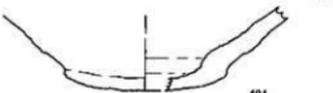
479



481



483



484

B 735



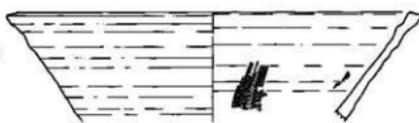
485



486



487



488



489



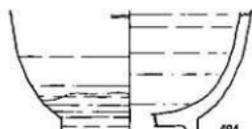
490



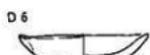
491



492



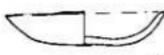
494



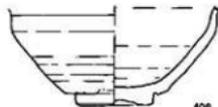
495



493



496



498

D 460



500



497

D 100



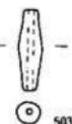
499



501



502



503



図238 遺構出土遺物（中近世）㉑（S = 1/3、484・487・488・499・502は S = 1/4）

に蘭竹文が描かれ、長行輪が内面全体に施釉される。口縁部内外面に灰釉が施釉され、口縁部胴部から底部外面にかけて露胎となる。連房第2～3小期に比定される。494は連房陶器の片口鉢である。胴下部から底部外面にかけて露胎となる。連房第5～7小期の瀬戸産と考えられる。

D 6 495-496は土師器皿である。いずれも外面にナデ調整が無く、内面調整は不明瞭である。497は白瓷系陶器の小壺と考える。北小木古窯跡に類例がある⁷⁾。ベンガラを入れる容器として用いられたと考える。498は大窯の天日茶碗である。鉄釉が高台周縁にまでかかり、鎔釉は高台のみに残る。大窯3期に比定される。

D100 499は大窯の播鉢である。口縁部分の8A類に分類した。大窯2期に比定される。

D460 500-501は白瓷系陶器の碗である。500は北部系7型式の明和1号窯式、501は北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。502は古瀬戸の片口鉢の底部である。外面の削りは底部から見て反時計回りに回転している。白瓷系陶器の南部系9～10型式に併行するものと考ええる。503は土錘である。中央付近に最大径が見られ、両端が細くなる。

地下式坑 (図239)

C132 504は白瓷系陶器の碗である。内面に墨痕が見られるが、文字ではなく同方向に何度も筆を走らせただけのように見える。筆先を整えるために使用したのかもかもしれない。北部系9型式の大谷洞14号窯式に分類した。505・506は連房陶器の摺絵皿である。見込の中心からややずれた位置に摺絵が付される。506と全く同じ型を使用しているが、505の方が摺り絵の色が薄い。505・506ともに高台周縁が露胎となる。連房第5～6小期に比定される。507は肥前磁器の小杯と考える。胴部から口縁部にかけて緩やかに開き、口縁端部が強く外反する。胴部の文様は梅文であろうか。508は連房陶器の菊皿である。外面の縦位沈線が消失しており、連房第5小期に比定される。509は産地不明近世陶器の火鉢と考える。焼成や胎土は近世の常滑甕(赤物)に似る。内面の一部に煤が付着する。

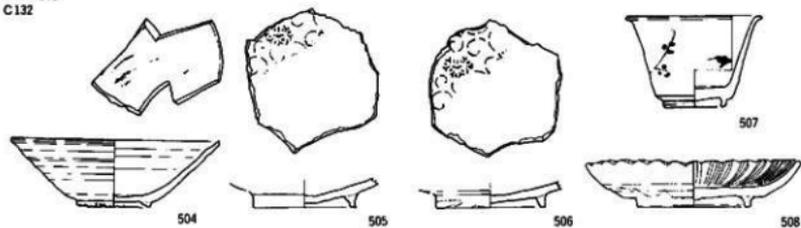
H355 510～512は土師器皿である。510は口縁端部のみ煤が付着しており、灯明皿と考える。512は内外面に横ナデがあり、底部内面にも一方向のナデが施されている。513は中世土師器の伊勢型鍋である。口縁部を内側に折り返し、その上を強くなでている。口縁部の屈曲はそれほど顕著ではない。胎土はやや密で石英・雲母が多く混入する。514は白瓷系陶器の皿である。口縁部が外反し、端部が丸味を帯びる。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。515は大窯の灯明皿である。焼締陶器である。大窯3期に比定される。516は白瓷系陶器の碗である。胎土が精良である。北部系11型式の生皿2号窯式に分類した。517は大窯の摺鉢である。口縁部分の12A類に分類した。518は常滑の甕の底部である。内面に横方向の板ナデが施される。

道路状遺構の側溝 (図239)

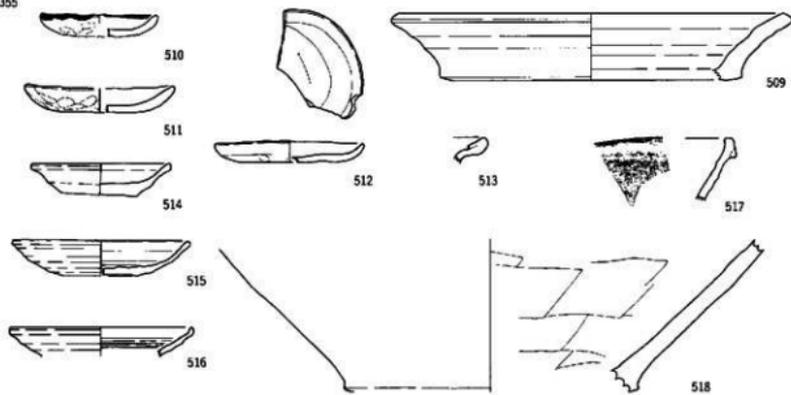
B104 519は古瀬戸の茶釜である。胴部の羽の部分で粘土が上下に貼り合わされている。古瀬戸後IV古期に比定される。

B105 520-521は白瓷系陶器の碗である。520は北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。521は底部内面が若干摩耗している。焼成が悪い。北部系11型式の生皿2号窯式に分類した。522は連房陶器の丸皿である。胴部にやや丸味があり、底部外面周縁が露胎になる。連房第8小期に比定される。523は古瀬戸の播鉢である。古瀬戸後IV古期に分類した。

地下式坑
C132

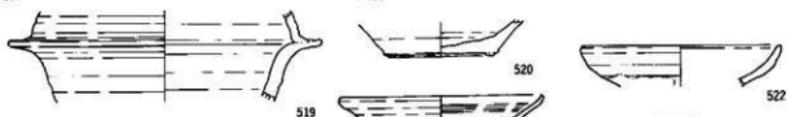


H385



道路状遺構 (銅溝)

B104



B151

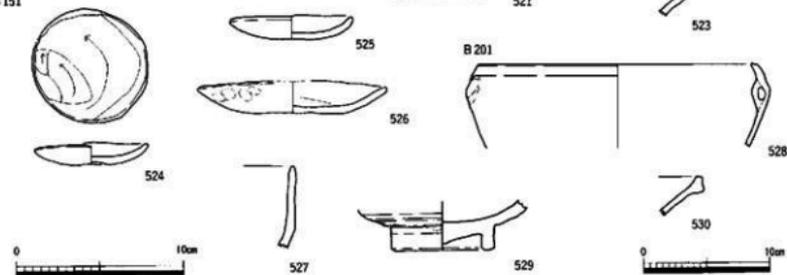


図239 遺構出土遺物 (中近世) ㊸ (S = 1/3、509・517・518・519・523・528・530はS = 1/4)

B151 524～526は土師器皿である。524・525は小型品、526は中型品である。526には内面に横ナデが施される。527は連房陶器の丸碗と考える。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。連房第3小期に比定される。

B201 528は中世土師器の内耳鍋である。内外面に煤の付着が見られない。529は連房陶器の丸碗と考える。高台の壘付が摩耗によって釉が禿げている。溝跡B743から出土したものと接合した。連房第3～4小期に比定される。530は大窯の播鉢である。口縁部分類の6A類に分類した。

特殊土坑 (図240)

H15 531は土師器皿である。内面の調整は摩耗のため判別できない。532は白瓷系陶器の碗である。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。533は土鈴である。つくりは溝跡B387から出土したものの(153～157)と同じである。

H302 534・535は白瓷系陶器の皿である。ともに扁平で器壁が薄く、北部系7型式以降に分類した。536～538は白瓷系陶器の碗である。536はH398・H386から出土したものが接合した個体である。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。537・538は低く潰れた高台が、底部外面周縁の内側に付される。北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。539は古瀬戸の片口鉢である。内面の胴部と底部の境が明瞭である。白瓷系陶器の南部系3～6型式に併行する。540は中国陶磁器の龍泉窯系青磁碗である。口縁部がやや反する。外面に片切り彫りによる鍋連弁文が施文される。上田分類のBⅠ類に比定される。

H398 541～543は白瓷系陶器の皿である。H302の534・535ほどではないが、扁平で口縁部の器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。544～549は白瓷系陶器の碗である。544を北部系7型式の明和1号窯式、545・546を北部系8型式の大畑大洞4号窯式、547を北部系9型式の火谷洞14号窯式、548・549を北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。550は古瀬戸の片口鉢である。口縁部外面が肥厚し、端部が沈線状になる。白瓷系陶器の南部系9型式併行に比定される。

不明遺構 (図240～244)

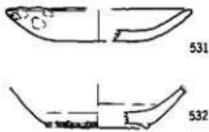
A390 551は土師器皿である。内面の横ナデの上に指頭痕が残っている。552は中世土師器の茶釜である。肩部に把手がつくタイプの茶釜で、羽の有無は不明である。口縁部外面と把手より下に煤が付着する。553は大窯の灯明皿である。形態は大窯の灯明皿であるが、焼成は白瓷系陶器と似ている。大窯2期に比定される。554は大窯の端反皿である。胴部の張りが強く丸みがある。全面に灰釉が施される。大窯1期に比定される。555は大窯の端反皿か丸皿である。見込中央はおそらく菊の印花文であろう。高台内を除き灰釉が施される。大窯1～2期に属する可能性が高い。556は古瀬戸の瓶子と考える。内面に頸部接合時の指頭痕が明瞭に残る。古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期に比定される。557は古瀬戸の卸目付大皿である。施釉された鉄釉が内面に飛び散った痕跡が残る。足は指ナデによって整形されている。古瀬戸後Ⅳ新期に比定される。558は古瀬戸の壺と考えられる。内面はクロロ日が顕著で、底面に炭化物が付着している。底部外面周縁が露胎となる。古瀬戸後Ⅳ占～後Ⅳ新期に比定される。

B114 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに記載する。

土師器皿 (559～583) 560～563は胎土・形態ともによく似ている。566は底部が明瞭ではない形状を呈するタイプであるが、内面ナデは比較的丁寧に行われている。内面および底部外面中央に炭化物らしきものが付着している。569には、胴部から底部にかけて内面に円を描くように板の角の痕跡が残っ

特殊土坑

H15



531

532



533

H302



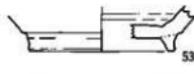
534



535



537



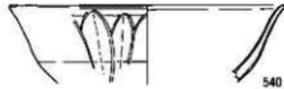
539



536



538



540

H398



541



544



547



542



545



548



543



550



546



549

不明遺構

A390



551



553



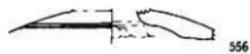
554



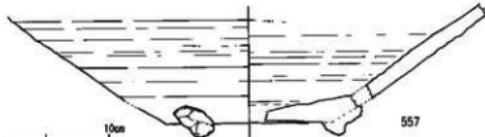
552



555



556



557



558

図240 遺構出土遺物 (中近世) ㊸ (S = 1/3、539・550・552・557・558は S = 1/4)

ている。571は内面全体に煤が付着しているが、特に岡の左側部分が濃い。火を灯した場所の可能性がある。572は底部中央に焼成後穿たれたと思われる穿孔がある。575は口縁部の内外面に漆が付着している。581は内面に「キ」に近い形状の線刻がある。582は外面を横ナデで整形している可能性があるが、痕跡が不明瞭で判別できない。583はB114で最も大型の土師器である。内面の広い範囲に煤が付着していることから灯明皿の可能性もある。口縁端部外面にハケによる調整痕が残る。

白瓷系陶器 (584~586・592・593・596) 584~586は碗である。584を北部系7型式の明和1号窯式、585を北部系8型式の大畑大洞4号窯式、586を北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。592・593・596は碗である。いずれも器壁が薄く、胎土は精良である。北部系11型式の生田2号窯式に分類した。古瀬戸 (588・589・608・623・624) 588は折縁深皿である。古瀬戸後Ⅲ期に比定される。589は卍皿である。内面の突起が口縁部より高くなる。灰釉は口縁部周縁のみに施される。古瀬戸後Ⅳ期に比定される。608は天目茶碗である。口縁部の屈曲が強く、底部から胴部にかけて直線的に開き、胴部上半に張りがある。古瀬戸後Ⅳ新期に比定される。623・624は播鉢である。口縁部分類の5類に分類した。

大窯 (587・590・591・594・595・597~600・604~607・616・622・625~632) 587・591・594・595は灯明皿である。587はつくりが焼締の灯明皿と同じであるが、胎土・焼成が北部系白瓷系陶器に似る。外面整形に工具を使っている可能性がある。591・594・595が焼締陶器である。591は口縁部の内外面に煤が付着している。594は内面に煤が紐状に付着しており、灯心痕の可能性もある。595は指頭によるナデが施される。587・591・594が大窯2期に、595が大窯1期に比定される。590・600は丸皿である。590は胴下部にやや丸みがあり、やや身が深い。錆釉施軸後鉄釉が口縁部周縁に施される。大窯3期前半に比定される。600は口縁部が欠損しているが、内面にソギが見られることなどから、折縁皿と考える。高台内に輪ドチの痕跡が残る。大窯2期前半に比定される。597・599は端反皿である。597は口縁部が外反し、胴部下半に丸みがある。599は胴部に丸みがあり、口縁部の外反は強い。高台は底部の外側に付される。灰釉は底部から胴部下半を除き施釉されるが、発色が悪くすんでいる。11縁端部の内面に重ね焼きの痕跡が残る。いずれも大窯1期に比定される。598は丸皿か端反皿と思われる。見込のほぼ中央に印花文が施される。灰釉を全面に施釉する。大窯1~2期のものであろう。604~607は天目茶碗である。605は口縁部の屈曲が強く、胴部上半の張りが強い。底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。胴部下半から底部外面の錆釉は薄い。大窯2期に比定される。606は全体的に器壁が厚めで、底部から口縁部にかけて直線的に開き、11縁部の外反は強い。底部外面周縁に施釉される錆釉は濃い。大窯1期に比定される。607は底部外面周縁の錆釉はかなり濃く、鉄釉の発色に透明感がある。大窯1期に比定される。616は仏具である。外面胴部下半が露胎となる。大窯1期に比定される。622は丸皿である。外面に丁寧な回転削りが施されている。胎土はやや軟質で小レキが混入する。底部外面周縁のみ錆釉が施釉される。大窯3期に比定される。625~632は播鉢である。625は口縁端部が欠損している。大窯3期に比定される。内面の胴部下半が使用により激しく摩耗している。626・627は9A類、628は9A類、629~631は14B類、632は14C類にそれぞれ分類した。

不明遺構

B114 土器類

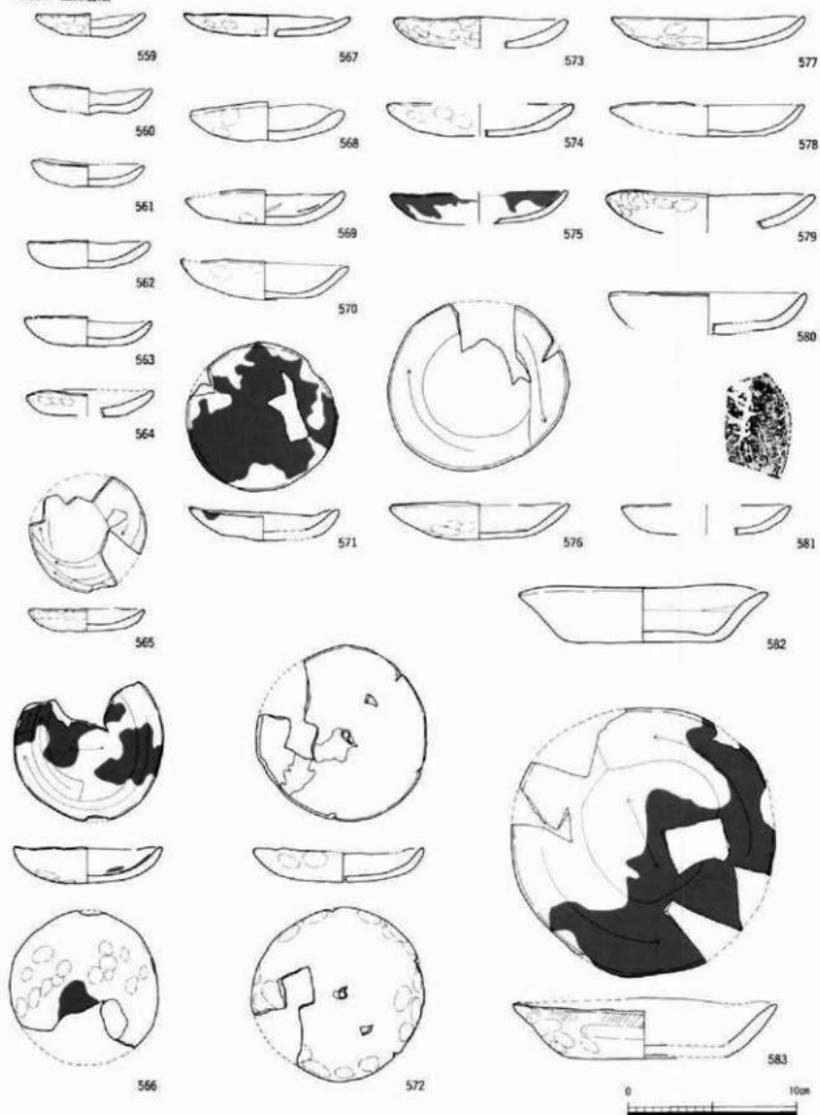


図241 遺構出土遺物（中近世）㊸（S=1/3）

不明遺構

B114 陶器類

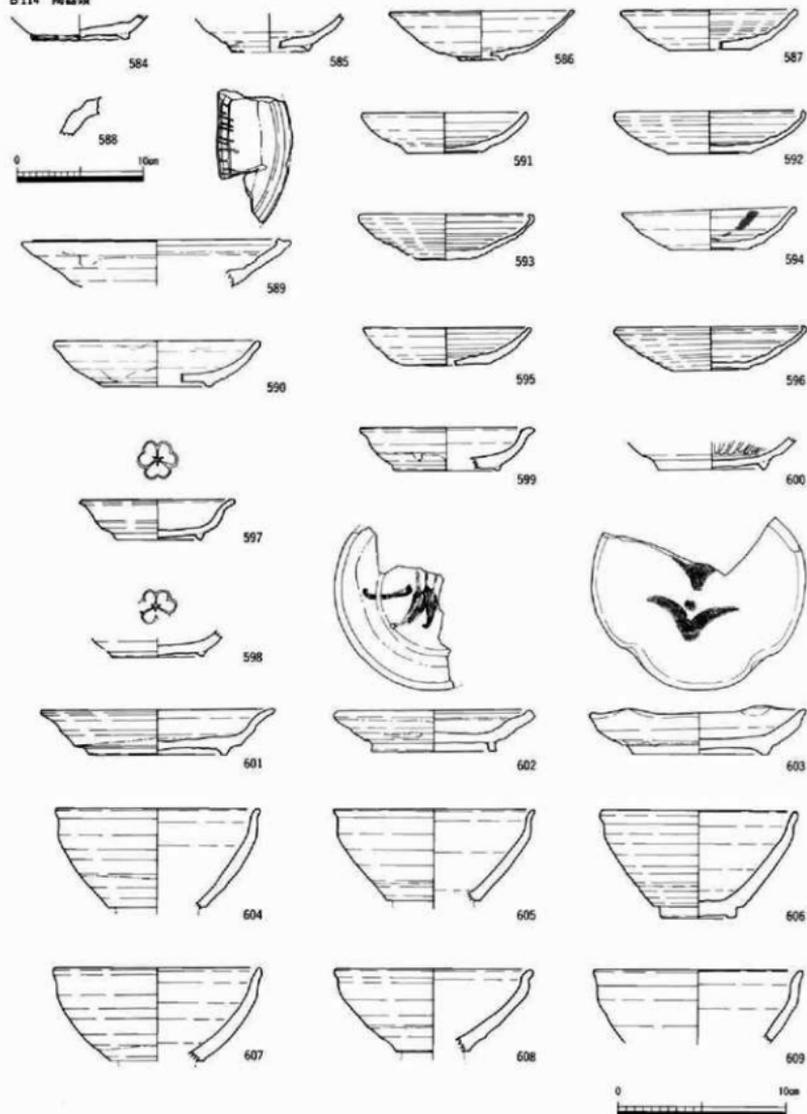


图242 遺構出土遺物 (中近世) ㊸ (S=1/3、588はS=1/4)

不明遺構
B114

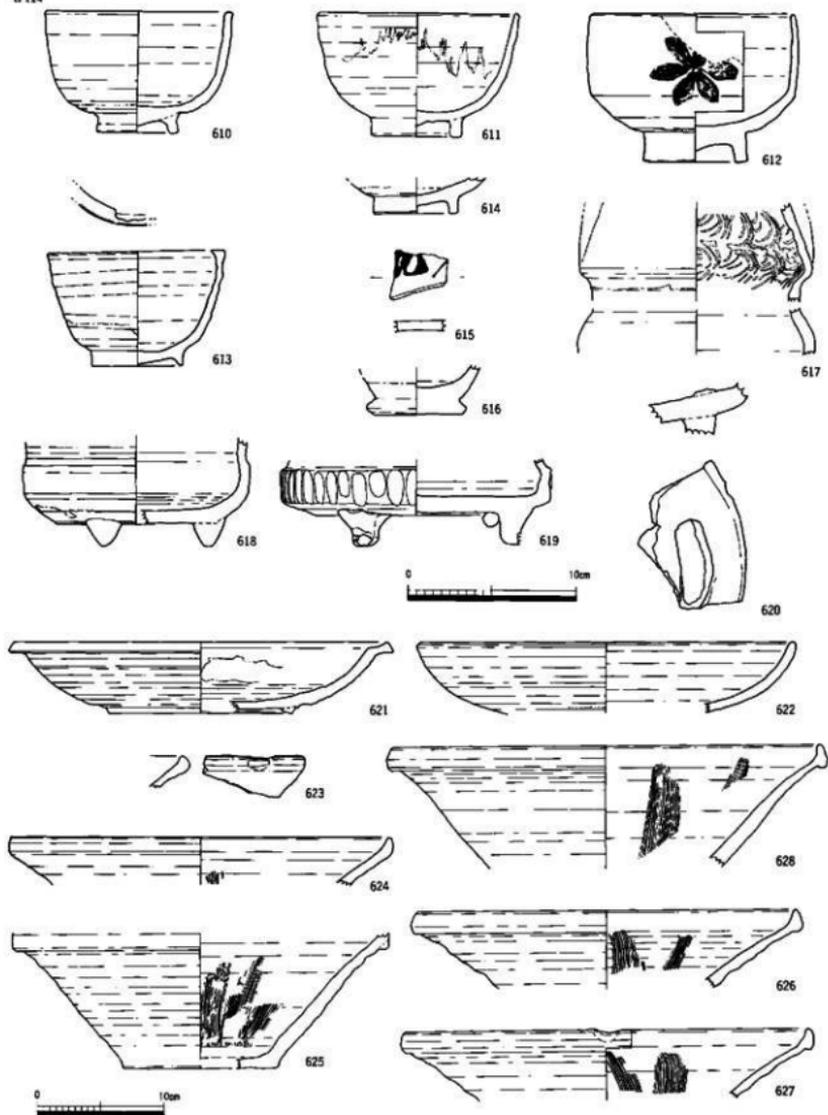
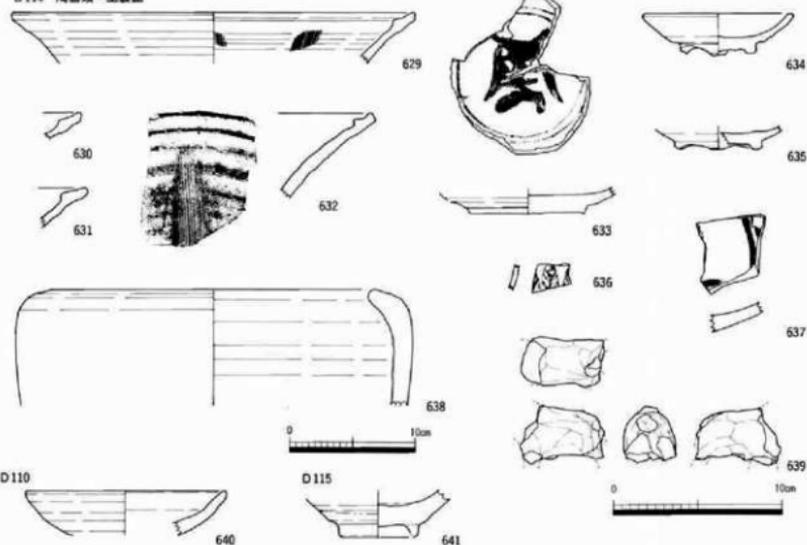


图243 遺構出土遺物 (中近世) ㊟ (S = 1/3、621~628は S = 1/4)

- 連房陶器 (601~603・609~615・618~621・633) 601は志野丸皿である。底部外面に煤が付着している。底部外面周縁を除き長石釉が施釉される。連房第1~2小期に比定される。602は折縁鉄絵皿である。口縁部の内外面に灰釉、内面に長石釉が施釉され、外面の胴部以下が露胎となる。内面見込に重ね焼きの痕跡が残る。連房第2~3小期に比定される。603は鉄絵皿である。口縁部に4ヶ所の輪花がみられ、見込には簡略化された2段の蘭竹文が描かれる。連房第2小期に比定される。609は天日茶碗である。連房第1小期に比定される。610・614は丸碗である。610はやや胴部下半に丸みがあり、身が深い。白みがかった灰釉が底部外面周縁以外に施釉される。614は底部外面周縁が露胎となる。いずれも連房第2~3小期に比定される。611は尾呂茶碗である。口縁部の内外面にうのふ釉が施釉される。連房第3~4小期に比定される。612は腰折碗である。口縁部が若干内側に内傾する。花文は胴部のほぼ中央に付され、底部外面周縁を除き、光沢のある長石釉が施釉される。連房第3~4小期に比定される。613は鉢類と考える。内側に肥厚した口縁の一部にヘラ切りによって整形した片口が存在する。胴部下半から底部にかけて露胎になる。615は向付類の底部破片と考える。内面に鉄釉で描かれた模様、文字か絵であるかは不明である。連房第1~2小期に比定される。618は袴腰形の香かである。底部外面周縁が露胎となる。連房第3小期に比定される。619は水差の可能性があり。胴部外面に丸ノミのような工具でつけられた窪みがめぐる。底部には大型の輪ドナのようなものが付着している。灰釉を全面に施釉している。連房第2小期に比定される。620は足のつく水盤と考えられる。見込に重ね焼きの痕跡が残る。連房第2小期に比定される。621は折縁鉢である。胴部に丸味があり、口縁部が屈曲する。内面に緑釉が流し掛けられる。口縁部は外側に強く折り返されて、端部は面取りされる。緑釉は胴部内面の中程に流し掛けられる。連房第1小期に比定される。633は鉄絵皿である。見込の中央には大きく「風」の文字と二重の圓縁が描かれている。連房第2小期に比定される。
- 唐津 (617) 617は水指であろうか。わざとゆがんだ器形に仕上げたものと考えられる。当て具痕は同心円ではなく、半円と弧を組み合わせた形状をとる。屈曲部にも当て具痕が残り、整形時のものではなく、文様効果をねらったものかもしれない。内外面ともに胴過半が露胎となり、上半には横耳がつく。
- 中国陶磁器 (634~636) 634・635は白磁の皿である。634は見込に高台と同じ形の目跡がある。焼成が不良で胎土が黄色味がかっている。635は見込の目跡がなく、自然釉が付着している。重ね焼きの最も上段にあった個体と思われる。森山分類のD群に比定される。636は染付碗である。外面に葉のような図柄が呉須絵で描かれる。
- 肥前 (637) やや大型の染付皿と思われる。見込の表面には気泡抜けのような痕跡がいくつもみられる。内面の模様は何が描かれているか不明である。
- 瓦質土器 (638) 内面に煤が付着しており、特に口縁部内面に著しい。被熱のため非常に細かく破損している。酸化焼成で赤っぽい胎土の色調を呈する。
- 大型土製品 (639) 鷺山仙道遺跡に出土事例がある。全身を指ナで調整しており、頭と足の先端が欠損している。一方にある粘土の固まりは尾を表現したものであろう。
- D110 640は連房陶器の反皿である。胴部外面の灰釉が拭い取られる。連房第3小期に比定される。
- D115 641は連房陶器の丸碗である。底部外面周縁が露胎となる。連房第1小期に比定される。

不明遺構

B 114 陶器類・土製品



D 110



640

D 115



641

清跡

A 1 土器類・陶器類

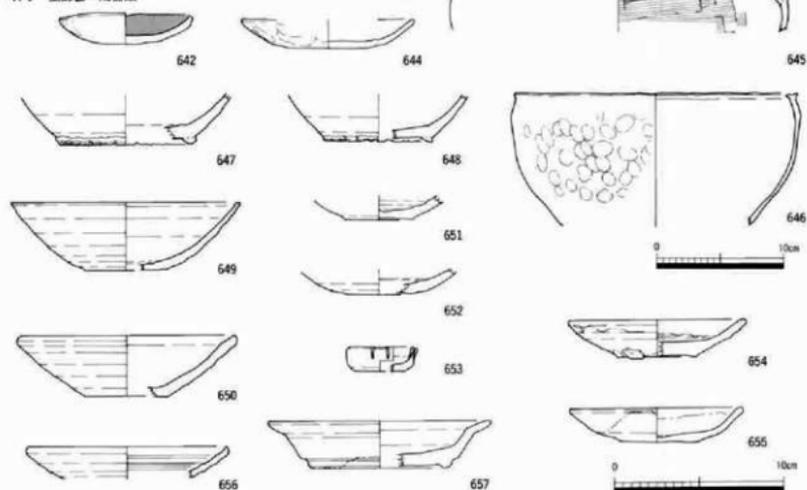


図244 遺構出土遺物 (中近世) ㉗ (S = 1/3、629~632・638・645・646はS = 1/4)

溝跡 (図245～259)

A 1 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに記載する。

中世土師器 (642～646) 642～644は土師器皿である。642は底面に板ナデ、643は底面にハケ痕が残る。645・646は内耳碗である。645は646より厚手で胎土も異なる。外面に煤が付着している。646は外面の指痕が顕著であり、口縁端部を内外面に肥厚して面取りしている。

白瓷系陶器 (647～653・656) 647～652・656は碗である。647を北部系5型式、648を北部系6型式の白土原1号窯式、649・650・652を北部系11型式の臨之島3号窯式、651・656を北部系11型式の生田2号窯式に分類した。656は胎土が精良である。653は北部系白瓷系陶器の入子である。口縁部の片口はヘラで押さえて作出している。

古瀬戸 (654・655・662～665・667・670) 654・655は縁軸小皿である。654は内外面に灰釉が漬掛されており、胎土焼成が山茶碗に類似している。古瀬戸後IV古期に比定される。655は破損断面に漆が付着している。見込には輪状の重ね焼き痕が残る。口縁部内外面に鉄釉が施釉される。古瀬戸後IV新期に比定される。662・663は有耳壺である。662は内面が露胎となり、663は内外面に灰釉が施釉される。いずれも古瀬戸後III～後IV期に比定される。664は却目付大皿である。口縁端部が外側に拡張して垂れる。古瀬戸後IV新期に比定される。665は茶釜である。図示していないが、同一個体である破片に煤が付着している。古瀬戸後IV古～後IV新期に比定される。667・670は播鉢である。667は5類、670は3類に分類した。

大窯 (658～660・666・668・669・672) 658～660は天目茶碗である。658は胴部に丸縁があり口縁部の外反が弱い。大窯3期後半に比定される。659は胴部下半が直線的に開き、口縁部の外反が強い。胴部外面下半から底部にかけて露胎となる。660は659と似た形態を取る。659は大窯4期前半、660は大窯4期後半に比定される。666は浅鉢である。鉄絵は長石釉を施す前に描かれており、長石釉はほぼ全面にかかる。大窯4期後半に比定される。668・669・672は播鉢である。668は口縁端部が内側に折り返され、やや丸みを帯びており、頂部がやや窪む。7B類に分類した。669は9A'類に分類した。672は播鉢の底部である。非常によく使い込まれており、内面が摩耗している。大窯2～3期に比定される。

連房陶器 (657・661・671) 657は折縁皿である。長石釉が底部外面から高台にかけてを除いて施釉される。畳付が摩耗している。連房第1～2小期に比定される。661は丸碗である。口径に比して器高が低い。671は播鉢である。連房第2小期に比定される。

常滑 (673) 673は甕の底部である。目立った調整は見られない。

中国陶磁器 (674～676) 674は白磁の皿である。口縁部が端反になる皿と考える。釉はやや黄色味がかっている。高台端部外面釉を掻き取る。森田分類のE群に比定される可能性がある。675は龍泉窯系青磁碗である。外面に連弁文が施文される。破片周縁に打ち欠いた痕跡が残る。上田分類のB I'あるいはB II類に比定される。676は染付皿である。畳付がヘラ削りされており、高台内面に3ヶ所のピン痕が残る。見込には花文、高台内には「大明年造」が描かれている可能性がある。畳付から高台内部がわずかに露胎となる。

A 2 A 1と同様に多数の遺物が出土しているため、種別ごとに記載する。

中世上師器 (677～704) 677～699は土師器皿である。677～679はいずれも小型品で内面の調整が不

清跡

A 1 土師器・陶器類

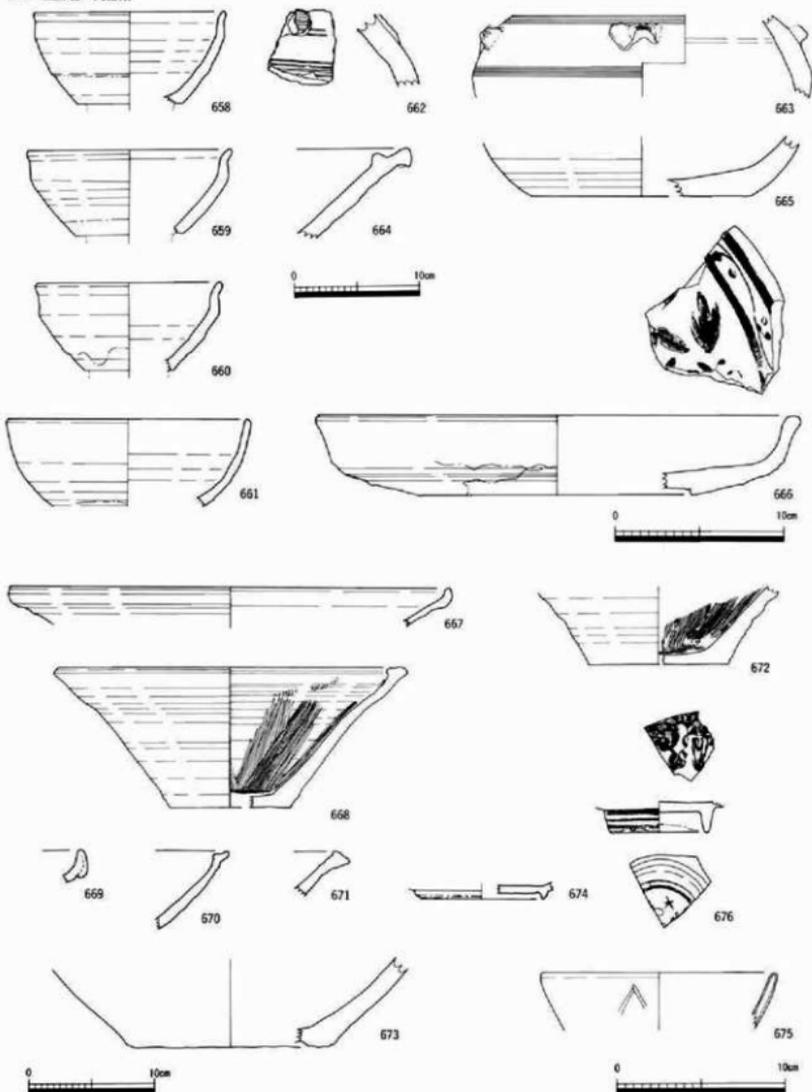


図245 遺構出土遺物(中近世)㊟ (S=1/3、664・667~673はS=1/4)

明瞭である。680は外面に多数の指頭痕が残っている。口縁部には底部からみて時計回りに指頭痕が残っており、またこれに対応するように内面にも指頭痕が存在するため、口縁部端部をつまんで整形したと考える。681は外面に煤が付着している。682は胴部から口縁部にかけて、底部からみて反時計回りに指頭でなで上げるような調整を施している。686は胴部と底部の境が明瞭であり、内面の調整が同じサイズの他の土師器皿より丁寧に行われている。687は外面に格子状の細かい縦横痕が残っており、布を使って調整を行っていた可能性がある。688は、口縁部において弧状の内面ナデが強く施されておりゆがんでいる。689は口縁部の器壁が若干厚い。内面の調整は不明瞭である。691は、外面の口縁部整形のための指頭痕が底部からみて時計回りにめぐる。内面の口縁端部には煤が付着している。693は口縁部外面に一部横ナデが残る。底部内面と口縁部に煤が付着する。695は、外面に同心円状の指頭痕が底部からみて反時計回りにめぐる。内面のナデは摩耗のため不明瞭で判然としない。696は内外面に横ナデが見られる。698は内面のナデが2段になっており、このうち腰部のナデは底部と口縁部の境を明瞭にするために施されたものと思われる。699は口縁部内面に横方向のナデが施されるが、内底面のナデはない。口縁部ナデとは別のナデがみられるが、腰部の形を整えるためのものと思われる。701・702は内耳鍋である。内面には横方向の板ナデが施されるが、外面に濃密に煤が付着しており、調整は不明である。耳部は内面から粘土紐を貼り付け、外面に向けて器壁を押し出して成形している。702は701の足の可能性がある。外面に煤が付着している。703・704は茶釜である。704は703の同一個体であり、羽付の釜になるとと思われる。胴部の内外面に横方向の板ナデが施される。煤は内外面に付着しているが、口縁部には達していない。

白瓷系陶器(705~713) 705は皿である。器壁がやや厚めで、底部外面にわずかに段が残る。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。706~713は碗である。706は底部内面外縁に輪状の窪みが見られる。南部系6型式に分類した。707・708は北部系5型式としたが、707のほうが厚手で高台径が大きい。709~711は北部系6型式の白土原1号窯式、712は北部系7型式の明和1号窯式、713は北部系10型式の大洞東1号窯式にそれぞれ分類した。

古瀬戸(714~716・729・732・734~737・741・745) 714は縁軸小皿である。胴部から口縁部にかけて直線的に開く。古瀬戸後Ⅲ期に比定される。715・716は卸皿である。715は灰釉が口縁部周縁のみ施軸される。古瀬戸後Ⅳ古期に比定される。716は岡の左から右に向かって卸目を入れた後、上下の卸目を入れている。729は天日茶碗である。底部外面周縁の錆軸が濃い。古瀬戸後Ⅳ新期に比定される。732は折縁深皿である。外側に沿った口縁部にへら等の工具で連続して切り込みを入れて装飾している部分は輪軸の可能性がある。内面には隆帯を貼り付けている。内外面に灰釉が施される。古瀬戸中Ⅰ~Ⅱ期に比定される。734~737・745は摺鉢である。734は外面の回転ナデが顕著である。口縁部分類の4類に分類した。735~737は口縁部分類の5類に分類した。741は内耳鍋である。古瀬戸後Ⅳ古期に比定される。

大窯(717~722・724・727・728・731・733・738~740・743・744) 717は丸皿である。外面胴下部から口縁部にかけて若干丸みがある。外面はすべて回転削りが施される。灰釉全面施軸である。底部外面の高台内に輪ドチ痕が残る。大窯2期に比定される。718は灯明皿である。焼締陶器であり、無軸である。大窯3期に比定される。719~721は端反皿である。719は口縁部が若干外反し、外面胴下部に回転削りによって明瞭な稜がつく。灰釉全面施軸で見込に印花文がみられる。大窯2期後半に比定さ

清鈴

A 2 土器器類

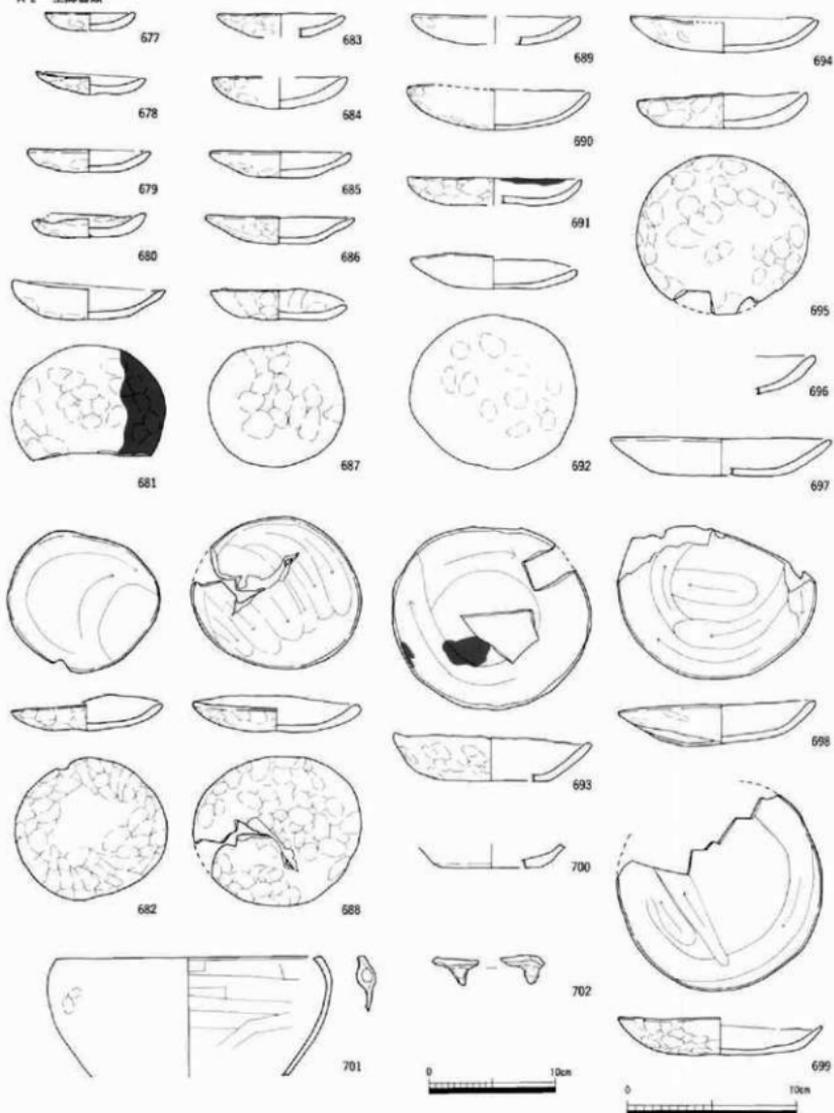


図246 遺構出土遺物（中近世）㊟（S=1/3、701・702はS=1/4）

清野

A 2 土師器・陶器類

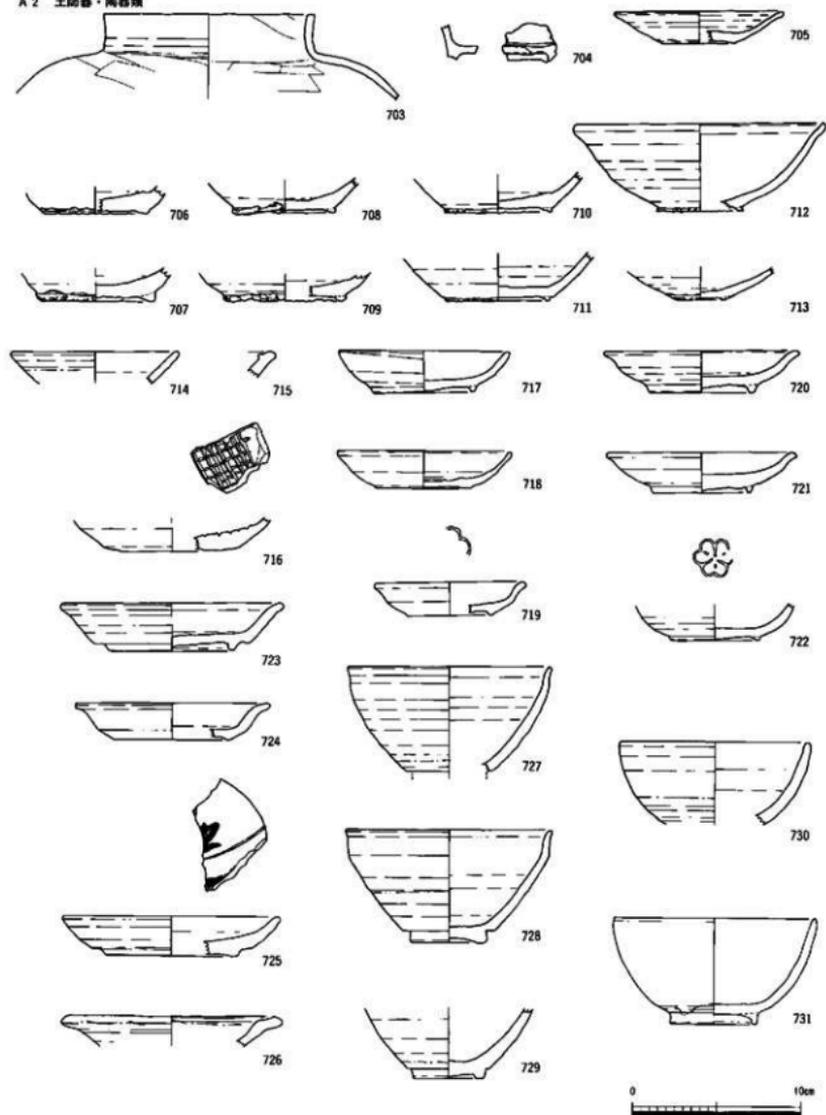


図247 遺構出土遺物（中近世）㊟（S = 1/3）

清葬

A 2 陶器 陶磁器類・土製品

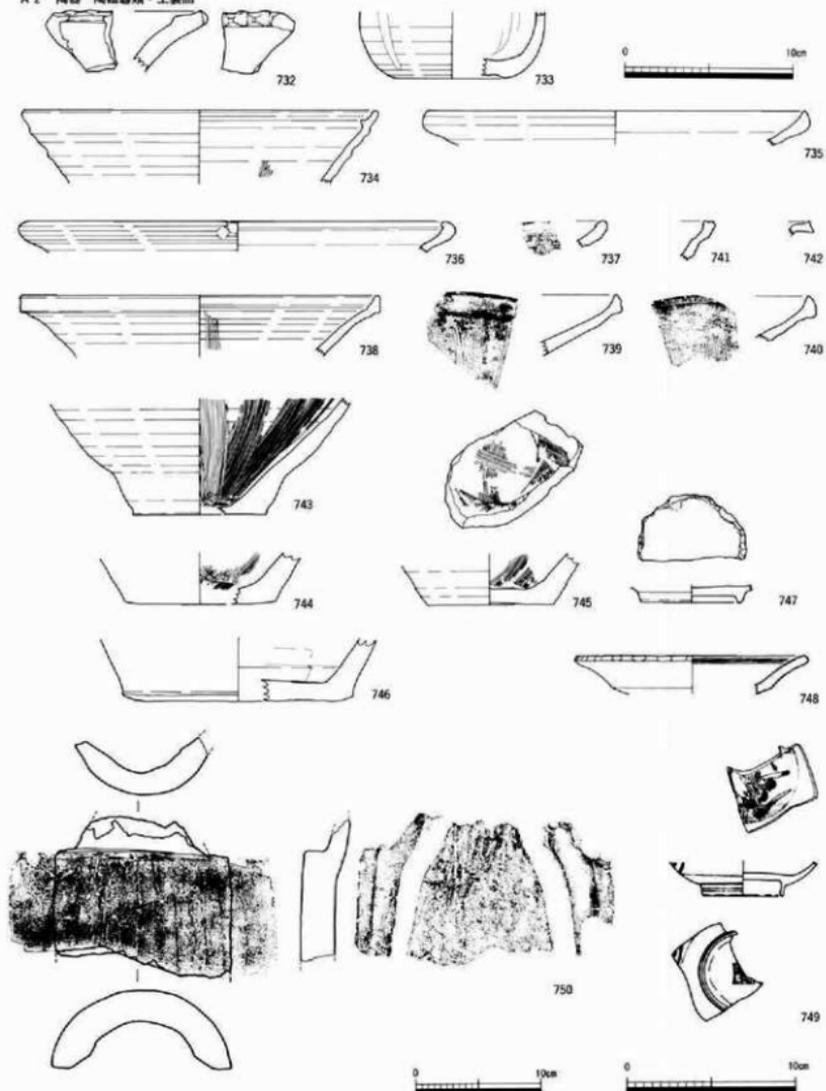


図248 遺構出土遺物（中近世）㉑（S=1/4、732・733・747・748・749はS=1/3）

れる。720は胴部下半の丸みが弱く、扁平な感じを受ける。灰釉全面施釉であり、高台内に輪ドチ痕が残る。大窯1期に比定される。721は胴部下半に丸みがなく、扁平にみえる。胎土は精良で灰釉が全面に厚く施釉されている。大窯1期に比定される。722は端反皿且丸皿と考える。灰釉全面施釉であり、高台の内側に輪ドチの痕跡が残る。大窯1～2期に比定される。724は椀皿である。大窯2期に比定される。727・728は天目茶碗である。727は回転ナデの痕跡が細かく、器壁も薄目でであり、全体的に丁寧な作りである。口縁端部の屈曲が強い。底部外面周縁の錆釉が濃い。大窯1期に比定される。728は口縁部を外側に明瞭に屈曲させており、比較的器高が高い。また底部外面周縁の錆釉が濃い。大窯2期に比定される。731は丸碗である。釉薬は漬け掛けで施釉され、底部外面周縁が露胎となる。大窯3期に比定される。733は黄瀬戸の向付である。内面に菊里のような装飾が施されており、内面の出っ張った部分に対応する位置の外面に沈線が刻まれる。外面の回転削りは比較的丁寧に行われ、灰釉が施されている。大窯4期に比定される。738～740・743・744は播鉢である。738は口縁端部を若干内側に折り返している。口縁部分類の6A類に分類した。739は口縁端部付近まで播目が引かれている。口縁部分類の6A類に分類した。740は9A'類に分類した。744は底部であり、使い込まれて摩耗している。連房陶器(723・725・726・730・742) 723は反皿である。灰釉を全面に施釉しているが、高台内の釉は掻き取られている。連房第3小期に比定される。725は鉄絵皿である。見込に鉄絵で何が描かれているかは不明である。連房第2小期に比定される。726は折縁皿である。内外面に露胎部がみられるが、釉薬がはがれ落ちたためであり、本来は全面施釉だったと考える。連房第2～3小期に比定される。730は丸碗である。胴部下半から底部にかけて露胎となる。連房第1～2小期に比定される。742は播鉢である。11縁部分類の14C類に分類した。

常滑(746) 746は甕の底部である。内面に口縁部からみて反時計回りに板ナデの痕跡が残る。

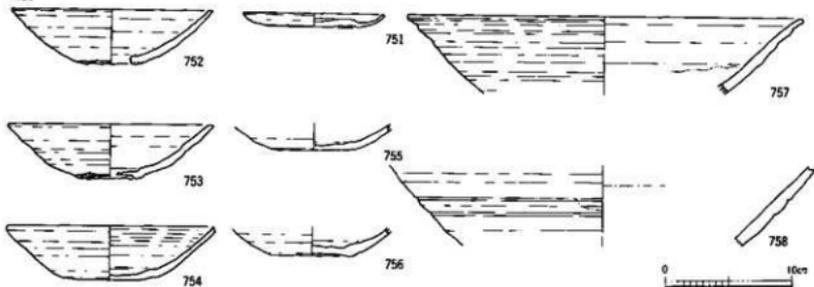
中国陶磁器(747～749) 747は白磁の皿である。破損断面に人為的な加工痕がみられ、円盤状に整形したものと思われる。胎土は緻密で精良であり、釉は全面に施釉される。森田分類のE群に比定される可能性がある。748は龍泉窯系青磁皿の稜花皿である。口唇部に規則的な抉りを施し、口縁内面に4条の細い平行沈線が引かれている。胎土がやや荒く、釉が厚めで発色が悪い。749は中国陶磁器の染付碗である。いわゆる殿頭芯の形状を持つ染付碗である。器壁が薄手で呉須の発色がよい。小野分類の碗E群に比定される。

瓦 750は丸瓦である。凸面に縦方向のナデ痕が残る。

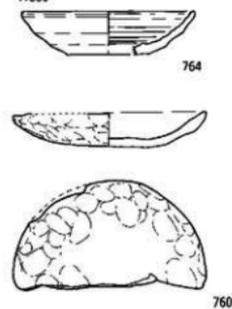
A21 751は白瓷系陶器の皿である。扁平で器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。752～756は白瓷系陶器の碗である。752は口縁端部が面取りされる特徴的な形状をもつ。底部内面には明瞭な段がつく。北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。753の底部内面にも明瞭な段がみられる。北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。754・756は北部系11型式の龍之島3号窯式、755は北部系11形式の生田2号窯式に分類した。757は古瀬戸の直縁大皿である。灰釉は内外面に施されるが、内面の釉は2度施釉されている。古瀬戸後III期に比定される。758は古瀬戸の大皿・深皿類である。外面に沈線状の回転痕が残り、工具を使って整形した可能性がある。外面に煤が付着する。古瀬戸後IV古～後IV新期に比定される。

A277 759は白瓷系陶器の碗である。北部系11型式の龍之島3号窯式に比定される。

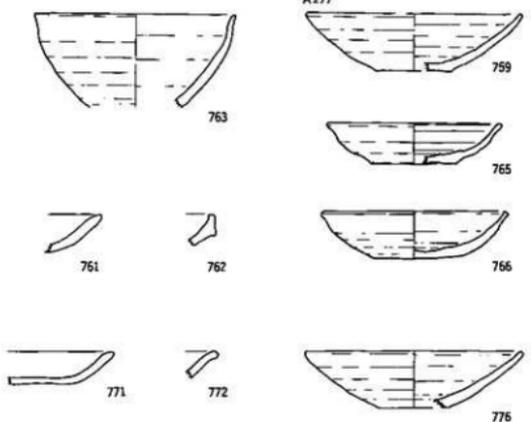
清鉢
A21



A380



A277



A400

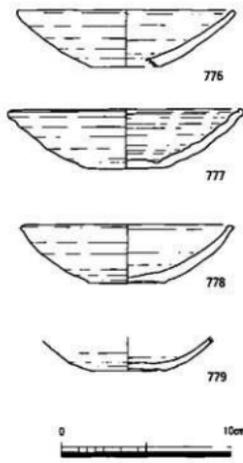
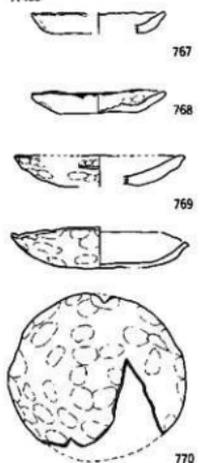


図249 溝橋出土遺物（中近世）㊸（S = 1/3、757・758・762はS = 1/4）

A380 760・761は土師器皿である。760は内外面に煤が付着しており、灯明皿と考える。761は口縁部内面に横ナデを施すタイプであり、口径が11cm程度の中型品と思われる。762は大窯の擋鉢である。大窯2期に比定される。763は大窯の天目茶碗である。口縁部の外反は弱めで、端部が若干尖り気味である。底部外面周縁の銷軸は濃い。大窯1期に比定される。764～766は大窯の灯明皿である。764・766が焼締陶器であり、釉薬が施釉されていない。766はやや胴部下半に丸みがあり、身が深い。764が大窯2期に、766が大窯3期に比定される。765は陶胎であり、銷軸が全面に施される。大窯4期に比定される。

A400 767～771は土師器皿である。767は口縁部の折り返し部分が短い。内面のナデは不明瞭である。768は口縁端部内外面に煤が付着しており、灯明皿と考える。770は、外面の指頭痕列が底部からみて時計回りに残る。内面のナデ調整は不明瞭である。771は外面に多量の煤が付着している。直径10cm前後の製品と思われる。772は不明土師器である。口縁部が外反する器形と考えられるが、時期や器種は不明である。773は白瓷系陶器の皿である。器高が低く、器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。774～779は白瓷系陶器の碗である。いずれも北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。780は大窯の灯明皿である。焼締陶器であり、釉薬が施釉されていない。大窯2期に比定される。781は大窯の天目茶碗である。口縁部がやや外反し、端部にやや厚みがある。底部外面周縁の銷軸は薄い。大窯3期に比定される。782は古瀬戸の双耳小壺である。内面の回転ナデ痕が顕著であり、底部外面周縁が露胎となる。古瀬戸後期に比定される。783は古瀬戸の祖母懷壺である。胎土が緻密で重量感がある。耳が剥落して残存していない。古瀬戸後期に比定される。784は大窯の擋鉢である。口縁部分類の9A類に分類した。785は連房陶器の擋鉢である。口縁端部が肥厚し、地面とほぼ平行に面取りされる。口縁部分類の14C類に分類した。連房第1小期に比定される。786は古瀬戸か大窯の擋鉢である。外面は胴下部以下の釉を掻き取っており、内面は窯道具を置くためか、花びらのように施釉しない部分を残している。古瀬戸後IV新～大窯1期に比定される。

B2 787は白瓷系陶器の碗である。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。788は大窯の丸皿である。やや胴下部が張り、そこから直線的に開く。ソギに接する二重円の沈線文がある。大窯2期前半に比定される。789は古瀬戸の深皿あるいは大皿である。内面が胴部から底部にかけて摩耗しているが、底部中央にはみられない。古瀬戸後IV古～後IV新期に比定される。790は古瀬戸の擋鉢である。口縁部分類の5類に分類した。791は平瓦である。凸面にハナレ砂が付着している。

B5 792は連房陶器の折縁鉢である。621とほぼ同じ施釉がなされるが、口縁部形状が異なる。縁軸は口縁部から弧状に流し掛けられる。連房第2小期に比定される。

B128 793～795は土師器皿である。794は、内面に幅約1.2cm程度の板状工具を用いて不定方向にナデを施す。中央部のナデ痕は消されている。795は内面の広い範囲に煤が付着しており、灯明皿の可能性がある。内面の横ナデは口縁部周辺のみにも施され、広い範囲に一方のナデが見られる。796は古瀬戸の仏具である。底部外面周縁が露胎となる。古瀬戸後IV新期に比定される。797は古瀬戸の擋鉢である。口縁部分類の5類に分類した。798は大窯の擋鉢である。口縁部分類の10B類に分類した。

B129 799は白瓷系陶器の碗である。北部系8型式の火畑大洞4号窯式に分類した。800は大窯の稜皿である。大窯3期に比定される。801は古瀬戸の片口鉢である。口縁端部に丸みがあり、若干肥厚している。白瓷系陶器の南部系6型式に併行する。

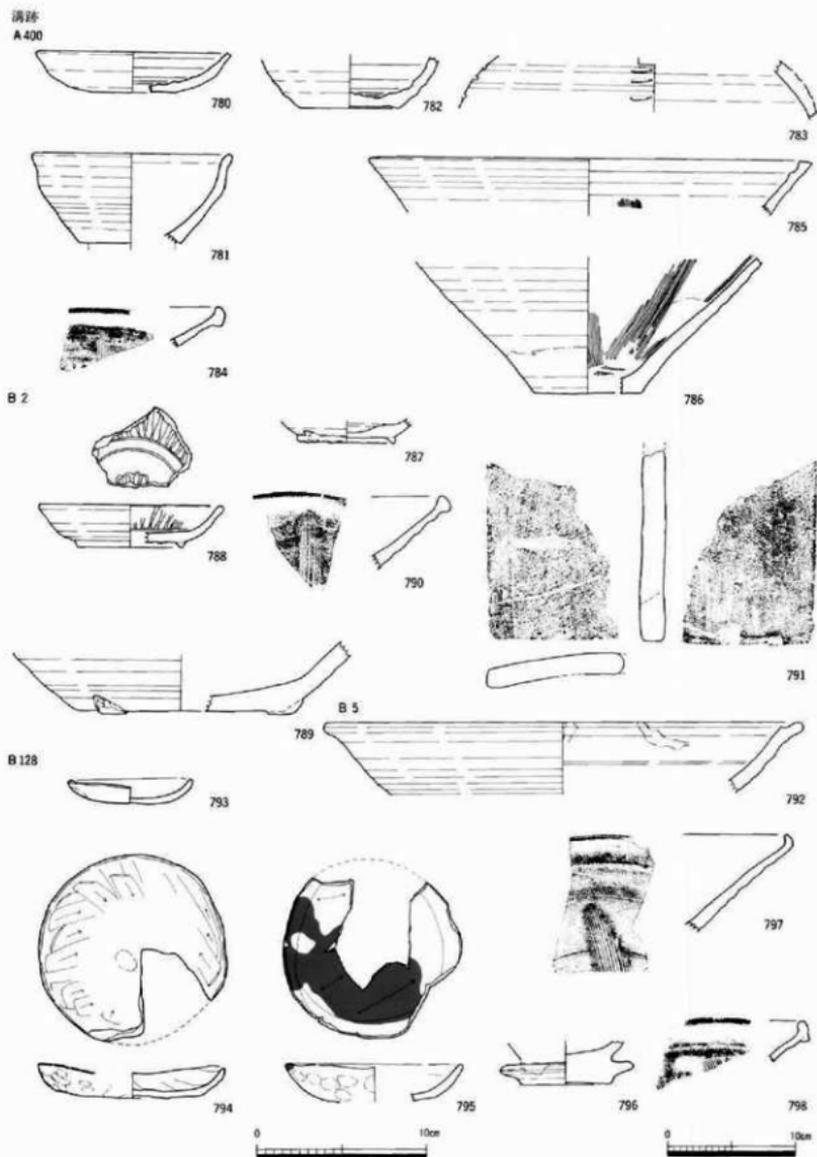


図250 遺構出土遺物(中近世) ㊦ (S = 1/3, 782~786・789・790・792・797・798はS = 1/4)

B130 802は白瓷系陶器の碗である。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。803は大窯の天目茶碗である。底部外面周縁が露胎となる。大窯3期に比定される。804は大窯の播鉢である。口縁部分類の10A類に分類した。805は古瀬戸の耳付水注である。胴部側面に同一器種を並べて焼成した痕跡と考えられる接着痕がある。鉄軸は一部の垂れを除いて底部外面が露胎となる。古瀬戸後IV古期に比定される。

B134 806~818は土師器皿である。806~808はB134から出土した中でも小型の一群である。809は、主に指頭によって口縁部と底部の境が明瞭な器形に整形されている。810は見込み部分に、墨書で描かれることが多い輪宝³⁾を模した可能性がある線刻が見られる。811は内面のナデ調整に工具を用いている可能性がある。813は内面の胴部と底部の境に、一部横ナデが見られる。また内面に整形時の切り込み痕が残る。814は内面にF2類のナデが施されるが、口縁端部にも半周程度横ナデが見られる。815は底部内面の周縁に、門を描くように爪の痕が残る。817は、B134から出土した土師器皿が内面の横ナデ調整を口縁部のみ施すものが多い中で、唯一胴部と底部の境までナデが及んでいる。819は中世土師器の内耳鍋である。煤は外面のみに付着し、内面には見られない。820・821は中世土師器の茶釜である。820は口縁部が内傾し、内外面に回転ナデを施している。821は茶釜の肩部破片と思われる。把手は指ナデで整形されており、煤は把手の下に集中的に付着している。煤付着部分の内面は被熱のためか表面が剥落している。822~825は白瓷系陶器の碗である。822は北部系5型式、823・824は北部系6型式の白土原1号窯式、825は北部系7型式の明和1号窯式に分類した。826・827は大窯の灯明皿である。焼締陶器であり釉薬が施軸されていない。827は底部内面に煤が付着している。いずれも大窯3期に比定される。828は大窯の内壳皿である。口縁部がわずかに外反し、器高が低く、胴部に丸みがない。高台内には輪ドチの痕跡が残る。釉のぬぐい取りによって、見込部分のみ露胎となる。大窯3期後半に比定される。829は古瀬戸の平碗である。口縁端部はやや尖り気味で胴部にやや丸みがある。胴部下半の外面が露胎となる。古瀬戸後IV新期に比定される。830は大窯の茶入である。口径が小さく胴が張る器形をもつ。大窯1~2期に比定される。831は古瀬戸の小型の桶と考える。底部外面周縁が露胎となる。古瀬戸後IV新期に比定される。832~834は古瀬戸の片口鉢である。832は胴部が直線的に開き、高台が削がれている。白瓷系陶器の南部系9~10型式に併行する。833は口縁部が外反し、端部は丸く収められる。胴下部内面が摩耗している。白瓷系陶器の南部系4型式に併行する。834は胴部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部は肥厚している。端部は丸く収める。胴部内面が摩耗している。白瓷系陶器の南部系6型式に併行する。835は大窯の播鉢である。口縁部分類の6A類に分類した。836は中国陶磁器の龍泉窯系青磁碗である。胴部から口縁部にかけて直線的に広がる。胴部外面に幅の広い蓮弁文がみられる。上田分類BⅠあるいはBⅡ類に比定される。

B139 837・838は白瓷系陶器の碗である。837は北部系5型式、838は北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。839は古瀬戸の片口鉢である。B139とB129から出たものが接合した個体である。口縁端部に丸みがあって若干肥厚する。胴部下半から底部にかけての内面が摩耗している。白瓷系陶器の南部系6型式に併行する。840は常滑の壺である。口縁部縁帯の幅が狭く、下端の垂れも短い。頸部と胴部内面の境目に指頭痕が集中し、粘土紐の接合痕が残る。自然釉が付着しておらず、還元焼成している。常滑編年の5型式に比定される。841は中国陶磁器の龍泉窯系青磁碗である。外面に鎔のない蓮弁文が施される。釉薬はやや黄色味がかっており非常に薄い。上田分類BⅠあるいはBⅡ類に比定され

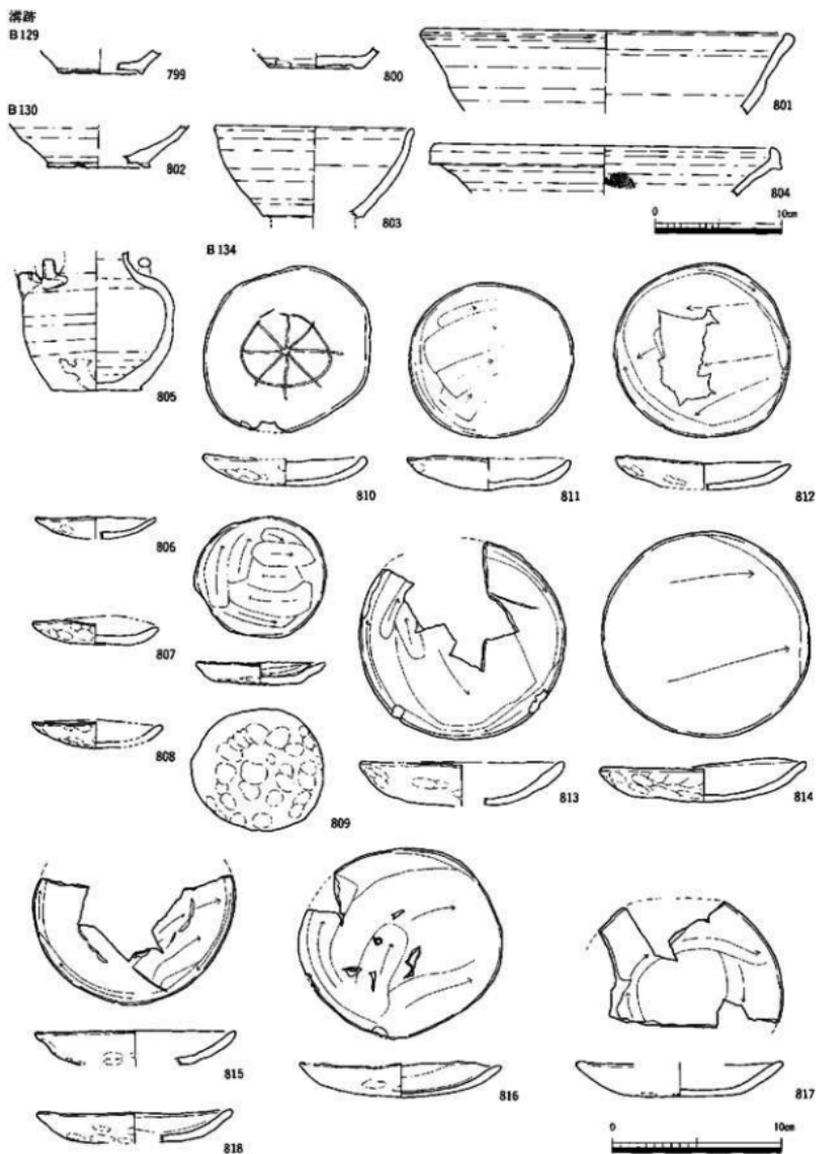


图251 遺構出土遺物(中近世)㊦ (S = 1/3、801・804はS = 1/4)

清跡
B134

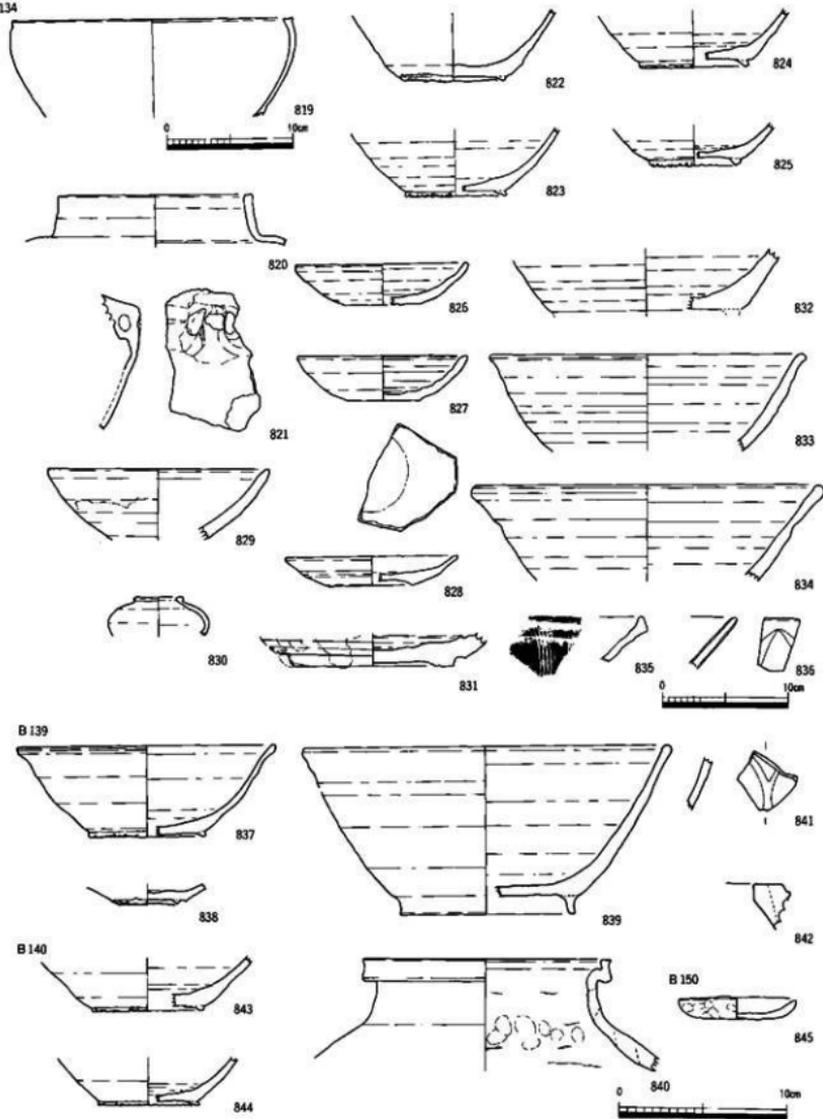


図252 遺構出土遺物（中近世）㊟（S = 1/3、819・832～835・839・840はS = 1/4）

る。842は瓦質土器の火鉢である。口縁下部下外面に突帯があり、印刻による模様があったことが予想される。全体に丁寧なつくりであるが、酸化焼成している。

B140 843・844は白瓷系陶器の碗である。843を北部系5型式、844を北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。

B150 845は土師器皿である。小型品で内面のナデは不明瞭である。

B179 846・847は土師器皿である。847は胎土が緻密で焼成がよい。内外面の同じ場所に炭化物が付着している。846・847ともに近世のものである可能性がある。848は連房陶器の菊皿である。胴下部に丸みがなく、中央より上から若干内湾する。外面には縦位の刻みによる沈線が引かれる。灰釉は底部から胴部下半が露胎となる。連房第4小期に比定される。849は連房陶器の丸碗である。器壁はやや薄目であり、胴部から口縁部にかけて直線的に開く。連房3～4小期に比定される。850は大窯の播鉢である。6A類としたが、縁帯と口縁端部の間が段になる特徴がある。851・852は連房陶器の播鉢である。ともに口縁部分類の14C類に分類した。851は口縁部内外面を肥厚し、端部を面取りしている。853は常滑の甕である。縁帯下部と口縁部が接しないタイプで、縁帯上部の張り出しが大きい。常滑編年の8型式に比定される。854は肥前の染付碗である。口縁部内面に四方博文がみられる。18世紀代と考える。

B262 855～860は土師器皿である。855はB262唯一の小型品で、内面を6の字状のナデで調整している。856は外面の一部に横ナデが施される。859は外面に横ナデを施し、内面のナデは2段（口縁部、胴部・底部の境）に見られる。860は内面と口縁部外面の広い範囲に煤の付着が見られる。内面の胴部と底部の境に指痕が残る。また、外面に成形時の切り込み痕が残る。口縁部の内外面に横ナデ、底部内面に一方向のナデが施される。861・862は白瓷系陶器の碗である。内面の工具によるナデが一部ナデ消しされている。862は焼成が不良である。ともに北部系11型式の生田2号窯式に分類した。863は古瀬戸の天目茶碗である。口縁端部が強く外反する。胎土は精良で褐灰色を呈し、手に取ったとき重量感がある。高台に窯道具と見られる付着物がある。底部外面周縁の銷釉は濃く、紫色がかかった色調を呈する。古瀬戸後IV新期に比定される。864は器種不明であるが、連房陶器と考える。内面には焼成時の付着物が多く見られる。外面に1ヶ所へら刻みがある。底部外面周縁の釉をぬぐい取っている。865は大窯の播鉢である。口縁部分類の6A類に分類した。866は中国陶磁器の染付碗である。器壁が薄く、高台が断面三角形になる。

B263 867は大窯の播鉢である。口縁部分類の14C類に分類した。

B439 868は大窯の丸皿である。口縁部がわずかに外反する。胴部に丸みがあり、身がやや浅い。大窯2期に比定される。

B743 869は白瓷系陶器の碗である。北部系8型式の大畑大洞4号窯式に分類した。870は連房陶器の丸皿である。胴部に丸みがあり、口縁部が外反するが、それほど顕著ではない。底部内面周縁に重ね焼き痕が残る。高台内に煤が付着する。胴部から底部外面にかけて露胎となる。連房第4～5小期に比定される。871～873は連房陶器の反皿である。871は口縁部がやや外反する。底部の内外面に円錐ピンの痕跡が3ヶ所ずつ残る。高台内が露胎となる。872は口縁部がわずかに外反する。873は胴部から口縁部にかけて外反しながら広がる。内面にも削り調整を行っており、底部中央がやや窪む。内面には、円錐ピンの痕跡が5ヶ所残る。高台周縁が露胎となる。871・872は連房第3小期に、873は連房第

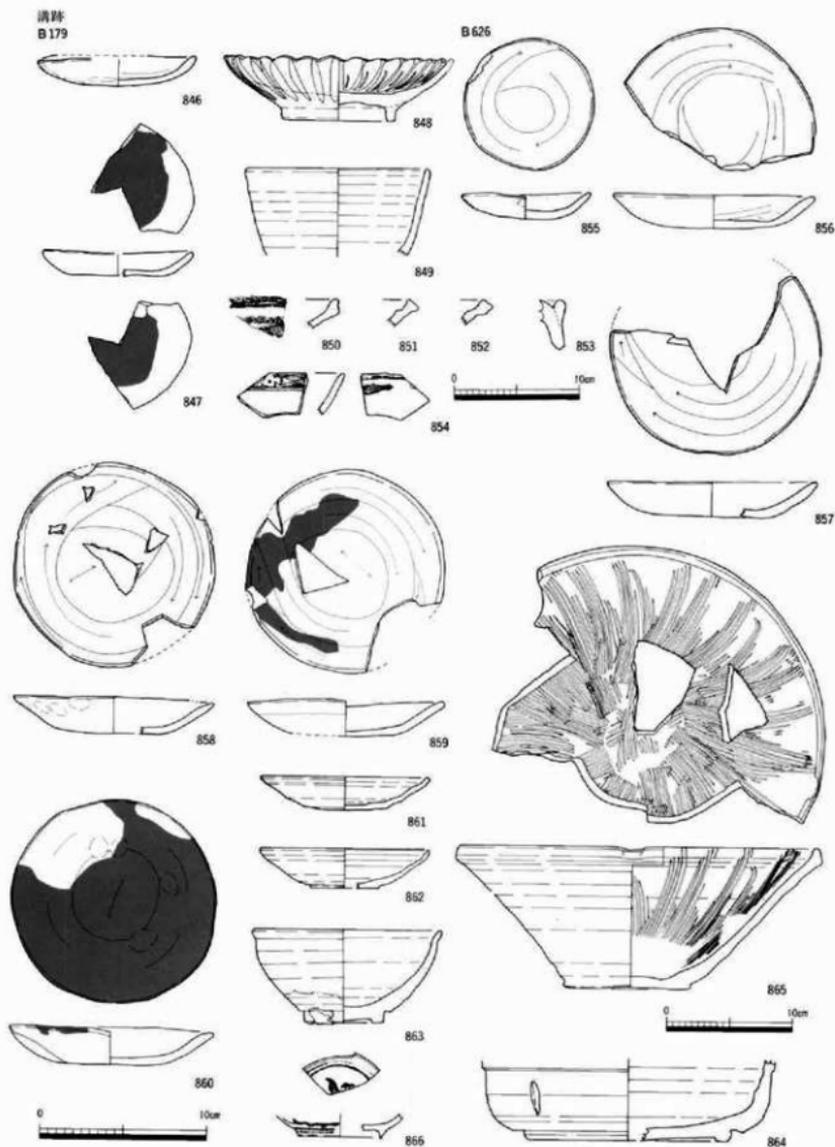


図253 遺構出土遺物（中近世）㊦（S=1/3、850~853・865はS=1/4）

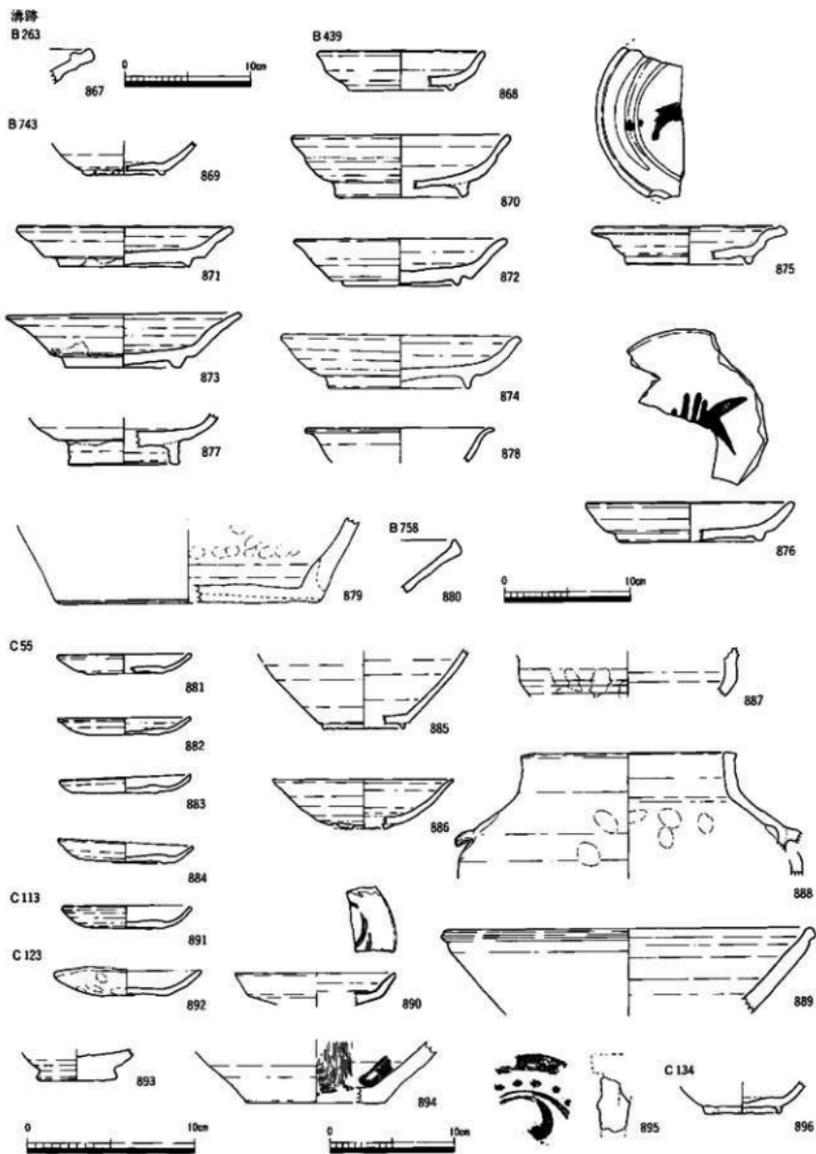


図254 遺構出土遺物（中近世）㊦（S = 1/3、867・879・880・889・894・895は S = 1/4）

4小期に比定される。874は連房陶器の端反皿である。口縁端部がわずかに外反する。見込には重ね焼きの痕跡が残る。胴下部から底部外面にかけて露胎となる。連房第1小期に比定される。875は連房陶器の折縁鉄絵皿である。内面に二重の重ね焼き痕が残る。おそらく、同一器種の口縁部裏と畳付が重なっていたと考える。胴部から底部外面にかけて露胎となる。連房第2～3小期に比定される。876は連房陶器の鉄絵皿である。見込の蘭竹文はかなり崩れている。連房第2小期に比定される。877は連房陶器の腰折碗である。高台が高く、内外面に回転ナデ痕が残る。連房3～4小期に比定される。878は中国陶磁器の白磁皿である。胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反する。森田分類E群に比定される。879は瓦質土器の火鉢である。粘土の織目や指頭痕が明瞭に残る。底部には粘土板が張り付けられており、その痕跡が一見沈線のように見える。酸化焼成しているが焼成はよい。内面に煤が付着している。

B758 880は古瀬戸の摺鉢である。口縁部分類の5類に分類した。

C55 881～884は白瓷系陶器の皿である。いずれも器高が低く器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。885・886は白瓷系陶器の碗である。885は北部系8型式の大畑大洞4号窯式、886は北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。887は連房陶器の小盤である。内面に長石釉・外面に銅緑釉が施釉される。胴部下半は露胎となる。連房第8～9小期に比定される。888は中世土師器の茶釜である。肩部に把手付が付く。煤は外面の把手より下に濃密に付着する。889は古瀬戸の片口鉢である。口縁部外面が、11縁端部の沈線状の窪みと、その下の窪みによって突帯状になる。白瓷系陶器の南部系5型式に併行する。890は中国陶磁器の同安窯系青磁皿である。見込に梅描文をもつ梅描文皿である。

C113 891は白瓷系陶器の皿である。器高が低く、器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。

C123 892は土師器皿である。小型品で内面ナデは不明瞭である。893は古瀬戸の仏供である。内外面の胴下部から底部が露胎である。古瀬戸後IV古期に比定される。894は大窯の摺鉢である。内底面が使用により摩耗している。大窯1～2期に比定される。895は軒丸瓦である。瓦当に左巻巴文と珠文によって構成される文様がみられる。胎土に若干の砂粒が混入し、焼成が悪い。

C134 896は白瓷系陶器の碗である。北部系8型式の大畑大洞4号窯式に分類した。

D3 897は龍泉窯系青磁碗である。破損断面に何ヶ所か人為的に打ち欠いた痕跡が残る。明瞭でないため図示していないが、胴部外面に蓮弁文が付される可能性が高い。釉は薄く見込が輪状になり、高台内が露胎となる。両者とも掻き取りであろう。上田分類BⅢ類に比定される可能性がある。

D4 898・899は白瓷系陶器の碗である。胎土は非常に精良である。北部系11型式の生田2号窯式に分類した。900は古瀬戸の平碗である。口縁部周縁のみ灰釉が施釉される。古瀬戸後IV新时期に比定される。

D5 901は大窯の摺鉢である。口縁部分類の9B類に分類した。

D10 902・903は白瓷系陶器の碗である。902は北部系11型式の脇之島3号窯式、903は北部系11型式の生田2号窯式に分類した。

D75 904は土師器皿である。小型品で内面ナデは不明瞭である。905は連房陶器の半胴甕の可能性が高い。口縁端部が肥厚してやや径む。連房第5～7小期に比定される。906は連房陶器の鉄絵皿である。見込に木葉のような文様が描かれる。連房第1小期に比定される。

D80 907は常滑の甕である。常滑羅年の7型式に比定される。

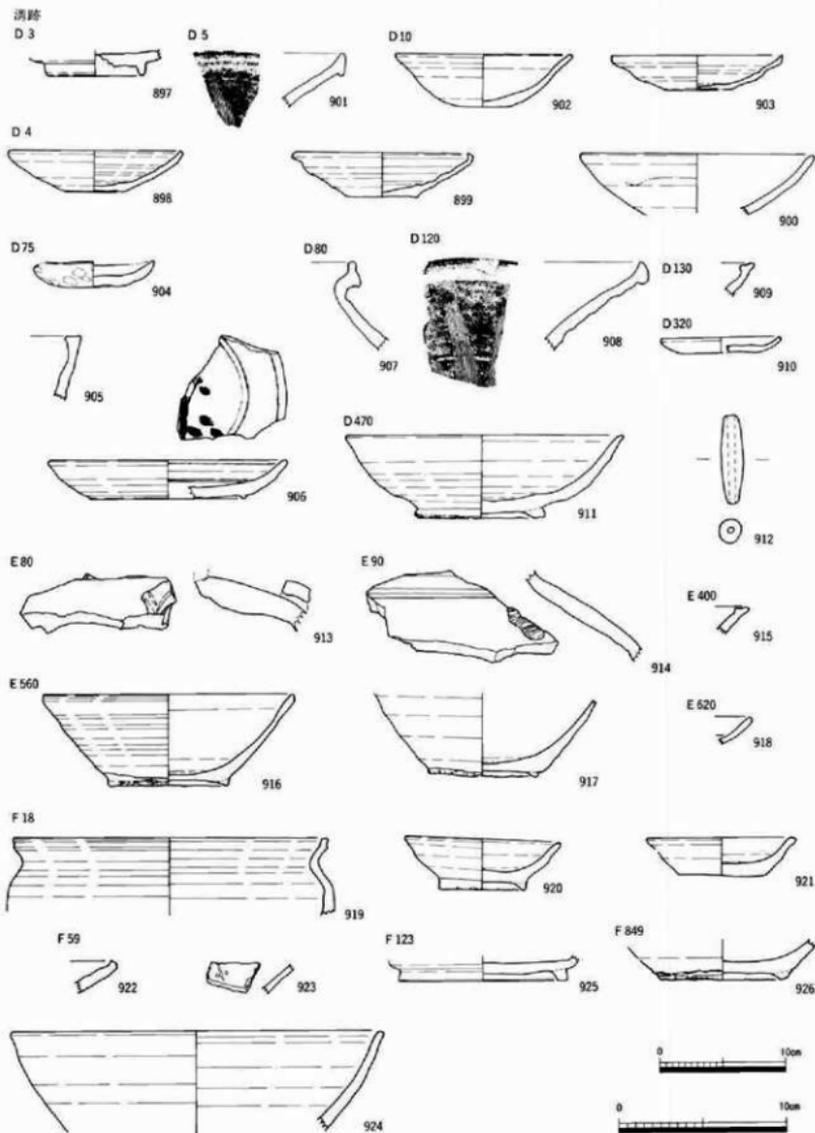


図255 遺構出土遺物（中近世）㊸（S = 1/3、901・908・909・919・924は S = 1/4）

- D120 908は大窯の擂鉢である。口縁部分類の9A'類に比定される。
- D130 909は古瀬戸の卸目付大皿である。古瀬戸後IV古期に比定される。
- D320 910は白瓷系陶器の皿である。器高が低く、器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。
- D470 911は白瓷系陶器の碗である。南部系4型式に分類した。912は七鍾である。胴中央部に最大径がみられる。
- E80 913は白瓷系陶器の有耳壺である。胎土から東濃産のものと思われる。肩が強く張る器形であり、外面に灰釉が施釉され内面は露胎となる。北部系6型式の白土原1号窯式に併行する¹⁰⁾。
- E90 914は古瀬戸の有耳壺である。外面の釉薬が剥がれ落ちている。耳には刻みがみられる。
- E400 915は古瀬戸の卸皿である。口縁部内面に突帯が付される。古瀬戸後IV古期に比定される。
- E560 916・917は白瓷系陶器の碗である。916は胎土が粗く、美濃須衛産の可能性が有る。北部系5型式に分類した。917は北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。
- E620 918は中国陶磁器の龍泉窯系青磁皿である。大宰府分類の青磁皿I類に比定される。
- F18 919は須恵器の鉢A類である。頸部から口縁部にかけてくの字に屈曲し、口縁部のみ直立する。胎土が精良で手に持った感じが重く、表面は滑らかである。920は白瓷系陶器の小碗である。北部系4型式の谷狭間2号窯式に分類した。921は白瓷系陶器の皿である。器壁が厚く、口縁端部が若干外反する。南部系5型式に分類した。
- F59 922は古瀬戸の卸皿である。口縁部内外面に灰釉が施釉される。古瀬戸後I期に比定される。923は中国陶磁器の白磁皿である。内面に、白土化粧あるいは象嵌による文様が描かれる。大宰府分類の白磁皿II類併行期である可能性がある。924は古瀬戸の片口鉢である。口縁部に肥厚が無く、わずかに外反する。白瓷系陶器の南部系3型式に併行する。
- F123 925は須恵器の杯身C類である。幅の広い断面方形の高台が、底部外面端部のやや内側に付される。
- F849 926は白瓷系陶器の碗である。南部系5型式に分類した。
- G19 927は須恵器の甕B類である。胴が張り、把手が付く器形になると考える。把手は指ナデによって整形されている。928は古瀬戸の擂鉢である。口縁部分類の5類に分類した。
- G413 929は土師器皿である。口縁部内面に横ナデが施される。930は大窯の灯明皿である。生田2号窯式の碗に似る。指頭によるナデが施されている。大窯1期に比定される。931は白瓷系陶器の碗である。北部系11型式の生田2号窯式に分類した。
- G441 932は須恵器の杯蓋C類である。返りの端部は尖り気味で、その上部に若干の湾曲がみられる。933は白瓷の碗である。外傾するやや高めの高台をもつ。丸石2号〜明和27号窯式に比定される。934・935は白瓷系陶器の碗である。934は胴部に丸味があり、高台が底部外面端部の外側に付される。見込が摩耗している。南部系4形式に分類した。935は北部系11型式の生田2号窯式に分類した。936は古瀬戸の甕類か壺類である。胴部下半から底部外面にかけて露胎となる。古瀬戸後III〜後IV古期に比定される。
- G580 937は須恵器の杯身B類である。胴部から口縁部にかけて直線的に大きく開く。938は須恵器の鉢類と考えられる。底部内面中央に「美濃」刻印が印刷されている。老洞古窯跡でA-I類とされた最も数が多い一群と同じ形であり、「美濃国」刻印がある79とサイズ・形状とも一致する。

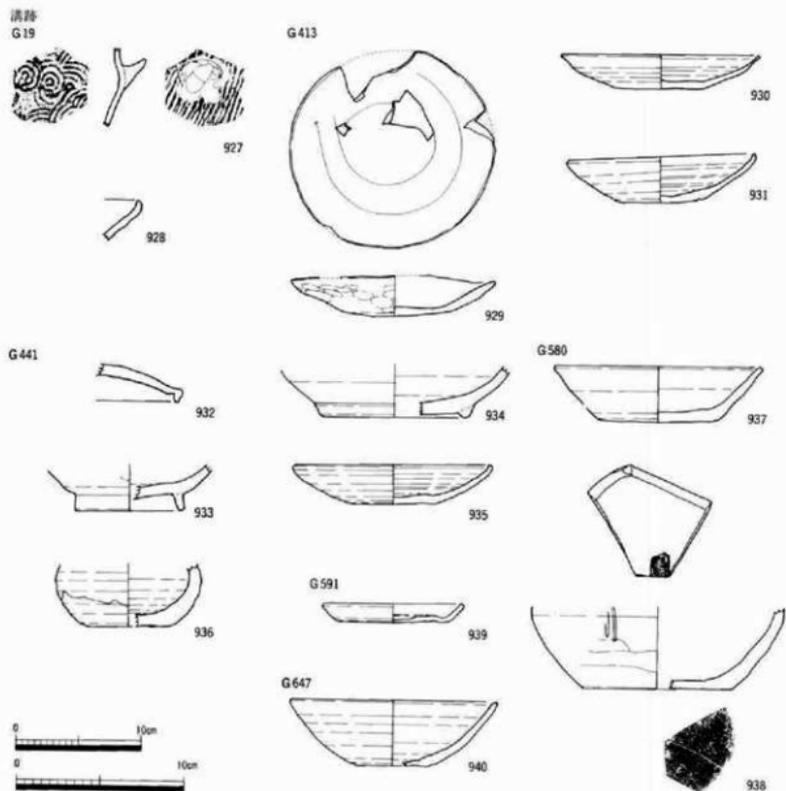


図256 遺構出土遺物（中近世）㊦（S = 1/3、927・928・938はS = 1/4）

G591 939は白瓷系陶器の皿である。焼成が悪く、内底面の静止指ナデが存在しない。北部系7型式以降に分類した。

G647 940は白瓷系陶器の碗である。北部系11型式の脇之島3号室式に分類した。

H1 941は白瓷の鉢と思われる。底部内面に自然釉が付着している。942は土師器皿である。外面は口縁部上方に、内面は口縁部から胴部全面に横ナデが施され、底部内面には一方ナデもみられる。943は白瓷系陶器の碗である。北部系5型式に分類した。944は古瀬戸か大室の擂鉢である。内面は使用によって著しく摩耗している。

945は古瀬戸の擂鉢である。口縁部分類の5類に分類したが、他のものより屈曲が強い。

946は中国陶磁器の青磁碗である。大宰府分類のI-5d類に該当すると思われる。やや細めの角高台をもち、底部の器壁が厚い。釉薬は全面に施軸される。印刻は「金玉調堂」であろう。947は中国陶磁器の染付皿である。図示していないが、包含層出土遺物に同一個体と思われる破片があり、形態分類

と文様を判断した。小野分類の皿B群に比定される。948は古瀬戸の狛犬の脚部である。左前脚と考えられる。足の裏側から観察すると、棒状の粘土に他の粘土を貼り付けて整形しているのが分かる。足の裏は板状の土台に接着していたらしい。15世紀中葉の製品と思われる¹¹⁾。

H5 949は白瓷系陶器の皿である。南部系5型式に分類した。950は白瓷系陶器の碗である。北部系4型式の谷狭間2号窯式に分類した。胎上が粗く、美濃須衛産の可能性もある。951は古瀬戸の縁釉小皿である。口縁部内外面のみ灰釉が施釉される。古瀬戸後IV新期に比定される。

H304 952~954は白瓷系陶器の皿である。北部系7型式以降の皿とした中では器高が高く、つくりがしっかりしており、古い段階に位置付けられる可能性がある。955~958は白瓷系陶器の碗である。955~957は北部系7型式の明和1号窯式、958は北部系9型式の大谷洞14号窯式に分類した。

H305 959~960は白瓷系陶器の碗である。959は北部系6型式の白土原1号窯式、960は北部系8型式の明和1号窯式に分類した。

H307 961~962は白瓷系陶器の碗である。961は見込が円盤状に盛り上がっており、胴部と底部の境が明瞭な段になっている。南部系4型式に分類した。962は北部系5型式に分類した。

I260 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに記載する。

白瓷系陶器(963~967) 963は小碗である。南部系4型式に分類した。964~967は白瓷系陶器の碗である。964は北部系5型式、965は北部系6型式の白土原1号窯式、966は北部系11型式の磐之島3号窯式、967は北部系11型式の生田2号窯式に分類した。

古瀬戸(968・969・971~983) 968は縁釉小皿である。灰釉は口縁部内外面に施釉される。古瀬戸後III期に比定される。969は折縁中皿である。口縁部が屈曲し、内面が湾曲する。古瀬戸後IV古期に比定される。971は平碗である。内面は全面に灰釉が施されるが、外面は露胎となる。古瀬戸後IV古~後IV新期に比定される。972は筒形の香炉である。底部内面の回転痕が溝状になって盛り上がる。古瀬戸後IV古~後IV新期に比定される。973は茶釜である。胴部内面中央に接合痕が残る。古瀬戸後IV古期に比定される。974~976・978・980は折縁深皿である。974は口縁部が屈曲し、端部が内湾気味になる。古瀬戸中I期に比定される。975は屈曲した口縁部全体が内湾する。外面の削りは底部から見て半時計周りに施されている。古瀬戸中II期に比定される。976は口縁部が屈曲し、そのまま直線的に延びる。器壁がやや薄い。古瀬戸中IV期に比定される。978は屈曲部の内面に段が付けられており、そこから端部までカナデによって窪む。古瀬戸後II期に比定される。979は直縁大皿である。内面が摩耗している。胴部下半から底部にかけて露胎となる。古瀬戸後IV古期に比定される。977は内耳鍋である。屈曲した口縁部が内湾し、端部が面取り気味になる。古瀬戸後IV古期に比定される。980は口縁部が屈曲し、上面が平らになる。古瀬戸後IV古期に比定される。981は瓶子である。I260とI275の出土遺物が接合した。内面と底部外面が露胎となる。古瀬戸後期に比定される。982は11広有耳壺である。内面に2ヶ所の敲着痕がみられる。古瀬戸後IV新期に比定される。983は搦鉢である。内面が著しく摩耗している。I緑部分類の3類に分類した。

大窯(970) 970は天目茶碗である。I緑端部が尖り気味で屈曲が強く、胴部に丸味がある。胴下部から底部にかけての外面が露胎となる。大窯3期に比定される。

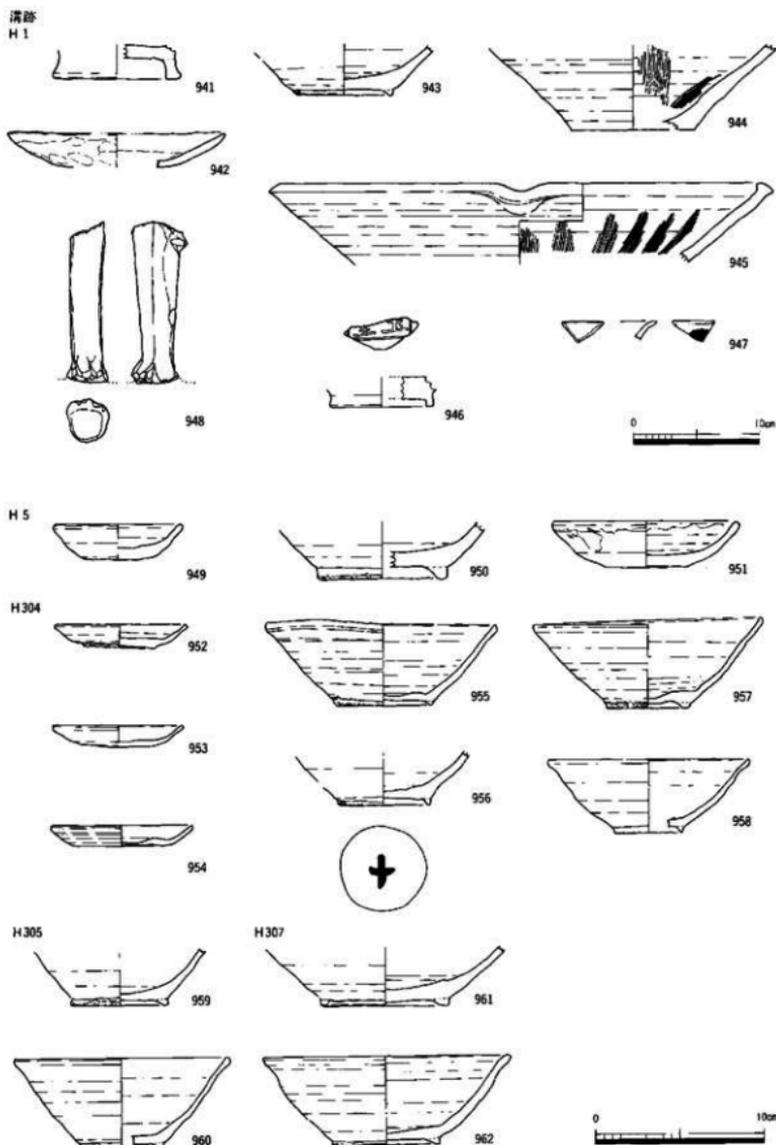


図257 遺構出土遺物 (中近世) ④ (S = 1/3、941・944・945はS = 1/4)

溝跡
1260

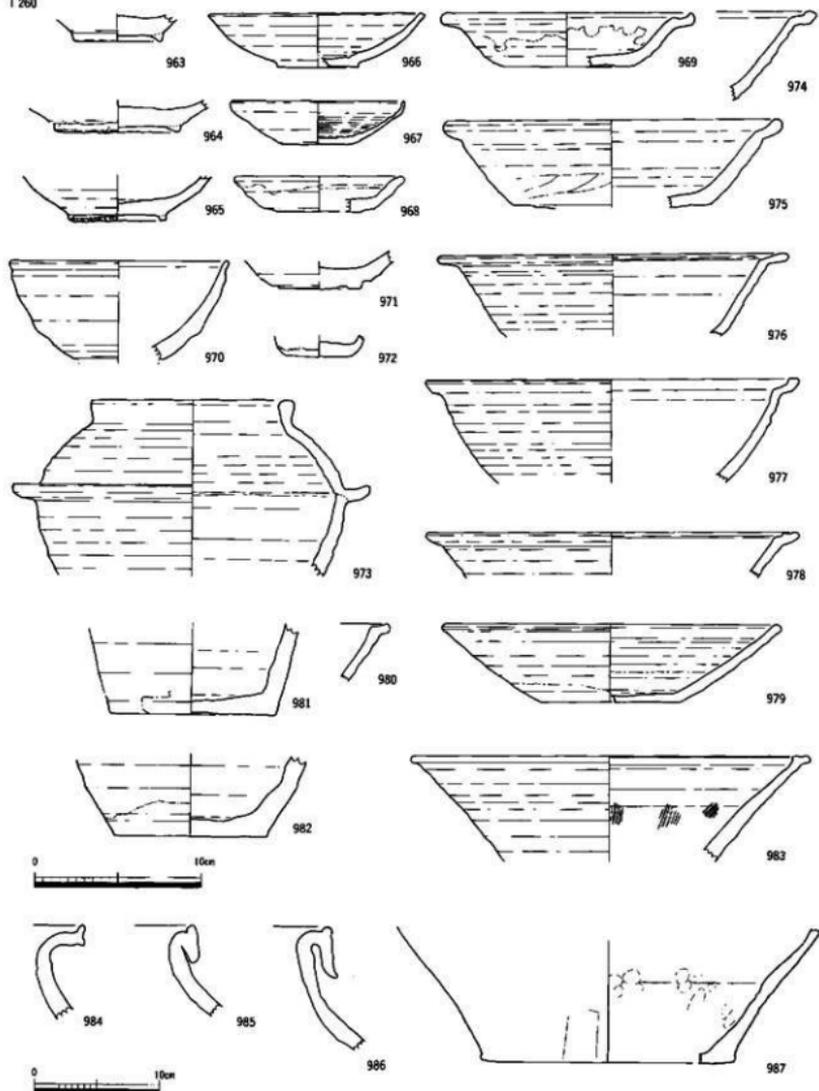


図258 遺構出土遺物 (中近世) ④ (S = 1/3、974~980・983~987(≠ S = 1/4))

常滑(984~987) 984~987はいずれも甕である。984は縁帯が下に垂れない。常滑編年の6 a型式に分類した。985は縁帯の幅が987と比べて狭い。また頸部にはほぼ密着している。常滑編年の8か9型式に比定される。986は縁帯が内傾し、頸部とは密着しない。常滑編年の8型式に比定される。987は底部であり、内面に指頭痕が残る。

I 275 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに記載する。

中世土師器(988) 988は土師器皿である。内面に6の字状のナデを施す。

白瓷(989・990) 989・990は碗である。989は内面がやや内湾気味の高台をもつ。破片では胴部のみ施釉が見られる。見込に墨痕があり、硯に転用されたものとする。990は断面三角形のやや低い高台をもつ。内面が摩耗している。美濃(在地、美濃須衛)産のものとする。

白瓷系陶器(991) 991は碗である。北部系11形式の生田2号窯式に比定される。

古瀬戸(992~995) 992は仏供である。破損断面を人為的に打ち欠いた加工内盤である。993は天目茶碗である。胴部上半に丸みがあり、口縁部が強く屈曲する。口縁端部は尖り気味になる。古瀬戸後IV新期に比定される。994は有耳壺である。三耳壺である可能性が高い。内外面に灰釉が施される。古瀬戸後III~後IV古期に比定される。995は卸日付大皿である。口縁部の屈曲部内面が突帯状になる。灰釉は口縁部と胴部上半に施される。古瀬戸後IV古期に比定される。

常滑(996・997) 996は常滑の壺である。頸部外面に突帯状の段がめぐる。内面の頸部と胴部の境には接合痕が明瞭に残る。997は常滑の壺である。明瞭な調整はみられない。

瓦(998) 998は軒丸瓦である。文様は左巻巴文と珠文であり、瓦当に多くの砂粒(ハナレ砂)が付着する。

I 715 999は白瓷系陶器の碗である。北部系11形式の生田2号窯式に分類した。

土坑(図259~266)

A33 1000は白瓷系陶器の碗である。北部系11形式の脇之島3号窯式に分類した。

A34 1001は中国陶磁器の白磁杯である。見込に、挟り込みのある高台と同じ形の重ね焼き痕がある。表面に無数の貫入があり、焼きが甘い。森田分類のD群に比定される。

A232 1002は大窯の小瓶である。胴下部の最大径の上まで丁寧な回転へう削りが施される。鉄釉は内面にもかかっている可能性が高い。底部外面周縁には錆釉を施している。大窯1期に比定される。

A300 1003は古瀬戸の耳付水注である。口縁端部を除いて鉄釉が施される。内面に酸化鉄のようなものが付着している。古瀬戸後III~後IV古期に比定される。

B64 1004は土師器皿である。内面は口縁部を横ナデしている可能性があるが、摩耗のため確認できない。

B266 1005は中国陶磁器の白磁皿である。見込に日痕が残る。釉は薄く、底部外面周縁が露胎となる。森田分類のD群に比定される。

B346 1006は古瀬戸の小鉢である。底部の器壁が非常に厚い。外面の回転削りの影響で底部と胴部の境の器壁が薄くなっている。灰釉は口縁部内外面のみを施される。古瀬戸後IV古期に比定される。

B456 1007・1008は白瓷系陶器の碗である。北部系7型式の明和1号窯式に比定される。

B705 1009は白瓷系陶器の皿である。器壁に厚みがあり、口縁端部が外反する。北部系6型式の白土原1号窯式に比定される。1010は白瓷系陶器の碗である。北部系11形式の生田2号窯式に分類した。

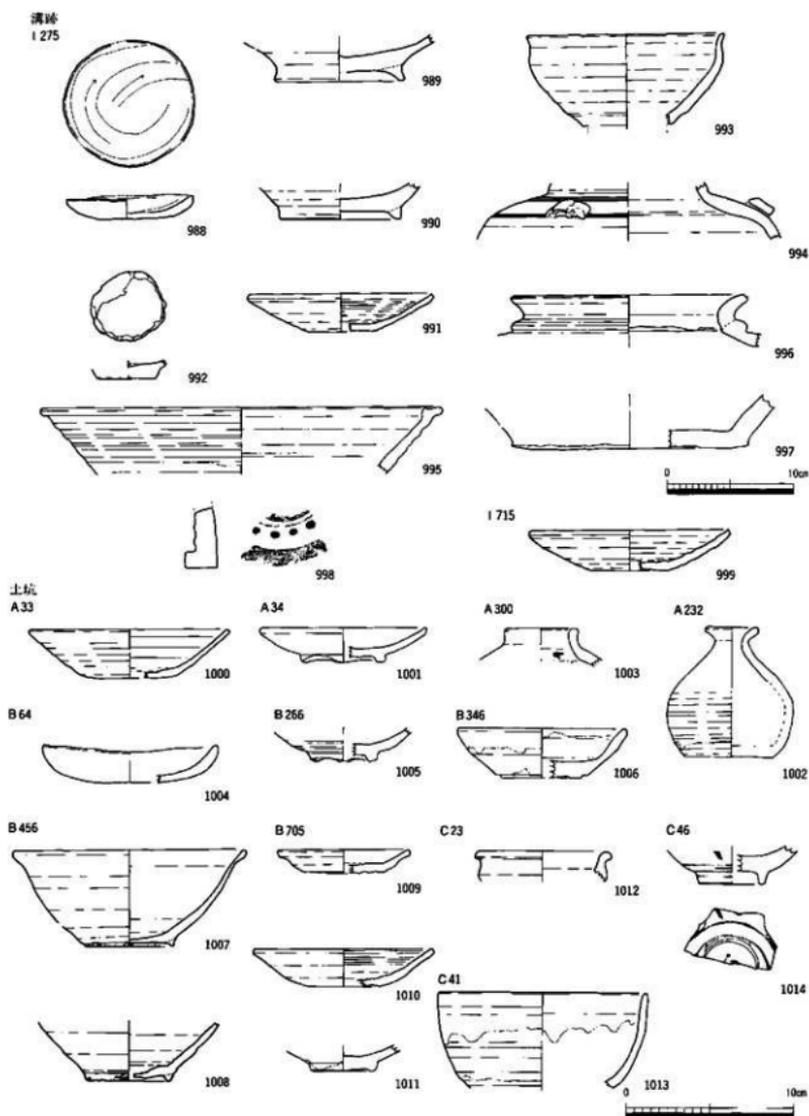


図259 遺構出土遺物(中近世)㊸ (S = 1/3、994~998はS = 1/4)

1011は中国陶磁器の白磁皿である。高台周縁が露胎となる。森田分類のD群に比定される。

C23 1012は古瀬戸の袴腰形香炉である。小型品であり、内面は口縁部を除いて露胎となる。古瀬戸後Ⅲ～後Ⅳ中期に比定される。

C41 1013は連房陶器の尾呂茶碗である。清跡C45から出土した遺物と接合した。口縁部にうのふ軸がかけられる。連房第5～6小期に比定される。

C46 1014は肥前の染付碗と考える。やや厚めの器壁を持ち、高台の幅が広い。釉薬は表面に光沢がない。高台内に銘款があるが、一部のみであるため判読不能である。

C93 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに記載する。

古瀬戸 (1026～1028) 1026は卸皿である。口縁端部に若干の内湾がみられる。口縁部以外が露胎となる。古瀬戸後Ⅳ新期に比定される。1027は卸日付大皿である。口縁部内面が肥厚し、その上がナデによって窪んでいる。古瀬戸後Ⅳ新期に比定される。1028は古瀬戸の瓶子である。おそらく梅瓶であろう。古瀬戸後Ⅳ古～後Ⅳ新期に比定される。

連房陶器 (1015～1025・1029～1034・1036～1039)

1015～1021は連房陶器の灯明皿である。1015～1019は油皿である。1015は見込と底部外面に輪ドチ痕が残る。外面の回転削り痕が細かい。底部外面が錆軸が拭い取られる。1016は見込に輪ドチ痕が残る。胴部から底部外面の錆軸が拭い取られる。1017は底部外面周縁に輪ドチ痕が残る。胴部から底部にかけての錆軸が拭い取られる。1018は油皿である。見込に円錐ピンの痕跡が5ヶ所残る。1019は他の個体とは異なり、胴部に丸味が無く直線的に開く。見込に円錐ピンの痕跡が3ヶ所残る。胴部～底部外面が露胎になる。1020・1021は受皿である。底部周縁の錆軸は拭い取られている。1015・1019は連房第10～11小期に、1016～1018・1020・1021は連房第9小期に比定される。1022は桐目茶碗である。内外面に白化粧による文様が描かれる。瀬戸産と考えられる。連房第8小期に比定される。1023は湯呑である。非常に器壁が薄い。連房第7小期に比定される。1024・1025は柘器質の広東茶碗である。1024は見込に五弁花文をもち、外面に呉須絵で柳のような文様が描かれる。胴部には4条の沈線が見られる。畳付が露胎となる。いずれも連房第10小期に比定される。1029は大型の花瓶である可能性がある。口縁部が屈曲して直立し、頸部が細くなる。連房第8～9小期に比定される。1030は花瓶の可能性がある。胴部に丸味があり、口縁部が外反する。底部中央にはかかれた痕跡が残り、脚が付く可能性がある。連房第8～9小期に比定される。1031は仏師具である。脚の接地面周縁が露胎となる。連房第8～9小期に比定される。1032は筒型の香炉である。内面の底部と胴部の境に布目瓦痕が見られる。底部外面周縁が露胎となる。連房第5～6小期に比定される。1033は合子である。底部内面が内弁状になる。底部外面周縁が露胎となる。連房第8～9小期に比定される。1034・1036は小瓶である。口縁部が玉縁状になり、胴下半に最大径がある。畳付きが露胎となる。1034は胴部に梅文と蘭竹文が描かれる。1036は底部外面周縁から底部にかけてが露胎となる。いずれも連房第10～11小期に比定される。1037は土瓶である。注口は欠損している。胴部内面が露胎となるが、施釉された錆軸に手形や指紋が明瞭に残る。連房第8～9小期に比定される。1038・1039は瓶蓋型の火鉢である。1038は頸部に縦位のソギが見られ、胴部に2段の印刻文がめぐる。把手は中空になっている。1039は1038に似るが頸部のソギがない。胴部上半に把手がかかれた円形の痕跡が残る。はがれ痕にも印刻文が残っている。いずれも連房第8～9小期に比定される。1040は連房陶器の播鉢である。内面は摩耗が著し

土坑
C93

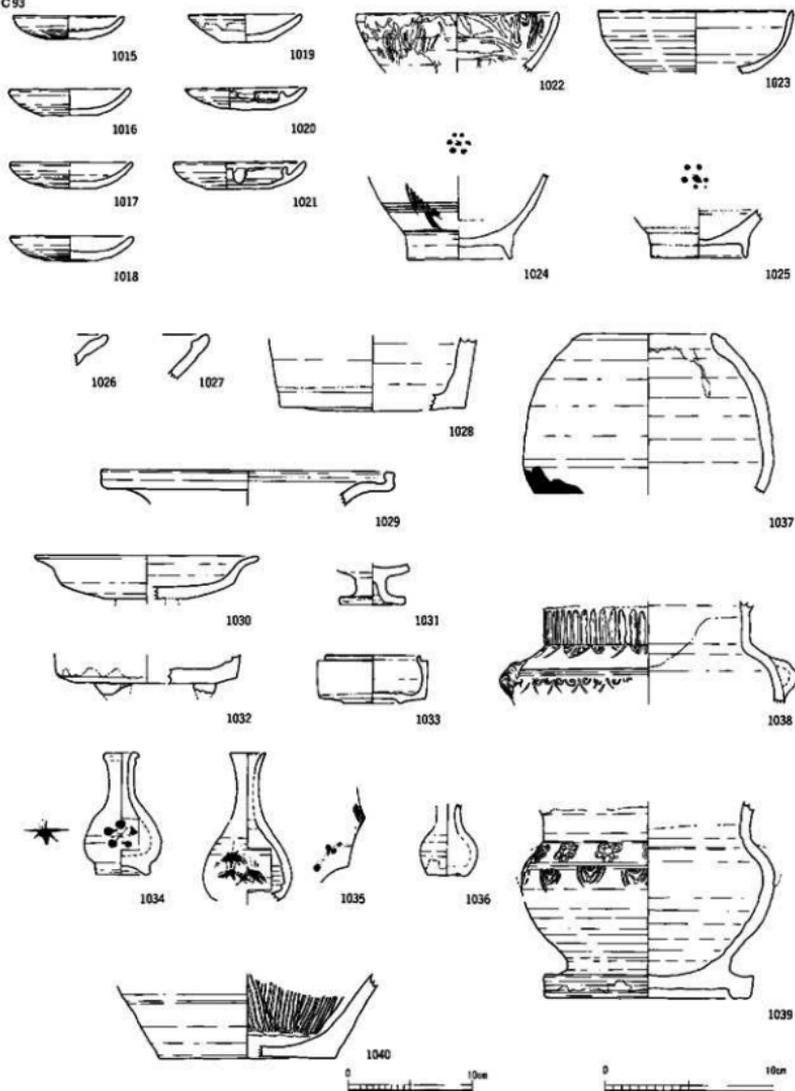


图260 遺構出土遺物(中近世)㊸ (S=1/3、1027・1040はS=1/4)

い。底部外面が露胎となる。連房第5～7小期に比定される。

連房磁器(1035) 1035は連房磁器の小瓶である。口縁部に肥厚が無く、外反する。呉須絵で蘭文竹が描かれる。連房第9～10小期に比定される。

C118 1041は加工円盤である。磁器杯の底部を意図的に割っている。

C121 1042は連房陶器の灯明皿である。油皿であり、胴部に丸味がある。見込周縁に輪ドチ痕が残る。底部外面の胎釉が拭い取られる。連房第9小期に比定される。

C184 1043は土師器皿である。胎土が精良で焼成が良い。口縁部にタールのようなものが付着する。近世のものと思われる。1044・1045は連房陶器の灯明皿である。ともに油皿である。1044は見込周縁に輪ドチ痕が残る。胴部から底部外面が露胎となる。1045は胴部から底部外面にかけて露胎となる。いずれも連房第9小期に比定される。1046は摺絵皿である。見込中央の摺絵の周囲が輪状になっている。高台周縁が露胎となる。連房第7小期に比定される。

D7 1047は土鉢である。胴部中央に最大径がある。

D60 1048は土師器皿である。口縁部内面に横ナデ、底部内面に一方のナデが施される。1049は古瀬戸の袴型香炉である。内面に重ね焼きの痕跡が1ヶ所残る。足は3ヶ所に付されると考える。胴部から底部にかけての内外面が露胎となる。露胎部は赤く発色している。古瀬戸後IV新期に比定される。1050・1051は古瀬戸の摺鉢である。1050は口縁部分類の5類に分類した。1051は底部である。内面はかなり使い込まれている。古瀬戸後IV古～後IV新期に比定される。

D85 1052は古瀬戸の平碗である。残存している外面は露胎である。古瀬戸後IV古期に比定される。1053は古瀬戸の卸日付大皿である。内面の卸目が使用された痕跡はない。古瀬戸後IV古～後IV新期に比定される。

E9 1054は白瓷系陶器の碗である。北部系II型式の脇之島3号窯式に分類した。

E10 1055は白瓷系陶器の皿である。器壁がやや厚めで、底部が円柱状に残る。北部系6型式の白土原1号窯式に比定される。

E40 1056は古瀬戸の花状脚部と思われる。外面の釉薬がはがれ落ちて脚部外面のみ残るが、本来は外面全体に施釉されていたと思われる。1057は瓦質土器の羽釜である。羽の下側と羽より上の胴部外面に煤が付着している。

E53 1058は白瓷系陶器の碗である。北部系9型式の大谷洞14号窯式に分類した。1059中国陶磁器の白磁皿である。口縁端部が無釉になる口禿を呈する。大宰府分類の白磁皿IX類に比定される。

E101 1060は古瀬戸の卸皿である。胴部に丸味があり、口縁部が面取りされる。器壁が全体に厚い。古瀬戸中1期に比定される。

E150 1061は常滑の甕である。口縁端部がつまみ上げられ、端部の内側が窪む。常滑編年の1bか2型式に比定される。

E140 1062は白瓷系陶器の碗である。内面見込に何らかの有機物が付着している。南部系5型式に分類した。

E170 1063は白瓷系陶器の皿である。内面に何らかの有機物が付着している(第3部第7章参照)。底部が胴部から独立した形状を呈する。南部系5型式に分類した。1064は白瓷系陶器の碗である。南部系4型式に分類した。1065は中世土師器の伊勢型鍋である。口縁部内面を肥厚しており、端部の平

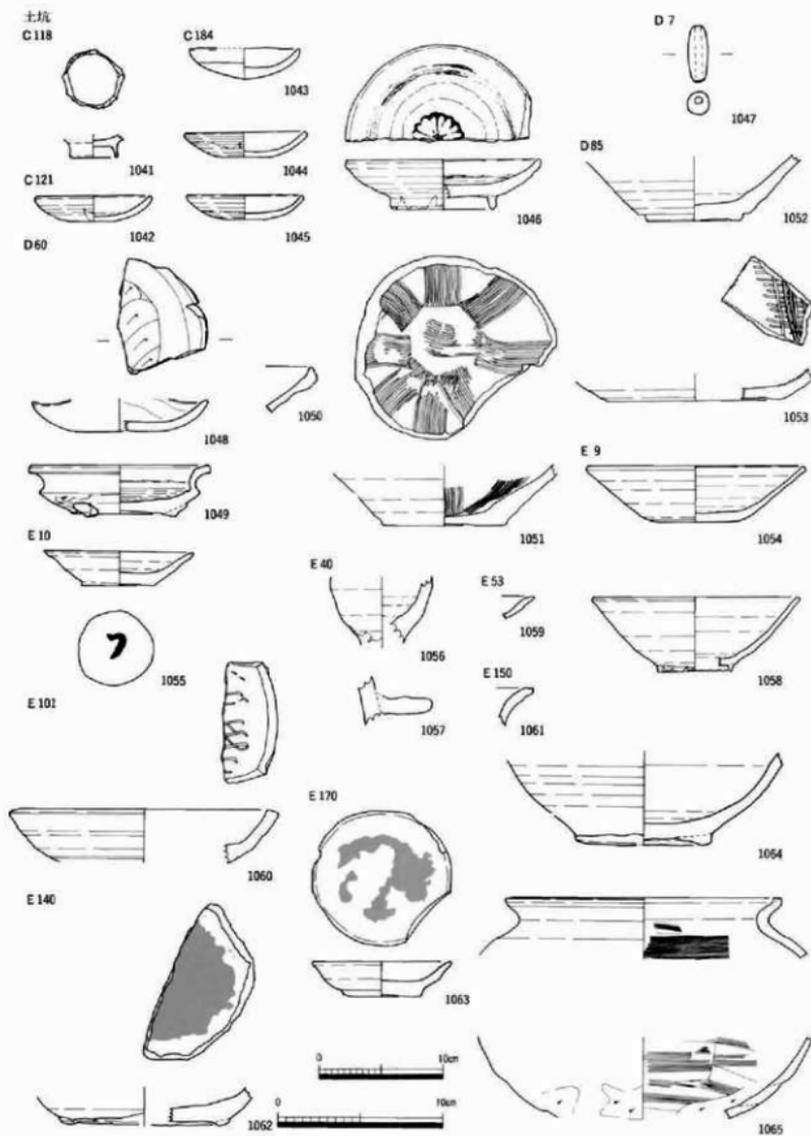


圖261 遺構出土遺物 (中近世) ④ (S = 1/3、1050・1051・1053・1061・1065) ± S = 1/4)

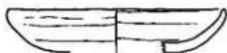
- 皿面は窪んでいる。全体的に器壁が厚い。内面の板ナデは口縁部から見て時計回りに施される。
- E671 1066はロクロ土師器の皿である。胎土が粗で表面荒れかがげしい。
- E700 1067は土師器皿である。口縁端部をつまみ上げてやや尖らせるなど、非常に丁寧に整形されている。京都からの搬入品の可能性がある。胎土が精良で雲母を多く含む。1068は白瓷系陶器の皿である。北部系5型式に分類した。1069は白瓷系陶器の碗である。北部系5型式に分類した。
- E760 1070は白瓷系陶器の皿である。南部系5型式に分類した。1071～1073は白瓷系陶器の碗である。1071・1072を南部系5型式、1073を北部系5型式に分類した。
- E761 1074・1075は白瓷系陶器の皿である。南部系5型式に分類した。1076～1078は白瓷系陶器の碗である。1076を南部系5型式、1077を北部系6型式の白土原1号窯式、1078を北部系5型式に分類した。1078は内面全体に漆が付着しており、破損断面まで達している（第3部第7章参照）。
- E766 1079は白瓷系陶器の碗である。南部系5型式に分類した。
- E820 1080は上鉢である。両端部が細くならない寸胴な形状を呈する。
- E840 1081は白瓷系陶器の皿である。全体に大きく歪んでいる。底部外面には粘土塊が付着しており、水平に置くことができない。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。
- F39 1082・1083は白瓷系陶器の碗である。1082は北部系7型式の明和1号窯式に分類した。1083は焼成が還元状態であり、胎土が粗い。美濃須衛産の可能性が高い。北部系5型式に分類した。
- F43 1084は須恵器の杯蓋C類である。返りが短く、内面に強く屈曲する。返り上面も屈曲している。全体的につくりは薄手である。美濃（在地、美濃須衛）産のものとする。
- F69 1085は中国陶磁器の青白磁皿である。非常に器壁が薄く、底部外面中央が窪んで端部が高台状になる。また底部外面のみ露胎となる。
- F72 1086はロクロ土師器の杯である。形状は須恵器の杯身に近い。内面全体に煤のようなものが付着している。
- F99 1087・1088は土師器の皿である。1087は口縁部内外面に2段の横ナデを施す。1088も同様のナデ調整を行っている。1089はロクロ土師器の小皿である。F24の出土品とほぼ同じもの（460・461）である。1090は須恵器杯身C類である。全体的に薄手でシャープなつくりになる。高台は底部外面端部のかなり外側に付される。1091は産地不明中世陶器の甕である。甕の肩に近い部分の破片と思われ、474とよく似た胎土・焼成である。叩き具は格子にならず一方のみであり、内面の当て具は同心円状になる。美濃須衛産の可能性が高い。
- F104 1092は白瓷系陶器の碗である。やや焼きが悪い。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。
- F128 1093は白瓷系陶器の碗である。胴部下半に丸味があり、断面長方形の高台が底部外面周縁に付される。南部系4型式に分類した。
- F136 1094は白瓷系陶器の碗である。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。
- F186 1095は須恵器の甕である。胴部が張り、その最大径部分に把手が付される形状の甕と考える。把手は指ナデによって形を整えながら接着されている。焼成が悪く還元軟質を呈する。
- F201 1096は中国陶磁器の白磁碗である。口縁部外面端部が主縁になる。大宰府分類の白磁碗Ⅱ類に比定される。

土坑
E 671



1066

E 700



1067



1068



1069

E 761



1074



1075



1076



1077

E 766



1079

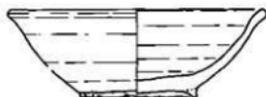
E 760



1070



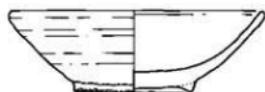
1071



1072



1073



1078

E 820



1080

E 840



1081



图262 遺構出土遺物（中近世）㊸（S = 1/3）

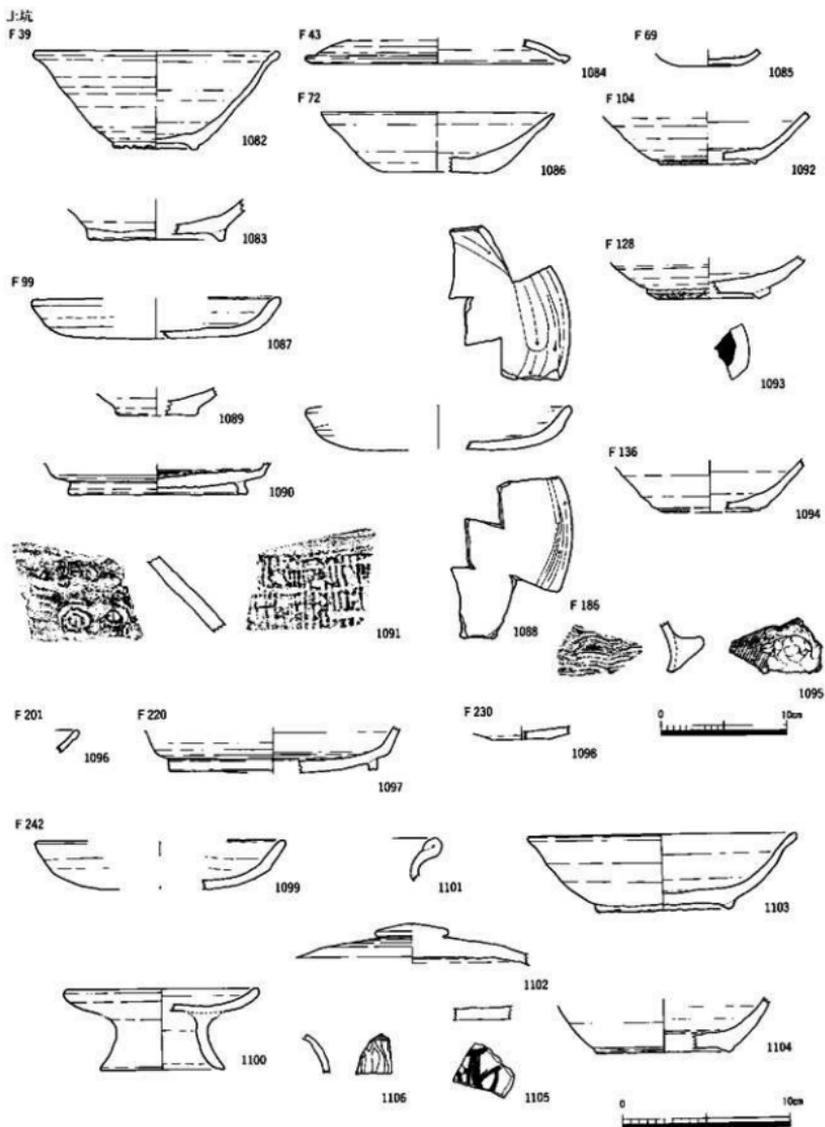


図263 遺構出土遺物 (中近世) © (S = 1/3、1091・1095はS = 1/4)

F220 1097は須恵器の杯身C類である。土坑F344から出土したものと接合した。底部内面の中央が高台から突出する。高台は底部外面端部のやや内側に付される。焼成が悪く還元軟質を呈する。

F230 1098は中国陶磁器の白磁皿である。中世前期の白磁皿と考えられる。底部周縁から底部外面が露胎となる。

F242 1099は土師器皿である。口縁部内面のナデは2段目が特に強い。1100はロクロ土師器の脚付皿である。土師器皿のような杯部に脚が付く形状を呈する。1101は中世土師器の伊勢型鍋である。内側に折り返された口縁部上面にナデがみられない。1102は須恵器の杯蓋C類である。大型の宝珠摘が付される。焼成が悪く還元軟質を呈する。1103～1105は白瓷系陶器の碗である。1103は内外面に煤が付着しており、特に底部内面に顕著に見られる。1103・1104は南部系5型式に分類した。1105は南部系の碗の底部破片であり、底部外面に花押状の墨書が見られる。1106は中国陶磁器の青白磁壺形合子身である。洞雲戸遺跡(付篇P16図8:12参照)の壺形合子身とほぼ同じ文様がみられる。内面は露胎となる。

F255 1107はロクロ土師器の脚付皿である。1100とほぼ同じ形状を呈すると考える。1108・1109は白瓷系陶器の皿である。1108は南部系5型式に、1109は南部系6型式に分類した。1110～1115は白瓷系陶器の碗である。1110～1114を南部系5型式、1115を北部系5型式に分類した。

F256 1116は白瓷系陶器の小碗である。南部系4型式に分類した。1117は白瓷系陶器の碗である。高台が削られているが、胴部の形状や底径から、南部系4型式と推測した。1118～1120は土錘である。いずれも胴部の中央に最大径があり、両端がやや細くなる形状を呈する。

F296 1121は須恵器の高杯A類の脚部である。杯部との接合部近くに1条の沈線が見られる。1122は白瓷系陶器の碗である。胴部に強い丸味があり、やや外傾する高い高台をもつ。灰釉が施軸されている可能性がある。北部系3型式の矢戸上野2号窯式に分類した。

F302 1123は漁撈具の土錘である。胴部の中央に最大径があり、両端がやや細くなる形状を呈する。

F363 1124は白瓷系陶器の碗である。南部系5型式に分類した。

F391 1125はロクロ土師器の柱状高台皿である。外面全体に煤が付着している。

F402 1126は須恵器の平瓶の口縁部と考える。頸部が緩やかに開き、口縁部付近は内湾している。1127は白瓷系陶器の皿である。南部系5型式に分類した。

F523 1128は須恵器の杯身B類である。1129は白瓷系陶器の碗である。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。

F590 1130・1131は白瓷系陶器の碗である。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。1132は中国陶磁器の白磁皿である。口縁部外面が玉縁状になる。大宰府分類の白磁皿Ⅱ類に比定される。

F682 1133は須恵器の杯蓋C類である。やや小型であり、頂部にやや丸味がある。返り上端の屈曲はほとんど見られない。

F701 1134は中国陶磁器の青磁碗である。外面に片切り彫りによる幅広の銘連弁文をもつ。上田分類のBⅠ類に比定される。

F774 1135は白瓷系陶器の碗である。北部系8型式の太畑大洞4号窯式に分類した。

F775 1136はロクロ土師器の小碗である。高台や形状が白瓷のつくりに似ている。

F776 1137はロクロ土師器の小皿である。やや器壁が薄い。

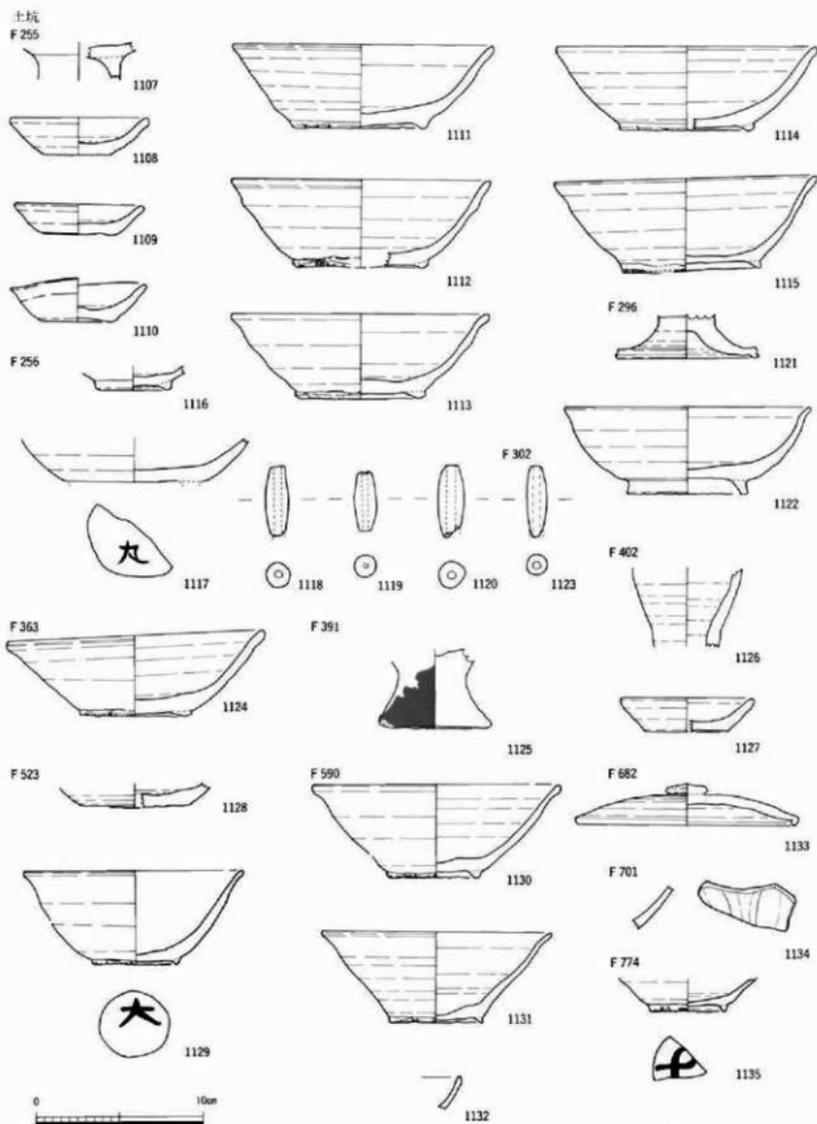


图264 遺構出土遺物（中近世）㊸（S = 1/3）

土坑
F 775

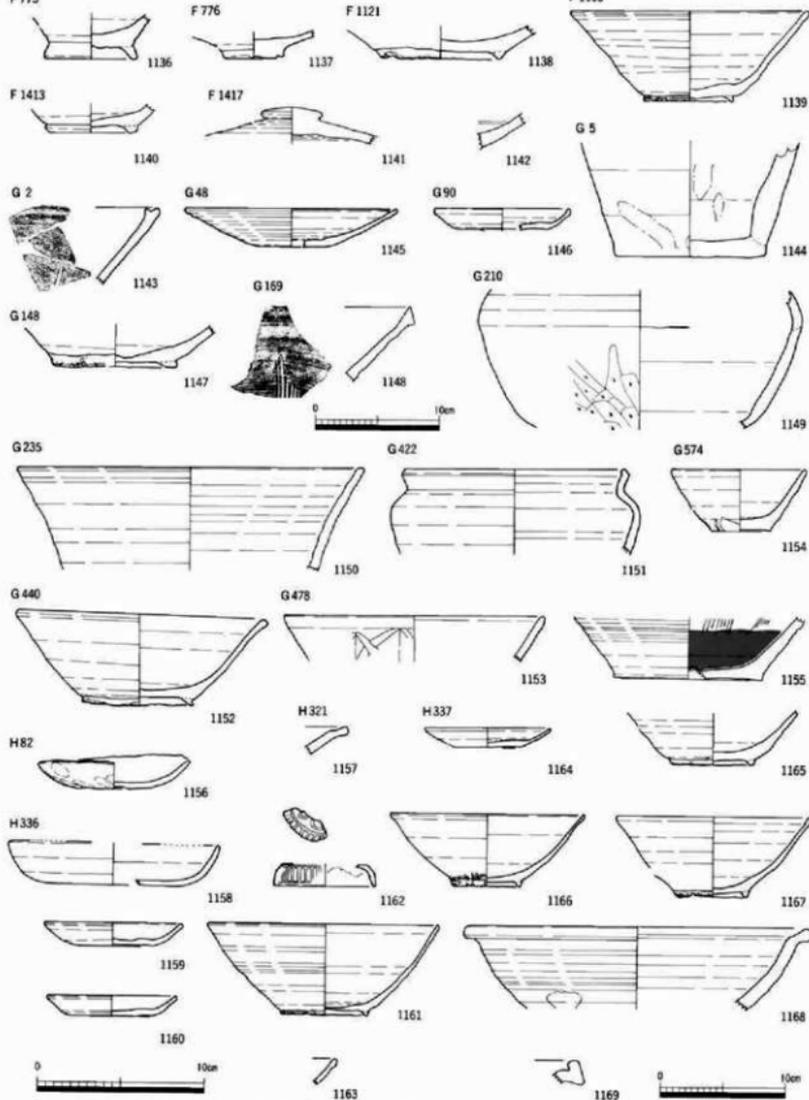


図265 遺構出土遺物（中近世）④（S = 1/3、1143・1148~1151・1155・1168・1169はS = 1/4）

- F1121 1138は白瓷系陶器の碗である。北部系5型式に分類した。
- F1165 1139は白瓷系陶器の碗である。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。
- F1413 1140は白瓷系陶器の小碗である。南部系4型式に分類した。
- F1417 1141は須恵器の杯蓋C類である。頂部から胴部にかけてやや丸味がある。1142は中国陶磁器の白磁碗である。中世前期の白磁碗と思われる。F1392からの出土遺物が接合した。胴部内面中央に沈線状の段が見られる。
- G2 1143は古瀬戸の搥鉢である。口縁部分類の3類に分類した。
- G5 1144は古瀬戸の梅瓶である。石を入れ込んだ畦畔SL5から出土した遺物と接合した。内面と底部中央が露胎となる古瀬戸後期に比定される。
- G48 1145は白瓷系陶器の碗である。胎土は精良である。北部系11型式の生田2号窯式に分類した。
- G90 1146は白瓷系陶器の皿である。器高が低く、器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。
- G148 1147は白瓷系陶器の碗である。南部系5型式に分類した。
- G169 1148は大窯の搥鉢である。口縁部分類の6A類に分類した。
- G210 1149は須恵器の鉢類と考える。内面には輪積み痕が一部残り、外面は縦方向の削り痕がみられる。
- G235 1150は須恵器の洗と考える。胴部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁部外面に沈線が引かれる。金属器を写した器種である。
- G422 1151は須恵器の鉢A類である。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁部が屈曲して内傾する。
- G440 1152は白瓷系陶器の碗である。北部系5型式に分類した。
- G478 1153は中国陶磁器の青磁碗である。片切り彫りによる鋪蓮弁の幅が広い。軸葉は草色を呈し、非常に薄く施釉されている。上田分類のB1類に比定される。
- G574 1154は古瀬戸の小杯である。胴部から底部まで直線的に広がる形状を呈し、底部は平底になる。胴下部から底部外面にかけて露胎となる。古瀬戸後IV古～後IV新期に比定される。1155は古瀬戸の搥鉢である。内面は使用によって摩耗しているが、破損断面も摩耗している。また内面に一定の高さまで煤が付着しており、搥鉢を火鉢として二次加工して利用していた可能性がある。
- H82 1156は土師器皿である。胴部内面のナデは底部との境付近にみられるが明瞭ではない。
- H321 1157は古瀬戸の折縁中皿である。口縁部の屈曲が緩やかで、端面があまり窪まない。古瀬戸中I期に比定される。
- H336 1158は土師器皿である。器壁が非常に薄い。表面が荒れているためナデの痕跡が不明瞭であるが、内外面に横ナデが施されると思われる。胎土はやや粗であり、含まれる砂粒は少ない。1159・1160は白瓷系陶器の皿である。器高が低く器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。1161は白瓷系陶器の碗である。H337・H384から出土のものと接合した。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。1162は中国陶磁器の青白磁平形合子蓋である。軸葉の残存状態が悪いので、一見白磁に見える。口縁部内面が露胎になる。1163は中国陶磁器の白磁碗である。口縁部外面が玉縁状になる。大宰府分類白磁碗II類に比定される。
- H337 1164は白瓷系陶器の皿である。器高が低く器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。
- 1165～1167は白瓷系陶器の碗である。1165はH384出土のものと接合した。北部系7型式の明和1号窯

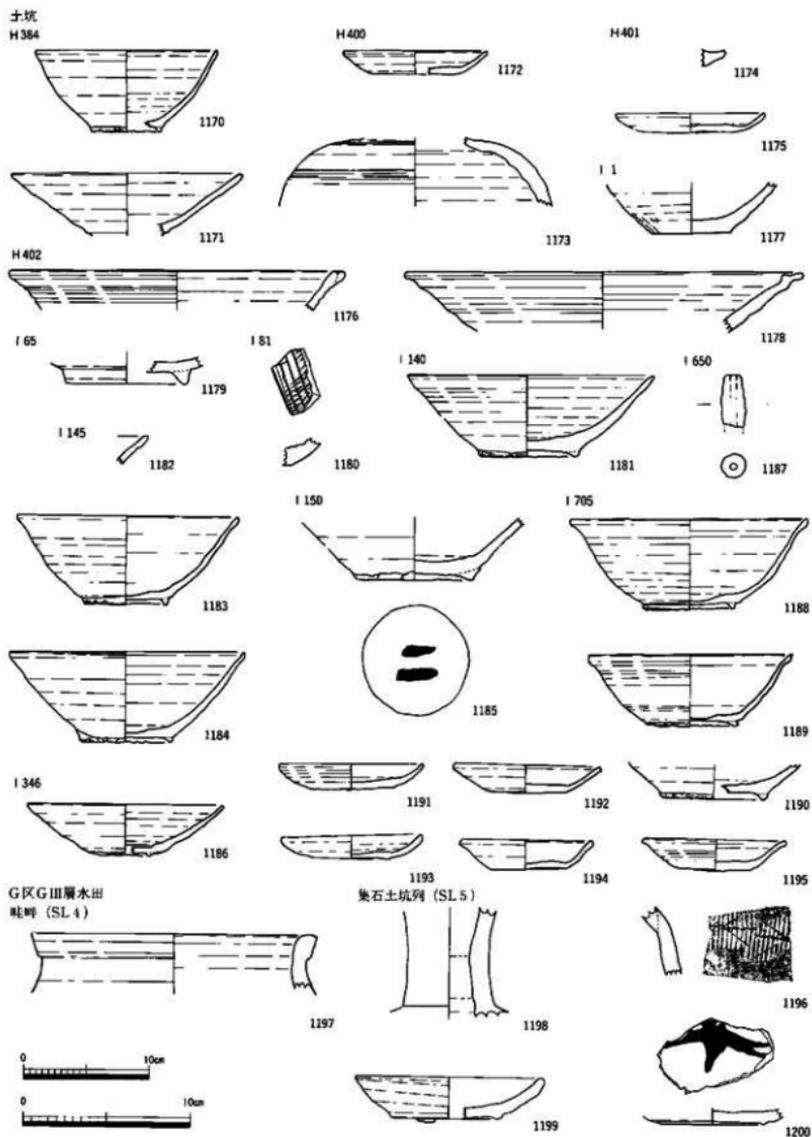


図266 遺構出土遺物 (中近世) ㊸ (S = 1/3、1176~1178・1196・1197は S = 1/4)

式に分類した。1166・1167は北部系9型式の大谷洞14号窯式に分類した。1167はH384出土のものに接合した。1168は古瀬戸の折縁深皿である。口縁部が外側に屈曲し、端部が肥厚している。胴部の回転削り等丁寧に調整が施されている。古瀬戸中II期に比定される。1169は常滑の甕である。縁帯が下に垂れない。常滑編年の6a型式に比定される。

H384 1170・1171は白瓷系陶器の碗である。1170は北部系9型式の大谷洞14号窯式に分類した。1171は口縁部が直線的に大きく開く。北部系8～9型式と考える。

H400 1172は白瓷系陶器の皿である。器高が低く、器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。1173は古瀬戸の瓢子と思われる。内面が露胎となる。古瀬戸後期に比定される。

H401 1174は、中世土師器である羽付の茶釜の一部と思われる。胎土はやや粗く、砂粒が多く混入する。1175は白瓷系陶器の皿である。器高が低く、器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。

H402 1176は古瀬戸の片口鉢である。口縁部外面が肥厚し、端部が沈線状になる。白瓷系陶器の南部系8型式に併行する。

I 1 1177は古瀬戸の楕鉢型小鉢と考える。内面が摩耗している。古瀬戸後IV古～後IV新期に比定される。1178は古瀬戸の片口鉢である。白瓷系陶器の南部系10型式に併行する。

I 65 1179は白瓷の碗である。断面三角形になる高台を持つ。内面の一部に灰釉が施軸されている。美濃(在地、美濃須衛)産と考えられる。丸石2号～明和14号窯式に比定される。

I 81 1180は古瀬戸の卸皿である。底部外面周縁から底面が露胎となる。古瀬戸後期に比定される。

I 140 1181は白瓷系陶器の碗である。北部系5型式に分類した。

I 145 1182は白瓷系陶器の玉縁碗である。北部系であり、大宰府分類白磁碗II類に似た口縁部形状を呈する。1183・1184は白瓷系陶器の碗である。北部系7型式の明和1号窯式に分類した。

I 150 1185は白瓷系陶器の碗である。南部系5型式に分類した。

I 346 1186は白瓷系陶器の碗である。北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。

I 650 1187は土鉢である。寸胴な形状を呈する。

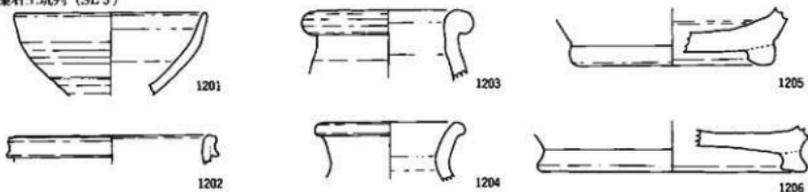
I 705 1188～1190は白瓷系陶器の碗である。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。1189は1188に比べて小振りであるが、調整や形状は同じである。1191～1195は白瓷系陶器の皿である。すべて完形品である。形状にはばらつきがあるが、器壁の厚さや調整の雰囲気は似ている。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。1196は常滑の甕である。肩部の破片であり、外面に押印文がめぐる。

G区GⅢ層水田跡(図266・267)

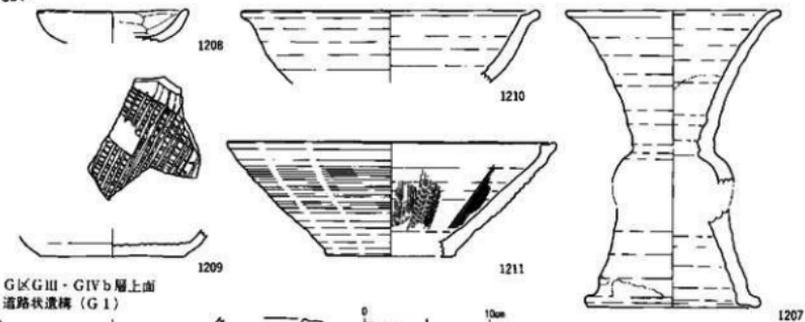
SL 4 1197は常滑の甕である。縁帯が頸部に密着しており、幅が狭い。常滑編年の9型式に比定される。

SL 5 1198は須恵器の長頸壺の頸部と考える。外面に灰釉が施軸される。1199は大窯の志野丸皿である。内外面にそれぞれ窯道具の痕跡が残る。大窯4期後半に比定される。1200は連房陶器の鉄絵皿である。底部の一部が露胎となる。連房第2小期に比定される。1201は古瀬戸の天日茶碗である。胴部から口縁部にかけて、直線的に広がりながら立ち上がる。古瀬戸後III期に比定される。1202は古瀬戸の甕である。口縁部を外側に肥厚して、側面を強くなでている。端部は沈線状になる。古瀬戸後期に比定される。1203は古瀬戸の祖母壺である。口縁部が玉縁状になる。頸部から口縁部にかけて内傾している。古瀬戸後期に比定される。1204は信楽の壺である。口縁部外面が玉縁状になる。胴部か

G区G田層水田
集石土坑列 (SL5)



SL 7



G区GIII・GIVb層上面
道路状遺構 (G1)

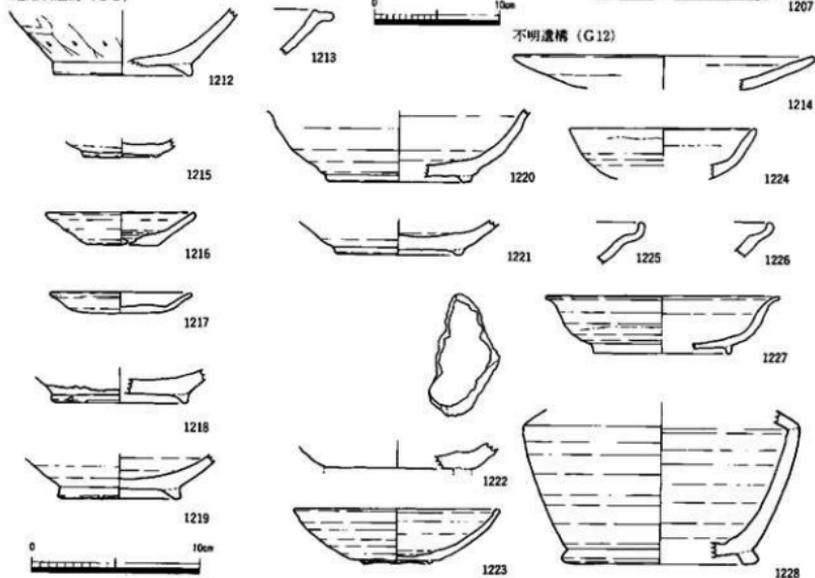


図267 遺構出土遺物 (中近世) ㊦ (S = 1/3、1202・1210~1213はS = 1/4)

ら頸部にかけて内傾し、そこから口縁部にかけて直線的に開く。白っぽい硬質な胎土であり、内面に長石の吹き出しがある。1205・1206は古瀬戸の有耳壺である。1206は畳付がやや丸みを帯びる。古瀬戸後IV古～後IV新期に比定される。1207は古瀬戸の花瓶である。口縁部は外反しながら開く。胴部に比して脚部が大きいため別個体の可能性もある。釉薬は赤っぽく発色する鉄釉であり、口縁部内外面と脚端部を除いた外面に施釉される。尊式ではない花瓶と考えられる。古瀬戸後IV古期に比定される。SL 7 1208は土師器皿である。他の同じサイズの土師器皿に比べやや厚ぼったい作りであるが、焼成は良好である。内面の横ナデが明瞭に残る。1209は古瀬戸の卸皿である。卸目が使用された痕跡はない。底部中央部付近のみ露胎となる。1210は古瀬戸の折縁深皿である。口縁端部が外側に屈曲する。屈曲部内面の窪みは弱い。古瀬戸中I期に比定される。1211は古瀬戸の楕形である。SL 5から出土した破片と接合している。口縁部分類の3類に分類した。

G区GⅢ・GⅣb層上面

道路状遺構 (図267)

G 1 1212・1213は古瀬戸の片口鉢である。底部から見て時計回りに削り、調整を行っている。1213は口縁部外面を拡張し、突帯状にしている。突帯の上面は窪んでいる。いずれも白瓷系陶器の南部系10型式に併行する。

不明遺構 (図267～270)

G13 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに記載する。

須恵器 (1228) 1228は長頸壺である。肩が張る器形になる。本来は下層のG81の遺物と考える。

中世土師器 (1214) 1214は土師器皿である。口縁が大きく開き、口縁部の内外面に横ナデが施される。

白瓷系陶器 (1215～1223) 1215は小碗である。南部系4型式に分類した。1216・1217は皿である。1216は底部に制作時の事故でできたと思われる穴が開いている。見込には穴を指で埋めようとした痕が残る。南部系5型式に分類した。1217は器高が低く、器壁が薄い。北部系7型式以降に分類した。1218～1223は碗である。1218は断面三角形の高台をもつ。南部系3型式に分類した。1219は1218と同様に断面三角形の高台をもつが、東濃産と思われる。北部系3型式の矢戸上野2号窯式に分類した。1220は胴部に強い丸味がある。南部系4型式に分類した。1221は底部内面が摩耗しており、炭化物と思われるものが付着している。南部系4型式に分類した。1222は内面に漆が付着している(第3部第7章参照)。高台は剥がれて残存していない。1223は北部系10型式の大洞東1号窯式に分類した。

古瀬戸 (1224～1226・1231・1234～1241・1243～1246・1248～1254・1256・1258) 1224は縁軸小皿である。胴部下半の丸みが強く、身が深い。古瀬戸後IV古期に比定される。1225・1226は古瀬戸の折縁中皿である。1225は口縁端部の折り返し部分が高い。古瀬戸後IV古期に比定される。1226は1225より口縁部の内湾が弱い。古瀬戸中I～II期に比定される。1231は天目茶碗である。胴部に丸みがあり口縁部が外反する。口縁端部が尖り気味になる。胴部下半から底部外面の錆軸は濃い。古瀬戸後IV新期に比定される。1234・1235は有耳壺である。1234はG16・G37などの不明遺構や包含層出土遺物など、かなり広範囲の遺物が接合した。もともと下層のG37に入れられていたのかもしれない。おそらく三耳壺になると思われる。頸部はかなり太い。胴部下半外面が露胎となる。古瀬戸後IV古～後IV新期に比定される。1235は底部が内側に彫らむ。畳付から高台内が露胎となる。古瀬戸中期に比定され

る。1236・1240は根米型瓶子である。1236は肩の張りが強い。頸部下の胴部外面に描ききの波状文が付される。古瀬戸後期に比定される。1240は肩の張りが強く頸部が細い。胴部下内面が露胎となる。古瀬戸後IV古期に比定される。1237は却目付大皿である。古代の遺構G81から出土したものと接合するが、おそらくG13と平面位置が重なっていることによる取り上げ段階の誤認であろう。却目は使用した痕跡がない。足は付かない可能性がある。胴部下から底部の内外面が露胎となる。古瀬戸後IV古～後IV新期に比定される。1238は折縁深皿である。古瀬戸中I～中II期に比定される。1239は大皿・深皿類である。下層の不明遺構G37から出土したものと接合した。胴部下外面から底部が露胎となる。古瀬戸後I～後II期に比定される。1241は桶である。口縁部を直角に外反させ、その上端を面取りしている。外面に一条の横位沈線があり、その端に指頭痕が見られる。古瀬戸後IV古期に比定される。1243は双耳小壺か耳付水注である。底部内面に渦巻き状の回転痕が残る。胴部下から底部外面にかけて露胎となる。古瀬戸後III～後IV古期に比定される。1244～1246は片口鉢である。1244は口縁部外面を外に拡張している。拡張部上端の窪みは弱い。1245は口縁部外面を外側に拡張し、その内側を強くなめている。1246は1244とほぼ同じ形状を呈する。1244・1245は白瓷系陶器の南部系10型式に併行し、1246は南部系9型式に併行する。1248～1254・1256・1258は播鉢である。1248～1254・1258は口縁部分類の5類に分類した。1248は口縁端部の折り返しが強い。1249は二次焼成を受けている。1252は口縁端部の上方への立ち上がりが弱い。1253・1258は縁帯部を沈線状に削って作り出している。1254はG16・SI.4などの出土遺物と接合した。底部内面はそれほど使い込まれていない。1256は底部である。

大窯(1229・1230・1232～1234・1242・1255・1257・1259)

1229・1230・1232・1233は天目茶碗である。1229は胴部に丸みがあり、胴部下から底部外面の銷軸は濃い。大窯1期に比定される。1230は底部から胴部にかけて直線的に広がり、口縁端部のみ外反する。胴部下外面の銷軸は薄い。大窯1期に比定される。1232は胴部に強い丸みがあり、口縁部は外反する。胴部下から底部外面にかけて露胎となる。大窯4期前半に比定される。1233は胴部から口縁部が垂直に立ち、口縁端部が強く外反する。大窯3期に比定される。1242は茶入である。底部内面に渦巻き状の回転痕が残る。胴部下から底部外面にかけて銷軸が施され、それ以外は鉄軸が施軸されている。大窯1～2期に比定される。1255・1257・1259は播鉢である。1255は不明遺構G16から出土したものと接合した。口縁部分類の6A類に分類した。1259は大窯4期後半に比定される。

連房陶器(1227・1260) 1227は反皿である。胴部下に強い丸みがあり、口縁部が強く外反する。胎土が精良で器壁が薄い。見込にピンの痕跡が残る。胴部下外面から底部が露胎となる。連房第1小期に比定される。1260は播鉢である。口縁端部を面取りしているが、肥厚が全く見られない。

常滑(1247・1261～1263) 1247は短頸壺である。口縁部が短く直立する。端部は面取りされる。常滑編年の5型式以前のものと考えられる。1261は壺と思われる。頸部が長く口縁部の屈曲が強い。縁帯下部の垂れは短い。常滑編年の5～6a型式に比定される。1262は甕である。縁帯が頸部に密着し、幅が狭い。常滑編年の9～10型式に比定される。1263はG201、G37、G60という多数の遺構から出土した。古代溝G201は埋土の認識の可能性が高いが、他にもG37等から出土したものが接合する事例が多く、遺構の側面と言えらるであろう。胎土が通常の常滑製品と比較して白っぽく、わずかに長石の吹き出しがみられる。内外面には粗い横ナデの痕跡が残る。

G区GIVb層上面
不明遺構 (G13)

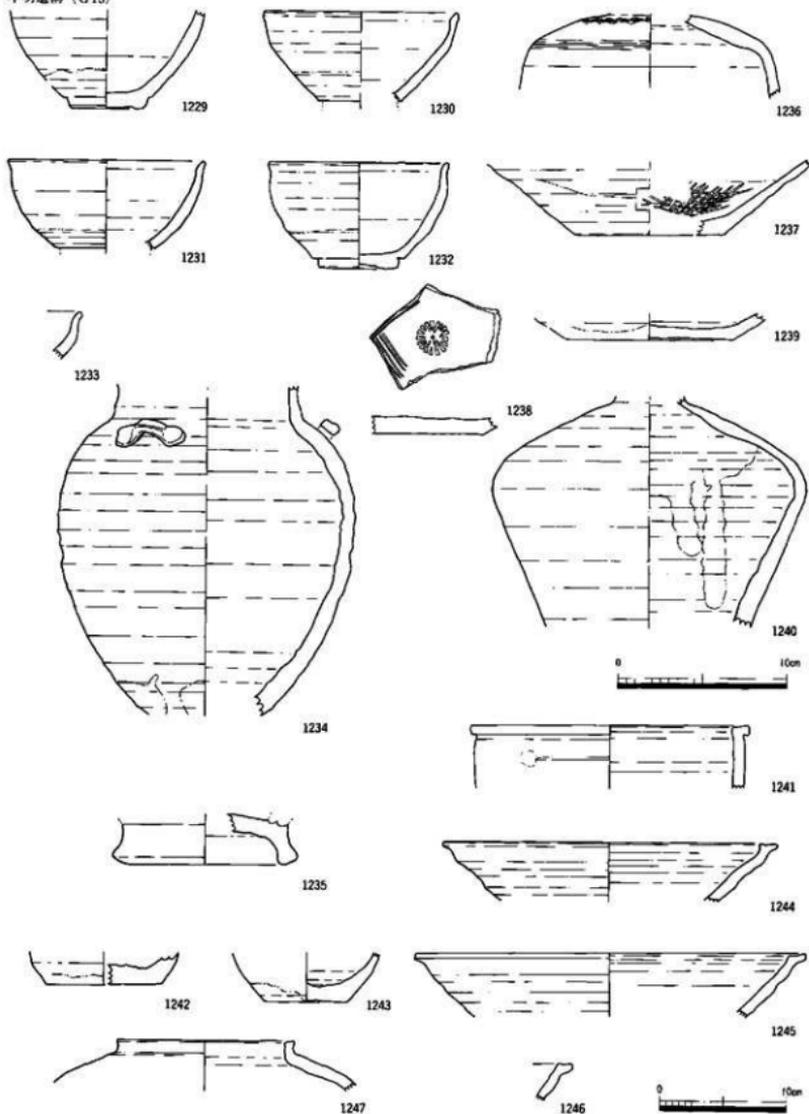


図268 遺構出土遺物 (中近世) ㊦ (S = 1/3、1237・1239・1241・1243~1247は S = 1/4)

G区GIVb層上面
不明遺構 (G13)

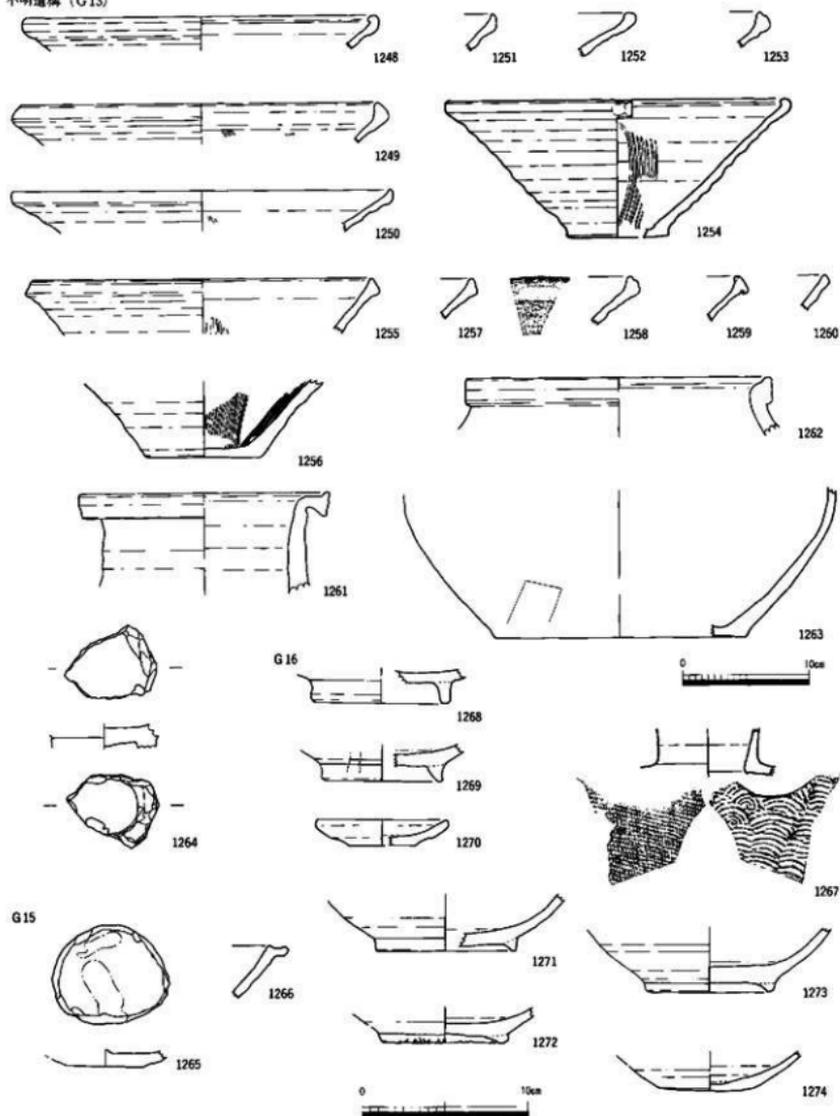


図269 遺構出土遺物 (中近世) ㊦ (1248~1263・1266・1267はS=1/4、

1264・1265・1268~1274はS=1/3)

中国陶磁器(1264) 1264は白磁碗である。底部・高台ともに器壁が厚い。破損断面全体に人為的に打ち欠いた痕跡が残る。高台内が露胎となる。大宰府分類の白磁碗IV類の底部に似る。

G15 1265は古瀬戸の緑釉小皿である。見込に鉄釉の溜まりが見られる。破損断面に人為的に打ち欠いた痕跡があり、加工円整と考える。1266は古瀬戸の片口鉢である。口縁部外面を拡張しており、その上面は窪んでいる。白瓷系陶器の南部系10型式に併行する。

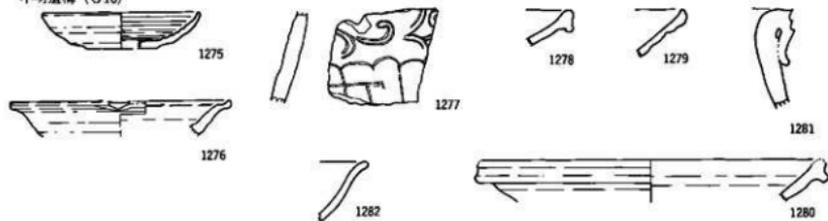
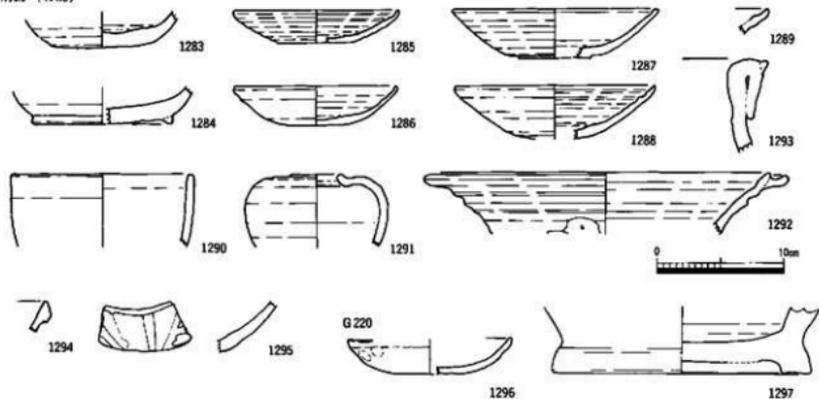
G16 1267は須恵器の横瓶である。G16から出土しているが、G81のものと同接しており、下層から混入したと考える。1268・1269は白瓷の碗である。1268は深碗と思われる。幅の広い高い高台を有する。内面が摩耗している。1269は外面が外傾する断面三角形の高台を持つ。胴部下半から底部外面が露胎となる。1270は白瓷系陶器の皿である。器壁が厚い。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。1271~1274は白瓷系陶器の碗である。1271は断面三角形になる高台を持つ。高台は底部周縁に付される。灰釉が施軸されている可能性がある。北部系3型式の矢戸上野2号窯式に分類した。1272は南部系5型式に分類した。1273は断面三角形になる高台を持ち、稜線はない。底面内面が摩耗している。南部系4型式に分類した。1274は北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。1275は大窯の灯明皿である。焼締陶器であり、釉薬が施軸されない。大窯1期に比定される。1276は連房陶器の折縁皿である。口縁部が強く外反し、端部が上方に立ち上がる。口縁端部の片口に見える部分は輪花の可能性があり。連房第3~4小期に比定される。1277は古瀬戸の瓶子である。肩部下の破片と考える。外面には線刺による文様が付される。内面も釉薬が薄く施軸されている。1278・1280は大窯の楕鉢である。1278は口縁部分類の10A類、1280は13A類に分類した。1279は古瀬戸の楕鉢である。口縁部分類の5類に分類した。1281は常滑の甕である。縁帯の幅が広く、頸部に密着している。常滑編年の9型式に分類した。1282は中国陶磁器の青磁碗である。口縁部が外反し、内外面ともに無文である。釉薬は薄い。上田分類のD類に比定される。

G区GV層上面

溝跡(図270)

G39 1283は須恵器の杯身B類である。やや器壁が厚い。1284・1285・1287・1288は白瓷系陶器の碗である。1284は南部系5型式に分類した。1285・1288は北部系11型式の生田2号窯式に分類した。1287は北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。1286は大窯の灯明皿である。形状が生田2号窯式に似る。大窯1期に比定される。1289は古瀬戸の卸皿である。口縁部内外面に灰釉を施軸する。古瀬戸後IV新期に比定される。1290は連房陶器の丸碗である。1291は古瀬戸の双耳小壺である。胴部に丸みがあり、胴部上半の張りが強い。古瀬戸後III~後IV古期に比定される。1292は古瀬戸の片口鉢である。口縁部外面を突帯状に拡張している。突帯上面は強く窪む。白瓷系陶器の南部系10型式に併行する。1293は常滑の甕である。1281とはほぼ同じ形状を呈する。常滑編年の9型式に分類した。1294は中国陶磁器の白磁碗である。口縁部外面が玉縁状になる。大宰府分類の白磁碗IV類に比定される。1295は中国陶磁器の龍泉窯系青磁碗である。外面に片切り彫りによる飾蓮弁文が付される。破損断面の一部に人為的に打ち欠いた痕跡が残る。上田分類のB1類に比定される。

G220 1296は土師器皿である。非常に薄手で形状が整っている。口縁端部が尖り気味で胴部と底部の境に明確な稜があるが、内面の調整は摩耗のため不明である。1297は古瀬戸の有耳壺である。高台内面のみ露胎となる。古瀬戸後IV古~後IV新期に比定される。

G区GIVb層上面
不明遺構 (G16)G区GV層上面
清跡 (G39)

不明遺構 (G37)

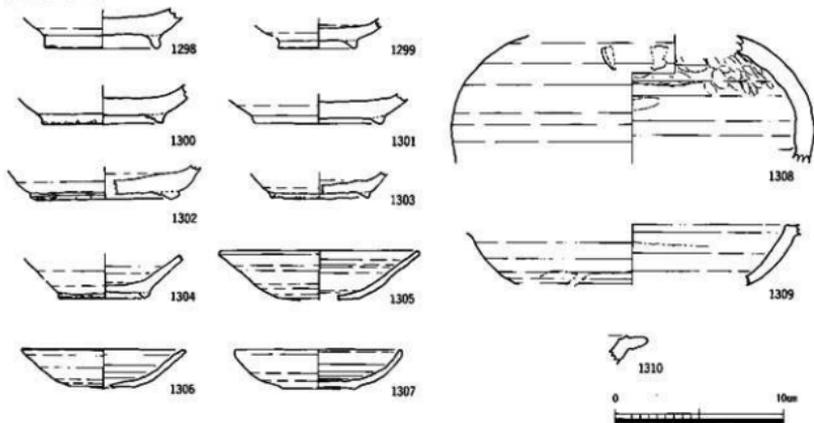


図270 遺構出土遺物 (中近世) ㊦ (S = 1/3、1278~1281・1292・1293・1310はS = 1/4)

不明遺構（図270～272）

G37 多数の遺物が出土しているため、種別ごとに掲載する。

白瓷系陶器（1298～1305・1308） 1299は白瓷系陶器の小碗である。北部系4型式の谷狭間2号窯式に比定される。1298・1300～1305は白瓷系陶器の碗である。1298は高台の外面向直立し、その断面形が三角形に近い。北部系3型式の矢戸上野2号窯式に分類した。1300は見込が摩耗している。南部系4型式に分類した。1301・1302は南部系であり、それぞれ5型式と4型式に分類した。1303は北部系7型式の明和1号窯式、1304を北部系8型式の大畑大洞4号窯式、1305を北部系11型式の脇之島3号窯式に分類した。1308は有耳壺である。おそらく美濃須衛型¹⁹⁾の四耳壺になると思われる。胴部上半の内面に、輪積みや頸部接合時のものと思われる指頭痕が多数残る。北部系6型式に併行する可能性が高い。

古瀬戸（1309～1311・1316～1325） 1309は折縁中皿である。口縁屈曲部内面が突帯状になる。胴部内面と胴部下半外面が露胎となる。古瀬戸後I～II期に比定される。1310・1320は折縁深皿である。1310は口縁部が外側に屈曲し、内面に段が形成されている。古瀬戸後II期に比定される。1320は口縁屈曲部手前の内面に段を有する。外面の回転調整痕は細かい段状になっており、工具を用いていると思われる。古瀬戸後III期に比定される。1311は天目茶碗である。高台径がやや小さく、底部から胴部にかけて直線的に広がる。底部外面の錆輪は濃い。古瀬戸後II期に比定される。1316は有耳壺（三耳壺）である。G区中央部の広い範囲に渡って出土した（G38・SL5・SL7）。残存する耳の位置から三耳壺と推定した。古瀬戸後IV占～後IV新期に比定される。1317・1318は古瀬戸の片口鉢である。1317は口縁部外面を拡張し、突帯状にしている。突帯の上面は窪んでいる。白瓷系陶器の南部系10型式に併行する。1318は底部である。白瓷系陶器の南部系9～10型式に併行する。1319は卸目付大皿である。口縁部内面に突帯が付される。胴部下半内外面が露胎となる。古瀬戸後IV新期に比定される。1321は徳利である。胴部下端に帯状に付着した重ね焼きと思われる痕跡が残る。内面の一部と底部外面が露胎となる。古瀬戸後IV新期に比定される。1322は口広有耳壺である。一部を除いて内面露胎となる。古瀬戸後III～後IV古期に比定される。1323～1325は播鉢である。1324は胴部下半から底部内面が使用によって摩耗している。ともに口縁部分類の4類に分類した。1325は播鉢の底部である。G区中央付近の広い範囲から出土している。

大窯（1306・1307・1312～1314・1326・1327） 1306・1307は灯明皿である。焼締陶器であり、釉薬は施釉されない。1306は大窯3期に、1307は大窯2期に比定される。1312～1314は天目茶碗である。1312は底部から胴部にかけて丸みがあり、口縁端部のみ外反する。器高が低い。胴部下半から底部外面の錆輪は薄い。大窯1期に比定される。1313は底部から胴部にかけてやや丸みがあり、口縁端部が外反する。胴部下半から底部外面が露胎となる。大窯3期に比定される。1314は胴部にやや丸みがある。口縁部は直立し、端部のみ外反する。底部外面周縁が露胎になる。大窯4期前半に比定される。1326・1327は播鉢である。1326は口縁部分類の13B類、1327は6B類に分類した。

連房陶器（1315） 1315は丸碗である。見込に鉄絵が描かれる。連房第1小期に比定される。

常滑（1328～1330） 1328は片口鉢である。古瀬戸片口鉢に比べ胴部の丸みが強い。外面に削り調整が施される。1329・1330は甕である。1329は口縁端部をつまみ上げており、端部外面の下端が角張る。常滑編年の4型式に比定される。1330は縁帯が上下に幅広く拡張されている。常滑編年の7型式に比

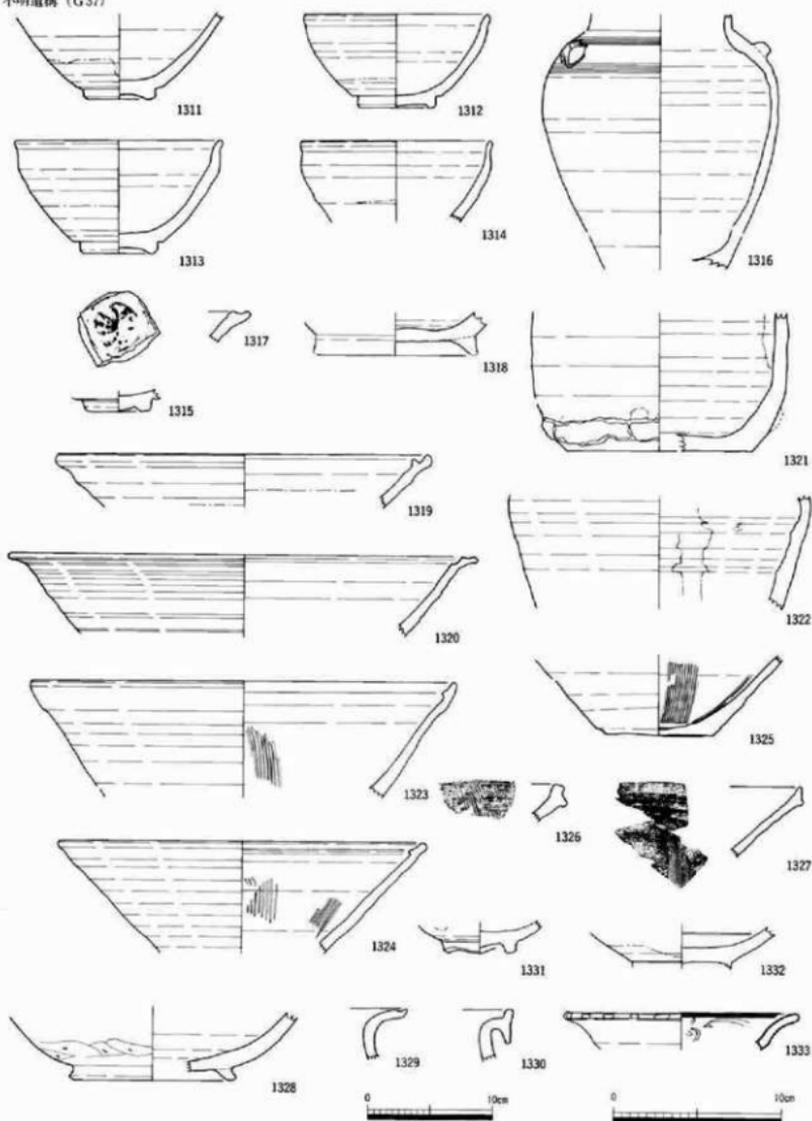
G区GV層上面
不明遺構 (G37)

图271 遺構出土遺物 (中近世) ㊦ (1311~1315・1321・1322・1331~1333は S = 1/3、

1316~1320・1323~1330は S = 1/4)

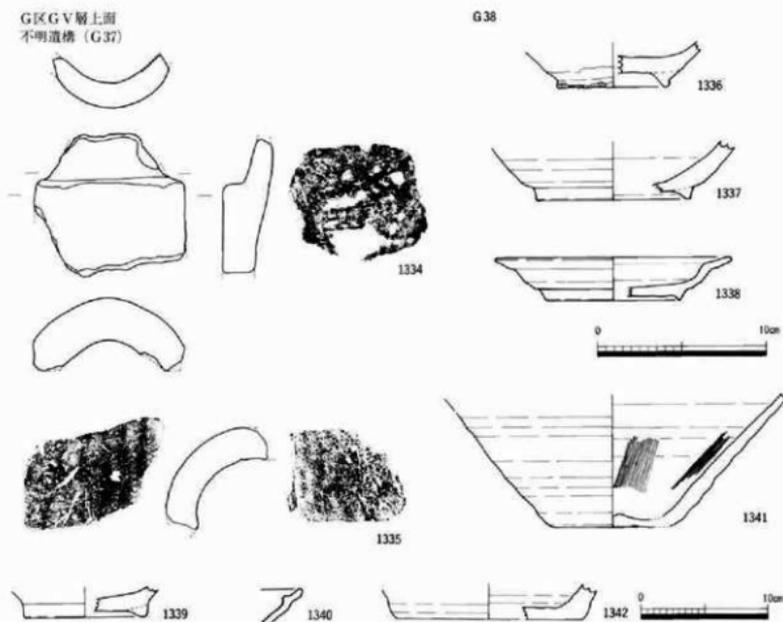


図272 遺構出土遺物 (中近世) ⑤ (S = 1/4、1336・1338はS = 1/3)

定される。

中国陶磁器 (1331~1333) 1331は白磁皿である。扶りのある高台を持つ皿であり、内面には同器種の重ね焼きの痕跡である目跡が残る。また、畳付に釉薬が付着している。胴部下半から底部外面が露胎となる。森田分類のD群に比定される。1332は白磁碗である。高台の幅が細く、見込の外側に沈線状の段が付される。胴部下半から底部にかけて露胎となる。大宰府分類の白磁碗V類底部に似る。1333龍泉窯系青磁皿の稜花皿である。口縁端部に連続した輪花がみられる。釉薬はやや厚めに施釉されている。

瓦 (1334・1335) 1334・1335は丸瓦である。1334は遺存状況が悪く、内外面の調整は不明である。1335は内面に一部縄目 (吊り紐痕) のようなものが見えるが判然としない。

G38 1336は白瓷系陶器の碗である。断面が三角形となり、やや高めの高台を有する。見込が摩耗している。北部系4型式の谷狭間2号窯式に分類した。1337は白瓷系陶器の片口鉢である。北部系であり、内面が摩耗している。1338は連房陶器の折縁皿である。口縁部が外側に屈曲し、直線的に開く。長石釉が全面に施される。連房第1~2小期に比定される。1339は白瓷系陶器の碗である。高台径がやや小さい。胎土がやや粗で美濃須賀産の可能性がある。北部系4型式に比定される。1340は古瀬戸の擂鉢である。口縁部分類の4類に分類した。1341は古瀬戸が大窯の擂鉢である。胴部下半から底部

内面にかけて使用により摩耗している。1342は産地不明中世陶器の甕である。摩耗のためか外面が滑らかになっている。内面には全面に自然釉薬が付着している。胎土がやや粗で美濃須衛産の可能性はある。

包含層出土中近世遺物（1343～1371、図273・274）

以下に地区ごとに記載する。

A区（1343～1345） 1343は連房陶器の香炉である。口縁部から胴部に掛けて内傾し、底部には三足が付される。底部外面が露胎となり、長石釉のあと灰釉を流しかけている。連房第3～4小期に比定される。1344は中国陶磁器の染付碗である。漳州窯系の碗と考えられ、見込が盛り上がるいわゆる饅頭心の形状を呈する。器壁はやや厚い。外面に牡丹唐草文が描かれる。小野分類の碗E群に比定される。1345は中国陶磁器の青磁大甕である。口縁部を折り曲げ、受口状にしている。内面にはソギが施される。釉はやや厚めで発色がよい。大宰府跡のSX1200や一乗谷遺跡からはほぼ同じものが出土している¹³⁾。

B区（1346～1351） 1346～1348は土師器皿である。1346は内面に弧状のナデが明瞭に残る。内面と口縁部外面に漆が付着している。1348は底部と胴部内面の境目が強いナデによって窪んでいる。1349は大窯の灯明皿である。焼締陶器であり釉薬が施釉されない。大窯2期に比定される。1350は大窯の腰折皿である。底部から胴部にかけて直線的に広がり、口縁部がわずかに外反する。底部は露胎の可能性はある。大窯3期前半に比定される。1351は大窯の天日茶碗である。全体的に厚ぼったいつくりである。底部外面周縁の錆釉はやや薄い。大窯1期に比定される。

C区（1352・1353） 1352は近世常滑の甕である。C71から出土したもの（291・292）とはほぼ同じ形状を呈する。1353は連房陶器の柳茶碗である。胴部外面の柳文はかなり簡略化されている。高台周縁が露胎となる。連房第10小期に位置付けられる。

E区（1354） 1354は白瓷系陶器の皿である。底面に「十」の墨書が見られる。北部系7型式以降に分類した。

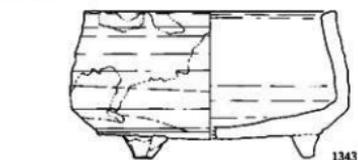
H区（1355） 1355は土師器皿である。口縁部を揃むような調整を行っている。

G区（1356～1371） G区の水田層から出土した遺物をここに一括して掲載する。本来は層位ごとに掲載すべきであるが、層位間接合が多くみられる点などを考慮し、種別ごとに掲載する。

白瓷系陶器（1356～1361・1363） 1356は小碗である。内面が摩耗している。南部系4型式に分類した。1357は皿である。底径がやや小さく、底部から口縁部にかけて直線的に開く。南部系5型式に分類した。1358～1361・1363は碗である。1358は胴部に強い丸みがあり、断面が角状になる高台をもつ。北部系4型式の谷秋間2号窯式に分類した。1359は北部系7型式の明和1号窯式、1360は北部系11型式の脇之島3号窯式、1361・1363は北部系11型式の生田2号窯式に分類した。

古瀬戸（1365・1367・1368） 1365は双耳小壺の蓋である。頂部の把手が欠損している。底面が露胎となる。古瀬戸後Ⅲ～後Ⅳ古期に比定される。1367は有耳壺である。疊付から高台内が露胎となる。古瀬戸後Ⅲ～後Ⅳ期に比定される。1368は古瀬戸の摺鉢である。胴部下半から底部内面にかけて使用により摩耗している。口縁部分類の5類に分類した。

A区包含層



1343



1345



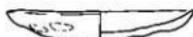
1344



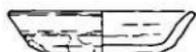
B区包含層



1346



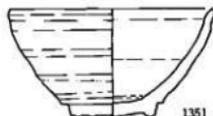
1347



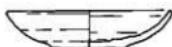
1350



1348

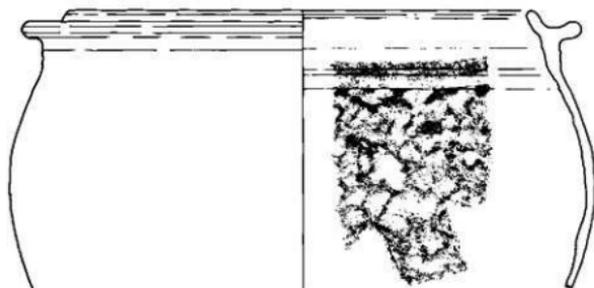


1351



1349

C区包含層



1352



1353

E区包含層



1354



H区包含層



1355



図273 包含層出土遺物（中近世）①（S = 1/3、1345はS = 1/4、1352はS = 1/6）

G区包含層

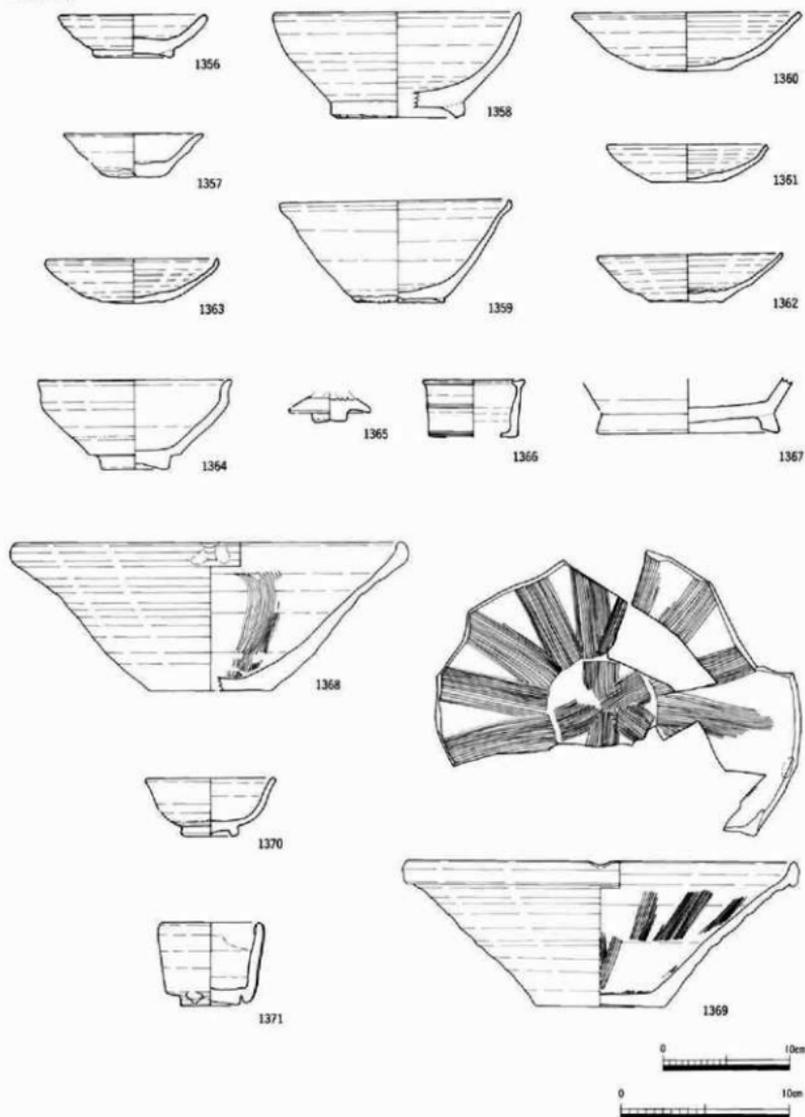


図274 包含層出土遺物（中近世）②（S = 1/3、1367~1369はS = 1/4）

大窯 (1362・1364・1366・1369) 1362は灯明皿である。指頭によるナデが施されている。大窯1期に比定される。1364は天目茶碗である。底部から胴部にかけて直線的に広がり、口縁部が直立して強く外反する。器高が低い。胴部下半から底部にかけての鏝軸は非常に薄い。大窯2期に比定される。1366は筒形香炉である。小型の焼締陶器であり、軸葉が施軸されない。胴部から口縁にかけて緩やかに開く。口縁部を内側に拡張し、突帯状にしている。胴部中央と下端に横位の沈線を付している。大窯3期前半に比定される。1369は摺鉢である。内面があまり摩耗していない。8A類に分類した。

中国陶磁器 (1370・1371) 1370は白磁杯である。口縁部が緩やかに外反する。高台は外側が面取りされて畳付は狭い。胴部下半から底部にかけて露胎となる。森田分類のE群に比定される。1371は粗製の筒形香炉であり、胴部から口縁部にかけて直線的に若干開く。三足は浮いた状態になっている。三足の先端と高台、胴部から底部内面が露胎となる。大阪城出土品にほぼ同じものがある¹⁴⁾。16世紀末期ぐらいのものであろう。

古代の遺構から出土した遺物

7世紀後葉を起源とする可能性が高いG201やH4などの溝跡では、上層から中世の遺物が出土するが、ここで一括して掲載する。

竪穴住居跡 (図275～278)

F4 (1372～1393)

須恵器 (1372～1378・1380・1381) 1372～1374は杯蓋C類である。1372はサイズの大きい宝珠が特徴である。1373は頂部から胴部にかけて丸味があり、宝珠がやや大きい。1374は胴部にやや丸味があり、返り部分外面の屈曲が見られない。1375～1377・1380・1381は杯身B類である。1375は胴部から口縁部にかけて直線的に広がる。1376は鉄鉢に似た形状となるが小型であり、底部は平坦になる可能性が高い。1377は口縁端部が内外面に拡張しており、端部がやや窪む。底部は摩耗している。尾張産と考える。1380・1381は接合しないが同一個体と考えられる。外面に強い二次焼成を受けて発泡している。1378は壺蓋である。

白瓷 (1379) 1379は壺類か瓶類と考える。10～11世紀前半の美濃須衛産と比定される。

土師器 (1382～1388) 1382は暗文土器の皿の底部破片と思われる。表面にヘラミガキによる斜方向の暗文が見られる。焼成が良く、胎土が赤褐色を呈する。1383は土鍾である。古代のものと思われる。1384～1388は長胴甕B類である。1385は小型の長胴甕であり、胴部に丸味がある。1386内面の横ハケが胴上半にも見られる。1387は底部と胴部を接合した痕跡が残る。底部外面は胴部より粗いハケで調整されており、底部外面にも見られる。1388は底部と胴部を接合した痕跡が残り、丁寧な横ナデで調整されている。底部外面にもハケ調整が見られる。

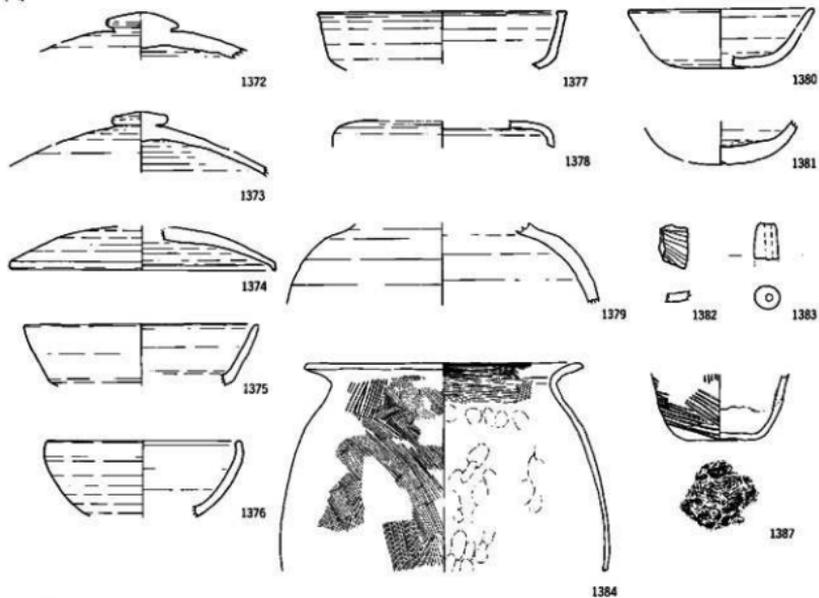
F4-P14 (1389) 1389は土師器の長胴甕B類である。頸部外面に横位のハケ調整が行われている。

F4-P15 (1390) 1390は土師器の長胴甕B類である。角が明瞭に分る工具によってハケ調整を行っており、底部外面にも同様の調整を施している。内面のナデは底部との接合部分の厚みを消すために施されていると考える。外面に煤が付着している。

F4カマド内 (1391～1393) 1391は須恵器の杯蓋C類である。胴部にやや丸味があり、器高が高い。返り部分外面の屈曲が見られない。1392は鉢類である。焼成が悪く、還元軟質を呈する。1393は土師

竪穴住居跡

F 4



F 4-P 14



F 4-P 15



F 4 カマド内

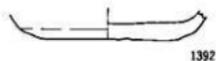


図275 遺構出土遺物 (古代) ① (S = 1/3、1377~1379・1384~1390・1393は S = 1/4)

器の長胴壺B類である。やや小型であり、口縁部の屈曲が弱い。外面のハケ調整は2種類の工具が用いられている。

F122 (1394~1406)

須恵器 (1394~1401) 1394は杯身B類と思われる。胴部に丸味があり、1376のような器種になる可能性がある。破損断面に摩耗が見られる。1395は杯身C類である。高台は底部外面端部に付され、畳付が丸味を帯びる。1396は杯身か碗であろう。高台は断面が平行四辺形を呈し、外側に開く。1397は杯蓋C類である。大型の杯蓋であり、全体的に薄手でシャープなつくりである。1398は碗である。高台は、底部外面端部のかなり外側に付される。1399は杯身B類である。1377とほぼ同様な形状を呈し、頂部外面が摩耗している点も同様である。尾張産と考える。1400は、短頸壺の頸部から胴部上半にかけての破片と思われる。1401は長頸壺である。肩が張るタイプと考える。

土師器 (1402~1404) 1402は長胴壺A類である。口縁部から頸部にかけて横ナデによって調整され、口縁端部は面取りされつまみ上げられる。胎土はやや密で橙色である。1403は焼塩土器である。薄手であり、口縁部が肥厚して端部がやや尖る。1404は長胴壺A類である。口縁部から頸部にかけて横ナデによって調整され、口縁端部は面取り気味になる。胎土はやや密で橙色である。

その他 (1405) 1405は白瓷系陶器の碗である。上層からの混入品であろう。漢字らしき文字が墨書で書かれる。北部系4型式の谷狭間2号窯式に分類した。

F122-P5 (1406) 1406は須恵器の杯蓋C類である。返り幅がやや広く、返り上部外面の屈曲がない。

F144 (1407) 1407は須恵器の杯身C類である。全体的にシャープで薄手なつくりであり、高台は底部外面端部のかなり内側に付される。

F185 (1408) 1408は須恵器の鉢で、佐波理写である。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整が見られ、口縁部外面に1条の沈線がある。胎土が酸化焼成している。尾張産と考える。

F189 (1409・1410) 1409は中国陶磁器の白磁皿である。上層からの混入品であろう。器形は大宰府白磁皿分類のVI類に近いが、その他の特徴は異なる。見込の周縁に沈線状の段があり、底部外面は中心部が窪む。釉薬は空色がかかった発色で透明感があり、底部外面を除いて施釉される。1410は土師器の長胴壺B類である。他の長胴壺に比して頸部が長く、口縁部が外反している。頸部下の内面に横位の板ナデが施される。

F284 (1411・1412) 1411は土師器の焼塩土器である。厚手であり、口縁部外面に肥厚がみられる。口縁端部は面取りされる。1412は土師器の長胴壺B類である。内面に指頭痕が残る。

F374 (1413~1424)

須恵器 (1413・1414) 1413は杯蓋C類である。宝珠摘はやや小さい。頂部と胴部の境に明瞭な段が見られる。1414は壺B類である。胴部の最大径の位置に把手が着くタイプである。当て具の当て方が最大径の上下で異なっている。

土師器 (1415~1419) 1415は焼塩土器である。やや厚手であり、口縁部付近の器壁が最も厚い。1416は長胴壺B類である。小型の壺と考える。1417は長胴壺A類である。やや小型の壺で長胴壺A類とB類の折衷的な様相をもつ。口縁端部はつまみ上げが見られ、その他の調整はB類と同じであるが、ハケが非常に粗く単位が不明瞭である。胎土はA類と同じである。1418は長胴壺B類である。口縁部が

聚穴住居跡

F 122



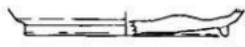
1394



1397



1398



1395



1399



1402



1396



1400



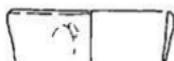
1404



1405



1401



1403

F 122-P 5



1406



F 144

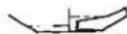


1407

F 185



1408



1409

F 189



1410

F 284



1411



1412



図276 遺構出土遺物（古代）②（S = 1/3、1400~1402・1404・1410・1412は S = 1/4）

くの子に屈曲する。1419は長胴甕B類である。F384から出土した遺物と接合した。内面には底部と胴部を接合した際の粘土板が残る。底部周縁の外面ハケ調整はその接合後に行われている。底部内面には整形時のものと思われる爪の痕が残る。外面には煤が付着している。

F374-P 2 (1420~1422) 1420・1421は須恵器の杯身B類である。1420は全体に厚ぼったいつくりで、胴部が直線的に広がり口縁部がわずかに外反する。1421は胴部から口縁部にかけてわずかに外反する。1422は土師器の長胴甕B類である。口縁部の屈曲・外反が強く、端部に沈線状の窪みがみられる。

F374-P 1 (1423) 1423は土師器の焼塩土器である。薄手であり、口縁端部がやや尖る。径が大きい。

F374-SF (1424・1425) 1424は須恵器の杯蓋B類である。全体に厚ぼったいつくりで、胴部から頂部にかけてやや丸味がある。返りの上端はわずかに屈曲する。1425は須恵器の甕B類である。頸部から口縁部にかけて外反し、端部が上方に拡張している。口縁端面には、沈線状の窪みがある。叩き調整は胴部の最大径部分で方向を変えて施されている。

F529 (1426~1429) 1426は須恵器の杯蓋C類である。口縁部の返りが短い。返りの上端が屈曲している。1427は須恵器の平瓶である。把手は欠損している。1428は土師器の長胴甕B類である。口縁屈曲部が短い。1429は須恵器の甕A類である。頸部が長くなるタイプであり、内面に当て具痕が見られない。尾張産の様相を呈する。

F384 (1430~1437)

須恵器 (1430~1433) 1430・1432は杯身B類である。1432は焼成が悪く、還元軟質を呈する。1431は杯身C類である。全体に厚手で特に底部の器壁が厚い。高台が剥がれて残存していない。鉄分が吹き出しており、美濃須衛(老洞窯)産か尾張産と考えられる。1433は須恵器の鉢A類である。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部のみ屈曲して内傾する。焼成が悪く、還元軟質を呈する。

土師器 (1434~1437) 1434は長胴甕A類である。口縁端部の調整がない。1435~1437は長胴甕B類である。1436は長胴甕B類で、外面ハケ調整は底部接合後に施されている。内面の指頭痕は押し引いたように長いものが多い。1437は長胴甕B類である。胴部下端の内面に、底部と接合した時の粘土板を張り付けた痕跡が残る。

F477 (1438~1447)

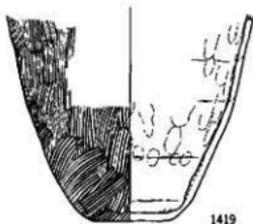
須恵器 (1438~1443) 1438・1439は杯蓋B類である。1438は宝珠橋は小さい。頂部が平坦になる。1439は胴部にやや丸味があるが、頂部は平坦になる。口縁部の返りは短い。内面に自然釉が付着している。1440・1441は杯身B類である。全体的に薄手のつくりである。胴部にやや丸味があり、口縁部が大きく開く。1441は全体的に薄手のつくりである。1442は杯身C類である。角状の高台を有する。高台は底部外面端部の内側に付される。1443は甕か鉢の口縁部と考える。

土師器 (1444・1445) 1444は長胴甕B類である。底径が小さく、胴部が大きく開く。外面のハケは非常に粗い。内面の指頭痕は上方から下方に押し引いている。1445は土師器である。中央部に最大径があり、両端がかなり細くなる。

F477-SK 4 (1446~1447) 1446は須恵器の脚台付盤である。口縁部が屈曲して直線的に広がる。脚台は剥がれて残存していない。1447は土師器の長胴甕B類である。SK 5から出土したものと接合した。

堅穴住居跡

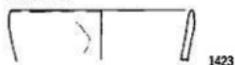
F 374



F 374-P 2



F 374-P 1



F 374-SF



F 529

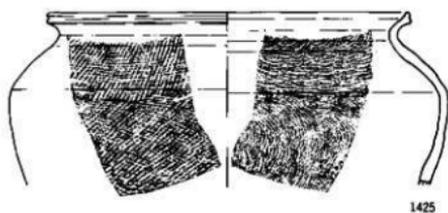
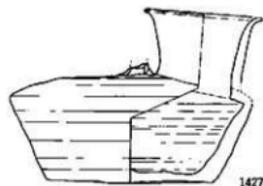


図277 遺構出土遺物(古代)③ (S = 1/3、1414・1416~1419・1422・1425・1427~1429はS = 1/4)

竪穴住居跡
F 384



1430



1431



1432



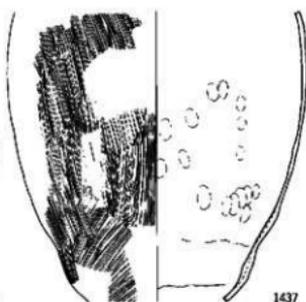
1433



1434



1436

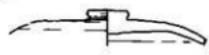


1437



1435

F 477



1438



1440

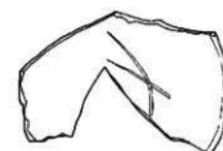
F 477-SK 4



1446



1441



1439



1442



1443



1445



F 575-P 4

1447



1444

F 575



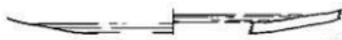
1448



1449



1452



1450



1451



図278 遺構出土遺物（古代）④（S = 1/3、1433~1437・1443・1444・1447・1451・1452はS = 1/4）

口縁部の屈曲がかなり強く、胴部上半の丸味が強い。また、非常に器壁が薄い。

F575 (1448~1452)

須志器 (1448~1450) 1448は杯蓋B類である。頂部に丸味が無くやや扁平な形状を呈する。1449は杯身B類である。焼成が悪く、還元軟質を呈する。1450は盤であるが、台または脚が付くかどうかは不明である。焼成が悪く還元軟質を呈する。

土師器 (1451) 1451は長胴甕B類である。内面に胴部との接合痕が残る。

F575-P4 (1452) 1452は土師器の長胴甕B類である。屈曲した口縁部が短い。

掘立柱建物跡 (図279)

SH52 (1453) 1453は須志器の杯蓋C類である。柱穴F1428から出土した。返り上部に屈曲が見られる。

土坑 (図279)

F771 (1454~1457) 1454はロクロ土師器の皿と思われる。口径の大きさに比して、器高が低い印象を受ける。胴部に丸味があり、口縁部が外反する。1455はロクロ土師器の碗である。形態は白瓷の碗に似るが、器壁が厚い。高台は底部外面端部の外側に付される。1456は白瓷の碗である。外反して断面形がハの字になる高台を持つ。灰釉は口縁部から胴部上半にかけて塗り掛けされる。1457は白瓷の壺・瓶類であろう。底部内面に渦状の工具痕が残る。灰釉は胴部上半外面から垂れたものと思われる。

F1143 (1458~1468) 1458はロクロ土師器の碗であろうか。接合はしないが、1460のような底部が付くと思われる。1459はロクロ土師器であり、口縁部の傾きから皿になる可能性がある。1454とはほぼ同じ器形と思われる。1460はロクロ土師器の碗である。高台の特徴や器形は灰釉陶器とはほぼ同じと言える。底部外面には炭素が吸着している。1461はロクロ土師器の小碗あるいは杯と考える。1462は白瓷の段皿である。高台は短く、底部外面外側に付される。灰釉は口縁部内外面に塗り掛けされる。大原2号窯式に比定される。1463は白瓷の耳皿である。断面形が楕円形となる特徴的な高台を有する。高台外面と高台内に煤が付着している。1464は白瓷の碗である。やや外反する高台を有する。灰釉は胴部外面まで施釉されるが、一部が垂れて畳付の内側にまで達している。1465~1468は土師器の清輝型甕である。1465は口縁部が屈曲して、端部が下に垂れる。1466は他の個体と比べ、胴部が直線的になる。1467は、口縁部が肥厚というより厚さの違う粘土を積み上げて整形されている。口縁屈曲部外面に2条の接合痕が残る。1468は口縁部屈曲部内面を肥厚して角を整形している。いずれも金雲母を始めとする多量の砂粒が混入する。

埋納ピット (図279)

F794 (1469~1470) 1469は白瓷の皿類と考える。高台は底部外面端部のかなり外側に付される。内面に粘土紐を巻き上げて形成した痕跡が見られる。1470は須志器の甕である。内面には板状の当て具の角が残る。胴部下半内外面には帯状に煤が付着しているが、破損断面にもみられることから破損後のものと考えられる。

F799 (1471) 1471は白瓷の碗である。外反して断面形がハの字になる高台を持つ。灰釉は口縁部から胴部上半にかけて塗り掛けされる。

堀立柱建物跡
SH52 (F 1428)



1453

土坑
F 771

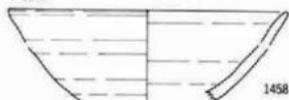


1454



1455

F 1143



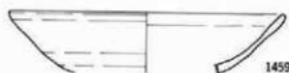
1458



1456



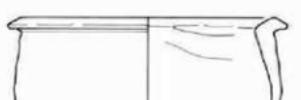
1457



1459



1462



1465



1460



1466



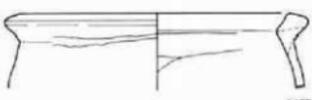
1466



1461



1463



1467



1464



1468

埋納ピット
F 794

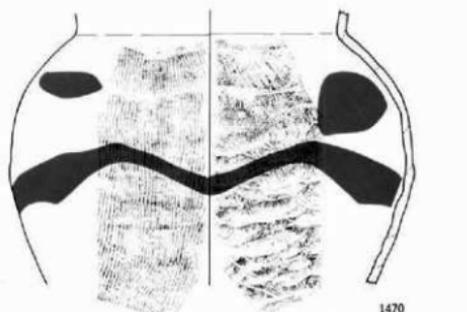


1469

F 799



1471



1470



図279 遺構出土遺物 (古代) ⑤ (S = 1/3、1465~1468・1470はS = 1/4)

道路状遺構 (図280)

G81 (1472~1481) 1472・1473・1475は須恵器の杯身B類である。1472は胴部下半に丸みがあり、口縁部が外反する。外面には沈線状の回転痕が見られる。へう記号は「廿」の形に似る。1473は焼成が悪く還元軟質を呈する。1475は杯身としたが、杯蓋の可能性もある。1474は杯蓋A類である。口縁部の返りは短い。1476は須恵器の高杯A類である。透かしはみられない。杯部の外面下半には回転削りが見られる。1477は須恵器の長頸壺と思われる。頸部の破片である。1478は須恵器の甕である。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部が上方につまみ上げられる。焼成が悪く、還元軟質を呈する。1479~1481は中世の遺物である。上層からの混入か、埋土誤認によるものと思われる。1479は土師器皿である。口縁端部外面に煤が付着している。1480は白瓷系陶器の碗である。胎土が精良である。北部系11型式の生田2号窯式に分類した。1481は古瀬戸の仏花瓶である。底部外面周縁から底部にかけて露胎となる。古瀬戸中期に比定される。

G868(1482) 1482は須恵器の広口壺と考える。頸部から口縁部にかけて外反し、端部のみ内傾する。口縁端面が一部窪んで沈線状になる。

溝跡 (図280~283)

F584 (1483) 1483は須恵器の杯身A類である。扁平な形状を呈し、身が浅い。

G201 (1484~1513・1525)

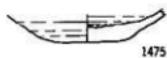
須恵器 (1484~1506) 1484は杯蓋B類である。胎土が精良で表面が暗灰色を呈するため、美濃須衛産ではない可能性がある。1485は高杯である。器壁が薄く、全体的にシャープなつくりである。1486は杯身A類である。1483に比べてやや身が深い。1487・1488は杯身B類である。1487は器壁がやや薄く、胎土が精良で表面が暗灰色を呈する。美濃須衛産ではない可能性がある。1488は胴部から口縁部にかけて強く外反する。胴部には「P」字形のへう記号がある。底部外面には川形の突出部があり、その表面を静止削りしている。胎土はやや粗いが、持った感じに重量感があり、美濃須衛産ではない可能性がある。1490・1491は杯身C類である。1490は胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部の器壁が薄くなってわずかに外反するコップ型である。高台は底部外面周縁に付される。1491はやや小型の杯身である。器壁が薄く全体にシャープなつくりであり、高台が底部外面端部に付される。1492は脚台付盤である。1493・1494は同一個体であり、有台皿であると考えられる。尾張産と思われる。1495は佐波理写の有台碗である。胴部に強い丸味があり、口縁部が強く外反する。胴部下半から削り調整が施されており、非常に丁寧に整形されている。1496は鉢B類である。口縁部が胴部上半から内湾する。1497は短頸壺の蓋と思われる。1499は佐波理写の杯蓋C類である。口縁部の返りは短い。返りの上端が屈曲している。1500は短頸壺である。口縁部は直立し、やや長めである。器壁が薄い。1501は陶白の底部と考える。底部外面からの穿孔は、底部内面に貫通するものとしなものがある。1502は鉢A類である。頸部が外反し、口縁部が直立して内外面と端部が強いナデによって窪む。1503・1504は甕B類である。1503は頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部が屈曲して直立する。口縁部外面には沈線状の窪みがある。頸部と胴部の境に輪積み痕が残る。1504は頸部が外反し、口縁端部が上方につまみ上げられる。口縁端部外面は内傾している。焼成が悪く、還元軟質を呈する。1505は碗である。高台は外面が外傾している。見込が摩耗し、内面に煤が付着している。1506は長頸壺の底部である。胎土がやや粗く、外面にわずかに自然釉が認められる。

道路状遺構

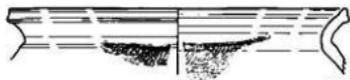
G81



1472



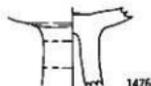
1475



1478



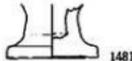
1473



1476



1479



1481



1474



1477



1480



1482

溝跡

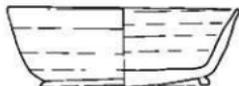
F584



1483



1486



1490

G201



1484



1487



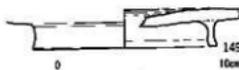
1491



1485



1488



1492



1483



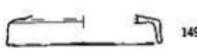
10cm



1494



1488



1497



1495



1489



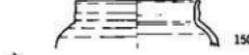
1498



1496



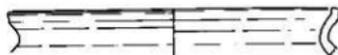
1501



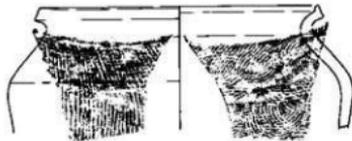
1500



1499



1502



1504



1503



10cm

図280 遺構出土遺物(古代)㊦ (S = 1/3、1477・1478・1482・1497~1500・1502~1504はS = 1/4)

溝跡
G201

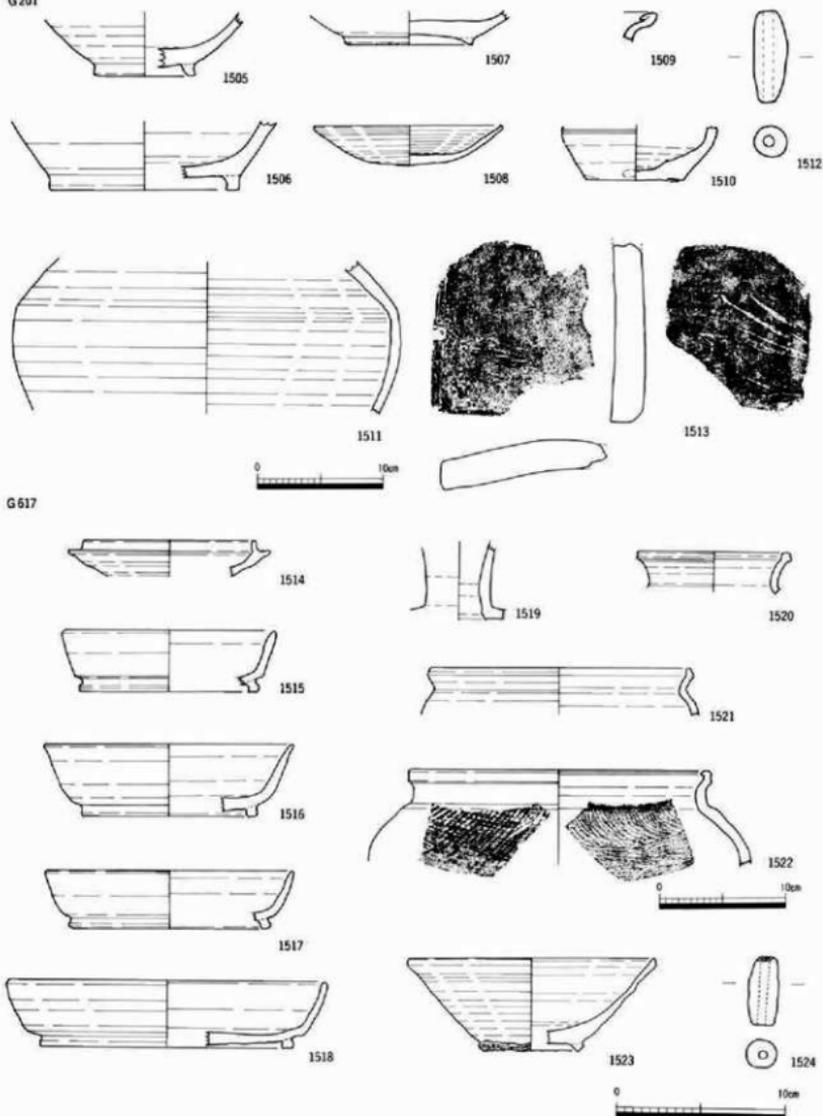


図281 遺構出土遺物(古代)㉗ (S = 1/3、1511・1513・1519~1522はS = 1/4)

その他(1507~1513) 1507・1508は白瓷系陶器の碗である。1507は南部系4型式に分類した。1508は他の遺物と比べて時代が飛び抜けて新しいため、埋土認識による取り上げミスの可能性がある。北部系11型式の生田2号窯式に分類した。1509は中世土師器の伊勢型鍋である。口縁部内面の折り返し部上面が窪まない。外面に煤が付着している。1510は小壺あるいは小瓶である。内面と底部が露胎となる。古瀬戸中I~II期に比定される。1511は古瀬戸の甕の胴部破片と考える。古瀬戸後期に比定される。1512は土鍾である。今回出土した土鍾の中では大型品であり、古代のものの可能性がある。1513は平瓦である。いぶし瓦であり、凸面全体にハナレ砂が付着している。

G617 (1489・1494・1514~1525)

須恵器 1514は杯身A類である。口縁部が直立し、身が浅い。1515~1518は杯身C類である。1515は胴部から口縁部にかけての外傾は弱く、高台は底部外面端部の若干内側に付される。1516は胴部下半に丸味がある。高台は底部外面端部の若干内側に付される。1517は胴部から口縁部にかけての外傾は弱く、高台は底部外面端部の若干内側に付される。1518は大型の杯身であり、胴部に若干丸みがある。高台は底部外面端部のやや内側に付される。尾張産の可能性もある。1519は長頸壺である。頸部と胴部を接合する前に、胴部側に穿孔されていたことが分る。また破片の下端が円形になっており、胴部との接合部からそのまま剥がれた資料と言える。1520は横瓶の口縁部と考える。頸部が外反し、口縁部は肥厚して角状になる。口縁部外面は窪んで沈線状になる。1521は鉢A類である。頸部が外傾し、口縁部が内側に屈曲する。口縁部外面は内傾している。焼成が悪く、還元軟質を呈する。1522は甕B類である。頸部はほぼ直立して、口縁部が外反して上方に屈曲する。口縁部は内側に折り返される。焼成が悪く、還元軟質を呈する。

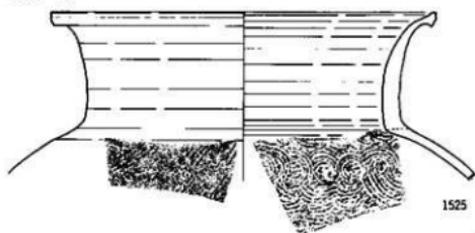
その他(1523・1524) 1523は白瓷系陶器の碗である。北部系5型式に分類した。1524は土鍾である。大型品であり、古代溝G201から出土した1512と似ている。

G201・G617の接合資料(1489・1498・1525) 1489・1498・1525は、離れた場所に存在する二つの遺構から出土した須恵器が接合した資料であり、溝跡の連続性を示すものである。1498は短頸壺である。器壁が厚く口縁部はやや長い。焼成が悪く、還元軟質である。1489は杯身B類である。胴部から口縁部にかけて直線的に広がり、口縁部がわずかに外反する。1525は須恵器の甕A類である。頸部が長い大型の甕である。口縁部のみ外反し、口縁端部が拡張して幅広の縁帯状になる。

G41・G205 (1526~1536)

須恵器(1526~1531・1533~1536) 1526・1533は杯身B類である。1526は口縁部内面が一部摩耗している。1533は全体に器壁が厚く、胴部から口縁部にかけて直線的に開く。器高が高く身が深い。1527は杯身B類の可能性もある。口縁部の開きがやや弱い。1534は杯身C類である。高台は細く、底面外面端部の内側に付される。底部中央が窪んでおり、高台から突出している。1535は撫で肩の短頸壺である。1536は鉢A類である。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部が上方に屈曲して角状になる。1149と形状が似る。1528は甕B類である。頸部から口縁部にかけて外反し、端部のみ直立する。口縁部外面は、強いナデにより窪んで内傾する。1529~1531は甕A類である。1530は小型の甕であり、内外面の叩き調整痕が明瞭に残る。頸部から口縁部にかけて強く外反し、口縁端部が拡張して上方に引き出される。胴部上半の器壁が非常に薄い。1531はやや小型の甕であり、内外面の叩き調整痕が明瞭に残る。焼成は悪く、還元軟質である。

溝跡
G201・617



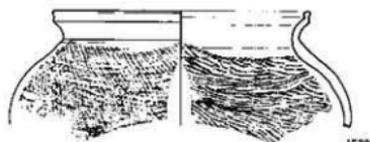
1525



1526



1527



1528

G205



1533



1534



1535

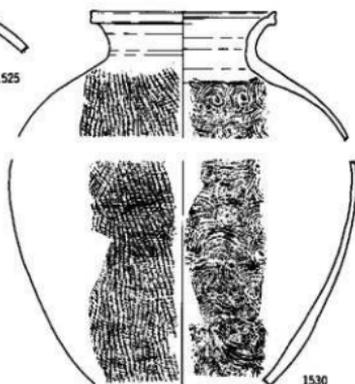


1536

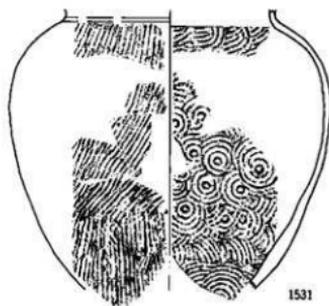
G41



1529



1530



1531



1532



図282 遺構出土遺物 (古代) ㊸ (S = 1/3、1525・1528～1531・1535・1536はS = 1/4)

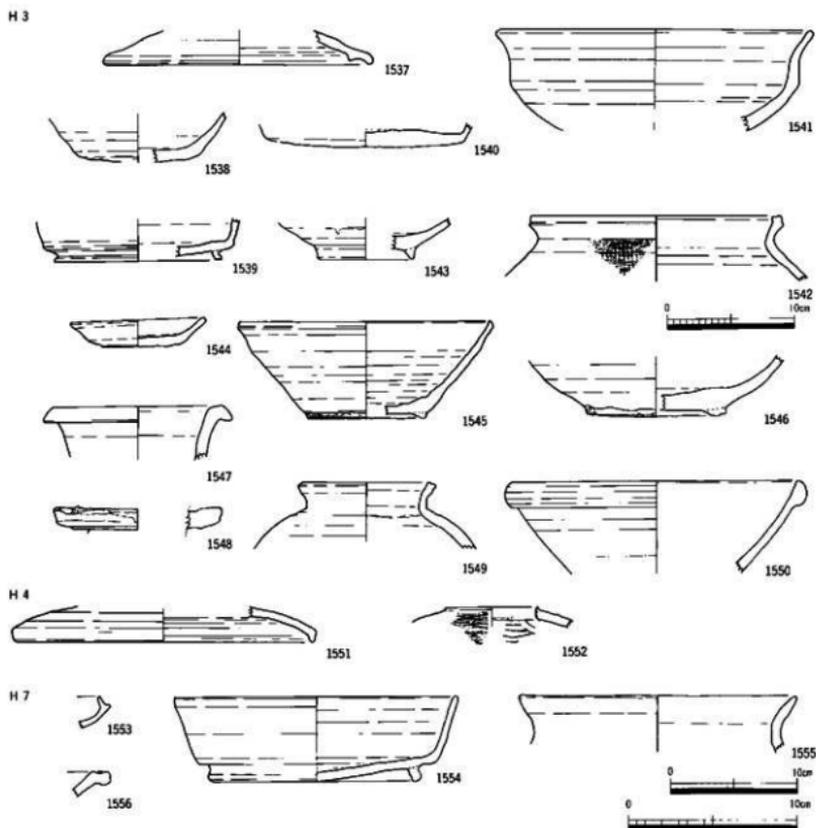


図283 遺構出土遺物(古代)㊸ (S = 1/3, 1542・1549・1552・1555・1556はS = 1/4)

その他(1532) 1532は、G41と切り合う溝跡G19などからの、埴土誤認による出土遺物の可能性がある。白堊系陶器の碗であり、北部系10型式の大洞束1号窯式に分類した。

II 3 (1537~1550)

須恵器(1537~1542) 1537は杯蓋B類である。口縁部の内側に短い返りが付され、その外面が屈曲している。1538は杯身B類である。1539は杯身C類である。全体的に器壁が薄く、シャープな細い高台をもつ。高台は底部外面端部のかなり内側に付される。尾張産と考える。1540は箱形をした杯身B類である。尾張産と考える。1541は鉢A類である。口縁部が強く外反し、端部を丸く取める。1542は甕B類である。口縁端部は面取りされて若干窪む。内面の当て具痕は残存していない。外面に格子の叩き日があり、8世紀の美濃須恵産にはない特徴を持つものである。

F区包含層

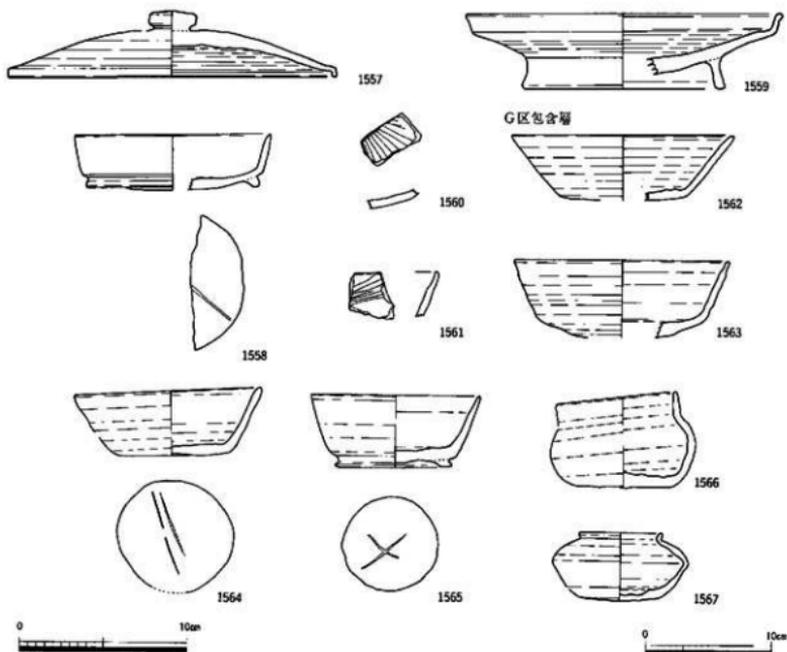


図284 包含層出土遺物（古代）（S = 1/3、1566・1567はS = 1/4）

その他（1543～1550） 1543は白瓷の碗である。外面が外側に広がる低い三角高台をもつ。胴部下半から底部内外面が露胎となる。丸石2号～明和14号窯式に比定される。1549は白瓷の広口壺である。内面の頸部より下が露胎になる。1544は白瓷系陶器の皿である。器壁が厚く、口縁端部がわずかに外反する。北部系6型式の白土原1号窯式に分類した。1545・1546は白瓷系陶器の碗である。1545は北部系5型式に分類した。1546は高台径が大きく、胴下部に丸みがあることから4型式とした。内面は著しく摩耗している。南部系4型式に分類した。1547は白瓷系陶器の有耳壺である。口縁部が外側に外反し垂れ下がるような形状になる。口縁の形状は美濃須衛型に最も近い。1548は古瀬戸の仏龕具である。鈎の部分と思われる。古瀬戸後IV古期に比定される。1550は中国陶磁器の白磁碗である。口縁部外面が幅広の玉縁状になる。大宰府分類の白磁碗IV類に比定される。

H 4（1551・1552） 1551は須恵器の杯蓋C類である。胴部に丸味があり、返り上面が屈曲しない。1552は横瓶である。口縁部の直立がほとんど無く、胴部内外面に叩き調整を施す。

H 7（1553～1556） 1553は須恵器の杯身A類である。口縁部の立ち上がりは短い。1554は杯身C類である。底部の中央が高台の高さまで窪む。焼成がやや悪く、軟質である。1555は土師器の甕である。口縁部が外反するが、A・B類ほど外反が強くない。胎土はやや密である。1556は古瀬戸の折縁深皿

である。屈曲した口縁部の上面が窪む。古瀬戸後IV古期に比定される。

包含層出土遺物 (図284) F区およびG区の包含層内から出土した古代の遺物を一括して掲載した。
F区 (1557~1561)

須恵器 1557は杯蓋C類である。宝珠揃は径に比して厚みがある。頂部に丸味があり、返りがやや長い。1558は杯身C類である。底部中央が突出し、高台より低くなる。口縁端部が尖り気味になる。底部外面にヘラ記号がみられる。1559は脚台付盤である。口縁部が屈曲し、端部のみ若干外反する。底部中央付近の器壁が厚い。1560・1561は暗文土器である。器種は皿と思われる。1560は形態、文様ともに1328と類似する。1561は口縁部内面が横ナデによって窪む。口縁下には斜位のヘラミガキによる暗文が施される。1557~1561はいつれもともとと堅穴住居跡F4に包含されていた可能性が高い。

G区 (1562~1567)

須恵器 (1562~1567) 1562~1564は杯身B類である。1562は胴部から口縁部にかけて直線的に開く。器壁はやや薄い。1563は胴部の途中で屈曲し、そこから直線的に開く器形をとる。そのため底面が狭くなっている。底部外面が摩耗している。1564は身が深く、胴部から口縁部にかけて直線的に開く。底部外面には2条の沈線が引かれる。焼成が悪く、還元軟質を呈する。1565は杯身C類の特殊品である。小型で器高が高い。高台は断面が平行四辺形になり、底部外面端部に付される。1566・1567は須恵器の壺である。6世紀に出現し、8世紀には消滅する形態の壺である。1566は、口縁部が胴部からはほぼ垂直に直立する。焼き歪みでかなり歪な形状になる。1567は口縁部は短く、くの字状に外反している。胴部中央に稜があり、算盤形の器形になる。尾張産と考える。

その他の時代の遺物 (図285) FTR1、溝跡D420、古墳後期の遺構及び包含層から出土した同時代遺物をここに掲載した。

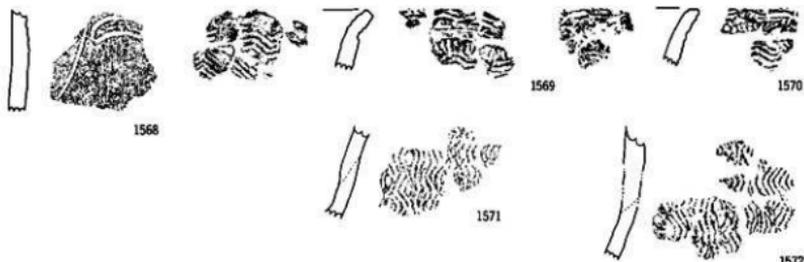
包含層 (1568) 1568は縄文土器の深鉢である。風倒木痕の中から出土した。外面の沈線文は細い棒状の工具で引かれている。後期前葉に比定される可能性があるが、詳細は不明である。

FTR1 (1569~1572) 1569~1572はすべて同一個体の可能性がある。早期前半に比定される。1569・1570は縄文土器の深鉢である。内外面に横位の山形文、頸部に横位の沈線があり、沈線から口縁部が外側に屈曲している。1571・1572は胴部破片であり、外面に縦位の山形文が見られる。

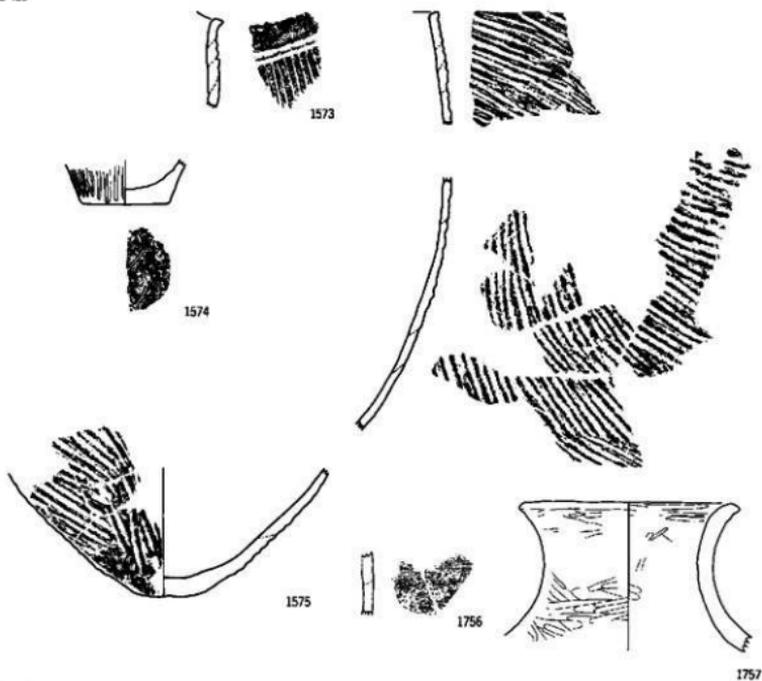
D420 (1573~1577) 1573は1574と同一個体と考えられ、小型の甕のような器形になると思われる。口縁端部は面取りされ、口縁部は若干外反し波状口縁を早する。頸部は無紋であり、その下には口縁にはほぼ並行な2条の沈線が施される。またその下は4条1組の条痕が縦位に引かれており、底部周縁に達している。胎土はやや粗で、石英・雲母等の砂粒が多量に混入する。樫王式に比定される。1575は弥生前期の樫王式に比定される粗製の深鉢である。底部は小さく、胴上半に最大径があり、口縁部が若干内傾する。口縁端部は面取りされている。外面はハイガイによる粗い条痕で調整されている。条痕は口縁部付近が横位に近い方向に施され、胴部以下は右下がりになる。1576は壺形になる器形の肩に位置する破片と考える。横位方向に細かいハケ目が施される。いわゆる遠賀川系土器の可能性もある。胎土はやや粗で赤褐色の砂粒がやや多く見られる。1577は壺の口縁部から頸部に掛けての破片である。D420から出土した他の土器群とはほぼ同時期のものと思われる。内外面に横位のミガキ調整が

風樹木痕

地山稗礎トレンチ (FTRI)



溝跡
D 420



ビット
G 530

溝跡
F 635

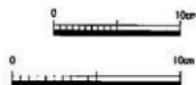


図285 縄文~古墳時代の遺物 (S = 1/3、1575はS = 1/4)

施される。肩が張る壺形の器形になると思われる。胎土はやや密で砂粒が多量に含まれる。

G530 (1578) 1578は須恵器の杯身A類である。口縁部の内傾が強く、返り受けは短い。須崎65号窯式に比定される。

F635 (1579) 1579は須恵器の杯身A類である。口縁部が非常に短い。返り受けと口縁部の間が内湾している。

第2節 石製品

今回の調査で出土した石製品は、縄文時代から近世にかけてのものと考えられ、260点である。内訳は砥石76点、硯5点、尖頭器1点、異形石器1点、石鏃16点（未製品4点）、削器・石匙等剥片石器21点、筒状石器1点、フレーク・チップ74点、打製石斧25点、石鏃13点、磨石・敲石9点、表面が摩耗したレキ4点、加工のある石材9点、紡錘車1点、石鏝1点、火打ち石2点、石臼1点、石製の鉢1点である。

観察表に記した遺構の年代は土器類から推定したものであり、中近世の遺構から石鏃・打製石斧などが出土する事例も少なくない。したがって、特に縄文・弥生時代に属すると考えられる石製品については、実測を委託した柳アルカの見解を本文中に記載した。また、砥石以外の石製品の観察についても、柳アルカの観察をもとにしている。ただし、本書における記載内容の責任は報告者にある。

砥石 (2001~2035、図286~291) 砥石は、76点出土した。砥石は用途によって仕上砥・中砥・荒砥に分けることができ、使用方法によって、置き砥石、手持ち砥石に分類できる。また、古代以降、良質な砥石の産地から各地へ流通していたことが知られており¹³⁾、石質による産地の同定も可能である。なお、以下に述べる砥石の分類や産地同定については、鎌倉文化財研究所の沙見一夫氏から指導を受けた。

仕上砥は全部で22点出土した。今回出土したものの大半は、京都の鳴滝産と推定される。鳴滝砥は、「鳴滝岩」とも言われる良質な頁岩であり、「カワ」と呼ばれる鉄分層を挟んで整った板状節理をする。そのためか砥面の片面がはがれ落ちているものが多い。鉱脈によって若干色や石質が異なるが、このような相違は品質名称¹⁴⁾の違いとして現代にもあり、砥石山の違いを示している可能性がある。今回の出土遺物では、表面の色調によって黄色系・灰緑色系・肌色系・赤色系に分類可能である。図示した中では、2001~2005が黄色系であり、20点中12点がこの分類に含まれる。灰緑色系は2006・2009、肌色系は2007・2008の2点ずつである。赤色系は1点のみで、砥面が残存していないため図示していないが、石質から砥石と判断したものである。仕上砥が出土した遺構は溝跡が最も多いが、特定の遺構に集中する傾向はない。その中でも鍛冶関連遺構E780から出土した3点(2006・2008・2009)が特徴的である。出土した仕上砥の中で側面に残存しているものには例外なく生産地加工痕(鋸痕)があるが、E780のものは生産地加工痕が無く、代わりに消費地で成形した痕跡と考えられる消費地加工痕(工具不明)が残る。また、生産地加工痕が残る個体の流通段階の幅¹⁵⁾が3.1~3.6cm程度(2002除く)であるのに対して、完存していない2006・2009についてもこれよりかなり大きいことが分る。他の個体が中世後期~近世にかけてのものが多いのに対し、E780の仕上砥は中世前期後半の年代が与えられることから、時期的な要因についても考慮する必要があらう¹⁶⁾。しかし、一般の用途とは異なる作業で使用するため、別の形態で砥石を入手していたことを示すのかもしれない。後に荒砥のところでふれる

が、大型の刃物を生産していた可能性があることと関わりがあるとすれば、貴重な類例と言える。2010の仕上砥は、白味がかった色を呈し、節理が発達した石材を用いている。山形県から新潟県北部にかけて濃密に分布する沙見氏の分類で在地Aとされるものである。秋田県北東部に産地の可能性があることとされている¹⁹⁾。両側面に生産地加工痕が残り、製品として搬入されたと考えられるが、どのような経路で持ち込まれたかは不明である。なお、砥面は剥離のため残存していない。

中砥は、可能性のあるものも含めて15点出土した。中砥は日用品から農具や漁撈具など使用者の階層を問わず使用される砥石であり、最も需要が多い砥石と言える。一般的に流紋岩質凝灰岩が用いられ、産地も各地にある可能性が高いとされる²⁰⁾。今回出土したものの内、8点が伊予砥(愛媛県伊豫市近郊)もしくはその可能性があるものと判断した。いずれも表面が黄白色～黄橙色に近い色調を呈する同一の石材と思われる。図示した3点(2011～2013)のいずれも多面の砥面があり、側面を砥面としない仕上砥とは使用方法が異なっている²¹⁾。2011-2013は、砥面の湾曲状況や使用の様子から手持ち砥石と判断できるが、2012は、刀子等の直刃のものに用いられた置き砥石と思われる。この他、砥面はあるものの砥石に用いられることの少ない安山岩やチャートのもものが5点あり、遺跡周辺で産出した石を中砥として用いている可能性がある。出土遺構は、仕上砥と異なり溝跡出土のもものが少ないのが特徴と言えるが、調査区によっても多寡に偏りが無く、分布状況に特徴はない。なお、鍛冶関連遺構からは中砥が出土せず、大型の刃物を作成するのに必要不可欠な砥石を欠いていることになる²²⁾。遺構が調査区外に続いていることから、未だ埋土中に眠っている可能性もあろうが、需要の高い砥石であることを考えると、持ち出されて他用途に用いられたことも考えられる。

荒砥は、金属製品の初期研磨に用いられることが多く、生産に関わる砥石と言える。砂岩質であり在地産の可能性もあるが、今回出土したものの大半が良質な荒砥の産地である大村砥²³⁾と笹口砥(いずれも長崎県大村湾周辺)に類すると判断できることから、以下この分類を用いる。大村砥は暗灰色を呈する重量感のある石材であり、砂岩にしては緻密な印象を受ける。ただし、硬度はそれほどなく、今回出土したのも破損しているものが大半である。一方笹口砥は、大村砥より明るい色調を呈し、緻密さに欠ける。これも石材としては脆いようで、大半が破損している。今回出土した荒砥は39点にのぼり、その使用方法からか、全国的にも出土例が少ない²⁴⁾とされる状況とは全く異なっている。中でも特筆されるのは、E区の鍛冶関連遺構を中心に出土した大型の砥石(2024・2026・2028～2035、内2029～2035が鍛冶関連遺構出土)である。この内2024・2026・2028～2031が大村砥、2032～2035が笹口砥に分類できる。最も大きい2029は、破損しているにも関わらず長径が約50cmあり、小型の刃物を研ぐには不必要な広い砥面を備えている。2033のように細かい砥面を複数同じ面にもつものを除いて、大型砥石には同様な傾向がある。このことは、長いストロークを必要とする研磨作業、すなわち太刀などの大型刃物を作成するために用いられた可能性が高いことを示している。個別に見れば、盛り上がるような砥面を持つもの(2024)²⁵⁾や4面に渡って形状が変わるまで使用されているもの(2028)、砥面を削出するためのはつきり痕が残るもの(2034)など特徴がある。また、2028と2029には、酸化鉄と考えられる赤い粉末状のものが1箇所砥面を除いて付着しており、研ぎを行った際に削られた鉄が研ぎに使った水とともに砥石の表面に付着して残ったものと考えている。なお、2028はF区の集石土坑F39から出土したが、表面に多量に煤が付着していた。その他、荒砥として分類した砥石の中に、手持ち砥石に分類できるものが半数を占める点に特徴がある。先に述べたように、刃物の保守調整に

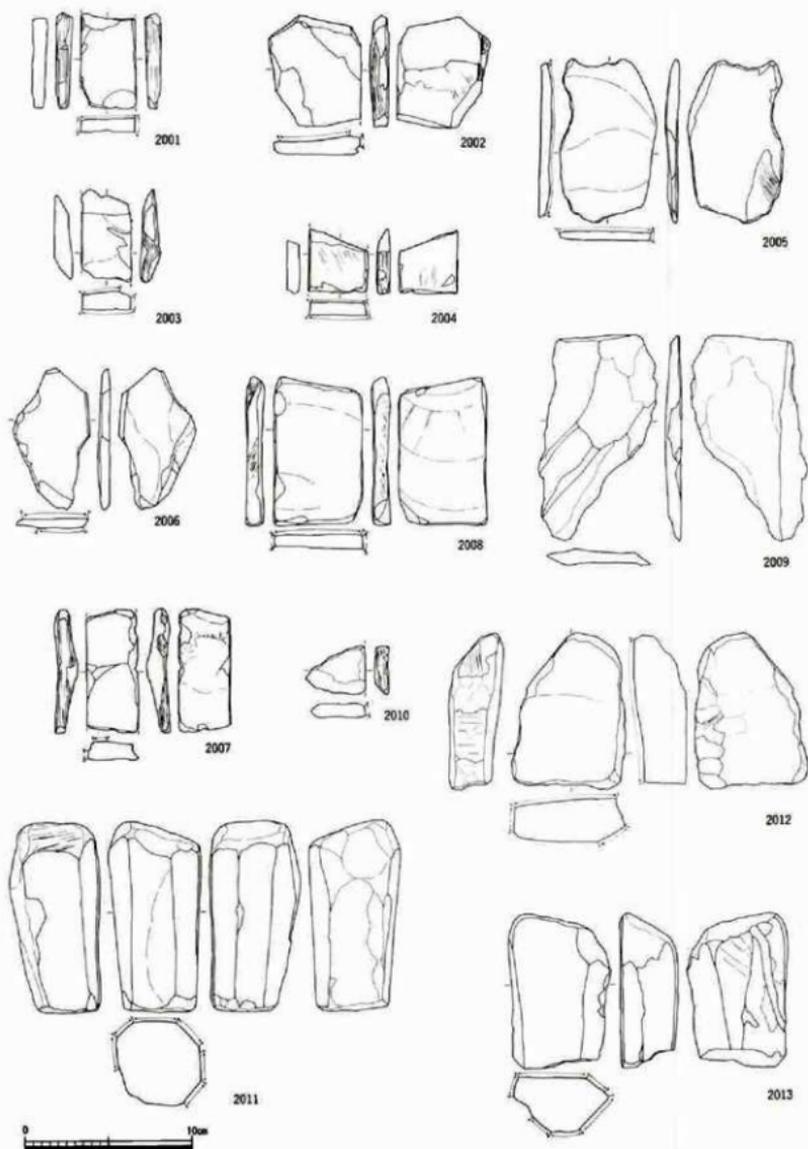


図286 石製品① (仕上げ砥・中砥: S = 1/3)

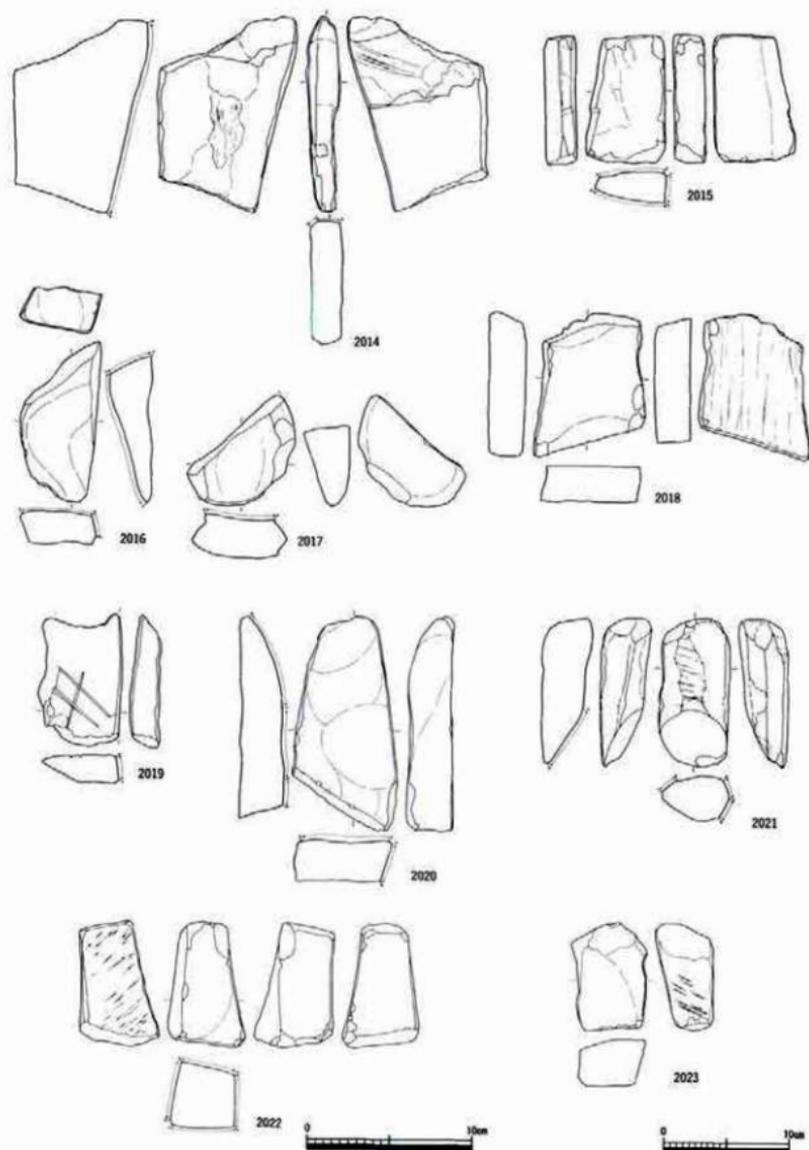


図287 石製品② (荒砥: S = 1/3、2023は S = 1/4)

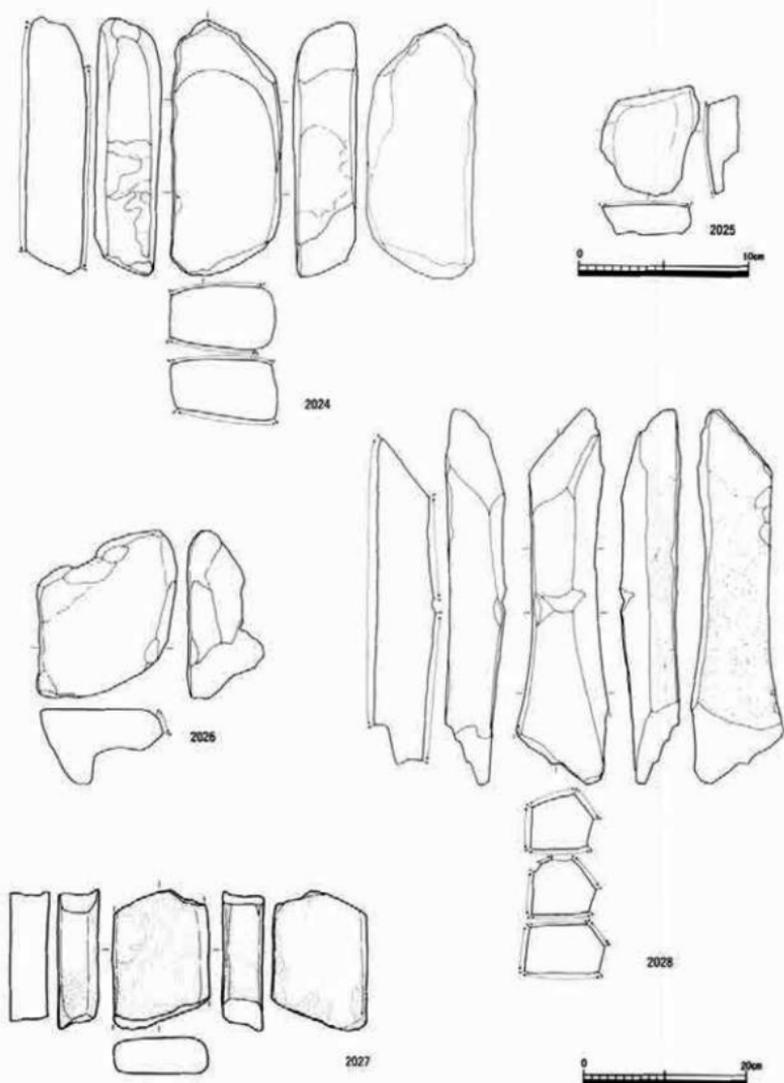


図288 石製品③ (荒砥: S = 1/5、2025は S = 1/3)

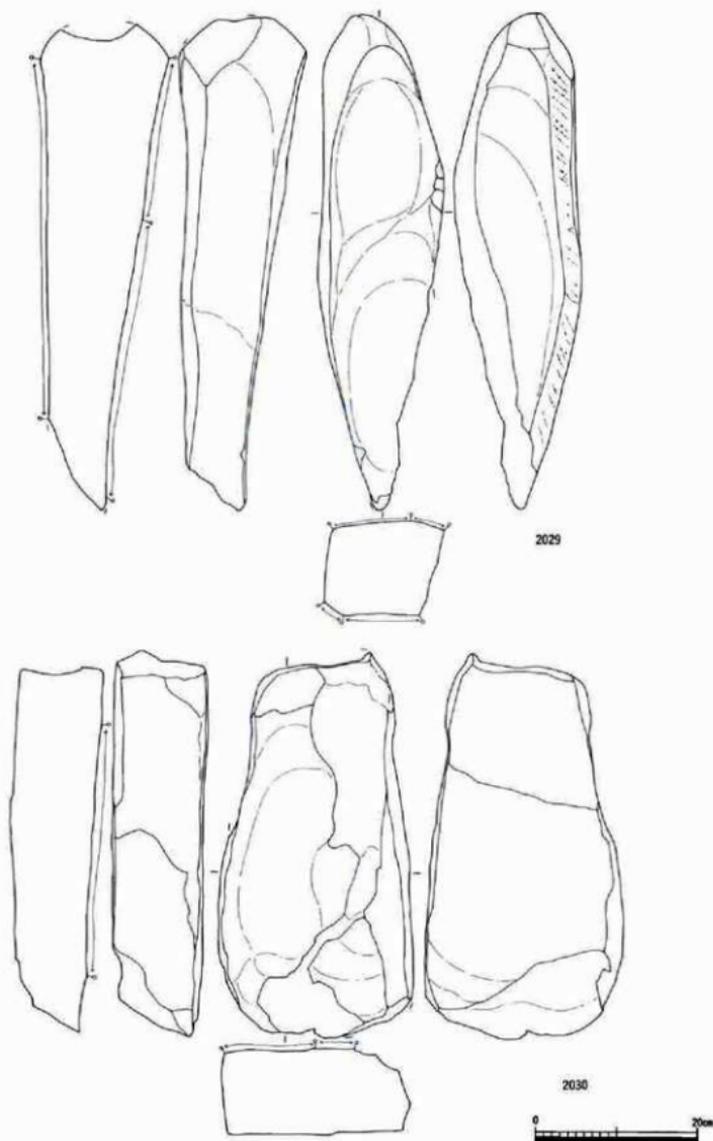


图289 石製品④（荒砥：S = 1/5）

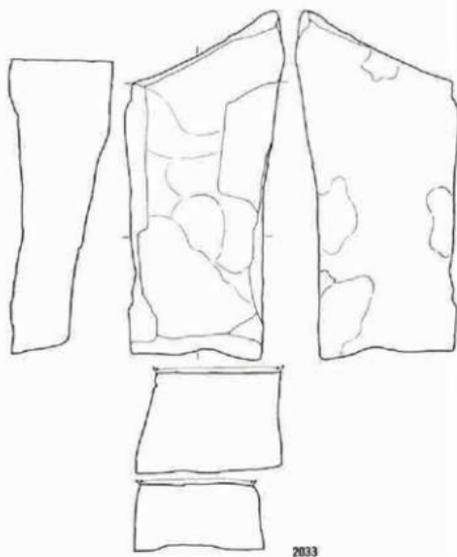
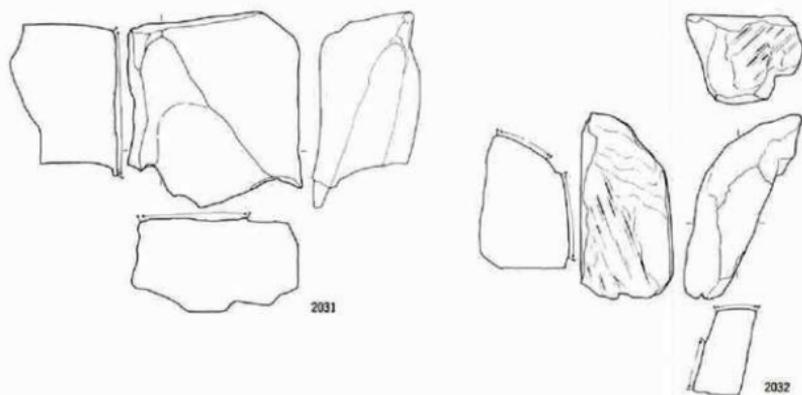


図290 石製品⑤ (規砥: S = 1/5)

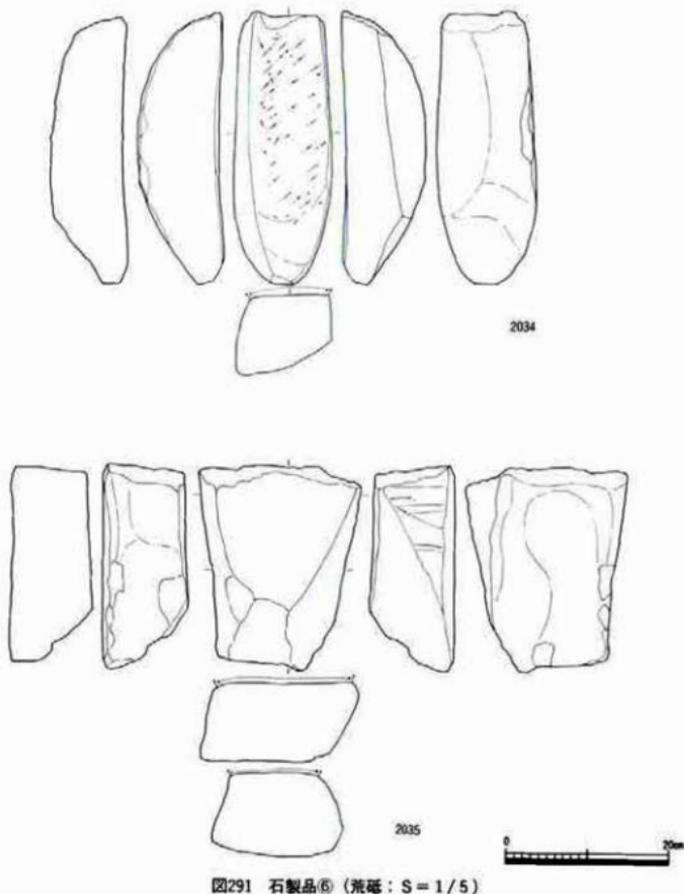


図291 石製品⑥ (荒砥: S = 1/5)

用いられる砥石は中砥であり、荒砥に分類できる砂岩質の石材を用いることは少ないと考えられている。しかし、明らかに弓なりの砥面をもつ農具等の刃先に用いられた可能性が高い砥石があり、中砥の代わりに用いられていた可能性がある。今回の調査において、中砥の出土量が少ないことを考えると補完的な関係にあったのかもしれない。手持ち砥石の中で特徴的なものとしては、端部に棒状の器形を斜めに切断したような円形の砥面をもつ2021⁶⁰や石の表面に3ヶ所の切れ込みをもつ2019がある。

砥石と同様に、中世段階に石材の原産地から流通している²²⁾遺物として硯がある。今回出土したものはいずれも破片資料で、硯の使用面は剝離によって残存していないため図示していない。大型土坑E770から出土したものは楕円形に加工した鳴滝産のもので、仕上げと全く同じ石材を使用している。他

3点が滋賀県高島産、1点が丹波系の石材のものである。

尖頭器 (2036、図292) A区のピットA476の壁面に突き刺さるような状態で出土しており、本来はA区のIV層（基盤層）から出土した遺物である可能性がある。ただし、基盤層確認のために入れたトレンチから同様な石器を検出することはできなかった。木葉形を呈し、表面の風化が激しい。所属時期は縄文時代草創期～前期と推定される。

異形石器 (2037、図292) 両端部に尖頭部をもち、中央部をわずかに挟る。両尖び首のミニチュアとも考えられるが、ブーメラン状に屈曲する点が異なる。

石鏃 (2038～2047、図292) 石鏃は16点出土した。この内11点が凹基鏃（2038～2046）、2点が有茎鏃（2047）、1点が円基鏃である。残りの2点は石鏃未製品の可能性がある。図示したもののうち、2039～2044はnSPの手法が用いられており、非常に小さい打点径をもつ剥離面で構成される。中でも2039は、表面の中央に研磨が施されている。これらの石鏃は、縄文時代後期～晩期によく見られる。2038は形状に特徴があり、基部の挟りの整形も、挟りの最深部をより深く挟る特徴がある。縄文早期～前期に類例が多い。

削器 (2048・2050・2051、図292) 意図的に刃部を作出している石器を削器とした。8点出土した。2048は剥片の両面から加工を加えて尖頭部を作出していることから、尖頭削器とした。2050は直角レキを原石としており、同じ側縁に2ヶ所挟り込んだ状態の刃部が見られる。刃部の微細剥離が顕著である。2051は下呂石の転石を素材としており、一部自然面が残る。直線的な側縁に剥片の背面側から刃部を作出している。刃部に微細剥離が見られ、表面が風化している。

石匙 (2049、図292) 2049は、基部に握みを作出するための加工が見られるため、縦形の石匙とした。1点のみ出土している。剥片の背面側から両側縁に加工が施されており、左側には微細剥離が見られる。

二次加工剥片 (2052・2053・2056、図293) 7点出土した。2052は右側縁に微細剥離をともない、微弱な光沢がみられることから、刃部として使用された可能性がある。2053は腹面側の打点周辺に加工痕が見られる。

使用痕剥片 (2054・2055、図293) 剥片の側縁に微細な剥離痕のみ見られる剥片を使用痕剥片とした。15点出土した。2054は右側縁に微細な剥離痕が見られるが、事故剥離の可能性もある。2055は、左側縁に微細な剥離痕が見られる。なお、2049～2055はF区の地山確認トレンチ内から出土した遺物であり、縄文時代早期のものである。2056は剥片の中間の両側縁を挟り込む加工が施されており、何らかの未製品と考える。

筥状石器 (2057、図294) 打製石斧に形状は似るが、側縁と刃部の作りが異なるため、筥状石器とした。素材剥片の背面に自然面を残し、反対方向の直接打撃で側縁を急角度に整形している。刃部は片刃状になり、裏面側に線状痕が明瞭に見られる。

打製石斧 (2058～2069、図294) 2059・2066のように刃部が取束するいわゆるバチ型と呼ばれるものが混じるが、他は短冊形を呈する。刃部は端部の平面形が丸みを帯びるか直線的になるが、2058は端部が細く尖ったような形状になる。また、土ズレ痕も多く見られる。この他、2064の表裏の凸部に若干の摩耗が見られる。石材はホルンフェルス、泥岩、凝灰岩、片岩が使用されており、縄文中期に盛行する打製石斧の石材選択とはほぼ同じと言える。

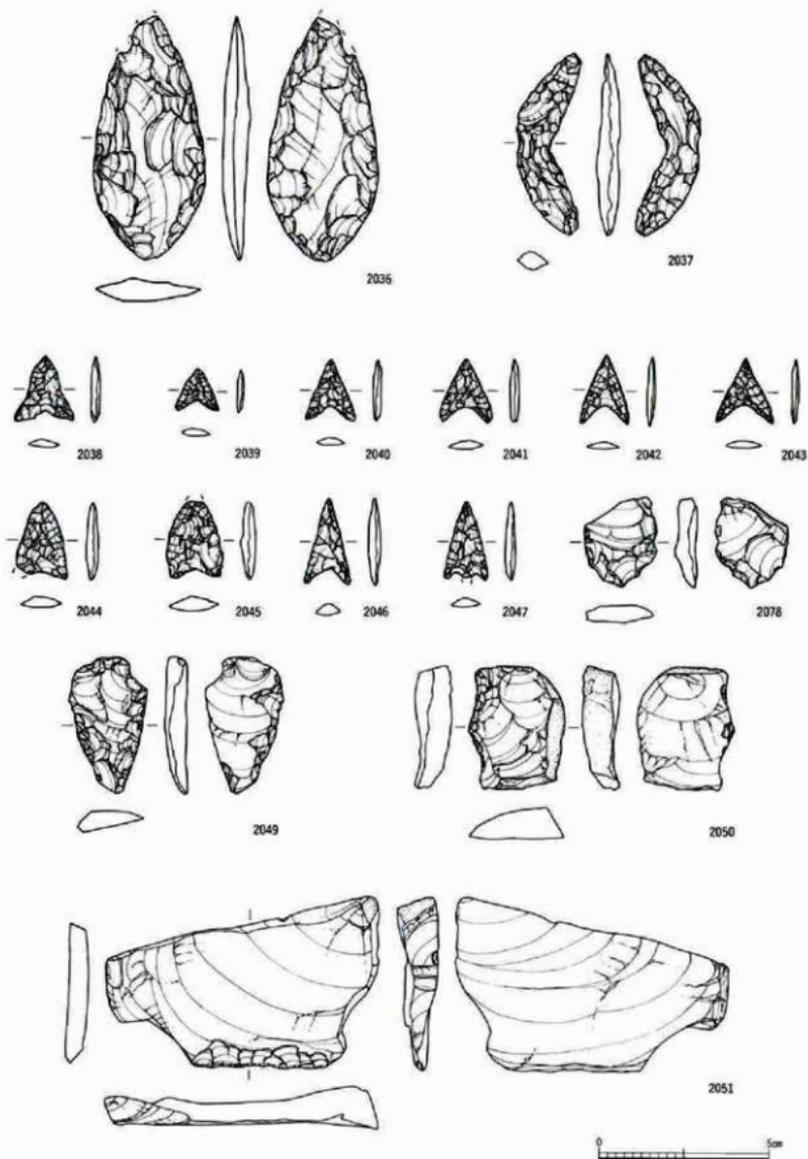


図292 石製品⑦ (制片石器：S = 2/3)

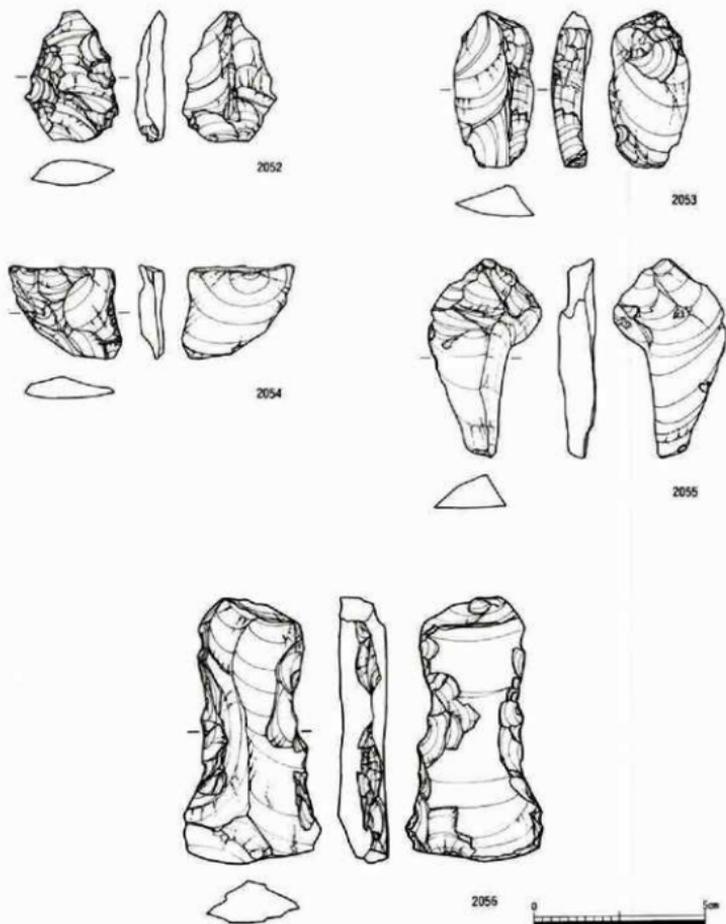


図293 石製品⑧ (剝片石器: S = 2/3)

石鏃 (2070~2080、図295・296) 形状や作りは、やや粗い加工を施した打製石斧といったところであるが、打製石斧と比較して2倍近い規模の差があり、石材も濃緑流紋岩・ホルンフェルス・安山岩といった緻密な火成岩で比重のある石材が選択されていることから別分類とした。すべて弥生前期の溝跡であるD420から出土している。ほとんどの出土品が2つに折損しており、完形品は2070・2072・2077の3点のみである。2074は2つの折損品が接合したものである。刃部は意図的に整形しようとした痕跡が少なく、ほとんど加工のないものもある。2079の背面には線状痕が明瞭に残るが、いわゆる土ズレ痕とは異なり摩耗の程度が弱い。

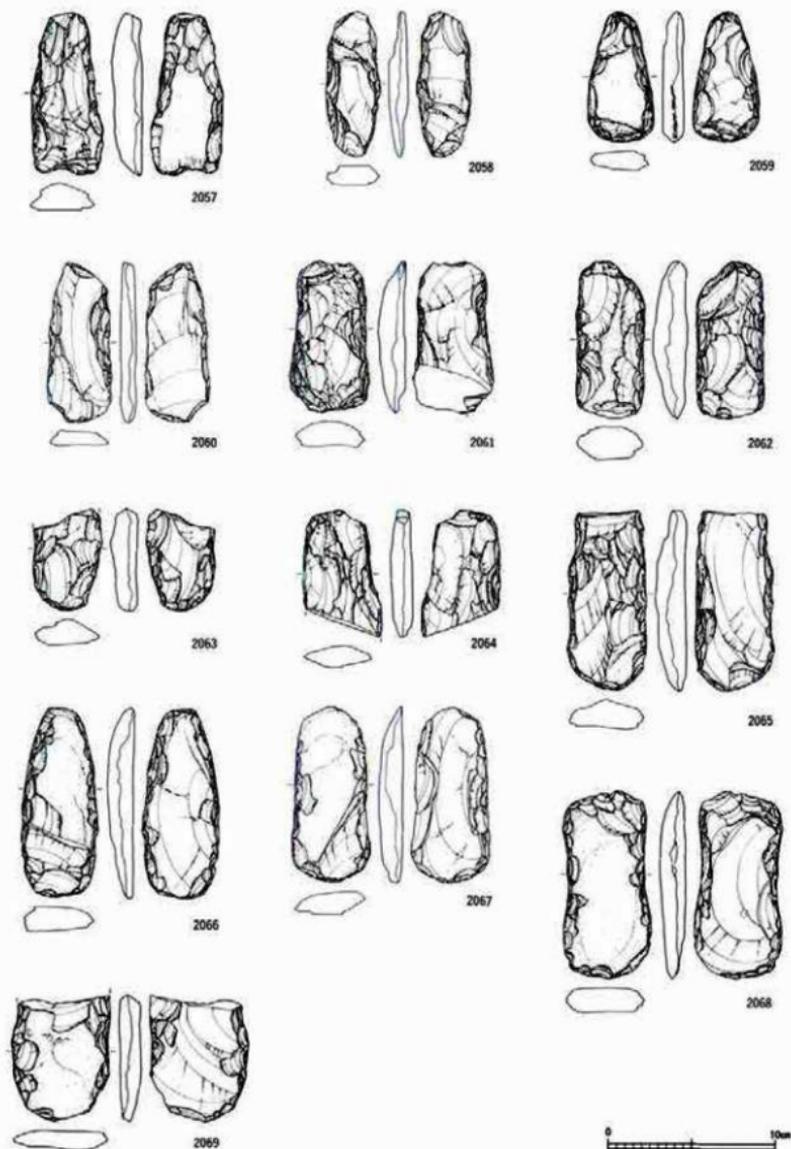


图294 石製品⑨ (打製石斧: S = 1/3)

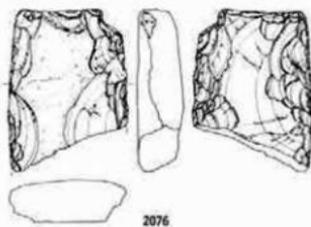
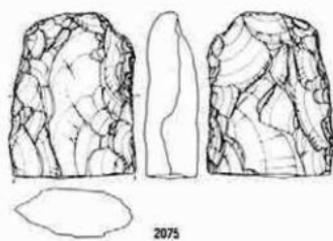
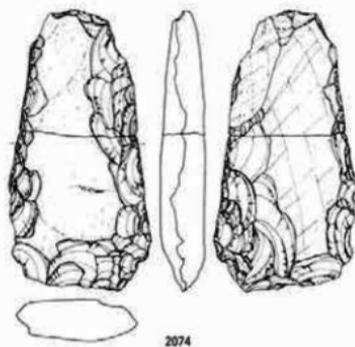
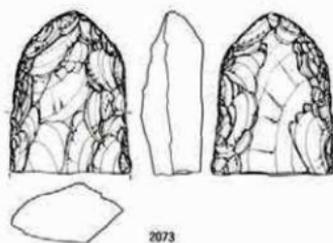
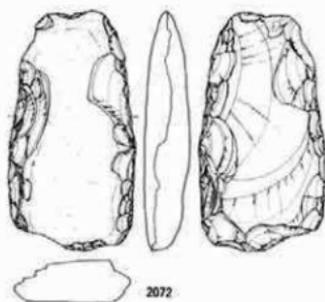
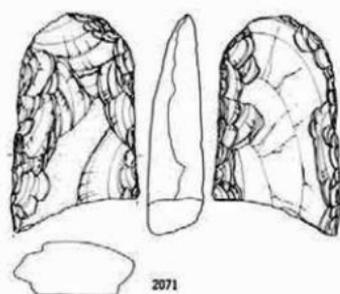
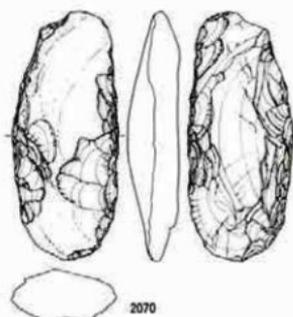


図295 石製品¹⁹ (石映: S = 1/3)

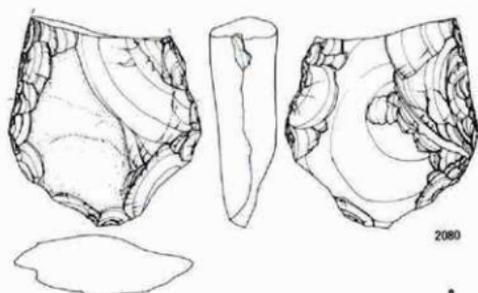
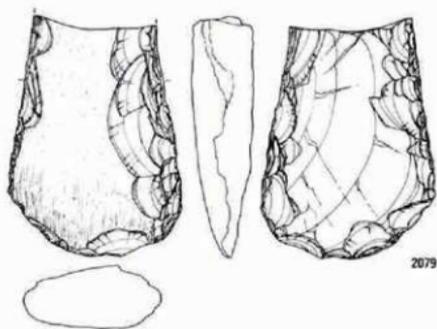
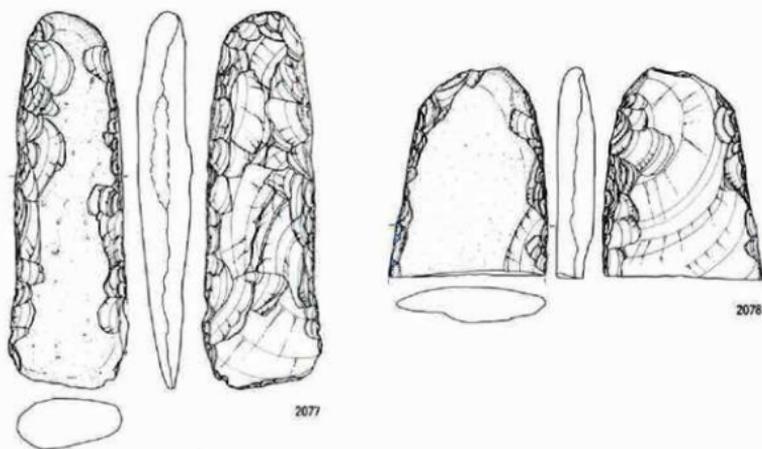


図296 石製品⑩ (石楯: S=1/3)

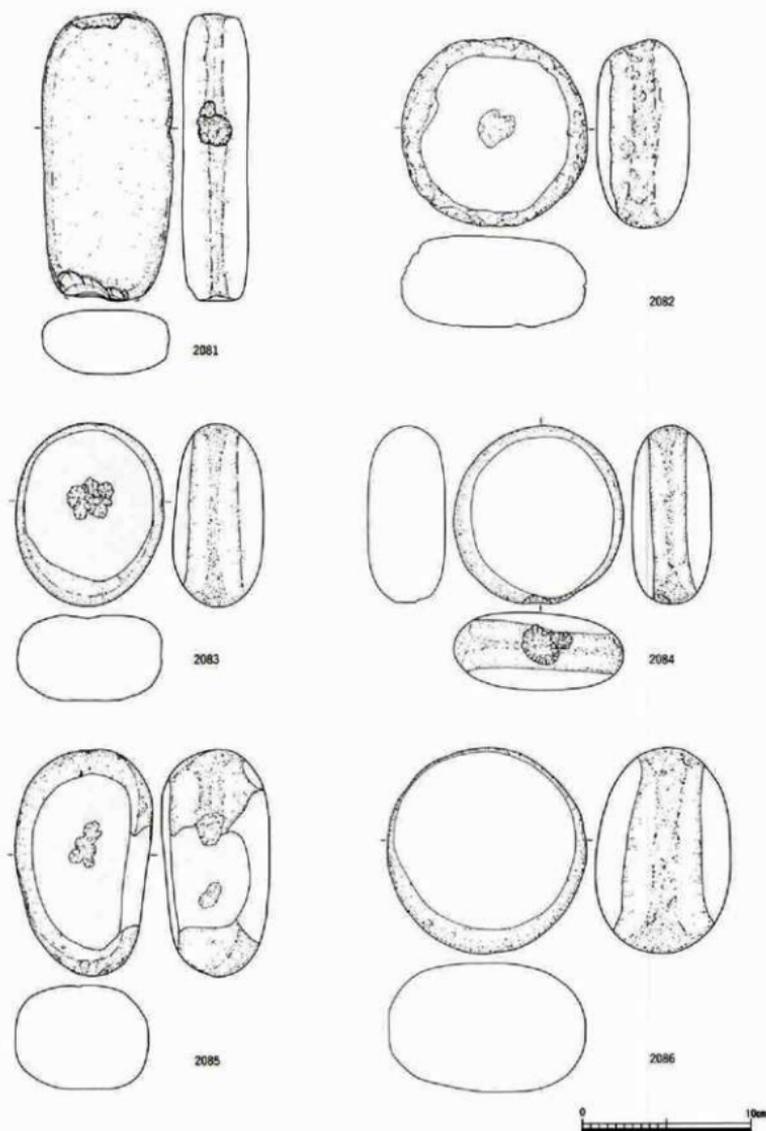


図297 石製品⑩ (敲石・磨石: S=1/3)

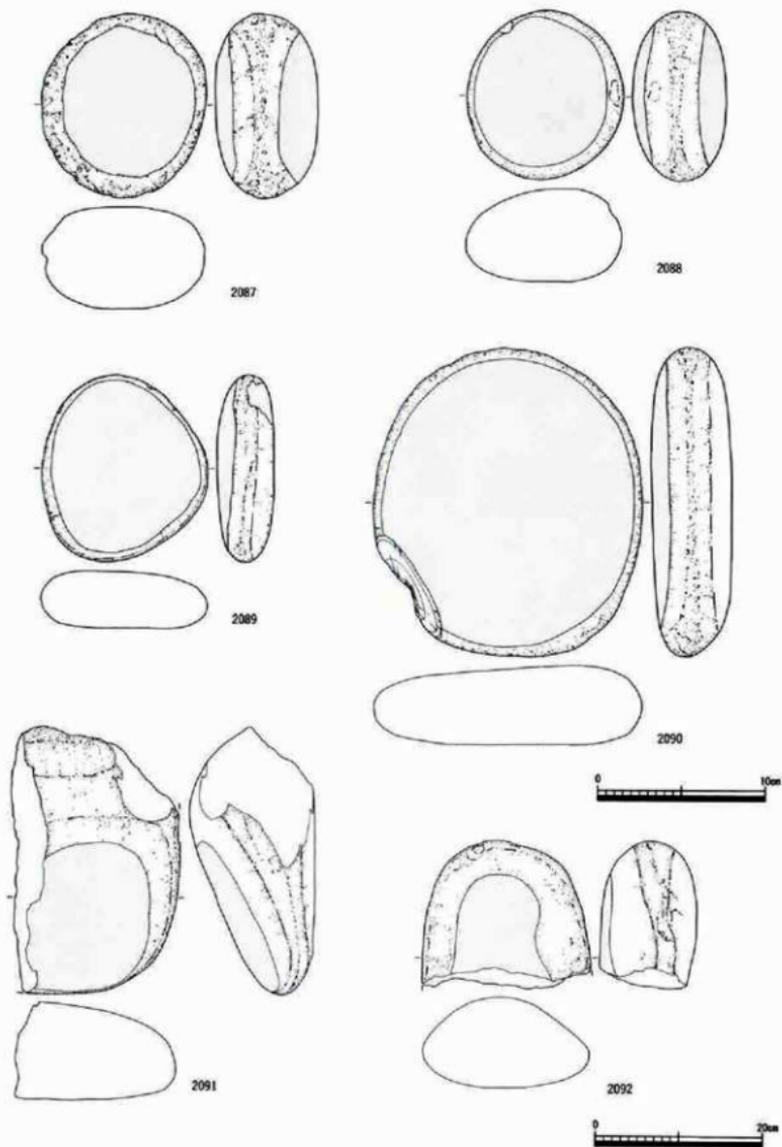


図298 石製品③ (磨石: $S = 1/3$ 、磨耗礫: 2091・2092は $S = 1/6$)

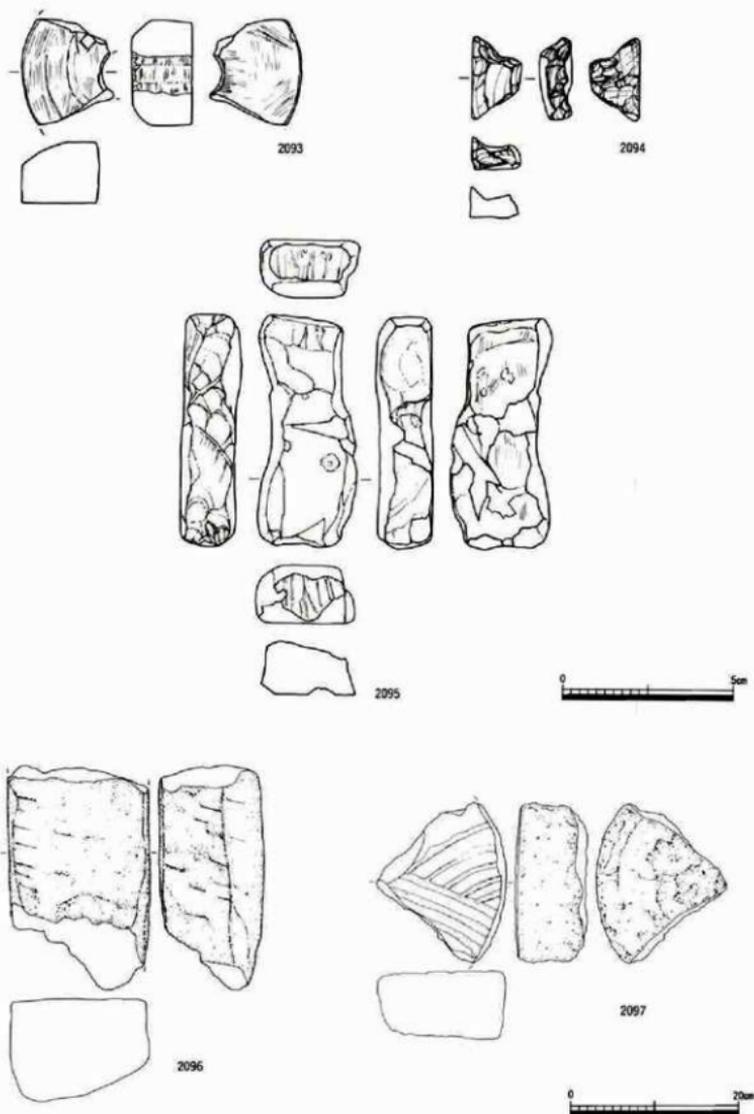


図299 石製品⑬その他の石製品 (2093~2095はS = 2 / 3、2096・2097はS = 1 / 6)

磨石・敲石 (2081~2088、図297・298) 楕円レキの表面の一部に敲打痕あるいは磨面がある石器を分類した。安山岩製のものが多い。縄文時代に一般的にみられるサイズ(500g前後)より一回り大きく、弥生時代以降の石器である可能性が高い。2081は敲石である。両端部に敲打痕があり、側面にも集中している部分がある。被熱している。2082~2085は磨石+敲石であり、主面部に磨面、主面部あるいは側面に敲打痕が残る。2085は側面にも摩耗部がある。2082と2085は被熱資料である。

摩耗レキ (2089~2092、図298) 扁平あるいはやや大振りな楕円レキの平坦面に摩耗があるものについて摩耗レキとした。石皿ほど摩耗の度合いが顕著ではない。安山岩あるいは砂岩製である。磨石の出土している大型土坑F681や鍛冶関連遺構から同じように出土していることを考えると、中世の段階で磨石と合わせて何らかの作業で使用した可能性がある。

石製紡錘車 (2093、図299) 滑石製である。1/4ほど残存している。正面にわずかに線刻が残る。**火打石 (2094、図299)** 縁辺に使用による潰れがみられる石器について火打石に分類した。ただし、今回出土したものは、使用の過程で破損あるいは折り取られた断片と考える。関市・美濃市周辺の丘陵は良質な珪岩が基盤となっており、かつては火打石の産地として知られていた。今回出土したのも石質から周辺より供給されたものと考えられる²⁹⁾。古代後期の遺構より出土していることから、当該期に位置付けたい。

石鍋 (2095、図299) 滑石製の石鍋の断片と考える。上部部が生きていると考えられ、わずかに外面に向かって張り出しが見られる。表面の摩耗が激しく、加工等の詳細は不明である。

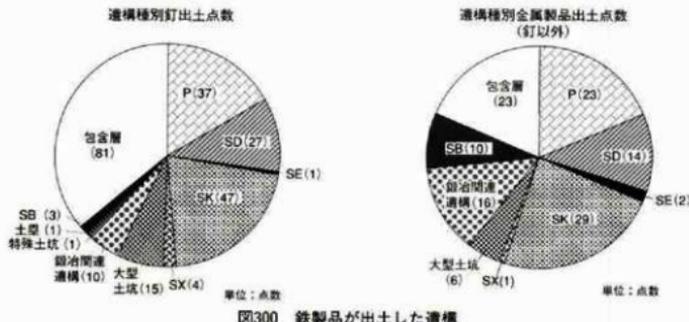
加工レキ (2096、図299) 今回の調査では9点出土したが、いずれも砂岩を素材とし、角柱状を呈するものである。人為的に加工されたものであり、2096にはわずかにノミの痕跡が残る。また、レキが集中する中世の土坑や溝から出土している点も共通点と言える。非常によく被熱しており、カマドなどの構造材として用いられたと考える。

石臼 (2097、図299) 下臼の断片であり、溝の切り方から6区画の切目と推定される。磨面は摩滅している。

第3節 金属製品・鍛冶関連遺物

今回の調査では、347点の金属製品が出土した。ほとんどが鉄製品であり、銅製品が3点、鉛製品が4点のみである。器種は判別できるものの中では釘が最も多く、全体の62%を占める。次に刀子が多く、10%程度見られる。この他形状から器種が判断できるものには、鑿、鋸、鎌、火打金、蝶番、鉄鎌、キセル、鉛玉(鉄砲の弾)がある。また、鋳造物(鉄鍋?)の破片も存在する。金属製品は道具の一部(金具)として用いられる場合、器種の特定が困難な場合が多く、全体の約16%はそのような遺物である。この場合、器種名を形状から○○状鉄製品と名称を付して記載した。金属製品が出土した遺構は、基数が多い遺構種別ほど多数の金属製品が出土するという当然の結果がでているが、わずかに6基しかない鍛冶関連遺構からの鉄製品出土数は群を抜いていると言って良いであろう(図300)。また鉄滓の分類でII a類としたものを分析した結果、鉄製品と判明した例もあり(第3部第1章参照)、さらに多くの製品が出土している可能性は高い。以下に器種ごとにその内容について述べる。

釘 (3001~3028、図301) 223点出土した。大きく角釘と丸釘に分けることができるが、丸釘は時代的に新しい可能性が高く、3026は包含層、3027は近世の遺構から出土している。鍛冶関連遺構E747か



ら出土した3028は丸釘に分類したが、頭部に丸みがあり、基部が太くしっかりとした作りで、頭部から先端にかけて細くなる特徴的な形状を呈するため、釘ではない可能性がある。角釘は頭部の形状から分類できる。頭部が平坦で若干の潰れがみられる程度のものであるが、中には頭部に平坦面の拡張部分があるもの(3001・3017・3025)、基部上端を叩き潰して折り返し、頭部とするもの(頭巻釘、3021~3024)がある。3017は頭部の拡張が非常に広い特殊な形状を呈する。3022は頭部の折り返し部分が大きく、基部が細い特徴がある。釘が出土した場所は、古代の竪穴住居跡の2点(内1点が3013)と土坑F771から出土したものを除いて、中近世の遺構と包含層である。中近世では、土坑出土のものが全体の21%を占め、遺構の中では最も多い。ついでビット(柱穴)・溝跡と続くが、土坑・SKの遺構数は群を抜いており、比較の対象とするには一考する必要がある。ただし、溝跡と土坑・ビットの埋土量や遺物出土量を比較した場合、前者の方が圧倒的に多いため、土坑・ビットから出土する釘の比率は高いと考えてよいと思われる。土坑の場合は棺、ビットの場合は建物に使われた釘が出土している可能性が考えられる。大型土坑・鍛冶関連遺構も遺構数と比較すればかなり多いと言えるであろう。特に鍛冶関連遺構は6基のみであり、比率的には他を大きく上回る。遺構で製品として作られたものの可能性もあるが、分析結果にあるように(第3部第1章参照)、鍛造製品の原材料としてリサイクル目的で持ち込まれたものかもしれない。遺物の年代は、出土した遺構の年代から推定しざるを得ない。先述した古代のものや、C68やC91といった10期遺構と推定される土坑からの出土品もあるが、概ね中世に属すると考える。

錠(3029-3030、図301) 2点出土した。3029は断面形が扁平な長方形で、一方が折損している。3030は両端が尖る合釘が中央から曲がったものかもしれない。

T字状鉄製品(3031、図301) 1点出土した。断面形がほぼ正方形を呈する横方向の基部と、断面形が扁平な長方形になる縦方向の基部で構成される。横方向の基部は、縦方向の基部との接合部が若干窪み、一直線にはならない。縦方向の基部の先端は尖る可能性が高い。用途は不明であるが、鍛冶関連遺構E835から出土していることが注目される。

掛け金状鉄製品(3032、図302) 1点出土している。頭部が輪になっており、先端が90°に屈曲する。現在でも使われる内鈎の簡易施錠の金具に似る。区画溝C55から出土していることから、中世後期の遺物と考える。

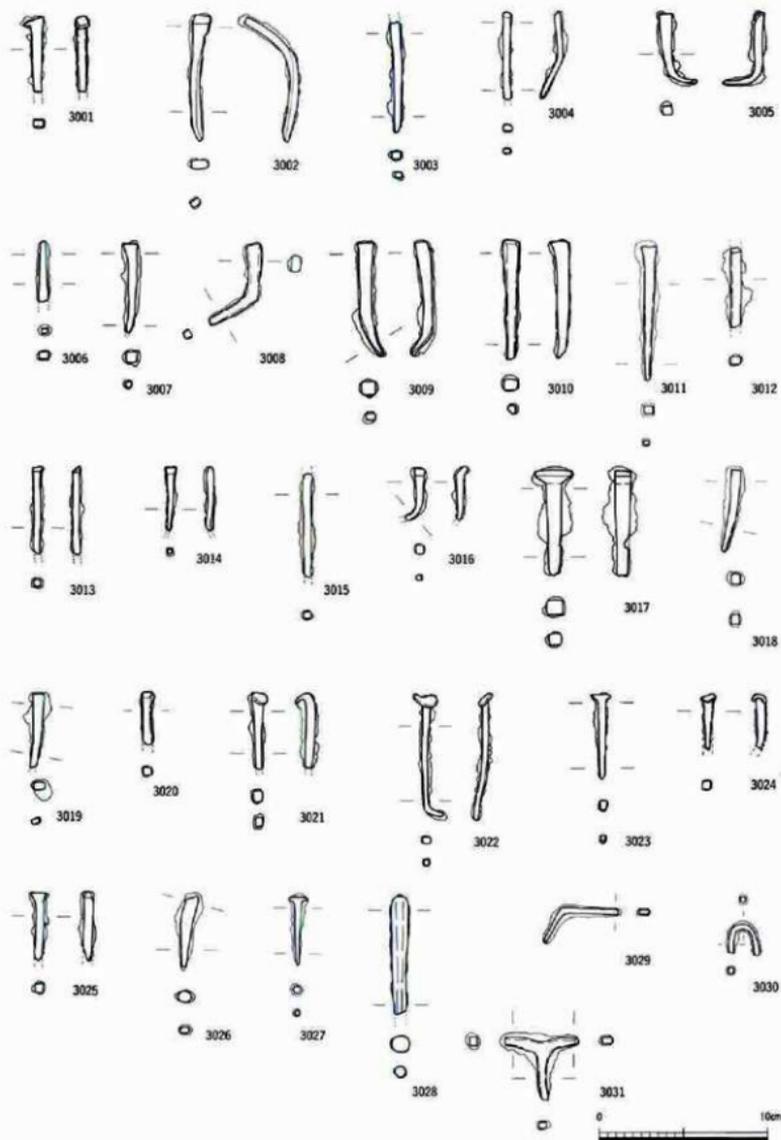


図301 金屬製品① (S = 1/3)

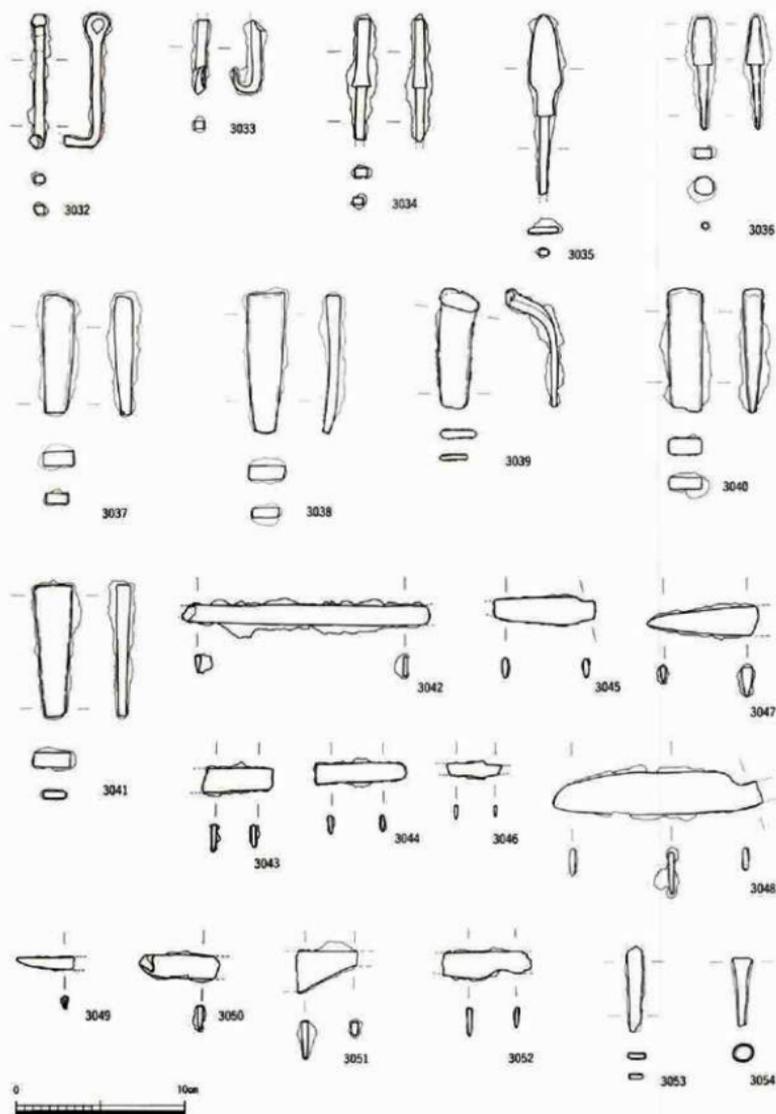


図302 金属製品② (S = 1/3)

鉤状鉄製品 (3033、図302) 1点出土している。断面形が方形である釘に似るが、基部の途中が90°に曲がりさらに先端が90°曲がって上を向いている。自在鉤のように何かを吊るしたものである。鍛冶関連遺構E780の付属溝から出土している。

鉄鏃 (3034～3036・3057、図302) 4点出土している。3034～3036は基部が残っており、鏃との間に段がある。鏃の部分は扁平な形状であり、3035は若干中央部が幅広になる。鏃としたが、先端部の形状に丸みがあり、折損とも考えにくく若干の疑問は残る。3057は雁股鏃である。茎が欠損している。3057を除いて遺構から出土しており、中世のものと思われるが、詳細な時期は不明である。

鑿 (3037～3041、図302) 5点出土している。やや先細りになるタイプ (3037～3039・3041) と頭部から先端まで幅の変わらないタイプ (3040) がある。3039は他と比べて厚さが薄く、作業事故のためか大きく曲がっている。出土した遺構から、3037・3038は中世、3039は近世のものとする。他については不明である。

刀子 (3040～3052、図302) 34点出土した。切先と柄の形状によって分類することができる。切先は、刃の方にあるもの (3047・3048) と峯側にあるもの (3049・3050) の2種類がある。柄は、刃側に段があるもの (3051・3052)、峯側に段があるもの (3047・3048)、両側に段があるもの (3046)、段が無く刃部と柄が同じ太さのもの (3042・3044) の4種類がある。ほぼ完形で出土した3042・3048はそれぞれ掘立柱建物跡SH9の柱跡、土坑F255から出土しており、祭祀的な意図が感じられる。出土した遺構から、3049が古代前期のものであり、その他は中世に属するものとする。なお、未掲載であるが、近世の遺構 (土坑C93) からも刀子が出土している。

ヘラ状鉄製品 (3053、図302) 1点出土した。断面が扁平な長方形を呈する棒状の鉄製品で、一見3042のような刀子に似ているが刃部はない。鍛冶関連遺構に隣接する大型土坑E770から出土している。

漏斗状鉄製品 (3054、図302) 1点出土した。管状の製品であり、一方の端部が先細りになる。重竹遺跡A地点に類例がある²⁹⁾。鍛冶関連遺構E780から出土している。

鎌 (3055、図303) 1点出土した。柄は木製と考えられ、その接合部が鉤形になっている。地下式坑C132の上層から出土した。C132は近世中期に天井が崩れて陥没しており、そのさい何らかの目的で入れられたものと思われる (第1分冊第4章P165参照)。

火打金 (3056、図303) 1点出土した。持ち手が薄くなっており、握りやすくなっている。図の左側の端部が持ち手側の方に反り返っており、その内側が若干窪む。所属時期は不明である。

蝶番 (3058、図303) 1点出土した。6ヶ所のピンが残っている。近世後期の土坑C93から出土した遺物であり、同時期のものであろう。

半球状鉄製品 (3059、図303) 1点出土した。半球状の器のような形状をとる。中世のものと思われるが、詳細な所属時期は不明である。

円盤状鉄製品 (3060、図303) 1点出土した。半分以上欠損しているが、円盤状になると考える。端部がそっており、何らかの製品と考えられるが、用途は不明である。掘立柱建物跡SH14の柱穴から出土しており、中世の遺物であろう。

鑄造鉄片 (3061・3062、図303) 15点出土している。鉄鍋のような製品と考えられるが、詳細は不明である。3062は方形の切れ込みのようなものがある。15点中5点が鍛冶関連遺構から出土しており、分析結果にあるように (第3部第1章参照)、原材料として集められた鉄製品の一部だったと考える。

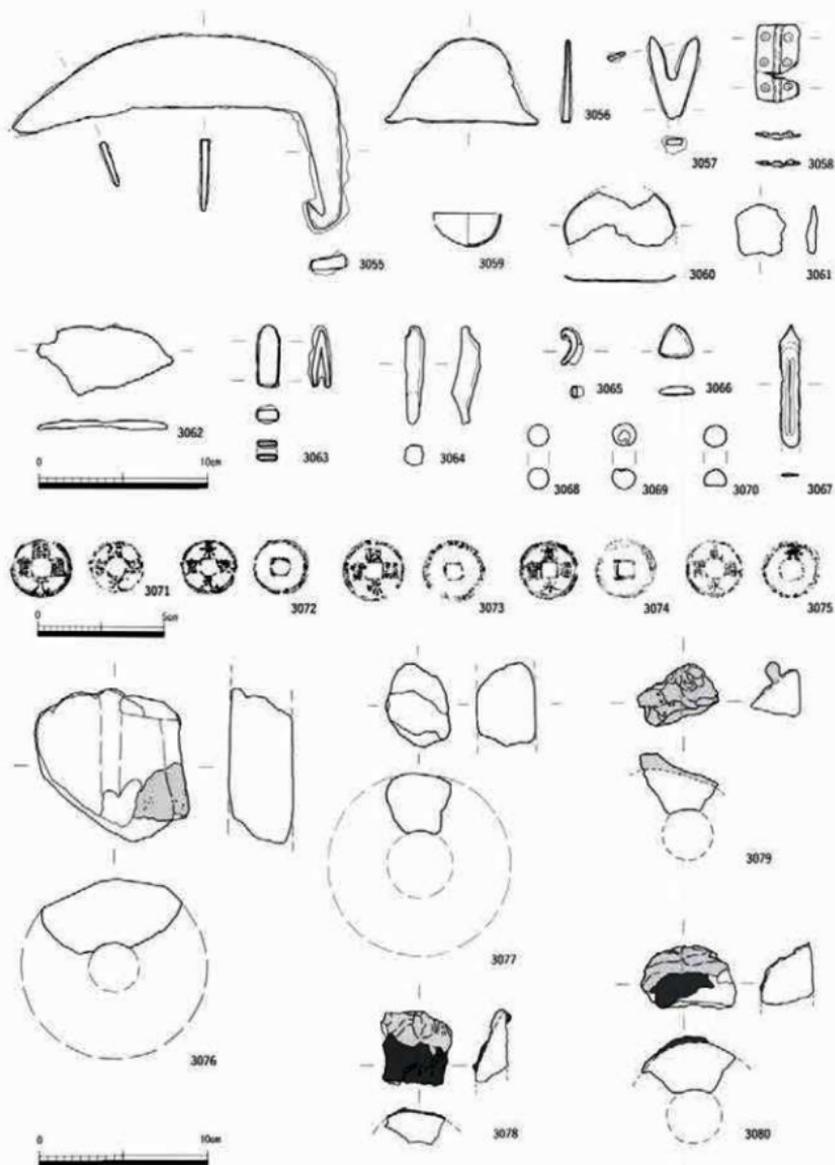


図303 金属製品③および鍛冶関連遺物 (S=1/3、銭貨のみS=1/2)

クリップ状鉄製品 (3063、図303) 1点のみ出土した。毛抜きのような形状であるが、先端に屈曲がないため、クリップ状鉄製品とした。中世のものと思われるが、詳細な所属時期は不明である。

バナナ状鉄製品 (3064、図303) 1点出土した。両端部が欠損している可能性がある。何かの部品と思われる。集石土坑であるF39から出土しており、中世前期のものと思われる。

不明金具 (3065、図303) 1点出土した。断面形が扁平な長方形を呈し、頭部の端部が90°に屈曲する。先端は尖り気味となる。何らかの金具の一部と思われるが、用途は不明である。竪穴住居跡F4のSK1から出土しており、古代前半の遺物と考える。

三角形鉄製品 (3066、図303) 1点出土した。平面形が三角形を呈し、一方の面が平滑になる。用途は不明である。中世のものと思われるが、詳細な所属時期は不明である。

鋼製飾り金具 (3067、図303) 1点出土した。一方の端部が鋭く尖り、片面に浮き彫りの直線的な文様がある。所属時期は不明である。

鉛玉 (3068～3070、図303) 4点出土した。3070は潰れて面ができていない。いずれも包含層から出土しており、所属時期は不明である。

銭貨 (3071～3075、図303) 8点出土しているが、判読可能なものは掲載した5点のみである。3071は2枚の渡米銭が背面同士貼付いた状態で出土した。3073は文字が篆書で書かれるタイプの政和通宝である。3074・3075は寛永通宝であり、3074が古寛永、3075は新寛永で、背面に「文」の字がある背文銭である。渡米銭は遺構内、寛永通宝は包含層から出土している。

金属製品ではないが、鍛冶関連遺物としてここで述べる。

羽口 (3076～3080、図303) 94点出土したが、ほとんどが細片であり、粘土塊等を誤認している可能性もある。出土した内の41点が砂岩製であり、残りが粘土製であったが、後者の依存状況は極めて悪いため掲載はしなかった。3076・3077は大型の羽口の一部分である。よく似た石質であるが、復元した孔径は異なっている。3076の外面の一部に融解した粘土が付着している。3078～3080は先端部の破片であり、融解した粘土の付着が顕著である。先端部であるためやや肉薄であるが、3076・3077とはほぼ同じサイズの羽口と考える。

第4節 木製品

木製品には杭、円盤状木製品、結物、用途不明製品、楔がある。杭については実測を行わなかったが、詳細について第4章で述べた(第1分冊P186参照)。ここでは、井戸跡A100の底部付近から出土した遺物について記述する。なお、井戸跡A100は8期に属すると推定されるので、これらの遺物も、当時期に比定されると考える。

円盤状木製品 (4001・4002、図304) 2点出土した。4001は片面を円周にそって斜めに削っている。木目に沿って2ヶ所が折損しており、図の左側を2本、右側を3本の太膳でつないでいる。裏面に漆が全面に塗られている。4002は、4001とはほぼ同じ形状と加工をもつ円盤状の木製品である。片方の側面が折損しており、太膳によって接合している。折損部分と木目が揃うため同じ材と考えられるが、折損部分とその他の部分の厚さと加工が異なっており、ほぼ最終段階に近い段階で接合したものとされる。

結物 (4003～4009、図304) 11点出土した。異なる加工や木取りがみられ、同定はしていないが異なる

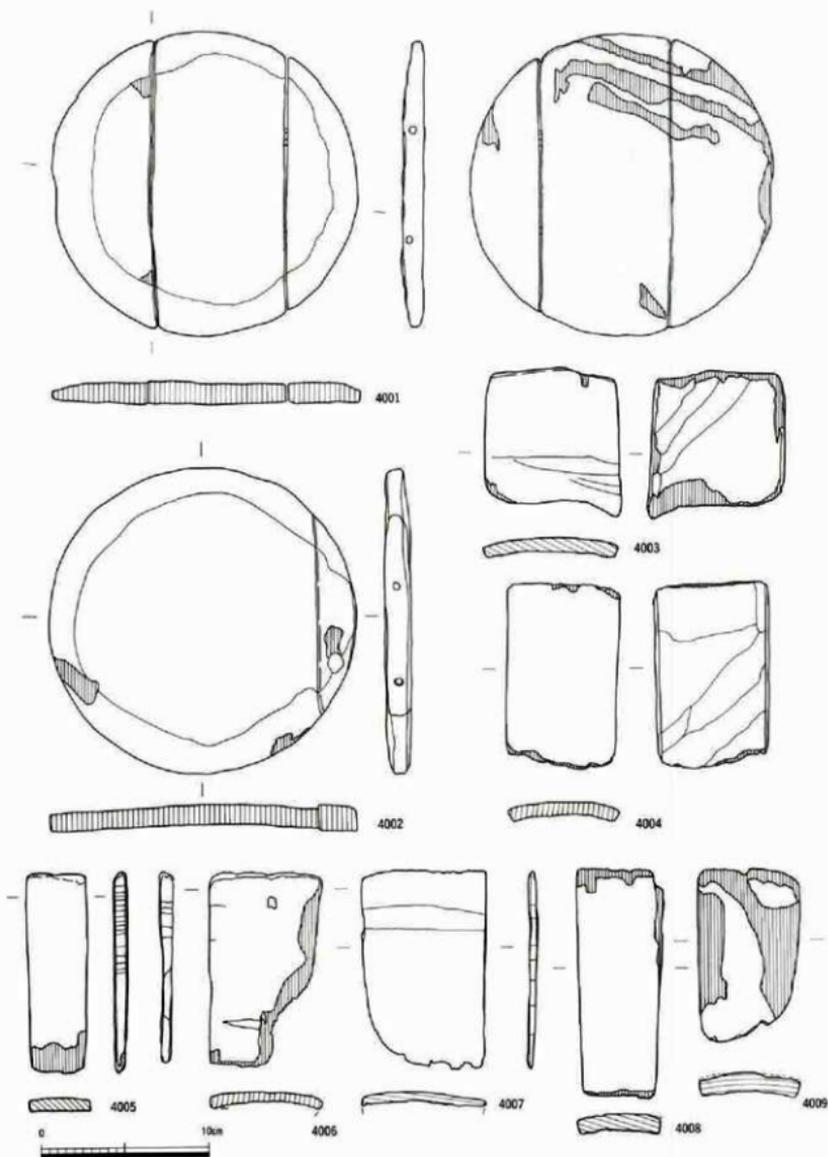


図304 木製品① (S=1/3)

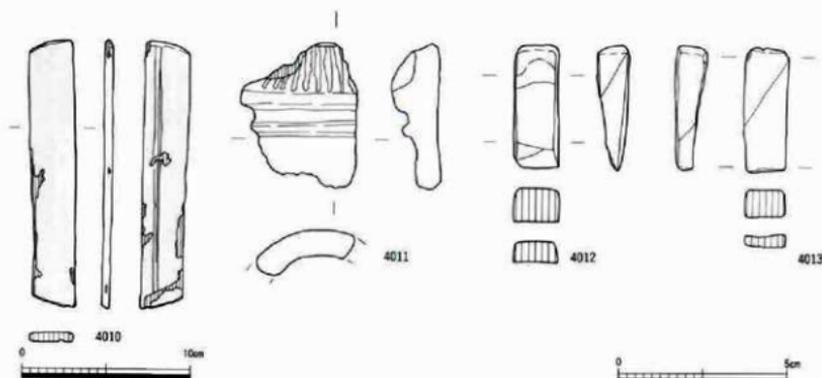


図305 木製品② (S=2/3、4010はS=1/3)

る材が用いられている可能性が高く、同一個体とは言いがたい。4003は内面に手斧のような工具による削り痕が残る。表面には表面のツブレが見えるが、タガの痕跡かどうかは不明である。4004も内面に手斧のような工具による削り痕が残る。4005は一方の側面にカンナ痕が残る。4006は残存状態が悪く、内面が剥離している。表面に2ヶ所の長方形の孔が見られるが、目的は不明である。胴の一部に帯状のツブレがみられるが、タガの痕跡かどうかは不明である。図の左側の側面にはカンナ痕とみられる痕跡が残る。4007は裏面が剥離しており、残存状態が悪い。表面には帯状のつブレ痕があり、タガの痕跡である可能性がある。側面にはカンナ痕が残る。4008は他の物に比べて幅が狭い。4009は他のものと比べて、木取りが異なるのが特徴である。

板状製品 (4010、図305) 1点出土した。4010は内外面に漆が付着している。4001・4002と同様に太臍によって接合した痕が折損断面に3ヶ所残り、円形の器形であったと思われる。径目の木取りをしていることから、このような形状に割れやすかったのであろう。片側の端部側面が三方から削られており、二次加工された可能性がある。また一方の面に溝が刻まれているが、何のためかはわからない。

用途不明竹製品 (4011、図305) 1点出土した。4011は、竹の節部分を使用しており、端部には9条のスリットが刻まれている。外面の節にそって、漆が付着している。直径5cmほどの竹を使用しているが、図の左側の側面が生きている可能性が高く、竹を割いて加工した製品と思われる。

楔 (4012・4013、図305) 2点出土した。4012はそれほど細かい加工は施されておらず、鉈のような工具で板材を切り落としたものと思われる。なお、切り口のある面につブレが見られ、使用によるツブレの可能性はある。4013は4012と同様に、鉈のような工具で整形したと思われる。使用によるつブレは見られない。

- 1) 宇野隆夫「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
- 2) 静岡県埋蔵文化財センター研究紀要 第5輯の鎌倉出土遺物の編年表の中に同様な施文をした青磁碗が示されている。なお、時代は13世紀中葉とされている。
- 3) 高木洋1981「4 美濃国刻印項忠器」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会。
- 4) 北小本原文の分類にある13世紀前半のものに類似する。多治見市教育委員会2001「総括」『北小本古窯跡群第2次調査報告書』。
- 5) 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』P103。
- 6) 瀬戸・美濃大窯跡編年表大室1後半に分類された門六古窯跡（B系）に似ている。藤澤良祐2002前掲。
- 7) 多治見市教育委員会2001前掲。
- 8) 高木晃2002『雲山仙道遺跡』岐阜市教育文化振興事業団によると、他に城之内遺跡（岐阜市）、仲迫間遺跡（美濃加茂市）に出土例がある。
- 9) 水野正好2000「46. 土公供と地取作法と札」『奈良文化財研究所研修 信仰関連遺跡調査過程、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2001「小谷城下町（近江・浅井氏）」『戦国城下町研究の最前線』に輪文を描いた土師器皿（土師質皿）が掲載されている。
- 10) 多治見市教育委員会2001前掲。
- 11) 年代観等については、瀬戸市埋蔵文化財センター橋崎正一氏・藤澤良祐氏のご教示による。
- 12) 多治見市教育委員会2001前掲。
- 13) 上田1982、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2001ともに前掲。
- 14) 土城市美濃陶磁歴史館2002『豊臣期のやさもの〜大坂城出土の桃山陶磁』。
- 15) 沙見一夫1999「砥石について—中世出土の砥石を中心にして」『第12回北陸中世考古学研究会資料集』。砥石の生産地を明記した記録としては、『延喜式』巻第17に内匠寮内の作り料として伊予砥・青砥の名が記されているとしている。
- 16) 同上。大工道具など繊細な刃先を必要とする道具に用いられる合砥は、本山・果坂・からす・内釜等の品質名称が知られている。なお、報告者も竹中大工道具館にて現在の鳴鶴砥石を写真した。
- 17) 両側面に生産地加工痕が残ることから推測した。
- 18) 沙見1999、中世期の幅寸法が1寸2分（約3.6cm）前後であった生産地規格が、時代が降るに連れて徐々に広がっていったとしている。沙見氏がいう「中世期」の生産地規格を推定に使用された資料は、鎌倉時代の中心地である鎌倉市内から出土したものであり、中世前期にはすでに1寸2分の規格が完成したことを意味する。E780出土土上砥の特殊性が窺われる。
- 19) 沙見1999前掲。
- 20) 沙見1999前掲。
- 21) 砥石の砥面の様相について沙見氏によれば、2011が「古代的」、2013が「近世的」であると指摘を受けた。
- 22) 太刀の製作には、荒砥から仕上げ砥へと複数の砥石を使用しながら研ぎを行う工程がある（荒押し・下地研ぎ・仕上げ研ぎ）。今回鍛冶関連遺構から出土した砥石は、下地研ぎ段階の砥石が抜けられていることになる。なお、「鍛冶屋敷」と称される遺構を検出した重竹遺跡A地点からは108点の砥石が出土しているが、太刀製作に必要な砥石がすべて出土している可能性が高い（注15参照）。広井雄一1971「日本刀の製作と手入れ」『刀剣のみかた 技術・流派』第一法規出版株式会社、尾関章1995「重竹遺跡鍛冶屋敷跡出土の砥石について」『関鍛冶の起源を探る』関鍛冶刀祖調査会編。
- 23) 沙見氏によれば、紀州大村砥（和歌山県白浜町産）という砥石もあるが、肉眼では見分けが付かないためここでは割愛した。
- 24) 沙見一夫2001「石製品の流通」『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会。
- 25) 重要無形文化財保持者である研師の小野氏の談話の中で、「私たちの影が太鼓橋のようにまろくなっているのですが、大工さんの砥石のように平らかへっこんでいるのだと…（中略）…いっぺんに刃にあたってこの肉がへってしまうのです」と語っている。今回出土したものは平滑な面をもつ大型砥石が多いため今後の検討課題と言えるが、2024の砥面はこうした理由によって形成された砥面なのかもしれない。小野光敏（談）1989「日本刀の“研ぎ”」『鉄の文化史 五千年の謎とロマンを追って』新日本製鐵広報企画編集 東洋経済新報社。
- 26) 沙見氏から、バリをとるために使用された可能性がある旨指摘を受けた。
- 27) 沙見一夫2001前掲。
- 28) 美濃市周辺では、現在でも「火打」という地名が多く残り、特に郡上市美並町は全国的に火打石の産地として知られていた。増子・三島陶氏はかつて火打石が産出した地域の珪石を採集し、実際の出土品との比較を試みている。実際に採集資料を実見したが、今回出土したものは在地（美濃市周辺）産とみて間違いないと考えられる。また火打石に限らず、今回出土した珪岩製の石製品の多くは、在地の石材を使用したものだろう。増子誠・三島美奈子2003「火打石の研究ノート」『美濃の考古学』第6号 美濃の考古学研究会。
- 29) 篠原英政1984前掲。重竹遺跡A・B両地点から出土しており、「一般的なものらしい」とされている。

表76 土器観察表(1)

器名	ブロン	遺跡・発出 場所(所在地)	種 別	形数(分)	法量 (cm)			横径 (cm)		調 整 等	文様・施文	胎土色調	形式・款式など	調査機関 図録(頁)
					口径	底径	器高	口縁	底縁					
1	AQ1	A77[P(SH10)]	白瓷系陶器 甕	—	—	(4.1)	—	2	内外面同軸ナテ, 同軸本取肌	—	10YR7/1R10	北越系11型式(胎土色)	218 47	
3	DJ17	D106[P(SH20)]	白瓷系陶器 甕	—	31.3	4.6	2.1	2.9	0.2	内外面同軸ナテ, 同軸本取肌	2.5Y7/1R0	北越系11型式(胎土色)	218 47	
5	DO17	D156[P(SH21)]	白瓷系陶器 甕	—	32.3	4.6	2.7	4.1	0	内外面同軸ナテ, 同軸本取肌	2.5Y8/2R0	北越系11型式(胎土色)	218 47	
6	DO17	D156[P(SH21)]	古瀬戸 甕	—	—	—	—	—	1	内面同軸ナテ, 内面同軸器	2.5Y6/1R1	古瀬戸甕類	218 47	
8	EC18	D426[大型土器(SH10)]	白瓷系陶器 甕	—	34.0	5.0	4.6	3.2	4.8	内外面同軸ナテ, 底面内面磨きナテ, 胎付高台(磨製板), 同軸本取肌, 胎ナテ	2.5Y8/1R0	北越系9型式(大瀬戸)	218 47	
14	EM26	E374[P(SH30)]	白瓷系陶器 甕	—	31.0	3.71	2.4	2.9	5	内外面同軸ナテ, 同軸本取肌	10Y8/1R0	北越系11型式(胎土色)	218 47	
15	FP25	F3196[P(SH40)]	白瓷系陶器 甕	—	12.9	1.40	1.4	2.5	3.8	内外面同軸ナテ, 底面内面磨きナテ, 同軸本取肌	5Y7/1R0	北越系7型式(胎土色)	218 47	
16	GR27	F944[P(SH44)]	土師器/古代 磨盤土器	—	68.1	—	—	—	1.5	内面磨きナテ, 外表面同軸器	2.5YR5/6C 1+R6	—	218 47	
17	FP25	F770E[P(SH40)]	白瓷系陶器 甕	—	33.4	4.7	5.0	2	12	内外面同軸ナテ, 胎付高台(磨製板), 同軸本取肌, 胎ナテ	2.5Y7/2R1	北越系9型式(大瀬戸)	218 44	
18	FP25	F770E[P(SH40)]	白瓷系陶器 甕	—	32.0	—	—	—	4.8	内外面同軸ナテ	2.5Y7/1R0	北越系9型式(大瀬戸)	218 47	
19	FP25	F770E[P(SH40)]	白瓷系陶器 小甕	—	38.0	—	—	—	1.8	内外面同軸ナテ	2.5Y7/1R0	北越系9型式(大瀬戸)	218 44	
20	FP23	F770E[P(SH40)]	白瓷系陶器 甕	—	—	5.5	—	—	—	内外面同軸ナテ, 底面内面磨きナテ, 胎付高台(磨製板), 同軸本取肌, 胎ナテ	10YR7/1R0	北越系9型式(大瀬戸)	218 47	
22	AP9	A12[P(SA0)]	白瓷系陶器 甕	—	—	4.8	—	—	0	内外面同軸ナテ, 同軸本取肌	10YR7/1R0	北越系11型式(胎土色)	218 47	
24	BD0	A5[P]	白瓷系陶器 甕	—	—	14.0	—	—	2	内外面同軸ナテ, 内面内面磨きナテ, 同軸本取肌	2.5Y7/1R0	北越系7型式(胎土色)	218 47	
26	AP1	A46[P]	大瀬戸 甕	—	32.0	—	—	—	1.5	内外面同軸ナテ, 底面内面磨きナテ, 胎付高台(磨製板), 同軸本取肌, 胎ナテ	胎 土 色 調 : 2.5 YR7/1R1 胎土色調: 2.5Y7/1R1	大瀬戸	218 47	
31	AT2	A30[P]	白瓷系陶器 甕	—	—	15.0	—	—	4.5	内外面同軸ナテ, 内面内面磨きナテ, 胎付高台(磨製板), 同軸本取肌, 胎ナテ	10YR7/1R1 10YR7/1R1 胎土色調: 2.5Y7/1R1	北越系9型式(胎土色)	218 47	
33	AP1	A33[P]	白瓷系陶器 甕	—	—	4.8	—	—	4	内外面同軸ナテ, 同軸本取肌	10YR7/1R0	北越系11型式(胎土色)	218 47	
34	AP1	A46[P]	常滑 甕	—	—	32.4	—	—	3	—	2.5YR4/7R1	—	218 47	
35	BJ4	B03[P]	中国陶磁器 青磁 甕	—	—	—	—	—	0.1	—	青磁 胎土: 常滑内面: 同軸本取肌, 底面同軸器, 底面同軸器, 胎土色調: 10YR7/1R0	—	218 43	
36	BK4	B13[P]	中国陶磁器 青磁 甕	—	—	38.4	—	—	1.5	—	外周に細く点状施文, 胎土色調: 10YR6/2.5Y7/1R1	10YR6/1R0	218 47	
37	BN4	B13[P]	古瀬戸 甕	—	—	—	—	—	0.5	内外面同軸ナテ	胎 土 色 調 : 2.5YR5/3Y7/1R1	古瀬戸甕IV式	218 47	
38	BN4	B13[P]	古瀬戸 甕	—	—	—	—	—	0.5	内外面同軸ナテ	胎 土 色 調 : 2.5YR5/3Y7/1R1	古瀬戸甕IV式	218 47	
40	BR5	B07[P]	白瓷系陶器 甕	—	32.5	5.0	3.5	7.5	10.5	内周工具による同軸ナテ, 内面同軸器ナテ, 同軸本取肌	2.5YR6/2R1	北越系11型式(胎土色)	218 44	
42	BO10	B20[P]	中国陶磁器 青磁 甕	—	—	15.0	—	—	4	—	青磁 胎土: 常滑胎土: 常滑内面: 同軸本取肌, 底面同軸器, 胎土色調: 10YR7/1R0	—	218 43	
43	BP10	B76[P]	瀬戸(陶磁器) 甕	—	32.6	6.1	2.6	9	12	内外面同軸ナテ, 胎付高台(磨製板), 胎付高台(磨製板), 胎付高台(磨製板), 胎付高台(磨製板)	胎 土 色 調 : 5YR5/2R4 胎土色調: 10YR7/2C 胎土色調: 10YR7/2C 胎土色調: 10YR7/2C	瀬戸4小甕	218 36	
44	BQ9	B72[P]	古瀬戸 甕	3甕	—	—	—	—	1	内外面同軸ナテ	胎 土 色 調 : 10YR3/1R0	古瀬戸甕IV式	218 47	
46	BP10	B81[P]	大瀬戸 甕	6甕	—	—	—	—	0.6	内外面同軸ナテ	胎 土 色 調 : 2.5YR4/7R1	大瀬戸	218 47	
47	CK8	C28[P]	白瓷系陶器 甕	—	31.6	1.40	—	2.5	3	内周工具による同軸ナテ, 外表面同軸器ナテ, 同軸本取肌	10YR8/4R1	北越系11型式(胎土色)	218 47	
48	CK8	C28[P]	古瀬戸 甕	4甕	—	—	—	—	0.5	内外面同軸ナテ	胎 土 色 調 : 10YR3/4R0	古瀬戸甕IV式	218 47	
50	DQ66	D030[P]	白瓷系陶器 甕	—	38.0	10.9	1.5	2.1	4	内外面同軸ナテ, 同軸本取肌	2.5Y7/1R0	北越系9型式(胎土色)	218 47	
51	DE17	D44[P]	白瓷系陶器 甕	—	33.3	—	—	—	3	内外面同軸ナテ	10YR7/1R0	北越系11型式(胎土色)	218 47	
52	DE17	D44[P]	白瓷系陶器 甕	—	—	14.0	—	—	1.5	内外面同軸ナテ, 胎付高台(磨製板), 同軸本取肌, 胎ナテ	2.5Y7/1R0	北越系9型式(大瀬戸)	218 47	
53	FR19	F13[P]	白瓷系陶器 甕	—	38.4	3.9	2.4	2	12	内外面同軸ナテ, 同軸本取肌	10YR8/2R0	北越系9型式(胎土色)	218 42	
54	FR19	F13[P]	白瓷系陶器 甕	—	—	16.0	—	—	5.6	内外面同軸ナテ, 胎付高台(磨製板), 同軸本取肌	2.5YR7/2R0	北越系9型式(胎土色)	218 47	
55	FR19	F13[P]	白瓷系陶器 甕	—	—	6.8	—	—	5	内外面同軸ナテ, 胎付高台(磨製板), 同軸本取肌	2.5Y7/1R0	北越系9型式(胎土色)	218 47	
56	RE11	E44[P]	中国陶磁器 青磁 甕	—	—	—	—	—	0.45	—	内周に点状施文による二重の磨き文, 胎土色調: 2.5YR5/2R1 胎土色調: 2.5YR5/2R1	10YR7/1R1	218 42	

表77 土器観察表(2)

器物番号	タイプ	産地・時代 (出典文献)	種 類	形制分類	容量 (ml)		残存 (文/口)		異 型 等	文 様 ・ 施 装	胎 土 色 澤	形式・款式(注)	焼成温度 (推定)	
					口徑	底徑	口縁	底底						
57	EX18	E20C1[注]	白灰土陶器 甕	—	—	15.0	—	3	内外面陶刻十字, 底面内側部 に十字, 底面外側部に横線刻, 胎土赤褐色	—	MYR7/IR白	北朝前3型式(甕 類)	219 47	
58	EX17	E20C1[注]	中国陶磁器 白磁焼	大平形分脚 白磁焼(注)	—	—	—	0.1	—	白磁: 2.5YR7/2R オレンジ	NY7/IR白	—	219 43	
59	EX17	E20C1[注]	白灰土陶器 甕	—	—	18.0	—	1	内外面陶刻十字, 胎付高台(甕 類), 胎土赤褐色	—	—	前朝前3型式	219 47	
60	EX17	E20C1[注]	中国陶磁器 青磁焼	上層分脚型1 型	—	—	—	0.3	—	青磁: 輪穴中心に印 字, 内面赤褐色, 土 2.5YR7/3R黄	10YR6/2R 黄 青	10YR6/2R 黄 青	219 42	
61	EX22	D60C1[注]	白灰土陶器 甕	—	33.0	8.2	4.7	8.8	内外面陶刻十字, 胎付高台(甕 類), 胎土赤褐色に土を戻 胎土赤褐色に土を戻し	—	2.5YR7/IR白	高朝前4型式中	219 47	
62	EX17	E20C1[注]	白灰土陶器 甕	—	38.2	5.2	2.1	1.2	2.3	内外面陶刻十字, 胎土赤褐色	—	2.5YR7/IR白	高朝前4型式	219 47
63	EX16	E20C1[注]	中国陶磁器 青磁焼	大平形分脚 胎土赤褐色 胎土赤褐色	—	5.8	—	2	底面高台	—	10YR7/IR白	—	219 42	
64	EX16	E20C1[注]	白灰土陶器 甕	—	—	6.1	—	6	内外面陶刻十字, 胎付高台(甕 類), 胎土赤褐色	—	2.5YR7/IR白	北朝前5型式(甕 類)	219 47	
66	GR22	F16C1[注]	白灰土陶器 甕	—	—	7.0	—	2.5	内外面陶刻十字, 胎付高台	—	5YR7/IR	高朝前4型式	219 47	
67	G-19	F20[注]	土器(中朝) 小甕	ツケツ土器類	38.0	4.0	2.8	1.1	12	内面耳付に土を刻十字, 外 面陶刻十字, 胎土赤褐色	—	2.5YR7/IR	—	219 44
68	GP9	F14C1[注]	土器(古代) 横板土甕	—	—	18.3	—	—	1.8	内外面陶刻	—	10YR6/2R 赤 い黄緑-5YR6/ 6R	—	220 43
69	GR0	F16C1[注]	白灰土陶器 甕	—	37.2	8.8	3.6	4.2	3.8	内外面陶刻十字, 胎付高台, 胎 土赤褐色	—	MYR7/IR白	高朝前4型式	220 44
70	GR29	F16C6[注]	土器(中朝) ツケツ土器類	—	33.2	6.3	4.4	1.5	12	内外面陶刻十字, 胎土赤褐色, 胎土赤褐色	—	2.5YR7/6Y青	—	220 48
71	GR25	F13C1[注]	白灰土陶器 甕	—	—	7.0	—	4.1	内外面陶刻十字, 胎付高台(甕 類), 胎土赤褐色	—	2.5YR7/2R赤	北朝前3型式(甕 類) 下層型	220 47	
72	GR25	F14C1[注]	白灰土陶器 甕	—	—	12.0	4.3	2.5	2.4	内外面陶刻十字, 胎土赤褐色	—	2.5YR7/2R赤	高朝前4型式	220 47
74	EX13	G60[注]	白灰土陶器 甕	—	31.2	5.4	2.2	3.6	6	内面耳付に土を刻十字, 外 面陶刻十字, 胎土赤褐色	—	2.5YR7/IR	北朝前3型式 (甕之類)	220 47
75	H102	G8C1[注]	大甕 大目赤甕	—	—	—	—	—	—	胎 土: 2.5YR7/7 赤	10YR8/2R 赤	大甕	220 47	
76	H102 H101 H103	G12C1 [注], G15金輪Y 型付大甕	赤甕 [注]付大甕	—	28.4	11.5	9.3	1.8	2	内外面陶刻十字, 胎土赤褐色 土を戻し胎土赤褐色	胎 土: 5YR7/4オ ー	2.5Y7/2R赤	高朝前4型式	220 47
77	H123	G16C1[注]	高脚付 甕	—	—	—	—	0.4	—	胎 土: 5YR7/2R 赤 褐色	2.5YR7/IR	高脚付甕占	220 47	
78	H103	G21C1[注]	白灰土陶器 甕	—	31.2	4.2	2.9	3.1	6.2	内面耳付に土を刻十字, 外 面陶刻十字, 胎土赤褐色	—	2.5YR7/IR	北朝前4型式	220 47
79	H101 H102	G27C1 [注], G15金輪Y 型付大甕	赤甕 胎土赤 褐色	—	32.0	6.4	3.9	1.5	6	内外面陶刻十字	見 込: [美濃] NY 7/IR	NY7/IR	胎土赤 黄褐色 土を戻し胎土赤 褐色	220 44
80	H106	G28C1[注]	高脚付 大目赤甕	—	—	—	—	8.3	—	胎 土: 2.5YR7/6R	MYR8/IR	高脚付甕占	220 47	
82	H109	G79C1[注]	赤甕 甕類	—	—	—	—	—	—	胎 土: 赤褐色	2.5YR7/IR	高脚付大甕	220 47	
84	H127	H1[注]	中国陶磁器 白磁焼	—	—	3.0	—	12	—	胎 土: NA/IR白	2.5YR7/IR	—	220 41	
85	GR9	H23C1[注]	大甕 建水	甕類	—	—	—	—	—	—	MYR7/IR	大甕中	220 47	
86	GR9	H14C1[注]	甕(陶器) 瓦甕	—	38.1	14.6	1.9	3.5	5	内外面陶刻十字, 胎土赤褐色 土を戻し胎土赤褐色, 底面高台	胎 土: 2.5YR7/2 赤	2.5Y7/2R赤	甕付1-2小甕	220 36
87	GR18	H10C1[注]	白灰土陶器 甕	—	37.0	9.0	1.5	1.1	1.8	内外面陶刻十字, 胎付高台, 胎 土赤褐色に土を戻し	—	MYR7/IR	高朝前4型式	220 47
88	GR8	H3C1[注]	高脚付 甕類	—	—	4.2	—	—	—	内外面陶刻十字, 胎土赤褐色 土を戻し胎土赤褐色, 底面高 台	胎 土: 2.5YR7/3 オレンジ	10YR7/2R 赤 い黄緑	高脚付甕類	220 47
89	GR10	H12C1[注]	白灰土陶器 小甕	—	—	5.2	—	2	—	内外面陶刻十字, 胎付高台, 胎 土赤褐色に土を戻し	MYR8/IR	北朝前3型式(次 上層)	220 47	
90	GN190 GR100	H14C1[注]	白灰土陶器 白磁焼	—	—	—	—	8.3	—	内外面陶刻十字	10YR7/IR	北朝前	220 42	
92	GR18	H10C1[注]	白灰土陶器 甕	—	—	4.0	—	1.6	—	内外面陶刻十字, 胎付高台(甕 類), 胎土赤褐色	—	2.5YR7/IR	北朝前4型式(次 層)	220 47
93	GR101	E20C1[注]	白灰土陶器 甕	—	—	3.2	—	3	—	内面耳付に土を刻十字, 外 面陶刻十字, 胎土赤褐色	—	10YR8/3R 赤 褐色	北朝前3型式 (甕類)	220 47
94	GM101	E20C1[注]	高脚付 甕類	甕類	33.2	—	—	1	—	胎 土: 5YR7/2R 赤 い黄緑	2.5YR7/IR	高脚付甕類	220 47	
95	GR108	H10C1[注]	高脚付 高脚甕	甕類	38.0	—	—	0.6	—	内外面陶刻十字	胎 土: 10YR5/4R 赤い黄緑	2.5Y7/IR	高脚付甕類	220 47
96	GR109	H10C1[注]	土器 (中朝) 甕類	—	—	—	—	0.4	—	内外面陶刻十字	—	2.5YR7/4R 黄 褐色	—	220 47
99	CK- CK9-10	C71 [注], C19[注]	土器(中朝) [注]	甕類	—	—	—	—	—	胎土赤褐色(土を戻)十字, 底 面外側部に土を戻し胎土赤 褐色	10YR7/2R 赤 い黄緑	—	221 48	
100	CK9	C72[注]	白灰土陶器 甕	—	—	7.0	—	4.7	—	内外面陶刻十字, 胎付高台(甕 類), 胎土赤褐色	—	2.5Y7/IR	高朝前4型式	221 48

表78 土器観察表(3)

遺物 番号	ドリット	遺物・埋没 位置(調査区)	種 類	形制分類	遺量 (cm)	高さ (cm)	口径 径長	器底 径長	底面 径長	裏 装 等	文様・地味	粘土色調	形式・様式など	発掘調査 区画	図号	
101	CK10	C72(土器)	古瀬戸 緑釉小皿	—	15.0	4.8	1.8	4	8	内外面回転ナデ, 回転糸織肌	鉄 輪・5YR3/3黄 土ナデ	2.5YR/1R白	古瀬戸緑釉古	221	48	
102	CM9	C72(土器)	古瀬戸 煎釜	—	—	—	—	—	0.8	内外面回転ナデ, 煎釜外周回転 糸織肌	鉄 輪・5YR3/3ナ デ黄	2.5YR/1R白	古瀬戸煎釜	221	48	
103	CM10	C72(土器)	古瀬戸 煎釜	—	17.0	—	—	—	2	内外面回転ナデ, 回転糸織肌	2.5YR/3黄	古瀬戸煎釜	221	48		
104	CK- CN9-10	C72(土器)	古瀬戸 煎鉢深皿	—	—	—	—	—	1	内外面回転ナデ	鉄 輪・2.5YR2/3黄 土	2.5Y/1R白	古瀬戸煎鉢	221	48	
105	CM10	C72(土器)	浅形(陶器) 煎鉢深皿	—	31.4	—	—	—	1.4	内外面回転ナデ, 煎鉢の糸織 肌外周回転ナデ	鉄 輪 見込・黒紫文・ 鉄 輪・黒心輪・5YR3/ 2ナデナデ黄・2.5 YR/1R白	10YR7/2C 土黄	浅形煎鉢	221	48	
106	CK- CN9-10	C72(土器)	古瀬戸 煎釜	—	—	—	—	—	1	内外面回転ナデ	鉄 輪・2.5YR3/3 黄	10YR7/2C 土黄	古瀬戸煎釜	221	48	
107	CK- CN9-10	C72(土器)	大塚 煎鉢	煎鉢	—	—	—	—	1	内外面回転ナデ	鉄 輪・5YR3/3黄	10YR7/4C 土黄	大塚煎鉢	221	48	
108	CM10	C72(土器)	浅形(陶器) 煎鉢	16C煎	—	—	—	—	0.7	内外面回転ナデ	鉄 輪・2.5Y3/3黄	2.5YR/2R白	浅形煎鉢	221	48	
120	CB6	B302(SD)	土器部(中形) 煎釜	—	—	—	—	—	1	内外面回転ナデ	鉄 輪	10YR7/2C 土黄	—	221	48	
120	CB6	B302(SD)	白土器部煎 釜	—	18.0	(4.1)	1.9	1.5	7	内外面回転ナデ, 煎釜内底 糸織ナデ, 回転糸織肌	鉄 輪	2.5YR/1R白	土器部(中形)煎 釜	221	48	
130	CB6	B302(SD)	白土器部煎 釜	—	19.5	(6.0)	1.7	1.5	2.5	内外面回転ナデ, 煎釜内底 糸織ナデ, 回転糸織肌	鉄 輪	2.5YR/1R白	土器部(中形)煎 釜	221	48	
131	CB6	B302(SD)	古瀬戸 煎鉢浅皿	—	—	—	—	—	1.0	内外面回転ナデ, 転径高心	見込・黒輪に1心同 心内文・鉄 輪・2.5 YR2/3黄	2.5YR/2R黄	古瀬戸中皿	221	48	
131	CB6	B302(SD)	大塚 白煎鉢	煎鉢タイプ	11.8	(4.0)	2.4	2.2	5	内外面に1心同回転ナデ, 外 面回転ナデ, 回転糸織肌	鉄 輪	10YR6/1R黄	大塚	221	48	
131	CB6	B302(SD)	大塚 白煎鉢	煎鉢タイプ	9.0	(4.1)	—	—	4	4.5	内外面に1心同回転ナデ, 外 面回転ナデ, 回転糸織肌	鉄 輪	2.5YR3/3黄	大塚	221	48
134	CB6	B302(SD)	大塚 焼灰煎 釜	—	19.1	(5.0)	2.3	2.5	11	内外面に1心同回転ナデ, 外 面回転糸織肌, 転径高心	見込・印 文・文(黒 心)・鉄 輪・5YR3/ 3ナデ黄	2.5YR/2R黄	大塚	221	48	
135	CB6	B302(SD)	大塚 焼灰煎 釜	—	10.4	(6.2)	2.3	2.9	7.8	内外面回転ナデ, 煎鉢から底 部外周回転ナデ, 転径高心	見込・印 文(黒心 文)・鉄 輪・2.5 YR3/3ナデ黄	2.5YR/1R白	大塚	221	36	
136	CB6	B302(SD)	大塚 焼灰煎 釜	—	—	—	—	—	4.2	内外面回転ナデ, 煎鉢から底 部外周回転ナデ, 転径高心	見込・印 文(黒心 文)・鉄 輪・5YR/ 3ナデ黄	10YR7/2C 土黄	大塚-3	221	48	
137	CB6	B302(SD)	浅形(陶器) 湯瓶煎釜	—	18.9	(5.0)	2.3	4.2	8	内外面回転ナデ, 外面回転ナ デ, 転径高心	鉄 輪・鉄 輪・2.5YR/ 3ナデ黄	10YR6/1R白	浅形煎鉢	221	48	
138	CB6	B302(SD)	浅形(陶器) 煎鉢	—	31.6	(6.8)	2.4	3	12	内外面回転ナデ, 煎鉢から底 部外周回転ナデ, 転径高心	鉄 輪 見込・黒紫文・ 鉄 輪・黒心輪・2.5 YR/1R白	2.5YR/1R白	浅形煎鉢	221	48	
138	CB6	B302(SD)	大塚 小次郎湯 桶	—	18.4	(3.3)	4.4	2	12	内外面回転ナデ, 煎鉢から底 部外周回転ナデ, 転径高心(口 縁)	鉄 輪・鉄 輪・5YR3/ 2C土黄・鉄 輪・5 YR3/3黄	2.5YR7/2C 土黄	大塚	221	36	
140	CB 6	B302(SD)	大塚 大目湯桶	—	31.2	(4.2)	6.2	4	12	内外面回転ナデ, 煎鉢から底 部外周回転ナデ, 転径高心(口 縁)	鉄 輪・2.5YR2/3 黄	10YR6/2R白	大塚湯桶	221	36	
141	CB6	B302(SD)	浅形(陶器) 湯瓶	煎鉢形	11.8	—	—	—	1.5	内外面回転ナデ	鉄 輪・鉄 輪・2.5R3/ 2C土黄・2.5YR3/3 黄	10YR7/2C 土黄	—	221	48	
142	CB6	B302(SD)	古瀬戸 湯瓶	煎鉢	—	2.4	—	—	8	内外面回転ナデ, 煎鉢糸織肌, 口縁	鉄 輪・5YR3/3黄	2.5YR7/4C 土黄	古瀬戸湯瓶古 煎鉢	221	44	
143	CB6	B302(SD)	浅形(陶器) 湯瓶煎鉢深皿	—	19.0	—	—	—	3	内外面回転ナデ, 煎鉢下平外 周回転ナデ	鉄 輪・2.5YR3/3 黄	2.5YR/3R黄	—	221	48	
144	CB6	B302(SD)	大塚 煎鉢	煎鉢	28.8	—	—	—	1.1	内外面回転ナデ	鉄 輪・5YR3/3黄	2.5YR7/4C 土黄	大塚煎鉢	221	48	
145	CB6	B302(SD)	大塚 煎鉢	煎鉢	29.3	—	—	—	2.0	内外面回転ナデ	鉄 輪・5R4/1R 黄	10YR6/1R 黄	大塚煎鉢	221	48	
146	CB6	B302(SD)	大塚煎鉢	煎鉢	29.6	—	—	—	0.9	内外面回転ナデ	鉄 輪・2.5YR2/3 黄	10YR6/2R白	大塚湯桶	221	48	
147	CB6	B302(SD)	常陸 煎 釜	—	—	—	—	—	0.7	内外面回転ナデ	鉄 輪・5YR2/3 黄	10YR6/1R黄	常陸一煎釜	221	48	
148	CB6	B302(SD)	中国陶磁部 白磁器	大宇布分装白 磁器(煎鉢)	—	6.2	—	—	4	—	白磁(2.5GY7/1R ナデ黄)	N2.0R白	—	221	41	
149	CB6	B302(SD)	中国陶磁部 白磁器	高瀬分装煎鉢	—	6.0	—	—	1	—	白磁(2.5YR/1R) 黄	5YR2/1R白	—	221	41	
150	CB6	B302(SD)	中国陶磁部 白磁器	—	—	4.4	—	—	17	開口高心	青磁(2.5GY6/1 ナデ黄)	N7.0R白	—	221	42	
151	CB6	B302(SD)	中国陶磁部 磁器	小野分装煎鉢	—	—	—	—	0.2	—	白磁・青磁・洗滌文 草・黄・内面・紫 線・透物飾	N9.0R白	—	221	41	
152	CB6	B302(SD)	中国陶磁部 磁器	小野分装煎鉢	—	—	—	—	—	—	白磁・青磁・紫線・ 赤紫文・内面・紫線・ 透物飾	2.5YR/3R白	—	221	41	
153	CC10	B402(SD)	土器部(中形) 煎 釜	ロケット煎釜	10.5	(4.1)	2.7	3.5	5.7	内外面回転ナデ, 回転糸織肌	鉄 輪	10YR6/1R黄	—	221	43	

表80 土器観察表(5)

遺物 番号	メナ 番号	分類・整理 (土器種別)	種 別	形態分類	口径 (mm)			横径 (3/12)			装 型 等	文 様・施 装	胎土 肌質	形式・様式等	所属 施設	
					口径	口径	口径	口径	口径	口径						
208	CC6	B43X(SD)	透写(陶器) 灰土器	—	33.2	0.13	2.1	0.2	2.4	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 内面: 中央に 一帯の溝線, 中央の 溝に溝線, 左右の 溝に溝線, 左右の 溝に溝線, 左右の 溝に溝線 YR1/2肌質-7.5 YR4/28黄	10YR6/2浅黄 肌	透写小瓶	225	48	
209	CD9	B43X(SD)	透写(陶器) 灰土器	—	32.4	0.30	2.5	2.5	4.3	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 口縁: 縦筋, 口 縁に溝線, 中央の 溝に溝線, 左右の 溝に溝線, 左右の 溝に溝線 YR1/2肌質-7.5 YR4/28黄	2.5YR6/28黄 肌	透写小瓶	225	48	
210	CE9	B43X(SD)	大甕 大目薬瓶	—	31.3	—	—	—	4	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字	鉄輪 口縁: 7.5 YR1/2肌質-7.5 YR4/28黄	10YR6/4浅黄 肌	大甕	225	36	
211	CE9	B43X(SD)	占瓶? 大目薬瓶	—	31.2	—	—	—	1.5	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字	鉄輪 口縁: 3Y2/2 肌質-7.5YR3/30 黄	10YR7/2浅 黄	占瓶? 大甕	225	48	
212	CE9	B43X(SD)	占瓶? 大目薬瓶	—	31.0	—	—	—	3.8	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字	鉄輪 口縁: 3YR1 /1(肌質-10YR4/1 黄)	10YR1/4浅 黄	占瓶? 大甕	225	48	
213	CC10	B43X(SD)	占瓶? 大目薬瓶	—	32.4	—	—	—	2.5	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字	鉄輪 口縁: 1.0 YR1/2肌質-7.5 YR4/28黄	2.5YR2/28黄 肌	占瓶? 大甕	225	48	
214	CC CF10	B43X(SD)	大甕 大目薬瓶	—	—	—	—	—	4.8	12	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 口縁: 2.5 YR6/4浅黄-2.5 YR6/28黄-7.5 YR4/28黄	2.5YR6/28黄 肌	大甕 大甕	225	48
215	CF10	B43X(SD)	大甕 大目薬瓶	—	32.0	4.3	3.8	0.7	12	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 口縁: 1.0 YR1/2肌質-2.5 YR4/28黄	10YR6/28黄 肌	大甕 大甕	225	36	
216	CF10	B43X(SD)	大甕 大目薬瓶	—	31.8	—	—	—	1.6	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字	鉄輪 口縁: 10YR1/2 肌質-3YR3/30 黄	10YR6/28黄 肌	大甕 大甕	225	48	
217	CD10	B43X(SD)	大甕 大目薬瓶	—	32.0	—	—	—	1.5	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字	鉄輪 口縁: 10YR1/2 肌質-10YR3/30 黄	10YR7/18浅 黄	大甕	225	48	
218	CE9- CF10	B43X(SD)	透写(陶器) 大目薬瓶	—	32.6	—	—	—	1.1	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字	鉄輪 口縁: 7.5YR3/30 黄	10YR7/2浅 黄	透写小瓶	225	48	
219	CC10	B43X(SD)	大甕 大目薬瓶	—	—	—	—	—	3.7	12	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 口縁: 3YR1/2 肌質-1.0YR1/2 肌質-7.5YR4/28 黄	10YR6/28黄 肌	大甕 大甕	225	48
220	CD10	B43X(SD)	大甕 取手取心	—	—	—	—	—	3.4	12	内外面回転十字, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 口縁: 2.5 YR3/30黄	10YR7/2浅 黄	大甕 大甕	226	48
221	CD10	B43X(SD)	透写(陶器) 大甕	—	31.0	—	—	—	3.5	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字	鉄輪 内面: 口縁に 溝線, 口縁に溝線 YR1/2肌質-2.5YR3/30 黄	5Y7/18浅 黄	透写小瓶	226	48	
222	CF10	B43X(SD)	透写(陶器) 大甕	—	32.2	—	—	—	5.2	12	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 口縁: 10YR2/28 黄	2.5YR2/28黄 肌	透写小瓶	226	48
223	CF10	B43X(SD)	透写(陶器) 大甕	—	31.1	—	—	—	2.5	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 口縁: 7.5YR3/30 黄	2.5YR2/28黄 肌	透写小瓶	226	48	
224	CD10	B43X(SD)	透写(陶器) 大甕	—	—	—	—	—	4.7	12	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 内面: 口縁に 溝線, 口縁に溝線 YR1/2肌質-2.5YR3/30 黄	2.5YR2/28黄 肌	透写小瓶	226	48
225	CD10	B43X(SD)	占瓶? 大甕	列置型	—	—	—	—	4.30	—	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 口縁: 10YR2/28 黄	2.5YR2/28黄 肌	占瓶? 大甕	226	48
226	CE9	B43X(SD)	大甕 大目薬瓶	—	—	—	—	—	5.30	12	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字	鉄輪 口縁: 7.5YR3/30 黄	2.5YR2/28黄 肌	大甕	226	36
227	CE9	B43X(SD)	占瓶? 大甕	樽式	—	—	—	—	2.7	内外面回転十字, 胴部外周回転十字	鉄輪 口縁: 10YR2/28 黄	10YR7/2浅 黄	占瓶? 大甕	226	48	
228	CF10	B43X(SD)	透写(陶器) 大甕	—	30.3	0.2	2.8	4.5	2.8	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 内面: 口縁に 溝線, 口縁に溝線 YR1/2肌質-2.5 YR3/30黄	10YR6/28黄 肌	透写小瓶	226	26	
229	CC10	B43X(SD)	透写(陶器) 大甕	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字	鉄輪 口縁: 口縁に 溝線, 口縁に溝線 YR1/2肌質-7.5 YR4/28黄	2.5YR2/28黄 肌	透写小瓶	226	48	
230	CE9	B43X(SD)	占瓶? 大甕	樽式	—	—	—	—	2	内外面回転十字	鉄輪 口縁: 7.5YR3/30 黄	10YR6/28黄 肌	占瓶? 大甕	226	48	
231	CE9	B43X(SD)	占瓶? 大甕	樽式	—	—	—	—	—	内外面回転十字	鉄輪 口縁: 7.5YR4/28 黄	10YR7/2浅 黄	占瓶? 大甕	226	48	
232	CC10	B43X(SD)	白土器 大甕	樽式	—	—	—	—	—	内外面回転十字	鉄輪 口縁: 5G6/14 黄	10YR1/4浅 黄	白土器 大甕	226	48	
233	CD10	B43X(SD)	透写(陶器) 大甕	—	—	—	—	—	10.30	7	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 口縁: 2.5YR3/30 黄	2.5YR2/28黄 肌	透写小瓶	226	48
234	CD9- CE9	B43X(SD)	大甕 大甕	—	33.8	17.4	2.9	2.5	1.5	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 内面: 口縁に 溝線, 口縁に溝線 YR1/2肌質-2.5YR3/30 黄	10YR6/28黄 肌	大甕 大甕	226	48	
235	CE9- CF10	B43X(SD)	透写(陶器) 大甕	—	—	—	—	—	10.6	8	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 内面: 口縁に 溝線, 口縁に溝線 YR1/2肌質-2.5YR3/30 黄	2.5YR2/28黄 肌	透写小瓶	226	36
236	CD10	B43X(SD)	占瓶? 大甕	樽式	—	—	—	—	1	内外面回転十字, 胴部中心, 胴部外周回転十字, 胴部高台	鉄輪 口縁: 5YR6/4 黄	10YR6/28黄 肌	占瓶? 大甕	227	48	
237	CC10	B43X(SD)	占瓶? 大甕	樽式	—	—	—	—	6.2	内外面回転十字	鉄輪 口縁: 5YR4/6 黄	10YR7/2浅 黄	占瓶? 大甕	227	48	

表81 土器観察表(6)

遺物番号	アット	遺種・層位 (遺物種類)	種 別	形制分類	数量 (個)	西倉(C/D)	西倉(T/D)	調査 年度	発掘・出土	出土位置	形式・式名	規格/標準 (単位/時期)
					(白磁 黒磁 赤磁)	(白磁 黒磁 赤磁)						
238	CE10	B412(SD)	大甕 磁鉢	5型	—	—	9.9	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 5YR3/200赤 土質: 10YR7/41C +a-炭粉	大甕中級I型	237 49
239	CE10	B412(SD)	大甕 磁鉢	8A型	20.25	—	1.3	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 2.5YR3/200赤 土質: 5YR/200赤	大甕中級I型	237 49
240	CE10	B412(SD)	大甕 磁鉢	8A型	20.4	—	1.6	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 10R3/100赤 土質: 2.5YR/200赤	大甕中級I型	237 49
241	CE10	B412(SD)	大甕 磁鉢	8B型	20.6	—	2.1	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 10R3/100赤 土質: 2.5YR/200赤	大甕中級I型	237 49
242	CE10	B412(SD)	大甕 磁鉢	8A型	20.45	—	1.3	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 5Y2/200赤 土質: 2.5YR/200赤	大甕中級I型	237 49
243	CE10- CF10	B412(SD)	大甕 磁鉢	28.75	—	—	2	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 2.5YR3/100赤 土質: 2.5Y2/200赤	大甕中級I型	237 49
244	CE10	B412(SD)	大甕 磁鉢	13型	20.45	—	1	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 2.5YR6/75 土質: 2.5Y2/200赤	10YR6/2/200赤 大甕中級I型	237 49
245	CE10	B412(SD)	大甕 磁鉢	14型	20.4	—	1.2	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 5YR3/200赤 土質: 2.5Y2/200赤	大甕中級I型	237 49
246	CE10	B412(SD)	大甕 磁鉢	8A型	—	—	0.2	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 7.5YR3/200赤 土質: 10YR7/41C +a-炭粉	大甕中級I型	237 49
247	CE10- CF10	B412(SD)	大甕 磁鉢	14C型	—	—	1.4	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 2.5YR3/100赤 土質: 2.5Y2/200赤	大甕中級I型	237 49
248	CE10	B412(SD)	大甕 磁鉢	14C型	20.45	—	1.14	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 10YR3/100赤 土質: 10YR6/2/200赤	大甕中級I型	237 49
249	CE10- CE10	B412(SD)	通形(陶器) 磁鉢	14c型	24.45	—	1.3	—	内外面同焼ナテ, 胴部外周に 乳溝あり	磁 種: 7.5Y2/200赤 土質: 2.5Y2/200赤	通形中級I型	237 49
250	CE10- CF10	B412(SD)	大甕 磁鉢	—	—	10.0	0.7 1.3	—	内外面同焼ナテ, 胴部外周に 乳溝あり	磁 種: 10R3/100赤 土質: 10YR6/2/200赤	大甕中級I型	237 49
251	CF10	B412(SD)	大甕 磁鉢	—	—	3.8	—	12	内外面同焼ナテ, 胴部外周に 乳溝あり	磁 種: 10R3/100赤 土質: 2.5YR/200赤	大甕中級I型	237 49
252	CE10	B412(SD)	金甕 甕	—	—	33.4	—	2.5	—	内外面同焼ナテ	10YR6/2/200赤	237 49
253	CE10	B412(SD)	金甕 甕	—	—	—	—	—	内外面同焼ナテ	10YR6/2/200赤	237 49	
254	CE10	B412(SD)	中国陶器部 白磁器	高脚分製I型	10.0	0.0	2.4 1.5 2.3	—	焼成温度(約750℃あり)	白磁: 5YR3/200赤 土質: 5YR3/200赤	10YR3/2/200赤 高脚分製I型	238 41
255	CE10	B412(SD)	中国陶器部 白磁器	高脚分製I型	—	0.0	—	2	焼成温度	白磁: 5YR3/200赤 土質: 5YR3/200赤	10YR3/2/200赤 高脚分製I型	238 41
256	CE10	B412(SD)	中国陶器部 白磁器	高脚分製I型	—	33.5	—	1.2	—	内面: 灰褐色土質 赤土質 外底: 灰褐色土質 土質: 赤土質 赤土質 赤土質 赤土質	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 41
257	CF10	B412(SD)	中国陶器部 白磁器	上野分製I型 細口直筒	11.95	—	—	1.6	—	外底: 白磁器に土 質赤土質 赤土質 赤土質 赤土質 赤土質	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 41
258	CE10	B412(SD)	中国陶器部 白磁器	上野分製I型 細口直筒	111.6	0.2	6.9 2.2 12	—	焼成温度	外底: 白磁器に土 質赤土質 赤土質 赤土質 赤土質 赤土質	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 41
259	CE10	B412(SD)	中国陶器部 白磁器	上野分製I型 細口直筒	—	5.9	—	11	—	外底: 白磁器に土 質赤土質 赤土質 赤土質 赤土質 赤土質	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 41
260	CE10	B412(SD)	中国陶器部 白磁器	小野分製I型 細口直筒	—	0.0	—	4.5	焼成温度	白磁 外底: 白磁器 に土質赤土質 赤土質 赤土質 赤土質 赤土質	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 41
261	CE10	B412(SD)	中国陶器部 白磁器	小野分製I型 細口直筒	—	0.0	—	3.1	焼成温度	白磁 外底: 白磁器 に土質赤土質 赤土質 赤土質 赤土質 赤土質	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 41
262	CE10	B412(SD)	中国陶器部 白磁器	—	—	0.0	—	4	—	白磁 外底: 白磁器 に土質赤土質 赤土質 赤土質 赤土質 赤土質	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 41
263	CO11	C712(SD)	土器(中野) 白磁器	コナノ土器部	(7.7)	—	—	3	内外面同焼ナテ	白磁 外底: 白磁器 に土質赤土質 赤土質 赤土質 赤土質 赤土質	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 41
264	CK11	C712(SD)	土器 磁鉢	—	—	—	0.4	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 2.5YR6/40 土質: 2.5YR/200赤	大甕中級I型	238 49
265	CM11	C712(SD)	通形(陶器) 磁鉢	磁鉢	—	—	0.5	—	内外面同焼ナテ	磁 種: 2.5YR6/40 土質: 2.5Y2/200赤	通形中級I型	238 49
266	CL11	C712(SD)	通形(陶器) 磁鉢	—	—	—	0.6	—	内外面同焼ナテ, 胴部外周に 乳溝あり	磁 種: 2.5Y2/200赤 土質: 2.5Y2/200赤	大甕中級I型	238 49
267	CO11	C712(SD)	通形(陶器) 白磁器(油器)	—	7.1	0.4	1.2 12 12	—	内外面同焼ナテ, 胴部外周に 乳溝あり	磁 種: 2.5YR3/100赤 土質: 2.5YR3/100赤	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 49
268	CE10- CE10	C712(SD)	通形(陶器) 白磁器(油器)	—	6.7	3.3	3.4 12 12	—	内外面同焼ナテ, 胴部外周に 乳溝あり	磁 種: 2.5YR3/40 土質: 2.5Y2/200赤	通形中級I型	238 49
269	CO11	C712(SD)	通形(陶器) 白磁器(油器)	—	7.5	2.2	1.9 12 12	—	内外面同焼ナテ, 胴部外周に 乳溝あり	磁 種: 10YR3/100赤 土質: 10YR3/100赤	通形中級I型	238 49
270	CO11	C712(SD)	通形(陶器) 白磁器	—	6.4	2.8	2.3 10.3 12	—	内外面同焼ナテ	白磁 外底: 白磁器 に土質赤土質 赤土質 赤土質 赤土質 赤土質	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 49
271	CK11	C712(SD)	白瓷系陶器 磁鉢	—	—	—	—	—	内外面同焼ナテ	白磁 外底: 白磁器 に土質赤土質 赤土質 赤土質 赤土質 赤土質	10YR6/2/200赤 高脚分製I型	238 49

表83 土器観察表(B)

番号	器名・形状 (土器分類)	材質	形制分類	重量 (g)			高さ (cm)	口径 (cm)	調査号	土層・層名	彩色写真	形式・式名	発掘地 所在地
				総重	底重	器重							
313	EJ16	K002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	7.1	—	12	内外面回転十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型		N7080古	黒山B型式	231 50	
314	EJ16	K003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	9.2	—	6.3	内外面回転十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型		2.5Y6/20R	黒山B型式	231 50	
315	EJ16	K002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	6.2	—	6.2	内外面回転十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型	高台内・裏面(口)	2.5Y7/10G	黒山B型式(清洲型下一変種)	231 50	
316	EJ16	K002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	16.0	—	1	内外面回転十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型、胎十字		1.5Y6/10G	黒山B型式(清洲型下一変種)	231 50	
317	EJ16	K001(黒山)	白灰土陶器 甕	—	16.0	—	3	内外面回転十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型		2.5Y6/20G	黒山B型式(白土型)	231 50	
318	EJ16	K001(黒山)	土師土 五口鉢	—	29.0	—	1	内外面回転十字、胎裏下下部回転本笠型		2.5Y2/10G	黒山B(白土)系陶器(胎)形式併行	231 50	
322	EJ17	K7002(黒山)	白灰土陶器 瓦11号	—	17.1	3.7	2.3	3.9	7	内外面回転十字、回転本笠型	2.5Y2/10G	黒山B	231 45
323	EJ17	K7003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	8.2	5.8	2.9	12	7	内外面回転十字、回転本笠型	0YR8/20G	黒山B型式(清洲型下一変種)	231 45
324	EJ17	K7003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	16.25	6.1	2.3	1.2	8	内外面回転十字、回転本笠型	0YR8/20G	黒山B型式(清洲型下一変種)	231 50
325	EJ17	K7002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	8.3	3.9	2.1	7.8	12	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、回転本笠型、胎十字	5Y7/10G	黒山B型式(白土型)	231 45
326	EJ17	K7003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	16.6	4.0	2.2	5	12	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、回転本笠型	0YR8/20G	黒山B型式(白土型)	231 50
327	EJ17	K7002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	16.0	14.0	2.1	3.1	6.1	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、回転本笠型	1.5Y2/10G	黒山B型式(白土型)	231 50
328	EJ17	K7003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	33.9	6.0	5.8	5.7	12	内外面回転十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型	2.5Y6/10G	黒山B型式(清洲型)	231 45
329	EJ17	K7002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	6.6	—	—	2.6	内外面回転十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型	2.5Y2/10G	黒山B型式(清洲型下一変種)	231 50	
330	EJ16	K7003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	34.5	13.9	3.3	4	5	内外面回転十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型	5Y7/10G	黒山B型式(白土型)	231 45
331	EJ17	K7002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	17.2	—	—	5	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型	高台内・裏面(口)	0YR2/10G	黒山B型式(白土型)	231 39
332	EJ16	K7002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	13.0	—	—	3.2	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型		5Y6/10G	黒山B型式(清洲型)	231 50
333	EJ17	K7002(黒山)	土師土 五口鉢	—	36.0	—	—	1.8	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、肩付高台		2.5Y6/10R	黒山B(白土)系陶器(胎)形式併行	231 50
334	EJ17	K7002(黒山)	土師土 五口鉢	—	34.5	—	—	2.8	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、肩付高台		5Y7/10G	黒山B(白土)系陶器(胎)形式併行	231 50
335	EJ17	K7003(黒山)	中国陶磁器 青磁甕	大平塚中野原 伝説古窯跡 1期	—	13.3	—	8.2	—	青磁：10Y6/2 0—7R	2.5Y2/10G		232 43
336	EJ17	K7002(黒山)	中国陶磁器 青磁甕	上野中野原 1期	—	—	—	1	—	青磁：輪肉(口)に 胎土の裏面を文、青 磁：2.5Y6/20R 9—7	2.5Y2/10G		232 47
341	EJ16	K002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	16.3	5.1	7.0	4.2	6.3	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、回転本笠型	2.5Y2/10G	黒山B型式(白土型)	231 50
342	EJ16	K003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	17.0	13.1	1.2	2	4	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、回転本笠型、胎十字	2.5Y1/10G	黒山B型式(白土型)	231 50
343	EJ16	K002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	16.0	6.4	1.3	4.8	6.3	内外面回転十字、回転本笠型、胎十字	3.5Y2/10G	黒山B型式(白土型)	231 50
344	EJ16	K003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	34.9	5.8	5.1	4	8	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型	0YR2/10G	黒山B型式(白土型)	231 46
345	EJ16	K002(黒山)	白灰土陶器 甕	—	34.7	5.3	5.1	3.0	12	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型	0YR2/10G	黒山B型式(白土型)	231 46
346	EJ16	K003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	32.1	14.0	5.8	1.8	2.7	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型	2.5Y6/10G	黒山B型式(清洲型)	231 50
347	EJ16	K003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	6.6	—	—	12	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型、胎十字	2.5Y2/10G	黒山B型式(清洲型)	231 50	
348	EJ16	K003(黒山)	白灰土陶器 甕	—	13.1	—	—	3.3	内外面回転十字、胎裏内面胎土胎十字、肩付高台(筒形器)、回転本笠型、胎十字	2.5Y2/10G	黒山B型式(清洲型)	231 50	
349	EJ16	K002(黒山)	白灰土陶器 鉢	—	—	—	—	1	内外面回転十字、胎裏下下部回転本笠型	2.5Y2/20R	黒山B(白土)系陶器(胎)形式併行	232 13	
350	EJ16	K002(黒山)	黄埴 甕	—	—	—	—	6.7	内外面回転十字	2.5Y6/10R	黄埴B型式	232 13	
351	EJ16	K003(黒山)	黄埴 甕	—	—	—	—	6.1	内外面回転十字	0YR2/10R	黄埴B型式	232 13	
352	EJ16	K003(黒山)	中国陶磁器 青磁甕	上野中野原 1期	31.5	—	—	1.5	—	青磁：片切型(口)に 胎裏面を文、青磁： 7.5Y6/10R	N7080古	232 47	
353	EJ16	K003(黒山)	中国陶磁器 白磁甕	大平塚中野原 1期(清洲型)	—	—	—	6.6	—	白磁：2.5Y6/10R	5Y7/10G	232 48	

表84 土器觀察表(9)

番号	グリーフ	遺物・部位 [品名(器種)]	種別	形制分類	容量 (ml)				調査等	文様・装束	彩・色調	形式・様式(土)	掲載頁数	
					口径	口径	高さ	口径/高さ						
334	B16	B16(縄文)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	—	—	—	1	—	内面凹輪十子	—	10YR6/3灰黄緑	北原新形式(土)	232 53	
334	B16	B16(縄文)	白土系陶器 陶	—	(7.7)	(4.0)	1.7	3.5	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	—	2.5YR/1R0	北原新形式(土)	232 53	
334	B16	B16(縄文)	白土系陶器 陶	—	(8.8)	(4.2)	1.9	2.8	内面凹輪十子, 凹輪未形成	—	5Y7/1R0	北原新形式(土)	232 53	
335	B16	B16(縄文), KKK02(縄文)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	4	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	—	2.5YR/1R0	北原新形式(土)	232 53	
334	B16	B16(縄文)	白土系陶器 陶	—	—	4.5	—	11	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成, 磨十子	—	10YR6/2R0	北原新形式(土)	232 53	
339	B16	B16(縄文)	白土系陶器 陶	—	53.8	(5.0)	3.8	1.1	3.7	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	—	10YR6/1R0	北原新形式(土)	233 53
340	B16	B16(縄文)	白土系陶器 陶	—	53.8	(5.0)	3.8	3.3	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成, 磨十子	—	2.5YR/2R0	北原新形式(土)	233 53	
340	B16	B16(縄文)	白土系陶器 陶	—	—	4.6	—	11	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成, 磨十子	—	2.5YR/2R0	北原新形式(土)	233 53	
340	B16	B16(縄文)	白土系陶器 陶	—	—	4.8	—	8	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	高内: 磨跡「+」	2.5YR/2R0	北原新形式(土)	233 53	
340	B16	B16(縄文)	白土系陶器 陶	—	—	5.1	—	3	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	高内: 磨跡「+」	2.5Y7/1R0	北原新形式(土)	233 53	
340	B16	B16(縄文)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	9.4	—	白輪: 2.5Y7/2R3	10YR6/2R0	—	233 41	
340	B17	B17(縄文)下層(大型土)	白土系 土	—	—	—	—	2.5	内面凹輪十子	—	N7/0R0	北原新形式(土)	233 53	
340	B17	B17(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	3	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 磨十子	—	10YR6/1R0	北原新形式(土)	233 53	
340	B17	B17(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	2.5	内面凹輪十子, 凹輪未形成	—	N7/1R0	北原新形式(土)	233 53	
340	B17	B17(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	3.5	内面凹輪十子, 凹輪未形成	—	10YR7/1R0	北原新形式(土)	233 53	
340	B17	B17(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	4.4	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成, 磨十子	—	2.5Y7/3R3	北原新形式(土)	233 53	
340	B17	B17(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	4.3	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成, 磨十子	高内: 磨跡「+」	2.5Y7/1R0	北原新形式(土)	233 53	
340	B17	B17(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	2.8	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成, 磨十子	高内: 磨跡「+」	2.5YR/1R0	北原新形式(土)	233 53	
340	B17	B17(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	9.4	—	白輪: 5Y7/2R0	2.5Y7/1R0	—	233 41	
340	B17	B17(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	1	—	白輪: 2.5G7/1R0	5YR/1R0	—	233 41	
340	A83	A83(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	5.8	内面凹輪十子, 凹輪未形成	—	2.5YR/1R0	北原新形式(土)	233 53	
340	A83	A83(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	4.5	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	—	5Y7/1R0	北原新形式(土)	233 53	
340	A83	A83(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	11.0	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	—	5Y7/1R0	北原新形式(土)	233 53	
340	A83	A83(大型土)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	陶器(土)	512.8	(5.0)	2.8	1.1	1.8	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	高内: 磨跡「+」	10YR6/2R0	大塚	233 53
340	A83	A83(大型土)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	陶器(土)	—	—	—	—	3.8	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成, 磨十子	高内: 磨跡「+」	2.5Y7/1R0	北原新形式(土)	233 53
340	A83	A83(大型土)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	陶器(土)	—	—	—	—	2	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	高内: 磨跡「+」	10YR7/2R0	北原新形式(土)	233 53
340	A83	A83(大型土)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	陶器(土)	—	—	—	—	1	内面凹輪十子	高内: 磨跡「+」	10YR7/2R0	北原新形式(土)	233 53
340	A83	A83(大型土)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	陶器(土)	—	—	—	—	—	白輪: 5Y7/2R0	10YR6/2R0	大塚	233 53	
340	A83	A83(大型土)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	陶器(土)	—	—	—	—	3.5	高内: 磨跡「+」	高内: 磨跡「+」	5YR/1R0	北原新形式(土)	233 43
340	B02	A6(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	5.5	内面凹輪十子, 凹輪未形成	—	2.5YR/4R3	北原新形式(土)	234 53	
340	B02	A6(大型土)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	陶器(土)	—	—	—	—	1.2	内面凹輪十子	高内: 磨跡「+」	2.5Y7/2R0	北原新形式(土)	234 53
340	B02	A6(大型土)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	陶器(土)	—	—	—	—	—	高内: 磨跡「+」	5Y7/1R0	北原新形式(土)	234 53	
340	B02	A6(大型土)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	陶器(土)	—	—	—	—	1.2	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	高内: 磨跡「+」	10YR6/2R0	北原新形式(土)	234 53
340	B02	A6(大型土)	土器部(中野)伊勢塚遺跡	陶器(土)	—	—	—	—	2.5	内面凹輪十子, 底部内面磨光跡, 底部内面磨光跡, 凹輪未形成	高内: 磨跡「+」	10YR6/1R0	北原新形式(土)	234 53
340	A84	A84(大型土)	白土系陶器 陶	—	—	—	—	3.5	内面凹輪十子, 凹輪未形成	—	2.5YR/3R3	北原新形式(土)	234 53	

表86 土器觀察表(II)

遺物 番号	ナリフ	遺種・部位 (分類別名)	種 別	形制分類	直径 (mm)			高さ (mm)	備 考 等	文 様 ・ 刺 意	胎土色調	形式・様式など	出所・調査 種別・時期	
					口徑	底徑	器底							
436	H272	G682[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	—	9.2	—	7.5	内外面同軸ナリ, 同軸水切線	横線 7.5X3/100水切線	HV2/200/黄褐色	古瀬戸磁鉢型	235 34	
437	H272	G682[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	—	—	—	9.2	内外面同軸ナリ	横線 2.5X3/100水切線	HV2/200/黄褐色	古瀬戸磁鉢型	235 34	
438	H272	G682[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	高脚	26.6	—	—	1.4	内外面同軸ナリ	横線 2.5X3/100水切線	2.5X7/200	古瀬戸磁鉢型	235 34	
439	H272	G682[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	高脚	31.5	2.0	3.0	1.1	1.3	内外面同軸ナリ, 同軸水切線	2.5X7/100	古瀬戸土器式(輪之形)	235 34	
440	H272	G682[大型土器]	古瀬戸 磁鉢小皿	—	310.5	4.2	2.7	3.3	10	内外面同軸ナリ, 同軸水切線	横線 輪之形 2.5 X 3/2 高脚 7.5 X 3/100	HV2/200/黄褐色	古瀬戸磁鉢	235 37
442	H271	G682[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	11.0	4.6	3.7	1.2	5.2	内外面同軸ナリ, 同軸水切線	2.5X8/200	古瀬戸土器式(輪之形)	235 34	
443	H271	G682[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	—	8.6	—	—	4.5	内外面同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	3X8/100	古瀬戸土器式	235 34	
444	H272	G682[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	33.8	5.2	2.2	3.8	5.8	内面上に 2.5 同軸ナリ, 内面同軸ナリ, 同軸水切線	HV2/100	古瀬戸土器式(胎付高古)	235 34	
445	H272	G682[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	高脚	—	—	—	—	—	内外面同軸ナリ	横線 2.5X3/100	2.5X8/200 大型	235 34	
447	H271	H300[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	14.8	3.9	3.9	3.1	6.1	内外面同軸ナリ, 底面内面磨上同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	5X7/100	古瀬戸土器式(土器)	236 46	
448	H271	H300[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	14.8	4.1	5.2	4.1	12	内外面同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	高古内・磨上(器口小)	2.5X8/200	古瀬戸土器式(横線高古)	236 46
449	H271	H300[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	15.1	5.1	5.6	3.9	8.9	内外面同軸ナリ, 底面内面磨上同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	2.5X8/200	古瀬戸土器式(土器)	236 34	
450	H271	H300[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	14.2	6.8	5.9	3.2	5.5	内外面同軸ナリ, 底面内面磨上同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	高古内・磨上「+」	2.5X8/200	古瀬戸土器式(土器)	236 46
451	H271	H300[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	14.6	5.1	5.1	4	9	内外面同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	2.5X7/200	古瀬戸土器式(横線高古)	236 46	
452	H271	H300[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	14.8	5.8	5.2	1	4	内外面同軸ナリ, 底面内面磨上同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	5X7/100 胎付高古 Y86/40 胎付高古	2.5X8/200	古瀬戸土器式(土器)	236 34
453	H271	H300[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	—	7.7	—	—	1.8	内外面同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	高古内・磨上「+」	HV2/100	古瀬戸土器式	236 37
454	H319	H300[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	—	—	—	—	—	—	内外面同軸ナリ	HV2/200 胎付高古 Y86/40 胎付高古	2.5X8/200	古瀬戸土器式	236 34
455	GL101-GM101	H300[大型土器]	古瀬戸 磁鉢	高脚	—	—	—	—	—	内外面同軸ナリ	横線 2.5X3/100	2.5X8/200	古瀬戸磁鉢型	236 34
456	GE36	F242[土器類の遺物]	土器類(中野)小皿	口ナリ土器類	116.1	3.0	5.8	6.1	6.4	内外面同軸ナリ, 同軸水切線	2.5X7/200 胎付高古	2.5X8/200	236 34	
457	GE36	F242[土器類の遺物]	土器類(中野)小皿	口ナリ土器類	9.7	4.8	2.4	1.7	12	胎付高古(横線)ナリ, 同軸水切線	2.5X8/200	236 46		
458	GE36	F242[土器類の遺物]	土器類(中野)胎付高古(小)	口ナリ土器類	9.4	2.7	5.2	2	13	胎付高古(横線)ナリ, 同軸水切線	5X8/200	236 46		
459	GE36	F242[土器類の遺物]	土器類(中野)胎付高古(小)	口ナリ土器類	10.8	—	—	—	5	内外面同軸ナリ	HV2/100	236 34		
464	GE36	F242[土器類の遺物]	土器類(中野)胎付高古(大)	口ナリ土器類	—	8.9	—	—	7	内外面同軸ナリ	HV2/100	236 46		
465	GE36	F242[土器類の遺物]	土器類(中野)胎付高古(大)	口ナリ土器類	17.6	—	—	—	3.5	内外面同軸ナリ	1.5X7/200	237 46		
466	GE36	F242[土器類の遺物]	土器類(中野)胎付高古(大)	口ナリ土器類	17.7	—	—	—	3.5	内外面同軸ナリ	2.5X6/200 胎付高古	237 46		
467	GE36	F242[土器類の遺物]	土器類(中野)杯	口ナリ土器類	15.2	6.4	4.2	4	12	内外面同軸ナリ, 同軸水切線	2.5X7/200	237 46		
468	GE36	F242[土器類の遺物]	古瀬戸 磁鉢	—	35.8	7.4	5.1	4	12	内外面同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	2.5X7/100	古瀬戸土器式	237 46	
469	GE36	F242[土器類の遺物]	古瀬戸 磁鉢	—	36.8	4.4	4.8	6.1	12	内外面同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	HV2/200 胎付高古	古瀬戸土器式	237 46	
470	GE36	F242[土器類の遺物]	古瀬戸 磁鉢	—	35.8	6.0	4.2	4.3	4	内外面同軸ナリ, 胎付高古(横線)	2.5X7/100	古瀬戸土器式	237 34	
471	GE36	F242[土器類の遺物]	古瀬戸 磁鉢	—	36.2	8.2	4.8	1.4	1.4	内外面同軸ナリ, 同軸水切線	HV2/200 胎付高古	古瀬戸土器式	237 34	
472	GE36	F242[土器類の遺物]	古瀬戸 磁鉢	—	—	7.5	—	—	12	内外面同軸ナリ, 胎付高古, 同軸水切線	HV2/100	古瀬戸土器式	237 34	
473	GE36	F242[土器類の遺物]	古瀬戸 磁鉢	—	37.5	12.6	—	—	4.3	内外面同軸ナリ, 胎付高古(横線), 同軸水切線	2.5X7/100 胎付高古 Y86/40	237 46		
474	GE36	F242[土器類の遺物]	古瀬戸 磁鉢	—	36.4	—	—	—	6	胎付高古(横線)ナリ, 胎付高古(横線), 胎付高古(横線)	2.5X7/200	237 46		
475	AP1-BA1	A100[土器]	大瀬戸 磁鉢	—	32.4	7.0	3.5	4	6	内外面同軸ナリ, 胎付高古(横線), 胎付高古(横線)	横線 5X6/300 胎付高古	5X7/200	大瀬戸小皿	238 32
477	AP1	A100[土器]	大瀬戸 磁鉢	—	38.0	—	—	—	8	内外面同軸ナリ, 胎付高古(横線), 胎付高古(横線)	横線 2.5X6/200 胎付高古	5X7/200	大瀬戸土器	238 34

表87 土器観察表②

遺物番号	アソープ	遺物・部位 (遺物種類)	形 質	形制分類	重量 (g)		体積 (X/Y/Z)		測 量 方 法	尺 規・標 本	胎土・色澤	形式・式名	掲載図版 図版/図号	
					1径	2径	3径	高さ						
478	AP1	A100[SE]	大甕 楕円形小丸型	—	—	8.4	—	12	内外面同軸ナテ, 表面内外面 粗面テ, 胎直白	尺規: 2.5Y2/3P 1000-学黄-5Y2/2R 赤	5YR6/2R黄赤	大甕1-2	230 54	
479	AO1	A100[SE]	底面(陶器) 白丸型	—	—	—	—	—	内外面同軸ナテ	鉄粉テ, 灰白粉: 2.5Y2/2R白	2.5Y2/2R白	底面1-小甕	230 54	
480	CB1- 33	B600②-25[SE]	白瓷片陶器 陶	—	14.0	1.8	5.8	11.7	内外面同軸ナテ, 表面内外面 赤粉ナテ, 胎直白(薄鉄粉), 胎赤赤粉, 胎ナテ	尺規: 2.5Y2/2R 赤	2.5Y2/2R赤	北陸赤粉式 (大甕大)	230 57	
481	CB1- 31	B600[SE]	白瓷片陶器 陶	—	11.0	1.0	2.9	2.1	内外面同軸ナテ, 胎直高白(赤 粉)	10YR7/2L赤 +黄粉	10YR7/2L赤 +黄粉	北 陸 赤 粉 式 (大甕大)	230 54	
482	CB1- CB12	B600[SE]	大甕 打物型	兼勝ナテ	10.1	1.0	2.1	3.1	内外面同軸ナテ, 胎赤赤粉ナテ, 胎赤赤粉ナテ, 胎赤赤粉	—	5Y5/1R	大甕1	230 54	
483	CB1- CB12	B600[SE]	底面(陶器) 赤鉄粉丸型	—	—	—	—	—	内面1.2径, 外面同軸ナテ	鉄粉: 赤粉, 赤粉, 鉄粉・内面・鉄 粉? : 10YR7/2R 赤粉・10YR7/2R 赤粉・10YR7/2R 赤粉・10YR7/2R	10YR7/2R赤 +黄粉	底面1-小甕	230 54	
484	CB1- CB12	B600[SE]	底面 筒	—	—	13.2	—	4	—	—	2.5Y2/1R赤	—	230 54	
485	DB10	B710[SE]	土器器(小甕) 小甕	—	—	—	—	—	内外面同軸, 外面1径調整ナ	10YR7/2R赤 +黄粉	10YR7/2R赤 +黄粉	—	230 54	
486	DB1	B710[SE]	白瓷片陶器 陶	—	—	5.8	—	11	内外面同軸ナテ, 胎直内外面 赤粉ナテ, 胎直赤白(薄鉄粉), 胎赤赤粉, 胎ナテ	—	10YR7/2R白	北陸赤粉式(陶 器)	230 54	
487	DB1	B710[SE]	大甕 磁鉢	6A型	—	—	—	1	内外面同軸ナテ	鉄粉: 5YR3/1R赤粉	10YR6/2R白	大甕1	230 54	
488	DB1	B710[SE]	底面(陶器) 磁鉢	1A型	13.0	—	—	1.2	内外面同軸ナテ	鉄粉: 10R4/1R赤 赤	2.5Y2/5R黄	底面1-小甕	230 54	
489	DB1	B710[SE]	底面(陶器) 大甕	—	13.0	1.0	3.2	2.3	5.8	内外面同軸ナテ, 胎直赤白(赤 粉)赤赤粉陶器, 胎直赤白 赤赤粉陶器, 胎直赤白	鉄粉: 2.5Y7/6R赤	2.5Y2/2R白	底面1-小甕	230 54
490	DB1	B710[SE]	底面(陶器) 大甕	—	12.8	0.3	2.9	7	11	内外面同軸ナテ, 胎直赤白(赤 粉)赤赤粉陶器, 胎直赤白 赤赤粉陶器, 胎直赤白	鉄粉: 2.5Y7/6R赤	2.5Y2/2R白	底面1-小甕	230 57
491	DB1	B710[SE]	底面(陶器) 大甕	—	13.2	1.0	3.7	3.5	2.3	内外面同軸ナテ, 胎直赤白(赤 粉)赤赤粉陶器, 胎直赤白 赤赤粉陶器, 胎直赤白	鉄粉: 10YR7/2L 赤+黄粉	10YR6/2R赤	底面1-小甕	230 54
492	DB1	B710[SE]	底面(陶器) 大甕	—	12.5	0.8	2.8	4.1	11.8	内外面同軸ナテ, 胎直赤白(赤 粉)赤赤粉陶器, 胎直赤白 赤赤粉陶器, 胎直赤白	鉄粉: 2.5Y2/1R 赤+黄粉	2.5Y2/1R赤 +黄粉	底面1-小甕	230 57
493	DB1	B710[SE]	底面(陶器) 赤鉄粉磁鉢	—	11.3	1.2	2.1	3	4.1	内外面同軸ナテ, 胎直赤白(赤 粉)赤赤粉陶器, 胎直赤白 赤赤粉陶器, 胎直赤白	鉄粉 内面・黄粉, 胎直赤白粉: 5Y2 赤赤粉・5Y2/2R 赤赤粉	10YR7/1R白	底面1-小甕	230 54
494	DB1	B710[SE]	底面(陶器) 赤白粉	—	—	12.0	—	—	3.1	内外面同軸ナテ, 胎直赤白(赤 粉)赤赤粉陶器, 胎直赤白 赤赤粉陶器, 胎直赤白	鉄粉: 10YR6/2L 赤+黄粉	10YR7/2R赤 +黄粉	底面1-小甕	230 55
495	DB10	B60[SE]	白瓷片陶器 小甕	—	—	—	—	—	内外面同軸ナテ	—	2.5Y2/1R赤	北陸赤	230 55	
496	DB10	B60[SE]	大甕 灰白磁鉢	—	—	4.0	—	—	11	内外面同軸ナテ, 胎直赤白(赤 粉)赤赤粉陶器, 胎直赤白 赤赤粉陶器, 胎直赤白	鉄粉・磁粉: N1.5/R 赤+5YR3/2R赤粉	5YR6/2R赤 赤+2.5YR6/2R 赤赤粉	大甕1	230 57
497	DB10	B60[SE]	大甕 磁鉢	6A型	—	—	—	0.8	内外面同軸ナテ	鉄粉: 10R4/1R赤 赤	2.5Y2/1R赤	大甕1	230 55	
500	DB20	D400[SE]	白瓷片陶器 陶	—	—	15.0	—	—	3.5	内外面同軸ナテ, 胎直赤白(赤 粉)赤赤粉陶器	胎赤白: 兼勝赤 赤	2.5Y7/1R赤	北陸赤粉式(陶 器)	230 59
501	DB20	D400[SE]	白瓷片陶器 陶	—	132.0	18.0	5.3	1	5.3	内外面同軸ナテ, 胎直赤白(赤 粉)赤赤粉陶器, 胎直赤白 赤赤粉陶器	—	10YR7/1R白	北 陸 赤 粉 式 (大甕大)	230 55
502	DB20	D400②-10[SE]	大甕(打物) 白丸型	—	—	19.0	—	—	2.5	内外面同軸ナテ, 内外面同軸 ナテ, 胎直白	—	2.5Y2/1R赤	底面赤白瓷片陶 器+打物式打 物	230 55
503	CL12	CL12[地下]	白瓷片陶器 陶	—	112.5	14.0	1.0	1	5	内外面同軸ナテ, 胎直高白(赤 粉)赤赤粉陶器	内面: 兼勝赤+ 赤+赤赤粉+赤 赤粉	10YR6/2R白	北陸赤粉式(大 甕大)	230 59
504	CM10- CL12	CL12[地下]	底面(陶器) 底面筒	—	—	—	—	—	12	内外面同軸ナテ, 内外面同軸 ナテ, 胎直白	鉄粉 胎直・胎直, 鉄 粉: 2.5G7/1R白	10YR7/1R白	底面1-小甕	230 55
505	CM10- CL12	CL12[地下]	底面(陶器) 底面筒	—	—	—	—	—	12	内外面同軸ナテ, 内外面同軸 ナテ, 胎直白	鉄粉 胎直・胎直, 鉄 粉: 2.5Y2/1R白	2.5Y2/1R白	底面1-小甕	230 55
507	CL12	CL12[地下]	底面 小甕	—	18.1	0.4	5.5	2.3	5.5	胎直赤白	胎赤 胎直・胎直 赤+赤赤粉	5R6/9R白	打物磁鉢+10 打物磁鉢	230 57
508	CM10- CL12	CL12[地下]	底面(陶器) 底面筒	—	112.0	0.4	3.0	4.5	8	内外面同軸ナテ, 胎直白	内面: 赤赤粉, 胎直: 5YR3/2R赤+赤赤粉	2.5Y2/2R白	底面1-小甕	230 57
509	CL12	CL12[地下]	底面(打物) 底面筒	—	132.0	21.0	5.3	1.3	0.2	内外面同軸ナテ	—	10YR7/2R赤 +黄粉	—	230 55
510	GP94- G494	H330[地下]	土器器(中甕) 中甕	—	—	—	—	—	0.8	内外面同軸ナテ	—	5Y2/赤赤粉+10 YR6/4L赤+ 黄粉	—	230 55
511	GP94	H330[地下]	白瓷片陶器 陶	—	0.4	4.4	2.0	0.3	11	内外面同軸ナテ, 表面内外面 赤粉ナテ, 胎赤赤粉	—	2.5Y2/2R赤	北陸赤粉式(1) 大甕	230 54
512	GP94	H330[地下]	大甕 打物型	兼勝ナテ	110.0	11.0	2.1	2.8	2	内面1.2径+2.5径同軸ナテ, 外 面同軸ナテ, 胎直赤粉	—	N5/9R	大甕1	230 55
513	GP94- G494	H330[地下]	白瓷片陶器 陶	—	110.0	—	—	—	2	内面1.2径+2.5径同軸ナテ, 外 面同軸ナテ	—	2.5YR6/1R赤	北 陸 赤 粉 式 (内面), 胎直 赤	230 55
514	GP94- G494	H330/H360①[地下]	大甕 磁鉢	12A型	—	—	—	—	0.7	内外面同軸ナテ	鉄粉: 10R4/1R赤 赤	2.5Y2/1R赤	大甕赤	230 55

表88 土器觀察表(3)

遺物番号	プレート	遺物・発出 (産地・発出)	種 別	形態分類	口径 (mm)		残高 (mm)		遺 物 等	支 柱 ・ 編 織	底 子 色 澤	形式・様式など	備 考 (図録 頁)		
					口径	底径	口径	底径							
518	GP96-GAR1	H103(11340)土加丁	灰 甕	—	—	221.40	—	—	内面凹輪十字	—	3.5V/200黄	230 55			
519	B06	H104(SD)	土甕? 灰 甕	—	—	—	—	—	内面凹輪十字	縦輪: 5V4(12:1) →黄	2.5V30/200黄	230 51			
519	B05	H105(SD)	白灰土陶器 甕	—	—	18.40	—	6.5	内面凹輪十字, 底面内面輪 十字, 胎付高台(横紋), 凹輪凸凹輪	—	5V7/100白	230 59	底面赤褐色(土加)		
521	B06	H109(SD)	白灰土陶器 甕	—	—	32.00	18.80	2.6	2	1.8	内面上部より6凹輪十字 下出し, 外面凹輪十字, 凹輪 凸凹輪	10V8/60黄 黄	230 59	底面赤褐色(土加)	
522	BQ- B05-T	H109(SD)	通形(陶器) 瓦筒	—	—	31.40	—	—	1	—	瓦筒: 5V7/200白	2.5V7/200黄	230 55	通形小甕	
522	B06	H109(SD)	土甕? 甕	3脚	—	—	—	1.1	—	—	10V7(12:1) →黄	2.5V30/200黄	230 55		
527	B010	H133(SD)	通形(陶器) 瓦筒	—	—	—	—	—	1	—	瓦筒: 5V4(12:1) →黄	2.5V30/100白	230 20	通形小甕	
528	DP10	H201(SD)	土甕器(中形) 内可燗	—	—	221.00	—	—	1, 2	—	10V8/120黄	—	230 55		
529	DP9	H202(SD), H213(SD)	通形(陶器) 瓦筒	—	—	4.2	—	—	12	—	瓦筒(裏面凸輪) ・ 縁輪: 10V12(12:1) 縁-5V4(12:1) →黄	10V12(12:1) →黄	230 55	通形小甕	
530	DP10	H203(SD)	土甕 瓦筒	4A脚	—	—	—	—	1	—	縁輪: 2.5V3(12:1) →黄	2.5V8/200白	230 55	大甕	
531	HDP9- H205- H207	H152(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	19.30	—	—	2	—	2.5V6/100白	2.5V6/100白	240 55	底面赤褐色(土加)	
532	GP96	H130(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	30.11	4.7	1.8	5	7.4	内面凹輪十字, 底面内面輪 十字, 凹輪凸凹輪	2.5V7/100白	240 55	底面赤褐色(土加)	
535	GP96	H102(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	18.30	18.20	1.8	5.5	2.8	内面凹輪十字, 底面内面輪 十字, 凹輪凸凹輪	2.5V6/200黄	240 55	底面赤褐色(土加)	
536	GP96	H102(SD)(特殊土加), H130(SD), H100(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	33.70	19.20	5.5	1.8	1.9	内面凹輪十字, 胎付高台(横 紋)	2.5V8/200白	240 55	底面赤褐色(土加)	
537	GP96	H102(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	33.11	18.90	3.7	4.9	4.5	内面凹輪十字, 胎付高台(横 紋), 凹輪凸凹輪	2.5V7/100白	240 55	底面赤褐色(土加)	
538	GP96	H102(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	32.21	18.20	3.8	2.8	2.8	内面凹輪十字, 底面内面輪 十字, 胎付高台(横紋), 凹輪凸凹輪	10V8/100白	—	240 55	底面赤褐色(土加)
539	GO96	H102(SD)(特殊土加)	土甕? 瓦 筒	—	—	311.40	—	—	3	—	10V7/100白	10V7/100白	240 55	底面赤褐色(土加) 凹輪凸凹輪	
540	GP96	H130(SD)(特殊土加)	中国陶器 赤土甕	土甕(中形)1 脚	—	34.31	—	—	—	—	外周(凸輪)より上 凸輪縁まで, 赤土 5V3(12:1)→黄	2.5V7/100白	240 62		
541	GP96	H100(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	8.1	1.7	1.2	9.5	12	—	2.5V7/200黄	240 51	底面赤褐色(土加)	
542	GP96	H100(SD)-2(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	9.21	4.7	1.4	3.9	7	—	2.5V7/100白	240 55	底面赤褐色(土加)	
543	GP96	H100(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	8.1	4.8	1.5	12	12	—	2.5V7/100白	240 51	底面赤褐色(土加)	
544	GP96	H100(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	5.3	—	—	—	—	2.5V8/200白	240 55	底面赤褐色(土加)		
545	GP96	H100(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	33.21	4.8	5.1	5.4	12	—	5V7/100白	240 51	底面赤褐色(土加)	
546	GP96	H100(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	34.11	5.0	4.5	5.1	8	—	2.5V7/200黄	240 51	底面赤褐色(土加)	
547	GP96	H100(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	11.3	3.9	4.5	7.5	12	—	1.5V7/100白	240 51	底面赤褐色(土加)	
548	GP96	H100(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	32.70	3.3	3.4	1.4	7.5	—	2.5V8/200白	240 55	底面赤褐色(土加)	
549	GP96	H100(SD)(特殊土加)	白灰土陶器 甕	—	—	31.80	12.11	3.8	3.4	6.5	—	1.5V7/100白	240 55	底面赤褐色(土加)	
550	GP96	H100(SD)(特殊土加)	土甕? 日 皿	—	—	—	—	—	6.1	—	10V12(12:1) →黄	10V12(12:1) →黄	240 55	底面赤褐色(土加)	
552	B02	A306(SX)	土甕器(中形) 甕	腰子付	—	153.11	—	—	2	—	10V12(12:1) →黄	—	240 56		
553	B02	A305(SX)	土甕 丸形甕	白灰土陶器 了	—	18.40	14.40	2.4	1.1	3	—	2.5V6/200黄	240 56		
554	B01	A300(SX)	土甕 甕瓦甕	—	—	31.60	—	—	2.2	—	瓦筒: 2.5V6/200 →黄	10V7/100白	240 56		
555	B02	A300(SX)	土甕 丸型小甕瓦甕	—	—	18.40	—	—	4	—	瓦筒: 1脚 瓦 支(4 脚)・2脚 瓦 支(7 脚)→黄	2.5V7/200黄	240 56	大甕1-2	
556	B02	A301(SX)	土甕? 甕 子	—	—	—	—	—	—	—	外周(凸輪)縁まで, 縁輪: 2.5V6/100 →黄	10V12(12:1) →黄	240 56	土甕(中形)1-2	

表90 土器観察表(5)

遺物 番号	フリット	遺物・部位 [土器種類]	種 別	形態分類	径長 (cm)			調査 時期	調査 場所	文 様 ・ 装 飾	用 土 色 調	形式・模式文字	発掘時期
					口径	底径	器高						
604	B05	B114[SK]	流汗(陶器) 大瓶	—	—	—	—	12	内面凹線ナテ, 外面凹線ナテ, 底面凸線	黒釉: 5YR6/2.5 +黄緑	2.5Y7/1白	流汗1-54瓶	243 56
605	B05	B114[SK]	流汗(陶器) 内付	—	—	—	—	—	—	黒釉 見立ナ・底輪 [文字ナ], 長石輪ナ Y2/1白	2.5Y6/2黄	流汗1-24瓶	243 56
606	B04- B06	B114[SK]	大瓶 灰黒釉	—	—	—	—	9	内面凹線ナテ, 凹線凸線	黒釉: 7.5B2/1.6黄 +黄	2.5Y6/0.2白	大瓶1	243 52
607	BNS- BNS	B 114 (D) [SK]・ B114[SK]	流汗 木灰か	—	—	—	—	—	内面凸てりナ	黒釉: 5YR6/3 +黄	10YR2/1.2黄	流汗1-24瓶	243 38
608	B05	B114[SK]	流汗(陶器) 内付	旋削	—	—	—	3.2	内面凹線ナテ, 胴部から底 部外凹線ナテ, 底凸線	黒釉: 10Y7/1.6白	10YR2/2.2 +黄	流汗54瓶	243 38
609	B04	B114[SK]	流汗(陶器) 大瓶か	—	—	—	—	9.4	内面凹線ナテ, 胴部から底 部外凹線ナテ, 底凸線 (3.2cm)	黒釉: 5Y6/3 +黄	10YR2/1.6白	流汗54瓶	243 38
610	B04- B05	B114[SK]	流汗(陶器) 本瓶	—	—	—	—	—	内面凹線ナテ, 外面凹線ナテ	黒釉: 5Y2/2.6白	10YR2/2.2 +黄	流汗54瓶	243 56
611	BNS	B114[SK]	流汗(陶器) 大瓶か	—	—	—	—	1.8	内面凹線ナテ, 胴部から底 部外凹線ナテ, 底凸線	黒釉 内面・見立 [文字輪(黄赤ナ)] 2.5Y2/2.6黄	10YR6/2.6黄	流汗14瓶	243 38
612	BNS4	B114[SK]	大瓶 大瓶	—	—	—	—	9.8	内面凹線ナテ, 胴部から底 部外凹線ナテ	黒釉+緑釉 7.5 Y8/0.2 凸 +黄 Y6/2.2.6.6黄	7.5Y8/0.2 +黄	大瓶1	243 56
613	B06	B114[SK]	古瀬戸 磁鉢	5脚	—	—	—	1.3	内面凹線ナテ	黒釉: 10YR2/1.6 +黄	10YR2/2.2 +黄	古瀬戸磁鉢	243 56
614	B05	B114[SK]	古瀬戸 磁鉢	5脚	29.3	—	—	1.8	内面凹線ナテ	黒釉: 10R2/2.6 +黄	10YR2/2.2 +黄	古瀬戸磁鉢	243 56
615	B05- BPS	B114[SK], 古瀬戸 目	大瓶 磁鉢	—	—	—	—	1.5	内面凹線ナテ, 凹線凸線	黒釉: 5YR2/1.6 黄	10YR2/2.6白	大瓶1	243 56
616	B04	B114[SK]	大瓶 磁鉢	5A型	29.5	—	—	0.7	内面凹線ナテ	黒釉: 7.5YR2/2.6 +黄	10YR2/2.2 +黄	大瓶磁鉢	243 56
617	B04	B114[SK]	大瓶 磁鉢	5A型	31.4	—	—	1.2	内面凹線ナテ	黒釉: 5YR2/2.6 +黄	2.5Y6/2黄	大瓶磁鉢	243 56
618	BNS- BNS+6	B114[SK]	大瓶 磁鉢	5A型	34.4	—	—	0.5	内面凹線ナテ	黒釉: 5YR2/2.6 +黄	7.5Y8/0.2 +黄	大瓶磁鉢	243 56
619	BNS	B114[SK]	大瓶 磁鉢	145型	32.4	—	—	1.3	内面凹線ナテ	黒釉: 5YR2/2.6 +黄	7.5Y8/0.2 +黄	大瓶磁鉢	244 56
620	B06	B114[SK]	大瓶 磁鉢	145型	—	—	—	1	内面凹線ナテ	黒釉: 10R4/2.6 +黄	10YR2/2.6 +黄	大瓶磁鉢	244 56
621	B06	B114[SK]	大瓶 磁鉢	145型	—	—	—	1	内面凹線ナテ	黒釉: 2.5YR2/1.6 +黄	10YR1/2.2 +黄	大瓶磁鉢	244 56
622	BNS	B114[SK]	大瓶 磁鉢	145型	—	—	—	0.9	内面凹線ナテ	黒釉: 2.5YR2/1.6 +黄	10YR2/2.2 +黄	大瓶磁鉢	244 38
623	BNS	B114[SK]	流汗(陶器) 流汗瓶	—	—	—	—	4.2	内面凹線ナテ, 外面凹線ナテ, 底面凸線	黒釉 見立 [黄], 帯 輪 長石輪 [2.5Y2/2.6 黄]	5YR2/1.6黄	流汗14瓶	244 56
624	B05- BPS	B114[SK]	中級陶磁器 白磁器	高脚分瓶(脚)	38.9	4.1	2.30	12	腹面高凸(器口入りあり)	白釉: 5Y7/1.6白	10YR7/2.2 +黄	—	244 41
625	B06	B114[SK]	中級陶磁器 白磁器	高脚分瓶(脚)	—	—	—	3	腹面高凸(器口入りあり)	白釉: 2.5Y6/1.6白	10YR6/1.6白	—	244 41
626	BPS	B114[SK]	中級陶磁器 白磁器	—	—	—	—	—	—	白釉 内面・見立ナ・ 底面凸線ナテ	2.5Y7/1.6白	—	244 43
627	BPS	B114[SK]	肥田 塗付磁	—	—	—	—	—	外面凹線ナテ	白 見立ナ・胴部ナ +底面凸線ナテ	NS/0.6白	—	244 56
628	B04- B05- BPS	B114[SK], 古瀬戸 目	大瓶 土器 大瓶	—	—	—	—	3.5	凹線凸線内面凹線ナテ	—	7.5Y8/0.2 +黄	—	244 52
629	BNS13	D110[SK]	流汗(陶器) 足瓶	—	—	—	—	2	内面凹線ナテ, 胴部から底 部外凸てり(凹線ナテ)	黒釉: 2.5Y2/2.6 +黄	2.5Y6/2.6白	流汗54瓶	244 56
641	B045	D113[SK]	流汗(陶器) 大瓶か	—	—	—	—	5.4	内面凹線ナテ, 外面凹線ナテ, 底面凸線	黒釉: 2.5Y4/2.6 +黄	2.5Y6/2.6白	流汗14瓶	244 56
646	B42	A1[S0]	土器器(中級) 白磁器	—	—	—	—	25.25	内面凸ナテ, 外面凹線器部 のみ磁器ナテ	—	2.5Y6/4.2 +黄	—	244 56
648	B42	A1[S0]	土器器(中級) 白磁器	—	—	—	—	22.65	内面凸ナテ(凹線ナテ?)	—	10YR2/2.2 +黄	—	244 56
647	B41-5	A1[S0]	白磁器陶磁 瓶	—	—	—	—	1.8	内面凹線ナテ, 外面高凸(器 部), 凹線凸線	—	10YR2/1.6白	北原白磁式(1 脚)	244 56
648	B42	A1[S0]	白磁器陶磁 瓶	—	—	—	—	3	内面凹線ナテ, 外面高凸(器 部), 凹線凸線	—	2.5Y2/2.6黄	北原白磁式(1 土器)	244 38
649	B43	A1[S0]	白磁器陶磁 瓶	—	—	—	—	5.9	内面凹線ナテ, 凹線凸線	—	2.5Y2/1.6白	北原白磁式 (脚)	244 38
650	B44	A1[S0]	白磁器陶磁 瓶	—	—	—	—	2.3	内面凹線ナテ, 凹線凸線	—	10YR4/2.6黄	北原白磁式 (脚)	244 38
651	B41-5	A1[S0]	白磁器陶磁 瓶	—	—	—	—	6.5	内面工用?なる凹線ナテ, 凹 線凸線	—	10YR4/2.6黄	北 原 白 磁 式 (5脚)	244 38
652	B42	A1[S0]	白磁器陶磁 瓶	—	—	—	—	2.5	内面工用?なる凹線ナテ, 凹 線凸線	—	10YR2/2.2 +黄	北 原 白 磁 式 (脚)	244 38

表91 土器観察表(6)

器名	タイプ	遺跡・発掘 (調査年度)	種 別	形制分類	口径 (mm)		高さ (cm)		調 整 等	文 様・刺 意	胎 土 色 澤	形式・款式上 の区別	陶器出所 の国		
					口径	底径	口縁	底縁							
603	BA3	A1(SD)	白土系陶器	人子	—	11.40	13.00	1.4	0.5	2.5	内外面同色ナリ、底縁外周に 刺意ナリ	BYRZ/DBK	北陸藩	244 38	
604	BA2	A1(SD)	古瀬戸 磁器小皿	—	39.5	4.2	2.2	2	8	内外面同色ナリ、底縁外周に 刺意ナリ	BYRZ/DBK	古瀬戸御用占	244 38		
605	AT2- BA1	A1Z(SD)	古瀬戸 磁器小皿	—	39.25	4.3	2.3	5	12	内外面同色ナリ、底縁外周に 刺意ナリ	BYRZ/DBK	古瀬戸御用占	244 38		
606	BA3	A1Z-②(SD)	白土系陶器	陶	—	32.80	—	—	1	内外面同色ナリ、底縁外周に 刺意ナリ	BYRZ/DBK	志摩半田式 (半田、飯土類)	244 38		
607	BA3- BA4	A1(SD)	瀬戸(陶器)	煎鉢	—	33.30	0.40	2.80	1.8	3	内外面同色ナリ、腹部中央に 底縁外周に刺意ナリ、底出高台	BYRZ/DBK	瀬戸-小皿	244 38	
608	BA1- BA2- BA3	A1Z(SD)	大濠 天目茶碗	—	31.4	—	—	—	1	内外面同色ナリ、腹部外周に 刺意ナリ	BYRZ/DBK	大濠藩	245 38		
609	BA1- BA2	A1Z(SD)	大濠 天目茶碗	—	32.23	—	—	—	6	内外面同色ナリ、腹部外周に 刺意ナリ	BYRZ/DBK	大濠藩	245 38		
610	BA2	A1(SD)	大濠 天目茶碗	—	31.40	—	—	—	1	内外面同色ナリ、腹部外周に 刺意ナリ	BYRZ/DBK	大濠藩	245 38		
611	AT2- BA2- BA4	A1(SD), A1Z(SD)	瀬戸(陶器)	火筒	—	34.25	—	—	0.5	内外面同色ナリ、腹部外周に 刺意ナリ	BYRZ/DBK	—	245 38		
612	BA3	A1Z(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	—	—	—	—	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	古瀬戸御用-青	245 38		
613	BA3	A1(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	—	—	—	—	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	古瀬戸御用-青	245 38		
614	BA2	AKZ(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	—	—	—	—	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	古瀬戸御用占	245 38		
615	BA1	AKZ(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	—	—	—	—	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	古瀬戸御用占	245 38		
616	BA2	AKZ(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	—	—	—	—	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	古瀬戸御用占	245 38		
617	BA2	AKZ(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	—	—	—	—	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	古瀬戸御用占	245 38		
618	BA1	AKZ(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	—	—	—	—	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	古瀬戸御用占	245 38		
619	AT2- BA2	A1Z(SD)	大濠 磁器	70皿	—	32.4	0.40	11.4	5.5	3.3	内外面同色ナリ、底縁外周に 刺意ナリ	BYRZ/DBK	大濠	245 38	
620	BA2	A1Z(SD)	大濠 磁器	90皿	—	—	—	—	—	—	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	大濠藩	245 38	
621	BA2	AKZ(SD)	大濠 磁器	2皿	—	—	—	—	—	—	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	古瀬戸御用占	245 38	
622	BA2	A1(SD)	瀬戸(陶器)	煎鉢	—	—	—	—	—	—	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	瀬戸-小皿	245 38	
623	BA1	A1Z(SD)	大濠 磁器	—	—	31.2	—	—	—	3.4	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	大濠-3	245 38	
624	BA2	AKZ(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	34.4	—	—	—	2	—	2.5YR/DBK	245 38		
625	BA2	AKZ(SD)	中国陶磁器 (白磁)	森村分懸器 器?	—	—	—	—	—	1	底出高台	BYRZ/DBK	2.5YR/DBK	245 41	
626	BA2	A1(SD)	中国陶磁器 白磁	上野分懸器 I or II 器	31.60	—	—	—	—	1.1	—	—	外面：片切焼ナリ 中央部：青磁 10YR6/2ナリ 7YR6/2ナリ	BYRZ/DBK	246 42
627	BA1	A1Z(SD)	中国陶磁器 白磁	—	—	—	—	—	—	2	底出高台	—	外面：片切焼 ナリ 中央部：青磁、高 台内：片切焼-大明赤 土、高台焼	BYRZ/DBK	246 43
628	AT5	A2(SD)	土器(中世)	黒 OPナリ土器	—	—	—	—	—	2.2	同色ナリ、底縁外周に 刺意ナリ	BYRZ/DBK	—	246 38	
629	AT1- AT3	A2X-②(SD)	土器(中世)	内耳瓶	—	23.8	—	—	—	0.5	内外面同色ナリ	BYRZ/DBK	—	246 38	
630	AT1	A2X(SD)	土器(中世)	内耳瓶	—	—	—	—	—	—	同色ナリ	BYRZ/DBK	—	246 38	
631	AT3	A2Z(SD)	土器(中世)	茶釜	磁付	32.4	—	—	—	3.4	口縁部内外面同色ナリ、一部刺 意ナリ、腹部外周に刺意ナリ	BYRZ/DBK	—	247 38	
632	AT3	A2Z(SD)	土器(中世)	茶釜	磁付	—	—	—	—	—	同色ナリ	BYRZ/DBK	—	247 38	
633	AT2	A2Z(SD)	白土系陶器	甕	—	38.00	14.25	1.9	1.8	4	内外面同色ナリ、同色刺意	BYRZ/DBK	志摩半田式(白 土器)	247 38	
634	AT2	A2Z(SD)	白土系陶器	甕	—	—	—	—	—	2.6	内外面同色ナリ、胎付高台(横 置型)、刺意刺意	BYRZ/DBK	志摩半田式	247 38	
635	AT3	A2Z(SD)	白土系陶器	甕	—	—	—	—	—	4	内外面同色ナリ、胎付高台(横 置型)、刺意刺意、刺意ナリ	BYRZ/DBK	志摩半田式(横 置)	247 38	
636	AT3	A2Z(SD)	白土系陶器	甕	—	—	—	—	—	10	内外面同色ナリ、胎付高台(横 置型)、刺意刺意	BYRZ/DBK	志摩半田式(横 置)	247 38	
637	AT2	A2Z(SD)	白土系陶器	甕	—	—	—	—	—	3.5	内外面同色ナリ、胎付高台(横 置型)、同色刺意	BYRZ/DBK	志摩半田式(白 土器)	247 38	
638	AT2	A2Z(SD)	白土系陶器	甕	—	—	—	—	—	4.9	内外面同色ナリ、内外面同色 刺意ナリ、胎付高台(横置型)、刺 意刺意、刺意ナリ	BYRZ/DBK	志摩半田式(白 土器)	247 38	

表92 土器観察表(1)

番号	グロット	遺物・部位 (発掘場所)	種 質	形数分類	重量 (g)			高さ (X/Y/Z)	備 考 等	文 様 ・ 施 装	胎土色調	形式・式名C/C	横断面積 (cm ²)	
					合計	底径	蓋径							
111	AT2	A22(SD)	白土系陶器 焼	—	—	8.0	—	—	3	内外面同軸十字, 胎底白(焼 痕), 胎底赤褐色	10YR2/16C	土器(高脚式(1号))	247 50	
112		A2(SD)	白土系陶器 焼	—	33.6	9.2	3.2	2.3	0.5	内外面同軸十字, 胎底白(焼 痕), 胎底赤褐色	10YR8/16C	土器(高脚式(1号))	247 30	
113	AT1	A22(SD)	白土系陶器 焼	—	—	2.6	—	—	6	内外面同軸十字, 胎底白(焼 痕), 胎底赤褐色	10YR8/16C	土器(高脚式(1号))	247 30	
114	AT5	A22(SD)	古瀬戸 磁器小片	—	18.8	—	—	2.3	—	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字	5YR3/16C	2.5YR/26C	古瀬戸磁器	247 50
115	AT3	A22(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	—	—	0.6	—	内外面同軸十字	新 緑 : 2.5Y6/7 サーフ 赤 焼 : 2.5YR/26C	10YR2/26C	古瀬戸磁器	247 30
116	AT3- AT5	A22(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	6.0	—	—	2	内外面同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 2.5Y6/7 サーフ 赤 焼 : 2.5YR/26C	10YR2/26C +赤焼	古瀬戸磁器	247 30
117	AT2	A2(SD)	大塚 瓦器	—	19.2	3.8	2.5	8	8	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字	新 緑 : 5Y7/26C	2.5Y7/16C	大塚	247 30
118	AT2	A2(SD)	大塚 瓦器	焼痕タイプ	18.4	5.4	2.2	2.6	3.4	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 5Y7/26C	2.5Y7/16C	大塚	247 30
119	AT3	A22(SD)	大塚 磁器	—	9.1	4.0	2.0	5	5	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 5YR3/26C サーフ 赤 焼 : 2.5Y7/26C	5Y7/26C	大塚	247 30
120	AT2	A22(SD)	大塚 磁器	—	11.6	4.6	2.3	12	12	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 5YR3/26C サーフ 赤 焼 : 2.5Y7/26C	5Y7/26C	大塚	247 30
121	AT5	A22(SD)	大塚 磁器	—	10.8	5.6	2.4	3	10.8	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 5YR3/26C サーフ 赤 焼 : 2.5Y7/26C	10YR8/16C	大塚	247 30
122	AT6	A22(SD)	大塚 磁器(瓦器)小片	—	—	6.8	—	—	12	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 5Y7/26C 赤 焼 : 2.5Y7/26C	2.5Y7/16C	大塚-2	247 30
123	AT3	A2(SD)	遠河(陶器) 瓦器	—	33.2	7.0	2.0	5.5	5.5	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 5YR3/26C 赤 焼 : 2.5Y7/26C	5YR3/26C +サーフ	遠河小塚	247 50
124	AT1- AT3	A22(SD)	大塚 磁器	—	31.4	6.8	2.2	1	2	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 10YR2/26C 赤 焼 : 2.5Y7/26C	10YR2/26C +赤焼	大塚	247 50
125	AT1	A22(SD)	遠河(陶器) 磁器	—	35.9	7.2	2.1	1	1.2	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 5Y7/26C 赤 焼 : 2.5Y7/26C	2.5YR/26C	遠河小塚	247 50
126	AT1	A22(SD)	遠河(陶器) 磁器	—	32.0	—	—	1.5	—	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 2.5Y7/26C	2.5YR/16C	遠河-34小塚	247 50
127	AT2	A22-B(SD)	大塚 瓦器	—	11.0	—	—	—	2	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 新 緑 : 1.0 YR1/26C 赤 焼 : 2.5Y7/26C	10YR8/26C	大塚	247 50
128	AT1	A22(SD)	大塚 瓦器	—	11.3	4.3	0.7	4	12	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 新 緑 : 1.0 YR1/26C 赤 焼 : 2.5Y7/26C	10YR2/26C +赤焼	大塚	247 30
129	AT3	A22(SD)	大塚 瓦器	—	11.3	4.3	0.7	4	12	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 新 緑 : 1.0 YR1/26C 赤 焼 : 2.5Y7/26C	10YR2/26C +赤焼	大塚	247 30
130	AT3- AT5	A22-B(SD)	古瀬戸 瓦器	—	—	3.7	—	—	12	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 新 緑 : 1.0 YR1/26C 赤 焼 : 2.5Y7/26C	5YR3/26C	古瀬戸磁器	247 30
131	AT1	A22(SD)	遠河(陶器) 瓦器	—	30.8	—	—	4.5	—	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 5YR3/26C サーフ	2.5YR/26C	遠河-35小塚	247 50
132	AT3	A22-B(SD)	大塚 瓦器	—	32.0	5.0	0.3	1.5	11	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 10Y3/26C サーフ	2.5YR/26C	大塚	247 30
133	AT3	A22(SD)	古瀬戸 磁器	磁器	—	—	—	0.3	—	内外面同軸十字	新 緑 : 5Y7/26C	2.5YR/26C	古瀬戸-1小塚	247 30
134	AT2	A22(SD)	古瀬戸 磁器	—	—	0.6	—	—	1.2	内外面同軸十字, 胎底赤褐色 同軸十字, 胎底赤褐色	新 緑 : 5Y7/26C	2.5Y7/16C	古瀬戸中-1小塚	247 30
135	AT- BA1-2	A2(SD)	古瀬戸 磁器	4割	29.4	—	—	1	—	内外面同軸十字	新 緑 : 5YR3/26C 赤 焼 : 2.5Y7/26C	10YR2/26C +赤焼	古瀬戸磁器	247 50
136	AT- BA1-3	A2(SD)	古瀬戸 磁器	3割	30.8	—	—	1.5	—	内外面同軸十字	新 緑 : 2.5YR4/26C	2.5YR3/26C	古瀬戸磁器	247 50
137	AT3	A22(SD)	古瀬戸 磁器	5割	35.0	—	—	0.8	—	内外面同軸十字	新 緑 : 2.5R4/26C	10YR8/16C	古瀬戸磁器	247 50
138	AT5	A22(SD)	古瀬戸 磁器	3割	—	—	—	0.5	—	内外面同軸十字	新 緑 : 7.5R3/26C	10YR8/26C	古瀬戸磁器	247 50
139	AT3	A2(SD)	大塚 磁器	6A割	28.0	—	—	0.6	—	内外面同軸十字	新 緑 : N30R6	2.5Y7/16C	大塚	247 30
140	AT5	A22(SD)	大塚 磁器	6A割	—	—	—	1	—	内外面同軸十字	新 緑 : 7.5R3/26C	2.5YR2/16C +赤	大塚	247 30
141	AT3	A22(SD)	古瀬戸 磁器	3A割	—	—	—	1	—	内外面同軸十字	新 緑 : 5YR3/26C	2.5YR/26C	大塚	247 30
142	AT3	A22(SD)	古瀬戸 磁器	3A割	—	—	—	0.4	—	内外面同軸十字	新 緑 : 2.5YR5/26C	10YR8/16C	古瀬戸磁器	247 30
143	AT1- AT2	A1(SD)	遠河(陶器) 磁器	10割	—	—	—	0.7	—	内外面同軸十字	新 緑 : 2.5YR3/26C	10YR8/26C	遠河小塚	247 50
144	AT1	A2(SD)	大塚 磁器	—	—	10.5	—	—	4	内外面同軸十字	新 緑 : 5YR3/26C	10YR8/26C	大塚-4	247 60
145	AT1	A22(SD)	大塚 磁器	—	—	12.6	—	—	3.0	内外面同軸十字	新 緑 : 2.5YR3/26C	10YR8/16C	大塚-4	247 60
146	AT1	A12(SD)	古瀬戸-19号 磁器	—	—	10.2	—	—	6	内外面同軸十字	新 緑 : 2.5R2/26C 赤 焼 : 2.5YR/26C	2.5YR/26C	古瀬戸磁器 (大塚)	247 60
148	AT3	A22(SD)	磁器	—	—	18.4	—	—	2	内外面同軸十字	新 緑 : 2.5YR/26C	2.5YR/26C	247 60	

表93 土器観察表(8)

遺物番号	アワード	遺種・器名 (土器時代)	種 別	形制分類	法量 (cm)			出土(3/12)	出 土 地 帯	文 様 ・ 装 飾	彩 土 色 澤	形式・様式など	埋蔵施設 層位		
					口径	口径	器高								
147	AT5	A21[SD]	中国陶器部 白磁器	高脚分脚杯 器?	—	5.2	—	6.5	観出高台	白磁・2.5YR/1R白	2.5YR/1R白	北部白磁式片 脚	245		
148	AT1	A22[SD]	中国陶器部 青磁青灰器	—	13.4	—	—	1.9	—	青磁・5G6/1R黄	N1/R黄白	—	245		
149	AT1	A23[SD]	中国陶器部 灰白磁	小形分脚杯 器	—	14.0	—	—	観出高台	—	青磁・内面赤点・縁 に灰土・厚縁・高 台内・底溝?、或 者無し	—	245		
151	AP9	A21[SD]	白磁系陶器 皿	—	18.2	5.2	6.8	5	内外面同軸十字、同軸赤点線	—	2.5Y2/1R白	北部白磁式片 脚	249		
152	AP9	A21[SD]	白磁系陶器 碗	—	12.0	0.11	2.2	5.3	4.8	内外面同軸十字、斜行高台内 縁線?、同軸赤点線	—	2.5YR/2R黄	北部白磁式 (大塚系)	249	
153	AP9	A21[SD]	白磁系陶器 碗	—	12.2	0.20	3.2	4.5	4	内外面同軸十字、斜行高台内 縁線?、同軸赤点線	—	10YR2/1R白	北部白磁式 (大塚系)	249	
154	AP9	A21[SD]	白磁系陶器 碗	—	12.4	4.7	3.1	10	12	内面工具による同軸十字、外 面同軸十字、同軸赤点線、斜行 高台	—	2.5YR/2R白	北部白磁式 (大塚系)	249	
155	AP9	A21[SD]	白磁系陶器 碗	—	14.3	—	—	—	6	内外面同軸十字、同軸赤点線	—	2.5YR/2R黄	北部白磁式 (大塚系)	249	
156	AP9	A21[SD]	白磁系陶器 碗	—	—	—	—	—	9	内外面同軸十字、同軸赤点線	—	2.5Y2/1R白	北部白磁式 (大塚系)	249	
157	AP9	A21[SD]	古瀬戸 煎鉢大皿	—	31.4	—	—	—	1	内面同軸十字、外面斜線十字 工具による同軸十字、外面 同軸十字、同軸赤点線	灰磁・5Y6/2Rオ ー ン 黄	10Y2/1R白	古瀬戸煎鉢	249	
158	AP9	A21[SD]	古瀬戸 煎鉢小大皿	—	—	—	—	—	—	内外面同軸十字、斜行外縁赤 点線	灰磁・5Y6/2Rオ ー ン 黄	10YR2/1R白	古瀬戸煎鉢 小	249	
159	AQ4	A27[SD]	白磁系陶器 碗	—	12.6	1.6	3.4	2	2	内外面同軸十字、同軸赤点線	—	10YR2/1R白	北部白磁式 (大塚系)	249	
162	AR1	A30E[SD]	大塚 煎鉢	—	—	—	—	—	6.3	内外面同軸十字	灰磁・10R2/1R赤 黄	10YR2/1R白	大塚	249	
163	AR2	A30E[SD]	大塚 大付茶碗	—	31.8	—	—	—	1.8	内外面同軸十字、斜線から 成る外縁赤点線	—	2.5YR/2R黄	大塚	249	
164	AR2	A30E[SD]	大塚 大付茶碗	横線タイプ	18.2	0.8	2.4	1.4	3	内面工具による同軸十字、外 面同軸十字、同軸赤点線	—	10YR2/1R白	大塚	249	
165	AR1	A30E[SD]	大塚 大付茶碗	横線タイプ	19.3	0.8	2.4	2	3	内面工具による同軸十字、外 面同軸十字、同軸赤点線	灰磁・5YR2/2R オ ー ン 黄	2.5Y2/2R黄	大塚	249	
166	AQ1- AR2	A30E[SD]	大塚 大付茶碗	横線タイプ	16.2	5.4	2.8	5	12	内面工具による同軸十字、外 面同軸十字、同軸赤点線	—	10YR2/1R白	大塚	249	
171	AQ1- AR1	A40E[SD]	土器部(中野) 中野	—	—	—	—	—	—	内外面同軸十字	—	10YR2/1R黄	—	249	
173	AQ1	A40E[SD]	白磁系陶器 鉢	—	18.2	0.20	1.1	3.2	3.3	内外面同軸十字、斜行内面 赤点線?、同軸赤点線	—	2.5Y2/1R白	北部白磁式片 脚	249	
174	AQ1	A40E[SD]	白磁系陶器 碗	—	11.4	0.2	3.3	3.8	5.4	内外面同軸十字、同軸赤点線	—	10YR2/1R白	北部白磁式 (大塚系)	249	
175	AS1	A40E[SD]	白磁系陶器 碗	—	13.2	0.5	3.6	5	5	内外面同軸十字、同軸赤点線	—	2.5Y2/1R白	北部白磁式 (大塚系)	249	
176	AR1	A40E[SD]	白磁系陶器 碗	—	12.6	0.2	3.4	2.5	3.5	内外面同軸十字、同軸赤点線	—	2.5YR/2R白	北部白磁式 (大塚系)	249	
177	AR1	A40E[SD]	白磁系陶器 碗	—	14.8	1.6	3.5	5.5	9	内面工具による同軸十字 赤点線?、外面同軸十字、同軸 赤点線	—	2.5YR/2R白	北部白磁式 (大塚系)	249	
178	AR1	A40E[SD]	白磁系陶器 碗	—	12.6	4.6	3.5	3	6	内外面同軸十字、同軸赤点線	—	2.5YR/2R白	北部白磁式 (大塚系)	249	
179	AR1	A40E[SD]	白磁系陶器 碗	—	—	—	—	—	—	6.5	内外面同軸十字、同軸赤点線	—	5Y6/1R白	北部白磁式 (大塚系)	249
180	AQ1- AR1	A40E[SD]	大塚 大付茶碗	横線タイプ	11.4	0.5	0.8	2.8	2.6	内面工具による同軸十字、同 軸赤点線	—	10YR2/1R白	大塚	250	
181	AR1	A40E[SD]	大塚 大付茶碗	—	31.4	—	—	—	3.4	内外面同軸十字、斜線から 成る外縁赤点線	—	10YR2/2Rオ ー ン 黄	大塚	250	
182	AR1	A40E[SD]	古瀬戸 灰白小皿	—	—	—	—	—	—	内面工具による同軸十字、外 面同軸十字、同軸赤点線	灰磁・5Y6/2Rオ ー ン 黄	10YR2/1R白	古瀬戸煎鉢	250	
183	AR1	A40E[SD]	古瀬戸 煎鉢小皿	—	—	—	—	—	—	内外面同軸十字、同軸赤点線	—	10YR2/1R白	古瀬戸煎鉢 小	250	
184	AQ1- AR1	A40E[SD]	大塚 煎鉢	8A型	—	—	—	—	—	1	内外面同軸十字	灰磁・2.5YR2/2R オ ー ン 黄	大塚煎鉢	250	
185	AP1	A40E[SD]	流石(陶器) 煎鉢	18C型	15.2	—	—	—	—	0.9	内外面同軸十字	灰磁・1YR2/2R オ ー ン 黄	10YR2/2Rオ ー ン 黄	流石小皿	250
186	AP1	A40E[SD]	流石(大塚 煎鉢)	—	—	—	—	—	—	3.2	内外面同軸十字、斜行外縁 赤点線?、同軸赤点線	灰磁・10YR2/2R オ ー ン 黄	10YR2/2Rオ ー ン 黄	古瀬戸IV-大塚 煎鉢	250
187	BR4	B2[SD]	白磁系陶器 碗	—	—	—	—	—	—	5.5	内外面同軸十字、内面内面 赤点線?、斜行高台(同軸赤 点線?、同軸赤点線)	—	7.5Y2/1R白	北部白磁式(大 塚系)	250
188	BR4	B2[SD]	大塚 煎鉢	ソウキ	10.2	6.2	2.5	0.1	2.8	内外面同軸十字、斜線から 成る外縁赤点線、斜行高台	灰磁・10R2/1R 赤 黄 磁 土 ・同 心 内 縁 赤 点 線 ・灰 磁 土 ・7.5Y2/2R白	10YR2/1R白	大塚煎鉢	250	

表94 土器観察表(19)

遺物番号	グロット	遺物・部位 (産出層位)	種別	形態分類	直径 (mm)			高さ (mm)			調査等	文様・舞臺	粘土色調	焼成方式	焼成温度 (°C)
					口徑	口径	器高	口徑	口径	器高					
799	B14	B2E(SD)	古瀬戸 段部+大皿	—	—	96.0	—	—	3.5	内外面回転ナデ, 外面回転用ナ, 内面回転ナデ(上, 足口直上)	2.5YR2/8灰白	古瀬戸 段部ナ 大皿	250	60	
799	B14	B2E(SD)	古瀬戸 段部	5型	—	—	—	—	1	内外面回転ナデ	2.5YR2/8灰白 赤灰	古瀬戸 段部	250	60	
799	B13	B2E(SD)	古瀬戸(高部) 段部	—	28.0	—	—	—	1.1	内外面回転ナデ, 胴部外側面 回転ナデ	2.5YR2/8灰白 2.5YR2/8灰赤	段部(高部)	250	60	
796	BG4	B12W(SD)	古瀬戸 片口鉢	—	—	5.4	—	—	12	内外面回転ナデ, 回転ホウ 輪	2.5YR2/8灰白 10YR2/2.5赤	古瀬戸 段部	250	60	
797	BG4	B12W(SD)	古瀬戸 段部	5型	—	—	—	—	0.8	内外面回転ナデ	2.5YR2/8灰白 10YR2/2.5赤	古瀬戸 段部	250	60	
799	BG4	B12W(SD)	大塚 段部	10型	—	—	—	—	1	内外面回転ナデ	2.5YR2/8灰赤	大塚 段部	250	60	
799	B15	B12W(SD)	白土系陶器 碗	—	—	5.0	—	—	2.8	内外面回転ナデ, 胴部高台(胴 部直), 回転ホウ輪	2.5YR2/8灰赤	北部赤土式 (大塚系)	250	60	
800	B15	B12W(SD)	大塚 段部	—	—	5.5	—	—	2.7	内外面回転ナデ, 外面回転用ナ 胴部高台	2.5YR2/8灰赤 10YR2/2.5赤	大塚	250	60	
801	B15	B12W(SD)	古瀬戸 片口鉢	—	28.4	—	—	—	1.2	内外面回転ナデ	10YR2/1灰白	南部赤白土系陶 器式流行	250	60	
802	B13	B13W(SD)	白土系陶器 碗	—	—	16.1	—	—	2.5	内外面回転ナデ, 胴部内面勢 止器ナデ, 胴部高台(胴部直), 回転ホウ輪	7.5Y/1灰白	北部赤土式(白 土系)	250	60	
803	B13	B13W(SD)	大塚 大目系碗	—	11.0	—	—	—	3	内外面回転ナデ, 胴部から具 部外側面回転ナデ	2.5YR2/8灰赤 10YR2/2.5赤	大塚 段部	250	60	
804	B14	B13W(SD)	大塚 段部	10A型	28.0	—	—	—	1.3	内外面回転ナデ	2.5YR2/8灰赤 10YR2/2.5赤	大塚 段部	250	60	
805	B13- B14	B13W(SD)	古瀬戸 水注	—	—	5.3	—	—	12	内外面回転ナデ, 回転ホウ 輪	2.5YR2/8灰赤 10YR2/2.5赤	古瀬戸 段部	250	60	
819	B15	B13W(SD)	土器器(中)内 内面	—	22.1	—	—	—	3	内外面回転ナデ	7.5YR2/4.5赤 10YR2/2.5赤	250	60		
820	B15	B13W(SD)	土器器(中)内 外面	—	21.4	—	—	—	1.6	口縁部内外面回転ナデ, 胴部 内面勢ナデ	2.5Y/2灰赤	250	60		
821	B15	B13W(SD)	土器器(中)内 外面	器手付	—	—	—	—	—	内外面回転ナデ	10YR2/2.5赤 10YR2/2.5赤	250	60		
822	B17	B13W(SD)	白土系陶器 碗	—	—	5.9	—	—	8.2	内外面回転ナデ, 回転ホウ 輪, 胴部	2.5Y/2灰赤	北部赤土式(赤 土系)	250	60	
823	B17	B13W(SD)	白土系陶器 碗	—	—	5.9	—	—	5	内外面回転ナデ, 胴部高台(胴 部直), 回転ホウ輪	2.5Y/1灰赤	北部赤土式(白 土系)	250	60	
834	B17	B13W(SD)	白土系陶器 碗	—	—	8.2	—	—	4	内外面回転ナデ, 胴部内面勢 止器ナデ, 胴部高台(胴部直), 回転ホウ輪	2.5Y/1灰赤	北部赤土式(白 土系)	250	60	
835	B17	B13W(SD)	白土系陶器 碗	—	—	5.8	—	—	9.5	内外面回転ナデ, 胴部高台(胴 部直), 回転ホウ輪, 器ナデ	2.5Y/1灰赤	北部赤土式(赤 土系)	250	60	
836	B15	B13W(SD)	大塚 段部	地輪タイプ	10.0	4.4	2.4	9	12	内面工目止器回転ナデ, 外 面回転ナデ, 回転ホウ輪	2.5Y/2灰赤	大塚	250	60	
827	B15	B13W(SD)	大塚 段部	地輪タイプ	10.2	4.8	2.7	8.6	12	内面工目止器回転ナデ, 外 面回転ナデ, 回転ホウ輪	10YR2/2.5赤 10YR2/2.5赤	大塚	250	60	
828	B14	B13W(SD)	大塚 内土系	—	16.5	1.8	1.7	0.8	5	内外面回転ナデ, 胴部から具 部外側面回転ナデ, 胴部高台	2.5Y/2灰赤	大塚 段部	250	60	
829	B15	B13W(SD)	古瀬戸 手碗	—	33.0	—	—	—	2	内外面回転ナデ, 胴部手付 外側面回転ナデ	2.5Y/2灰赤	古瀬戸 段部	250	60	
830	B16	B13W(SD)	大塚 系	—	12.4	—	—	—	6	内外面回転ナデ	2.5Y/2灰赤 10YR2/2.5赤	大塚 1-2	250	60	
831	B16	B13W(SD)	古瀬戸 碗	—	9.3	—	—	—	7.5	内面回転ナデ, 外面回転用ナ 胴部高台	2.5YR2/8灰赤 10YR2/2.5赤	古瀬戸 段部	250	60	
832	B14	B13W(SD)	古瀬戸 片口鉢	—	—	—	—	—	—	内外面回転ナデ, 胴部手付 外側面回転ナデ, 胴部高台	10YR2/2.5赤 10YR2/2.5赤	南部赤白土系陶 器式流行	250	60	
833	B16	B13W(SD)	古瀬戸 片口鉢	—	25.0	—	—	—	1.7	内外面回転ナデ, 胴部から具 部外側面回転ナデ	2.5YR2/8灰赤	南部赤白土系陶 器式流行	250	60	
834	B16	B13W(SD)	古瀬戸 片口鉢	—	28.8	—	—	—	1.5	内外面回転ナデ, 胴部から具 部外側面回転ナデ	2.5YR2/8灰赤	南部赤白土系陶 器式流行	250	60	
835	B15	B13W(SD)	大塚 段部	8A型	—	—	—	—	0.2	内外面回転ナデ	2.5YR2/8灰赤	大塚	250	60	
836	B14	B13W(SD)	中部陶器 有脚碗	上中層部1 ord目層	—	—	—	—	0.6	—	外面: 片足型止器 赤土系, 赤土系 250ナデ	2.5Y/2灰赤	250	60	
837	B16	B13W(SD)	白土系陶器 碗	—	15.4	16.0	5.4	2	2	内外面回転ナデ, 胴部高台(胴 部直), 回転ホウ輪	2.5Y/2灰赤	北部赤土式(赤 土系)	250	60	
838	B16	B13W(SD)	白土系陶器 碗	—	—	2.3	—	—	11	内外面回転ナデ, 胴部高台(胴 部直), 回転ホウ輪	10YR2/2.5赤 10YR2/2.5赤	北部赤土式 (大塚系)	250	60	
839	B13	B12W(SD), B13W(SD)	古瀬戸 片口鉢	—	29.3	13.8	13.3	1	6.5	内外面回転ナデ, 胴部手付 外側面回転ナデ, 胴部高台	2.5YR2/8灰赤	南部赤白土系陶 器式流行	250	60	
840	B1- B16-2	B13W(SD)	常陸 型	—	19.0	—	—	—	1	口縁部内外面勢外側面回転 ナデ	5YR2/8灰赤	常陸赤土式	250	60	

表95 土器観察表00

遺物番号	アソフ	産地・産別 (産地不明)	種別	形制分類	法製 (5m)			焼成 (5/12)			調整等	文様・特殊	主な産地	形式・式名	出典回数			
					口徑	底径	器高	口縁	底縁	器高					口縁	底縁	種別	回数
811	B06	B10(SD)	中国陶磁器 白磁器	上田分製器1 or日製	—	—	—	—	—	—	—	—	—	外周に白磁焼印に 上田製と、内周に2.5Y6/1R Y5/5黄緑	3Y6/1R	252	42	
812	B07	B10(SD)	A製土器 A類	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	口縁部内外周に平文、内周部 リ	10YR7/12 5Y6/1R	252	61	
813	B17	B140(SD)	白磁系陶器 陶	—	—	50.5	—	—	2.7	—	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台(種 類別)、胎付高台(種別)、 胎付高台(種別)	10YR7/12 5Y6/1R	252	61	
814	B16	B140(SD)	白磁系陶器 陶	—	—	45.0	—	—	3.5	—	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台(種 別)、胎付高台(種別)、 胎付高台(種別)	2.5Y7/1R	252	41	
818	BQ10	B19(SD)	唐灰(陶器) 灰陶	—	—	33.40	46.5	2.8	4	5.0	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 へ字状土製に上田製 焼した基本、底縁に5 Y6/2オリーブ黄	10YR7/12 5Y6/1R	252	36	
819	BQ1	B19(SD)	唐灰(陶器) 灰陶	—	—	30.40	—	—	—	1.8	—	—	—	内面同焼十字、胎付高台(種 別)陶	10YR6/2 10YR6/1	252	41	
820	BQ9	B19(SD)	大塚 磁器	A類	—	—	—	—	0.5	—	—	—	—	内面同焼十字	5Y6/1R	252	41	
831	BQ9	B19(SD)	唐灰(陶器) 磁器	14C類	—	—	—	—	0.5	—	—	—	—	内面同焼十字	5Y6/1R	252	41	
832	BQ10	B19(SD)	唐灰(陶器) 磁器	14C類	—	—	—	—	0.5	—	—	—	—	内面同焼十字	5Y6/1R	252	41	
833	BQ9	B19(SD)	唐灰 陶	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	内面同焼十字	5Y6/1R	252	41	
834	BQ9	B19(SD)	唐灰 灰陶	—	—	—	—	—	0.2	—	—	—	—	胎付 外周に 唐製 へ字状土製、胎付高 台に唐製、底縁陶	Na6/0白	18世紀	331	41
841	BN- D09 10	B08(SD)	白磁系陶器 陶	—	—	20.10	22.80	2.0	1	0	—	—	—	内面土製による同焼十字、外 面同焼十字、胎付高台	2.5Y6/2R	252	41	
842	B19	B08(SD)	白磁系陶器 陶	—	—	18.80	22.0	2.4	2.5	3.5	—	—	—	内面土製による同焼十字、外 面同焼十字、胎付高台	2.5Y6/2R	252	41	
843	BQ9	B08(SD)	古銅? 灰土製陶	—	—	11.30	14.7	2.8	11	10	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 陶器同焼陶器、胎付高台(土 製)	5Y6/1R 10YR6/1	252	38	
844	BQ9	BQ2(SD)	唐灰(陶器) 灰陶	—	—	31.8	—	—	—	2.8	—	—	—	胎付 胎付 2.5 Y6/2R土製 胎付高台(土 製)同焼陶器、胎付高台(土 製)同焼陶器	2.5Y6/2R	252	41	
845	BN- D09 10	B08(SD)	大塚 磁器	A類	—	—	26.0	30.1	11.5	5	12	—	—	内外面同焼十字、胎付高台	10YR7/12 5Y6/1R	252	38	
846	BN- D09 10	B08(SD)	中国陶磁器 白磁器	—	—	—	—	—	2.5	—	—	—	—	胎付 内周に 唐製 へ字状土製、胎付高 台に唐製、底縁陶	2.5Y6/2R	252	41	
847	BQ9	B08(SD)	大塚 磁器	14C類	—	—	—	—	0.6	—	—	—	—	内外面同焼十字	5Y6/1R	252	41	
848	CC1	B40(SD)	大塚 丸蓋	—	—	19.7	—	—	—	3	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	5Y7/1R	3Y7/1R	252	41
849	BQ9	B74(SD)	白磁系陶器 陶	—	—	14.7	—	—	—	4	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	2.5Y7/1R	252	41	
850	BQ9	B74(SD)	唐灰(陶器) 灰陶	—	—	32.4	27.0	2.6	5	3.5	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	5Y6/1R	2.5Y6/2R	252	41
851	BQ9	B74(SD)	唐灰(陶器) 灰陶	—	—	32.6	2.8	2.4	4	10	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	5Y7/2R	3Y7/2R	252	41
852	BQ9	B74(SD)	唐灰(陶器) 灰陶	—	—	32.8	4.9	2.8	7	11	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	5Y7/2R	2.5Y7/1R	252	41
853	BQ9	B74(SD)	唐灰(陶器) 灰陶	—	—	32.7	4.8	3.1	9	12	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	10YR6/2R	2.5Y6/2R	252	41
854	BQ9	B74(SD)	唐灰(陶器) 灰陶	—	—	14.4	8.4	3.1	6.2	9	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	5Y6/2R 10YR6/1R	10YR6/1R	252	41
855	BQ9	B74(SD)	唐灰(陶器) 白磁器	—	—	19.8	9.30	2.3	3.5	4.5	—	—	—	胎付 内周に 唐製 へ字状土製、胎付高 台に唐製、底縁陶	10YR7/12 5Y6/1R	2.5Y6/2R	252	41
856	BQ9	B74(SD)	唐灰(陶器) 白磁器	—	—	12.4	8.7	2.3	1.6	5.8	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	2.5Y6/2R	2.5Y6/1R	252	41
857	BQ9	B74(SD)	唐灰(陶器) 白磁器	—	—	18.0	—	—	—	5.1	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	5Y7/2R	10YR6/1R	252	41
858	BQ9	B74(SD)	中国陶磁器 白磁器	森田分製器	11.4	—	—	—	0.7	—	—	—	—	—	胎付 2.5Y7/2R 5Y6/1R	2.5Y6/1R	252	41
859	BQ9	B14(SD)	A製土器 A類	—	—	20.6	—	—	—	4	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 へ字状土製に胎付高台、胎付高台	2.5Y6/2R 5Y6/1R	2.5Y6/2R	252	58
860	BQ9	B16(SD)	古銅? 磁器	3類	24.4	—	—	—	0.8	—	—	—	—	内外面同焼十字	5Y6/1R	10YR7/12 5Y6/1R	252	41
861	CM14	C50(SD)	白磁系陶器 陶	—	—	7.40	14.3	1.1	3	3.5	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	2.5Y7/1R	2.5Y7/1R	252	41
862	CM14	C50(SD)	白磁系陶器 陶	—	—	7.40	4.4	1.0	4.9	11	—	—	—	内外面同焼十字、胎付高台 内面同焼陶器、胎付高台	10YR7/12	2.5Y6/2R	252	41

表96 土器観察表(2)

遺物番号	ブローチ	形状・装飾 (高麗陶器)	種別	形制分類	造量 (cm)			残高(3/10)	調査等	文様・胎文	胎土色調	形式・式名	観察場所 調査年度	
					口径	底径	高さ							
485	CM13-CM13-CM14	C30(SD)	白磁系陶器 皿	—	7.4	4.3	0.9	7.3	10.5	内外面回転十字, 底部内面磨 走面十字, 刻線(中央部, 散り)	2.5Y7/1R0	北部6号形式 皿	254 41	
486	CM13	C50(SD)	白磁系陶器 皿	—	8.1	4.6	1.4	11	11	内外面回転十字, 底部内面磨 走面十字, 刻線(中央部, 散り)	2.5Y7/1R0	北部6号形式 皿	254 58	
485	CM13	C50(SD)	白磁系陶器 皿	—	—	—	—	—	3.5	内外面回転十字, 底部内面磨 走面十字, 刻線(中央部, 散り)	10YR2/1R0	北部6号形式 (大黒丸)	254 61	
488	CM13	C30(SD)	白磁系陶器 碗	—	10.6	2.3	2.9	1.9	1	内外面回転十字, 胎付高台(脚 散り), 刻線(中央部)	10YR6/2R0	北部10号形式 (大黒丸)	254 81	
487	CN13	C40(SD)	滑石(陶器)小 皿	刺刺形	—	—	—	—	—	内外面回転十字, 胎面上下半 面回転十字	2.5YR3/1R0	北部10号形式 (大黒丸)	254 81	
488	CM13-CM14	C50(SD)	土師系(中野) 新製	菓子付	11.7	—	—	1.8	—	内外面回転十字, 胎面 内面回転十字	7.5YR7/4C 1+R0	北部10号形式 (大黒丸)	254 61	
489	CM13	C30(SD)	古瀬戸 月目鉢	—	28.7	—	—	1	—	内外面回転十字	2.5YR1/1R0	南部非白磁系陶 器形式陶器	254 81	
486	CM14	C50(SD)	中国陶器 有線磁器文 皿	—	18.4	—	—	1.5	—	—	青磁 2.5YR/2R0 7号	2.5YR6/1R0	254 47	
481	DA14	C13(SD)	白磁系陶器 皿	—	7.8	4.1	1.3	12	12	内外面回転十字, 底部内面磨 走面十字, 刻線(中央部)	10YR2/1R0	北部6号形式 皿	254 58	
481	DB15	C12(SD)	古瀬戸 鉢	—	—	—	—	—	11	内外面回転十字, 内底磨 走面十字, 刻線(中央部)	灰濁 10YR6/4E 2+R0	古瀬戸鉢付 (大黒丸)	254 61	
481	DB15	C12(SD)	大黒 磁鉢	—	—	—	—	—	3.5	内外面回転十字, 刻線(中央部)	黄濁 5YR3/4R0 6+R0	大黒-2	254 61	
486	CM14	C14(SD)	白磁系陶器 碗	—	—	—	—	—	4.5	内外面回転十字, 底部内面磨 走面十字, 胎付高台(脚散り), 刻線(中央部, 散り)	2.5YR6/1R0	北部6号形式 (大黒丸)	254 61	
482	DJ15	D02(SD)	中国陶器 青磁碗	上野中野10 号	—	—	—	—	1.5	胎面高台	外底: 滑石製小, 青 濁 10YR6/2号 7号	2.5Y7/1R0	255 47	
486	DB15	D42(SD)	白磁系陶器 碗	—	10.2	3.4	2.3	4	9	内底工部以上回転十字, 外 面回転十字, 刻線(中央部)	2.5Y7/1R0	北部11号形式 (生煎), 胎土調 色	255 61	
489	DB15	D42(SD)	白磁系陶器 碗	—	10.9	4.3	2.7	2.7	7.2	内底工部以上回転十字, 外 面回転十字, 刻線(中央部)	N6/R0	北部11号形式 (生煎), 胎土調 色	255 61	
486	DB15	D42(SD)	古瀬戸 手碗	—	33.7	—	—	1	—	内外面回転十字	灰濁 2.5YR/4R0 1+R0	古瀬戸鉢付新	255 81	
481	DJ14	D62(SD)	大黒 磁鉢	刺刺形	—	—	—	—	6.7	内外面回転十字	黄濁 7.5YR3/2R0 7+R0	大黒手 皿	255 61	
482	DG16	D10(SD)	白磁系陶器 碗	—	10.4	3.4	3.2	2.3	2.7	内外面回転十字, 刻線(中央部)	2.5Y7/1R0	北部11号形式 (胎土)	255 61	
482	DG16	D10(SD)	白磁系陶器 碗	—	10.2	3.4	2.1	1	4.5	内底工部以上回転十字, 外 面回転十字, 刻線(中央部)	10YR6/1R0	北部11号形式 (生煎)	255 61	
485	DJ15	D75(SD)	滑石(陶器) 平鉢	—	—	—	—	—	0.7	内外面回転十字	黄濁 7.5YR3/1R0 6+R0	南部7号 小皿	255 61	
486	DB15	D75(SD)	滑石(陶器) 刺刺形	—	14.2	0.9	2.3	1.1	2.5	内面回転十字, 胎面中央部 外底: 滑石製小, 胎付 高台(脚散り), 胎付 高台	黄濁 内底: 黄濁 外底: 滑石製小, 胎付 高台(脚散り), 胎付 高台	2.5YR6/1R0	南部14号	255 61
487	DJ15	D82(SD)	滑石 葉	—	—	—	—	—	0.1	内外面回転十字	10YR6/2R0 黄濁	南部7号 小皿	255 61	
488	DP16	D10(SD)	大黒 磁鉢	9A 葉	—	—	—	—	0.9	内外面回転十字	黄濁 7.5YR3/2R0 7+R0	10YR2/6R0 黄濁	大黒手 皿	255 61
488	DO17	D10(SD)	古瀬戸 鉢付大黒	—	—	—	—	—	1	内外面回転十字	黄濁 5YR7/2号 7号	10YR2/1R0	古瀬戸鉢付 皿	255 81
481	DO17	D20(SD)	白磁系陶器 皿	—	17.8	4.5	0.9	4	5	内外面回転十字, 刻線(中央部)	2.5Y7/1R0	北部6号形式 皿	255 61	
481	EC28	D40(SD)	白磁系陶器 皿	—	16.4	7.0	5.0	11.8	12	内外面回転十字, 胎付高台(脚 散り), 刻線(中央部)	2.5YR6/1R0	北部6号形式 皿	255 61	
481	ES18	E90(SD)	白磁系陶器 有刺刺	—	—	—	—	—	1.3	内外面回転十字	灰濁 7.5YR/2R0 7号	10YR2/1R0	北部6号形式 鉢付, 葉	255 61
481	ET18	E90(SD)	古瀬戸 有刺刺	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字	灰濁 5YR/2R0 7号	10YR2/1R0	255 62	
485	ES22	E40(SD)	古瀬戸 刺刺	—	—	—	—	—	0.5	内外面回転十字	灰濁 5YR/2R0 7号	2.5Y7/1R0	古瀬戸鉢付 皿	255 82
485	ER18	E50(SD)	白磁系陶器 碗	—	13.6	7.2	5.4	1.5	6.5	内外面回転十字, 胎付高台(脚 散り), 刻線(中央部)	10YR6/1R0	北部6号形式 皿	255 82	
487	EX17	E90(SD)	白磁系陶器 碗	—	—	—	—	—	12	内外面回転十字, 底部内面磨 走面十字(以上中央部), 胎付高 台(脚散り), 刻線(中央部, 散り)	10YR2/1R0	北部6号形式 (土)	255 62	
481	BO18	B2 (SD)	中国陶器 青磁鉢	太平の台型 刺刺形有線磁 器1号	—	—	—	—	0.4	—	青濁 5YR7/2号 7号	2.5Y7/1R0	255 47	
481	GC28	F18(SD)	滑石系 鉢付大黒	—	25.0	—	—	—	2.1	内外面回転十字	10YR2/2C 1+R0	大黒-1号刺刺, 胎面中央部, 胎土 が黄濁で中に 滑石製小黒 丸。胎面(脚散り) 付	255 62	

表97 土器觀察表(2)

遺物番号	ア - F	産地・期別 (或時期別)	種 別	数量(個)	口径 (mm)				底径 (mm)	高さ (mm)	注 意 等	土 器 類 別	形式・様式など	発掘回数 埋蔵(個)		
					口径	底径	口径	底径								
930	GC29	F18(ⅡSD)	白土系陶器 小鍋	—	—	9.4	3.1	2.3	9.5	12	内外面同様十字, 肩付高台(横割製)	5Y7/18C	土器の器形式(古新製)	255	58	
931	GC29	F18(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	18.6	5.2	2.3	5.5	8.5	内外面同様十字, 肩付高台製	2.5Y7/28C	土器の器形式	250	58	
932	GR27	F9(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	—	—	—	—	0.3	内外面同様十字	黄褐色 2.5Y6/24C +黄	土器の器形式	255	62	
933	GR27	F9(ⅡSD)	中国陶磁器 白磁鉢	—	—	—	—	—	—	—	内面(白土系陶器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	2.5Y6/18C	土器の器形式	255	61	
934	GR27	F9(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	29.2	—	—	—	1.8	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	2.5Y7/28C	土器の器形式(古新製)	255	61	
935	GR29	F12(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	38.0	—	—	—	4	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	2.5Y6/28C	赤褐色 煎鍋	255	62	
936	FM22	F8(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	7.2	—	—	—	1	内外面同様十字, 肩付高台(横割製), 肩付高台(土器)	2.5Y7/28C	土器の器形式	255	63	
937	HI54	G19(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	—	—	—	—	—	内面(土器), 肩付高台(土器)	2.5Y7/28C	赤褐色 煎鍋	256	62	
938	HI55	G9(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	—	—	—	—	0.3	内外面同様十字	黄褐色 2.5Y6/24C +黄	土器の器形式	256	62	
939	HC73	G43(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	12.8	1.5	2.1	0.2	3.5	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	10Y86/78C	土器の器形式	256	62	
940	HC73	G43(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	11.9	4.3	2.9	12	11	内面(土器)以上土器同様十字, 内面同様十字	10Y86/78C	土器の器形式(土器)	256	64	
941	HC73	G44(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	—	—	—	—	6.8	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	2.5Y6/28C	赤褐色 煎鍋	256	63	
942	HC66	G43(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	—	—	—	—	4	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	黄褐色 2.5Y6/24C +黄	2.5Y7/18C	土器の器形式	256	62
943	HC67	G44(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	—	—	—	—	3	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	2.5Y7/28C	土器の器形式	256	62	
944	HC67	G44(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	11.6	5.0	2.4	1.6	3.2	内面(土器)以上土器同様十字, 内面同様十字, 肩付高台(土器)	10Y86/78C	土器の器形式(土器)	256	62	
945	HC29	G43(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	11.2	—	—	—	1.8	内面(土器)以上土器同様十字, 内面同様十字, 肩付高台(土器)	黄褐色 2.5Y6/24C +黄	2.5Y6/28C	土器の器形式(土器)	256	62
946	HC30	G30(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	12.1	0.2	3.3	3.5	8.2	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	2.5Y7/18C	赤褐色 煎鍋	256	58	
947	HI49	G30(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	11.8	—	—	—	2.5	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	黄褐色 2.5Y6/24C +黄	2.5Y7/28C	赤褐色 煎鍋	256	58
948	HI46	G30(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	8.1	16.0	1.1	6.6	8	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	10Y86/78C	土器の器形式(土器)	256	62	
949	HC67	G67(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	12.2	14.0	9.3	3.2	3	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	2.5Y7/18C	土器の器形式(土器)	256	62	
949	HC78	H2(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	39.0	—	—	—	—	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	10Y86/78C	10-15mm平	257	62	
949	HC78	H2(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	3.3	—	—	—	9.5	内外面同様十字, 肩付高台(横割製), 肩付高台(土器)	2.5Y7/28C	土器の器形式(土器)	257	62	
949	HC79	H1(ⅡSD)	中国陶磁器 白磁鉢	—	—	—	—	—	—	5.5	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	黄褐色 2.5Y6/24C +黄	土器の器形式(土器)	257	62	
949	HC79	H1(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	42.0	—	—	—	3.2	内外面同様十字	黄褐色 2.5Y6/24C +黄	10Y86/78C	土器の器形式	257	58
949	HC77	H1(ⅡSD)	中国陶磁器 白磁鉢	—	—	—	—	—	—	1	内面(白土系陶器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	2.5Y6/18C	土器の器形式	257	62	
949	HC77	H1(ⅡSD)	中国陶磁器 白磁鉢	—	—	—	—	—	—	2.8	内面(白土系陶器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	2.5Y6/28C	土器の器形式	257	63	
949	HC77	H1(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	7.6	4.2	2.1	2.6	6.2	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	5Y7/18C	土器の器形式	257	63	
949	HC77	H1(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	7.7	—	—	—	3.8	内外面同様十字, 肩付高台(横割製), 肩付高台(土器)	10Y86/78C	土器の器形式(土器)	257	62	
949	HC77	H1(ⅡSD)	赤褐色 煎鍋	—	—	16.6	4.9	2.8	4	6.1	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	黄褐色 2.5Y6/24C +黄	土器の器形式	257	63	
949	GC26	H30(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	7.8	4.2	1.3	8.8	12	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	5Y7/18C	土器の器形式	257	58	
949	GC26	H30(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	7.8	4.4	1.3	11.9	12	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	2.5Y7/18C	土器の器形式(土器)	257	58	
949	GC26	H30(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	16.4	19.0	1.3	4.8	5	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	5Y7/18C	土器の器形式(土器)	257	63	
949	GC26	H30(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	13.7	5.6	4.8	7.2	4.2	内外面同様十字, 肩付高台(横割製), 肩付高台(土器)	2.5Y7/28C	土器の器形式(土器)	257	64	
949	GC26	H30(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	3.2	—	—	—	12	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	黄褐色 2.5Y6/24C +黄	土器の器形式(土器)	257	59	
949	GC26	H30(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	13.4	4.7	3.4	11	12	内外面同様十字, 肩付高台(土器) +肩付高台(土器)	7.5Y8/18C	土器の器形式(土器)	257	58	
949	GC26	H30(ⅡSD)	白土系陶器 煎	—	—	12.0	14.0	4.4	4.1	2.5	内外面同様十字, 肩付高台(横割製), 肩付高台(土器)	2.5Y7/28C	土器の器形式(土器)	257	62	

表98 土器観察表(2)

器物番号	グロット	遺跡・塚名 (遺跡番号)	種 別	形態分類	直径 (mm)			高さ (mm)	容量 (L)	備 考 等	文様・装束	胎土色調	成形・式式など	調査年度	
					口縁	底径	器高							1950	1955
509	GQ94	H303(SD)	白土系陶器 甕	—	—	9.8	—	12	内外面回転ナシ、底面内面磨 上ナシナリ。胎土赤褐色、胎付高 白(横割線)、回転糸痕、軟ナリ		2.5Y7/18G	北部赤6式(白土系)	257	62	
509	GQ94	H303(SD)	白土系陶器 甕	—	32.7	35.0	8.5	1.8	3	内外面回転ナシ、胎付高白(横 割線)、回転糸痕		2.5Y7/18G	北部赤6式 (大塚系)	257	62
509	GQ94	H303(SD)	白土系陶器 甕	—	—	7.7	—	11	内外面回転ナシ、底面内面磨 上ナシナリ。胎付高白(横割線)、 回転糸痕ナシナリ		2.5Y7/18G	南部赤6式	257	62	
502	GR94	H303(SD)	白土系陶器 甕	—	14.5	6.5	9.4	2	6.6	内外面回転ナシ、胎付高白(横 割線)、回転糸痕、軟ナリ		2.5Y7/29G	北部赤6式(洗 割線ナシ)	257	62
503	GK106	D802(SD)	白土系陶器 小甕	—	—	14.9	—	0.5	—	内外面回転ナシ、胎付高白、回 転糸痕		2.5Y7/19G	南部赤6式	258	62
504	GJ102	D802(SD)	白土系陶器 甕	—	—	7.5	—	11	内外面回転ナシ、胎付高白(横 割線)、回転糸痕		10Y8/20G	北部赤6式(洗 割線ナシ)	258	62	
505	GJ102	D802(SD)	白土系陶器 甕	—	—	9.9	—	3	—	内外面回転ナシ、底面内面磨 上ナシナリ。胎付高白(横割線)、 回転糸痕		2.5Y7/28G	北部赤6式(白 土系)	258	62
506	GJ102	D802(SD)	白土系陶器 甕	—	32.4	14.8	3.2	2.2	3.1	内外面回転ナシ、回転糸痕		10Y8/18G	北部赤11式 (堀之江)	258	62
507	GK106	D802(SD)	白土系陶器 甕	—	10.8	12.9	3.8	1	3	内面工具による回転ナシ、外 面回転ナシ、回転糸痕		10Y8/44G	北 部 赤 11 式 (赤川)	258	62
508	GJ101- GJ102	D802(SD)	古瀬戸 輪軸小甕	—	19.8	15.0	2.1	2.5	4	内外面回転ナシ、回転糸痕	文様：5Y5/30ナ リ	2.5Y7/18G	古瀬戸遺物	258	62
509	GJ102	D802(SD)	古瀬戸 直輪中甕	—	34.0	18.0	3.1	1.7	3	内外面回転ナシ、回転糸痕	文様：7.5Y5/38ナ リ	10Y87/32ナ リ	古瀬戸直輪古 甕	258	39
510	GK106	D802(SD)	大塚 天目玉甕	—	33.0	—	—	1.4	—	内外面回転ナシ、胴部中心部 内外面回転ナリ	文様：10Y8/22ナ リ	2.5Y6/20G	大塚	258	62
511	GJ102	D802(SD)	古瀬戸 平甕	—	—	2.0	—	12	—	内外面回転ナシ、外面回転ナ リ、胎付高白	文様：2.5Y6/42ナ リ	10Y8/18G	古瀬戸直輪古 甕	258	62
512	GJ102	D802(SD)	古瀬戸 壺形	—	—	3.2	—	12	—	内外面回転ナシ、回転糸痕	文様：7.5Y8/22ナ リ	5Y1/18G	古瀬戸直輪古 甕	258	62
513	GJ102- GJ104	D802(SD)	古瀬戸 壺形	—	32.0	—	—	2.5	—	内外面回転ナシ	文様：2.5Y8/42ナ リ	10Y87/32ナ リ	古瀬戸直輪古 甕	258	58
514	GJ103	D802(SD)	古瀬戸 直輪中甕	—	—	—	—	0.6	—	内外面回転ナシ、口縁下外周 の一部に工具による回転ナシ	文様：5Y1/20G	10Y87/32ナ リ	古瀬戸中1	258	62
515	GJ102	D802(SD)	古瀬戸 直輪中甕	—	28.2	15.8	—	1.3	2.3	内外面回転ナシ、胴部下半 面内外面回転ナリ	文様：5Y7/20G	2.5Y8/34G	古瀬戸中1	258	62
516	GJ103	D802(SD)	古瀬戸 直輪中甕	—	32.4	—	—	1	—	内外面回転ナシ、外周工具による 回転ナシ	文様：7.5Y7/24G	2.5Y6/30G	古瀬戸中1B	258	62
517	GK106	D802-2(SD)	古瀬戸 内口甕	—	—	29.9	—	1	—	内外面回転ナシ、外周工具による 回転ナシ	文様：5Y1/34G	2.5Y7/30G	古瀬戸直輪古 甕	258	62
518	GJ102	D802(SD)	古瀬戸 直輪中甕	—	—	29.4	—	1	—	内外面回転ナシ	文様：5Y6/30ナ リ	2.5Y6/18G	古瀬戸直輪古 甕	258	62
519	GJ106- GK106	D240①-型(SD)、D275 ②(SD)	古瀬戸 直輪大甕	—	28.3	11.0	4.4	1.8	3	内外面回転ナシ、胴部下半中 心部内外面回転ナリ	文様：2.5Y7/24G	10Y87/32ナ リ	古瀬戸直輪古 甕	258	39
520	GJ102	D802(SD)	古瀬戸 直輪中甕	—	—	—	—	1	—	内外面回転ナシ	文様：5Y5/30ナ リ	2.5Y7/18G	古瀬戸直輪古 甕	258	62
581	GK106	D160①-型(SD)、D275 ②(SD)	古瀬戸 甕	—	—	9.7	—	7.4	—	内外面回転ナシ、胴部回転ナ リ、胴部中心部内外面回転ナ リ	文様：7.5Y4/30ナ リ	10Y87/32ナ リ	古瀬戸直輪古 甕	258	62
582	GJ102	D802(SD)	古瀬戸 有耳甕	3段	—	19.0	—	5.2	—	内外面回転ナシ、外面回転ナ リ、回転糸痕	文様：7.5Y8/42ナ リ	10Y87/32ナ リ	古瀬戸直輪古 甕	258	62
583	GK106	D802(SD)	古瀬戸 直輪 3段	3段	33.4	—	—	0.5	—	内外面回転ナシ	文様：5Y5/42ナ リ	10Y8/20G	古瀬戸直輪古 甕	258	62
584	GJ101	D802(SD)	甕 壺	—	—	—	—	0.3	—	内外面回転ナシ	10Y87/32ナ リ	甕形胎土	258	62	
585	GK106	D802(SD)	甕 壺	—	—	—	—	0.7	—	内外面回転ナシ	10Y8/18G	常形赤9式	258	62	
586	GJ101	D802(SD)	甕 壺	—	—	—	—	3	—	内外面回転ナシ	10Y8/18G	常形赤9式	258	62	
587	GJ101	D802(SD)	甕 壺	—	—	—	—	1	—	内外面回転ナシ、胎付高白、胎 付面内外面回転ナリ	7.5Y8/32ナ リ	10Y87/32ナ リ	258	62	
589	GJ106	D182(SD)	白土 甕	—	—	12.1	—	0	—	内外面回転ナシ、胎付高白、回 転糸痕	文様：5Y8/24ナ リ	3Y7/18G	11c 転 付 高 白 (横割線)	259	63
590	GJ106	D192(SD)	白土 甕	—	—	17.0	—	4	—	内外面回転ナシ、胎付高白、回 転糸痕	10Y87/32ナ リ	11c 転 付 高 白 (横割線)	259	63	
591	GJ105	D192(SD)	白土系陶器 甕	—	31.9	13.8	2.3	2	5	内面工具による回転ナシ、外 面回転ナシ、回転糸痕	—	10Y8/44G	北 部 赤 11 式 (赤川)	259	63
592	GJ106	D192(SD)	古瀬戸 直輪	—	—	3.3	—	12	—	内外面回転ナシ、回転糸痕	—	2.5Y7/20G	古瀬戸直輪	259	63
593	GJ106	D192(SD)	古瀬戸 天目玉甕	—	11.7	—	—	1.8	—	内外面回転ナシ、胴部中心部 内外面回転ナリ	文様：胎 輪 軸 7.5 Y8/17/18-5Y8/32 ナリ	10Y87/32ナ リ	古瀬戸直輪古 甕	259	63
594	GJ106	D192(SD)	古瀬戸 有耳甕	3段ナ	—	—	—	—	—	内外面回転ナシ	文様：7.5Y5/38ナ リ	10Y87/18G	古瀬戸直輪古 甕	259	63
595	GJ105	D192(SD)	古瀬戸 天目付大甕	—	31.0	—	—	0.8	—	内外面回転ナシ、口縁部中心部 内外面回転ナリ、胴部下半面内外 面回転ナリ	文様：5Y6/30ナ リ	10Y87/32ナ リ	古瀬戸直輪古 甕	259	63
596	GJ106	D192(SD)	甕 壺	—	38.9	—	—	2.6	—	内外面回転ナシ	—	2.5Y6/18G	259	58	

表99 土器類表24

遺物番号	アット	産地・部位 (産地不明)	種別	形制分類	口径 (mm)			高さ (mm)	底径 (mm)	底面形状	底面	土質	文様・胎文	加工色塗	形式式(寸)	発掘回 年
					口縁	口縁	口縁									
989	GD105	ITD1(SD)	赤鉄 釜	—	—	39.3	—	2.4	—	—	2.4	内面黒十字	HYR/75- 白鉄	250	63	
989	GD17	ITD1(SD)	白鉄赤鉄 碗	—	33.7	4.0	2.4	1.4	3	—	1.4	内面黒十字, 外周黒十字, 外周赤鉄	2.5Y/28B	黒鉄 赤十字 片 [5.0]	250	63
989	AQ1	A3(SK)	白鉄赤鉄 碗	—	33.0	4.0	2.9	1.3	3	—	1.3	内面黒十字, 外周黒十字, 外周赤鉄	2.5Y/28B	黒鉄 赤十字 片 [5.0]	250	63
1001	BQ1	A3(SK)	中国陶磁器 白磁器	森田分製磁	38.0	4.0	2.1	2.9	3	—	2.9	内面黒十字(赤十字)	白磁 2.5Y/28B	HYR/28白	250	61
1002	A08	A2(SK)	木製 小瓶	—	2.0	5.2	1.8	0	12	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 黒 漆 刷 1 HYR/21- 白鉄	木製	250	38
1003	A56	A30(SK)	占碑? 瓦片	—	(4.4)	—	—	2	—	—	2	内面赤鉄十字	鉄 刷 1HYR/21 HYR/28白	占碑? 瓦片	250	63
1003	BP10	B46(SK)	中国陶磁器 白磁器	森田分製磁	—	33.0	—	—	4	—	—	内面赤鉄十字(赤十字)	白磁 2.5Y/28B	HYR/21- 白鉄	250	63
1006	B07	B140(SK)	占碑? 小瓶	—	(8.0)	4.2	3.0	2.5	4	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/21 白鉄	占碑? 小瓶	250	63
1007	C06	B40(SK)	白鉄赤鉄 碗	—	33.9	5.2	5.9	2	12	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	2.5Y/28B	黒鉄 赤十字 片 [5.0]	250	63
1008	C06	B40E(SK)	白鉄赤鉄 碗	—	—	4.9	—	—	4	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	2.5Y/28B	黒鉄 赤十字 片 [5.0]	250	61
1009	CF10	B10E(SK)	白鉄赤鉄 碗	—	38.0	4.0	1.4	3	3.3	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	3Y/28B	黒鉄 赤十字 片 [5.0]	250	63
1010	CF10	B10E(SK)	白鉄赤鉄 碗	—	38.9	4.0	2.3	2	2	—	—	内面黒十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	HYR/28白	黒鉄 赤十字 片 [5.0]	250	63
1011	CF10	B10E(SK)	中国陶磁器 白磁器	森田分製磁	—	33.0	—	—	12	—	—	内面赤鉄十字	白磁 2.5Y/28B	B28B白	250	61
1012	C28	C2(SK)	占碑? 磁片	複製品	17.4	—	—	1.8	—	—	1.8	内面赤鉄十字	鉄 刷 1HYR/21 白鉄	占碑? 磁片	250	63
1013	CM12	C4(SK), C6(SD)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	32.4	—	—	2.9	—	—	2.9	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	5Y/28B 黒鉄 白鉄 赤鉄 漆器 白鉄 赤鉄 漆器 白鉄 赤鉄 漆器	漆器(陶器) 漆器(陶器)	250	61
1014	CL1- CL3	C6(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	(3.9)	—	—	2.7	—	—	2.7	内面赤鉄十字	白鉄 赤鉄 漆器 白鉄 赤鉄 漆器	漆器(陶器)	250	63
1015	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	4.4	3.0	1.4	12	12	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 2.5YR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1016	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	7.8	3.4	1.6	12	12	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1017	DB14	C0E(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	2.3	3.2	1.6	12	12	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字	鉄 刷 1HYR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1018	DB14	C0E(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	2.4	2.9	1.3	12	12	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1019	DB11	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	6.7	2.9	1.7	16	12	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/28B 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1020	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	7.8	3.4	1.3	—	—	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 2.5YR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1021	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	7.8	3.8	1.6	12	12	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1022	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	12.0	—	—	—	—	—	—	内面赤鉄十字	鉄 刷 1HYR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1023	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	11.6	—	—	2.2	—	—	2.2	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1024	CL1- CM1	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	—	4.2	—	—	4	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	29
1025	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	—	3.7	—	—	8.3	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1026	DB14	C0(SK)	占碑? 磁片	—	—	—	—	—	0.9	—	—	内面赤鉄十字	鉄 刷 1HYR/21 白鉄	占碑? 磁片	250	63
1027	CM12- CM14	C0(SK)	占碑? 磁片	—	—	—	—	—	1	—	—	内面赤鉄十字	鉄 刷 1HYR/21 白鉄	占碑? 磁片	250	63
1028	DB14	C0(SK)	占碑? 磁片	—	—	31.2	—	—	1	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/21 白鉄	占碑? 磁片	250	63
1029	DB14	C0E(木製)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	106.4	—	—	3.6	—	—	—	内面赤鉄十字	鉄 刷 1HYR/21 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1030	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	33.2	—	—	—	1	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字	鉄 刷 2.5YR/22 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1031	DB14	C0E(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	—	4.0	—	—	3.3	—	—	内面赤鉄十字	鉄 刷 1HYR/28B 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1032	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	30.0	—	—	—	3.3	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/21 白鉄	漆器(陶器)	250	63
1033	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	30.0	3.5	2.8	1	8	—	—	内面赤鉄十字, 外周赤鉄十字, 外周黒十字	鉄 刷 1HYR/28B 白鉄	漆器(陶器)	250	29
1034	DB14	C0(SK)	漆器(陶器) 見立 小瓶	—	2.2	3.0	2.4	12	12	—	—	内面赤鉄十字	鉄 刷 1HYR/41 白鉄	漆器(陶器)	250	29

表100 土器観察表②

器物番号	グロウフ	遺物・発出 (遺物種別)	種 別	形数分類	直径 (mm)			高さ (mm)	口径 (mm)	備 考 (X/T)	調 査 等	文 様 ・ 輪 集	胎土色調	形式・式名	発掘調査 時期	図版
					口径	底径	底径									
1002	DB14	C07(SK)	流尻(陶器) 小瓶	—	0.11	—	—	—	1	—	内外面回転十字, 胴部から底部外部回転十字	N7/B0黒	流尻9-10号	100	63	
1006	DB14	C07(SK)	流尻(陶器) 小瓶	—	—	2.4	—	—	12	—	内外面回転十字, 胴部から底部外部回転十字, 回転赤銅装	文様: 7.5Y7/1R0 輪集: 2.5Y7/2R0	流尻9-11号	100	63	
1007	DB14	C07(SK)	流尻(陶器) 小瓶	—	(7.0)	—	—	—	2.5	—	内外面回転十字, 胴部外部回転十字	文様: 2.5Y7/1R0 輪集: 2.5Y7/2R0	流尻9-9号	100	63	
1008	DB14	C08(SK)	流尻(陶器) 鉄線守火鉢	—	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字	胴部外面: 白磁(2色)輪集: 鉄線赤	流尻9-9号	260	39	
1009	DB14	C08(SK)	流尻(陶器) 鉄線守火鉢	—	—	12.1	—	—	12	—	内外面回転十字, 胴部から底部外部回転十字	胴部外面: 2種類の白磁による産物文様: 鉄線赤・鉄線赤	2.5Y7/2R0	流尻9-9号	260	39
1040	DB14	C09(SK)	流尻(陶器) 磁鉢	—	—	11.0	—	—	5	—	内外面回転十字, 回転赤銅装	文様: 7.5Y7/1R0 輪集: 10Y/R3/1R0	10Y/R3/1R0 →黒	流尻7-7号	260	63
1042	DB43	C11(SK)	流尻(陶器) 打明燈(漆器)	—	(6.0)	2.5	1.3	0.2	12	—	内外面回転十字, 胴部から底部外部回転十字	文様: 2.5Y7/1R0 輪集: 1.5Y7/1R0	2.5Y7/1R0	流尻小瓶9	101	63
1044	DA14	C10(SK)	流尻(陶器) 打明燈(漆器)	—	7.4	3.0	1.6	0.2	12	—	内外面回転十字, 胴部から底部外部回転十字	文様: 5Y7/R1/1R0 輪集: 2.5Y7/R1/1R0	2.5Y7/R1/1R0	流尻小瓶9	101	63
1045	DA14	C10(SK)	流尻(陶器) 打明燈(漆器)	—	7.6	2.4	1.5	0.2	12	—	内外面回転十字, 胴部から底部外部回転十字	文様: 5Y7/R1/1R0 輪集: 2.5Y7/R1/1R0	5Y7/R1	流尻小瓶9	101	63
1046	DA14	C10(SK)	流尻(陶器) 打明燈	—	11.7	(6.4)	3.0	5.1	5.7	—	内外面回転十字, 胴部から底部外部回転十字, 軀付合	文様: 内面: 鐵線赤 外面: 足元・中央・口縁: 足元・中央・口縁: 鉄線赤 輪集: 2.5Y7/2R0	2.5Y7/1R0	流尻小瓶	261	63
1049	DB15	D06(SK)	古瀬戸 古砂 打明燈	影	9.0	5.0	3.1	2	3.5	—	内外面回転十字, 胴部赤銅装(3見合)	文様: 5Y7/R1/1R0 輪集: 2.5Y7/2R0	2.5Y7/R1/R0	古瀬戸打明燈	261	20
1050	DB15	D06E-2(SK)	古瀬戸 磁鉢	3型	—	—	—	—	1.0	—	内外面回転十字	文様: 2.5Y7/2R0 輪集: 2.5Y7/2R0	2.5Y7/2R0	古瀬戸打明燈	261	63
1051	DB15	D06E(SK)	古瀬戸 磁鉢	—	—	—	—	—	2	—	内外面回転十字, 胴部赤銅装	文様: 7.5Y7/R1/1R0 輪集: 2.5Y7/2R0	2.5Y7/2R0	古瀬戸打明燈	261	63
1052	DB15	D06E(SK)	古瀬戸 平碗	—	—	—	—	—	5.4	—	内外面回転十字, 胴部から底部外部にかけて回転十字, 産物合	文様: 2Y7/R1/1R0 輪集: 5Y7/R1/1R0	5Y7/R1/1R0	古瀬戸打明燈	261	63
1053	DB15	D06E(SK)	古瀬戸 斜目大皿	—	—	—	—	—	33.0	—	内外面回転十字, 胴部から底部外部にかけて回転十字	—	2.5Y7/2R0	古瀬戸打明燈	261	63
1054	PC20	B0(SK)	白瓷茶碗 碗	—	11.8	5.2	3.4	1	3.5	—	内外面回転十字, 回転赤銅装	—	10Y/R3/1R0	北越前白瓷式(白土)	261	63
1055	PD19	B30(SK)	白瓷茶碗 碗	—	9.0	4.3	2.1	0.2	12	—	内外面回転十字, 胴部内面赤銅装十字, 胴部赤銅装, 転十字	文様: 外面: 産物合 輪集: 2.5Y7/1R0	2.5Y7/1R0	北越前白瓷式(白土)	261	36
1056	FA19	B0(SK)	古瀬戸 古鉢	転赤銅	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字	文様: 5Y7/R1/1R0 輪集: 2.5Y7/2R0	10Y/R3/1R0	古瀬戸磁器	261	63
1057	FA19	B0(SK)	古瀬戸 古鉢	転赤銅	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字	文様: 5Y7/R1/1R0 輪集: 2.5Y7/2R0	10Y/R3/1R0	古瀬戸磁器	261	63
1058	FA19	B0(SK)	古瀬戸 古鉢	—	12.0	(4.2)	4.5	2	2	—	内外面回転十字, 軀付合(轉赤銅), 回転赤銅装	—	10Y/R3/1R0	北越前白瓷式(白土)	261	63
1059	FA19	B0(SK)	半陶磁器 白磁器	扁平型 白磁器	—	—	—	—	1	—	—	白磁: 7.5Y7/1R0	5Y7/1R0	—	261	41
1060	ES19	E10(SK)	古瀬戸 煎茶	—	14.7	—	—	—	1.8	—	内外面回転十字	文様: 5Y7/2R0	10Y/R3/1R0	古瀬戸中1	261	63
1061	FB21	F10(SK)	磁鉢	—	—	—	—	—	8.4	—	内外面回転十字	—	2.5Y7/1R0	産物合白瓷式	261	63
1062	FB21	F10(SK)	白瓷茶碗 碗	—	—	—	—	—	10.0	—	内外面回転十字, 軀付合(轉赤銅), 回転赤銅装	—	2.5Y7/2R0	産物合白瓷式	261	63
1063	FB21	F10(SK)	白瓷茶碗 碗	—	8.4	3.9	2.1	0.2	12	—	内外面回転十字, 胴部赤銅装十字	—	2.5Y7/1R0	産物合白瓷式	261	63
1064	FB21	F10(SK)	白瓷茶碗 碗	—	—	—	—	—	8.1	—	内外面回転十字, 軀付合(轉赤銅), 回転赤銅装	—	10Y/R3/1R0 →黒	産物合白瓷式	261	64
1065	FB21	F10(SK)	土師器(中須) 打明燈	—	22.0	—	—	—	2	—	口縁回転十字, 胴部内面赤銅装の裏十字, 胴部内面赤銅装の腹十字	10Y/R3/1R0 →黒 →黒(5Y7/1R0)	—	261	64	
1066	KL17	K07(SK)	土師器(中須) 打明燈	—	4.0	—	—	—	12	—	内外面回転十字, 回転赤銅装	—	10Y/R3/2R0	—	262	64
1067	KL17	K20(SK)	白瓷茶碗 碗	—	(7.2)	(3.0)	2.2	3	5.8	—	内外面回転十字, 回転赤銅装	—	2.5Y7/1R0	北越前白瓷式(黒土)	262	64
1068	KL17	K20(SK)	白瓷茶碗 碗	—	13.2	(7.0)	3.9	1.2	1.8	—	内外面回転十字, 軀付合(轉赤銅), 回転赤銅装	—	10Y/R3/1R0	北越前白瓷式(黒土)	262	64
1069	KL17	K20(SK)	白瓷茶碗 碗	—	(6.0)	(5.2)	2.2	2.8	4	—	内外面回転十字, 胴部赤銅装	—	10Y/R3/1R0	産物合白瓷式	262	64
1070	KL17	K20(SK)	白瓷茶碗 碗	—	—	—	—	—	5	—	内外面回転十字, 軀付合(轉赤銅), 回転赤銅装	—	2.5Y7/1R0	産物合白瓷式	262	64
1072	KL17	K760(SK)・K762(SK)	白瓷茶碗 碗	—	13.4	6.7	3.3	10	0.5	—	内外面回転十字, 胴部内面赤銅装十字, 胴部内面赤銅装, 回転赤銅装, 軀付合	—	10Y/R3/1R0	産物合白瓷式	262	65
1073	KL17	K760(SK)	白瓷茶碗 碗	—	16.3	7.4	6.0	6.4	6.5	—	内外面回転十字, 軀付合(轉赤銅), 回転赤銅装	—	2.5Y7/1R0	北越前白瓷式(黒土)	262	65
1074	KL17	K760(SK)	白瓷茶碗 碗	—	(8.0)	4.0	2.2	1.7	12	—	内外面回転十字, 胴部赤銅装	—	2.5Y7/2R0	産物合白瓷式	262	64
1075	KL17	K760(SK)	白瓷茶碗 碗	—	(6.0)	(4.0)	2.2	2.0	3	—	内外面回転十字, 胴部赤銅装	—	10Y/R3/1R0	産物合白瓷式	262	64
1076	KL17	K760(SK)	白瓷茶碗 碗	—	—	—	—	—	7.5	—	内外面回転十字, 軀付合(轉赤銅), 回転赤銅装十字	—	2.5Y7/2R0	産物合白瓷式	262	64

表101 土器観察表20

遺物番号	子・F	遺物・部位 (産地/種類)	種 別	形数/分組	法量 (cm)		残存(文/口)		調 整 等	文様・施装	胎土色調	形式・款式(文/土層)	掲載図録 種別/頁数	
					口径	底径	器高	口縁						底面
1078	G12	F264(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	12.8	15.0	5.6	1	1.3	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	2.5V7/3R白	北陸赤白形式(土層)	262 44	
1079	G12	F264(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	15.2	6.9	4.9	9	12	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部, 胎十字	N7/6R白	北陸赤白形式(土層) 浅盤型下一層部	262 45	
1079	G12	F264(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	15.2	6.6	5.2	12	12	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部, 胎十字	2.5V7/3R白	北陸赤白形式(土層)	262 45	
1081	G12	F264(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	8.9	4.9	2.2	14	12	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部, 胎十字	5YR7/3R白	北陸赤白形式(土層)	262 45	
1082	G28	F282(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	14.4	4.8	5.8	12	12	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	2.5V8/2R白	北陸赤白形式(土層)	263 45	
1083	G28	F282(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	—	—	—	—	2	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	2.5V7/3R白	北陸赤白形式(土層)	263 44	
1084	G28	F282(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	—	—	—	—	1.3	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部, 胎十字	5YR7/3R白	11c, 東海(浅盤) 浅盤型(土層)	263 44	
1085	G26	F190(SK)	中国陶磁器 青白磁碗	—	—	—	—	—	4	内外面同転十字	青白磁(2.5GV7/1R白)	N6/0R白	263 40	
1086	G26	F222(SK)	土器部(中策) 小瓶	コナロ土器部	11.0	6.6	3.6	0.3	2.8	内外面同転十字, 同転本脚部	7.5YR7/2R黄	—	263 44	
1089	G29	F199(SK)	土器部(中策) 小瓶	コナロ土器部	—	—	—	—	3	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	5YR6/6R	—	263 44	
1090	G29	F199(SK)	陶磁器 緑磁C類	—	—	—	—	—	2.8	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部)	2.5Y5/2R黄	知内黄, 東海 浅盤型	263 44	
1091	G29	F199(SK)	青磁中策 中茶碗部	—	—	—	—	—	—	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部)	2.5V7/3R白	—	263 44	
1092	G29	F196(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	—	—	—	—	4.4	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	2.5V8/3R黄	北陸赤白形式(土層)	263 44	
1093	G27	F136(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	—	—	—	—	2.1	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	6黄内 / 黄	北陸赤白形式(土層)	263 28	
1094	G27	F136(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	—	—	—	—	4	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	5Y7/3R白	北陸赤白形式(土層)	263 44	
1095	G27	F136(SK)	陶磁器 黄	肥子作	—	—	—	—	—	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	2.5V9/2R白	知内黄, 東海 浅盤型	263 44	
1096	G27	F203(SK)	中国陶磁器 白磁碗	大宰府青白磁 青磁C類	—	—	—	—	1	—	白磁(5Y7/3R黄)	5Y7/3R白	263 41	
1097	G27 / G29	F222(SK), F144(SK)	陶磁器 緑磁C類	—	—	—	—	—	2.7	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部)	2.5V8/2R白	知内黄, 東海 浅盤型	263 44	
1098	G26	F230(SK)	中国陶磁器 白磁碗	—	—	—	—	—	4.5	5.6	白磁(5Y7/2R白)	2.5V8/3R白	263 41	
1100	G32	F240(SK), F254(SK)	土器部(中策) 餅付器	コナロ土器部	11.2	7.4	4.9	6.5	2.5	内外面同転十字	5YR7/3R白 +黄	—	263 45	
1101	G32	F242(SK)	土器部(中策) 餅付器	—	—	—	—	—	—	内外面同転十字	5YR6/3R黄	—	263 44	
1102	G32	F242(SK)	陶磁器 緑磁C類	—	—	—	—	—	—	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部)	5YR7/3R白 +黄	知内黄, 東海 浅盤型	263 44	
1103	G32	F240(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	16.9	7.9	4.7	11	12	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	5YR6/3R白	南陸赤白形式	263 45	
1104	G32	F240(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	—	—	—	—	3	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	5YR7/3R白	南陸赤白形式	263 44	
1105	G32	F240(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	—	—	—	—	—	—	黄内面 / 黄青(黄緑色) +黄	5YR7/2R白 +黄	263 26	
1106	G32	F242(SK)	中国陶磁器 青白磁餅付器	—	—	—	—	—	—	—	青白 / 青白(胎付) +土文様, 青白(土層) 7.5GV7/1R黄	2.5V8/3R白	263 40	
1107	G43	F154(SK)	土器部(中策) 餅付器	コナロ土器部	—	—	—	—	—	内外面同転十字	5YR6/3R黄	—	264 44	
1108	G43	F250(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	8.2	6.0	2.9	19.5	12	内外面同転十字, 同転本脚部	2.5Y7/3R白	南陸赤白形式	264 45	
1109	G43	F254(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	7.8	4.1	1.8	10.5	12	内外面同転十字, 同転本脚部	5Y7/3R白	南陸赤白形式	264 45	
1110	G43	F254(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	8.2	4.1	1.6	12	12	内外面同転十字, 同転本脚部	2.5Y7/3R白	南陸赤白形式	264 45	
1111	G43 / G43	F255(SK), F424(F)	白瓷茶碗部 碗	—	15.6	7.7	5.1	6.8	12	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	2.5V8/3R白	南陸赤白形式	264 45	
1112	G43	F255(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	15.2	7.5	5.3	1	4.3	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部, 胎十字	5YR7/3R白	南陸赤白形式	264 44	
1113	G43	F250(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	15.4	7.8	5.1	5	7.5	内外面同転十字, 黄内面同転本脚十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	2.5Y7/3R白	南陸赤白形式	264 45	
1114	G43	F250(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	13.4	7.4	3.1	2.8	5.7	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	2.5V8/2R白	南陸赤白形式	264 44	
1115	G43 / G43	F250(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	15.6	8.0	5.9	7.6	11.2	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部), 同転本脚部	2.5Y7/3R白	北陸赤白形式(浅盤型)	264 45	
1116	G43	F256(SK)	白瓷茶碗部 小瓶	—	—	—	—	—	6.6	内外面同転十字, 胎付高台(樽形部)	2.5V7/3R白	南陸赤白形式	264 44	
1117	G43	F260(SK)	白瓷茶碗部 碗	—	—	—	—	—	5.5	内外面同転十字, 同転本脚部, 胎十字	黄内 / 黄青(土層) +土文様	2.5V7/2R黄	南陸赤白形式(土層)	264 28

表102 土器観察表(2)

遺物番号	アールP	遺器・部位 [通称・形状]	種 別	形態分類	口径 (cm)		残存 (1/2)		出 土 層 号	文 様・刺 意	胎土色澤	形式・様式(古 代分類)	調査 年度	
					口徑	底径	口縁	底縁						
1121	GP29	F296[SJK]	須恵器 須恵丸瓶	—	—	0.5	—	1.2	内外面回転十字	—	2.3V7/28灰	穴縁平・美濃須 瓶	204 64	
1122	GP29	F296[SJK]	白瓷系陶器 碗	—	11.3	0.0	3.1	4.3	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 回転水笠紋	刺意(一)	2.3V7/18白	美濃高白式(式 II-1)類	204 65	
1123	GO07	F303[SJK]	白瓷系陶器 碗	—	13.2	0.0	3.2	12	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 回転水笠紋	—	2.3V7/28灰	美濃高白式	204 65	
1125	GE07	F303[SJK]	土器器(中形) 須恵丸瓶	ロゾロ土器類	—	0.0	—	3.3	内外面回転十字, 回転水笠紋	—	2.3V8/6黄	—	204 65	
1128	GP27	F303[SJK]	須恵器 平飯鉢	—	—	—	—	—	内外面回転十字	—	10YR7/25白 +黄	—	204 64	
1127	GP27	F303[SJK]	白瓷系陶器 器	—	7.0	0.3	2.0	4.5	5.8	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋)	—	2.3V8/18白	美濃高白式	204 64
1129	GJ22- GJ36	F320[SJK]	須恵器 鉢身磁器	—	—	0.0	—	5.2	内外面回転十字, 回転ヘラ 刺意	—	2.3V8/24灰	穴縁平・美濃須 瓶	204 64	
1129	GJ25- GJ28	F320[SJK]	白瓷系陶器 碗	—	11.2	3.3	3.7	2	12	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 胎行高白(横線紋), 回転水笠紋	胎行内 刺意「五」	10YR8/18白	美濃高白式(中 形)	204 66
1130	GA22	F303[SJK]	白瓷系陶器 碗	—	11.2	3.1	3.6	1	12	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 胎行高白(横線紋), 回転水笠紋, 刺意	—	2.3V7/28灰	美濃高白式(中 形)	204 66
1131	GA22	F303[SJK]	白瓷系陶器 碗	—	12.0	0.0	3.3	4.8	3.1	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 胎行高白(横線紋), 回転水笠紋	—	2.3V8/18白	美濃高白式(中 形)	204 64
1132	GA21	F306[SJK]	中国陶磁器 白磁碗	大形分型白 磁器片類	—	—	—	1	—	—	白磁・1V7/18白	—	204 41	
1133	FP29	F303[SJK]	須恵器 鉢蓋(丸)	—	12.0	—	2.3	5.5	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 胎行高白(横線紋)	—	2.3V6/18黄	穴縁平・刺意, 美濃須瓶	204 66	
1134	FO04	F303[SJK]	中国陶磁器 青磁碗	上部分型白 磁器片類	—	—	—	—	—	—	外周面回転十字以上 胎行高白(横線紋), 胎 行高白(横線紋), 胎行高 白(横線紋), 胎行高白(横 線紋), 胎行高白(横線紋)	2.3V8/18白	—	204 42
1135	FP24	F77[SJK]	白瓷系陶器 碗	—	—	4.0	—	2	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 胎行高白(横線紋), 回転水笠紋, 刺意	胎行内 刺意「三」 記号	2.3V7/18白	美濃高白式 (丸瓶)	204 70	
1136	PQ04	P723[SJK]	土器器(古)小 小鉢	—	—	0.0	—	2.4	内外面回転十字, 胎行高白, 胎 行高白	—	10YR6/30白 +黄	白瓷土(14世紀) 美濃高白(古)	205 04	
1137	PQ06	P726[SJK]	土器器(中形) 小鉢	ロゾロ土器類	—	3.0	—	—	12	内外面回転十字, 胎行高白	—	10YR7/25白 +黄	—	205 04
1138	PG21	F1113[SJK]	白瓷系陶器 碗	—	—	7.0	—	2.3	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 胎行高白(横線紋), 回転水笠紋	—	10YR8/18白	美濃高白式(古 型)類(平・美濃)	205 04	
1139	PG21	F1113[SJK]	白瓷系陶器 碗	—	14.0	3.1	3.3	7.2	12	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 胎行高白(横線紋), 回転水笠紋, 刺意	—	2.3V8/28白	美濃高白式(中 形)	205 06
1140	GK26	F1413[SJK]	白瓷系陶器 小碗	—	—	4.0	—	—	12	内外面回転十字, 胎行高白, 胎 行高白	—	2.3V8/28白	美濃高白式	205 04
1141	GK26	F1417[SJK]	須恵器 鉢蓋(丸)	—	—	—	—	—	—	—	10YR7/18白	穴縁平・美濃須 瓶	205 04	
1142	GK26- 26	F1417[SJK], F1419 [SJK]	中国陶磁器 白磁碗	—	—	—	—	—	—	—	白磁・5YR4/28白 +黄	5YR/18白	—	205 41
1143	H010- H010	G010-2[SJK], G091	古瀬戸 磁器	3類	—	—	—	0.2	内外面回転十字	—	刺意・5YR5/30白 +黄	2.3V8/28白	古瀬戸(古)	205 04
1144	H010- H010- H010- H010	G010(SJK), S4L(刺 意), 人(刺意), G(金象 刺意)	古瀬戸 磁器	刺意	—	—	—	0	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋)	刺意・5YR4/30白 +黄	10YR7/30白 +黄	古瀬戸(刺意)	205 04	
1145	H010	G46[SJK]	白瓷系陶器 碗	—	17.0	0.0	2.3	1	5.4	内周面上部以上胎行高白, 外 周面回転十字, 胎行高白	—	2.3V7/18白	美濃高白式 (古)	205 04
1146	H07L	G90[SJK]	白瓷系陶器 器	—	16.2	0.2	—	2.3	3.3	内外面回転十字, 胎行高白	—	2.3V7/18白	美濃高白式(古 型)	205 04
1147	H07L	G146[SJK]	白瓷系陶器 碗	—	—	2.5	—	—	12	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 胎行高白(横線紋)	—	10YR7/18白	美濃高白式	205 04
1148	H07L	G46[SJK]	大形 磁器	SA類	—	—	—	0.2	内外面回転十字	刺意・10R4/18刺 意	2.3V8/28灰	大形	205 04	
1149	H07L	G200[SJK]	須恵器 鉢	—	—	—	—	—	—	—	2.3V7/18白	穴縁平・美濃須 瓶	205 04	
1150	H04	G202[SJK]	須恵器 器	—	27.2	—	—	—	1.3	内外面回転十字	—	5Y7/18白	穴縁平・美濃須 瓶, 美濃須瓶, 口 縁内周面(式)刺 意(刺意), 美濃 高白(古)	205 04
1151	H07L	G42[SJK]	須恵器 鉢(丸)	—	17.3	—	—	0.3	内外面回転十字	—	5Y7/18白	穴縁平・美濃須 瓶	205 04	
1152	H09	G146[SJK], G199 [P]	白瓷系陶器 碗	—	11.3	0.4	3.8	7.8	12	内外面回転十字, 胎行高白(横 線紋), 胎行高白(横線紋)	—	2.3V7/18白	美濃高白式(美 濃高白)	205 06

表103 土器観察表20

遺物番号	グループ	遺物・部位 (遺物種別)	種 別	形態分類	口径 (cm)		残存 (X/2)		調 査 等	文 庫 ・ 備 考	出土位置	形式・様式など	発掘時期		
					口径	底径	口縁	底縁					種別	時期	
1132	H306	G403(SK)	中国陶磁器 青磁碗	土師 分製青 磁	35.6	—	—	1.2	—	外面：古墳期等に2 古墳期の継ぎ合瓦 片等。2.5Y7/1R1オ ー	2.5Y7/1R1白	—	265	42	
1134	H306	G74(SK)	古瀬戸 小鉢	—	17.6	3.3	3.7	12	内外面回転十字、回転木彫刻	底縁：2.5Y6/3オ ー	10YR7/2R1黄 褐色	古瀬戸後作古 鉢	263	29	
1135	H306	G74(SK), G10合 製	古瀬戸 鉢	—	—	12.0	—	2.8	内外面回転十字、裏面外面 の一部に上よる回転十字、同 転木彫刻	底縁：2.5Y6/3オ ー	2.5Y6/2R1黄 褐色	古瀬戸後作古 鉢	265	84	
1137	G206	H314(SK)	古瀬戸 煎茶中皿	—	—	—	—	9.8	内外面回転十字	底縁：2.5Y6/2R1 黄褐色	10YR7/2R1 黄褐色	古瀬戸中1	254	64	
1139	G210	H306(SK)	白瓷茶碗蓋 皿	—	8.8	4.7	1.4	7	12	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	2.5Y7/2R1黄 褐色	北陸新形式以 降	255	86	
1146	G215	H306(SK)	白瓷茶碗蓋 皿	—	17.6	14.0	1.2	4	5	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	5Y6/1R1	北陸新形式以 降	253	64	
1147	G205 G215	H306(SK), H320 (SK), H304(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	31.7	5.8	5.8	2.8	12	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	2.5Y6/1R1白	北陸新形式以 降	253	86	
1182	G215	H306(SK)	中国陶磁器 青白磁平鉢合子 盆	—	56.0	—	—	1.2	—	—	2.5Y6/2R1 黄褐色	—	253	88	
1183	G215	H306(SK)	中国陶磁器 白磁碗	大分県分製白 磁碗口蓋	—	—	—	1	—	—	10R1/2Y7/2R1 黄褐色	—	263	41	
1184	G205 G215	H322(SK)	白瓷茶碗蓋 皿	—	12.0	4.0	1.0	2	9	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	2.5Y7/1R1白	北陸新形式以 降	263	64	
1185	G205 G215	H322(SK), H304(SK) []	白瓷茶碗蓋 碗	—	—	4.8	—	12	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	2.5Y7/1R1白	北陸新形式以 降	263	64		
1196	G215 G205	H323(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	31.8	4.0	4.3	5.9	6.7	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	2.5Y6/1R1白	北陸新形式以 降	254	66	
1197	G215 G205	H323(SK), H304(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	31.5	2.8	4.8	2	12	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	2.5Y7/1R1白	北陸新形式以 降	254	64	
1198	G205 G215	H323(SK)	古瀬戸 煎茶碗	—	28.4	—	—	1	1	内外面回転十字、裏面中央 部外転木彫刻	底縁：2.5Y6/2R1 黄褐色	10YR7/2R1 黄褐色	古瀬戸中皿	253	67
1199	G205 G215	H323(SK)	煎茶 碗	—	—	—	—	6.7	内外面回転十字	10YR7/2R1 黄褐色	10YR7/2R1 黄褐色	煎茶碗形式	265	67	
1170	G215	H304(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	35.8	14.0	4.9	0.4	3	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	2.5Y7/1R1白	北陸新形式以 降	266	61	
1171	G215	H304(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	33.3	—	—	2.2	1	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	2.5Y7/1R1白	北陸新形式以 降	266	61	
1172	G105	H400(SK)	白瓷茶碗蓋 皿	—	18.0	13.2	1.4	4.6	1.8	内外面回転十字、同転木彫刻	10YR7/1R1白	北陸新形式以 降	256	62	
1173	G205	H400(SK)	古瀬戸 飯子鉢	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字	底縁：5Y6/3オ ー	2.5Y7/2R1黄 褐色	古瀬戸飯器	256	67
1174	G206 G215	H401(SK)	土師製(中形) 煎茶 碗	土師	—	—	—	—	—	同転十字	10YR6/2R1 黄 褐色・10YR7/2 黄褐色	—	254	67	
1175	G206 G215	H401(SK)	白瓷茶碗蓋 皿	—	16.4	4.8	1.1	2.8	12	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	5Y7/1R1白	北陸新形式以 降	254	67	
1176	G215	H402(SK)	古瀬戸 煮付鉢	—	25.8	—	—	1.0	1	内外面回転十字、外面工具(横 筋)に上よる回転十字	10YR6/2R1 黄褐色	古瀬戸煮付 鉢形式	256	67	
1177	G202 GK103	H41(SK)	古瀬戸 飯鉢(小)	—	—	6.3	—	6.2	6.2	内外面回転十字、同転木彫刻	底縁：5YR3/2R1 黄褐色	古瀬戸後作古 鉢	264	61	
1178	G210	H41(SK)	古瀬戸 煮付鉢	—	31.2	—	—	6.2	6.2	内外面回転十字	2.5Y6/2R1黄 褐色	古瀬戸煮付古 鉢	264	62	
1129	G209	H52(SK)	白瓷 碗	—	—	7.8	—	1	1	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	底縁：5Y6/3オ ー	5Y7/1R1白	11c・美濃(古瀬 戸)産品	254	62
1180	G209	H51(SK)	古瀬戸 煎茶	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字	底縁：5Y6/3オ ー	2.5Y7/2R1黄 褐色	古瀬戸飯器	254	67
1181	G214	H402(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	34.6	5.6	5.0	3.5	12	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	5Y7/1R1白	北陸新形式以 降	261	66	
1182	GK100 GK100	H42(SK)	白瓷茶碗蓋 玉鉢	—	—	—	—	0.3	0.3	内外面回転十字	2.5Y6/2R1 黄褐色	北陸新 形式	266	67	
1183	GK100 GK100	H42(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	33.1	4.9	5.5	1.5	12	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	10YR7/2R1 黄褐色	北陸新形式以 降	256	86	
1184	GK100 GK100	H42(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	33.8	5.3	5.8	0	12	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	5Y7/1R1白	北陸新形式以 降	256	66	
1185	G210	H304(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	—	7.8	—	12	12	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	底白内：黄褐色(2) ある1は記号	2.5Y7/2R1黄 褐色	煎茶碗形式	254	78
1186	G210	H402(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	31.8	12.6	3.1	1.6	5	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	2.5Y7/1R1白	北 陸 新 形 式 (大瀬戸)	254	62	
1188	GK115	H304(SK)	白瓷茶碗蓋 碗	—	33.8	5.1	5.5	12	12	内外面回転十字、裏面内面 転十字、同転木彫刻	2.5Y7/1R1白	北陸新形式以 降	266	86	

表104 土器観察表(2)

遺物番号	アワード	遺物・部位 [装飾様式]	種 別	形制分類	口径 (mm)		腹径 (mm)		高 度 (mm)	容 積 (L)	備 考 等	文 様・装 飾	胎土色調	形式・様式(土器)	発掘調査 調査区画	
					口縁	底縁	口縁	底縁								
1189	GH115	T960(SK)	白瓷系陶器 小碗	—	11.8	4.3	6.4	19.8	—	—	内外面回転十字, 底部内面線 走器十字, 胎土高台(腰筒状), 同転(未確認)	2.5Y7/2黄赤	北部赤白型式(I) 土器	264	66	
1190	GH115	T960(SK)	白瓷系陶器 碗	—	—	9.1	—	—	3	内外面回転十字, 胎土高台(腰筒状), 同転(未確認)	2.5Y7/1白	北部赤白型式(I) 土器	264	66		
1191	GH115	T960(SK)	白瓷系陶器 皿	—	8.4	3.1	1.6	11.3	—	—	内外面回転十字, 底部内面線 走器十字, 同転(未確認)	2.5Y7/2黄赤	北部赤白型式(I) 土器	264	66	
1192	GH115	T960(SK)	白瓷系陶器 皿	—	8.7	4.5	1.8	12	—	—	内外面回転十字, 底部内面線 走器十字, 同転(未確認)	2.5Y7/1白	北部赤白型式(I) 土器	264	66	
1193	GH115	T960(SK)	白瓷系陶器 皿	—	8.3	4.8	1.4	12	—	—	内外面回転十字, 底部内面線 走器十字, 同転(未確認)	2.5Y7/1白	北部赤白型式(I) 土器	264	66	
1194	GH115	T960(SK)	白瓷系陶器 皿	—	7.8	4.5	1.9	12	—	—	内外面回転十字, 底部内面線 走器十字, 同転(未確認)	2.5Y7/1白	北部赤白型式(I) 土器	264	66	
1195	GH115	T960(SK)	白瓷系陶器 皿	—	8.3	4.3	2.1	12	—	—	内外面回転十字, 底部内面線 走器十字, 同転(未確認)	2.5Y7/2黄赤	北部赤白型式(I) 土器	264	66	
1196	GH115	T960(SK)	青磁 壺	—	—	—	—	—	—	—	内面回転十字	10YR6/1黄灰	壺形分型式	264	67	
1197	HC61	SL(4)焼酎	青磁 壺	—	12.0	—	—	—	—	—	内面回転十字	7.5YR4/2黄赤 1-1	壺形分型式	264	67	
1198	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 壺	有耳	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字	胎土: 7.5YR4/2黄赤 1-1	10YR6/1黄灰 赤系+灰青磁 黄赤斑	壺形分型式	264	67
1199	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 壺	有耳	—	11.2	6.6	2.5	4	8	内外面回転十字, 胴部から底部 外周にかけて回転線あり, 胎土 高台	灰石粉: 2.5Y7/1白 胎土: 7.5YR2/1赤	10YR6/2黄赤 赤	大形片持子	264	70
1200	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁(脚部) 取皿	—	—	6.0	—	—	—	—	内外面回転十字, 外周回転線あり, 胎土高台	見込: 黄赤土, 胎土高台 胎土: 7.5Y7/1白 胎土: 7.5YR2/1赤	10YR7/2土 +黄赤	湯酌小鉢	264	67
1201	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 大目取皿	—	11.2	—	—	—	—	—	内外面回転十字, 胴部から底部 外周にかけて回転線あり	黄 赤 土 胎 土: 7.5YR4/2黄赤 胎土: 7.5YR4/2黄赤	10YR6/3黄赤	古瀬川片持	267	62
1202	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 皿	—	13.4	—	—	—	—	—	内外面回転十字	胎 土: 7.5YR7/2黄赤 胎土	10YR7/2土 +黄赤	古瀬川片持	267	62
1203	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 鉢	有耳	—	8.0	—	—	—	—	内外面回転十字	胎 土: 10YR6/2黄赤 胎土	2.5Y6/1黄赤	古瀬川片持	267	62
1204	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 壺	有耳	—	17.0	—	—	—	—	内外面回転十字	胎 土: 7.5Y7/2黄赤 胎土	10YR7/2土 +黄赤	古瀬川片持	267	62
1205	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	11.0	—	—	—	—	内外面回転十字, 外周回転線あり, 胎土高台, 同転(未確認)	胎 土: 5Y7/2黄赤 胎土: 2.5Y7/2黄赤 胎土	2.5Y7/2黄赤	古瀬川片持 IV 土器	267	61
1206	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	13.5	—	—	—	—	内外面回転十字, 胎土高台 胎土	胎 土: 5YR6/2黄赤 胎土	10YR7/1白	古瀬川片持 IV 土器	267	62
1207	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	11.2	10.0	—	—	—	内外面回転十字	胎 土: 5YR6/2黄赤 胎土	10YR7/2土 +黄赤	古瀬川片持 IV 土器	267	62
1208	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	14.5	—	—	—	—	内外面回転十字, 同転(未確認)	胎 土: 5Y7/2黄赤 胎土	10YR6/2黄赤	古瀬川片持	267	62
1209	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	12.5	10.0	—	—	—	内外面回転十字, 胴部から底部 外周にかけて回転線あり	胎 土: 5YR6/2黄赤 胎土	10YR7/2土 +黄赤	古瀬川片持	267	62
1210	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	12.5	10.0	—	—	—	内外面回転十字, 胴部から底部 外周にかけて回転線あり	胎 土: 5YR6/2黄赤 胎土	10YR7/2土 +黄赤	古瀬川片持	267	62
1211	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	12.5	10.0	—	—	—	内外面回転十字, 胴部から底部 外周にかけて回転線あり	胎 土: 5YR6/2黄赤 胎土	10YR7/2土 +黄赤	古瀬川片持	267	62
1212	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	14.8	—	—	—	—	内外面回転十字, 外周回転線あり, 胎土高台, 同転(未確認)	胎 土: 5YR6/2黄赤 胎土	2.5Y7/1黄赤	壺形赤白系白磁器 分型式併行	267	62
1213	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字	胎 土: 2.5Y7/2黄赤 胎土	2.5Y7/2黄赤	壺形赤白系白磁器 分型式併行	267	62
1214	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字, 胎土高台(腰筒状), 同転(未確認)	胎 土: 2.5Y7/1白 胎土	2.5Y7/2黄赤	壺形赤白型式	267	62
1215	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	12.2	14.0	—	—	—	内外面回転十字, 底部内面線 走器十字, 同転(未確認)	胎 土: 2.5Y7/1白 胎土	2.5Y7/1白	北部赤白型式 III 土器	267	66
1216	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	11.1	—	—	—	—	内外面回転十字, 胎土高台(腰筒状), 同転(未確認)	胎 土: 10YR7/1黄赤 胎土	壺形赤白型式	267	62	
1217	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	16.2	14.0	—	—	—	内外面回転十字, 胎土高台(腰筒状), 同転(未確認)	胎 土: 2.5Y7/1白 胎土	2.5Y7/1白	北部赤白型式 III 土器	267	66
1218	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	11.1	—	—	—	—	内外面回転十字, 胎土高台(腰筒状), 同転(未確認)	胎 土: 10YR7/1黄赤 胎土	壺形赤白型式	267	62	
1219	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	16.7	—	—	—	—	内外面回転十字, 胎土高台(腰筒状), 同転(未確認)	胎 土: 2.5Y7/1白 胎土	2.5Y7/1白	北部赤白型式(次 以上型)	267	67
1220	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	14.0	—	—	—	—	内外面回転十字, 胎土高台(腰筒状), 同転(未確認)	胎 土: 2.5YR6/1黄赤 胎土	2.5YR6/1黄赤	壺形赤白型式	267	62
1221	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	17.3	—	—	—	—	内外面回転十字, 胎土高台, 同 転(未確認)	胎 土: 2.5Y7/2黄赤 胎土	2.5Y7/2黄赤	壺形赤白型式	267	62
1222	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	—	—	—	—	—	内外面回転十字, 胎土高台(腰筒状), 同転(未確認)	胎 土: 10YR7/2土 +黄赤 胎土	壺形系	267	62	
1223	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	12.0	2.8	2.4	5	8	内外面回転十字, 胎土高台(腰筒状), 同転(未確認)	胎 土: 10YR6/1黄赤 胎土	10YR6/1黄赤	壺形赤白型式 (未確認)	267	61
1224	HC61	SL(4)焼酎(右入り)	青磁 有耳壺	—	—	11.4	—	—	—	—	内外面回転十字	胎 土: 5YR6/1黄赤 胎土	2.5YR6/1黄赤	古瀬川片持	267	62

表106 土器観察表(1)

調査番号	アフリッド	産地・部局 (産出場所)	種 類	形制分類	容量 (cc)	横径 (X) (Y)	高さ (Z)	備 考	調査等	文様・施文	出土位置	形式・様式等	所属施設 [調査] [調査]	
1250	H101+ H106	G13型[SX], G16型[SX]	大甕 甕鉢	6A型	28.5	—	1	—	内外面回転十字	横線: 7.3R2/赤系	H101R/4段 H106	大甕1	200 68	
1251	H101	G13型[SX], G16型[SX]	古瀬戸・大甕 甕鉢	—	—	8.9	—	8	内外面回転十字, 回転赤系	横線: 2.5Y4/白系	H101R/1段白	古瀬戸 甕鉢 大甕1	200 68	
1252	H03	G13型[SX]	大甕 甕鉢	6A型	—	—	0.5	—	内外面回転十字	横線: 2.5Y4/白系 2.5Y8/4段	大甕1	200 68		
1253	H03	G13型[SX]	古瀬戸 甕鉢	3型	—	—	—	—	内外面回転十字	横線: 2.5Y8/4段 赤系	H101R/4段 赤系	古瀬戸甕鉢	200 68	
1254	H101+ H03	G13型[SX]	大甕 甕鉢	—	—	—	—	—	内外面回転十字	—	大甕4段半	200 68		
1260	H101+ H03	G13型[SX], G16型[SX]	通形(陶器) 甕鉢	—	—	—	—	—	内外面回転十字	横線: 2.5Y8/3段 赤系	H101R/1段白	200 68		
1261	H101+ H06	G13型[SX]	雲母 塗布	—	20.5	—	2.8	—	内外面回転十字	—	2.5Y4/3段 +10YR6/12 赤系	甕鉢1-6段形式	200 68	
1262	H10+ H03	G13型[SX]	雲母 塗布	—	24.0	—	0.1	—	内外面回転十字	横線: 2.5Y8/3段 赤系	H101R/3段 赤系	甕鉢1-10段式	200 68	
1263	H101+ H06+ H03+ H06+ H03+ H06	G13型+S型[SX], G20型[SX], G13型[SX], G60型[P], G16型[SX] 複合形	甕鉢 塗布	—	—	20.0	—	2.0	外面回転十字	—	10YR6/1段白	—	300 68	
1264	H101	G13型[SX]	中国陶磁器 白陶質	大半が白陶質 磁器の類?	—	—	—	—	偶然出土	白線: 5Y7/1R0	5Y8/1R0	—	300 61	
1265	H103	G13型[SX]	古瀬戸 甕鉢小甕鉢	—	—	14.7	—	17	内外面回転十字, 回転赤系	横線・縦線: 5Y7/3 R0+1N1, 赤系	10YR2/2段 赤系	古瀬戸甕鉢1-10 段	300 68	
1266	H103	G13型[SX]	古瀬戸 月形甕	—	—	—	—	0.3	内外面回転十字	—	2.5Y7/3段	甕鉢赤白雲母 陶器形式群	300 68	
1267	H101+ H06	G14型・型[SX], G91(遺形 瓦蓋 陶器 片)	白土 甕鉢	—	—	—	—	—	一部内外面回転十字, 甕鉢内 面にて回転, 回転赤系	—	10YR2/1R0	赤系, 雲母陶器	300 68	
1268	H101	G16型[SX]	白土 甕鉢	—	—	8.6	—	2	内外面回転十字, 胎付高白, 回 転赤系	—	5Y8/1R0	1b, 雲母(古瀬 戸甕鉢)	300 68	
1269	H03	G16型[SX]	白土 甕	—	—	6.36	—	3.5	内外面回転十字, 胎付高白, 回 転赤系	横線: 2.5Y7/2段	H101R/1R0	1b, 雲母(古瀬 戸甕鉢)	300 68	
1270	H101	G16型[SX]	白土 甕鉢	—	17.0	1.0	2.8	0.4	内外面回転十字, 胎付高白, 回 転赤系	—	2.5Y7/1R0	胎付高白形式 (土器)	300 68	
1271	H03	G16型[SX]	白土 甕鉢	—	—	—	—	0.3	内外面回転十字, 胎付高白, 回 転赤系	—	2.5Y8/2R0	胎付高白形式 (土器)	300 68	
1272	H03	G16型[SX]	白土 甕鉢	—	—	7.2	—	4.1	内外面回転十字, 胎付高白(體 群), 回転赤系	—	2.5Y7/1R0	胎付高白形式 (土器)	300 68	
1273	H03	G16型[SX]	白土 甕鉢	—	—	6.6	—	7.5	内外面回転十字, 胎付高白, 回 転赤系	—	2.5Y7/2段	胎付高白形式	300 68	
1274	H03	G16型[SX]	白土 甕鉢	—	—	9.4	—	7	内外面回転十字, 回転赤系	—	10YR2/1R0	胎付高白形式 (土器)	300 68	
1275	H03	G16型[SX]	大甕 有明型	甕鉢タイプ	28.1	14.1	2.2	0.9	2面胎付にて高白回転十字, 外 面回転十字, 回転赤系	—	N6/9N	大甕1	270 68	
1276	H101	G16型[SX]	通形(陶器) 甕鉢	甕鉢	33.0	—	12.1	2	内外面回転十字	横線: 5Y7/2R0	2.5Y7/1R0	甕鉢1-4小甕	270 68	
1277	H101+ H03	G16型[SX], G16型[SX]	古瀬戸 甕子	—	—	—	—	—	内外面回転十字	横線: 赤系, 文, 横 線: 2.5Y8/2段 赤系	10YR2/2段 赤系	古瀬戸甕子 小甕	270 68	
1278	H101	G16型[SX]	大甕 甕鉢	10A型	—	—	—	0.6	内外面回転十字	横線: 10R2/2段 赤系	H101R/4段 赤系	大甕4段半	270 68	
1279	H03	G16型[SX]	古瀬戸 甕鉢	3型	—	—	—	0.5	内外面回転十字	横線: 3R1/1段赤系	2.5Y8/2R0	古瀬戸甕鉢	270 68	
1280	H03	G16型[SX], G16型[SX]	大甕 甕鉢	10A型	20.0	—	—	1.1	内外面回転十字	横線: 2.5Y8/1段 赤系	H101R/4段 赤系	大甕4段半	270 68	
1281	H06	G18型[SX]	雲母 塗布	—	—	—	—	—	内外面回転十字	—	10YR2/1段白	甕鉢9段式	270 68	
1282	H03	G16型[SX]	中国陶磁器 白陶質	土器(陶器)	—	—	—	1	—	横線: 2.5Y7/1段 赤系	2.5Y8/2R0 赤系	—	270 67	
1283	H101	G20型[SD]	甕鉢 胎付赤系	—	—	5.5	—	12	内外面回転十字, 回転赤系	—	2.5Y7/1R0	胎付赤系-胎 付, 雲母陶器	270 68	
1284	H101	G30型[SD]	白土 甕鉢	—	—	7.30	—	3	内外面回転十字, 胎付高白, 回 転赤系	—	5Y8/1R0	胎付高白形式	270 68	
1285	H101	G30型[SD]	白土 甕鉢	—	9.7	14.5	2.9	4.5	1.5	内面工具にて高白回転十字, 外 面回転十字, 回転赤系	—	10YR6/4段 赤系	胎付赤系11段式 (土器)	270 68
1286	H101	G30型[SD]	大甕 有明型	甕鉢タイプ	37.1	3.8	2.4	2.4	0.2	内面胎付にて高白回転十字, 外 面回転十字, 回転赤系	—	10YR6/1段白	大甕1	270 68
1287	H03	G30型[SD]	白土 甕鉢	—	31.8	14.5	2.9	2.3	4	内外面回転十字, 回転赤系	—	10YR2/1R0	胎付高白形式 (土器)	270 68
1288	H03	G30型[SD]	白土 甕鉢	—	31.8	14.5	—	1.5	4	内面工具にて高白回転十字, 外 面回転十字, 回転赤系	—	2.5Y8/2R0	胎付赤系11段式 (土器)	270 68

表109 土器観察表34

遺物番号	アソート	産地・産別 (産地別記)	種類	形状分類	質量 (g)		内外径 (mm)		調整等	文様・装束	粘土質	形式・様式など	機能別		
					口径	底径	底径	口径						底径	
1354	HC27- HC73	G石合製陶	白土系陶器 甕	—	33.6	5.3	6.0	3	12	内外面回転十字, 底面内面磨 合せ十字, 底面高低(磨削), 回転面調整, 転十字	MYR07/18白	北条赤11式(古) 274	40		
1360	HC39	G石合製陶	白土系陶器 甕	—	33.3	4.8	3.5	3.5	7	内面工口に上回転十字, 外 面回転十字, 回転面調整	2.5Y7/18白	北条赤11式(古) 274	49		
1361	HC80	G石合製陶	白土系陶器 甕	—	9.2	4.2	2.2	9	8	内面工口に上回転十字, 外 面回転十字, 回転面調整	2.5Y6/18黄	北条赤11式 (古)	274	49	
1362	HC74	G石合製陶	白土系陶器 甕	大底 灯籠形	磨削十字	30.7	4.1	2.7	10.1	12	内面磨削に上回転十字, 外 面回転十字, 回転面調整	2.5Y7/18白	大塚1	274	40
1363	HC39	G石合製陶	白土系陶器 甕	—	30.1	3.5	2.8	3	8	内面工口に上回転十字, 外 面回転十字, 回転面調整	MYR07/18黄	北条赤11式 (古)	274	49	
1364	HC27- HC71- HC23- HC19- HC71- HC71	石合製陶 1・目	白土系 大目茶碗	—	31.1	3.9	3.2	3	8	内外面回転十字, 底面中心高 度外周面調整, 開口高低(目 肌)	黄緑-黒十字, 7.5 YR6/12.5+黒 YR6/12.5+黒 YR6/12.5+黒	大塚2	274	40	
1365	HC32	G石合製陶	白土系 灰河小曲壺	—	14.8	—	—	8.5	—	内外面回転十字	灰緑-5Y6/12.5+ 十字黄	古瀬戸御用一様 IV古	274	40	
1366	HC23	G石合製陶	白土系 香合	磨削-横線	46.0	15.0	3.4	3.8	1.2	内外面回転十字	5Y6/18	大塚御宇	274	60	
1367	HC74	G石合製陶	白土系 香合	—	14.3	—	—	8.5	—	内外面回転十字, 外周面調整, 転十字	2.5Y7/18白	古瀬戸御用-IV	274	40	
1368	HC65- HC65	G石合製陶, G石合製陶	古瀬戸 燈籠	3脚	306.4	19.4	11.8	5.7	5.7	内外面回転十字, 3脚中心調整	黄緑: 5YR7/23黄	MYR07/18黄	古瀬戸御用	274	40
1369	HC38	G石合製陶, G石合製陶	白土系 燈籠	3脚	306.4	19.4	11.8	5.5	7	内外面回転十字	黄緑: 2.5YR7/14 黄	2.5Y6/18白	大塚2	274	49
1370	HC71- HC72	G石合製陶, 石合製陶	中国陶磁器 白磁杯	素面分輪器	27.4	3.9	3.4	3.5	4	磨削高台	G06: 5YR7/18白	2.5Y6/18白	274	40	
1371	HC61	G石合製陶	中国陶磁器 白磁香合	—	55.0	3.3	3.8	2	12	磨削高台, 見口(平)	青緑, 黄緑: 10Y6/2 十字十字黄-5 YR7/18黄	2.5Y6/18白	福原北条	274	40
1372	GE08	F4E(SB)古代	灰土系 粉土系陶	—	—	—	—	—	—	内面回転十字, 底面外周面調整	2.5Y7/18白	古黄, 灰土系 陶	275	23	
1373	GE09	F4E(SB)古代	灰土系 粉土系陶	—	—	—	—	—	—	内面回転十字, 底面外周面調整	5Y6/18	古黄, 灰土系 陶	275	23	
1374	GE08	F4E(SB)古代	灰土系 粉土系陶	—	35.7	—	—	2.5	—	内面回転十字, 底面外周面調整	2.5Y6/18黄	古黄, 灰土系 陶	275	23	
1375	GE08	F4E(SB)古代	灰土系 粉土系陶	—	33.7	—	—	2	—	内面回転十字	MYR07/18白	古黄-灰-黄 土系陶	275	23	
1376	GE09	F4E(SB)古代	灰土系 粉土系陶 (鉄質)	—	31.2	—	—	3.3	—	内面回転十字	MYR07/18黄	古黄-灰-黄 土系陶	275	23	
1377	GE08	F4E(SB)古代	灰土系 粉土系陶	—	34.8	—	—	1.5	—	内面回転十字	2.5Y6/18黄	灰土	275	23	
1378	GE09	F4E(SB)古代	灰土系 赤土	—	—	—	—	—	—	内面回転十字, 外周面調整	MYR07/18黄	古黄-灰-黄 土系陶	275	23	
1379	GE08	F4E(SB)古代	白土系 赤土	—	—	—	—	—	—	内面回転十字, 底面外周面調整	MYR07/18白	古-11号下, 灰 土系陶	275	23	
1380	GE08- GE09	F4E(SB)古代, F122(SB)古代	灰土系 粉土系陶	—	38.8	4.1	3.3	3	3	内面回転十字	N3/10黄-2.5 Y6/18黄	古黄, 陶+ 木灰土	275	23	
1381	GE08	F4E(SB)古代	灰土系 粉土系陶	—	—	1.8	—	12	—	内面回転十字	10YR6/23黄 土	古黄, 陶+ 木灰土	275	23	
1382	GE08	F4E(SB)古代	土器(古代) 磨 削木蓋	—	—	—	—	—	—	内面回転十字	5YR6/18黄	—	275	23	
1383	GE08- GE28	F4E(SB)古代, F4-SB(SB)古代	土器(古代) 灰土系陶	—	21.3	—	—	1.8	—	土器内面磨削のハコ調整, 底面内面磨削時の底面調整, 外 面ハコ調整	MYR07/18 +黄	—	275	23	
1385	GE08	F4E(SB)古代, F122(SB)古代	土器(古代) 灰土系陶	—	33.8	—	—	7.6	—	土器内面磨削のハコ調整, 底面内面磨削時の底面調整, 外 面ハコ調整	2.5Y6/18黄 +黒	—	275	23	
1386	GE09	F4E(SB)古代	土器(古代) 灰土系陶	—	37.5	—	—	1.5	—	土器内面磨削のハコ調整, 外周ハコ調整	MYR07/18黄	—	275	23	
1387	GE08	F4E(SB)古代	土器(古代) 灰土系陶	—	—	15.4	—	5.3	—	内面回転十字, 外周ハコ調整	MYR07/18 +黒	—	275	23	
1388	GE08	F4E(SB)古代	土器(古代) 灰土系陶	—	—	7.4	—	6	—	内面回転十字, 外周ハコ調整	MYR07/18黄	—	275	23	
1389	GE09	F4-F122(SB)古代	土器(古代) 灰土系陶	—	20.9	—	—	2	—	土器内面磨削のハコ調整, 底面内面磨削時の底面調整, 外 面ハコ調整	MYR07/18黄	—	275	23	
1390	GE08	F4-F122(SB)古代	土器(古代) 灰土系陶	—	—	8.0	—	1.5	—	内面磨削の転十字と転十字 外, 外周ハコ調整	MYR07/18 +黄	—	275	23	
1391	GE09	F4-SB(SB)古代	灰土系 粉土系陶	—	21.0	—	—	1.9	—	内面回転十字	2.5Y7/18黄	古, 灰土系陶	275	23	
1392	GE08	F4-SB(SB)古代	灰土系 粉土系陶	—	—	18.4	—	5	—	内面回転十字, 回転ハコ調整	MYR07/18白	古黄-灰-黄 土系陶	275	23	
1393	GE08	F4-SB(SB)古代	土器(古代) 灰土系陶	—	36.4	—	—	2.5	—	土器内面磨削のハコ調整, 底面内面磨削時の底面調整, 外 面ハコ調整	5YR6/18黄-11 YR7/18黄	—	275	23	

表110 土器観察表39

器物番号	ブロン	図録・報告 (基礎情報)	種 類	形態分類	容量 (ml)				調 整 等	文 様・装 束	胎 土 色 調	肌 式・形式など	縦横径 [mm]
					口径	高さ	底径	口縁 口縁					
1361	GN29	F122[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	(7.7)	—	2	内外面回転ナズ	表面内面へツ起す	2.5Y7/1R10	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	276 73
1365	GN29	F122[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	12.0	—	2	内外面回転ナズ、胎付高直、回転 胎ナズ	—	2.5Y8/2R10	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	276 73
1366	GN29	F122[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	19.4	—	2.9	内外面回転ナズ、見込外側回転 胎ナズ、胎付高直、回転へツ 起す後回転胎ナズ	10YR7/2C.2 →10YR7/1C.2	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	276 73	
1367	GN27	F122[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	22.6	—	1	内外面回転ナズ	—	5Y3/1R	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	276 73
1368	GN24	F122[S](古代)	須恵系 右白焼	—	—	16.2	—	1.6	見込不定方向のナズ、胎付内 外面回転ナズ、胎付高直、回 転へツ起焼	—	2.5Y7/2R黄 →10YR7/1C.2 →黄赤	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	276 73
1369	GN27	F122[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	13.2	—	1.7	内外面回転ナズ	—	2.5Y6/2R黄	胎色	276 73
1400	GN28	F122[S](古代)	須恵系 赤白焼	—	—	—	—	—	内外面回転ナズ	—	2.5Y7/2R黄	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	276 73
1401	GN28	F122[S](古代)	須恵系 灰黄焼	—	—	—	—	—	内外面回転ナズ、胎付下外 面回転胎ナズ	10YR27/1R10	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	276 73	
1402	GN28	F122[S](古代)	土師系(古代) 灰黄焼土器	—	—	—	—	0.8	口縁部内外面回転ナズ、胎付 上下内面と見込による胎付ナズ、 胎付下内面と見込上への胎付 ナズ、胎付外側ハツ調整	7.5Y8/1R10 →5Y27/6R	—	276 73	
1403	GN28	F122[S](古代)	土師系(古代) 黄焼土器	—	—	19.2	—	1.3	外側面回転	—	7.5Y8/6R	—	276 73
1404	GN28	F122[S](古代)	土師系(古代) 灰黄焼土器	—	—	20.7	—	0.6	口縁部内外面回転ナズ、胎付 上下内面と見込による胎付のハツ 調整、胎付下内面と見込上から 上への胎付、胎付外側ハツ調整	10YR27/4C.2 →黄赤	—	276 73	
1405	GN29	F122[S](古代)	白土系陶器 焼	—	—	8.50	—	1.8	内外面回転ナズ、胎付高直ハツ 調整	10YR27/2C.2 →黄赤	左:胎色中黄色 底:胎色	276 79	
1406	GN28	F122-P5[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	19.2	—	1.1	内外面回転ナズ、胎付外側回転 胎ナズ、胎付外側回転胎ナズ	10YR2/1R	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	276 73	
1407	GN29	F142[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	19.5	—	3	内外面回転ナズ、胎付高直、回 転胎ナズ	10YR27/1R10	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	276 73	
1408	GN27	F18K2[S](古代)	須恵系 右白焼 (左黄焼)	—	—	18.0	—	1.3	内外面回転ナズ、胎付下外 面回転胎ナズ	5Y3/1R	胎色	276 73	
1409	GN27	F18K2[S](古代)	中土師系 白焼	—	—	5.8	—	2.5	—	胎色: 7.5Y7/1R10	2.5Y8/1R10	—	276 41
1410	GN27	F18K2[S](古代)	土師系(古代) 灰黄焼土器	—	—	25.8	—	1.2	口縁部内面胎付のハツ調整、 胎付内面胎付の胎付ナズ、外 側ハツ調整	—	7.5Y8/2R黄 底	—	276 73
1411	GN20	F28K2[S](古代)	土師系(古代) 黄焼土器	—	—	—	—	—	口縁部内面胎付ナズ	—	5YR5/6R赤 底	—	276 73
1412	GN11	F28K2[S](古代)	土師系(古代) 灰黄焼土器	—	—	—	—	—	内面胎付、外面ハツ調整	10YR27/2C.2 →黄赤	—	—	276 73
1413	GN27	F37K2[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	—	—	—	内外面回転ナズ、空注筒と如 く胎付外側回転胎ナズ、胎付外 側回転胎ナズ	10YR27/1R10	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	277 73	
1414	GN26	F37K2[S](古代)	須恵系 黄土器	胎付不 足	—	—	—	—	内面と見込、外側胎目	—	5Y6/1R	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	277 73
1415	GN27	F37K2[S](古代)	土師系(古代) 黄焼土器	—	—	10.0	—	3.1	内外面胎付	10YR27/2C.2 →黄赤	—	277 73	
1416	GN27	F37K2[S](古代)	土師系(古代) 灰黄焼土器	—	—	—	—	0.5	口縁部内面胎付のハツ調整、 胎付内面胎付の胎付ナズ、外 側ハツ調整	10YR26/2C.2 →黄赤	—	277 73	
1417	GN26	F37K2[S](古代)	土師系(古代) 灰黄焼土器	—	—	14.0	—	2	口縁部内面胎付のハツ調整、 胎付内面胎付の胎付ナズ、口 縁部内面胎付の胎付ナズ、内 面ハツ調整	10YR27/2C.2 →黄赤	—	277 73	
1418	GN26	F37K2[S](古代)	土師系(古代) 灰黄焼土器	—	—	24.0	—	1.4	口縁部内面胎付のハツ調整、 胎付ハツ調整	10YR27/2C.2 →黄赤	—	277 73	
1419	GN26 GN27	F37K2[S](古代)、 F38K2[S](古代)、 F38K-SF[S](古代)、 F37K-SF[S](古代)	土師系(古代) 灰黄焼土器	—	—	9.6	—	7.5	口縁部胎付胎付の胎付胎付 胎付胎付、胎付ハツ調整	10YR27/2C.2 →黄赤	—	277 73	
1420	GN26	F214-P2[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	12.8	7.7	4.1	12	内外面回転ナズ、回転へツ起 後回転ナズ(胎色胎付)	2.5Y7/2R黄	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	277 73
1421	GN26	F214-P2[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	11.8	16.4	—	2.8	内外面回転ナズ	2.5Y7/1R10	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	277 73
1422	GN26	F214-P2[S](古代)	土師系(古代) 灰黄焼土器	—	—	14.8	—	3.8	口縁部内面胎付のハツ調整、 胎付内面胎付の胎付ナズ、内 面ハツ調整	10YR28/2R10	—	277 73	
1423	GN27	F214-P1[S](古代)	土師系(古代) 黄焼土器	—	—	10.6	—	1.5	内面胎付(上見込)、胎付胎 付胎付	10YR26/2C.2 →黄赤	—	277 74	
1424	GN26	F214-SF[S](古代) F214-SF[S](古代)	須恵系 杯形土器	—	—	16.2	—	5	内外面回転ナズ、胎付外側回転 胎付、胎付外側回転胎付	2.5Y7/2R黄	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	277 74	
1425	GN26	F214-SF[S](古代)	須恵系 黄土器	—	—	28.0	—	0.2	口縁部内外面回転ナズ、胎付 内面と見込、胎付外側胎目	10YR27/2C.2 →黄赤	左:黄赤～灰黄 底:黄赤	277 74	

表111 土器観察表36

遺物番号	アット	遺物・製品 (産地別)	種 別	計量単位	重量 (g)			径 (cm)		備 考 等	主要・施 装	胎 土 色 調	形式・式式分	発掘 層位 階級	
					総重	底重	底高	口径	底径						
103	FQ29	F29R(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	15.9	—	3.8	8	1	内面回転ナリ。底面外周面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	711	21	
102	FQ29-22	F29R(SB)(A)(F)・F29R(SK)・F29R(SB) 類	須恵郡 刺糸織	—	18.9	12.9	13.9	8.3	11	口縁部・胎土内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	自然焼・3Y/2R黄褐色	2.5Y/2R黄褐色	灰黄色・黄褐色	217	21
109	FQ29	F29R(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	19.9	—	—	1.3	—	口縁部内面回転のハコ調整。胎土内面回転の胎ナリナリ。外周ハコ調整	10Y/2R/2L黄褐色	灰黄色・黄褐色	217	24	
109	FQ29	F29R(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	—	—	—	—	—	口縁部内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	217	21
103	GM26	F36R(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	12.0	9.0	—	1	3.2	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	5Y/1R0G	灰・黄褐色	218	21	
101	GM27	F36R(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	13.8	5.0	4.0	2	3.8	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	10Y/2R/2L黄褐色	灰黄色・黄褐色	218	24	
102	GM28	F36R(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	8.3	—	—	—	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	黄褐色・灰黄色	218	24	
103	GM28	F36R(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	22.0	—	—	8.5	—	内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	24	
104	GM26	F36R(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	—	—	—	5.7	—	胎土内面回転の胎ナリ。口縁部内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	10Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	24	
102	GM26	F36R(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	20.0	—	—	2.3	—	口縁部内面回転のハコ調整。胎土内面回転の胎ナリ。胎土内面回転ナリ	10Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	24	
106	GM26	F36R(SB)(A)(F)・F344-SF(2)(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	—	—	—	—	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	10Y/2R/2L黄褐色	灰黄色・黄褐色	218	24	
107	GM28	F36R(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	—	—	—	—	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	10Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	24	
108	GA27	F472(SB)(A)(F)・F473-F473(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	—	—	—	—	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	5Y/1R	灰黄色・黄褐色	218	21	
109	GA27-6R27	F472(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	13.6	—	—	2	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	胎土内面回転ナリ	10Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	21
100	GA27	F472(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	12.3	9.0	2.9	4.3	4.3	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	5Y/2R黄褐色	灰黄色・黄褐色	218	21	
101	GA28	F472(SB)(A)(F)・F473-SK42(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	12.0	6.8	2.3	2.8	2.9	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	21	
102	GA27-GA28	F472(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	13.4	9.1	3.3	3.4	3.4	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	21	
103	GR2	F472(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	22.0	—	—	1	—	内面回転ナリ	10Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	21	
104	GA27	F472(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	—	—	—	14.1	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	10Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	21	
106	GA28	F473-SK42(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	13.4	—	—	3.5	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	胎土内面回転ナリ	5Y/1R	灰黄色・黄褐色	218	21
107	GA27-GA28	F473-SK42(SB)(A)(F)・F477-SK39(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	19.8	—	—	2.3	—	口縁部内面回転のハコ調整。胎土内面回転の胎ナリ。口縁部内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	10Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	21	
100	GR2	F472(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	19.2	—	—	8.4	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	21	
101	GR2	F472(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	—	—	—	4	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	21	
106	GR2	F472(SB)(A)(F)・F473-SB39(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	—	—	—	—	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	21	
101	GR2	F472(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	—	—	—	4	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	10Y/2R/2L黄褐色	灰黄色・黄褐色	218	21	
102	GR2	F473-F473(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	—	—	—	1	—	口縁部内面回転のハコ調整。胎土内面回転の胎ナリ	10Y/2R/2L黄褐色	灰黄色・黄褐色	218	21	
103	CL36	F472R(SB)(A)(F)	須恵郡 刺糸織	—	16.0	—	—	1.1	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	24	
104	FR24	F272(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	12.2	—	—	2.8	—	内面回転ナリ	10Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	24	
105	FR24	F272(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	2.4	—	—	3	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	24	
106	FR24	F272(SB)(A)(F)	白土 刺糸織	—	13.5	8.8	4.3	6.1	1.7	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	胎土内面回転ナリ	2.5Y/2R0G	灰黄色・黄褐色	218	24
107	FR24	F272(SB)(A)(F)	白土 刺糸織	—	0.0	—	—	4.8	—	内面回転ナリ。胎土内面回転ナリ	胎土内面回転ナリ	10Y/2R/2L黄褐色	灰黄色・黄褐色	218	24
108	FR25	F1142(SB)(A)(F)	須恵郡 (A)(F) 刺糸織類	—	16.4	—	—	1.2	—	内面回転ナリ	10Y/2R0G	白土・灰黄色	218	24	

表112 土器観察表3(3)

遺物番号	グロージ	器種・器型 (高麗時代)	種 別	形態分類	容量 (ml)			焼成色/口内	調 整 号	文 様・装 束	胎土色調	肌織式区分	焼成温度 900/1000		
					口徑	底径	高さ								
1439	PQ25	F1143E(SK)古代	土師器(古代) 甕	—	16.2	—	—	1.2	内外面刷灰ナシ	10YR6/2R黄 緑	白土(土質均一、 焼成中欠れ多 し)	229	74		
1469	PQ25	F1143E(SK)古代	土師器(古代) 甕	—	19.2	—	—	5	内外面刷灰ナシ、胎付高直、胎 底平直	2.5YR/2R黄 緑	白土(土質均一、 焼成中欠れ多 し)	229	18		
1481	PQ25	F1143E(SK)古代	土師器(古代) 土師器 4小形杯	—	5.0	—	—	6.5	内外面刷灰ナシ、胎底平直	7.5YR6/4R黄 緑	白土(土質均一、 焼成中欠れ多 し)	229	78		
1482	PQ25	F1143E(SK)古代	白土 甕	—	10.5	9.8	2.2	1.9	5.2	内外面刷灰ナシ、胎付高直	黄緑(土.5Y7/1R白)	11c 胎土、黄緑 (胎底・胎面・胎 縁)	229	14	
1483	PQ25	F1143E(SK)古代	白土 甕	—	—	—	—	11	内外面刷灰ナシ、胎付高直、胎 底平直	7.5Y7/1R白)	11c胎土、黄緑	229	71		
1484	PQ25	F1143E(SK)古代	白土 甕	—	—	—	—	12	内外面刷灰ナシ、胎付高直、胎 底平直	黄緑(土.5Y8/2R白)	10YR6/2R白)	11c胎土、黄緑	229	16	
1485	PQ25	F1260E(PS084、古 代)、F1143E(SK(古 代))	土師器(古代) 土師器	—	22.0	—	—	1.2	白線部内外面刷灰ナシ、胎底 内面刷灰ナシ	5YR6/9R黄緑	—	229	14		
1486	PQ25	F1143E(SK)古代	土師器(古代) 土師器	—	21.6	—	—	1.3	白線部内外面刷灰ナシ、内面 内面刷灰ナシ	5YR6/9R黄緑	—	229	74		
1487	PQ25	F1143E(SK)古代	土師器(古代) 土師器	—	24.0	—	—	1.4	白線部内外面刷灰ナシ、胎底 内面刷灰ナシ	5YR6/9R黄緑	—	229	18		
1466	PQ25	F1143E(SK)古代	土師器(古代) 土師器	—	29.8	—	—	1.8	白線部内外面刷灰ナシ、内面 内面刷灰ナシ	7.5YR5/4L土 +黄緑	—	229	74		
1469	PQ24	F294E(土師器土師器 古代)	白土 甕	—	—	—	—	5.3	12	内外面刷灰ナシ、胎付高直、胎 底平直	2.5YR/2R白)	11c 胎土、黄緑 (胎底・胎面・胎 縁、胎底平直多 し、胎縁少し欠 れ)	229	74	
1439	PQ24	F294E(土師器土師器 古代)	黄緑 甕	—	—	—	—	—	12	白線部内外面刷灰ナシ、胎底 内面刷灰ナシ、胎底外高直ナ シ	2.5YR/1R黄 緑	11c胎土、黄緑 胎底	229	14	
1471	PQ24	F294E(P)	白土 甕	—	14.2	6.4	3.2	2	7	内外面刷灰ナシ、胎底内面刷 灰ナシ	黄緑(土.5Y8/1R白)	2.5Y7/1R白)	11c 胎土、黄緑 (胎底・胎面・胎 縁)	229	14
1472	H160	G493E(土師器土師器古 代)	黄緑胎 杯身胎	—	11.3	7.2	4.2	3.3	12	内外面刷灰ナシ、胎底内面刷 灰ナシ、胎縁へう記号 無し	2.5Y7/1R白)	2c黄緑、黄緑胎 底	260	22	
1473	H160	G493E(土師器土師器古 代)	黄緑胎 杯身胎	—	11.5	9.1	3.8	4.8	3.4	内外面刷灰ナシ	2.5YR/2R白)	2c黄緑、黄緑胎 底	260	22	
1474	H160	G493E(土師器土師器古 代)	黄緑胎 杯身胎	—	12.0	—	—	1.4	内外面刷灰ナシ	10Y2/5L土 +黄緑	2c黄緑、黄緑胎 底	260	78		
1475	H160	G493E(土師器土師器古 代)	黄緑胎 杯身胎	—	—	—	—	5.8	12	内外面刷灰ナシ、胎縁へう記 号無し	10Y2/5L土 +黄緑	2c黄緑、黄緑胎 底、胎底可能性 低	260	28	
1476	H160	G493E(土師器土師器古 代)	黄緑胎 高杯胎	—	—	—	—	—	12	杯底内面刷灰ナシ、杯底外高 胎縁有り、胎底外高胎縁ナ シ	7.5Y7/1R白)	2c黄緑、黄緑胎 底	260	74	
1477	H160	G493E(土師器土師器古 代)	黄緑胎 長脚胎	—	—	—	—	—	12	内外面刷灰ナシ	5Y7/1R白)	2c黄緑、黄緑胎 底	260	74	
1478	H160	G493E(土師器土師器古 代)	黄緑胎 甕	—	28.4	—	—	8.3	12	白線部内外面刷灰ナシ、胎底 内面刷灰ナシ、胎底外高直ナ シ	2.5YR/2R白)	2c黄緑、黄緑胎 底	260	74	
1480	H160	G493E(土師器土師器古 代)	白土胎 甕胎	—	11.0	4.2	2.2	1.2	3.8	内面へう記号無し、外 面刷灰ナシ、胎底平直	7.5YR6/1R黄 緑	2c黄緑、胎底 (胎底、胎縁高 直)	260	74	
1481	H160	G493E(土師器土師器古 代)	白土胎 甕胎	胎底胎	胎底胎	—	5.6	—	8.2	内面へう記号無し、外 面刷灰ナシ、胎底平直	黄緑(土.5Y8/2R ローブ)	10Y2/5L土 +黄緑	胎底へう記号 無し	260	74
1482	H160	G493E(土師器土師器古 代)	黄緑胎 広口胎	—	17.4	—	—	6.4	内外面刷灰ナシ	10Y2/1R白)	2c黄緑、黄緑胎 底	260	74		
1483	H160	F366E(SD)古代	黄緑胎 杯身胎	—	9.0	—	—	1.8	内外面刷灰ナシ	3.5Y7/1R白)	2c黄緑、黄緑胎 底	260	74		
1484	H160	G203E(SD)古代	黄緑胎 杯身胎	—	11.4	—	—	1.4	内外面刷灰ナシ、胎底外高 胎縁有り、白線部内面から内 面刷灰ナシ	10YR6/2R黄 緑	2c黄緑、胎底	260	75		
1485	H160	G203E(SD)古代	黄緑胎 高杯	—	15.8	—	—	1	内外面刷灰ナシ	2.5Y7/1R白)	2c黄緑、黄緑胎 底	260	75		
1486	H160	G203E(SD)古代	黄緑胎 杯身胎	—	10.0	—	—	1.6	内外面刷灰ナシ	10YR6/2R黄 緑	2c黄緑、黄緑胎 底	260	75		
1487	H160	G203E(SD)古代	黄緑胎 杯身胎	—	12.1	—	—	7	内外面刷灰ナシ	5Y7/1R白)	2c黄緑、黄緑胎 底	260	75		
1488	H160	G219E(SD)古代	黄緑胎 杯身胎	—	14.0	4.2	3.3	1.4	7.8	内外面刷灰ナシ、胎底高直	黄緑(胎底へう記 号)	5Y6/1R白)	2c黄緑、黄緑胎 底	260	72
1489	H160	G219E(SD)古代	黄緑胎 杯身胎	—	11.5	7.5	3.8	6	7.5	内外面刷灰ナシ、胎底へう記 号無し	黄緑胎底(へう記 号)	2.5Y7/1R黄 緑	2c黄緑、胎底 底、胎底可能性 低	260	72
1490	H160	G203E(SD)古代	黄緑胎 杯身胎	—	14.5	9.8	2.9	3	11	内外面刷灰ナシ、胎付高直、胎 底平直	7.5Y7/1R黄 緑	2c黄緑、胎底 底	260	72	
1491	H160	G203E(SD)古代	黄緑胎 杯身胎	—	—	—	—	6.6	12	内外面刷灰ナシ、胎付高直	10YR2/1R白)	2c黄緑、胎底 底	260	75	
1492	H160	G203E(SD)古代	黄緑胎 高杯胎	—	—	—	—	10.8	2.3	内外面刷灰ナシ、胎付高直、胎 底平直	5Y7/1R白)	胎底、胎底 底	260	75	
1493	H160	G203E(SD)古代	黄緑胎 有白線	—	—	—	—	8.4	12	内外面刷灰ナシ	10YR2/2L土 +黄緑	胎底、胎底 底、胎底可能性 低	260	75	

表113 土器觀察表(30)

遺物 番号	モノコード	遺器・部分 (通称/用途)	種 別	形態分類	口径 (mm)				底径 (mm)	高 (mm)	容積 (L)	備 考	土 質・施 装	土 色 澤	形式・形式番号	西館 種別 (JDK)	
					口内	口外	器高	口底									
1491	HC03	G200Q(SD)(古代)	須恵器 有台皿	—	—	—	—	—	0	12		内外面刷毛十字		BFYR6/2BK白	号集・1493 1群G101-106	200	25
1492	H004- HC01- HC04	G200Q(SD)(古代)	須恵器 有台皿 (高取型)	—	120.20	100.0	6.2	2.5	5.5			内外面刷毛十字、器底下半部 に紅褐色外面刷毛あり、器口高 白、刷毛あり		2.5Y2/2BK黄	号中集・1505 AC、美濃須恵	200	22
1493	HC03	G200Q(SD)(古代)	須恵器 須恵皿	—	112.40	—	—	—	1			内外面刷毛十字		2.5Y2/2BK黄	AC、美濃須恵	200	25
1494	HC01	G200Q(SD)(古代)	須恵器 須恵皿	—	112.40	—	—	—	1.2			内外面刷毛十字		BFYR2/2BK白 +黄緑	AC、美濃須恵	200	25
1495	HC06- HC72	G200Q(SD)(古代) 、G612Q(SD)(古代)	須恵器 鉢	—	114.35	—	—	—	1			内外面刷毛十字		2.5Y2/2BK黄	AC、美濃須恵	200	25
1499	HC01	G200(SD)(古代)	須恵器 杯蓋C型 (高取型)	—	—	—	—	—	0.6			内外面刷毛十字		BFYR2/1BK白	AC、美濃須恵	200	25
1500	H003	G200Q(SD)(古代)	須恵器 鉢	—	99.71	—	—	—	1.5			内外面刷毛十字		10YR8/2BK白	AC、美濃須恵	200	25
1501	H002- HC03	G200Q(SD)(古代)	須恵器 須恵皿	—	—	99.5	—	—	3.5			内外面刷毛十字		BFYR2/2BK白 +黄緑	AC、美濃須恵	200	22
1502	HC03	G200Q(SD)(古代)	須恵器 須恵皿	—	225.2	—	—	—	1			内外面刷毛十字		2.5Y2/1BK白	AC、美濃須恵	200	25
1503	H002	G200Q(SD)(古代)	須恵器 須恵皿	—	229.0	—	—	—	1			口縁部内外面刷毛十字、器底 内面が白色、器底内面中5目		10YR8/2BK黄	AC、美濃須恵	200	25
1504	HC01	G200Q(SD)(古代)	須恵器 須恵皿	—	222.0	—	—	—	2.4			口縁部内外面刷毛十字、器底 内面が白色、器底内面中5目		2.5Y2/1BK白	AC、美濃須恵	200	25
1505	HC04	G200Q(SD)(古代)	須恵器 鉢	—	—	13.25	—	—	2			内外面刷毛十字		2.5YR8/2BK白	美濃須恵	201	75
1506	HC03	G200(SD)(古代)	須恵器 須恵皿	—	—	31.0	—	—	2			内面刷毛十字、外周に刷毛あり、 器口高白		BFYR2/1BK白	AC、美濃須恵	201	75
1507	HC00	G200Q(SD)(古代)	白瓷系須恵 鉢	—	—	7.1	—	—	12			内外面刷毛十字、器口高白、内 面刷毛あり、器底内面中5目		BFYR2/2BK白 +黄緑	美濃須恵	201	75
1508	HC09	G200Q(SD)(古代)	白瓷系須恵 鉢	—	11.1	4.1	2.4	2.2	12			内面に上唇に白色刷毛十字、外 周面刷毛十字、器口高白		2.5Y2/2BK黄	美濃須恵	201	72
1509	H002	G200Q(SD)(古代)	土師器(中厚) 伊勢瓦	—	—	—	—	—	6.5			内外面刷毛十字		2.5YR8/2BK白		201	25
1510	H002	G200Q(SD)(古代)	土師器 小皿や中皿	古瀬戸 小皿や中皿	—	—	—	—	5.8	—	—	内外面刷毛十字、器底内面中 5目		BFYR2/2BK白 +黄緑	古瀬戸(中厚) 土	201	25
1511	H009- HC06- HC70	G200Q(SD)(古代)	古瀬戸 鉢	古瀬戸 鉢	—	—	—	—	—	—	—	内外面刷毛十字、器底下半部 に刷毛あり		黄緑 2.5YR8/2BK +黄	古瀬戸(中厚)	201	25
1512	HC72	G612Q(SD)(古代)	須恵器 杯身A型	—	120.0	—	—	—	1.4			内外面刷毛十字		2.5Y2/2BK黄	AC、美濃須恵	201	25
1513	HC74	G612Q(SD)(古代)	須恵器 杯身C型	—	112.30	100.0	3.0	1.2	1.4			内外面刷毛十字、器口高白		BFYR2/2BK白 +黄緑	AC、美濃須恵	201	25
1514	HC72	G612Q(SD)(古代)	須恵器 杯身C型	—	114.40	100.2	4.0	0.5	1.7			内外面刷毛十字、器口高白、内 面刷毛あり		2.5Y2/2BK黄	AC、美濃須恵	201	25
1517	HC73	G612Q(SD)(古代)、G6 12Q(SD)	須恵器 杯身C型	—	114.50	111.0	3.5	1.1	2.8			内外面刷毛十字、器口高白		2.5Y2/2BK黄	AC、美濃須恵	201	25
1518	HC72	G612Q(SD)(古代)、G 12Q(SD)	須恵器 杯身C型	—	118.40	115.0	4.0	3	2.6			内外面刷毛十字、器口高白、内 面刷毛あり		5Y2/1BK白	AC、美濃須恵	201	22
1519	HC72- HC70	G612Q(SD)(古代)、G 12Q(SD)	須恵器 杯身C型	—	—	—	—	—	—			内外面刷毛十字		2.5Y2/2BK黄	AC、美濃須恵	201	25
1520	HC72	G612Q(SD)(古代)	須恵器 杯身C型	—	111.5	—	—	—	2.7			内外面刷毛十字		5Y2/1BK白	AC、美濃須恵	201	25
1521	HC72- HC73	G612Q(SD)(古代)	須恵器 鉢	—	226.2	—	—	—	1			内外面刷毛十字		2.5YR8/2BK白	AC、美濃須恵	201	25
1522	HC73	G612Q(SD)(古代)	須恵器 須恵皿	—	225.5	—	—	—	1.3			口縁部内外面刷毛十字、器底内面が 白色、器底内面中5目		5YR6/1BK白	AC、美濃須恵	201	25
1523	HC73	G612Q(SD)(古代)	白瓷系須恵 鉢	—	114.40	100.0	5.5	3	2			内外面刷毛十字、器口高白、内 面刷毛あり		BFYR6/2BK白	美濃須恵	201	22
1524	H003- HC02- HC09- HC04- HC70- HC71	G1200(P)、G200Q- 20(SD)(古代) 、G612Q(SD)(古代)	須恵器 須恵皿	—	130.40	—	—	—	2			口縁部内外面刷毛十字、器底 内面が白色、器底内面中5目		2.5Y2/2BK黄	AC、美濃須恵	202	72
1525	H003	G41(SD)	須恵器 杯身A型	—	113.5	90.0	—	—	2.6	3.5		内外面刷毛十字		2.5Y2/2BK黄	AC、美濃須恵	202	74
1527	H005	G41(G40)(SD)	須恵器 杯身B型	—	113.7	—	—	—	1.9			内外面刷毛十字		BFYR2/2BK白 +黄緑	AC、美濃須恵	202	74
1528	H004	G41(SD)	須恵器 須恵皿	—	220.4	—	—	—	0.5			口縁部内外面刷毛十字、器底内面が 白色、器底内面中5目		5Y2/1BK白	AC、美濃須恵	202	74
1529	H004	G41(SD)	須恵器 須恵皿	—	115.2	—	—	—	1.2			口縁部内外面刷毛十字、器底内面が 白色		2.5Y2/1BK白	AC、美濃須恵	202	74
1530	H004- HC01- HC05	G41(SD)、G41(SD) 、G2270(P)、G2270(SD) 、G2270(P)、G2270(SD)	須恵器 須恵皿	—	114.0	—	—	—	5			口縁部内外面刷毛十字、器底 内面が白色、器底内面中5目		2.5YR8/2BK白	AC、美濃須恵	202	72
1531	H003- HC04	G41(SD)、G2270(SD)	須恵器 須恵皿	—	—	—	—	—	—			口縁部内外面刷毛十字、器底内 面が白色、器底内面中5目		2.5Y2/1BK白	AC、美濃須恵	202	74
1532	H005	G41(G40)(SD)	白瓷系須恵 鉢	—	121.2	100.0	2.0	1.5				内外面刷毛十字、器口高白		BFYR6/2BK白	美濃須恵	202	75

表114 土器観察表⑨

遺物 番号	ブロード 分類・部位 (編年相)	種 別	形数(号数)	質量 (g)			体高 (X/12)		備 考 等	文様・輪帯	胎土色調	形式・状況など	編年相 種別(区別)
				計	底径	底高	口縁	底面					
1303	H059	G2692(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	31.6	6.45	—	3.9	3.8	内外面紅胎ナリ。	2.5V3/2R01	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	263 21
1304	H059	G2692(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	—	19.45	—	—	3.1	内外面紅胎ナリ。胎付高凸。胎止面ナリ。	10Y30/2R01	丸底蓋。底面施釉。	263 24
1305	H062	G2692(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	—	—	—	—	—	内外面紅胎ナリ。	2.5V2/1R01	丸底蓋。底面施釉。	263 24
1306	H057	G2692(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	24.5	—	—	1.4	—	内外面紅胎ナリ。胎面下半部面紅胎の付ナリ。	5Y2/1R01	丸底蓋。底面施釉。	263 24
1327	H081	H02(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	36.0	—	—	1.2	—	内外面紅胎ナリ。	10Y30/2R10	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1328	H081	H02(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	—	16.3	—	—	3.9	内外面紅胎ナリ。胎面ハナリ。	2.5V2/2R00	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	263 25
1329	H080	H02(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	—	36.8	—	—	2.4	内外面紅胎ナリ。胎付高凸。	10Y30/2R10	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1340	H080	H02(SD)古代	須恵器 鉢形物(胎付)	—	—	—	—	—	—	内外面紅胎ナリ。胎面紅胎面ナリ。	10Y30/2R10	丸底蓋。	263 25
1341	H080	H02(SD)古代	須恵器 鉢	—	34.1	—	—	—	6.1	内外面紅胎ナリ。	2.5V2/1R01	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1347	H06	H02(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	39.6	—	—	1.5	—	口縁部中心部並に上部の内外面紅胎ナリ。胎面紅胎面ナリ。	2.5V3/1R01	胎子の付ナリ。胎付高凸。丸底蓋。底面施釉。丸形蓋。底面施釉。	263 25
1348	H078	H02(SD)古代	白土 鉢	—	—	15.4	—	—	2.5	内外面紅胎ナリ。胎付高凸。	10Y30/2R10	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	263 25
1349	H086	H02(SD)古代	白土陶器 鉢	—	17.8	3.8	1.4	3.5	6	内外面紅胎ナリ。胎面内面紅胎ナリ。胎面紅胎。胎止面ナリ。	2.5V2/1R01	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1349	H086	H02(SD)古代	白土陶器 鉢	—	33.0	6.95	3.8	4.8	4.2	内外面紅胎ナリ。胎付高凸。胎面紅胎。胎面紅胎。胎止面ナリ。	2.5V3/1R01	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1348	H078	H02(SD)古代	白土陶器 鉢	—	—	8.2	—	—	6	内外面紅胎ナリ。胎付高凸。胎面紅胎。胎面紅胎。	2.5V2/1R01	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1347	H080	H02(SD)古代	白土陶器 鉢形物	—	56.8	—	—	—	1.5	内外面紅胎ナリ。	2.5V2/1R01	丸底蓋。底面施釉。胎付高凸。胎付高凸。	263 25
1348	H078	H02(SD)古代	白土 鉢形物	—	8.2	—	—	—	2.2	胎付高凸。	10Y30/2R00	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1348	H078	H02(SD)古代	白土 鉢形物	—	38.6	—	—	—	2.3	内外面紅胎ナリ。	10Y30/2R00	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1354	H036	H02(SD)古代	白土陶器 鉢	—	18.9	—	—	—	—	丸底蓋。底面施釉。	3.5V2/1R01	丸底蓋。底面施釉。	263 41
1354	H060	H02(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	32.4	—	—	—	1	内外面紅胎ナリ。胎面中心部並に胎面紅胎ナリ。	10Y30/1R01	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	263 25
1352	H078	H02(SD)古代	須恵器 鉢	—	17.0	—	—	—	1	内外面紅胎ナリ。胎面紅胎ナリ。	10Y30/1R01	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1352	H059	H1(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	—	—	—	—	6.3	内外面紅胎ナリ。	2.5V2/2R00	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1354	H059	H1(SD)古代	須恵器 鉢形物	—	36.7	11.9	3.9	7.1	10.4	内外面紅胎ナリ。胎付高凸。	10Y30/2R00	丸底蓋。底面施釉。	263 22
1355	H059	H1(SD)古代	土師器(古代)小壺	—	23.1	—	—	—	1.5	胎面紅胎ナリ。	2.5V3/1R01	丸底蓋。底面施釉。	263 25
1354	H078	H1(SD)古代	白土 鉢形物	—	—	—	—	—	6.5	内外面紅胎ナリ。	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	263 25
1352	G027	F丸形蓋 I	須恵器 鉢形物	—	19.3	—	—	—	1	内外面紅胎ナリ。胎面内面紅胎ナリ。胎面紅胎。胎止面ナリ。	2.5V2/1R01	丸底蓋。底面施釉。	264 22
1354	G027	F丸形蓋 I	須恵器 鉢形物	—	31.0	10.2	3.5	3.9	5	内外面紅胎ナリ。胎付高凸。胎面紅胎。胎止面ナリ。	2.5V2/2R00	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	264 22
1330	G027	F丸形蓋 I	須恵器 鉢形物	—	14.5	11.3	4.5	2	2	内外面紅胎ナリ。胎付高凸。胎面紅胎。	10Y30/1R01	丸底蓋。底面施釉。	264 21
1360	G028	F丸形蓋 I	土師器(古代) 壺	—	—	—	—	—	—	内外面紅胎ナリ。	5YR6/6R0	丸底蓋。底面施釉。	264 21
1361	F021	F丸形蓋 I	土師器(古代) 壺	—	—	—	—	—	—	内外面紅胎ナリ。	5YR6/6R0	丸底蓋。底面施釉。	264 21
1361	H064	G丸形蓋IV	須恵器 鉢形物	—	12.9	14.2	3.9	8	3.3	内外面紅胎ナリ。胎面ハナリ。胎面ハナリ。	2.5V2/2R00	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	264 22
1363	H053	G丸形蓋IV	須恵器 鉢形物	—	12.7	16.25	—	—	1.4	内外面紅胎ナリ。	10Y2/2R10	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	264 22
1364	H061	G丸形蓋IV	須恵器 鉢形物	—	31.1	6.7	3.8	3.8	12	内外面紅胎ナリ。胎面内面紅胎ナリ。胎面ハナリ。胎面ハナリ。	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	丸底蓋・丸形蓋。底面施釉。	264 22
1365	H027	G丸形蓋IV	須恵器 鉢形物(胎付)	—	39.9	6.4	4.8	6.8	12	内外面紅胎ナリ。胎付高凸。胎面ハナリ。胎面ハナリ。	10Y30/2R01	丸底蓋。底面施釉。	264 22
1366	H064	G丸形蓋IV	須恵器 鉢	—	18.3	7.7	7.7	8	12	内外面紅胎ナリ。	2.5V2/1R01	丸底蓋。底面施釉。丸底蓋。底面施釉。丸底蓋。底面施釉。	264 22
1367	H053	G丸形蓋IV	須恵器 鉢	—	16.0	6.2	5.4	4	12	内外面紅胎ナリ。胎面下半部内面紅胎の付ナリ。	2.5V2/1R01	丸底蓋。底面施釉。丸底蓋。底面施釉。丸底蓋。底面施釉。	264 22
1368	F021	F丸形蓋IV	土師器 鉢	—	—	—	—	—	—	内外面紅胎ナリ。胎面紅胎ナリ。	丸底蓋	丸底蓋。底面施釉。	265 24
1369	G027	F丸形蓋IV	土師器 鉢	—	—	—	—	—	—	胎面：胎面紅胎ナリ。胎面紅胎ナリ。胎面紅胎ナリ。	10Y30/2R10	丸底蓋。底面施釉。	265 24
1371	G027	F丸形蓋IV	土師器 鉢	—	—	—	—	—	—	胎面：胎面紅胎ナリ。胎面紅胎ナリ。	丸底蓋	丸底蓋。底面施釉。	265 24

表115 土器観察表(40)

遺物番号	グレイド	遺物・部分 [土器種類]	種 別	形 態 分類			口径 (cm)		高さ (cm)		装 飾 等	文様・施文	土 色 調	形式・式名	相対 層位
				口縁	底	胎体	口縁	底	口縁	底					
1373	EB39	D493[SD(磁器)]	磁器土器 小型土器	—	—	—	—	—	—	0.7	外面無施		5YR2/1黒	標土	205 24
1374	EB39	D493[SD(磁器)]	磁器土器 不明	—	—	—	18.0	—	—	5.5	外面無施,本磨削		2.5Y/1黄	標土	205 24
1375	EB38	D493[SD(磁器)]	磁器土器 漆器	—	—	—	—	—	—	0.7	外面無施以上磨削		7.5YR7/4C 1.5YR7/10R6 10.5Y/1黄	標土	205 26
1376	EB37	D493[SD(磁器)]	磁器土器 漆	—	—	—	—	—	—	—	無施以上磨		2.5YR/3黄	標土	205 —
1377	EB39	D493[SD(磁器)]	磁器土器 漆	—	—	—	13.0	—	—	2.2	無施内縁から外面に磨		10YR3/1黒	標土	205 26
1378	EB36	G380[P]	磁器器 漆身入器	—	—	—	19.6	3.2	3.8	6 12	内外縁無施,手,口縁へ手 指		2.5Y/3黄	右側手,裏面 無施,裏面6号室	205 26
1379	EB31	PK92[SD(古陶)]	古陶器 漆身入器	—	—	—	19.6	3.0	3.6	4 5	内外縁無施,手,口縁へ手 指		2.5Y/3黄	右側手(古手) 裏面無施	205 26

表116 土器器皿観察表(1)

遺物番号	グレイド	器上Lと遺物 遺物種類	形 態	口径	高さ	胎体	装 飾		土 色 調	備考	相対 層位	
							外 面	内 面				
4	AP1	A66[P(SH7)]	(6.9)	1.4	6.0	b	—	C1	F?	10YR8/2黄	218 47	
7	DS16	D303[P(SH24)]	(6.8)	1.7	6.1	b	e	C1	F?	7.5YR7/3C, 2.5Y+磨	218 47	
21	HB58	H973[P(SH82)]	(6.8)	—	5.0	b	—	C1	F(十字溝上)	10YR8/3黄	灯明焼?	218 47
23	BO9	B253[P(SA14)]	(7.2)	1.8	12.0	c	e	B1+C1	F2	10YR8/2黄	218 44	
25	AP1	A16[P]	(9.8)	1.4	6.0	b	—	B1	F?	7.5YR8/2黄	218 47	
27	AP1	A192[P]	(9.8)	—	5.5	b	—	B1+B2+B3	F?	10YR8/2黄	218 47	
28	AP1	A192[P]	(8.9)	2.1	12.0	b	e	B1+B2	—	10YR8/2黄	灯明焼	218 44
29	AP1	A192[P]	(9.0)	—	4.7	b	—	C2	—	10YR7/3C, 2.5Y+黄	218 47	
30	AP1	A192[P]	(9.0)	—	1.0	—	—	C2	—	10YR8/3黄	218 47	
32	AT4	A40[P]	(11.2)	1.4	2.0	a?	—	C2	D	10YR8/3黄	218 47	
39	AP10	B230[P]	(10.6)	2.2	12.0	a	d	A3+B1	F(十字溝上)	10YR7/3C, 2.5Y+黄	219 44	
41	HB4	B123[P]	(11.7)	3.2	3.0	b	—	A1	D?	10YR7/3C, 2.5Y+黄	灯明焼?	219 47
49	DO4	D46[P]	(10.8)	1.6	2.0	a	—	B1+B2	D2	5G/9R-10YR8/1黄	219 47	
73	HD2	G93[P]	(10.8)	2.6	8.2	a	d	C2	十字の痕跡が残り あり	10YR8/3黄	230 47	
81	HB3	G646[P]	(7.6)	1.3	12.0	c	e	C2	F?	7.5YR8/2黄	灯明焼	220 47
83	HC3	G423[P]	(8.7)	1.6	6.1	a	—	A1+A3	D1+D2+E	2.5YR8/3黄	220 47	
91	GL100	H963[P]	(11.7)	—	2.1	a	—	A2	D	7.5YR7/4明黄	220 47	
97	GH115	H963[P]	(13.2)	3.1	2.1	a	d?	A3	D1orD2	10YR8/3黄	220 44	
98	GH115	H963[P]	(14.0)	—	1.9	a	—	A2(十字溝あり)	D1?	2.5YR8/3黄	220 47	
109	CB6	B387[SD]	(7.0)	1.7	10.0	b	e	C1	F(十字溝上)	7.5YR7/4C, 2.5Y+磨	221 44	
110	CB6	B387[SD]	(7.5)	1.7	6.6	b	e	C1	F(十字溝上)	2.5YR8/2黄	221 44	
111	CB6	B387[SD]	(7.1)	1.7	6.5	a	—	B1+C1	F1	10YR8/3黄	221 44	
112	CB6	B387[SD]	(7.9)	1.5	6.2	a	—	B1+C1	D1+E?	7.5YR8/3黄	221 44	
113	CB6	B387[SD]	(6.9)	1.4	5.5	b	—	C2	—	10YR8/2黄	221 44	
114	CB6	B387[SD]	(9.6)	1.8	9.0	b	e	B2	—	7.5YR8/4黄	221 44	
115	CB6	B387[SD]	(11.4)	—	10.2	b	d	—	—	2.5YR8/2黄	221 44	
116	CB6	B387[SD]	(9.8)	2.2	8.5	b	e	B2	F4(板状, 溝上)	10YR8/2黄	221 44	
117	CB6	B387[SD]	(9.2)	2.1	4.5	a	—	—	—	3YR6/6黄	221 44	
118	CB6	B387[SD]	(9.6)	2.4	5.9	a	d	A3	D2+E	7.5YR7/4C, 2.5Y+磨	221 44	
119	CB6	B387[SD]	(10.8)	2.0	3.1	a	—	C2	D	5YR8/4黄	221 45	
120	CB6	B387[SD]	(11.2)	2.4	5.8	b	—	B2	—	2.5YR8/2黄	221 44	
121	CB6	B387[SD]	(11.4)	—	5.9	b	—	—	—	2.5YR8/2黄	221 44	
122	CB6	B387[SD]	(11.6)	(2.2)	6.0	b	—	B2	F(十字溝上)	10YR8/3黄	221 44	
123	CB6	B387[SD]	(10.9)	2.5	12.0	a	d	B2	D1+E	5YR6/6黄	221 44	
124	CB6	B387[SD]	(8.9)	1.7	10.5	a	e	B1	F3	10YR8/4黄	221 44	
125	CB6	B387[SD]	(11.6)	1.6	5.0	a	—	B1	D1(一部)+F4(板状, 溝上)	10YR7/4C, 2.5Y+黄	221 48	
126	CB6	B387[SD]	(11.3)	2.0	5.5	a?	—	B2	D2+F(工具上)	10YR8/3黄	221 48	
127	CB6	B387[SD]	—	—	a?	—	—	D	—	10YR8/3黄	222 48	
158	CE10	B413[SD]	(6.8)	—	5.8	b	—	C2	F2	10YR8/3黄	223 48	
159	CE10	B413[SD]	(6.8)	1.7	10.0	b	e	C1	F(十字溝上)	7.5YR7/4C, 2.5Y+磨	223 44	
160	CE10	B413[SD]	(7.2)	—	6.8	b	—	C2	—	10YR8/3黄	223 48	
161	CE10	B413[SD]	(7.4)	1.6	5.5	b	e	C1	F?	7.5YR7/4C, 2.5Y+磨	223 45	
162	CE10	B413[SD]	(7.8)	1.6	7.0	b	—	C2	F?	7.5YR8/4黄	223 48	
163	CE10	B413[SD]	(11.4)	—	7.0	b?	—	B2	—	10YR8/3黄	223 48	
164	CE10+CP10	B413[SD]	(11.3)	1.9	6.5	b	—	B2	F(板状, 溝上)	10YR8/3黄	223 48	
165	CE10	B413[SD]	(12.3)	2.0	11.2	c	f	C1	F3?	10YR8/2黄	223 45	
166	CE10	B413[SD]	(6.8)	1.4	11.0	b	e	C1	F1	7.5YR7/4C, 2.5Y+磨	223 45	

表117 土師器血観察表(2)

遺物番号	グリティド	出土した遺構 [遺構種類]	法 量 [寸法]	残存率 [%]	形 態 断面 平面	調 査		胎 土 色 調	備 考	図録 番号			
						内 面	外 面						
167	CR10	B413Q[SD]	7.1	1.9	11.5	b	c1	F1	10YR8/3浅黄褐色	223	45		
168	CC10	B413Q[SD]	8.1	1.5	9.5	b	e	B1+R2+R3	F1(板状工具)	10YR8/2灰白	223	45	
169	CC20-CD10	B413Q[SD]	11.8	2.2	5.8	a	-	R2	D1+F1(板状工具)	10YR8/2灰白	223	45	
170	CR10	B413Q[SD]	11.0	2.1	10.9	a	d	C2	D1(二股)+E	7.5YR7/4c.2s+橙	223	45	
171	CR10	B413Q[SD]	11.2	2.7	9.0	a	d	C2	D1+E	5YR6/6橙	223	45	
172	CC10-CD10	B413Q[SD]	14.6	2.7	7.3	a	d	A3	D1+E(平定方向)	10YR8/3浅黄褐色	224	45	
173	CC10	B413Q[SD]	11.9	1.9	8.0	c	e	R2(一部平定方向の工具による十字痕)	F1(板状工具)	10YR8/3浅黄褐色	224	45	
174	CE10	B413Q[SD]	11.9	2.4	9.0	a	d	C2	D1(二股)+E	7.5YR8/3浅黄褐色	224	45	
304	EM30	E500Q[礫治]	17.8	1.5	3.0	a	-	B1+C1	F1?	7.5YR7/4c.2s+橙	221	50	
305	EM30	E500Q[礫治]	17.0	1.7	4.5	a	-	A3?	D?	10YR8/2灰白	221	50	
306	EM30	E500Q[礫治]	7.8	1.4	11.0	b	e	B1+R2+C1	F1	7.5YR8/3浅黄褐色	221	45	
305	EM30	E500Q[礫治]	12.8	1.8	3.3	a	-	B1+R2	D1	10YR8/2灰白	221	50	
309	EL16	E630Q[礫治]	17.4	1.4	4.5	b	-	-	-	10YR8/3浅黄褐色-5Y1/1灰	221	50	
319	EJ17	E780Q[礫治]	17.3	1.3	2.0	a	-	A1?	D?	10YR8/3浅黄褐色	221	50	
320	EJ17	E780Q[礫治]	8.9	1.5	6.9	a	-	A1?+B1	R2?	10YR8/3浅黄褐色	221	50	
321	EJ17	E780Q[礫治]	12.4	3.0	3.4	a	-	A1	D1(二股)	10YR8/2灰白	221	50	
327	EJ16	E805Q[礫治]	8.9	1.9	12.0	b	d	-	-	10YR8/2灰白	222	46	
328	EJ16	E805Q[礫治]	18.0	1.5	5.6	a	-	A1	D1(断面に若干の板状痕)	10YR8/2灰白-N3/0暗灰	222	50	
329	EJ16	E805[礫治]	8.8	1.8	7.8	a	d	A1+R2	D1	10YR8/1灰白	222	46	
340	EJ16	E805Q[礫治]	12.4	2.9	10.0	a	d	A1+B1	D1	10YR7/2c.2s+黄褐色	222	46	
363	EJ17	E778Q[大型土塊]	16.0	1.6	4.0	b	-	A1?	D2?	10YR8/3浅黄褐色	223	53	
399	CT11	C6含骨目	11.8	-	1.5	a	-	B1+R2+R3	F1+字痕し)	10YR8/2灰白	灯明皿?	224	53
601	DB13	C120Q[大型土塊]	5.4	1.2	6.4	b	d	C2	丸磨削? (磨削部に板状痕)	7.5YR7/4c.2s+橙	224	53	
602	DB13	C120Q_変[大型土塊]	16.4	1.3	3.0	b	-	C2	D1	7.5YR7/4c.2s+橙	224	53	
621	GP27	F96Q[大型土塊]	18.7	1.6	5.0	a	-	A1+B1	D1(足込跡に6の字の十字)	10YR8/3浅黄褐色	225	53	
632	HD72	G112Q[大型土塊]	10.3	2.5	5.4	a	-	A3	D2	5YR7/4c.2s+橙	225	54	
652	GR30	F24Q[土師器的遺構]	14.0	2.6	2.5	a	d	A1	D1(二股)	2.5YR7/3赤褐色	226	54	
658	GR30	F24Q[土師器的遺構]	16.7	-	3.0	a	d	A1	D1+E*(口縁部から見て略円形)	10YR8/2灰白	226	54	
659	GR30	F24Q[土師器的遺構]	15.5	2.1	8.2	a	d	A2	D1	10YR8/2灰白-2.5YR7赤褐色	226	46	
475	AO1	A40[SK]	12.4	2.3	1.5	a	-	A3?	D	10YR7/2c.2s+黄褐色	228	54	
495	DH15	D68[SK]	17.3	1.7	6.2	a	-	C1+B1	-	7.5Y4/1灰-5YR7/4c.2s+橙	228	55	
496	DH15	D68[SK]	9.4	2.0	8.0	c	-	B1+C3	F2?	10YR3/1黒褐色	228	51	
510	GP94-GQ94	H355Q[地下]	17.0	1.3	3.3	b	-	B1+R2	F	10YR8/3浅黄褐色	灯明皿	229	55
511	GP94-GQ94	H355/H356Q[地下]	18.0	1.6	2.1	a	-	B1+R2	F(十字痕し?)	10YR8/3浅黄褐色	229	55	
512	GP94	H355Q[地下]	16.8	1.3	2.2	a	-	A1+B1	D1+E	10YR8/3浅黄褐色-N4/0灰	229	55	
514	BQ9	B151Q[SD(遺構類遺)]	6.8	1.4	12.0	b	d	B1+C1	F1	10YR7/3c.2s+黄褐色	229	51	
525	BQ9	B151Q[SD(遺構類遺)]	17.3	1.4	11.4	b	e	C1	F(十字痕し?)	10YR8/3浅黄褐色	229	51	
528	BQ10	B152Q[SD(遺構類遺)]	11.2	1.5	5.5	a	-	R2	D1+E?	10YR8/2灰白	229	51	
531	HD77	H153Q[特殊土塊]	10.8	2.0	2.1	a	-	B1	-	10YR8/2灰白	240	55	
551	BR2	A39Q[SK]	10.2	2.2	2.5	a	-	C2	D	10YR7/3c.2s+黄褐色	240	56	
559	B05	B114[SK]	6.5	1.4	12.0	b	e	B1+R2	-	10YR8/2灰白	241	51	
560	B05	B114Q[SK]	17.3	1.5	11.0	b	e	-	-	10YR8/3浅黄褐色	241	51	
561	B05	B114[SK]	6.7	1.5	10.0	b	e	C1	F1	10YR8/3浅黄褐色	241	51	
562	B05	B114Q[SK]	17.3	1.5	11.0	a	e	-	-	7.5YR8/4黄褐色	241	51	
563	B05	B114Q[SK]	7.4	1.4	12.0	b	e	-	-	10YR8/4黄褐色	241	51	
564	B05	B114Q[SK]	17.6	-	10.0	b	e	R2	F?	10YR8/2灰白	241	51	
565	BN3-B06	B114Q[SK]	6.9	1.3	5.4	a	d	R3	D	7.5YR7/4c.2s+橙	241	51	
566	B05	B114Q[SK]	8.7	2.1	8.6	b	d	R2	D1+E	10YR8/2灰白	灯明皿	241	51
567	B05	B118Q[SK]	19.8	1.2	3.3	b	-	B1	F2	10YR8/3浅黄褐色	241	56	
568	B05	B118Q[SK]	9.0	2.6	12.0	b	e	R1	F?	10YR8/2灰白	241	51	
569	BMS-BN3	B114[SK]	9.4	2.0	11.0	b	e	R2?	F1(板状工具)	10YR8/2灰白	241	51	
570	B05	B114Q[SK]	9.9	2.1	6.4	b	-	C2	F?	10YR8/3浅黄褐色	241	56	
571	B06	B114Q[SK]	8.9	2.0	12.0	b	d	B1+R2	F?	10YR8/2灰白	灯明皿	241	51
572	BN3-B06	B114Q[SK]	10.0	1.8	10.4	b	d	B1	D1+E?	10YR8/3浅黄褐色	241	51	
573	B05	B114Q[SK]	10.0	1.9	5.0	b	-	R2	F?	10YR8/3浅黄褐色	241	56	
574	B05	B114Q[SK]	11.0	-	8.5	b	-	C2	-	10YR8/3浅黄褐色	241	56	
575	B05	B114Q[SK]	10.4	1.9	5.5	b	-	-	-	N2/0暗	241	52	
576	B05	B114Q[SK]	10.8	2.0	10.0	a	d	R2	D1	10YR8/2灰白	241	52	

表118 土器器血観察表(3)

遺物番号	ドリット	出土した遺構 [遺構種類]	法 規		規格 [M/2]	形 態	調 整		監 査 色 調	備 考	採集 番号	図録 番号	
			口径	器高			外 面	内 面					
377 BNS	B114(SX)		11.5	2.0	10.4	b e	B2	F 7	10YR8/2灰黄		241	32	
378 BNS	B114(SX)		11.4	1.8	6.4	e e		F 7	10YR8/4灰黄		241	32	
379 B06	B114E(SX)		12.4	-	11.0	b e	B2	F 7	2.5Y8/2灰白		241	32	
380 BMS・BN・B06	B114E(SX)		11.7	2.4	8.2	a e?	C1	D 7	10YR8/3灰黄		241	32	
381 B06	B114E(SX)		10.0	1.8	2.8	b	-	C2		10Y7/2(2.5)灰黄		241	32
382 B06-BN4	B114E(SX) 母口含む		11.7	3.4	7.5	a	-	A3?	D	10YR7/2(2.5)灰黄		241	32
383 BNS	B114(SX)		10.6	3.6	9.0	a d	A2(1線部は細見のハナ朝)	D2+E	7.5YR8/4灰黄	灯明色	241	32	
642 BA	A12(SD)		7.9	1.9	11.0	b	C2(或は削ナリ)		10YR8/3灰黄		241	32	
643 BR2	A12(SD)		10.0	1.4	1.9	a	-	C2(或はハナ朝)		10YR8/2灰白		241	32
644 BA1	A12(SD)		10.4	1.7	1.6	a	-	C2	D	2.5Y8/2(灰白)-NS/90度		241	32
677 AT2	A22(SD)		15.4	1.1	2.0	b	-	C2	F 7	10YR8/2(灰白)		246	30
678 AS2	A2(SD)		6.5	1.3	6.0	b	-	C2	F 7	7.5YR8/3灰黄		246	30
679 AT-BA1-7	A2(SD)		7.3	1.4	6.6	b	d?	C2	F 7	10YR8/2(灰白)		246	32
680 AT6	A22(SD)		7.0	1.4	10.0	b	e	B1+R2+R3	F 7	10YR8/2(灰白)		246	32
681 AT2	A22(SD)		9.1	2.3	8.0	b	e	B1+R2	F1	7.5YR8/3灰黄		246	32
682 AT2	A22(SD)		9.0	2.1	12.0	b	e	B2+R3	F1	7.5YR8/3灰黄		246	32
683 AT-BA1-7	A2(SD)		10.0	1.5	2.5	b	-	B1+R2	F 7	10YR7/2(2.5)灰黄		246	30
684 AT-BA1-7	A2(SD)		10.0	1.9	2.0	b	-	C2	F 7	7.5YR7/4(2.5)灰黄		246	30
685 AT1	A22(SD)		10.4	1.5	2.5	b	-	C2		7.5YR8/3灰黄		246	30
686 AT3	A22(SD)		9.9	1.6	10.3	a d	B2	D+E	10YR8/2(灰白)		246	32	
687 AT6	A22(SD)		8.1	1.9	12.0	b	e	B3	F3	5YR8/2(灰白)		246	32
688 AT6	A22(SD)		9.6	2.2	11.0	C e	e	B1+R2+R3	F1+F2	10YR8/2(灰白)		246	32
689 AT-BA1-7	A2(SD)		10.0	1.7	2.0	b	-	C2	F 7	10YR7/2(2.5)灰黄		246	30
690 AT3	A22(SD)		10.9	2.7	7.0	b	e	B1+R2+R3	F2	10YR8/2(灰白)		246	32
691 AT6	A22(SD)		10.4	1.8	3.5	a	-	B3	D+E	10YR8/2(灰白)	灯明色	246	30
692 AT2	A22(SD)		9.9	2.1	12.0	b	e	B2		10YR8/2(灰白)		246	32
693 AT3	A22(SD)		11.7	2.6	11.6	a e	A3(一部)+B2	D1	10YR8/3灰黄	灯明色	246	32	
694 AT4	A22(SD)		11.2	2.1	8.3	b d	B2	F 7	(外面)10YR8/3灰黄(内面)10YR7/2(2.5)灰黄		246	32	
695 AT6	A22(SD)		10.9	2.1	10.4	b d	B1+R2	D		10YR8/2(灰白)		246	32
696 AT2	A22(SD)		-	-	1.5	b?	-	A?	D	2.5Y7/2(灰黄)		246	30
697 AT3	A22(SD)		12.7	2.2	5.5	a	-	A3?	D+E	10YR7/2(2.5)灰黄/NL/90度		246	32
698 AT1	A2(SD)		11.7	3.3	8.1	b	d?	C2	D1+E	10YR8/2(灰白)		246	32
699 AT6	A22(SD)		12.0	2.3	8.1	a d	B1+R2	D		10YR8/2(灰白)		246	32
700 AQ2-AR1	A20(SD)		11.5	2.1	6.0	b	-	B2	F3	10YR7/2(2.5)灰黄	灯明色	249	60
701 AQ2	A20(SD)		-	-	1.5	-	-	C2	D?	10YR8/1(灰黄)		249	60
702 AQ2-AR1	A40(SD)		18.0	1.3	2.7	a	-	B3	F?	10YR8/2(灰白)		249	60
703 AQ1	A40(SD)		18.0	1.3	3.5	a	-	C2	(断面4:指頭取)	10YR7/2(2.5)灰黄	灯明色	249	60
709 AR-AQ1	A40(SD)		18.1	1.4	3.5	b	-	B2+R3	F?	10YR8/2(灰白)	跡跡	249	60
770 AS1	A40(SD)		10.6	2.5	10.2	e d	B1+R2+R3	F 7	10YR7/2(2.5)灰黄		249	32	
771 AR1	A40(SD)		-	-	0.9	a	-	C2	D+E	10YR7/2(2.5)灰黄		249	60
793 BQ4	B120(SD)		17.4	1.6	7.0	b	-	C1		10YR7/2(2.5)灰黄		250	32
794 BQ4	B120(SD)		11.8	2.1	10.0	a	e	B1+R2	F4(断面1:目)	10YR7/2(2.5)灰黄		250	32
795 BQ4	B120(SD)		10.4	2.4	5.7	b d	B2	D2+F2	10YR8/4(灰黄)	灯明色	250	32	
806 B05	B134(SD)		17.1	-	5.8	b	-	B1+R2		10YR8/3灰黄		251	60
807 B06	B134(SD)		17.0	1.2	10.0	b	e	B2+R3	F?	10YR8/3灰黄		251	32
808 B01+B06	B134E(SD)		7.7	1.5	10.0	b	e	B2	F?	2.5Y8/2(灰白)		251	32
809 B06	B134(SD)		7.6	1.8	12.0	a e	B1+R2	F(「字」字状)	10YR8/3灰黄		251	32	
810 B06	B134(SD)		9.7	1.8	11.0	b	e	B2		10YR8/3灰黄		251	32
811 B04+B05	B134E(SD)		9.7	1.9	12.0	b	e	C2	D2(半面)+F1	10YR8/2(灰黄)		251	32
812 B04	B134(SD)		10.3	2.1	11.6	b	e	B2	D3+F1	10YR8/2(灰白)		251	32
813 B04	B134(SD)		12.2	2.6	8.3	b d	B2	D3+F2	7.5YR8/3灰黄		251	32	
814 B04	B134E(SD)		12.1	2.7	12.0	b d	B2	D3(半面)+F2	10YR7/2(2.5)灰黄		251	32	
815 B06	B134E(SD)		11.9	-	7.0	b	e?	B2	D3+F1(板状「字」)	2.5Y8/2(灰白)		251	32
816 B06	B134E(SD)		12.0	1.1	11.0	b	e	B2+R3	D3+F1	10YR8/2(灰黄)		251	32
817 B05	B134E(SD)		12.2	2.1	3.2	a	-	B1+C1	D1	10YR8/3灰黄		251	60
818 B05	B134E(SD)		11.3	-	6.0	b	e?	B2	D2+F2	10YR8/3灰黄		251	60
819 BQ9	B136(SD)		17.0	1.4	5.0	a	-	B2+R3	F?	10YR8/2(灰白)		252	32
846 BQ10	B179(SD)		9.4	2.0	5.8	b	-	C2	F(「字」字状)	10YR7/2(2.5)灰黄		253	32
847 BQ9	B179(SD)		10.0	-	3.5	a	-	B1	F4	7.5YR7/2(2.5)灰黄	灯明色?	253	61
855 B09	B262(SD)		7.7	1.7	10.9	e	C1	F3	10YR7/2(2.5)灰黄		253	32	
856 B09	B262(SD)		12.0	2.0	3.5	a	-	A3? (一部)	D2	10YR7/2(2.5)灰黄		253	32
867 B010	B262(SD)		12.6	2.3	7.6	a	-	B3+C1	D1	10YR8/4(灰黄)		253	32

表119 土師器皿観察表(4)

遺物番号	グラフィック	出土した遺構 [遺構種類]	位置	層	埋没深 (cm)	形制	調整		胎土色調	備考	図録 番号		
							断面	平面					
808	BN16	H262(SD)	11.9	2.3	10.0	a	d	C2	D1+D2+E	10YR8/2灰黄緑	253	57	
809	BP9	R262(SD)	11.8	2.2	10.0	a	d	A3+B1	D1(二段)+E	10YR6/2黄緑	253	58	
860	BP9	R262(SD)	12.3	2.4	12.0	a	d	A3?	D2+E	7.5YR7/3c, 2s+橙	灯明皿	253	58
892	DB15	C132(SD)	8.9	1.5	6.5	a	-	B1+B2	F?	10YR7/2c, 2s+黄緑		254	61
904	DJ15	D732(SD)	(7.2)	1.6	11.0	c	e	B1+B2	F?	10YR8/3灰黄緑		255	58
929	HC73	G432(SD)	12.3	2.4	9.7	a	e	B2	D1?	10YR8/2黄白		256	62
942	HC79	H122(SD)	(12.9)	-	1.9	-	-	A3+B2	D+E	10YR8/2黄白		257	62
988	G136	I272(SD)	7.4	1.4	12.0	b	d	C2	F3	10YR8/3灰黄緑		259	58
1004	DM4	B64(SK)	(10.4)	2.2	5.0	b	-	C1	-	7.5YR8/3灰黄緑		259	63
1043	DA14	C184(SK)	6.6	1.9	10.0	b	d	A3+C1	D2	10YR8/3灰黄緑		264	58
1049	DE15	D602(SK)	(10.4)	2.0	2.5	a	-	C1(内底面にハヤナナ)	D+E	10YR8/2黄白		264	63
1067	EJ16	E7002(SK)	(13.0)	-	1.7	a	-	A2+A3	D1+D2	10YR7/2c, 2s+黄緑		262	64
1067	GD29	F902(SK)	(14.7)	2.4	1.5	a	-	A2	D1(二段)	5YR8/4黄緑		263	64
1088	GD29	F902(SK), F3包含層 I	(15.8)	2.6	1.7	a	-	A2	D1(二段)	5YR7/3c, 2s+橙		263	64
1099	GP32	F702(SK)	(14.6)	-	1.5	a	-	A2	D1(二段)	10YR8/2黄白+5YR7/4c, 2s+橙		263	64
1156	HD77	H822(SK)	8.9	2.0	12.0	a	d	B1+B2	D1	7.5YR8/2灰黄緑		263	66
1158	GP95	H2062(SK)	(12.4)	2.6	1.2	a	-	A2?	D?	10YR8/2灰黄緑		263	64
1308	HC7	SL12(埋) 埋(石入り 溝)	(8.8)	-	2.5	a	-	C2	D2	10YR8/2黄白		267	67
1214	HD81	G132(SK)	(17.5)	-	2.2	a	-	A3	D2	10YR8/3灰黄緑+10YR7/3黄緑		267	67
1296	HD80	G232(SD)	(9.8)	2.1	2.0	a	-	B2+B3	-	10YR8/3灰黄緑+10YR4/1黄灰		270	68
1346	CB11	包含層	(9.2)	2.0	11.0	a	e	C1+C2	F1	10YR8/2灰黄緑		273	66
1347	BNS	包含層	(11.2)	1.8	6.3	b	e	B2	-	10YR8/2黄白		273	66
1348	BNS	包含層	(11.6)	3.0	3.0	a	e	A3	D+E	7.5YR8/3灰黄緑		273	66
1355	HC77	包含層	8.5	1.5	6.2	a	d	B1+B2+D3	F(板状土片?)	10YR8/3灰黄緑		273	69
1479	HD80	G40(遺跡状遺構(古 代))	8.2	2.0	2.0	b	d	C1	F?	10YR8/2黄白	灯明皿	280	74

表120 土製品観察表(1)

遺物番号	グラフィック	出土した遺構 [遺構種類]	種類	器種	径			胎土色調	形式・様式 など	備考	図録 番号	
					長さ	幅	厚さ					
2	BP10	B284(S) [P:SH16]	滑石焼	土鉢	(2.4)	1.2	-	0.5(孔径)	10YR8/2黄白		218	47
9	EP18	D430(S) [大型土坑(SH26)]	滑石焼	土鉢	4.6	1.5	-	0.4(孔径)	10YR8/2黄白		218	47
10	EP18	D430(S) [大型土坑(SH26)]	滑石焼	土鉢	2.8	1.4	-	0.4(孔径)	7.5YR8/2灰黄緑		218	47
11	EP18	D430(S) [大型土坑(SH26)]	滑石焼	土鉢	(4.3)	1.3	-	0.5(孔径)	2.5YR7/3灰黄緑		218	47
12	EP18	D430(S) [大型土坑(SH26)]	滑石焼	土鉢	2.4	1.4	-	0.5(孔径)	10YR8/2黄白		218	47
13	EP18	D430(S) [大型土坑(SH26)]	滑石焼	土鉢	(2.9)	0.7	-	0.8(孔径)	10YR8/2黄白		218	47
45	BP10	R789(S) [P]	滑石焼	土鉢	4.2	1.3	-	0.5(孔径)	10YR8/2灰黄緑		219	47
45	GR32	F902(S)	滑石焼	土鉢	4.6	1.9	-	0.5(孔径)	7.5YR8/3黄緑		219	47
133	CB6	R837(S) [SD]	紫砂焼	土鉢	(2.3)	(2.3)	(2.3)	0.6(孔径)	7.5YR8/2灰黄緑		222	48
134	CB6	R837(S) [SD]	紫砂焼	土鉢	(4.1)	(2.0)	(2.7)	0.3(孔径)	7.5YR8/3灰黄緑		222	48
135	CB6	R837(S) [SD]	紫砂焼	土鉢	2.7	(2.3)	(1.8)	0.3(孔径)	7.5YR7/4c, 2s+橙		222	48
136	CB6	R837(S) [SD]	紫砂焼	土鉢	4.3	3.4	3.2	0.3(孔径)	7.5YR8/4c, 2s+橙		222	48
137	CB6	R837(S) [SD]	紫砂焼	土鉢	4.9	(3.1)	2.8	0.5(孔径)	7.5YR8/3灰黄緑		222	48
293	CN10	C71(SD)	滑石焼	陶鉢	4.0	3.4	3.3	1.5(孔径)	2.5Y3/4黄赤		230	49
294	CL11	C71(SD)	磁石焼	土鉢	(14.0)	(9.2)	(1.1)	3.5(把手径)	2.5Y8/1灰白	流石4小眼 脚上?	230	45
295	CN11	C71(SD)	磁石焼	土鉢	(11.5)	(6.8)	(0.7)	-	2.5Y7/1灰白	流石4小眼 脚上?	230	49
303	CK11	C1802(SD)	滑石焼	土鉢	2.8	1.7	-	0.5(孔径)	10YR8/2黄白		230	50
375	RJ17	E770(S) [大型土坑]	滑石焼	土鉢	(3.8)	1.4	-	0.5(孔径)	10YR8/2黄白		233	53
414	DR14	C126 [大型土坑]	建築材	瓦(平瓦)	(7.4)	(11.2)	1.7	-	2.5Y8/1灰白-N2/0黄灰		234	50
420	DA14	C124 [大型土坑]	磁石焼	土人形(動物 +4脚部)	(3.5)	(2.8)	0.2	1.0(爪先+厚さ)	10YR7/2c, 2s+黄緑		234	53
428	GP27	F602 [大型土坑]	滑石焼	土鉢	(2.1)	0.9	-	0.45(孔径)	2.5YR7/4黄赤		235	53
429	GP27	F602 [大型土坑]	滑石焼	土鉢	(2.2)	1.2	-	0.4(孔径)	2.5Y6/2黄赤		235	53
434	HD92	G113 [大型土坑]	磁石焼	土鉢	2.2	3.4	3.2	0.3(孔径)	2.5YR7/3c, 2s+橙		235	54
441	HD22	G633(S) [第六建物]	滑石焼	土鉢	4.9	2.5	-	0.7(孔径)	10YR8/2黄白		235	54
446	HC77	G689(S) [大型土坑]	建築材	瓦(平瓦)	(11.0)	(10.8)	1.8	-	5Y5/1灰		235	54
456	GL101	I43 [大型土坑]	滑石焼	土鉢	4.1	1.4	-	0.5(孔径)	5YR5/4黄赤褐色		236	54
501	BC20	D600 (SE)	滑石焼	土鉢	4.9	1.4	-	0.3(孔径)	10YR7/4黄赤		236	55
533	HD97	H135(S) [特殊土坑]	磁石焼	土鉢	(3.7)	3.5	3.7	孔径不明	10YR8/4灰黄緑		240	55
609	BNS	B14(SK)	磁石焼	土人形(大型 粘土)	(4.7)	2.8	(2.5)	-	10YR7/3c, 2s+黄緑		244	52

表121 土製品観察表(2)

遺物 番号	タイプ	出土した遺構 (遺構種別)	種類	器 種	寸 法 (cm)			胎 土 色 調	形・様式 など	備 考	図 番 号	図 説 書 号	
					長さ	幅	厚さ						
750	AT2	A23(SD)	磁器類	瓦(丸口)	12.4	14.3	2.7	117(土曜)	2.5Y6/1灰濁		286	39	
791	BB4	B6(SD)	磁器類	瓦(平口)	34.0	19.4	1.8		2.5Y6/2灰濁		286	60	
806	DB13	CT3(SD)	磁器類	瓦(軒丸口)	寛永 (11)		2.0		7.5YR6/0暗 - 7.5Y4/0暗灰濁		284	61	
912	EC20	D47(SD)	磁器類	土鍋	5.3	1.3		0.4(丸浮)	7.5YR6/0暗		286	61	
944	HC77	H11(SD)	磁器類	煎茶碗(大)	19.0	1.3	2.8		2.5Y7/1灰白	古瀬川(後期)	前期全面施釉	287	30
996	GI165	I275(SD)	磁器類	瓦(軒丸口)	6.50	4.50	1.8		2.5Y7/1灰白-N3/0暗灰		286	63	
1041	DB13	CT14(SK)	酒樽	小年(御1月用)	3.7	3.6	0.4		5YR6/1灰白	幕末		284	63
1042	DB16	D1(SK)	酒樽	土鍋	3.4	1.3		0.3(丸浮)	2.5Y6/2灰白			284	63
1090	EJ16	E820(SK)	酒樽	土鍋	3.8	2.5		0.4(丸浮)	10YR5/2灰濁			287	64
1116	GQ30	F260(SK)	酒樽	土鍋	4.2	1.5		0.5(丸浮)	10YR5/2灰濁			284	64
1119	GR31	F260(SK)	酒樽	土鍋	3.6	1.2		0.3(丸浮)	10YR6/2灰濁			284	64
1120	GQ30	F260(SK)	酒樽	土鍋	4.3	1.6		0.5(丸浮)	10YR5/2灰濁-10YR7/2暗 - 灰濁			284	64
1123	GP19	F300(SK)	酒樽	土鍋	4.3	1.2		0.5(丸浮)	10YR7/2暗 - 灰濁-10YR4/1灰濁			284	64
1167	G411	H640(SK)	酒樽	土鍋	3.2	1.4		0.4(丸浮)	7.5YR4/2暗-5YR5/0暗			286	67
1334	HB62	G37(SX)	磁器類	瓦(丸口)	19.50	12.0	3.4	18.0(土曜)	2.5Y7/2灰濁		286	60	
1335	HC63	G37(SX)	磁器類	瓦(丸口)	7.3	9.2	2.5		2.5Y6/2灰濁		286	60	
1340	GQ29	F42(SB)(AT)	酒樽	土鍋	2.1	11.5		0.4(丸浮)	10YR6/2暗 - 灰濁			275	73
1442	G027	F473(SD)(AT)	酒樽	土鍋	4.7	1.0		0.5(丸浮)	10YR7/2暗 - 灰濁			278	75
1512	HB59	G289(SD)(AT)	酒樽	土鍋	5.5	1.9		0.4(丸浮)	10YR6/2灰濁			281	75
1542	HB66	G289(SD)(AT)	磁器類	瓦(平口)	34.25	13.40	2.5		2.5Y6/2灰濁			284	75
1524	HC72	G617(SD)(AT)	酒樽	土鍋	4.1	1.8		0.5(丸浮)	2.5Y6/2灰濁			283	78

表122 磁石観察表

遺物 番号	グリッド	出土した遺構 (遺構種別)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	種 別	磁石使用方法	磁石産地	備 考	図 番 号	写真 版 番 号
2001	AP1	A100(SR)	5.71	3.34	0.99	24.3	仕上浮磁	置き	鳴滝(黄色系)		286	77
2002	DB14	C包含層II	6.66	5.61	1.18	47.0	仕上浮磁	置き	鳴滝(黄色系)		286	77
2003	BR9	B包含層	5.60	3.07	1.22	22.1	仕上浮磁	置き	鳴滝(黄色系)		286	77
2004	B16	B134(SD)	3.84	3.59	0.83	15.0	仕上浮磁	置き	鳴滝(黄色系)		286	77
2005	BI3	A4(大型土坑)	9.85	5.80	0.80	48.0	仕上浮磁	置き	鳴滝(黄色系)		286	77
2006	EJ17	E780(SD)(鍛冶)	8.44	4.61	0.74	30.9	仕上浮磁	置き	鳴滝(灰緑色)		286	77
2007	HC76	H包含層III	7.40	3.13	1.41	35.5	仕上浮磁	置き	鳴滝(肌色)		286	77
2008	EJ17	E780(SD)(鍛冶)	8.92	5.35	1.18	75.9	仕上浮磁	置き	鳴滝(肌色)		286	77
2009	EJ17	E780(SD)(鍛冶)	12.42	7.05	1.00	62.0	仕上浮磁	置き	鳴滝(灰緑色)		286	77
2010	AS3	A2(SD)	2.92	3.62	0.93	9.0	仕上浮磁	置き	出羽		286	77
2011	GQ95	H346(SD)(P)	11.48	5.56	5.44	485.5	中磁	手持ち	伊予		286	77
2012	GC29	F183(税見溝)	9.38	6.78	3.31	255.0	中磁	置き	伊予		286	77
2013	HC60	G包含層IV	9.45	6.08	3.49	220.0	中磁	手持ち	伊予		286	77
2014	BP5	B114(SD)(SX)	12.16	2.07	8.42	223.5	瓦磁	手持ち	大村		287	77
2015	HB62	G37(SD)(SX)	7.65	4.85	1.91	103.6	瓦磁	手持ち	大村		287	77
2016	HD72	G52(SK)	9.81	4.91	2.81	102.3	瓦磁	手持ち	大村		287	77
2017	FF23	F681(SD)(大型土坑)	6.69	5.64	3.00	106.6	瓦磁	手持ち	山口		287	77
2018	HB61	G132(SX)	8.71	6.09	2.26	223.6	瓦磁	手持ち	不明		287	77
2019	BN-Q4-6	B114(SX)	7.94	5.04	1.84	82.7	瓦磁	手持ち	山口		287	77
2020	DB14	C93(SD)(SK)	12.97	6.41	2.87	281.9	瓦磁	手持ち・置き	山口		287	77
2021	HC65	G包含層III	8.83	4.26	3.04	127.6	瓦磁	手持ち	山口		287	77
2022	HC63	G37(SD)(SX)	7.76	4.68	4.79	191.5	瓦磁	手持ち	山口		287	77
2023	GA27	F477-SK4(SD)(SB)	13.02	9.01	7.03	902.7	瓦磁	手持ち	在地か		287	77
2024	GF28	F39(SD)(SK)	25.25	10.94	6.45	2917.4	瓦磁	置き	大形磁石		288	77
2025	GJ109	I275(SD)	6.67	5.84	1.97	71.0	瓦磁	置き	大村		288	77
2026	BQ9	B735(SD)(SE)	16.72	13.90	7.61	1418.2	瓦磁	置き	大村	大型磁石	288	77
2027	HD71	G431(SD)(SK)	14.18	9.72	4.11	973.0	瓦磁	置き	大村		288	77
2028	GE28	F39(SD)(SK)	37.47	9.16	6.01	2225.0	瓦磁	置き	大村	大型磁石	288	77
2029	EJ17	E780(鍛冶)	49.33	12.57	12.68	7400.0	瓦磁	置き	大村	大型磁石	289	77
2030	EJ17	E780(SD)(鍛冶)	38.45	19.67	9.46	10600.0	瓦磁	置き	大村	大型磁石	289	77
2031	EJ16	E831(鍛冶)	19.60	17.20	10.80	4119.3	瓦磁	置き	大村	大型磁石	290	77
2032	EJ17	E780(SD)(鍛冶)	19.20	11.34	9.02	1262.5	瓦磁	置き	山口	大型磁石	290	77
2033	EJ17	E780(SD)(鍛冶)	32.59	14.84	9.61	6000.0	瓦磁	置き	山口	大型磁石	290	77
2034	EJ16	E835(鍛冶)	20.70	16.20	8.40	3889.0	瓦磁	置き	山口	大型磁石	291	77
2035	EJ16	E835(SD)(鍛冶)	27.14	9.87	8.49	3055.0	瓦磁	置き	山口	大型磁石	291	77

表123 石製品観察表

遺物番号	グループ	出土した遺構 (遺構番号)	器 種	石 種	残存率	刃部属性	形態形成	素材種類	素材形態	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	図録 番号	写真 番号
2000	AB2	A45(1)	石製錐	安山岩	先端欠	SD	SD	不明	楕圓削片	7.24	3.23	0.31	18.2	292	78
2002	F122	F122(1)	石製石鏟	安山岩	完整	通用外	SP	不明	楕圓削片	5.36	1.87	0.49	4.9	292	78
2008	CN14	C25(1)	石製石鏟	花崗岩	完整	SP	SP	不明	削片	1.97	1.26	0.29	0.7	292	78
2009	CL9	C43(1)	石製石鏟(部分 磨製)	花崗岩	完整	oSP	oSP	不明	削片	1.26	1.31	0.23	0.2	292	78
2010	EN18	E672(1)	石製	花崗岩	完整	oSP	oSP	不明	削片	1.83	1.51	0.27	0.6	292	78
2011	FF25	F122(1)	石製石鏟	花崗岩	完整	oSP	oSP	不明	削片	1.91	1.57	0.31	0.6	292	78
2012	GC26	F122-SD1(SD)	石製	花崗岩	完整	oSP	oSP	不明	削片	2.07	1.46	0.25	0.5	292	78
2013	GP94	H369(1SD)	石製石鏟	花崗岩	完整	oSP	oSP	不明	削片	1.97	1.72	0.25	0.4	292	78
2014	HD21	C25(1)	石製石鏟	花崗岩	完整	oSP	oSP	不明	削片	2.29	1.55	0.41	1.3	292	78
2015	AS6	A45(1)	石製石鏟	花崗岩	先端欠	SP	SP	不明	削片	2.33	1.71	0.48	1.6	292	78
2016	DD14	C93(SK)	石製石鏟	花崗岩	先端欠	SP	SP	不明	削片	2.59	1.41	0.41	0.8	292	78
2017	A79	A45(1)	石製石鏟	花崗岩	基部欠	SP	SP	不明	削片	2.36	1.31	0.33	0.8	292	78
2018	G027	FT19IV(1)レナチ	石製石鏟	花崗岩	完整	HP	HP	不明	削片	2.68	1.77	0.67	3.9	292	78
2019	G027	FT19IV(1)レナチ	石製石鏟	花崗岩	完整	SP	SP+HD	不明	削片	4.10	2.30	0.69	2.9	292	78
2020	G027	FT19IV(1)レナチ	石製石鏟	花崗岩	完整	SP	なし	不明	削片	3.66	2.68	1.12	13.2	292	78
2021	G027	FT19IV(1)レナチ	石製石鏟	花崗岩	完整	SP	なし	不明	削片	5.71	8.15	1.27	35.0	292	78
2022	G027	FT19IV(1)レナチ	石製石鏟	花崗岩	一次加工削片	通用外	HD	不明	楕圓削片	2.91	2.79	0.69	8.3	292	78
2023	G027	FT19IV(1)レナチ	石製石鏟	花崗岩	一次加工削片	通用外	HD	不明	楕圓削片	4.65	3.39	1.19	16.6	292	78
2024	G027	FT19IV(1)レナチ	石製石鏟	花崗岩	完整	MP	なし	不明	削片	2.83	3.34	0.76	5.6	292	78
2025	G027	FT19IV(1)レナチ	石製石鏟	花崗岩	完整	MP	なし	不明	楕圓削片	3.93	3.25	1.12	14.6	292	78
2026	HC39	G429(SK)	石製石鏟	花崗岩	一次加工削片	通用外	HD	不明	楕圓削片	2.80	4.08	1.54	49.9	292	78
2027	GP95-96	H336(SK)	石製石鏟	花崗岩	完整	SP	なし	不明	削片	9.75	4.36	1.84	93.7	294	78
2028	HN61	G613(遺跡内遺構)	石製石鏟	花崗岩	先端欠	SP	なし	不明	楕圓削片	6.78	3.34	1.31	28.7	294	78
2029	G129	F122(SD)	石製石鏟	花崗岩	完整	SP	なし	不明	楕圓削片	7.89	4.01	1.39	32.0	294	78
2030	H106	H429(SK)	石製石鏟	花崗岩	完整	SP	なし	不明	楕圓削片	9.71	3.91	0.99	32.6	294	78
2031	IC17	D429(SD(養生))	石製石鏟	花崗岩	基部欠	SP	なし	不明	楕圓削片	9.17	4.83	1.70	91.1	294	78
2032	IC17	D429(SD(養生))	石製石鏟	花崗岩	先端欠	SP	なし	不明	楕圓削片	6.48	4.14	1.09	92.8	294	78
2033	IK7	H104(SD)	石製石鏟	花崗岩	先端欠	SP	なし	不明	削片	6.19	4.14	1.67	48.6	294	78
2034	IL19	H429(SD(養生))	石製石鏟	花崗岩	基部欠	不明	不明	不明	削片	7.67	4.82	1.40	37.3	294	78
2035	HN61	G613(遺跡内遺構)	石製石鏟	花崗岩	先端欠	SP	なし	不明	楕圓削片	10.46	7.19	1.98	122.1	294	78
2036	HN64	C43(1)	石製石鏟	花崗岩	先端欠	SP	なし	不明	楕圓削片	11.49	6.65	1.64	104.0	294	78
2037	LM14	C134(SD)	石製石鏟	花崗岩	基部欠	不明	不明	不明	楕圓削片	19.63	4.81	1.58	92.1	294	78
2038	HN7	H100D(大型土坑)	石製石鏟	安山岩	完整	SP	なし	不明	楕圓削片	11.34	5.34	1.57	130.1	294	78
2039	ED19	D429(SD(養生))	石製石鏟	花崗岩	基部欠	SP	なし	不明	楕圓削片	7.73	5.95	1.32	81.5	294	78
2040	ED16	D429(SD(養生))	石製石鏟	花崗岩	先端欠	SP	なし	不明	楕圓削片	15.91	6.43	2.09	325.9	294	78
2041	DD14	C215(SD(養生))	石製	砂岩	基部欠	不明	不明	不明	楕圓削片	12.34	7.17	2.36	289.2	294	78
2042	DD13	C215(SD(養生))	石製	安山岩	完整	SP	なし	不明	楕圓削片	14.7	7.65	2.73	363.0	294	78
2043	IC18	D429(SD(養生))	石製	花崗岩	基部欠	不明	不明	不明	楕圓削片	9.99	7.36	3.72	296.2	294	78
2044	IC18	D429(SD(養生))	石製	花崗岩	基部欠	不明	不明	不明	楕圓削片	16.80	8.58	2.71	449.5	294	78
2045	IC18	D429(SD(養生))	石製	花崗岩	基部欠	不明	不明	不明	楕圓削片	10.86	7.64	2.34	210.0	294	78
2046	ED19	D429(SD(養生))	石製	花崗岩	基部欠	不明	不明	不明	楕圓削片	9.87	7.34	2.87	350.0	294	78
2047	ED19	D429(SD(養生))	石製	花崗岩	基部欠	不明	不明	不明	楕圓削片	22.82	7.20	3.33	596.0	294	78
2048	DD15	D106D(SD(養生))	石製	砂岩	完整	SP	なし	不明	楕圓削片	32.68	9.66	2.29	382.5	294	78
2049	IC17	D429(SD(養生))	石製	安山岩	基部欠	不明	不明	不明	楕圓削片	11.58	10.57	3.82	660.0	294	78
2049	ED1	D429(SD(養生))	石製	花崗岩	基部欠	不明	不明	不明	楕圓削片	14.58	10.57	3.82	660.0	294	78
2049	ER38	D429(SD(養生))	石製	花崗岩	基部欠	不明	不明	不明	楕圓削片	12.73	11.60	4.13	581.1	294	78
2081	G094	H369(SD)	石製	砂岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	長柄内蔵	17.27	7.86	3.66	491.8	297	28
2082	FF22	F683(SD)	石製	安山岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	11.48	11.21	5.05	1024.0	297	28
2082	HA1-5	A1(SD)	石製	花崗岩	先端欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	11.65	8.19	4.43	742.4	297	28
2084	IC13	F432(SK)	石製	花崗岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	30.79	10.39	5.74	802.4	297	28
2085	PQ25	F143D(SK(古代))	石製	花崗岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	長柄内蔵	13.64	12.1	6.45	1097.0	297	28
2086	IC116	H369(遺跡内遺構)	石製	安山岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	17.82	10.47	11.67	6000.0	297	28
2087	PQ23	F683(SD)	石製	安山岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	11.22	9.92	6.25	905.7	298	28
2088	GQ94	H43(1)	石製	安山岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	26.29	9.46	6.66	719.29	298	28
2089	GP22	F493(SK)	石製	砂岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	11.30	9.96	3.46	548.9	298	28
2090	PG23	F683(SD)	石製	花崗岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	16.61	16.30	4.86	2277.1	298	28
2091	EJ12	E236(遺跡)	石製	安山岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	大柄内蔵	33.27	20.35	15.20	11800.0	298	28
2092	EJ16	E303(遺跡)	石製	安山岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	大柄内蔵	17.82	20.47	11.67	6000.0	298	28
2093	IC116	H43(1)	石製	花崗岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	3.17	7.74	1.81	74.7	299	28
2094	IC124	F173(SK(古代))	石製	花崗岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	2.49	1.59	0.98	3.2	299	28
2095	HC41	G132(SK)	石製	砂岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	柄内蔵	6.61	6.61	2.97	57.4	299	28
2096	CAN9	IC13(大型土坑)	加工磚	砂岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	不明	28.38	17.14	12.65	4880.0	299	28
2097	PC13	F43(1)	石製	花崗岩	基部欠	通用外	通用外	通用外	不明	19.45	15.69	8.88	2290.0	299	28

表124 金属製品観察表(1)

通物 番号	グリッド	出土した遺構(遺構種別)	器 種	器 種 類	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (板釘)(cm)	重さ (g)	材質	検出番号	図版番号
3001	BQ10	B151[SD]	釘	角釘	4.5	1.1	0.5	6.3	鉄	301	80
3002	DH14	D67[P]	釘	角釘	8.6	1.0	0.6	12.1	鉄	301	80
3003	ER19	E300[SK]	釘	角釘	(6.5)	0.6	0.5	8.7	鉄	301	80
3004	EM20	E500[D(鍍治)]	釘	角釘	5.4	0.5	0.4	4.0	鉄	301	80
3005	EJ17	E700[D(鍍治)]	釘	角釘	6.1	1.1	0.8	5.9	鉄	301	80
3006	E116	E747[D(鍍治)]	釘	角釘	3.6	0.6	0.5	2.9	鉄	301	80
3007	EJ17	E770[D(大型土坑)]	釘	角釘	5.3	0.9	8.8	10.5	鉄	301	80
3008	EJ17	E770[D(大型土坑)]	釘	角釘	6.2	1.1	1.0	11.9	鉄	301	80
3009	EJ17	E770[D(大型土坑)]	釘	角釘	7.1	1.2	1.1	15.6	鉄	301	80
3010	EJ17	E780[D(鍍治)]	釘	角釘	7.1	1.0	1.0	9.8	鉄	301	80
3011	EL16	E包含層II	釘	角釘	8.0	0.9	0.5	13.2	鉄	301	80
3012	GF27	F66[D(大型土坑)]	釘	角釘	4.7	0.6	0.5	8.9	鉄	301	80
3013	GL28	F122[D(SB)]	釘	角釘	(5.2)	0.6	0.4	5.0	鉄	301	80
3014	GR29	F213[D(SK)]	釘	角釘	3.8	0.6	0.3	2.0	鉄	301	80
3015	GR29	F213[D(SK)]	釘	角釘	(6.2)	0.6	0.4	7.2	鉄	301	80
3016	GP32	F422[D(SK)]	釘	角釘	(3.4)	0.6	0.5	2.9	鉄	301	80
3017	HD73	G包含層II	釘	角釘	6.3	2.2	1.3	26.1	鉄	301	80
3018	HB57	G包含層I	釘	角釘	(4.9)	0.7	0.6	6.4	鉄	301	80
3019	HB59	G包含層I~II	釘	角釘	(4.2)	0.7	0.4	6.4	鉄	301	80
3020	GQ96	H322[D(SK)]	釘	角釘	3.2	0.8	0.5	4.5	鉄	301	80
3021	GP95	H330[D(SK)]	釘	角釘(頭巻釘)	4.5	0.6	0.7	6.8	鉄	301	80
3022	BO9	B262[D(SD)]	釘	角釘(頭巻釘)	7.9	0.5	0.4	5.6	鉄	301	80
3023	GR27	F222[D(SK)]	釘	角釘(頭巻釘)	5.0	1.1	0.6	4.8	鉄	301	80
3024	GK26	F1201[D(SK)]	釘	角釘(頭巻釘)	(3.4)	1.0	0.9	3.3	鉄	301	80
3025	GQ96	H330[D(P)]	釘	角釘	(4.1)	0.6	1.1	5.1	鉄	301	80
3026	BR6	H包含層	釘	丸釘	4.2	0.8	0.6	4.8	鉄	301	80
3027	CL12	C45[SD]	釘	丸釘	4.1	1.1	0.4	4.0	鉄	301	80
3028	E116	E747[D(鍍治)]	釘	丸釘	(7.1)	1.2	1.0	12.3	鉄	301	80
3029	EJ16	E841[D(P)]	錠		(4.4)	0.9	0.4	(6.8)	鉄	301	80
3030	HE73	G包含層I	錠か		3.9	0.3	0.3	2.9	鉄	301	80
3031	EJ16	E855[D(鍍治)]	「T」字状鉄製品		(3.7)	4.4	0.5	12.5	鉄	301	80
3032	CL13	C35[SD]	押付金状鉄製品		(8.0)	1.4	0.5	14.3	鉄	302	80
3033	EJ17	E780-SD13[D(鍍治)]	両状鉄製品		4.4	0.5	0.6	7.9	鉄	302	80
3034	E117	E749[D(SK)]	鉄線	平根線か	(7.2)	1.1	0.8	19.3	鉄	302	80
3035	HD69	G382[D(P)]	鉄線	平根線か	(10.7)	1.8	0.4	27.1	鉄	302	80
3036	HE72	G749[D(P)]	鉄線	平根線か	6.7	1.1	1.0	29.8	鉄	302	80
3037	BH5	B129[D(SD)]	壺		7.0	1.8	0.9	54.9	鉄	302	80
3038	CC-G10	B596[D(SD)]	壺		8.3	2.2	1.3	72.7	鉄	302	80
3039	BO9	B743[D(SD)]	壺		8.2	2.0	1.0	38.7	鉄	302	80
3040	CN14	C区包含層II	壺		7.3	2.0	1.0	61.3	鉄	302	80
3041	CM13	C185[SK]	壺		2.8	2.3	0.8	58.2	鉄	302	80
3042	BC2	A45[P(SH9)]	刀子		(14.4)	1.2	0.4	31.4	鉄	302	80
3043	CE7	B493[D(SK)]	刀子		(4.1)	1.6	0.3	6.6	鉄	302	80
3044	CF10	B689[D(SD)]	刀子		(5.4)	1.1	0.3	5.3	鉄	302	80
3045	GD26	F139[D(SK)]	刀子		(6.0)	1.7	0.4	12.9	鉄	302	80
3046	D114	D188[SE]	刀子		(3.3)	1.0	0.2	1.4	鉄	302	80
3047	EJ17	E770[D(大型土坑)]	刀子		(6.3)	1.7	0.7	17.7	鉄	302	80
3048	GQ11	F255[D(SK)]	刀子		12.1	2.5	0.3	41.8	鉄	302	80
3049	GA28	F477-SK30[S(B)SK]	刀子		(3.4)	0.7	0.2	1.7	鉄	302	80
3050	GE28	F110[D(SK)]	刀子か		(4.7)	1.4	0.4	4.7	鉄	302	80
3051	HD73	G包含層II	刀子		(3.6)	2.4	0.5	14.7	鉄	302	80
3052	HC72	G包含層III	刀子		(5.3)	1.5	0.2	5.1	鉄	302	80
3053	EJ16	E770[D(大型土坑)]	へら状鉄製品		5.0	1.1	0.4	6.1	鉄	302	80
3054	EJ17	E780[D(鍍治)]	漏斗状鉄製品		4.1	11.5	1.1	3.3	鉄	303	80
3055	CM13-14	C45[SD]	鏝		19.2	11.6	0.4	1.0	鉄	303	80
3056	BP10	B203[D(P)]	火打金		4.8	9.1	0.4	35.3	鉄	303	80
3057	GQ32	F包含層I	鉄線	無股線	(5.0)	2.9	0.3	14.1	鉄	303	80
3058	DB13	C118[SK]	楔蓋		(4.7)	2.8	0.4	3.9	鉄	303	80
3059	EN18	E785[D(P)]	半球状鉄製品		1194.0	1.9	0.1	(9.4)	鉄	303	80
3060	BQ10	B168[D(P(SH14))]	円盤状鉄製品か		(6.6)	-	0.1	(3.4)	鉄	303	80

表125 金属製品観察表(2)

遺物番号	グリッド	出土した遺構[遺構種別]	器種	副器種	最大径 (cm)	最大幅 (横径)(cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材質	検出番号	図版番号
3061	GB27	F185-P1①[SB内P]	板状鉄製品		(2.9)	(3.2)	0.4	12.7	鉄	303	80
3062	HCS7	G包含層IV	板状鉄製品		(8.1)	4.2	0.5	25.2	鉄	303	80
3063	EJ20	E589D[P]	クリップ状鉄製品		3.5	1.1	0.4	9.7	鉄	303	80
3064	GE-GF28	F35D[SK]	バナナ状鉄製品		5.8	1.1	1.2	20.3	鉄	303	80
3065	GD29	F4-SK1D[SB内SK]	金貝か		(2.0)	0.8	0.5	3.1	鉄	303	80
3066	EJ20	E589D[P]	三角形鉄製品		2.0	2.0	0.6	5.2	鉄	303	80
3067	-	GK排土	銅製鋳り金具		(7.2)	1.1	0.1	5.6	銅	303	80
3068	HB67	G包含層I	鉛玉		1.3	1.2	1.2	9.8	鉛	303	80
3069	HB55	G包含層III	鉛玉		1.4	1.4	1.2	10.3	鉛	303	80
3070	HC72	G包含層III	鉛玉		1.3	1.3	1.0	8.8	鉛	303	80

表126 銭貨観察表

遺物番号	グリッド	出土した遺構	副器種	分類	最大径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	材質	時代	備考	検出 番号	図版 番号
3071	DO17	D124D[P]	開元通宝	興寧錢(南)	2.4	0.7	0.65	4.1	銅	初唐年 621	裏面に背の銭貨が貼付している	303	80
3071	DO17	D124D[P]	順徳元宝	興寧錢(南東)	2.3	0.7	0.1	-	銅	初唐年 1190		303	80
3072	FA20	E76[P]	景徳元宝	興寧錢(北東)	2.2	0.6	0.1	1.7	銅	神皇年 1094		303	80
3073	GF95	H302D[特殊SK]	政和通寶	興寧錢(北東)	2.5	0.6	1	1.2	銅	神皇年 1111	葉書体	303	80
3074	HC69	H包含層III	寛永通宝	古寛永	2.4	0.5	0.1	2.5	銅	明暦ころ	古寛永の中でも新しいタイプ	303	80
3075	DA14	C包含層	寛永通宝	新寛永	2.3	0.8	0.66	1.4	銅	初唐年 1668	背文銭と思われる	303	80

表127 輪の羽口観察表

遺物番号	グリッド	出土した遺構 [遺構種別]	器種	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材質	検出 番号	図版 番号
3076	EM19	E621D[SK]	羽口	5.0	3.7	4.0	3.5	62.3	砂岩	303	80
3077	EL17	E671D[SK]	羽口	3.7	5.7	3.2	3.1	64.5	砂岩	303	80
3078	EL17	E760D[SK]	羽口	9.2	9.3	3.0	3.7	286.8	砂岩	303	80
3079	EL17	E762D[P]	羽口	4.5	4.2	2.8	2.1	32.8	砂岩	303	80
3080	RJ17	E780D[鍛冶]	羽口	3.6	4.8	3.9	3.0	40.3	砂岩	303	80

表128 木製品観察表

遺物 番号	グリッド	遺構名	遺構種別	遺物名	長軸径 (cm)	短軸径 (cm)	厚さ (cm)	その他の 法量	本取り	流 存 状 況	備考	検出 番号	図版 番号
4001	AO1	A100	SE	蓋?	18.0		1.3, 0.5		証目		漆付着	304	79
4002	AO1	A100	SE	蓋?	18.0		1.43, 1.0		証目	実存		304	79
4003	AP1	A100	SE	結物	8.2	7.5	0.80		板目	下部欠損		304	79
4004	AP1	A100	SE	結物	11.0	6.5	0.76		証目	下部欠損		304	79
4005	AP1	A100	SE	結物	11.9	3.2	0.80		板目	下部欠損		304	79
4006	AP1	A100	SE	結物	(11.5)	(3.7)	(0.8), (0.5)		証目	下端、左側面欠損、裏面剥離		304	79
4007	AP1	A100	SE	結物	(11.8)	7.4	(0.70)		板目	下部欠損、裏面剥離		304	79
4008	AP1	A100	SE	結物	(12.8)	5.2	1.10		板目	下部欠損		304	79
4009	AP1	A100	SE	結物	10.2	5.2	1.20		板目	下部欠損、表裏一部剥離		304	79
4010	AP1	A100	SE	板状木製品	15.9	2.5	0.60		証目	板状木製品の一部	漆付着	305	79
4011	AO1	A100	SE	不明竹製品	1.4, 0.65			復元径5.0	一			305	79
4012	AO1	A100	SE	匭	3.7	1.4	1.00		証目	実存		305	79
4013	AO1	A100	SE	匭	3.7	0.5	0.8, 0.3		証目	実存		305	79

第2部 上西田遺跡

第1章 調査の経過と方法

調査に至る経緯においては、第1部第1章第1節を参照。

試掘確認調査

段丘端部を流れる小俣川の西側に広がる広大な沖積地において、集落跡の検出を想定して重竹遺跡の試掘確認調査と同様に2×4mのトレンチを約20mの間隔で設定する方法で調査を行った(第1分冊第1部第1章図2)。しかし、遺構を確認できる可能性が高いと考えていた周囲で最も標高が高い平坦地では、現代の耕作土下は砂層・レキ層となっており、さらに掘削を行ったものの、遺構・遺物は検出できなかった。トレンチによっては、砂層上面に近世以降と考えられる畝状遺構を確認したが、集落跡に関係する遺構を確認することはできなかった。おそらく中世以降の集落は、現在の集落が立地している場所(西志摩遺物包含地)に存在していたと思われる。その現集落の北西に隣接する美濃市志摩字上西田・下西田地内では、地形がやや低くなる状況から、集落跡が存在する可能性は低いと考えていた。しかし、過去何度も起こったと思われる洪水による堆積の下から良好な状態で畝状遺構、水田跡を広範囲(図307)から検出した。水田跡については、良好な残存状況の畦畔や取水溝の存在から水田と判断した。また、やや少なめではあるが、335号トレンチからプラントオパールを検出し、水田である確証を得た(第3部第3章参照)。なお、288号トレンチからプラントオパールを検出できな

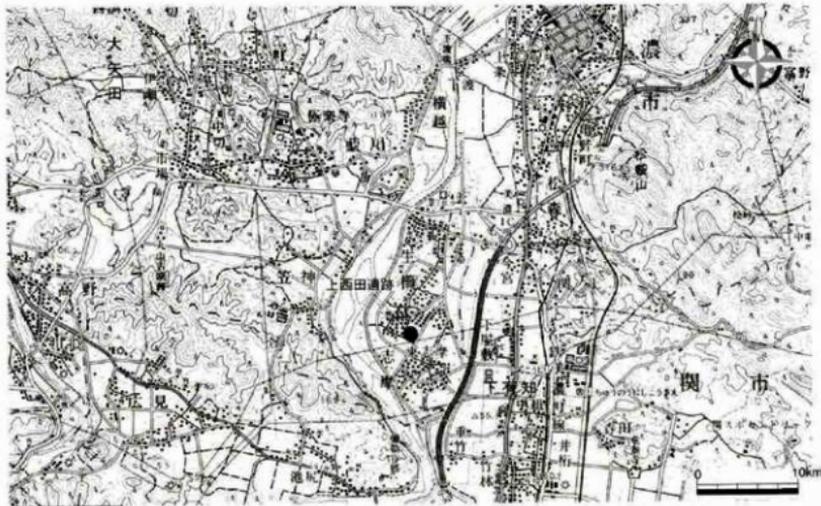
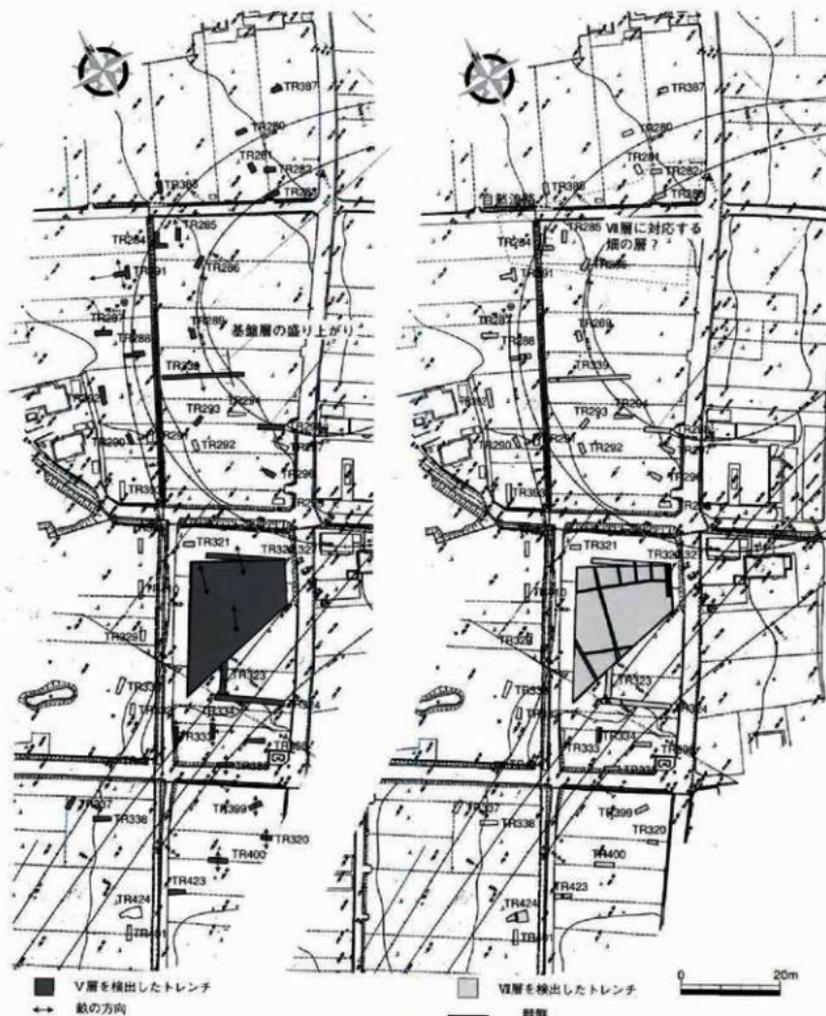


図306 上西田遺跡の位置 (S=1/50000、国土地理院発行1/50000地形図を使用)



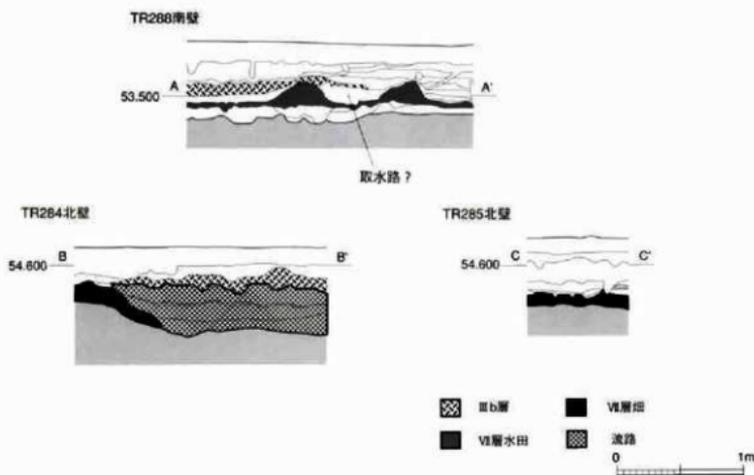


図308 V層・VII層を検出したトレンチ層位図 (S = 1/40)

表129 上西田遺跡の試掘トレンチ

トレンチ番号	V層	V層上面レベル高(m)	遺構	VII層	VII層上面レベル高(m)	時期	備考
284	○	54.491	×	VII層対応細層	54.420	○	流路
285	○	54.457	○	VII層対応細層	54.367	○	
286	○	54.277	×	○	54.041	○	
287	○	53.948	×	○	53.898	×	
288	○	53.657	×	○	53.597	○	
289	○	54.668	×	×		×	
281	○	54.460	×	×		×	
282	○	54.907	×	○	54.307	×	
283	○	54.877	×	○	54.767	○	
289	○	53.051	×	○	52.941	○	取水溝
290	○	53.726	×	○	53.676	×	
291	○		×	○	53.726	×	
292	×		×	○	54.193	×	
293	○	53.990	×	○	53.890	○	
294	×		×	VII層対応細層	53.940	×	
296	×	53.835	×	×		×	
297	△	54.045	×	×		×	
298	○	54.070	×	VII層対応細層	54.032	×	
320	○	53.566	○	VII層対応細層	53.516	×	
321	○	52.550	×	○	52.652	×	

トレンチ番号	V層	V層上面レベル高(m)	遺構	VII層	VII層上面レベル高(m)	時期	備考
322-327	△	52.477	○	○	52.417	○	
323	○	53.030	○	○	53.026	○	
324	○	52.950	×	○	52.880	○	
333	○	52.769	○	○	52.569	×	
334	○	52.817	○	○	52.619	○	
335	○	52.674	○	○	52.574	○	
338	○	51.997	×	○	51.887	×	流路
339	○	53.800	○	○	54.470	○	
340	○	53.362	×	×		×	
350	○	52.115	×	×		×	
387	○	55.038	×	×		×	
388	○	54.473	×	×		×	
391	○	54.321	○	○	54.271	○	
392	○	54.677	×	○	53.367	×	
398	○	52.519	×	VII層対応細層	52.449	×	
399	○	53.025	○	○	52.945	○	
400	○	52.800	○	○	52.650	×	
421	○	51.977	×	×		×	
423	○	52.520	×	○	52.420	○	
424	×		×	○	52.962	○	

層の堆積が見られるものは○、明確でないものは△、堆積がみられないものは×

かったのは、検出した畦畔が取水路であるという特徴に関係するのかもしれない。これらの遺構は、出土遺物から、中近世に営まれたものと判断し、新発見の遺跡として美濃市教育委員会と協議の上、上西田遺跡という名前と遺跡範囲を決定した。

発掘調査の方法

調査に至る経緯と試掘確認調査については、第1部第1章(第1分冊)に譲る。重竹遺跡と同様に、国土座標を基準に5×5グリッドを設定し、各グリッドに北東杭の名前を付してグリッド名とした。杭名は、重竹遺跡との位置関係を表すのと整理作業の混乱を防ぐ目的で、重竹遺跡調査区で用いたグリッド設定をそのまま用いた。重竹遺跡調査区の北東隅(X=-53530、Y=-23000)を原点として東西方向を100mずつ区切り(A~O)、さらにそれを5mずつ分割し(A~T)、南北方向については5mずつの区切りに、北から順に0から始まる数値を付与した。その結果上西田遺跡調査区は、NM58~OE67グリッドの範囲に含まれることになった。

調査は試掘確認調査で認定した2面の遺構面を対象とし、第1調査面(V層上面)の上層までバックホーによって掘削し、人力で精査を行った。第2調査面は人力でV層を掘削し、VII層上面の畦畔確認後、埋土となるVI層を掘削し、水田面を検出した。この間に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げた。

遺構名は、畝状遺構と水田跡という性格から、原則として付さなかった。VII層上面の取水溝、大畦畔のみそのまま「取水溝」・「大畦畔」という遺構名で扱った。図311で示した各水田の区画名は整理作業の段階で付したものである。

遺構の実測は、全体の平面図について模型ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を行い1/50で作図した。壁面の層位は1/20、その他の詳細な図面については原則として1/10で手測り測量を行った。

遺物・調査記録の整理作業

平成13年度10月より、出土遺物の整理作業を開始した。同年度中に行ったのは、遺物の洗浄、土器の硬化処理、遺物の注記までである。平成14年度から、土器の接合、遺構・遺物実測図の製図、遺物の写真撮影等二次的な記録整理を行い、平成15年度に報告書作成及び遺物・調査記録の収納・保管の作業を終えた。なお、発掘調査及び整理の体制は、表1(第1分冊第1部第1章参照)に記載したものと同様である。

《調査日誌抄》

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 9月20日 | 表土掘削開始と同時に土層観察用トレンチを南北・東西に入れる。 |
| 9月26日 | 表土掘削終了。 |
| 9月28日 | 遺構検出作業開始。 |
| 10月3日 | V層上面において、畝状遺構検出。 |
| 10月12日 | V層上面の空中写真測量実施。部分的に畝溝部分を完掘。 |
| 10月15日 | 調査区南西部に断ち割りを入れ、水田面を確認する。 |
| 10月16日 | 下層面への掘り下げ開始。大畦畔・水口検出。 |

- 10月26日 水田面掘り下げ継続。調査区の一部（水田10）で足跡検出。
 10月30日 VII層上面の空中写真測量実施。
 11月8日 畦畔解体作業開始。
 11月19日 調査終了。

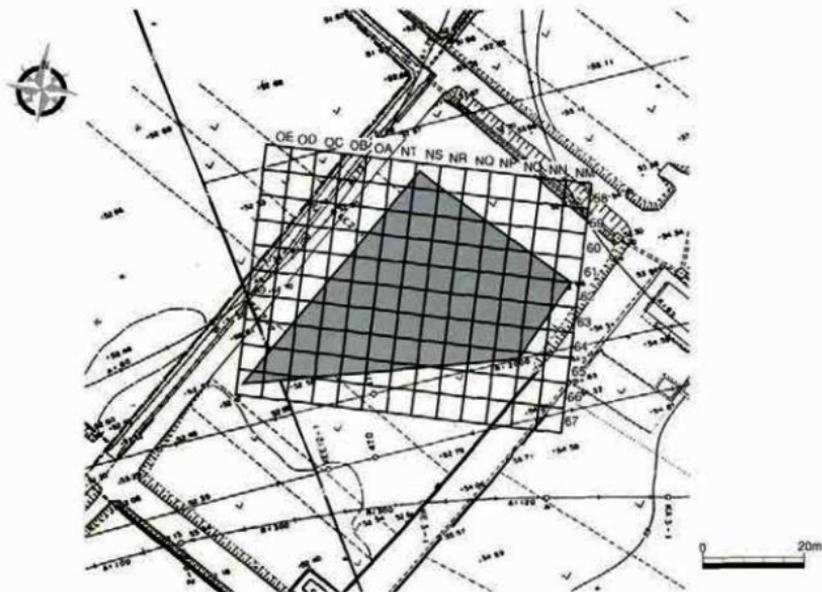


図309 上西田遺跡調査区のグリッド配置（1/1000）

表130 関市周辺の洪水の記録

西暦	元号	内容
1566	永祿九年	保戸島地区が川中島になる原初の事件
1638	寛永一五年	九月、長良・武儀・津保の諸川で出水
1650	慶安三年	九月、諸川で出水。遺州の各地が水没
1664	寛文四年	八月、長良川出水。武儀郡曾代村・上白金村・下白金村などで堤防破壊
1672	元禄二年	六月、武儀郡曾代村の堤防が切れ、曾代用水破壊
1699～1701	元禄二～一四年	美濃国全体で水害
1706	宝永三年	六月、大雷雨により美濃の六郡三五か村の山谷より洪水が押し出し、山崩れ等被害
1782	天明二年	水害が復重なる、今川切り入れ
1791	寛政三年	六月、長良川・津保川などで氾濫
1798	寛政一〇年	二度にわたって大洪水、美濃の各河川が氾濫
1801	享和元年	七月・八月に出水、戸田村・棚島村・下白金村・池尻村などで被害
1815	文化二年	美濃の諸河川が氾濫。保戸島の堤防や各用水が大破
1819	文政二年	四月、津保川出水
1822	文政五年	八月、津保川出水、長良川も氾濫
1837	天保八年	八月、大量風雨により各地に被害
1850	嘉永三年	八月、津保川出水、長良川も氾濫
1857	安政四年	四月、五月、七月に長良川が氾濫、五月に津保川も氾濫
1860	万延元年	九月、長良川の氾濫で今川の水増増加、現在に至る

参考：松原久男1999「第一部第五章一節 水害」『関市史 通史編 近世・近代・現代』関市教育委員会

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

上西田遺跡は、美濃市志摩地区内の上西田に所在する。遺跡の立地する場所は長良川によって形成された沖積堆積の平坦地であり、表面は完全な砂質である。長良川は中世以前まで生櫛地区の東側（現在の小俣川付近）を流れており、生櫛地区と対岸の笠神地区は地続きだったとされる。この長良川の痕跡は重竹遺跡の立地する低位段丘との境にある水田として残存している。遺跡の北側と西側の高台にそれぞれ生櫛と志摩の集落が立地し、遺跡はその間の若干標高が低くなった部分に広がっている。この低地は、遺跡の東側を走る道路に沿って南北に連なっており、旧長良川から分流する古い河道であったと考えられ、埋没後は長良川の氾濫源となっていたようである。現況は、すべて根菜類を中心とした畑地であり、川沿いの低地であるにもかかわらず、水田を造成できる環境になかったことが伺える。

第2節 歴史的環境

遺跡の立地する志摩地区は、志麻・島とも記し、川中島のようになった地形が地名の由来と思われる。建武二年（1335年）八月十四日の「美濃在庁（目代）施工状（前田文書）」に「島」とあり下有知御厨の一部であることを示す記述がみられる。「慶長郷長」には「志麻村」とあり、幕府領を経て元和元年（1615年）尾張藩領となった。「正保郷帳」では「志摩村」とみえ、「明暦覚書」には「島村」と記されている。村内には西河岸に領主である竹腰氏の邸宅が置かれていたようである。「濃州御行記」によると畑地ばかりで水田はなかったようで、水田に適した土地ではないことが分る。当地域は長良川の東岸（中世以前は西岸）であるが、たびたび水害にあったと考えられ（表130）、特に低地に所在する上西田・下西田では、水害のたびに水がついていたことを想像するに難くない。

周辺の遺跡には、広く古墳～近世の遺物が散布する生櫛遺物散布地や西志摩遺物散布地があり、すぐ西側には周知の遺跡である鍋屋遺跡（古墳・中世～近世）が立地する（第1分冊第1部第2章図4参照）。中世以前は長良川の対岸にあたる笠神地区と地続きであったと考えられていることはすでに述べたが、ここには方形周溝墓等を検出した古村遺跡を始め、古墳等多数の遺跡が立地している。上西田遺跡は、広大な遺物散布地の狭間にありながら、地表面で採集できる遺物もほとんどない。土地改良の影響もあろうか、先に述べたように遺跡が低地に立地しており、集落が形成されにくい状況にあったことを意味していると考えられる。

〈参考文献〉

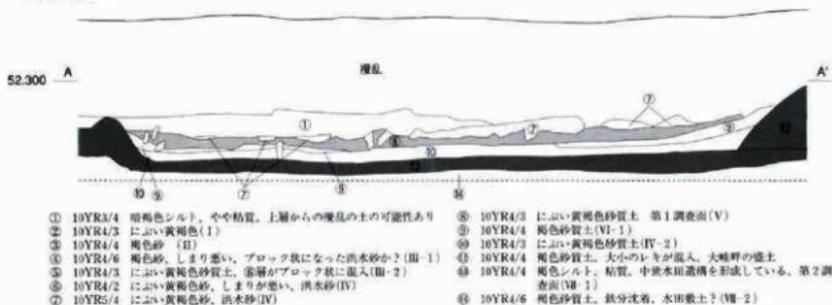
- 美濃市史編集委員会 1979『美濃市史』通史編上巻 美濃市
 美濃市教育委員会 1999『岐阜県美濃市遺跡分布地図』
 関市史教育委員会 1998『関市史』通史編近世・近代・現代
 所三男他 1989『岐阜県の地名』平凡社

第3章 基本層序

上西田遺跡の基本層序はⅧ層に分層することができる。以下に各層について述べる(図310)。

- I層 現代耕作土。現況では上面はほぼ平坦である。砂質の強い土であるが、若干粘質がある。調査区の東側では土地改良によって入れられた厚い盛り土層が見られるが、西側では土地を改変した様子がない。調査区北壁の層位では、I層が盛り土層の下になっている場所があり、地形的に低くなっていた東側のみ盛り土を行ったことが予想される。
- II層 上層より砂質が強く、土色は褐色を呈する。以前の耕作土であった可能性がある。
- III層 II層と同様に耕作土の可能性がある層であり、砂がブロック状に混入する。洪水砂によって覆われた畑を復興した結果と思われる。
- IV層 主にV層上面畝状遺構の埋土となっている層であり、完全な砂層である。III層に混入するブロック状の砂によく似ている。III層との境は明瞭である。
- V層 上面が第1調査面の畝状遺構であり、近世の耕作土と考える。畝溝の底には、やや粘質の強い堆積がみられ、降雨等によって畝から流れた土が堆積したものと考える。
- VI層 水田跡を覆う洪水砂層であり、2層に分けることができる。上層は耕作の影響からか、褐色を呈する。
- VII層 上面が第2調査面の水田跡であり、粘質のあるシルト層である。2層に分層可能であり、下層には鉄分が沈着している。下層の堆積は、水田を造成する際に利用された湿地性の堆積(床土)と思われる。
- VIII層 TR335(図307)の周辺のみに見られる、粘質のあるシルト層である。プラントオパール分析では、VII層より多くの稲のプラントオパールを検出している(第3部第3章)。TR335では2層に分層しており、下層は床土と考えた。一部のみに見られることから、最も初期に開発された水田層の可能性がある。
- IX層 混じりのない砂層であり、人の手が加わっていない堆積と考える。試掘確認調査で東側の微高地から検出した、現代耕作土直下の基盤層と同じ層であると思われる。この層の下は旧河床を示すレキ層となる場合が多い。

調査区北壁A



調査区北壁B



調査区西壁



●セクションポイントは図311を参照



図310 上西田遺跡調査区壁面層位 (S = 1/50)

第4章 調査の成果

第1節 検出した遺構

V層上面 (図311上段)

V層上面からは、断面がかまぼこ型になる畝とそれに沿う溝から構成される畝状遺構を検出した。試掘結果では、最も北では TR387、最も南では TR423からV層を検出している (図307)。V層上面の標高は TR387が最も高く、調査区の南西に位置する TR421が最も低い (表129)。TR329では、トレンチ東側の基盤層が盛り上がり、III b層が途切れている。東側の微高地の縁辺に位置すると考える。

調査区から検出した畝の高さは最も残りがよいもので約10cmであり、畝の頂部から頂部幅は約60cmではほぼ等間隔に並んでいる。畝の方向は、下層の水田1～5と水田6・7の間にある畦畔の位置で分かれており、北側がN10°E、南側がN22°Wになっている。これは、土地の区画が水田廃絶後も生きていた可能性を示唆するものであろう。下層水田跡の水田5・7・9が存在する部分は、水田と同様に段差が付いており、水田が洪水砂に覆われた際にもこの段差が残っていたと考える。調査区の東端には大畦畔があり、通常は道路として、洪水等の水害の際には堤防として利用されたものと思われる。遺構の年代は、IV層から9期の遺物が出土していることから、水田跡が洪水によって廃絶したのちに畑として復興し、9期に再び洪水によって埋没したものと考える。層序を見る限り、その後も畑として利用されてきたと考える。

VII層上面 (図311下段)

VII層上面からは、水田跡に伴う畦畔や取水路、足跡などを検出した。試掘結果では、TR282～TR286からVII層に対応すると考えられる層は確認したが、土質はIII b層のそれに類似しており、VII層水田跡と同時期の表土 (畑と思われる) の可能性がある。水田層と考えられる層は TR286以南から検出しており、南は TR424まで続いている。標高はV b層と同様に南側の方が低い。VII層を検出したトレンチから、東側と西側にある微高地の間に弧を描くようにVII層が堆積している状況がわかる。なお、TR284からは流路跡、TR288からは取水溝1に類似した畦畔を検出している (図308)。

調査区から検出した遺構は、畦畔と、2条の平行な畦畔によってつくられた取水溝、V層でも踏襲されている大畦畔である。畦畔は当時の盛り土の形をそのまま残しており、特に取水溝や水田面の段差を区画する畦畔はやや幅広くしっかりと造られている。逆に、水田3を区画する畦畔はやや幅が狭く、高さも低い。区画の性格を表わしているであろう。畦畔には5ヶ所の切れ目があり、その内2ヶ所が取水溝から水を取り込む水口、1ヶ所が取水溝へ排水するための尻水口、残りの2ヶ所が殺の低い水田へ水を送るための水口である。水口を塞いだ様子が見られないことから、洪水によって埋没した時期は、水田に水を溜める春の終わりから夏にかけてではないことが分る。また、取水溝のすべての水口には、扁平な川原石が置かれていた。水口を閉塞する目的で置かれていたものと思われる。この他、畦畔に川原石を立てた状態で埋め込んだ場所を7ヶ所検出した。石周辺の土の様子から、畦畔造成時に埋め込んだと考える。この石が設置された畦畔が区画の基準となる畦畔と考えると、目印と

しての機能を考えることができる。この付近が洪水による埋没が起りやすい状況であったと考えられると、立石による目印は有効であったと思われる。現在でも、この付近の畑は川原石によって、区画の目印を行っている。畑土が砂地であるため、杭や溝による目印では失われる可能性が高いためと思われる。また、境界の目印であるとともに、境界にまつわる祭祀的な意味合いも合わせ持っていた可能性がある。

取水溝は2条あり、いずれも北方向から取水を行っていたと考えられる。取水溝1は、ほぼ同じ規模の2条の畦畔によって囲まれており、溝の底面は両隣の水田面よりやや低い。埋土は大きく2層に分かれており、下層が流水時に堆積した層、上層が洪水砂と考える。水田7・8に水を供給した水口が残っているが、水田6は水田1からの田越で水が送られている。推定ではあるが、水田1・7・8と溝の東西の水田に交互に水を供給し、それ以外は田越して水を入れていたと考える。その理由は、現段階では水量の関係上、同じ場所で水を引き込むことを避けたためと考えるが、尻水口が水田7でのみ見られるなど疑問は残る。取水溝2は、調査区西隣の水田9が配される段に水を供給していた溝と考えられる。形態は取水溝1とはほぼ同じであるが、底面レベルは水田9とはほぼ同じである。埋土も取水溝と同じである。

大畦畔は、水田の造成とともに設置されたものと考えられ、芯となっている砂礫層をVII層と同じ土で覆っている。この畦畔が上層の段階にも存在したことは述べたが、おそらく上西田・下西田と他の字との東境となっている道路がその痕跡と考えられ、道路・堤防・土地の境界など複数の目的で設置されたものであろう。

この他、水田9から当時の足跡を検出した。人間のものの他、円形を呈する家畜の足跡と思われるものも検出した。足跡の埋土はやや粗い砂で、鉄分が沈着しており、上層のVI層とは異なっている。この砂の供給源については不明である。なお、足跡には直線的に並ぶものが見られたが、それ以外は規則性に乏しく、どのような作業時についたかは推定できない。

水田が造成された時期は、VII層から出土した遺物から7期と考える。VI層から遺物を検出することができなかったため廃絶時期は不明であるが、近世の遺物が全くVII層に混入しないことから、7期のうちに埋没したと考えたい。したがって、それほど長い間水田として機能していなかったと考える。

表131 VII層水田跡観察表

遺構名	グリッド	南北東西の方位	水	口	立石	面積(m ²)	備	考
水田1	NS-NT58-60	N 21 E	南側	—	—	27,882		
水田2	NQ-NR59-61	N 23 E	南東隅	南側2	—	29,048		
水田3	NP-NQ60-61	N 23.5 E	水田2より	—	—	21,720		
水田4	NO-NP60-61	N 23 E	—	—	南側1	18,255		
水田5	NM-NO61-62	N 22 E	—	—	南側2	18,859		
水田6	NS-OB62-65	N 20 E	—	—	—	55,278		
水田6'	NS-OA69-61	N 20 E	水田1より	—	—	33,229	低い残存状況の悪い畦畔で区画されている。	
水田7	NO-NI60-65	N 21 E	東側(水口・尻水口)	西側	—	81,292		
水田7'	NN-NP62-65	N 20 E	—	—	—	68,564	畦畔は検出できなかったが水田5と同じ段にある。	
水田8	NL-OB65-66	— — —	—	—	西側	31,770		
水田9	NS-NI65-66	— — —	—	—	—	9,275		
水田10	OC-OD63-66	— — —	—	—	—	42,659		
水田10'	OD-OE66-67	— — —	—	—	—	8,923	畦畔を調査区西壁で確認。	

1) 祭祀的な意義に関する見解は宇野隆夫氏から御指導頂いた。

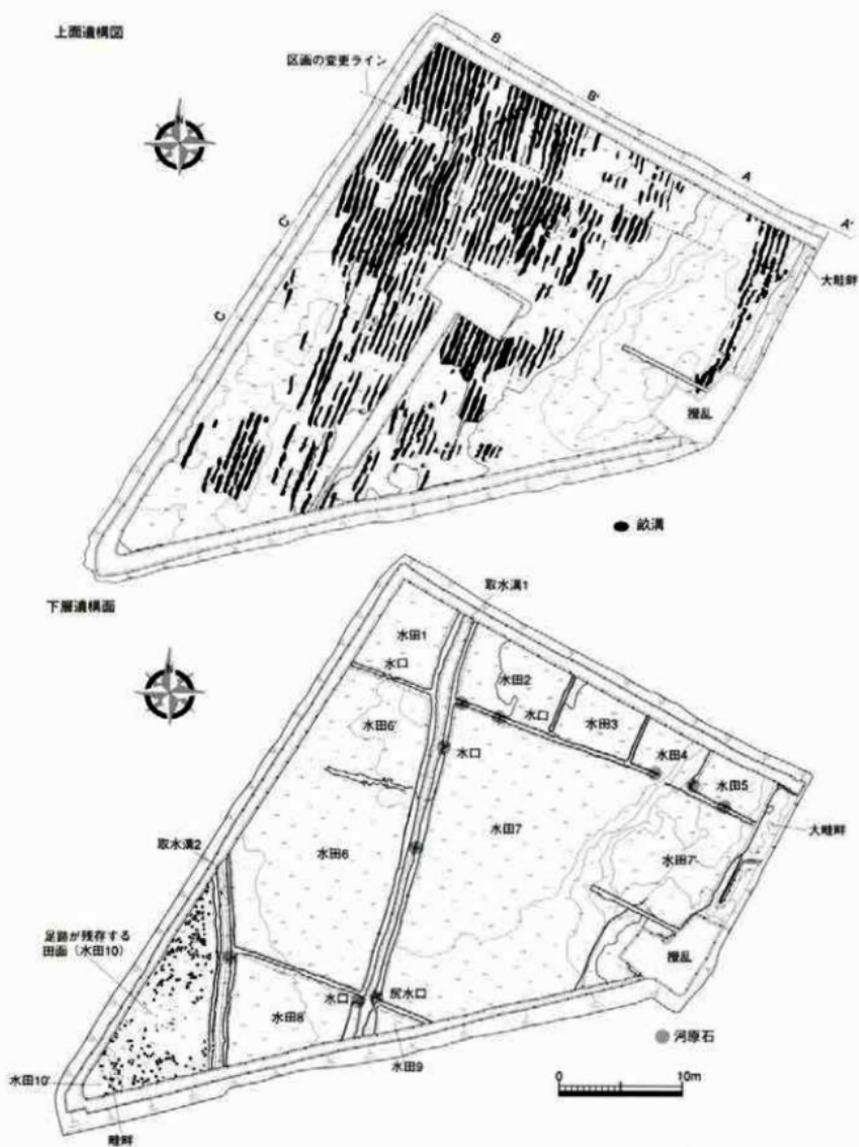


図311 上西田遺跡調査区の遺構配置 (S = 1/400)

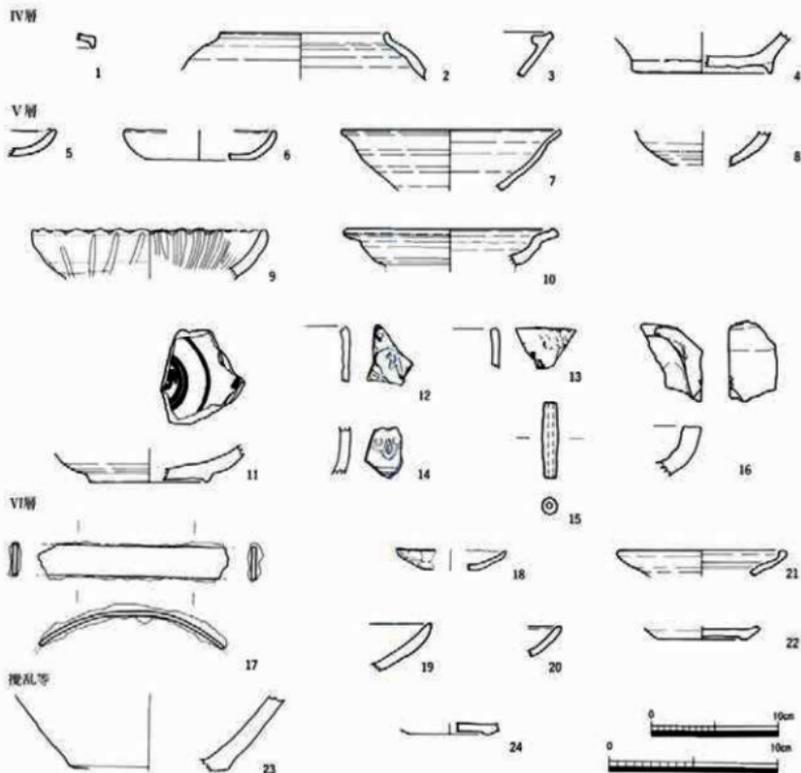


図312 包含層出土遺物 (S=1/3、3・4・17はS=1/4)

表132 層別別出土土器一覧表

層位名	I	II	III	IV	V	VI	VI-VII	その他	合計
須恵器	0	0	0	1	0	0	0	0	1
土師器 (中近世)	0	1	5	14	32	1	0	21	73
白瓷	0	0	0	0	1	0	0	0	1
白瓷系 陶器	0	0	2	8	20	0	1	3	34
古瀬戸	0	0	0	2	1	1	0	1	6
大室	0	0	0	2	1	1	0	2	6
常滑	0	0	0	0	0	0	0	0	1
埴川 (陶器)	1	0	6	21	38	1	0	1	77
埴川 (磁器)	0	0	0	1	1	0	0	0	2

層位名	I	II	III	IV	V	VI	VI-VII	その他	合計
常滑 (近世)	0	0	0	1	0	0	0	0	1
肥前?	0	0	0	1	0	0	0	0	1
唐津	0	0	0	0	1	0	0	1	2
産地不明 近世陶器	0	0	0	2	0	0	0	1	3
近現代 陶磁器	0	0	0	4	7	1	0	1	12
不明 土師器	0	0	1	0	4	1	0	1	9
不明 陶器	0	0	0	3	1	1	0	0	6
土製品	0	0	0	1	3	0	0	0	4
総計	1	1	14	61	110	7	1	27	251

第2節 出土遺物

今回の調査では、251点の遺物が出土した。遺物は、擾乱を除けば、すべて層内から出土しており、取水溝など明確な遺構内から検出したものはない。各層から出土した遺物は、上層から出土した遺物ほど新しい傾向がある。ただし各層は、洪水砂を除けば耕作土である可能性が高いことから、遺物の混在は少なからずあるものと思われる。

以下に各遺物について層位ごとに略述する(図312)。なお、遺物観察表(表133-136)については、重竹遺跡と同じ型式で作成した。

IV層(図312:1~4) 1は須恵器の杯蓋C類である。返りのある端部の内側がわずかに窪んで、そこから上方に屈曲する。内外面に自然釉が付着している。2は連房陶器の土瓶である。口縁部破片であり、外面に鉄釉・内面に灰釉が施釉され、口縁端部が露胎となる。瀬戸産であり、連房第8小期以降に比定される。3は連房陶器の水甕である。口縁部内面に粘土紐を貼り付けて受け口状にしている。瀬戸産であり、連房第9小期に比定される。4は古瀬戸の片口鉢である。底部内面が摩耗している。

V層(図312:5~16) 5・6は土師器皿である。5は底部内面に布目のようなものが見られる。6は薄手で焼成がよい。近世の土師器皿である可能性がある。7は白瓷系陶器の碗である。器高が低く器壁が薄いことから、北部系8~9型式に比定される。8は連房陶器の小碗である。胴部破片であり、胴部下半外面が露胎となる。連房第1小期に比定される。9は連房陶器の菊皿である。外面に沈線が残っている段階のもので、底部下半外面が露胎となる。連房第4小期に比定される。10は連房陶器の折縁鉄絵皿である。残存してはいないが、見込に蘭竹文が描かれる皿である。見込内面の長石釉は不明瞭であり、灰釉が口縁部内外面のみに施釉される。連房第2~3小期に比定される。11は連房陶器の鉄絵皿である。見込に描かれる文様は、同心円状の圈線と唐草文である。高台内が一部露胎となる。連房第1小期に比定される。12・13は連房陶器の鬘盤である。12は直線的に立ち上がる器形を持つ。摺絵は楓の葉のようにみえる。13は、平面が長方形になる鬘盤の角に当たる部分の破片である。摺絵のモチーフは不明である。ともに連房第5~6小期に比定される。14は連房陶器の瓶掛型火鉢である。外面にスタンプによる文様を施した後、外面に銅緑釉を施している。内面は露胎となる。瀬戸産であり、連房第8~9小期に比定される。15は土錘である。細長い器形が特徴であり、焼成が良く焼き締まっている。16は十能である。今回の調査で重竹遺跡から出土した十能(294・295)とほぼ同じ形態のものとする。瀬戸産であり連房第8小期に比定される。

VI層(図312:17) 17は何らかの円筒形の道具にはめられていた金具と考える。桶のタグのようなものが予想される。

VII層(図312:18~22) 18~20は土師器皿である。18は胴部・口縁部を指でつまんで整形している。19はやや厚手で大型の土師器皿になる可能性がある。20は口縁端部が面取り気味になっている。21は白瓷系陶器の碗である。酸化焼成しており胎土が赤い。北部系11型式の生田2号窩式に分類した。22は大窯の稜皿である。全面に鉄釉が施釉される。

その他(図312:23・24) 23は常滑の甕である。擾乱から出土した。24は大窯の稜皿である。22と同じ形態をもつ。

表133 上西田遺跡土器観察表

遺物番号	グリップ	層位	種類・器種	法量 (cm)		調整		調整等	文・飾・釉薬	胎土色調	形式・様式など	検出番号	写真図版番号		
				口径	口径	高さ	器高							口縁	底面
1	OR65	IV	須恵器 耳蓋付土器	—	—	—	0.5	内外面回転ナデ	—	10YR7/1M白	—	312	83		
2	NQ64	IV	須恵 (陶器) 土瓶	10.2?	—	—	1	内外面回転ナデ	鉄輪・灰輪? : 5YR7/2(茶・5Y8/4(黄)・5Y7/3(黄)	2.5Y8/3(黄)	透房8-8期以降	測1	312	83	
3	NS61	IV	須恵 (陶器) 水甕	—	—	—	0.5	—	灰輪 : 2.5Y7/3(黄)	10YR8/3(黄)	透房9-9期	測1	312	83	
4	NT62	IV	古瀬戸 片口鉢	—	11.1?	—	—	1.3	内面回転ナデ、外面回転ナデ、口縁白点	5Y6/1(灰)	—	—	312	83	
7	OB64	V	白瓷非陶器 甕	13.0	—	—	1.8	内外面回転ナデ	—	2.5Y7/2(黄)	北部系8-9期式	—	312	83	
8	NP61	V	須恵 (陶器) 小甕	—	—	—	—	内外面回転ナデ、外面回転ナデ	長石輪 : 2.5Y7/1(灰)	2.5Y8/3(黄)	透房1-4期	—	312	83	
9	NP61-NP62	V	須恵 (陶器) 菊形鉢	13.0	—	—	1.6	内外面回転ナデ	灰輪 : 2.5Y7/3(黄)	10YR8/1(灰)	透房4-4期	—	312	83	
10	NP62	V	須恵 (陶器) 新緑鉄絵甕	12.4?	—	—	2.2	内外面回転ナデ、外面回転ナデ	灰輪・長石輪? : 5Y7/3(灰)	2.5Y7/2(黄)	透房2-3-4期	—	312	83	
11	NP61	V	須恵 (陶器) 鉄絵甕	—	17.1?	—	—	3.5	内面回転ナデ、外面回転ナデ、口縁白点	鉄輪・内面・同心円状の黒線・唐草文、長石輪 : 2.5Y7/1(灰)	2.5Y8/3(黄)	透房1-4期	—	312	83
12	NR61	V	須恵 (陶器) 甕	—	—	—	—	—	鉄輪・外面・口縁、灰輪 (黒輪?) : 5Y8/2(灰)	5Y8/1(灰)	透房5-6-4期	—	312	83	
13	OD66	V	須恵 (陶器) 甕	—	—	—	0.3	—	鉄輪・外面・口縁、灰輪 (黒輪?) : 2.5Y8/2(灰)	10YR7/3(黄)	透房5-6-4期	—	312	83	
14	OD66	V	須恵 (陶器) 秋草唐草大甕	—	—	—	—	—	外面 : 唐草文・秋草文、鉄輪・新緑色	2.5Y8/2(灰)	透房8-9-4期	測1	312	83	
21	NS60-NS61	VI	白瓷非陶器 甕	19.4?	—	—	1.5	内面工具による回転ナデ、外面回転ナデ	—	7.5YR7/6(黄)	白瓷系11期式 (9期)	—	312	83	
22	NS64	V	大甕 甕	—	15.3?	—	2.6	内面回転ナデ、外面回転ナデ、口縁白点	鉄輪 : 5YR3/2(暗赤褐色)	2.5Y8/2(灰)	—	—	312	83	
23	NS64	雑乱	甕	—	12.8?	—	1.2	—	—	5Y7/1(灰)・7.5YR6/4(黄)	—	—	312	83	
24	NO62	V	大甕 甕	—	14.0?	—	—	5	内面回転ナデ、外面回転ナデ、口縁白点	鉄輪 : 7.5YR3/2(暗赤褐色)	2.5Y8/2(灰)	—	—	312	83

表134 上西田遺跡土器器皿観察表

遺物番号	グリップ	層位	法量 (cm)		調整		胎土色調	口縁残存 (X/12)	検出番号	写真図版番号	
			口径	口径	高さ	器高					口縁
5	NO62	V	7.9?	—	—	C1	D?	10YR8/2(灰)	1.1	312	84
6	OB64	V	8.8?	—	—	C1	D?	10YR7/4(黄)	1.5	312	84
18	ND62	VI	6.5?	—	—	B2+B3	F?	10YR8/4(黄)	2	312	84
19	OB65	VI	—	—	—	C2	D?	10YR7/3(黄)	1	312	84
20	NS65	VI	—	—	—	—	—	10YR7/3(黄)	1.2	312	84

表135 上西田遺跡土製品観察表

遺物番号	グリップ	層位	種類	器種	調整		法量 (cm)		胎土色調	形式・様式など	備考	検出番号	写真図版番号	
					長さ	幅	長さ	幅						
15	NQ62	V	煮物具	土鉢	—	—	4.5	0.9	1.0	10R6/4(黄)・赤褐色・5YR7/3(黄)	—	—	312	84
16	OA62	V	暖房具	土鍋	回転ナデ・回転ナデ、指ナデ	—	(4.5)	(3.5)	1.3	2.5Y8/3(黄)	透房8-8期	測1、鉄輪 : 7.5Y3/4(暗赤)	312	84

表136 上西田遺跡金属製品観察表

遺物番号	グリップ	層位	大別	器種	不明金具	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材質	検出番号	写真図版番号
17	NO62	VI	金属製品	不明金具	(15.0)	25.0	0.4	89.7	鉄	312	84	

第3部 自然科学分析

第1章 鍛冶関連遺物の分析

大澤正己・鈴木瑞穂（九州テクノロジー・TACセンター）

1. いきさつ

重竹遺跡は岐阜県関市下有知に所在する、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。

このうちE区では、12世紀末～16世紀前半に比定される鍛冶関連遺構が検出されている。さらにA、B、H、I区からも橢形鍛冶滓などの鍛冶関連遺物の出土が確認されているため、各地区、時期の鉄器生産の実態を検討する目的から金属学的調査を実施した。

2. 調査方法

2-1. 供試材

表139に示す。鍛冶関連遺物計24点の調査を行った。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見である。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の10倍もしくは20倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査よりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

滓中に品出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で順を追って研磨している。なお、金属組織の調査では腐食(Etching)液に5%ナイトル(硝酸アルコール液)を用いた。

(4) ビッカース断面硬度

滓中の鉱物と金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO):容量法。

炭素(C)、硫黄(S):燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

砒素(As):吸光度法。

二酸化珪素(SiO_2)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K_2O)、酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO_2)、酸化クロム(Cr_2O_3)、五酸化燐(P_2O_5)、バナジウム(V)、銅(Cu)、: ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法: 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(6) 耐火度

主に炉材の性状調査を目的とする。耐火度は、熔融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示される。胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1分間当たり10℃の速度で1000℃まで温度上昇させ、以降は4℃に昇温速度をおとし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を示している。

3. 調査結果

3-1. E区出土遺物

STE-1: 椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察: 大型でやや扁平な椀形鍛冶滓の側面部破片と推定される。側面3面が破面である。色調は灰褐色で、表面はやや風化傾向を呈す。全体に黄褐色の酸化土砂の附着が著しい。側面には長さ1cm以下の細かい木炭痕が多数散在する。破面は緻密で気孔はほとんど見られない。

(2) 顕微鏡組織: 写真2①~⑨に示す。①は試料上面に附着した酸化土砂中の錆化鉄粒で、廃棄後の2次のな付着物の可能性が高い。片状黒鉛が析出するねずみ鋳鉄組織痕跡が確認された。また②~④は滓中の錆化鉄粒及び金属鉄粒である。このような微細な鉄粒は主に試料上面側で観察された。

③中央の錆化鉄粒は鍛冶作業の際の熱影響を受けて細粒化しており、周囲には淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)が晶出する。また、④⑤は滓中に散在する金属鉄粒を5%ナイトルで腐食した組織である。ともにほとんど浸炭していないフェライト単相に近い組織であった。

⑥~⑨は滓部である。⑥⑧は白色粒状結晶ヴスタイト(Wüstite: FeO)が多数晶出する箇所、⑦⑨はヴスタイトの晶出は僅かで発達したファイヤライトが晶出する箇所である。

(3) ピッカース断面硬度: 写真2⑧⑨の中央の鉱物結晶における硬度を測定した。⑧の白色粒状結晶の硬度値は455Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値¹⁾450~500Hvの範囲内であり、ヴスタイトに同定される。また、⑨の淡灰色木ずれ状結晶の硬度値は633Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値600~700Hvの範囲内であり、ファイヤライトに同定される。

(4) 化学組成分析: 表140に示す。全鉄分(Total Fe) 50.18%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.01%、酸化第1鉄(FeO) 50.84%、酸化第2鉄(Fe_2O_3) 15.23%の割合であった。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は30.61%で、このうち塩基性成分($\text{CaO} + \text{MgO}$)を1.65%含む。主に製鉄原料の砂鉄中の不純物に由来する二酸化チタン(TiO_2)は0.20%、バナジウム(V)は0.01%であった。また酸化マンガン(MnO)は0.08%、銅(Cu)は<0.01%であった。脈石成分(Ti, V, Mn)の数値から、当該試料は砂鉄を始発原料とした鉄素材の鍛錬鍛冶工程で派生したと推測される。

STE-2: 椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察: やや薄手の椀形鍛冶滓片と推定される。上下面は生きているが、側面は全面破面

である。上面表層には薄くガラス質滓が付着しており、羽口先端の溶融物と推定される。破面は緻密で光沢が強い。

(2) 顕微鏡組織： 写真2⑩～⑫に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。なお、ウスタイト結晶の量と大きさは部位によって差がある。

(3) ピッカース断面硬度： 写真2⑩の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は529Hvであった。測定値からはマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) の可能性が高い。しかし、測定時の亀裂の影響等による誤差の可能性もあり、ウスタイトの可能性を完全に否定はできない。

(4) 化学組成分析： 表140に示す。全鉄分 (Total Fe) 49.03% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.02%、酸化第1鉄 (FeO) 51.93%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 12.36% の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は32.88%で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は2.97%を含む。主に砂鉄の不純物に由来する二酸化チタン (TiO_2) は0.23%、バナジウム (V) は0.01%であり、また酸化マンガン (MnO) は0.12%、銅 (Cu) は0.01%であった。

当試料も砂鉄を始発原料とした鉄素材の鍛錬鍛冶工程で派生した滓である。

STE-3：楕形鍛冶滓

(1) 肉眼観察： 平面は不整形の中型 (222g) ではほぼ完形の楕形鍛冶滓である。全面木炭痕による凹凸が著しい。木炭痕は最大で1.5cm程の長さである。滓の色調は淡褐色で、表面は僅かに風化気味である。小さな破面では中小の気孔がやや密に存在する。

(2) 顕微鏡組織： 写真2⑬～⑯に示す。⑬は試料表層に付着する微細な木炭片である。木炭に鉄が置換し白色部は銹化鉄で、ごく微細な鉄が木炭繊維の空隙に入り込んだ痕跡を残す。⑭～⑯は滓部である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色盤状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。

(3) ピッカース断面硬度： 写真2⑭の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は452Hvであった。ウスタイトに同定される。

(4) 化学組成分析： 表140に示す。全鉄分 (Total Fe) 53.46% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.03%、酸化第1鉄 (FeO) 49.68%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 21.18% の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は23.31%で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) を1.06%含む。主に砂鉄中の不純物に由来する二酸化チタン (TiO_2) は0.14%、バナジウム (V) は0.01%であった。また酸化マンガン (MnO) は0.13%、銅 (Cu) は0.01%である。当試料も鉄分高く、脈石成分 (Ti, V, Mn) の低減した値を示す。砂鉄を始発原料とした鉄素材の鍛錬鍛冶工程で派生した滓に分類される。

STE-4：楕形鍛冶滓 (含鉄)

(1) 肉眼観察： 71gと小型で、ほぼ完形の楕形鍛冶滓である。平面は不整形で、やや偏平な形状を呈する。上面は比較的平坦で、下面は細かい木炭痕による凹凸が顕著である。また、表層には銹化割れが起きており、まとまった鉄部の内包が推定される。

(2) 顕微鏡組織： 写真2⑨～⑫に示す。⑨は試料表層に付着した鍛造剥片²⁾である。断面では外層へマタイト (Hematite: Fe_2O_3)、中間層マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4)、内層ウスタイト (Wüstite: FeO)の鉄酸化物の3層構造が確認される。内層ウスタイトは非品質で鍛打工程後半段階の派生物と想定される。

また、当試料の中央部には径10mm程のやや不定形で塊状を呈する鉄部が残る。外周から錆化が進行しているが、芯部に金属鉄が遺存する。⑨の写真右側は残存金属鉄部で、5%ナイタルで腐食すると、過共析組織 (C: 0.77%以上) ~ねずみ鋳鉄組織を呈する小鉄塊であった。内部には不規則な気孔が存在し、明瞭な鍛打の痕跡はみられない。この鉄部は鍛冶原料の小鉄塊で、鍛打によりまとまった形状の鉄素材となる前に、鍛冶が内に落下し取り残された可能性が考えられる。⑩～⑫は鉄部の拡大である。⑩の写真右側の灰色部は、鉄部表層の錆化鉄である。灰色部はフェライト、黒色部は層状のパーライトで亜共析組織の痕跡が残存している。滓と接触するため表層部が僅かに酸化、脱炭されたものと推測される。⑪はねずみ鋳鉄組織、⑫、⑬は過共析組織部分の拡大である。パーライト基地に針状セメントサイトを析出する。

⑭、⑮は滓部である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。廃鉄器 (鉄鍋など) を原料として「下げ」(脱炭) を行った滓の可能性をもつ。

(3) ビッカース断面硬度： 写真2⑯、⑰の過共析組織部分の硬度を測定した。⑯の素地のパーライト部分の硬度値は339Hvであった。パーライトとしてはかなり硬質の値である。冷却速度が速く、パーライトの層間が密であるためと考えられる。また白色の板状セメントサイトの硬度値は619Hvであった。組織に見合った値である。

更にもう1箇所滓中に晶出する白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は435Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の下限を若干下回るが、ウスタイトの可能性が高い。

(4) 化学組成分析： 表140に示す。全鉄分 (Total Fe) 57.43%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 1.23%、酸化第1鉄 (FeO) 41.10%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 34.68%の割合であった。滓中の鉄酸化物のみでなく、鉄部の錆化鉄及び残存金属鉄を含む値である。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は15.89%と低値で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は0.63%に留まる。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) は0.11%、バナジウム (V) は0.01%と低く、更に酸化マンガン (MnO) も0.05%と低値であった。また、銅 (Cu) は<0.01%である。低マンガン・低ガラス質成分は廃鉄器リサイクル滓としての傾向を有している。

STE-5：椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察： 26g強の小型ではあるが完形の椀形鍛冶滓である。平面は不整楕円形を呈する。上面は平坦気味で、下面は細かい木炭痕による凹凸が目立つ。滓の色調は灰黒色で、小さな破面の気孔は少なく緻密である。

(2) 顕微鏡組織： 写真2⑱～㉑に示す。鉄滓の鉱物組成は白色粒状結晶ウスタイト (Wüstite: FeO)、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。またウスタイト粒内の微細な淡褐色の晶出物はヘーシナイト (Hercynite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$)

である。

また㉔、㉕は試料表層に付着する酸化土砂中の鍛造剥片である。剥片は風化しているため、中間層マグネタイト、内層ヴスタイトがやや不明瞭であるが、鉄酸化膜の層構造を残す。内層ヴスタイトは非晶質で鍛打工程後半段階の派生物である。

(3) ピッカース断面硬度： 写真2㉔の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は425Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限を若干下回るが、風化を受けたヴスタイトであろう。

(4) 化学組成分析： 表140に示す。全鉄分 (Total Fe) 59.68% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.01%、酸化第1鉄 (FeO) 61.10%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 17.41% の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は低値の18.58%で、このうち塩基性成分は (CaO + MgO) 0.57% と少ない。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) は0.16%、バナジウム (V) は0.01% と低く、酸化マンガ (MnO) も0.06% と低値であった。また銅 (Cu) は0.01% である。当試料も鉄分が高く、派石成分 (Ti, V, Mn) の低減した値を示し、特に低 Mn 傾向は廃鉄リサイクル滓の可能性をもつ。

STE-6：鉄塊系遺物

(1) 肉眼観察： 小型で比較的薄手の鉄塊系遺物の可能性が高い。側面は全面破面である。滓の地の色調は黒灰色で、広く錆色に覆われる。滓中にごく微細な鉄が多数散在していた可能性が考えられる。破面は比較的緻密で気孔は少ないが、重量はない。

(2) マクロ組織： 写真6①に示す。鉄素地は激しく侵食されて多孔質した錆化鉄であった。

(3) 顕微鏡組織： 写真2㉖-㉗に示す。錆化が進んでおり、ゲーサイト (Goethite: α -FeO·OH) 化して金属組織痕跡は不明瞭であった。

STE-7：鑄造鉄片 (板状)

(1) 肉眼観察： 小型で厚板状の鑄造鉄片である。表層が黄褐色の土砂で覆われ、地の観察が困難である。現状では明瞭な滓部は見受けられない。特殊金属探知器のH (○) で反応があるが、全体に錆化が進み放射割れが著しい。

(2) マクロ組織： 写真6②に示す。厚さ8mm程の厚板状の錆化鉄片である。写真右側側面は錆化による破面であるが、残る側面3面は生きている。また全体が僅かに内彎する。平縁の鑄造器物の口縁部破片と思われる。

(3) 顕微鏡組織： 写真3①-⑤に示す。①はマクロ写真の左下側角部の拡大である。写真左側の明色部が短軸表層、下側の明色部が長軸表層である。生きている側面3面では表層に薄く亜共析組織痕跡を残す。鑄込み時ないしは器物使用時の熱影響で酸化、脱炭されたと考えられる。これに対して内側の暗色部は、鑄込みままの亜共晶組成白鑄鉄痕跡を留める。なお②③は①の短軸表層側の拡大、また④⑤は①の長軸表層側の拡大である。脱炭層の外側には部分的に薄く白色層がみられる。これは加熱による酸化鉄層 (スケール) ないしは錆化物の可能性が考えられる。

STE-8：鑄造鉄片 (板状)

(1) 肉眼観察： やや厚手の板状を呈する鑄造鉄片である。側面全面が破面である。全体に放射割れ

が顕著で、完全に錆化している。表面が淡褐色の酸化土砂で分厚く覆われる。さらに錆化による剥落もあり外形が不明瞭だった。

(2) マクロ組織：写真6③に示す。最大で厚さ5mm程の板状の錆化鉄片である。長軸両面は生きているが、短軸両面は錆化による破面である。

(3) 顕微鏡組織：写真3⑥～⑧に示す。蜂の巣状のレデアライト及び小型片状黒鉛の痕跡が混合した斑錆鉄の破片と判明した。

STE-9：鍛冶滓片

(1) 肉眼観察：26gと小型の鍛冶滓片である。側面4面は全て破面である。上面は滑らかな流動状を呈する。また、下面では1箇所小礫を噛み込んでいる。

(2) 顕微鏡組織：写真3⑨～⑩に示す。⑨⑩は白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色盤状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。⑩は試料下面側で発達したファイヤライトのみが晶出し、写真右下側は下面表層に付着する小礫を示す。

(3) ピッカース断面硬度：写真3⑨の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は531Hvで、マグネタイトの可能性が高い。しかし測定時の亀裂等による誤差の可能性もあり、ヴスタイトの可能性も完全に否定はできない。

(4) 化学組成分析：表140に示す。全鉄分(Total Fe) 52.74%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.01%、酸化第1鉄(FeO) 53.10%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 16.38%の割合であった。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は28.18%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)を1.48%含む。主に砂鉄中の不純物に由来する二酸化チタン(TiO₂)は0.16%、バナジウム(V)は0.01%であった。また酸化マンガン(MnO)は0.08%、銅(Cu)は0.01%である。鉄分高く、脈石成分の低減した数値から、砂鉄を始発原料とした鉄素材の鍛錬鍛冶工程で派生した滓に分類される。

STE-10：鉄塊系遺物

(1) 肉眼観察：24gと小型で塊状の鉄塊系遺物である。上面は比較的平坦で、深い楕形を呈する。表面は全面淡褐色の酸化土砂で覆われる。また、土砂中には粉炭が僅かに混在する。一部錆化による放射割れを起こしているが、特殊金属探知機のL(●)で反応があり、重量もあるためまとまった金属鉄の遺存が察知された。

(2) マクロ組織：写真6④に示す。まとまりのある過共析組織の鉄塊であった。内部には不定形の中小的気孔が散在し、鍛打前の鍛冶原料鉄の可能性をもつ。表面に滓の付着は見られない。

(3) 顕微鏡組織：写真3⑫～⑭に示す。⑫は表層に付着する酸化土砂中の鍛造剥片である。断面には鉄酸化物の3層構造がみられ、内層ヴスタイトは非晶質である。鍛打工程後半段階の派生物である。

⑬は鉄中の非金属介在物を示した。微細な黄褐色異物が複数散在しており、硫化鉄(FeS)である。⑭～⑯は金属鉄を5%ナイトルで腐食した組織である。黒色層状のパーライト素地に白色針状のセメントタイトが析出した過共析組織(0.77%以上C)の鉄塊であった。

(4) ピッカース断面硬度：写真3⑮⑯の金属組織の硬度を測定した。⑮のレデアライト部分の硬

度値は695Hv、㉔のパーライト基地の硬度値は277Hvであった。それぞれ組織に見合った値である。

STE-11：鍛造鉄片（方柱状）

（1）肉眼観察： 横断面が長方形を呈する棒状鉄器の破片である。表面は淡褐色の酸化土砂に分厚く覆われるため外形が不明瞭である。

（2）マクロ組織： 写真6㉕に示す。9×12mmの断面をもち、横方向に折り返し鍛錬の痕跡が残る鍛造品であった。焼き入れ組織をもち残存金属鉄中の明色部はマルテンサイトで、鍛錬後水冷を施した痕跡である³⁾。なお、表層と芯部では水冷時の冷却速度に差があるため、部位により焼きの入り方が異なっている。表層側は比較的多量のマルテンサイトの割合が高いが、芯部は黒色層状のパーライト主体の組織となる。

（3）顕微鏡組織： 写真3㉖～㉘に示す。㉖は鉄中非金属介在物である。非晶質珪酸塩系の介在物が複数確認された。鍛錬成形時に酸化防止に塗布された粘土汁由来のものであろう。㉗～㉘は金属鉄を5%ナイトルで腐食した組織で、㉗～㉘はマクロ写真左側端部の拡大である。黒色層状のパーライト素地中に針状のマルテンサイトが点在する。更に旧オーステナイト粒界に沿って若干フェライトが晶出する。中でも㉗の写真左側は白色のフェライトが比較的多い低炭素域である。また、㉙～㉚はマクロ写真右側端部の拡大である。㉙は側面中央寄りの拡大で、右側面と同様にパーライトの割合が高い。これに対して㉚は下端部で、マルテンサイト素地に旧オーステナイト粒界に沿って微細パーライトが析出しており、比較的良く焼きが入っている。

（4）ピッカース断面硬度： 写真3㉙㉚、㉛、㉜の金属組織の硬度を測定した。㉙の写真左側の低炭素域の硬度値は187Hvで最も軟質の値を示す⁴⁾。またフェライト、パーライト部分の硬度値はそれぞれ210Hv、285Hv、点在するマルテンサイトの硬度値は478Hvであった。㉚もパーライト素地に針状フェライトが析出する個所で、硬度値は279Hvである。

また㉛のパーライト素地部分の硬度値は275Hv、296Hv、マルテンサイト部分の硬度値は361Hvであった。更に㉜のマルテンサイト素地部の硬度値は633Hvである。

以上の組織観察及び断面硬度調査の結果、当試料は炭素含有量が0.5～0.7%程度の偏析をもつ亜共析鋼で、温度がパーライト変態点（727℃）より低下した状態から水冷されたと推測される。

STE-12：鍛造鉄片（板状）

（1）肉眼観察： 板状の鉄器片である。表面が淡褐色の酸化土砂に分厚く覆われ、外形は不明瞭である。横断面の長辺は一边がほぼ平坦で、もう一边は弧状を呈する。これが鉄器本来の輪郭線か錆化による変形か外観からは定かでない。また特殊金属探知器で反応があるため、内部に金属鉄の遺存が判明した。

なお供試材の切断面は長方形状を呈し、鍛打により粗く形状が整えられた鉄素材と推定される。表面の歪みは表層に滓が付着するためであった。

（2）顕微鏡組織： 写真3㉝～㉞に示す。㉝は僅かに残存する金属鉄部を中心に、厚み方向の断面状況を示している。長辺側の表層は薄く滓で覆われており、内部にもごく薄い滓層を巻込む。

㉞は表層に付着する滓部の拡大である。ごく微細な淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗

黒色ガラス質中に品出する。滓部では何れもごく微細なファイヤライト結晶のみが確認された。鉄素材の表面酸化防止や鍛接のために塗布される粘土汁などが熱影響を受けて浮化した可能性が高い。

また⑥、⑦は金属鉄部分である。中央の鉄中非金属介在物中には淡茶褐色多角形結晶が品出しており、ウルボスピネル (Ulv spinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) と推定される。これらの鉱物から、当試料の始発原料は砂鉄と判断される。また、金属組織は白色針状のフェライトの周囲で僅かに黒色層状のパーライトが析出しており、素地はペイナイト (フェライトの地のなかに分散した微細なセメントタイトで構成される) を呈する。当試料は加熱鍛打作業の後、パーライト変態点以下の温度域から水冷されたと推測される。さらに⑧は錆化鉄部である。中央は鍛打により点列状に分散した介在物で、微細なファイヤライトが品出している。表層の付着滓と同質の滓が折り返し鍛錬によって内部に巻き込まれたものであろう。また、錆化鉄には金属鉄部と同様の針状フェライトの痕跡が微かに残る。

(3) ピッカース断面硬度： 紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真が割愛したが、残存金属鉄部分の調査を実施した。素地部分の硬度値は141Hvであった。この値からペイナイトと推測される。また、発達した針状フェライト及び黒色のパーライトが析出する個所の硬度値は170Hvであった。同じペイナイトで若干硬質傾向を示すが、冷却速度の速さを反映したものであろう。

STE-13： 鑄造鉄片 (鍋破片か)

(1) 肉眼観察： 平面が不整形を呈する鑄鉄器物の体部破片である。側面は全面破面である。全体が緩やかに内彎する。完全に錆化しており、放射割れが著しい。

(2) マクロ組織： 写真6⑥に示す。全体に白鑄鉄組織痕跡が残る鉄器破片である。器厚は4.5mm程で、内部には中小の気孔が散在する。これは鑄込み時の騒である。

(3) 顕微鏡組織： 写真4①-③に示す。①は試料端部である。写真右側の短軸表層は錆化による破面である。残る片も破面で両端共に破面と確認された。②③の試料表面の明色部はセメントタイトが剥落した跡を僅かに残し、表層の一部に酸化・脱炭された痕跡を留める。また、その内側には白鑄鉄組織痕跡が残存する。

STE-14： 鑄造鉄片 (鍋破片か)

(1) 肉眼観察： こちらも平面が不整形を呈する鑄鉄器物の破片である。側面は全面破面である。全体が僅かに内彎する。表面には錆化による放射割れがみられるが、特殊金属探知器のM (◎) で反応があり、内部には金属鉄が遺存する。

(2) マクロ組織： 写真4⑦に示す。外周部から錆化が進行しているが、中央では一部金属鉄が残存している。全体に白鑄鉄組織ないしはその錆化痕跡を留める。内部には鑄込み時の騒が想定されるごく微細な円形の気孔が散在する。また写真上側の表層 (器物外面) は非常に平滑であるが、下面側表層 (器物外面) は波打つように微細な凹凸がみられる。外部からの錆化の影響と思われる。内厚は約6mmを測る。

(3) 顕微鏡組織： 写真4④⑤に示す。④の写真上側の白色部は残存金属鉄である。素地部分から錆化が進行しており、セメントタイト部分が残存している。また⑤の写真左側は試料端部である。顕微鏡観察の結果、試料両端が破面と確認された。

STE-15: 鍛造鉄片 (条材)

(1) 肉眼観察: 平面不整長方形の条材鉄製品である。長軸方向は緩い円弧を描く。短軸両端は明瞭な破面である。長軸側は付着酸化土砂のため破面が否か判断が難しい。しかし、少なくとも一面は平坦に整えられた面である可能性が高い。特殊金属探知機のL(●)で反応があり、まとまった金属鉄が遺存すると考えられる。

(2) マクロ組織: 写真6⑧に示す。断面は18×11mm程度で条材であろう。中央の鍛接線は錆化が進行しており、観察面では大きな割れが生じている。試料中には他にも多数の鍛接線が確認でき、折り返し鍛錬が施された鍛造品と判断される。残存金属には明暗色むらがあり、炭素量は0.1~0.7%程度のバラツキをもつ。

(3) 顕微鏡組織: 写真4⑥~⑩に示す。⑥は鉄中非金属介在物を腐食なしの状態を示した。写真中央左よりの介在物は、ガラス質の素地中に白色粒状結晶ウスタイト(Wüstite: FeO)が晶出する。

⑦~⑩は金属鉄を5%ナイトルで腐食した組織である。⑦~⑩はマクロ写真左側面縦断面の拡大である。上面中央寄りが最も炭素量が高く、⑨に示したように全面パーライトの共析組織を呈する。また下面側は全体的に炭素量が低めで、下面表層に向かって緩やかに炭素含有量が低下している。

また、⑫~⑬はマクロ写真中央やや右寄り縦断面の拡大である。この箇所は前述の⑦~⑩と比較すると全体に炭素量が低めであるが、同じく中央上面寄りの箇所が最も高炭素域となっている。さらに、下面側が低炭素域となるが、⑭⑮に示すようにフェライト結晶が非常に細かい箇所と、比較的大きな箇所が互層をなしている。またフェライトが細粒化した箇所と対応して、ごく微細な黒色点状の酸化物が多数分布している。これは試料表面が加熱酸化されて生じた酸化物(スケール)が鍛打によって微細化したもので、折り返し鍛錬が複数回施された痕跡と推測される。

(4) ビッカース断面硬度: ⑦~⑩の金属組織の硬度を測定した。最も硬質の値を示したのは⑨の共析組織個所で、硬度値は319Hvであった。これに対して最も軟質の値を示したのは⑬の下半部中央付近で、硬度値は184Hvであった。いずれも組織から推測される炭素含有量(0.77~0.15% C)からみると比較的高めの数値である。これは鍛打によって、全体に結晶が微細化していることを反映した数値といえる。

以上の組織観察及び断面硬度調査の結果、当試料は炭素含有量のばらつきが大きな鉄素材を折り返し鍛錬した鍛造製品ないしは未製品と推測される。なお当試料には水冷痕跡は認められなかった。

STE-16: 鍛造鉄片 (棒状)

(1) 肉眼観察: 横断面が長方形の棒状鉄製品である。錆化による亀裂が層状に走っており、鍛造品と判断される。酸化土砂の付着により外形は不明瞭であるが、下端部がやや幅広で厚みを減じる形状を呈するため、刃部である可能性も考えられる。

(2) 顕微鏡組織: 写真4⑪~⑬に示す。金属鉄は5%ナイトルで腐食している。⑪は金属鉄の残存状況を示した。当試料は全体に錆化が進行しているが、長辺片面表層付近で若干金属鉄が残存する。またこの面の表層は凹凸があり、鉄器本来の表面ではなく錆化による剥離面であろう。鍛接線に沿って錆化が進行した可能性が高い。

⑫~⑬は残存金属鉄部の拡大である。⑫~⑬は⑪の上側の金属鉄であり、端部に灰色微細針状のマ

マルテンサイト組織が確認された。また内側は白色のフェライト素地、細かい黒色層状のパーライト及び灰色針状のマルテンサイトが混在する。㉔は㉓の下側の金属鉄であり、フェライト単相の組織であった。

(3) ヒッカース断面硬度：写真4㉑～㉔は金属組織の硬度測定の際の圧痕である。㉑の金属鉄端部のマルテンサイト組織の硬度値は431Hvであった。全体に炭素含有量が低いため、比較的軟質の値を示す。また㉒の写真右側はやはり端部で、白色のフェライトと灰色のマルテンサイトが層状に並ぶ。この個所の硬度値は313Hv、275Hvであった。更に㉒の写真左側のフェライト素地に少量パーライト及びマルテンサイトが晶出する個所の硬度値は184Hv、㉓のフェライト単相部分の硬度値は168Hvであった。

当試料もSTE-11鍛造鉄片と同様に、パーライト変態点より下がった温度領域から水冷していることが確認された。しかし、僅かに残存する金属鉄部はいずれも炭素量の低い鋼で、水冷により高い硬度を得ることを目的とするならば炭素含有量が低い⁹⁾。その場合、本来当試料中には炭素量がより高く、効果的な焼き入れ硬さが得られる領域も存在した可能性が考えられる。そのものは錆化剥落で遺在しない。

STE-17：羽口破片か

(1) 肉眼観察：不定形の焼成粘土塊である。一部に黒色ガラス質滓がごく薄く附着する。不定形の各面は手捏ねで成形された面できている可能性が高く、羽口の破片としては疑問が残る。色調は淡褐色で砂粒が僅かに混在する。また植物の種子痕も散見される。

(2) 化学組成分析：表138に示す。強熱減量(Ig loss)は10.07%と高値で、ほとんど熱影響を受けず結晶構造水が保持された状態での分析である。鉄分(Fe_2O_3)は3.34%とさほど高くなく、軟化性は問題なかろう。しかし酸化アルミニウム(Al_2O_3)は15.69%と低く、更に塩基性成分($\text{CaO}+\text{MgO}$)は1.16%とやや多めで、耐火性には不利な成分系であった。

(3) 耐火度：1180℃であった。鍛冶関係の炉材と想定した場合、あまり耐火性に優れた性状とはいえない。成分系に対応した値である。

3-2. H区出土遺物

STH-1：橢形鍛冶滓

(1) 肉眼観察：162gを測るほぼ完形の橢形鍛冶滓である。平面は不整形で、偏平な形状を呈する。滓の色調は灰黒色である。比較的滑らかな流動状で緻密な個所と、細かい木炭痕による凹凸が顕著で比較的気孔の多い個所がみられる。また一部特殊金属探知機のH(○)反応があり、鉄部を内包する。

(2) 顕微鏡組織：写真5①～⑤に示す。①②のような比較的発達した白色粒状結晶ウスタイトが凝集気味に晶出する個所も点在するが、③に示したような微細な白色樹枝状結晶ウスタイトと比較的発達した淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトの晶出が広範囲で確認された。また、④⑤のような薄膜状のウスタイトも複数点に在している。これらは鍛錬中途の鉄素材ないし未製品の表層が酸化したスケールが鍛冶炉内に入り、滓中に取り込まれた可能性が高い。

(3) ヒッカース断面硬度：写真5①の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は428Hvで、ウス

タイトの文献硬度値の下限を僅かに下回るが、測定時の亀裂等による誤差や風化の可能性があり、ヴスタイトと見做される。

(4) 化学組成分析：表138に示す。全鉄分 (Total Fe) 44.68% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.01%、酸化第1鉄 (FeO) 34.33%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 25.72% の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は33.42% で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) を1.39% 含む。主に原料砂鉄中の不純物に由来する二酸化チタン (TiO₂) は0.24%、バナジウム (V) は0.01%、また酸化マンガン (MnO) は0.12% であった。銅 (Cu) は0.01% である。脈石成分 (Ti, V, Mn) はA区出土鉄滓とはほぼ同等の値であった。

当試料は鉱物組成、化学組成の特徴から、砂鉄を始発原料とした鍛錬鍛治滓に分類される。

STH-2：楕形鍛治滓

(1) 肉眼観察：75g弱で平面が円形に近い形状の楕形鍛治滓である。また側面3面が破面であるが、完形に近いと推測される。上面は比較的平坦で、下面は流動状を呈し、細かい木炭痕が多数残存する。更に灰白色の鍛治が床土が点々と固着する。滓の地の色調は灰黒色で、重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真5⑥～⑧に示す。白色粒状結晶ヴスタイト、淡灰色盤状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また、⑦中央の灰色部は錆化鉄である。組織痕跡は残存していない。

(3) ピッカース断面硬度：写真5⑥の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は448Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限を僅かに下回るが、誤差の範囲内と考えられる。

(4) 化学組成分析：表138に示す。全鉄分 (Total Fe) 57.15% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.03%、酸化第1鉄 (FeO) 63.35%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 11.26% の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は24.17% で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) を0.73% 含む。主に原料砂鉄中に不純物に由来する二酸化チタン (TiO₂) は0.24%、バナジウム (V) は0.01% であった。また酸化マンガン (MnO) は0.04%、銅 (Cu) は<0.01% である。鉄分高く、脈石成分の低減した値から、砂鉄を始発原料とした鍛錬鍛治滓に分類される。

3-3. I区出土遺物

STI-1：楕形鍛治滓

(1) 肉眼観察：565g大型で厚手の楕形鍛治滓片である。側面1面のみに大きな破面を残す。表面には1.5cm大の木炭痕が少数散在する。破面には中小の気孔を多数発生し、中には上下方向に伸びる形状のものもある。滓の地は暗灰色で、重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真5⑨～⑪に示す。⑨は試料上面側で、あまり発達した粒状のヴスタイト結晶がみられず、ごく微細な白色樹枝状に晶出している。これに対して、⑩⑪のように下側2/3程の部分では粒状のヴスタイト結晶が少数散在する。また全面に発達した淡灰色盤状結晶ファイヤライトがみられる。

(3) ピッカース断面硬度：写真5⑩の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は464Hvでヴスタイトに同定される。

(4) 化学組成分析：表138に示す。全鉄分 (Total Fe) 50.80% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.01%、酸化第1鉄 (FeO) 50.99%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 15.95% の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は28.68%で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) を1.84%含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) は0.18%、バナジウム (V) は0.01%であった。また酸化マンガ (MnO) は0.14%、銅 (Cu) は0.01%である。鉄分が高く、脈石成分 (Ti, V, Mn) の低減した値を示す。砂鉄を始発原料とした鉄素材の鍛錬鍛冶工程で派生した滓である。

STI-2：椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察：側面に淡褐色の炉壁胎土が付着する椀形鍛冶滓片で、274gを測る。胎土中には最大5mm程の砂粒が多量に混和されている。上面は炉壁が溶融したガラス質滓が主体で、一部滓化した砂鉄塊が付着する。また内側は暗灰色の滓部で、下面は平坦面となっている。工具痕と思われる。

(2) 顕微鏡組織：写真5⑩⑪に示す。⑩写真左側が試料上面端部である。最上層は白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが晶出する滓部で、その中心に錆化鉄が存在する。⑪は錆化鉄部の拡大である。上面端部には網目状のセメントイト痕跡が残存する。少なくともこの部分は過共析組織であったことが分かる。なお、内面の気孔の状態などから鍛打の影響をほとんど受けていない小鉄塊が鍛冶炉内に落下したものと推測される。また、その下側は発達した淡灰色盤状結晶ファイヤライトが晶出する滓部である。この個所では局部的に白色多角形結晶もみられ、マグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄) の析出である。そのさらに下面の写真右側端部は暗黒色ガラス質滓である。紙面の構成上割愛したが、下面は発達したファイヤライト結晶のみが晶出する。

(3) ピッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真は割愛したが、淡灰色盤状結晶ファイヤライトの調査を実施した。硬度値は650Hvでファイヤライトと推測される。

(4) 化学組成分析：表138に示す。ガラス質部は避けて主に下面側の滓部を供試材とした。全鉄分 (Total Fe) は57.81%と高く、金属鉄 (Metallic Fe) 0.02%、酸化第1鉄 (FeO) 46.91%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 30.49%の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は17.27%と少なく、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) を1.17%含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) は0.14%、バナジウム (V) は0.01%であった。また酸化マンガ (MnO) は0.05%と低く、銅 (Cu) は0.01%である。鉄分は高く、脈石成分のうちのマンガンの低減した数値から、当試料は廃鉄器リサイクル滓の可能性をもつ。

STI-3：椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察：上下段の大きさが異なる2段椀形鍛冶滓で、下段は小さくほぼ完形である。上段は不定形で側面1面が破面である。共に15mm程の厚みがある。上面端部にガラス質滓が付着しており、羽口先端溶融物であろう。また下面は共に細かい木炭痕による凹凸が著しい。共に滓の色調は黒灰色で、重量のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真5⑫に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色盤状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。なおウスタイト結晶内には微細な褐色の晶出物が点在する。これはヘーシナイト (Hercynite: FeO · Al₂O₃) の可能性が高い。

(3) ビッカース断面硬度：写真5④の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は467Hvでヴスタイトに同定される。

(4) 化学組成分析：表138に示す。全鉄分 (Total Fe) は39.28%と低めで、金属鉄 (Metallic Fe) 0.01%、酸化第1鉄 (FeO) 39.86%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 11.85%の割合であった。これに対してガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は45.63%と高値で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) を1.75%含む。主に製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン (TiO_2) は0.33%、バナジウム (V) は0.01%であった。酸化マンガン (MnO) は0.12%、銅 (Cu) は0.01%であった。ガラス質成分が高い割合を示すため、鉄分が低めの数値を示す。また脈石成分 (Ti, V, Mn) は当遺跡出土鉄滓の中では若干高値傾向を示すが、大きな差はみられない。羽口、炉壁等の溶融物の割合が高い砂鉄系鍛錬鍛冶滓と推定される。

3-4. A区出土遺物

STA-1：椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察：262gを測る中型の椀形鍛冶滓である。側面2面は破面である。表層に分厚く黄褐色の酸化土砂が付着する。滓の地の色調は灰褐色で、表面はやや風化気味である。上面は中央がやや窪み形状で、下面には細かい木炭痕による凹凸が著しい。

(2) 顕微鏡組織：写真5⑤～⑧に示す。⑤は滓部である。淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトのみが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。⑥～⑧は滓中に散在する微細な金属鉄部を5%ニータルで腐食した組織である。⑥⑦はフェライト単相、⑧⑨は白色の針状フェライトに少量黒色層状のパーライトが析出する亜共析組織個所である。また⑩⑪は若干針状フェライトが晶出するが、ベイナイト主体の個所もある。

(3) ビッカース断面硬度：写真5⑫⑬⑭の金属組織の硬度を測定した。⑫のフェライト単相部分の硬度値は63Hv、⑬の亜共析組織部分の硬度値は93Hv、⑭のベイナイト部分の硬度値は170Hvであった。それぞれ組織に見合った値である。

(4) 化学組成分析：Table. 2に示す。全鉄分 (Total Fe) 45.76%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) が1.24%と若干微細な鉄部の影響が現れている。また酸化第1鉄 (FeO) は22.62%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) は38.52%の割合であった。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は23.99%で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) を1.30%含む。主に製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン (TiO_2) は0.22%、バナジウム (V) は0.01%であった。また酸化マンガン (MnO) は0.26%、銅 (Cu) は0.01%である。当試料は他地区出土鉄滓と比較するとマンガン (Mn) の高値傾向が見られるが、チタン (Ti)、バナジウム (V) はほぼ同等の低減した値である。やはり砂鉄系鍛錬鍛冶滓の可能性が高い。高 [Mn] 傾向は鉄素材の違いの現れであろう。

3-5. B区出土遺物

STB-1：椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察：74gの小型完形の椀形鍛冶滓である。平面は不整形で、一端部が著しく肥厚している。この肥厚部が羽口側で垂下痕跡を残したものと推定される。上下面とも細かい木炭痕がみられ、

特に下面は木炭痕による凹凸が著しい。滓の地の色調は灰褐色で、僅かな破面では気孔が多数確認される。

(2) 顕微鏡組織： 写真5図②に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色不定形状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質中に晶出する。

(3) ピッカース断面硬度： 写真5図③の白色粒状結晶の硬度を測定した。中央はその圧痕で、硬度値は461Hvであった。ウスタイトに同定される。

(4) 化学組成分析： 表138に示す。全鉄分 (Total Fe) 45.97%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.13%、酸化第1鉄 (FeO) 31.93%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 30.06%の割合であった。ガラス質成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は26.23%で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) を3.38%含む。主に製鉄原料の砂鉄中の不純物に由来する二酸化チタン (TiO₂) は0.26%、バナジウム (V) が0.01%である。また酸化マンガン (MnO) は0.35%、銅 (Cu) は0.01%であった。A区出土鉄滓と同様にマンガン (Mn) の高値傾向が見られるが、チタン (Ti)、バナジウム (V) は他地区出土鉄滓とはほぼ同等の低減した値である。砂鉄系鍛錬鍛冶滓と推定される。

4. まとめ

重竹遺跡 (A、B、E、H、I区) から出土した鍛冶関連遺物の調査の結果、各時期とも主に鉄器製作の鍛錬鍛冶工程が行われたことが明らかになった。以下は、表139に示したまとめを基にその詳細を記した。

〈1〉各地区から出土した鉄滓は、全て脈石成分 (Ti、V、Mn) の低値傾向がみられ、鉄器製作の鍛錬鍛冶工程で派生した滓に分類される。

また脈石成分の数値から、鉄素材の始発原料は砂鉄の可能性が高い。さらに最も新しい時期 (15世紀後半～17世紀前半) に比定されるA、B区出土橢形鍛冶滓 (STA-1、STB-1) は、どちらもマンガン (Mn) の数値が他地区の出土鉄滓と比較して高い。それ以前の時期とは異なる産地の鍛冶原料鉄が搬入されたのだろう。

〈2〉E区出土遺物中には、鍛打作業前の鉄塊系遺物が2点 (STE-6、10) 確認されたが、どちらもほとんど滓が固着していなかった。このような滓との分離が良好な鉄塊系遺物が鉄素材の場合、鍛冶原料に固着する滓を溶解、除去する精錬鍛冶作業はほとんど必要でなかったと考えられる。

前述のように各地区で出土した滓も脈石成分が低いため、各時期ともかなり不純物の少ない鉄素材が搬入され、加熱鍛打による鍛冶加工が主に行われた可能性が高い。

〈3〉E区から出土した鍛造鉄器破片4点 (STE-11、12、15、16) を調査した。このうち板状のSTE-12は表面の滓の固着状況や、内部でも比較的厚い層状に滓を巻き込んでいることなどから、鍛錬中途の未製品と判断される。更にSTE-12の非金属介在物中にはウルホスピネル (Ulv spinel: 2FeO·TiO₂) を内蔵しており、この試料の鉄素材の始発原料はチタン (Ti) を特有成分とする砂鉄と推定される。

またSTE-12にはペイナイト組織、STE-11・16にはマルテンサイト組織を析出する。これらは水冷処理された痕跡と推定される。これに対してSTE-15には水冷痕跡はみられず、鉄器の種類や用途に応じた熱処理が施されたものと推測される。

〈4〉またE区から出土した板状の鑄造鉄片4点(STE-7、8、13、14)を調査した。これらは楕形鑄造滓と同じ遺構から出土したのもあり、鑄造製品が破損した後、鑄造原料の鉄素材として用いられた可能性が考えられる。廃鉄器リサイクル鑄造である。その「下付」精錬鑄造滓は0.05-0.06% MnO、18%以下ガラス質成分楕形鑄造滓(STE-4、5、STI-2)など高純度滓が候補にあがる。

〈5〉分析試料の表面に付着した土砂内に、鑄造剥片が複数確認された。比較的薄手で、内側のウスタイト層が非晶質化したものが多い。これらは鍛打工程後半段階の派生物に分類される。この微細遺物の存在で鑄造製品の製作までが行われたと推察される。

〈6〉重竹遺跡に搬入された鑄造原料鉄の産地同定も今後に残された研究課題の1つであろう。岐阜県大垣市には赤鉄鉱を賦存する金生山がある。この鉱石の特徴は高[As]高[Cu]系である⁹⁾。今回調査の供試材について砒素(As)の分析(表138参照)を行ったが、すべてが0.001%以下で金生山赤鉄鉱系原料鉄の使用は否定された。

(注)

1) 日刊工業新聞社1968「焼結鋳組織写真および識別法」。

ウスタイトは450-500Hv、ファイヤライトは600-700Hvの範囲が提示されている。またウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン(Ti)を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同一している。それにアルミナ(Al)が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

2) 鑄造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鑄造工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色(光沢を失う)へと変化する。粒状滓の後継派生物で、鍛打作業の実証と、鑄造の段階を押える上で重要な遺物となる⁹⁾。

鑄造剥片の酸化膜相は、外層は濃厚なヘマタイト(Hematite: Fe₂O₃)、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)、大部分は内層ウスタイト(Wüstite: FeO)の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ウスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe-O系平衡状態図から説明される⁹⁾。

鑄造剥片を王水(塩酸3:硝酸1)で腐食すると、外層ヘマタイト(Hematite: Fe₂O₃)は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)は黄変する。内層のウスタイト(Wüstite: FeO)は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ウスタイト(Wüstite: FeO)が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

3) 山本科学工具研究社1987「標準顕微鏡組織 第1類 炭素鋼・鑄鉄編 第6版」。

マルテンサイト組織は鋼材をオーステナイト界域から急冷して得られる麻の葉様様の針状組織で、非常に高い硬さを特色とする。

4) 前掲注3)

更共析鋼では炭素含有量が増すと硬さ、引張強さが上がり、伸び、衝撃値は下がる。

5) 前掲注3)

マルテンサイトの硬さは炭素量に関連し、炭素量が増すにつれて硬さは急激に上がり、0.6%以上ではほぼ一定となることが知られている。

6) ①八賀晋1994「古代赤鉄金生山の製鉄研究」—金生山赤鉄鉱に関する調査報告書—金生山製鉄研究会。

②金生赤鉄鉱研究会2001、3「金生山の赤鉄鉱と日本古代史」。

7) 大澤正己1992「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘 年報15』(平成3年度)千葉県房総風土記の丘。

8) 森岡ら1975「鉄鋼腐食化学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店。

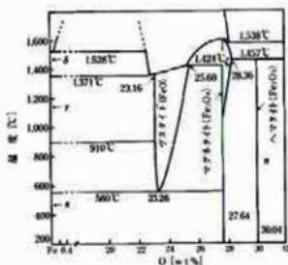


図313 Fe-O系平衡状態図

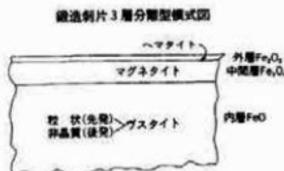


図314 鍛造剥片3層分離型模式図

表137 供試材の履歴と調査項目

件号	遺跡名	出土位置	遺物名称	歴史年代	計測値		調査項目									
					長さ (mm)	質量 (g)	メタル性	コアの組成	コアの組織	X線分析	EDX	化学分析	顕微鏡	SEM		
STE-1	遺跡	K732(柱穴)	陶製鍛冶滓		84×49×26	165.9	なし		○	○						
STE-2		K770(大型土坑)	陶製鍛冶滓	12c 末-13c	39×24×19	42.8	なし	○	○	○						
STE-3		K747(鍛冶関連遺構)	陶製鍛冶滓	13c 末-14c	165×73×29	222.3	なし		○	○						
STE-4		E561(柱穴)	陶製鍛冶滓(古鉄)		56×55×24	79.8	L(●)	○	○	○						
STE-5		E562(柱穴)	陶製鍛冶滓		42×38×14	36.5	なし	○	○	○						
NTR-6		EK35(鍛冶関連遺構)	鉄塊系遺物	12c 末-13c	34×25×16	12.9	酸化(△)	○	○							
NTR-7		F506(鍛冶関連遺構)	鍛造鉄片(板鉄)	13c 後半-16c 前半	41×34×19	33.1	酸化(△)	○	○							
NTR-8		F847(柱穴)	鍛造鉄片(板鉄)		44×35×36	37.5	酸化(△)	○	○							
NTR-9		F620(遺構)	鍛造鉄片	13c-14c	39×24×21	26.0	なし	○	○							
NTR-10		F780(鍛冶関連遺構)	鉄塊系遺物	12c 末-13c	28×23×18	24.1	L(●)	○	○							
NTR-11		E873(土坑)	鍛造鉄片(方柱鉄)	13c 末-14c	62×33×24	62.0	L(●)	○	○							
NTR-12		E776(大型土坑)	鍛造鉄片(板鉄)	13c 末-14c	59×31×17	55.7	L(●)	○	○							
NTR-13		E747(鍛冶関連遺構)	鍛造鉄片(鉄塊片)	13c 末-14c	41×32×19	39.1	酸化(△)	○	○							
NTR-14		E748(鍛冶関連遺構)	鍛造鉄片(鉄塊片)	13c 末-14c	23×47×11	42.0	M(O)	○	○							
STE-15		E821(土坑)	鍛造鉄片(条鉄)	13c 後半	51×18×13	41.9	L(●)	○	○							
STE-16		E778(大型土坑)	鍛造鉄片	12c 末-13c	49×10×5	16.5	L(●)	○	○							
STE-17		EK35(鍛冶関連遺構)	H119破片丁	12c 末-13c	34×31×19	14.1	なし						○	○		
STH-1	H11	H371(土坑)	陶製鍛冶滓		165×77×13	162.3	H(○)	○	○							
STH-2		H7(遺構)	陶製鍛冶滓	8c	55×49×18	71.8	なし	○	○							
STH-1		I 2509(礎石遺)	陶製鍛冶滓	13c 後半	111×91×44	564.9	なし	○	○							
STI-2	I H *	*	陶製鍛冶滓	13c 後半	92×73×35	274.0	なし	○	○							
STI-3		*	陶製鍛冶滓(2段)	13c 後半	72×65×29	231.4	なし	○	○							
STA-1		AH A1区(西溝)	陶製鍛冶滓	13c 後半-17c	84×82×29	162.1	なし	○	○							
STR-1	RSR R114(不明遺構)	陶製鍛冶滓	17c 後半	79×52×23	74.5	なし	○	○								

* 調査結果から遺物名称を決定しておりません

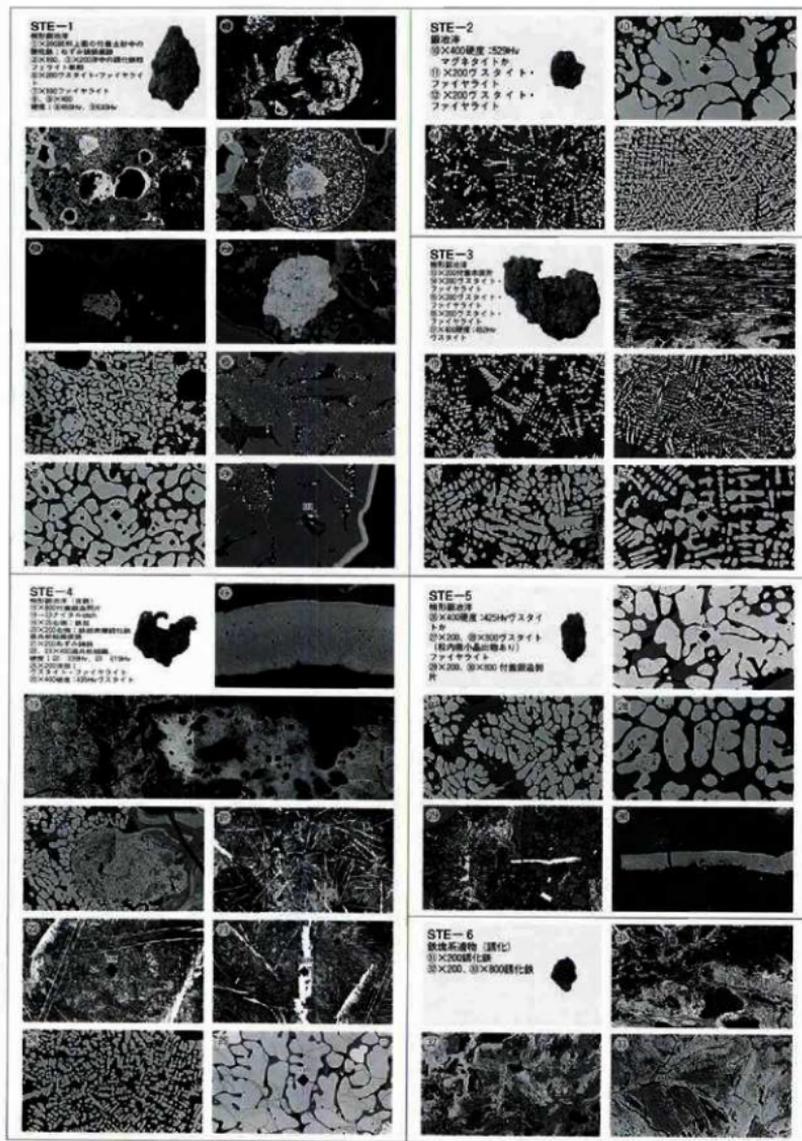


写真2 椀形鍛冶滓(含鉄)・鍛冶滓・鉄塊物の顕微鏡組織

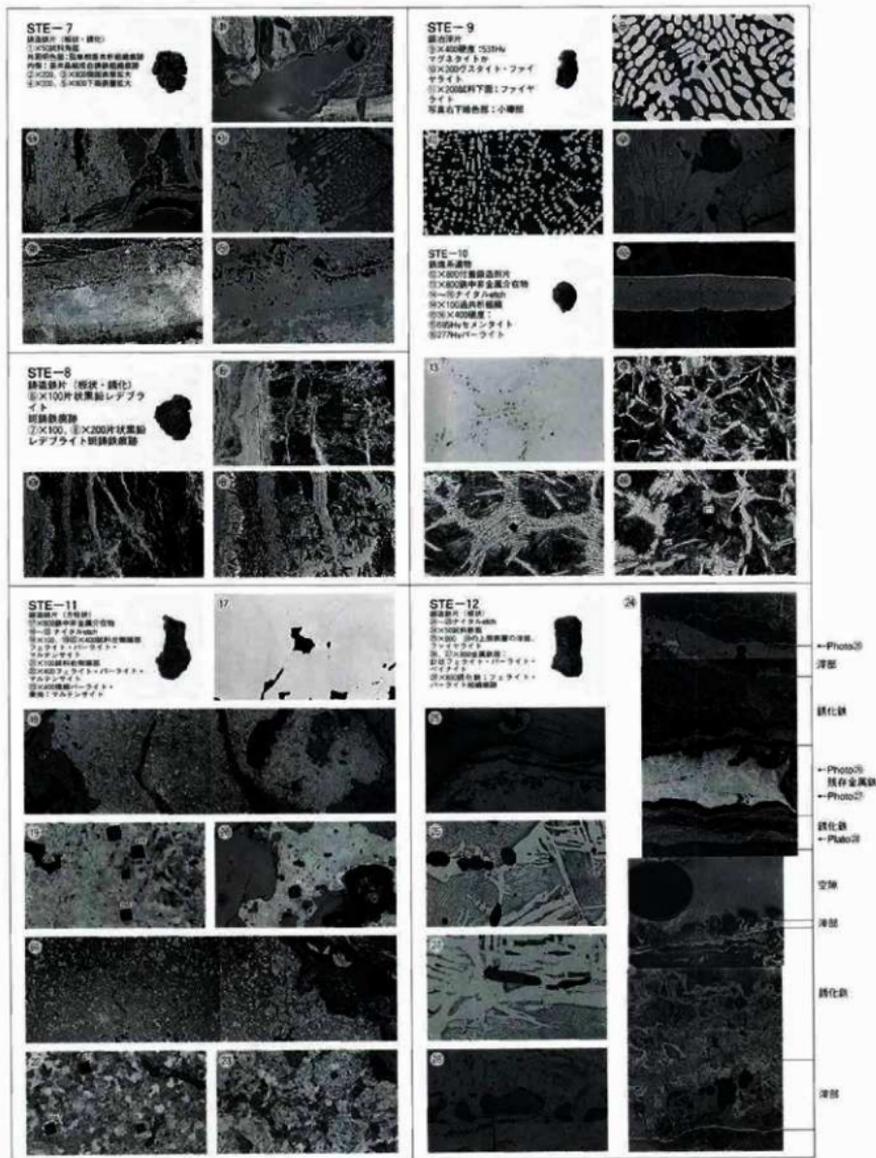


写真3 鍛造鉄片 (板状・棒状)・鍛冶滓片・鉄塊遺物・鍛造鉄片 (方柱状・板状) の顕微鏡組織

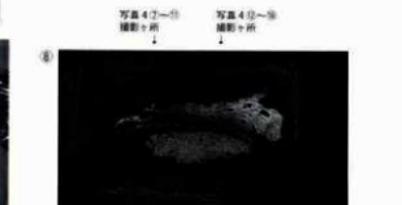


写真3
①→⑤→
撮影場所

右側面
酸化によ
る割れ口

①: 鍛冶系遺物 (錆化) (STE-6) のマクロ組織 (×20)
②: 鑄造鉄片 (板状、錆化) (STE-7) のマクロ組織 (×10)
写真3面→の撮影場所 ↓ 写真3面→の撮影場所 ↓

③: 鑄造鉄片 (板状、錆化) (STE-8) のマクロ組織 (×10)
④: 鍛冶系遺物 (STE-10) のマクロ組織 (×20)



⑤: 鑄造鉄片 (方柱状) (STE-11) のマクロ組織 (×20)
⑥: 鑄造鉄片 (鉄鍋片) (STE-13) のマクロ組織 (×10)

⑦: 鑄造鉄片 (鉄鍋片) (STE-14) のマクロ組織 (×10)
⑧: 鑄造鉄片 (板状) (STE-15) のマクロ組織 (×10)

写真6 鉄塊系遺物・鑄造鉄片 (板状・錆化)・鍛造鉄片 (方柱状・鉄鍋片・板状) のマクロ組織

第2章 鍛冶遺構出土粘土塊の分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

重竹遺跡の調査では、12世紀～16世紀の鍛冶関連の遺構が検出されている。

ここでは、鍛冶関連遺構としたE780・835の床面上から検出した粘土塊と、F区の上屋をもつ大型土坑F681の覆土について洗い出しをし、微細遺物の抽出を行い、これら微細遺物の化学組成について検討した。

2. 試料と方法

試料は、3ヶ所の遺構（E780、E835、F681）から採取された粘土質堆積物である。

これら試料は、始めに -1ϕ （2mm）、 1ϕ （0.5mm）、 2ϕ （0.25mm）の篩いを重ねて湿式で篩い分けした（ 2ϕ 以下の粒子は一部を回収）。これら各試料は乾燥した後、 1ϕ と 2ϕ の篩い残渣について磁石を用いて磁性粒子を選別した。磁性粒子は、実体顕微鏡を用いて抽出し、両面テープを用いて蛍光X線分析用の試料台に固定した。なお、測定した試料等は、マイクロスコープを用いて写真撮影した。

蛍光X線分析は、製鋼場製作所製 XGT-5000Type IIを用いた。仕様は、X線導管径100 μ m、電圧50KV、電流0.22～1.0mA、測定時間500secで行い、標準試料を用いないFP法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

3. 結果および考察

表140 試料と微細遺物の検出状況

試料No.	遺構	堆積物	微細遺物				
			鍛造片	鉄滓状片	スポンジ状粒子	剥片状片	その他
1	E835	褐～黄灰色粘土	検出	検出	検出	検出	炭化材検出
2	F681	褐色粘土		検出		検出	炭化材やや多い
3	E780	褐～黒灰色粘土	検出		検出		やや多い

いずれの試料も、 -1ϕ と 1ϕ 残渣において鍛冶関連を想定できるような微細遺物は含まれていなかった。

遺構E835の 2ϕ 残渣中では、少量ではあるが鍛造片や鉄滓状片あるいはスポンジ状粒子が検出された。また、遺構E780の 2ϕ 残渣中では、少量であるが鍛造片やスポンジ状粒子が検出された。

一方、遺構F681の 2ϕ 残渣中では、鍛造片は検出されなかったものの、発泡形態を示す鉄滓状片が検出された（表140）。

なお、ここで言う鍛造片は、磁性があり錆びを伴わない金属光沢を示す板状片である。鉄滓片は、磁性があり磁鉄鉱類のように結晶面を示さず黒色の比較的丸みを帯びた発泡形態を示す粒子である。さらに、スポンジ状粒子は、黒色の発泡度合の大きい軽石状粒子を言う（写真7）。

また、いずれの試料からも、剥片状細片が含まれており、遺構E780では粗い粒度を含めてやや多く含まれていた。

写真7に代表的な鍛造片や鉄滓片あるいは粒子を示す。また、表143にこれら粒子の蛍光X線分析による半定量分析結果を示す。

鍛造片とした粒子の化学組成は、酸化鉄 Fe_2O_3 の含有量が高く約95～97%である。その他では酸化アルミニウム Al_2O_3 や酸化ケイ素 SiO_2 などが僅かに含まれていた。

一方、鉄滓片とした粒子の化学組成は、試料2-1鉄滓片1は、ほぼ鍛造片と同様の化学組成を示すが、試料2-2鉄滓片2は、酸化鉄は低く酸化ケイ素 SiO_2 や酸化アルミニウム Al_2O_3 が比較的高い。また、試料3-3のスポンジ状粒子は、酸化鉄が低く、酸化ケイ素 SiO_2 や酸化アルミニウム Al_2O_3 が比較的高い。なお、試料3-4の磁鉄鉱は、酸化ケイ素 SiO_2 や酸化アルミニウム Al_2O_3 あるいは酸化マグネシウム MgO が比較的高く、酸化鉄 Fe_2O_3 が約22%程度である（表面に錆びがあるため相対的に鉄が低いと思われる）。

このように、検出された粒子数は少ないものの、鍛造片が検出されたことから、鍛冶作業が行われた場所である可能性が高い。なお、鍛造片などの微細遺物の検出数が低い理由は、試料が床面上に何らかの目的で備蓄されていた粘土を一括して取り上げた試料であり、微細遺物を伴う層が表層部に集中しているものと考えられる。また、微細な剥片状粒子（岩石片）が検出されているが、こうした場所において熱などが原因で微細剥片が形成され易いことが考えられる。

表141 微細遺物および粒子の半定量分析結果

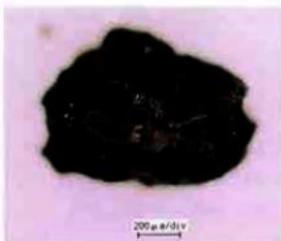
試料No	試料	遺構	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	Cr ₂ O ₃	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	合計	
1-1	鍛造片1	E835	0.67	1.15	1.15	-	-	-	-	0.04	-	-	96.98	-	99.99	
1-2	鍛造片2		-	1.48	1.39	-	-	-	0.11	-	-	-	97.02	-	100.00	
2-1	鉄滓状片1	F681	-	1.28	1.24	-	-	-	0.21	0.01	-	-	0.02	97.24	-	100.00
2-2	鉄滓状片2		-	12.12	53.42	-	-	-	0.64	0.02	-	-	0.05	33.75	-	100.00
3-1	鍛造片1	E780	-	1.70	2.55	-	-	0.06	0.04	-	-	-	95.64	-	99.99	
3-2	鍛造片2		-	1.69	1.73	-	-	-	0.05	-	-	-	-	96.52	-	99.99
3-3	スポンジ状粒子		5.93	14.04	26.13	3.28	1.58	4.46	23.54	-	1.71	0.20	18.73	0.40	100.00	
3-4	磁鉄鉱		23.38	2.68	49.93	-	-	0.08	0.82	-	0.39	0.55	22.17	-	100.00	



1. 遺構E-835出土鍛造片 (No. 1-1)



2. 遺構E-835出土鍛造片 2 (No. 1-2)



3. 遺構F-681出土鉄片1 (No. 2-1)



4. 遺構F-681出土鉄片2 (No. 2-2)



5. 遺構E-780出土鍛造片 1 (No. 3-1)



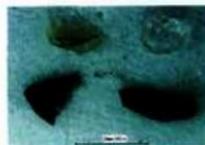
6. 遺構E-780出土鍛造片 2 (No. 3-2)



7. 遺構E-780出土鍛鉄錠 (No. 3-4)



8. 遺構E-780出土スポンジ状物 (No. 3-3)



9. 遺構E-780出土剥片状片

写真7 遺構出土微細遺物類のマイクロスコープ写真

第3章 プラントオパール分析

鈴木 茂 (バレオ・ラボ)

プラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成された(機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体)後、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となったものを言う。機動細胞珪酸体については、藤原(1976)や藤原・佐々木(1978)など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている(藤原 1984)。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。重竹遺跡および上西田遺跡においてもトレンチ断面より採取された土壌試料についてプラント・オパール分析を行い、稲作の有無について検討した。

1. 試料と分析方法

分析用試料は重竹遺跡G区358号トレンチ(試料番号1~6)と上西田遺跡の335号トレンチ(A~E)および288号トレンチ(F, G)より採取された13試料である。土相はおおむねシルト質粘土である。また358号トレンチの試料1(GII a層)は耕地整理前(明治~昭和)、試料5(GV層)が中世末~近世、また335号トレンチの試料Aが近世の畝状遺構の間に堆積したシルト層(IV層)である。プラント・オパール分析はこれら13試料について、以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトールピーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約40 μ m)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

2. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(表144)、それらの分布を図315(385号トレンチ)、図316(335号トレンチ、288号トレンチ)に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、多くの試料よりイネのプラント・オパールが検出された。

重竹遺跡358号トレンチ:全試料よりイネのプラント・オパールが検出され、個数的には最上部の試料1が約20,000個で最も多く、最も少ない試料6でも約6,000個である。また、イネの穎(穀殻部分)に形成される珪酸体の破片も少ないながら多くの試料より検出されている。

最も多く得られたのはネザサ節型で、全試料100,000個以上で、試料1、4では200,000個を越えている。次いで多いクマザサ属型やウシクサ属はネザサ節型の10分の1程度である。シバ属は試料5を除き検出され、試料4では7,200個とシバ属としては高い数値を示している。キビ属は全試料から得ら

表142 試料1g当たりのプラント・オパール個数

試料番号	遺跡層位	イネ (個/g)	イネ類破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	G II	19,700	2,200	218,300	13,200	6,600	0	2,200	5,500	9,900	15,400
2	G III	9,100	1,100	196,600	10,200	4,500	1,100	3,400	1,100	15,900	14,800
3	G IV a	18,900	0	185,900	10,700	11,800	0	4,700	4,700	8,300	26,100
4	G IV b	8,400	1,200	202,700	12,000	3,600	0	7,200	1,200	16,800	13,200
5	G V	7,200	0	149,700	26,300	3,600	1,200	0	1,200	21,600	22,800
6	G VI	6,200	0	170,600	12,400	5,000	3,700	1,200	5,000	46,100	23,700
A	IV	0	0	6,400	14,200	1,300	0	0	0	2,600	3,900
B	VII a	2,500	0	16,100	12,400	0	0	0	5,000	3,700	3,700
C	VII b	5,300	1,300	4,000	14,500	0	0	1,300	1,300	1,300	9,200
D	VIII a	11,700	1,300	10,400	54,700	1,300	0	1,300	2,600	6,500	9,100
E	VIII b	7,300	0	19,500	13,400	0	0	1,200	2,400	4,900	10,900
F	V	0	0	1,200	2,400	0	0	1,200	1,200	1,200	1,200
G	VII	0	0	4,700	14,100	1,200	0	0	0	0	4,700

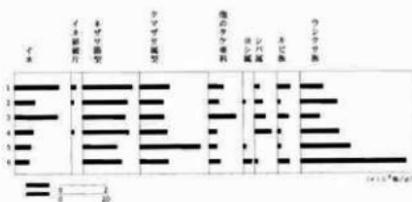


図315 358号トレンチ試料のプラント・オパール分布図

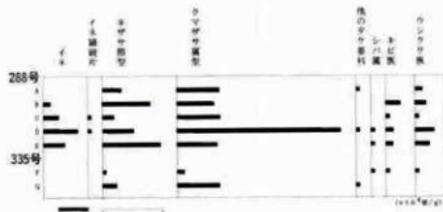


図316 335号・288号トレンチ試料のプラント・オパール分布図

れ、最下部とイネが多い試料1、3でやや多く検出されている。

上西田遺跡335号トレンチ：最上部試料Aを除きイネのプラント・オパールが検出され、試料Dが最も多く約12,000個、試料Bが最も少なく2,500個であった。また類に形成される珪酸体の破片が若干得られている。

最も多く得られているのはクマザサ属型で、全試料で10,000個を越え、試料Dでは約55,000個を示している。ネザサ節型は358号トレンチと比べると非常に少なく、最も多い試料Eでも20,000個弱である。ウシクサ族も同様で、10,000個を越える試料は無い。キビ族はイネと同様に最上部を除き検出されている。その他シバ属が下部試料で若干観察されている。

上西田遺跡288号トレンチ：イネは検出されず、全体にプラント・オパールの検出数が少なくなっている。そのうち10,000個を越えるのは試料Gのクマザサ属型のみで、試料Fではそのクマザサ属型が最も多く2,400個、他のネザサ節型、シバ属、キビ族、ウシクサ族はやっと1,000個を越えた程度である。

3. 稲作について

上記したように、2トレンチ試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上検出された地点から推定された水田跡の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、

稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。

重竹遺跡358号トレンチでは全試料5,000個を超えるイネのプラント・オパールが検出されており、上記からするとこれらの層準における稲作の可能性は高いと判断される。

上西田遺跡335号トレンチでは下部3試料(C-E)で5,000個を越えており、これらの層準における稲作の可能性は高いとイネのプラント・オパール個数からは判断される。試料Bについては2,500個とやや少なく、個数的には稲作の可能性は低いと判断され、下位の試料C層より攪乱などにより混入したことが推測される。一方で少ないながらイネが検出されていることから全く稲作の可能性が無いわけではなく、何らかの要因で試料採取地点付近のイネの密度が低くなっていたことが考えられる。このようなことから試料B層における稲作については土相や遺構の状況、花粉分析など多方面からの検討により判断されることが望まれる。最上部試料Aにおいてイネは検出されず、畝状遺構における稲作の可能性は低いと判断される。

上西田遺跡288号トレンチの2試料(F、G)からイネのプラント・オパールは検出されず、プラント・オパール分析からは稲作の可能性は低いと判断される。

4. 遺跡周辺のイネ科植物

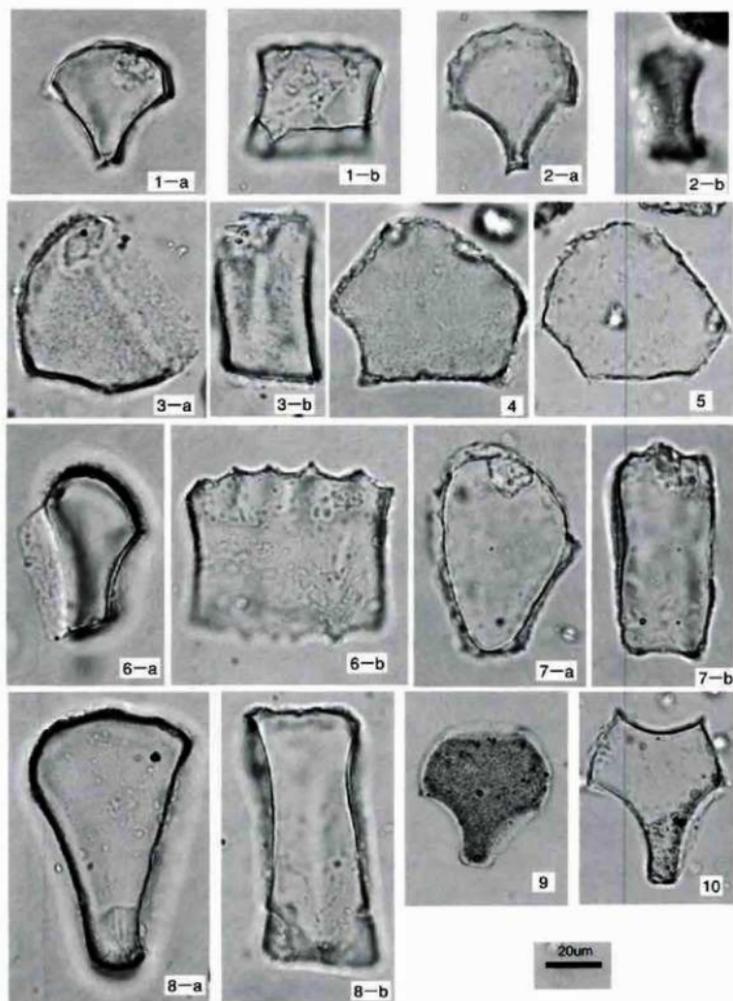
358号トレンチにおいてネザサ節型が非常に多く検出されており、ケネザサやゴキダケといったネザサ節型のササ類が稲作地周辺や周辺丘陵部に成立していた森林の林縁部など日のあたる開けたところに生育していたと推測される。またウシクサ族(ススキ、チガヤなど)も同様なところでの生育が考えられ、これらの草地が形成されていたとみられる。現在の愛知県においては丘陵のやや平坦な台状地においてススキ-ケネザサ群集が成立しており(愛知県 1995)、このような植生がみられたものと思われる。またシバ属(ノシバなど)も日のあたる開けたところでの生育が考えられ、稲作地周辺の畦道などに分布していたものと推測される。一方、クマザサ属型のササ類(スズタケ、ミヤコザサなど)については、遺跡周辺に成立していたであろう森林の下草的存在で生育していたと推測される。

キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについて、現時点においては分類が難しく不明である。しかしながら、イネと似た産出傾向を示していることから稲作にともなう雑草類(タイヌビエなど)ではないかと思われる。その他では、ヨシを代表とするヨシ属が稲作地周辺の水路などに若干生育していたと考えられる。

引用文献

- 愛知県(1995) 愛知県の植物相。南川 幸編、328P。
 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) 一 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法一。考古学と自然科学、9、P.15-29。
 藤原宏志(1984) プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査一。考古学ジャーナル、227、P.2-7。
 藤原宏志・佐々木彰(1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究(2) —イネ(Oryza)属植物に

における機動細胞珪酸体の形状一。考古学と自然科学、11、P. 9-20。



1、2：イネ（a：断面、b：側面）

3～5：クマザサ属型（3-a、4、5：側面）1：No. 3、2：No. D

6：ネザサ属型（a：断面、b：側面）No. 3

7：他のタケ亜科（a：断面、b：側面）No. 3

8：ウシクサ属（a：断面、b：側面）No. 3

9、10：シバ属（断面）9：No. 3、10：No. D

写真8 重竹遺跡のプラント・オパール (scale bar: 20 μ m)

第4章 花粉分析

新山雅広 (バレー・ラボ)

1. 試料

花粉化石群集の検討は、重竹遺跡D区井戸(D100)埋土の最下層より採取された1試料について行った。試料は、黒色礫混じり有機質粘土である。なお、時代については、15世紀末と考えられている。

2. 方法

花粉化石の抽出は、試料約2gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(水酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロベットの取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。

3. 花粉化石群集の記載

同定された分類群数は、樹木花粉1、草本花粉1、形態分類で示したシダ植物胞子2である。産出個数は、樹木花粉のスギ属が1点、草本花粉のヨモギ属が1点、シダ植物の単条型胞子が8点、三条型胞子が3点であった。その他に、同定には至らなかった不明花粉が1点であった。

4. 考察

検討した結果、産出した花粉・胞子化石が非常に少なかったため、古植生について推定することはできなかった。試料としたのは、井戸(D100)埋土で、水付き堆積物と予想した粘質土である。試料中には炭化物片(燃焼により炭化した植物片)が比較的多く見られ、人為が関わった堆積物であるこ

とが予想される。花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、産出した花粉化石が非常に少ないことから、試料とした堆積物は水成環境で安定して堆積したものと考える。このことから、この井戸は、常時停滞した環境ではなかったことが予想される。なお、試料とした堆積物は、黒色土であること、花粉化石が保存されていなかったことから、土壌であると推定される。

表143 D区井戸の花粉化石産出一覧表

和名	学名	
樹木		
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	1
草本		
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	1
シダ植物		
単条型胞子	Monolete spore	8
三条型胞子	Trilete spore	3
樹木花粉	Arboreal pollen	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	1
シダ植物胞子	Spores	11
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	13
不明花粉	Unknown pollen	1

第5章 樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

第1節 重竹遺跡出土炭化材の樹種同定

1. はじめに

ここでは、重竹遺跡の鎌倉時代と12世紀終わり～16世紀始めの2時期の鍛冶関連遺構、奈良時代の竪穴住居跡カマド、平安時代終わり～鎌倉時代始めの祭祀関連の土器埋納遺構から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

炭化材は、取上げられていた試料から形状や大きさの異なる炭化材を選び、樹種同定試料とした。まず、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に片歯の剃刀を接線方向と放射方向にあてて弾くように割り接線断面と放射断面を作成する。この3方向の断面を走査電子顕微鏡で拡大し、材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定する。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子㈱製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。同定した炭化材の残り破片は御岐卓果教育文化財団文化財保護センターに保管されている。

3. 結果

同定結果の一覧を、表144に示した。

鍛冶関連遺構(E500・E780・E830)と隣接する大型土坑(E770)からは、マツ属複雑管束亜属・モミ属・ヒノキ・クリ・ブナ科・タケ亜科が検出された。ブナ科と同定した炭化材は、クリの節部か根張り部の管孔配列に似ていたが、コナラ節・シイノキ属・マテバシイ属の可能性もあり、小破片で十分な観察ができなかったためにこれらの分類群を含むブナ科とした。タケ亜科は、2試料から比較的多くの破片が検出され、横断面の維管束鞘の発達が良い組織学的特徴と、破片の概観から推定される程(茎)の太さからも竹類と思われる。

竪穴住居跡カマド(F4-SF1)から出土した直径1.1cmの芯持ち丸木の炭化材は、アカガシ亜属であった。

祭祀関連の土器埋納遺構から多数出土した竹の程(茎)の破片と思われる炭化材は、組織学的にもタケ亜科の程(茎)が太く直立するタケ類の特徴が認められた。

材組織

モミ属 *Abies* マツ科 写真9 1a-1c (E830 SK1)

仮道管・放射柔細胞からなり、正常樹脂道はない針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞の壁は厚く、放射断面において接線壁に数珠状肥厚が見られる。放射組織の細

胞高は比較的高い。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyton* マツ科 写真9 2 a-2 c (E500)

垂直・水平の樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材である。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管が1層以上あり、その内壁には鋸歯状の肥厚が顕著である。

アカマツまたはクロマツであるが、鋸歯状の発達状態や形状の特徴から2種を識別できる場合があるが、炭化材では内腔に張り出た鋸歯状の特徴は欠落しているため、識別は出来なかった。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 写真9 3 a-3 c (E770)

針葉樹材で、早材から晩材の移行はゆるやかである。分野壁孔の輪郭は大きな円形で、その孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型、1分野におもに2個が水平に配列している。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真9 4 a-4 c (F4-SF1)

集合放射組織を挟み小型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材である。接線状の柔組織が顕著である。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織はほぼ同性、単列のものとして細胞幅が広い広放射組織があり、道管との壁孔は孔口が大きく開き柵状・交互状である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真9 5 a-5 c (E830)

年輪の始めに大型の管孔が1-2層配列し、晩材では非常に小型の管孔が多数分布し、火災状配列も一部で認められる。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は同性、1-2細胞幅、道管との壁孔は孔口が大きく開き交互状である。この破片は、年輪幅は比較的狭く環孔性も明瞭であるが、放射組織は2細胞幅のものが目立ったことから、2細胞幅を形成しやすい変異を示す材か、節部や根張りの部位の可能性が類推される。

ブナ科 Fagaceae 写真9 6 a-6 b (E500)

横断面の管孔は小型から非常に小型で、配列は一部で環孔性の傾向が見られるが放射孔材のようでもあり判然としない。放射組織は単列同性である。クリ・コナラ節・シイノキ属・マテバシイ属の可能性が考えられるが、切片が小さく広範囲の組織を観察できず集合放射組織の有無・管孔分布も不十分なので、ブナ科として報告する。

タケ亜科 Gramineae subfam. Bambusoideae イネ科 写真9 7 (E770) 8 (F24)

やや硬質で厚み(5-8mm)があり、稈の中心部は中空である。維管束は不整中心柱で多数が分布し、維管束は向軸側に原生木部とその左右に後生木部の2個の管孔、背軸側に篩部があり、全体としては4-3個の穴の集合に見える。維管束の周りには非常に厚い維管束鞘が発達し、特に稈の外周部は塊状・島状に密在し、稈を強く支持している様子がわかる。このような形質からイネ科のタケ類とササ類を含むタケ亜科と同定した。

いわゆるタケ・ササの仲間では12属が含まれ、中国や東南アジアから移入され栽培により広まったものが多く、稈の破片や組織のみからは属や種を識別することは難しい。

4. まとめ

2時期の鍛冶関連遺構から出土した炭化材は、マツ属複維管束亜属・ヒノキ・モミ属の針葉樹、ク

リ・アナ科の広葉樹、そしてタケ亜科（竹類）であった。検討できた試料数が少ない事もありこれらの樹種すべてが鍛冶関連の燃料材とは結論できず、道具類などの燃え残りも含む可能性がある。強いて今後の資料蓄積の参考に記すならば、鎌倉時代の遺構から出土した針葉樹はヒノキ・モミ属であるが、12世紀終わり～16世紀始めの遺構から出土した針葉樹材は、二次林要素のマツ属複雑管束亜属であった事である。またタケ亜科（竹類）が2試料から検出されたが、竹類が燃料材として使用されたとは考えにくいので、鍛冶関連の作業施設の構造部や送風部で使用されていたと類推される。現在でもメダケが適宜な太さである事から、送風部で利用されている。

奈良時代の住居跡カマドからは、燃料材として有用なアカガシ亜属の枝材が検出された。燃料材は大量に必要である事から、この時代にはアカガシ亜属が豊富な森林が遺跡周辺に成立していた可能性が類推される。

祭祀関連遺構からタケ亜科が検出される事例を散見するが、当遺跡においても検出された。

表144 重竹遺跡出土炭化材樹種同定結果

グリッド	遺構名	層位	遺構種別	時期	樹種	備考
EM20	E500	①層	鍛冶関連遺構	15世紀終り ～16世紀始め	マツ属複雑管束亜属	年代測定試料 PID-2162
					アナ科	小破片、集合放射組織は不明
EJ16	E770	②層	大型土坑	鎌倉時代	タケ亜科(竹類)	年代測定試料 PLD-2164 程の破片、幅3.5cm、厚み5mm
					ヒノキ	
EJ17	E780	③層	鍛冶関連遺構	鎌倉時代	タケ亜科(竹類)	年代測定試料 PLD-2165 程の破片、幅1.1cm、厚み6mm 遺物番号2179
EL16	E830 SK1	2層	鍛冶関連遺構	鎌倉時代	モミ属	年代測定試料 PLD-2166 破片複数
					クリ	破片複数
GD28	F4-SF1	①層	懸穴住居跡カマド	奈良時代	アカガシ亜属	年代測定試料 PLD-2167 直径1.1cm芯持ち丸木
GE30	F24	①層	土器埋納遺構 祭祀関連	平安時代終り ～鎌倉時代始め	タケ亜科(竹類)	竹の形状が完存 の破片、最大破片厚み8mm

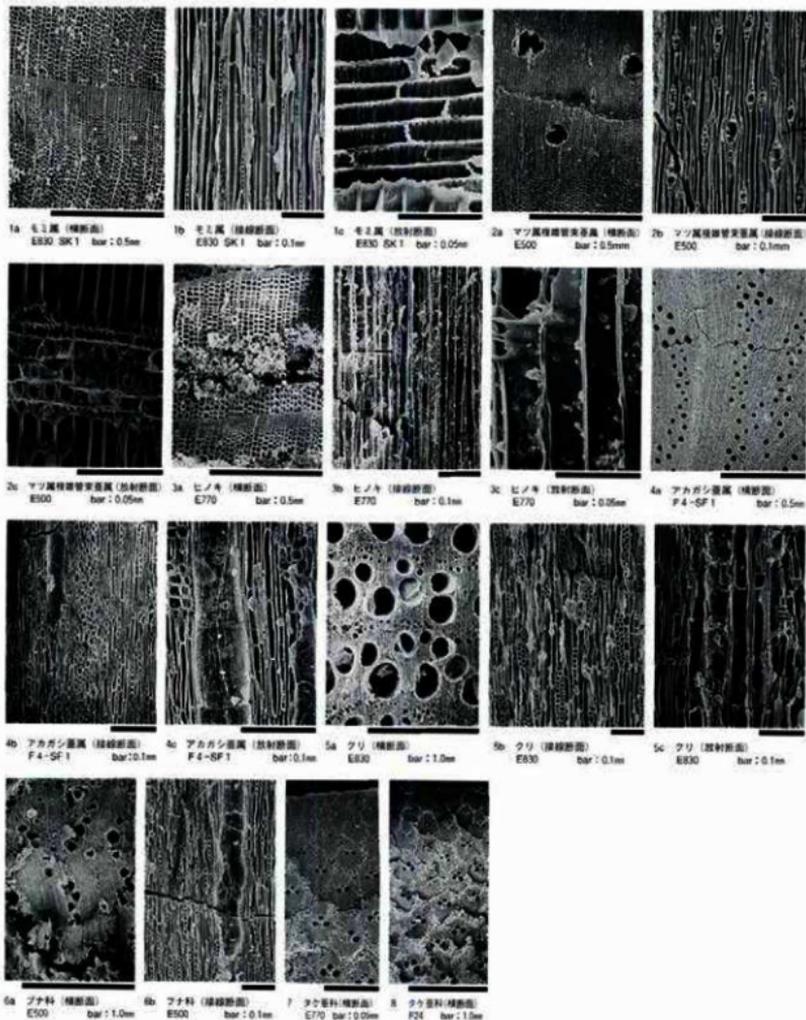


写真9 重竹遺跡出土炭化材樹種

第2節 重竹遺跡出土井戸の丸太で組まれた横棧の樹種同定

1. はじめに

ここでは、17世紀後半の井戸（A100）の丸太で組まれた横棧4点の樹種同定結果を報告する。この4点は芯持ち丸木の太い材であり、井桁に組まれていたものである。

2. 試料と方法

破損部から材のブロック破片を取り、材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて滑走マイクロームを用いて各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作製した。そして、光学顕微鏡を用いてこの材組織を40~400倍に拡大して観察を行った。

材組織標本はパレオ・ラボに保管されている。

表145 重竹遺跡井戸枠樹種

遺構	位置	樹種
A100	東	アカマツ
A100	西	クロマツ
A100	南	アカマツ
A100	北	クロマツ

3. 結果

同定結果の一覧を、表145に示した。樹種は、アカマツ（東・南）とクロマツ（西・北）であり、アカマツとクロマツが対峙する配置であった。

材組織記載

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 写真10 1 a-1 c (A100南) 3 (A100東)

垂直と水平の樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材である。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端に有縁壁孔を持つ放射仮道管があり、その内壁には鋸歯状の肥厚が発達している。この肥厚は、先の鋭く尖った鋸歯状或不規則な鋸歯状で、内腔に厚く張り出している箇所もある。

クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. 写真10 2 a-2 c (A100西) 4 (A100東)

上記のアカマツとはほぼ同じ材組織であるが、放射仮道管の内壁の肥厚は全般にアカマツほど先が鋭くなくなつたからで、内腔に張り出た肥厚部も薄い。

4. まとめ

丸太組の井戸の横棧4点は、すべてマツ属樹脂管束亜属に属するアカマツとクロマツであった。マツ材は耐久性・耐水性に優れた材質であり、井戸枠として適材を利用していたことが判った。

アカマツとクロマツは暖帯から温帯下部に生育し、特にアカマツは人間活動との関係が深く、二次林の主要樹であり過去には現在ほど広く分布していなかった。アカマツは内陸部に、クロマツは海岸部に多く分布する。マツ属は陽光地や乾燥地の環境でも生育する生態的特徴から、森林開発や土地利用の拡大など人間活動の活発化・拡大と共にマツ属も生育地を広げ、マツ材の利用も拡大したとされる。17世紀後半の横棧（A100）にマツの太い丸太材4本が利用されたことは、時代性を反映していると思われる。

4点とも材の保存状態は良好であり、切片の広い面積を観察できたので、材組織記載の項で記した

放射仮道管内壁の肥厚の程度や形状から、アカマツとクロマツを識別した。東：西（アカマツ：クロマツ）と南：北（アカマツ：クロマツ）であり、異なる樹種が相対時する配置であった。なお、樹形・松葉・幹の色などから、アカマツは女松、クロマツは男松と言われる。井戸に関しては、多くの民俗的な慣例・風習があるようである。井戸材や井戸枠の樹種利用に関するこだわりや風習などは知らないが、木材や樹木を利用する色々な場面で、配置や利用樹種にこだわりや規定をもうける伝統もあるので、今後の事例蓄積の一視点として、今回このような配置が認められたことを記しておく。

なおアカマツとクロマツの同定に関しては、独立行政法人森林総合研究所の能代修一博士に確認して頂いた。末尾ながら感謝の意を表す。

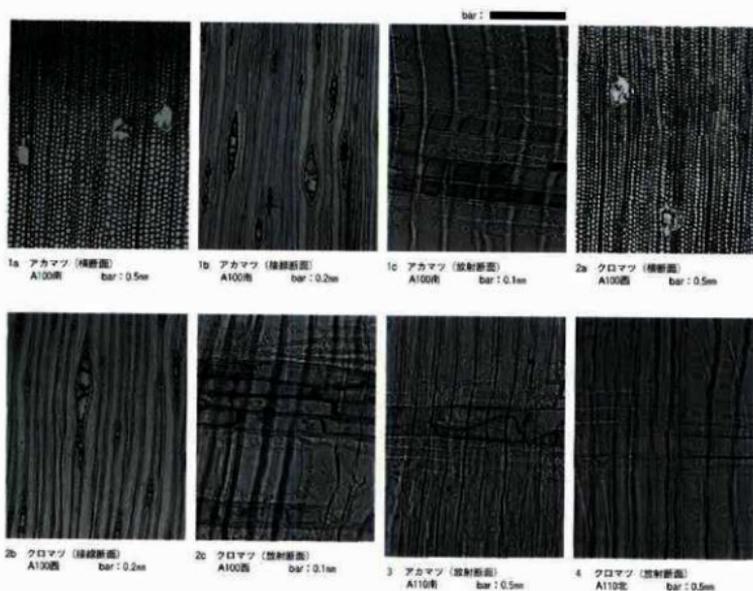


写真10 重竹遺跡出土井戸枠の木材樹種

第6章 AMSによる放射性炭素年代測定

山形秀樹 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

重竹遺跡より検出された炭化米および炭化材の加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、炭化米 1 試料、炭化材 8 試料の合計 9 試料である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

表146に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値 (yrBP) の算出は、¹⁴Cの半減期として Libby の半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期5,730 \pm 40年) を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の綿状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

¹⁴C年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正值は¹⁴C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしきの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代校正を行った。暦年代校正した1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしみの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の¹⁴C年代、p. 3-20。

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB 3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p. 215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.

表146 放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{perm}}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP \pm 1 σ)	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代	
				暦年代校正値	1 σ 暦年代範囲
PLD-2162 (AMS)	炭化茶 ST01STB, BN9 I262-①層	-24.4	405 \pm 25	cal AD 1,455	cal AD 1,445-1,480(100%)
PLD-2163 (AMS)	炭化材(マツ属複雑管束類) ST01EE, EM20 E-500①層	-25.2	425 \pm 25	cal AD 1,445	cal AD 1,440-1,470(100%)
PLD-2164 (AMS)	炭化材(タケ亜科) ST01EE, EJ16 E-770②層	-26.7	930 \pm 25	cal AD 1,040 cal AD 1,090 cal AD 1,120 cal AD 1,140 cal AD 1,155	cal AD 1,035-1,070(33.7%) cal AD 1,080-1,125(48.4%) cal AD 1,150-1,155(10.1%)
PLD-2165 (AMS)	炭化材(タケ亜科) ST01EE, EJ17 780-③ No.2179	-26.5	880 \pm 25	cal AD 1,165 cal AD 1,175 cal AD 1,180	cal AD 1,070-1,080(13.3%) cal AD 1,125-1,135(12.1%) cal AD 1,160-1,215(74.7%)
PLD-2166 (AMS)	炭化材(モミ属) ST01F, EL16 E-830 SK1②層	-25.8	1,010 \pm 25	cal AD 1,020	cal AD 1,000-1,030(100%)
PLD-2167 (AMS)	炭化材(アカガシ亜属) ST01F, GD28 F4-SF1-①	-25.9	1,325 \pm 25	cal AD 680	cal AD 660-690(76.7%) cal AD 700-710(12.3%) cal AD 750-760(11.0%)
PLD-2168 (AMS)	炭化材(エゴノキ属) ST01F, GA27 F477-①	26.9	1,295 \pm 30	cal AD 690 cal AD 705 cal AD 755	cal AD 685-720(59.2%) cal AD 745-770(40.8%)
PLD-2169 (AMS)	炭化材(タケ亜科) ST01F, GE30 F24 ①層	-28.1	1,055 \pm 25	cal AD 985	cal AD 980-1,020(100%)
PLD-2170 (AMS)	炭化材(クヌギ属) ST01F, FR24 F771-①	-24.8	1,095 \pm 25	cal AD 975	cal AD 900-920(42.2%) cal AD 955-985(50.4%)

第7章 土器付着漆質物等の材質分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

重竹遺跡の調査では、黒色漆質物が付着した山茶碗が出土した。ここでは、これら土器に付着する漆質物について顕微赤外分光分析を行い、漆の可能性について検討した。また、山茶碗内側に付着した赤色物については、蛍光X線分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、12世紀～14世紀の山茶碗に付着した漆質物7試料 (No.1～No.7) と赤色物1試料 (No.8) である。なお、漆質物は、いずれも土器の内側に付着した黒色物である (写真11、表147)。

漆質物試料は、比較的良好な状態で残存する部分からピンセットあるいは手術用メスなどを用いて1mm程度程度の試料片を採取した。採取した試料片は、厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 (日本分光製 FI/IR-410、IRT-30-16) を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

試料No.8の赤色物は、化学組成を調べるために、両面テープで試料台に固定し、X線分析顕微鏡を用いて測定した。測定は、佛蘭場製作所製のX線分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。測定条件は、X線管径100 μ m、電圧50KV、電流0.26mA、測定時間500sec でを行い、標準試料を用いない FP 法 (ファンダメンタルパラメータ法) で半定量分析を行った。

3. 結果および考察

[漆質物No.1～No.7]

図317～320に、各試料と生漆 (吸収位置に番号を付した) の赤外吸収スペクトルを合わせて示した。なお、縦軸は透過率 (%T; Transmittance)、横軸は波数 (Wavenumber (cm^{-1}); カイザー) である。

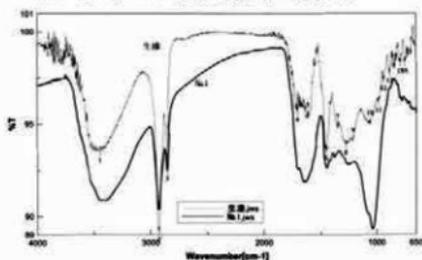
図中の生漆の吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収の位置を示し、これに対応する波数および強度はピーク検出結果として示した。

漆を同定する場合、漆の成分すなわち赤外吸収位置がより多くの位置において一致することが同定のポイントとなる。なお、他の成分が混入すると異なった吸収を伴うことがある。

生漆のピーク (吸収) は、No.1～No.10において顕著な吸収を示す。

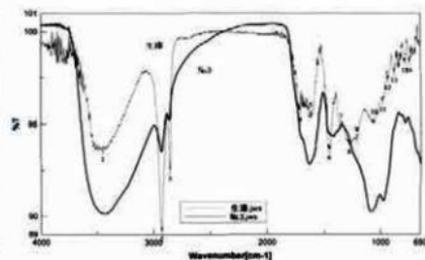
いずれの試料もピークNo.1～No.3においては明瞭なピークが認められるが、試料No.4やNo.5あるいはNo.7は、生漆のピークと一致している。一方、試料No.2やNo.6は、生漆のピークと概ね一致している。なお、試料No.1とNo.3は、ピークNo.1～No.3は一致するが他のピークでは必ずしも一致しない。

このことから、試料No.4とNo.5あるいはNo.7は、漆と同定される。また、試料No.2とNo.6は漆の可能性が高い。なお、試料No.1とNo.3は、有機物であるが漆の可能性は低い。



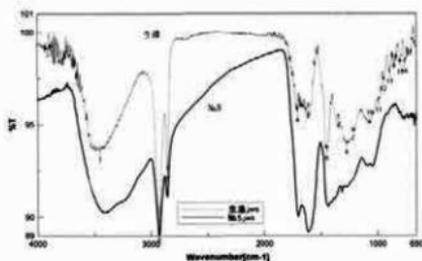
ピーク番号	波数	強度	波数	強度	波数	強度	波数	強度
1	3449.06	33.7368	2	2928.28	35.1931	3	2924.08	35.4929
4	1614.13	38.3205	5	1469.21	37.1888	7	1289.52	38.8413
8	1212.04	34.2157	10	1064.51	35.1887	11	987.35	36.2220
13	889.08	37.8138	14	848.53	36.2700	15	792.00	35.3251

図317 試料No.1とNo.2の赤外線吸収スペクトル図



ピーク番号	波数	強度	波数	強度	波数	強度	波数	強度
1	3449.06	33.7368	2	2928.28	35.1931	3	2924.08	35.4929
4	1614.13	38.3205	5	1469.21	37.1888	7	1289.52	38.8413
8	1212.04	34.2157	10	1064.51	35.1887	11	987.35	36.2220
13	889.08	37.8138	14	848.53	36.2700	15	792.00	35.3251

図318 試料No.3とNo.4の赤外線吸収スペクトル図



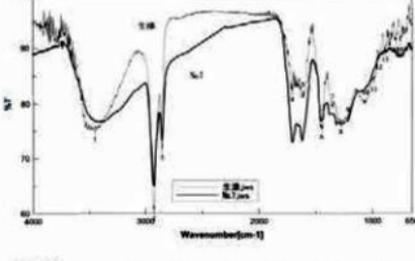
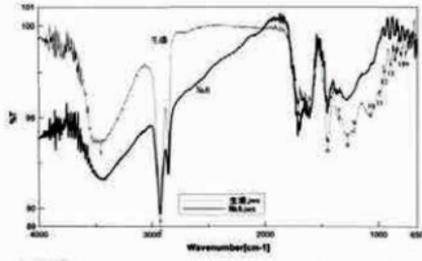
ピーク番号	波数	強度	波数	強度	波数	強度	波数	強度
1	3449.06	33.7368	2	2928.28	35.1931	3	2924.08	35.4929
4	1614.13	38.3205	5	1469.21	37.1888	7	1289.52	38.8413
8	1212.04	34.2157	10	1064.51	35.1887	11	987.35	36.2220
13	889.08	37.8138	14	848.53	36.2700	15	792.00	35.3251

図319 試料No.5とNo.6の赤外線吸収スペクトル図



ピーク番号	波数	強度	波数	強度	波数	強度	波数	強度
1	3449.06	33.7368	2	2928.28	35.1931	3	2924.08	35.4929
4	1614.13	38.3205	5	1469.21	37.1888	7	1289.52	38.8413
8	1212.04	34.2157	10	1064.51	35.1887	11	987.35	36.2220
13	889.08	37.8138	14	848.53	36.2700	15	792.00	35.3251

図320 試料No.7の赤外線吸収スペクトル図



[赤色物No.8]

図321に試料No.8の蛍光X線スペクトルと半定量分析値を示す。

赤色付着物の化学組成は、酸化鉄 Fe_2O_3 の含有量が高く約92.43%、酸化アルミニウム Al_2O_3 が約2.19%、酸化ケイ素 SiO_2 が約2.63%、酸化リン P_2O_5 が約2.59%、その他酸化カルシウム CaO や酸化クロム Cr_2O_3 が僅かに含まれていた。このように鉄の含有量が高く純度が高いことからベンガラの可能性は高い。

なお、一部採取し粉末にしてX線回折分析（佛リガク製デスクトップ型X線回折装置）を行ったが、ピークが明瞭に検出できず鉱物は同定できなかった。

表147 試料の詳細と同定結果

試料No	遺物No	遺物	遺構層位	グリッド	遺構種別	付着状況		漆
						付着位置	色調	
1	655	縁袖(小皿)	A13③	BA1,AT2	SD	断面	褐色	?
2	575	土師器(皿, C)	B114①	BO5	SX	内側口縁	茶褐色	○
3	1063	山茶碗(南部型, 皿)	E176①	ET21	SK	内側底部	茶褐色, 黒色	△
4	1078	山茶碗(北部系, 碗, 5形式)	E761②	E117	SK	内側全面	黒色物	○
5	19	山茶碗(北部系, 碗)	F770①	FP25	大型土灰	内側全面	黒色	○
6	1222	山茶碗(南部系, 碗)	G13②	HC61	SX	内側底部	黒色, 褐色	○
7	図示せず	山茶碗(南部系, 碗)	G15①	HB55	SX	内側口縁	黒色	○
8	497	山茶碗(南部系, 碗)	D6	DH15	SK	内側底部	赤褐色	ベンガラ

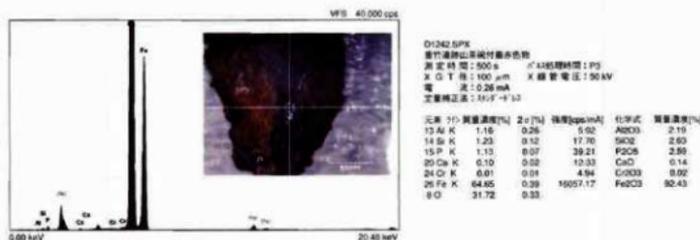
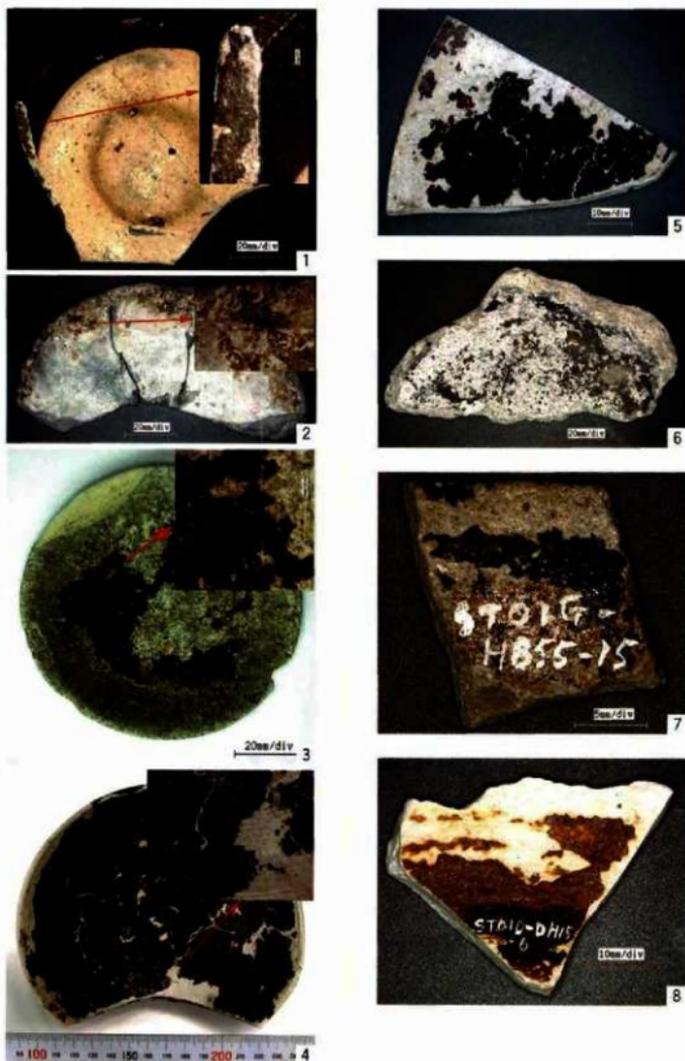


図321 山茶碗内側付着赤色物(試料No.8)の蛍光X線スペクトルと半定量分析結果



1. 緑釉小皿 (665)
3. 山茶碗皿 (1063)
5. 山茶碗、碗 (19)
7. 山茶碗、碗

2. 土師器皿 (578)
4. 山茶碗皿 (1078)
6. 山茶碗、碗 (1022)
8. 山茶碗、碗 (497)、ベンガラ

写真11 漆質物等が付着した遺物の付着状況写真

第4部 考察・まとめ

第1章 重竹遺跡のまとめ

第1節 重竹遺跡における遺構の変遷

今回の調査では、古代から近世を中心とした多数の遺構・遺物を確認することができた。このことは、単純に広い面積を調査したからではなく、中位から低位の段丘を横断するように広範囲の調査を行った結果、各時期の遺構がそれぞれの地区で検出されたためと考えられる。すなわち、この結果は、当地域の人々の集落変遷を表している可能性が高いと言える。そこで、以下のような手順を踏みつつ、古代から中世にかけての当地域の景観復元を試みる。

- ① 検出した遺構変遷のまとめ
- ② 田地籍図や隣接する重竹遺跡B地点から検出された遺構群との対比
- ③ 各地点から検出した遺物の分析
- ④ ①～③から得られた結果による、当地域の景観復元

ここではまず、調査成果から得られた各遺構の時期をもとに、どのような変遷をたどったかを整理する。図323～325は、A～I区から検出した遺構を時期別に抜き出して掲載したものである。

1期とした縄文～弥生時代の明確な遺構は、D区西調査区から検出した溝跡D420のみである。自然流路と考えるが、多量の石礫を検出しており特徴的な遺物の組成がみられる。この他遺構は検出していないが、F区の古代以降の遺構の基盤となっている層中から、縄文時代早期の土器⁹⁾・石器がまともに出土した(FTR1)。また、土壌化していない層から縄文時代の遺物が検出する状況は、重竹遺跡A地点から検出された縄文時代中期の竪穴住居跡の状況によく似ている²⁾。長良川沿岸の自然堤防形成過程における洪水砂などの堆積が影響しているのではないだろうか。

2期では、F区から溝跡群、G区からピットを1基検出した。いずれも7世紀代と推定され、3期の住居跡群よりも古い遺構と考える。特にG区のピットG530から検出した7世紀前葉の須恵器杯身は、細片が含まれている可能性はあるが、同時期の遺物を他に確認しておらず、集落の始まりを考える上で貴重な資料と言える。

3期では、F区から竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出した。竪穴住居跡は、遺構内から出土した遺物から、8世紀前葉(3a期)と9世紀前葉(3c期)に分けることができる(図322)。前者は他の竪穴住居



図322 3期の遺構配置

跡より大きな規模をもつF4・F122以西に分布している。遺構内からは主に7世紀後葉～8世紀前葉と判断される遺物が出土しており、掘形が深く肩がしっかりしている共通点があるが、カマドの位置や主軸方位には統一性がない。また、F4・F122は柱穴の形状など他の住居跡とは全く異なっており、一線を画している。一方F4・F122の以西には、F477・F529・F545という9世紀前葉の3軒の住居跡が散在している。規模が小さく掘り込みが浅い共通点があり、主柱穴がはっきりしない点や主軸方位も似ている。ただし、カマドの位置はそれぞれ異なる。F区の竪穴住居跡群の北西から、重竹遺跡B地点において77軒もの竪穴住居跡が検出されている(第2節参照)。ここでは、8世紀前葉の竪穴住居跡は多数検出されているが、9世紀前葉のものは皆無であり、新発見と言える。また今回検出した3期の掘立柱建物跡について、遺構の切り合いや出土遺物から3C期と推定したが、これらの遺構を3C期の竪穴住居跡群と同時期と考え、遺構の密集度は非常に増すこととなり、重竹遺跡B地点の北側を中心に存在していた集落が、F区のある場所に移ってきた可能性を考慮することができる。G区からは、その重竹遺跡B地点の中央東側から検出されたSD37に接続すると考えられる溝を確認した。詳細は第2節に譲るが、G区からは溝跡以外の古代の遺構を検出しておらず、最下層の砂層内に含まれる須恵器は上流の集落からもたらされた可能性が高い。G201に沿う道路状遺構としたG81・G868は溝底に溜まった砂を盛って突き固めたと考えられる遺構であり、8世紀前葉までの須恵器が砂層内に含まれていた。G201の北側にある溝跡G41・G205は、重竹遺跡B地点のSD37に沿う古代の溝群の1条と考えられ、8世紀後葉までの須恵器が出土した。G201は南側でG617と接続してH4あるいはH7に続き、中世前期の段階まで付け替えが行われながら存続した可能性がある(G203・H3)。

4期では、F区中央東調査区から集中して遺構を検出した。遺物から、4期でも新しい時期(4C期)の遺構群と考える。掘立柱建物跡2棟と土坑3基は位置が重なっており、切り合いから掘立柱建物跡の方が土坑より新しいと考えるが、出土遺物の時期差はそれほどない。また畝状遺構とした東西方向の溝群は、掘立柱建物跡や土坑よりも古いようであるが、正確な時期は不明である。

5期では、F区に継続して居住域が存在する。ほぼ同じ幅の溝が平行して設置されるのが特徴であるが、道路側溝の可能性が高い西調査区のF293・F301・F281・F201の溝跡以外は、付け替えの可能性もある。また、溝跡とはほぼ同じ主軸方位で5棟の掘立柱建物跡が存在し、これに大型土坑が隣接する。土坑は、西調査区の南北の溝跡F368以西に集中しており、円形で掘形が深いことや、遺物が多数出土する点などの特徴がある。一方E区東調査区では、鍛冶関連遺構が5b～6a期にかけて設置されている。5期の段階では、周囲に掘立柱建物跡はなかったようであるが、D区西調査区の溝跡D470やD区・E区の土坑に同時期のものがある。中位段丘ではB区に主軸方位が揃った溝跡が設置されるが、どのような意図でつくられたものかは不明である。G区以南では、古代の溝跡G201に沿うように細く浅い南北の溝跡が、平行して設置される。平行する溝跡の間は極端に遺構が少なく、道路として機能していた可能性がある。また、H区南調査区にも2条の溝跡が平行して東西方向に設置されている。この他、H・I区には大型土坑が点在するようになる。また、I区に同時期の土坑がいくつかみられ、完形品を伴うI140やI705などの土坑が存在する他、集中して配置される土坑群(第1部第4章P234参照)の中にも当該期のものが存在する。

6a・6b期になると調査区全体に遺構がみられるようになる。F区には引き続き居住域が形成されるが、土坑を除いて遺構数は減少傾向にあるようである。E区では鍛冶関連遺構が最終段階を向

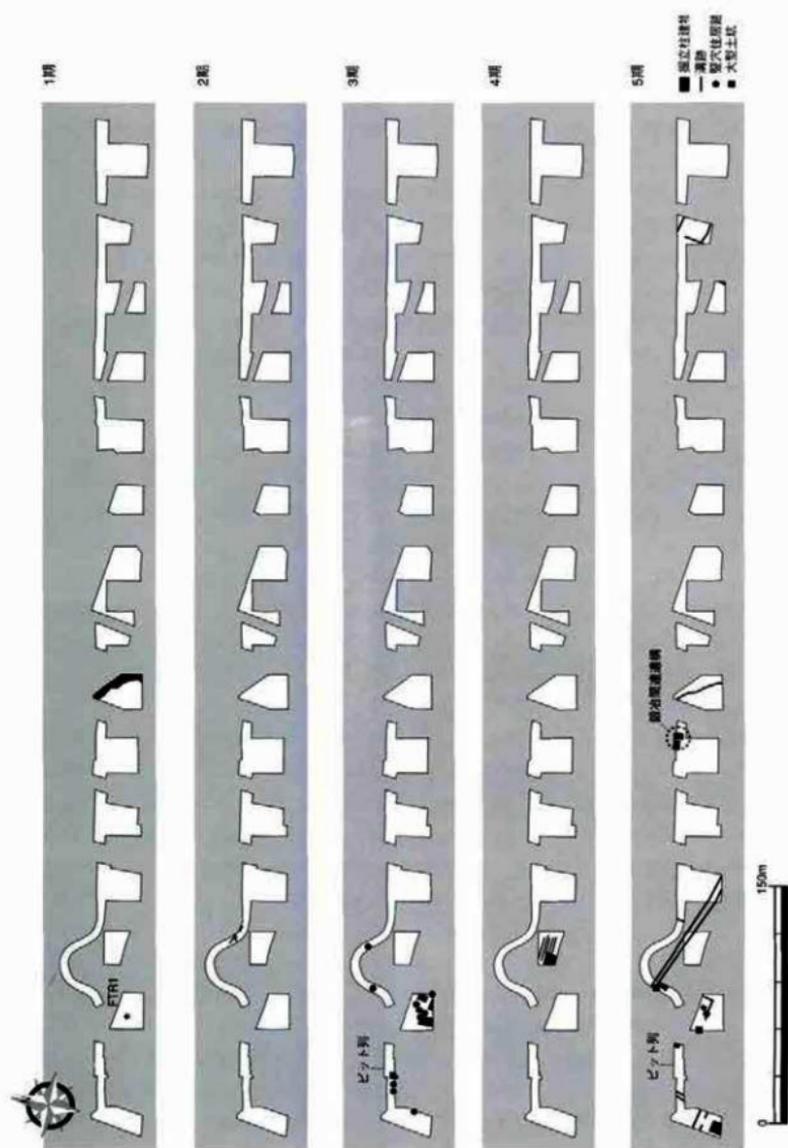
かえ、掘立柱建物跡や柱穴列、D区西調査区のD410を含めた溝跡が設置されるようになる。また、D区西調査区の現状配置をもつ土坑（第1部第4章P223参照）もこの時期からつくられるようである。一方中位段丘上では、B区からC区にかけて居住域が展開するようになる。平行する溝跡による区画が整備され、掘立柱建物跡が設置されている。地下式坑C132は遺物からでは時期を推定できないが、位置や遺構の切り合いからこの時期と判断した。G区ではこの時期の遺物は出土するものの、明確に当時期と推定できる遺構は少ない。ただし、5期とした幅の狭い溝跡や土坑には、この時期に含まれるものも存在するかもしれない。一方、H区南調査区以南では、多数の遺構が集中して検出された。特に、H区南調査区で検出された主要な遺構のほとんどはこの時期に比定される。I区にもほぼ同じ方位で掘立柱建物跡や柱穴列が展開しており、この場所に居住域が集約された感がある。I区の土坑群もこの時期のものが多いようであるが、出土遺物が少ないため判然としない。

6c期は、今回の調査で最も多くの遺構が検出された時期と言える。F区では北調査区の東側の掘立柱建物跡群を除いて、ほとんど遺構がなくなる。一方で隣接するD区西調査区・E区では、多数の掘立柱建物跡や柱穴列が配される。中位段丘上には郡上街道の前身となる道路の側溝と思われるC123が設置され、土塁や堀跡、B区中央の道路状遺構B113など、B区からD区にかけて前段階の区画を踏襲した遺構群が発達をみせる。一方で手付かずだったA区にも、B・C区とは違った主軸方位をもつ掘立柱建物跡・大型土坑などが溝跡による2つの区画の中に設置される。今回の調査で検出した中では、井戸がつくられるようになるのはこの時期からである。G区以南では、G区・H区北調査区の区画が前段階の区画を踏襲しつつ再編成され、溝跡やピット列による新たな区画が設置される。区画内には大型土坑が多く、重竹遺跡B地点の成果とも共通する（第2節参照）。掘立柱建物跡は少ないが、ピットの数から考えるとG区にも掘立柱建物跡が存在する可能性が高い。なお、G区北側の溝跡G40は東から南へ屈曲する溝跡であり、その区画内には掘形の深いピットがいくつか存在している。居住域が東へ広がる可能性を示しているといえるだろう。I区にもこの時期の遺構がみられるが、前段階に比べると減少している。

7期では、低位段丘上の遺構が急激に減少する。G区では7a期の段階で溝跡や大型土坑などがいくつか残存しているが、その他の地区では土坑を含めてほとんど遺構がみられなくなる。その中でも単独で存在する築台関連遺構E500は特殊な存在と言えるだろう。また、7b期以降居住地に関する遺構はなくなり、水田化していく。一方で中位段丘上では、低位段丘と対照的に最盛期を迎える。道路状遺構や区画溝の再編が行われ、道路状遺構B113やその道路側溝は7b期の段階で廃絶し、代わりに掘立柱建物跡や区画溝がつくられる。A区でも大型の掘立柱建物跡が設置される。土塁は7b期の段階で盛り直しが行われているが、これはその再編に伴う可能性がある。

8期には中位段丘上の遺構も減少する。区画溝や堀跡からは、8b期を最後にそれ以降の遺物がほとんど出土しなくなり、この時期には廃絶していたと考える。A区やB区中央調査区には建物跡や井戸跡などが残るが、9期前半までには廃絶していた可能性が高い。

9期以降になると郡上街道のあったと考えられるC区付近に遺構が集約されてくる。建物跡は検出されなかったが、集落が街道沿いに展開していた可能性が高い。地下式坑C132は9期に崩落して再利用されている（第1部第4章P165参照）。堀跡C71はこの時期まで深みとして残っており、ゴミ穴として利用されたようである。



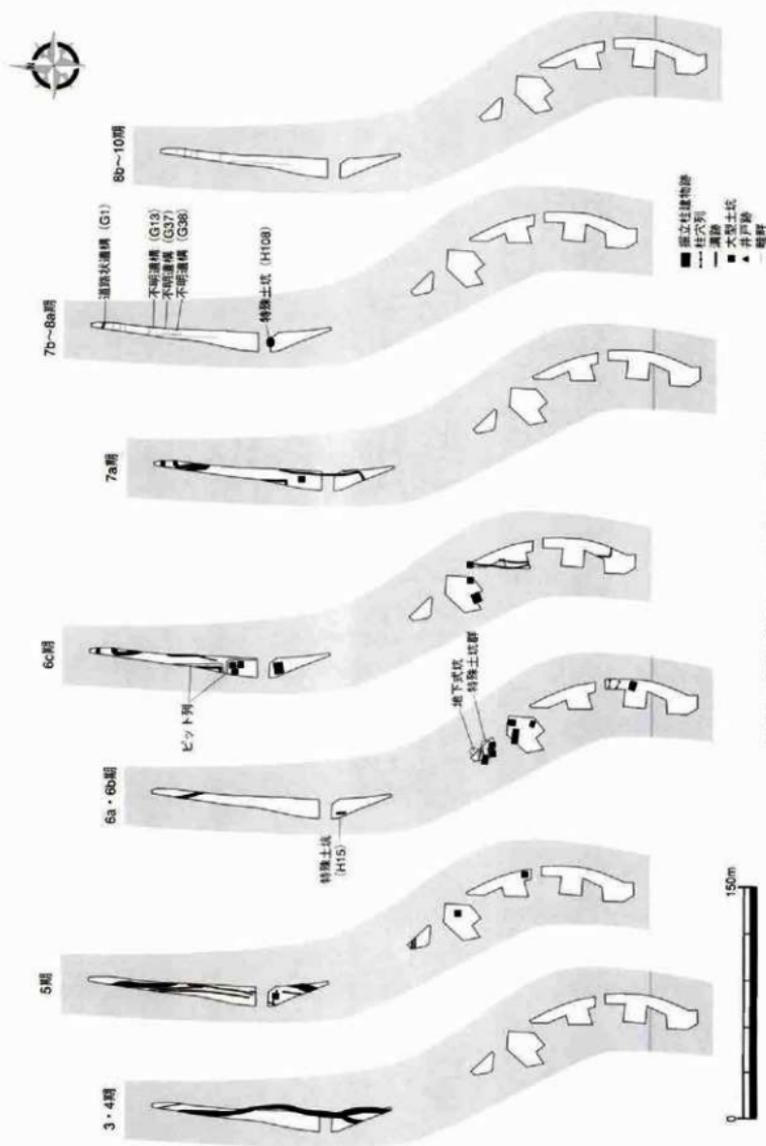


図325 遺構の変遷G～I区 (S = 1/1500)

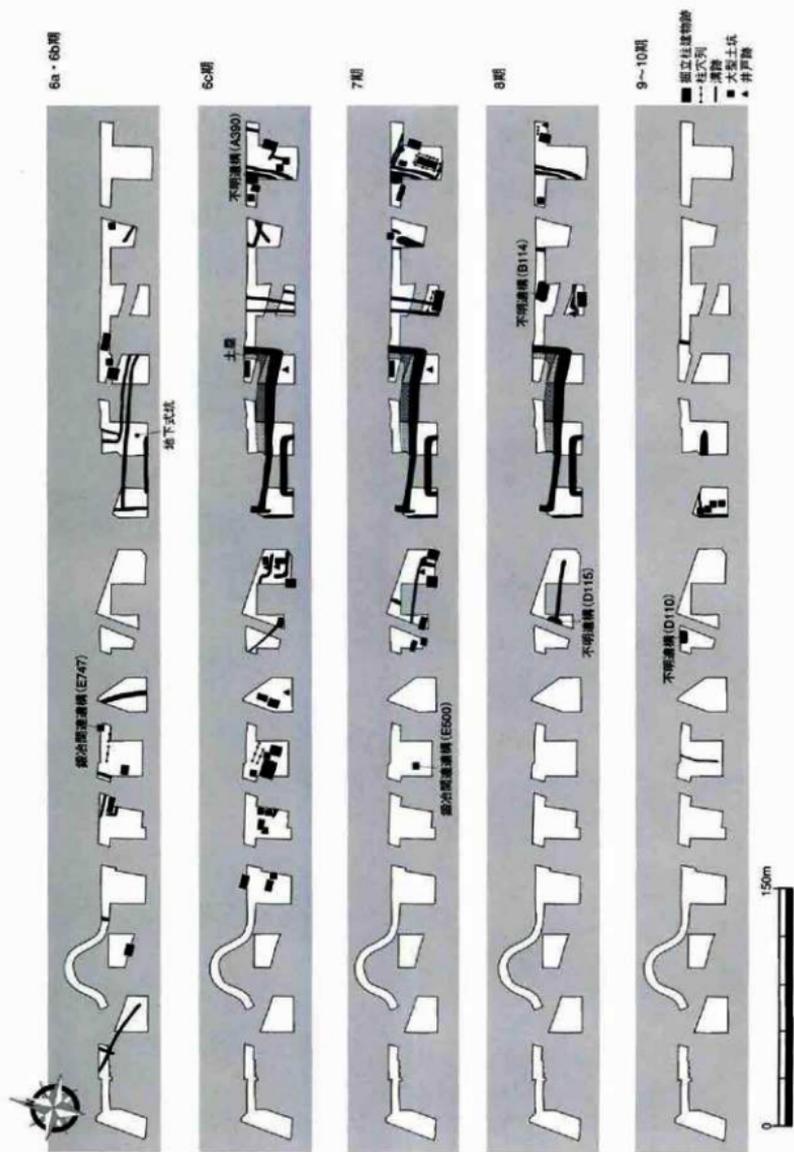


図324 遺構の変遷A～F区② (S = 1/3000)

以上のように、居住城が調査区全体の中で地点を移しながら、断続的に営まれた様相を窺うことができる。4a・4b期のように遺構・遺物がほとんどない時期もあり、継続して調査区内が利用されていたわけではないようであるが、中世のほぼ全時期に渡って、利用されている場所が移り変わりながら存続する様子は特筆されるであろう。

第2節 重竹遺跡B地点・旧地籍図との比較

本節では、昭和55・57年度に実施された重竹遺跡B地点（以下B地点）の調査成果と、旧地籍図を用いて本調査成果との比較を試みる。

重竹遺跡B地点との比較

B地点の調査は東海北陸自動車道建設に伴い、関市教育委員会によって行われた結果、古代～中世の多数の遺構・遺物を検出している。ここでは、この時の調査報告書に記された記述を元に、隣接するF・G・Hの各区から検出した遺構の時期的変遷との対比を試みた。図326に今回の調査区と重竹遺跡B地点との位置関係を示した。F区は西側が市道を挟んでB地点調査区のはほぼ中央付近に接し、G区は市道を挟んでB地点調査区の南端に接している。地形的には、B地点の北側・西側が段丘崖になっており、南端はH区北調査区の北西隅まで続いている。段丘崖の西側は田長良川であり、現在は小俣川という小河川と水田域である。

B地点の遺構を分析する作業は、時期の明確な土坑以外の遺構を、報告書の記述をもとに抽出する作業から始めた。B地点の時期設定は須恵器と白瓷系陶器の編年が主に元になっており、古代は7世紀後葉・8世紀前葉・8世紀中葉の三段階、中世はI（3・4型式）・II（5型式）・III（6～9型式）・IV（10・11型式）・大（大窯）の七段階が設定されている。本来ならば今回設定した中世前期（5期）、中世後期（6期）の区分を用いるべきであるが、今回の調査では、6・7型式を5c期、8・9型式を6a期に分類し、5期と6期の境に

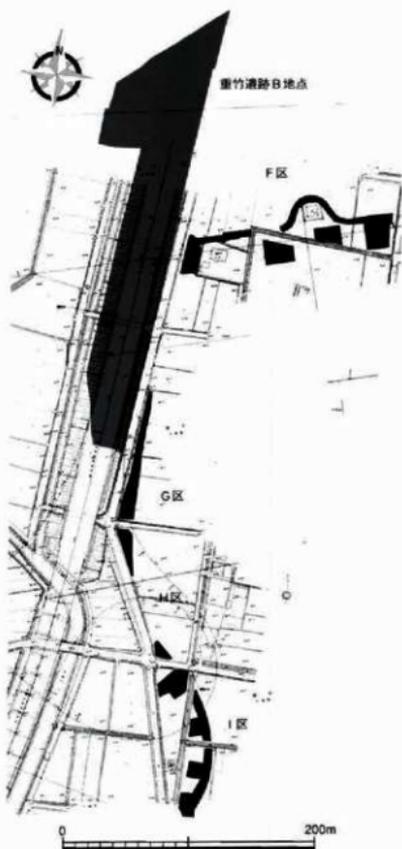


図326 重竹遺跡B地点との位置関係 (S = 1/4000)

よって中世を前期・後期に分けているため、B地点の旧期の中に前期・後期が含まれることとなる。ここでは比較のために、中世を5～6a期、6b～7a期の2段階に分けて遺構の抽出を行った。なお、古代集落跡の範囲については、報告書の吉田英敏氏の分析をそのまま引用している。

図327はB地点と今回の調査で検出した時期の判別できる溝跡と掘立柱建物跡・大型土坑の位置を表示したものである。先述したように、重竹遺跡B地点の古代集落は7世紀後葉から始まる。その時点では、北側の段丘崖に並行するように走るSD3以南には竪穴住居跡は配されないうのである。また同時に、SD37を始めとする南側の南北溝が設置される。8世紀前葉段階では居住域の範囲がSD3を越えて南側に広がり、同時にF区にも集落が形成されるようになる。B地点の古代居住域の南東は、住居跡が希薄になり、F区まで続かない可能性が高い。おそらく溝跡群を挟んで居住域が分かれていたのであ

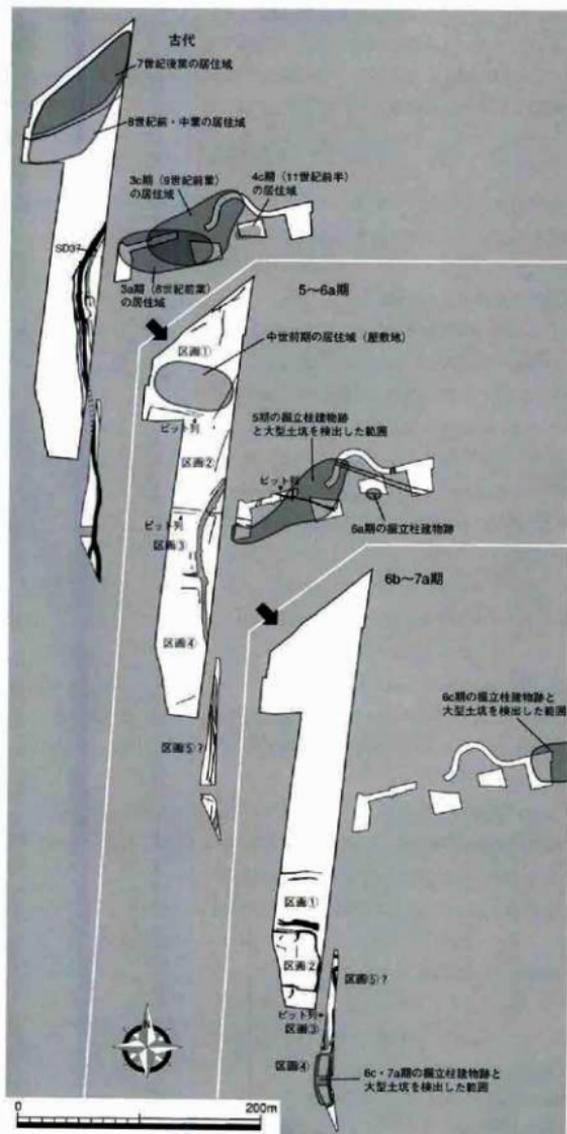


図327 重竹遺跡B地点の遺構との比較 (S = 1/4000)

ろう。8世紀中葉段階になるとB地点においては、竪穴住居跡が分布する範囲は変わらないが、遺構の規模・軸方位などに規則性に乏しくなるとされている。この時期、F区からは竪穴住居跡は検出されていないが、B地点の住居跡の散布状況や後続する竪穴住居跡が存在することを考えると、F区周辺にもこの時期の集落が存在していた可能性はある。その後は9世紀前葉の居住域がF区に形成されるがB地点にはみられなくなり、9世紀中葉～10世紀にかけて遺構自体がほとんどなくなってしまふ。そしてこの地で再び人々の活動が再開するのは11世紀前半（4c期）になる。F区の一部で掘立柱建物跡・土坑がつくれ、B地点にもこの時期の土坑が存在する。しかし、この段階では当地の人々の活動は活発ではなく、遺構・遺物ともに量は少ない。

5～6a期になると、B地点の古代居住域のあった場所に屋敷地（Ⅲ期）が設置される（区画①）。2単位の屋敷地割⁹が考えられ、大型土坑や井戸が付設されている。南側には鈎形に曲がる溝とそれに平行して続くピット列が見られる。南側には土坑・大型土坑・溝跡などが存在するが、遺構密度は低くなる。区画②とした地区の東側と南側にある溝跡については、平行して2条引かれるものや中世前期まで残存していた可能性があるSD37と平行するように引かれるもの、ピット列と平行するものがみられる。時期はⅡ・Ⅲ期に渡っており、すべてが共存していたわけではないが、一時期南北に区画を形成していたと思われる。その南側にも溝跡があり、Ⅱ・Ⅲ期の時期差を勘案しなければ、4つの区画に分けることができる。さらに南側に続くと考え、G区は5番目の区画に含まれることになる。一方F区は、区画①・②の南側にある溝跡の軸方位がF区で検出された溝跡と一致しており、南北では区画①～③の列に含まれている可能性がある。

この時期の溝跡の軸方位は、今回の調査区とB地点を含めても少しずつ異なっている。一つの可能性として、弧を描くように走るSD37を基準とし、これに垂直に南北の区画がつくられていたことが考えられる。また2条一単位の溝跡が多いのは、溝跡の間が道路として機能していたのかもしれない。各区画の利用状況であるが、区画①は屋敷地であり、居住域としていいだろう。区画②～④はいずれもⅡ・Ⅲ期の大型土坑や土坑は配置されているが、掘立柱建物跡は検出されていない。区画⑤に含まれるG・H区の溝以外のこの時期の遺構には、方形の大型土坑H100（5b期）や特殊土坑H15などがあるが、遺構密度は低い。遺構配置図を見る限り多数のピットがあるため、掘立柱建物跡が全くなかったとは思えないが、区画①のような屋敷地的な空間ではなく、小規模な居住地、墓域、畑地、作業場のような空間利用が行われていたのかもしれない。F区では掘立柱建物跡を検出しているが、全体の規模が分かるものが少なく、東西約100mの範囲に散在しているため、屋敷地を形成していたかどうかはわからない。F区はSD37を挟んでB地点とは別の区画に含まれていると考え、小規模な居住域が各区画ごとに散在している様子を示しているのかもしれない。

6b～7a期になると、区画は完全に南側に集約される。F区ではほとんど遺構がみられなくなり、逆にG区ではピークを迎える。6b期段階ではG区において明確な遺構を検出していないため、居住域の集約が始まった時期とするには慎重にならざるを得ないが、B地点では集中する大型土坑の中にこの時期のものがある。この区画を形成する溝跡は大半が大窯期と報告されているが、G区の調査状況を見る限り何度も作り直しが行われているようで、それ以前から存在した可能性を考えたい。区画の方位は前段階を踏襲しており、区画①・②は前段階の区画④をはほぼ南北同じ長さに二つに分けたもの、③・④は前段階の⑤に分けたものと言えるだろう。この周辺から検出した掘立柱建物跡はH区か

ら検出した1棟のみであるが、遺構密度は非常に高いため掘立柱建物跡がなかったとは考えにくい。また、同じ時期に遺構の集中がみられるE区やI区と比較して遺物の量が飛び抜けて多く(第3節参照)、人々の活動が盛んであったと考えるが、どのような性格をもった集落であるかは不明である。なお、78期を最後に遺構は水田以外はなくなり、遺物は水田に関する遺構以外から出土しなくなる。また、このことはB地点でも同様であり、この時点で居住域としての機能は停止したと思われる。

旧地籍図との比較

今回、発掘調査を行った範囲周辺の旧地籍図⁹⁾をもとに、明治期の地割の復元を試みた⁹⁾。図全体は図6(第1分冊)に示したのでそちらを参照されたい。図328はF~I区と重竹遺跡B地点の溝跡とピット列を抽出し、旧地籍図に重ねたものである。調査区の東側にある斜線でトーンをかけた部分は、当時水田として利用されていた部分であり、長良川の旧河道と考える。点のトーン部分は畑とし利用されていた部分であり、米軍の空中写真でも砂地が認識できる(図版1)。おそらく田長良川の砂州で

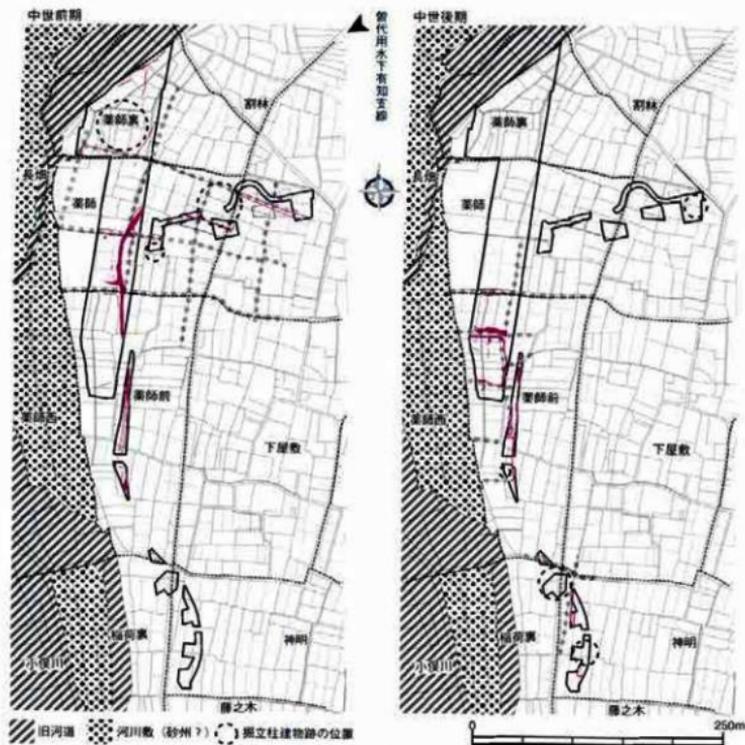


図328 F~I区の調査結果と地籍図との比較 (S=1/5000)

あり、段丘の崖下などに発達していた様子が伺える。この旧長良川の東側に広がる平坦地の大半は、当時曾代用水下有知支線（図中央）によって灌漑された水田域になっていた。中世前期の遺構と比較すると、図327で示した区画①は筆界、②・③は筆界・道路・溝跡に位置と方位が対応している。これらを基準に見ていくと破線で示したような、やや歪んだ方形の区画が浮かび上がる。前述したように、重竹遺跡B地点のSD37や旧長良川など地形的な制約を受けて歪んだ形状に区画されたと思われるが、一辺が70m前後を呈し、一定の規格を持っていたことが伺える。一方で、ほぼ同じ主軸方位を持ちながら旧地籍図上に一致するラインのない溝跡（F59・F123・F501等）も存在する。このような溝は破線で示した区画を二分する位置に配されており、区画の内部をさらに区画する溝跡と考える。今回のF区から検出した中世前期の掘立柱建物跡は、1ヶ所が大区画の約1/4を占める北西の小区画の内部に集まっており、大型土坑も集中している。また、やや離れた位置から検出した掘立柱建物跡も区画の北西隅に位置する。さらなる周辺の調査が必要であるが、中世前期段階では一定の規則で土地の区画がなされ、各区画に掘立柱建物などが配されている様子を窺うことができる。

中世後期の段階になると、先に述べたように、前期の区画を踏襲しながら溝跡による区画が南側に集約される。大きく異なる点は、方形区画の一辺の長さが一定でなくなる点である。調査で確認されている溝跡による区画のほとんどが筆界・畦畔・溝跡に現われているが、F区付近と比べて地割がやや乱れて見えるのは、中世後期段階の区画の再編の様子が旧地籍図にも現われているためであろう。I区でもレキの入れられた溝跡であるI260・I275と同じ方位に筆界がみられる。この部分は北側の区画と比較すると半折型の整った地割にみえる。溝跡は中世後期に属するが、南北の軸が若干東に傾く地割の方位は、中世前期段階から継承されたものかもしれない。

以上のように、今回調査を行ったF～I区周辺では、少なくとも遺物や遺構の増加がみられる5b期の段階から土地の区画が行われ、中世後期段階にはその再編があり、それが旧地籍図に筆界や道路・溝跡として残っていることも判明した。なお、中世前期の地割を今回作成した旧地籍図全体から読みとる作業も行ったが、当時の地割を復元することは叶わなかった。下有知地区の長良川左岸に位置する一帯は、広大な平坦地であるにもかかわらず条里地割が残っていないことが知られているが¹⁶、東側に位置する吉田沖のような画一的な条里型地割が古代から存在していたとしても、中世前期や後期、さらにその後の区画の再編によって地割が複雑になっている可能性も考えられるだろう。

一方、中位段丘上のA～D区中央調査区でも、今回の調査で検出した遺構と旧地籍との整合がみられた。まず、C区西調査区の西端から検出した道路側溝と考えられる遺構から推定した街道の存在であるが、調査区の北側にある国道156号線の脇道からC区西調査区に直線的につながる畦畔や筆界を見ることができる（図329）。現在も一部が残るこの脇道は、小字の桐之木長と西屋敷の境となっており、関市道分までつながる主要な道であったと思われる。この道は近世に郡上街道と呼ばれた街道と推定され、ここから南は現在の国道156号線と重なっていたかその西側に位置していたようである¹⁷。その脇道の南には、筆界の軸が変化する境目や他の地割より細長い区画がつかっている。おそらく街道が設置された当時の道筋が現われていると思われ、西側に街道が移ったのは近世以降と考える。次に今回の調査で検出した遺構との比較を試みる。図329の①では、小規模な区画の中に掘立柱建物跡・井戸跡が配されていた。トーンをかけた区画の北辺に東西の溝跡があり、その南側に掘立柱建物跡が密集している（図329）。それとは対照的に溝跡の北側は遺構が少なく、掘立柱建物跡は小規模なものが

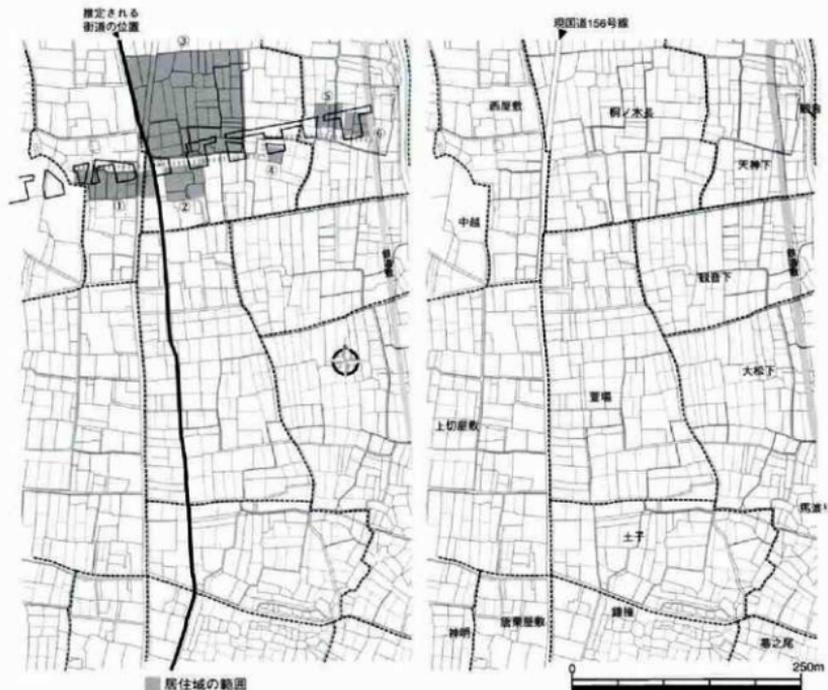


図329 A～D区の調査結果と地籍図との比較 (S = 1/5000)

1棟みられるのみであった。②では、C54・C55という区画溝と考えられる遺構に対応した地割が旧地籍図にあらわれている。一辺約40mのほぼ正方形を呈する。③は土塁を備えた溝跡による区画が現われた部分である。今回検出したこの溝跡の東西の長さは70m程度であるが、旧地籍図から読みとれる区画を見る限り、一辺が約100～110mの規模をもつ区画である可能性が高い。④は7b期～8期の掘立柱建物跡や溝跡を検出した場所であるが、区画自体が旧地籍図に明瞭に現われているとは言い難い。ただし、南辺の界線の軸方位が建物跡や溝跡と一致しており、区画の範囲を示している可能性がある。同様に⑤・⑥も、軸方位や区画が調査で検出した建物跡や溝跡に部分的に一致する。以上のように、大型の区画③の周囲にやや小規模な区画が散在している状況が浮かび上がる。第1部第4章の「堀跡・土塁」の項において、土塁が造成される以前に基準となる東西の道路が存在した可能性を示したが、区画①の北側や②と③の間の遺構の空白部分が6c期以降の東西方向の道路跡と考えると、この道に沿って、建物が存在する区画が配置されている可能性を考慮することができる(図329破線部分)。なお、区画④のある場所は、7a期以前では南北方向の道路が通っているため、ここに交差点が存在したことになる。しかし、7b期以降は掘立柱建物跡と溝跡が存在し、この区画を迂回して道路が付け替えられることがあったかもしれない。この道路の存在は、現段階では確証がなく推測の域を

出ることはない。周辺の調査によって今後明らかになることが期待される。

以上のように、A～D区中央調査区が立地する付近の旧地籍は、7b期以降の地割を残しており、それ以前については、今回の調査で検出した遺構と一致する地割を見出すことはできなかった。図化をした中位段丘部分全体をみても、旧地籍図上の国道156号線を基準にした区画や、今回推定した郡上街道を基準にした区画、地形的制約を受けた区画など様々ではない。これは中世末期以降、特に街道付近で土地区画の再編が道路の移設に伴って行われ、それ以外の場所が以前の区画のまま残ったことにことにより、複雑な地割が生まれたものと推定される。

第3節 出土遺物の分析

本節では、各地区から出土した遺物（主に土器）の計量分析を中心に扱う。土器は出土した全点に整理番号を付し、分類・計測を行った。土器分類の概要は、第1部第3章第2節に掲載している。分類・時期判断は既存の研究に基づいて行っているが、おおまかなものにならざるを得なかった⁸⁾。ここでは、遺跡の性格を補足する材料として計量を行いたいと考える。

出土した土器の概要と散布状況

以下に出土した各遺物の器種構成や出土量、散布状況について述べる。

須恵器 今回出土した須恵器は、7世紀後葉～9世紀前葉のものが中心であり、その大半は産地が美濃須恵窯産の可能性が高い。中には、7世紀前半(1578)や11世紀以降の可能性もあるもの(1470)もみられる。器種構成は、杯身、杯蓋、碗、皿、高杯、ハソウ、瓶、壺、鉢、甕などである。破片数が最も多いのは甕(1442点・3.5個体)であるが、口縁部個体数では杯身(980点・36.6個体)・杯蓋(457・18.1個体)の方が多い。杯身はA類が最も少なく、調査区全体でも11点・1.6個体しか出土していない。B類・C類はほぼ同数の破片数(172点、189点)が出土しているが、口縁部個体数はB類の方が多い(8.8個体、3.4個体)。杯蓋は杯身のほぼ半分程度の出土量である。A類は1点のみであり、B類も非常に少ない(9点、1.0個体)。碗は金属器写の1408・1495など、極少量みられる。甕はA類・B類ともにみられる。細片のため判別が困難であるが、感覚的には頸部が外反しながら短く立ち上がるB類の口縁の方が多く見受けられる⁹⁾。壺は口縁部が直立する小型の壺(1566他)や長頸壺・短頸壺がみられる。瓶には、平瓶(1427)・横瓶(1267他)があるが、極僅かである。鉢は頸部から口縁部にかけてくの字に近い形状をとるA類と、鉄鉢と呼ばれるB類の他、1541のようなタイプがみられるが個体数は少ない(計37点・1.4個体)。散布状況(図331)は、遺構を検出したF区とG区・H区に集中している。他の地区にも分布はみられるが、散在的で個体数も少ない。

白瓷 今回の調査で出土した白瓷は、11世紀前葉にほぼ限定される。出土点数は少なく、遺構を検出したF区中央東調査区以外は、器種も碗・瓶・壺の細片が少量みられる程度である。なお、土坑F1143などでは、白瓷と同じ形態をもつロクロ土器とともに段皿(1462)・耳皿(1463)が出土している。散布状況(図331)は、ほぼ須恵器と重なっている。9世紀中葉～10世紀の遺構・遺物ともに確認できなかったが、一世紀以上の時間を隔て再びF区・G区の周辺から活動が始まったことになるのではないかと考えられる。

土師器(古代) 古代前・後期に含まれる土師器には、甕・焼塩土器・暗文土器・ロクロ土器があ

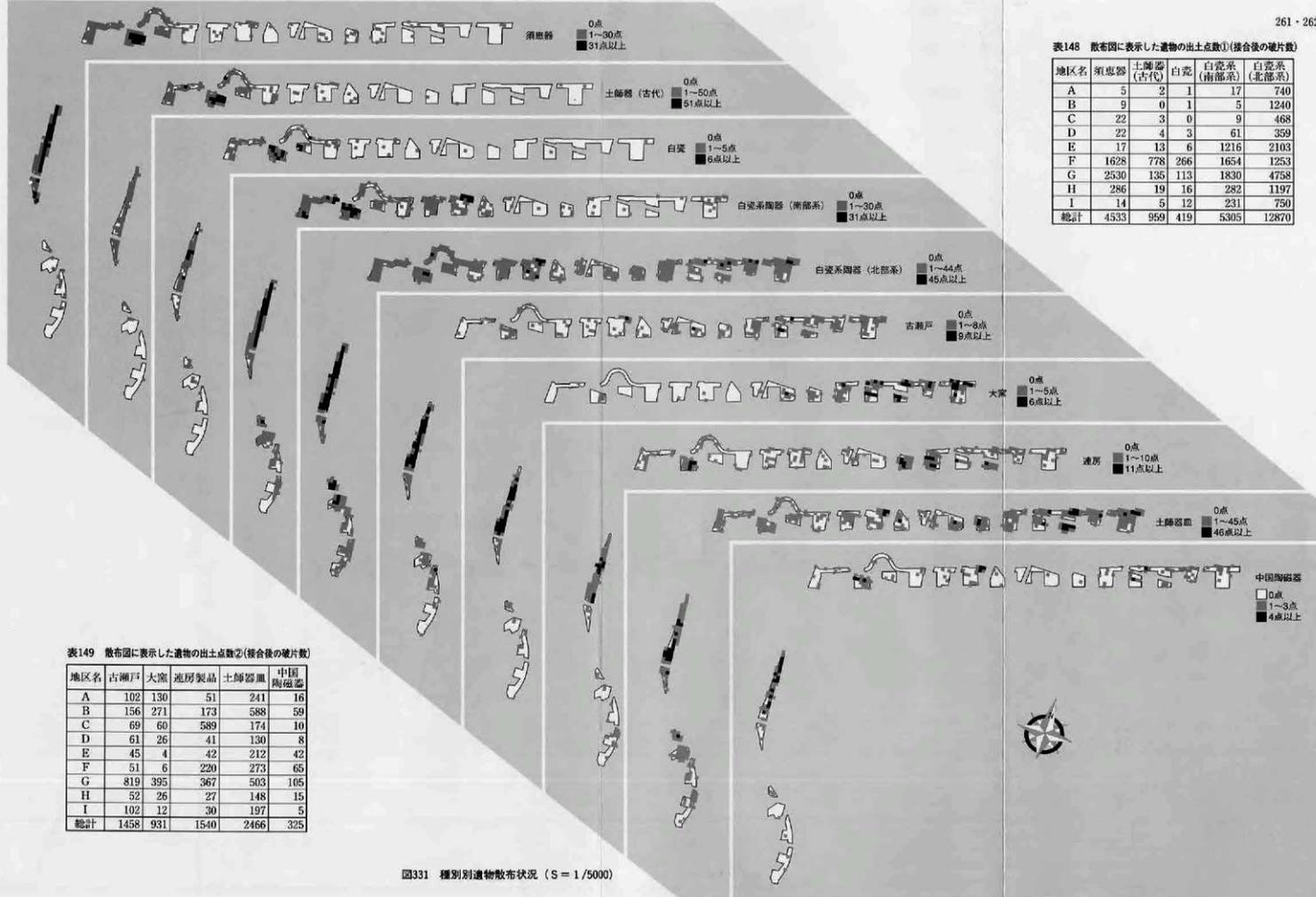


表148 散布図に表示した遺物の出土点数(接合後の破片数)

地区名	須恵器	土師器 (古代)	白瓷	白瓷系 (南部系)	白瓷系 (北部系)
A	5	2	1	17	740
B	9	0	1	5	1240
C	22	3	0	9	468
D	22	4	3	61	359
E	17	13	6	1216	2103
F	1628	778	266	1654	1253
G	2530	135	113	1830	4758
H	286	19	16	282	1197
I	14	5	12	231	750
総計	4533	959	419	5305	12870

表149 散布図に表示した遺物の出土点数(接合後の破片数)

地区名	古瀬戸	大塚	津房製品	土師器皿	中国陶磁器
A	102	130	51	241	16
B	156	271	173	588	59
C	69	60	589	174	10
D	61	26	41	130	8
E	45	4	42	212	42
F	51	6	220	273	65
G	819	395	367	503	105
H	52	26	27	148	15
I	102	12	30	197	5
総計	1458	931	1540	2466	325

図331 種別別遺物散布状況 (S = 1/5000)

点も注目されるべきであろう。G区溝跡の出土遺物の供給源は、上流にあたる重竹遺跡B地点の集落と考えられるが、どのような理由で須恵器が多く投棄されたかについては今後検討する必要があるだろう。須恵器の器種組成は、杯身・杯蓋が大半を占める状況はどの遺構も変わらない。F529は少数の須恵器が床面にはほぼ完形で置かれていた特殊な事例であり、一般的な傾向とは言い難い。溝跡で特徴的なのは、甕や鉢といった貯蔵具がやや多い点である。重竹遺跡B地点の竪穴住居跡から

は甕や鉢が少なからず出土しており、器種を選択して溝跡に投棄したとは考えにくい。大型の貯蔵具が破損した場合、竪穴住居外に持ち出される可能性は高いと考える。土師器では、長胴甕と焼塩土器に注目してみる(表150)。長胴甕A類は重竹遺跡B地点の報告書の中で、7世紀後葉代には80%を占めるが、8世紀前葉では半々、中葉では13%とされている¹⁰⁾。F4・F357の遺構の年代を本報告では7世紀後葉～8世紀前葉としたが、7世紀後葉というより8世紀の遺構と考えたほうがよいのかもしれない。またF477・F529ではさらに出土量が減少しており、時期が降るに連れてA類が姿を消していった様相をみることができる。焼塩土器もF477・F529では出土していない。この傾向は他の3C期の竪穴住居跡でも同様であり、全体の傾向といえる。重竹遺跡B地点の報告書では、8世紀中葉の段階においてむしろ増加傾向を示すことが記載されており¹¹⁾、9世紀になった段階で急速にその数が減少したことを意味している。9世紀後半以降は集落の調査例が少なく焼塩土器が確認されていない¹²⁾、重竹遺跡の古代集落が9世紀代に入り衰退していった状況を表しているのかもしれない。

白瓷系陶器(南部系) 今回の調査において図332のような分類を行った結果、第3～第6型式までのものがみられた。器種は碗・小碗・小皿があり、E区包含層から1点のみ小壺の破片と思われるものが出土している。散布状況(図331)はF区・G区を中心に低位段丘ほぼ全体に広がり、中位段丘上にもみられる。特にE区の鍛冶園連遺構やF区の土坑、G区の溝跡などから多く出土している。

白瓷系陶器(北部系) 今回の調査において図332のような分類を行った結果、全時期のものがみられた。器種は碗・小碗・小皿など一般的なものの他、片口鉢・有耳壺・洗・小壺・入子がある。小壺(497)は内面にベンガラが付着していたが(第3部第8章参照)、どのような用途に使用されたかは不明である。入子(653)は集落からの検出例が少なく¹³⁾、格の高い遺跡ほど出現率が高いとされている¹⁴⁾。この他、美濃須衛産と考え

表150 古代前期遺構出土の土師器
(上段：口縁部個体数，下段：破片数)

遺構名	暗文土器	焼塩土器	甕			焼塩土器	合計
			—	長胴甕A類	長胴甕B類		
F4	0.00	0.99	0.00	0.08	2.57	3.64	
	1	23	0	23	542	589	
F374	0.00	0.38	0.00	0.17	0.54	1.09	
	0	8	0	1	25	34	
F477	0.00	0.00	0.00	0.00	0.88	0.88	
	0	0	0	3	425	428	
F529	0.00	0.00	0.00	0.00	0.14	0.14	
	0	0	0	0	28	28	
G201・G617	0.00	0.09	0.00	0.00	0.00	0.09	
	0	6	2	13	14	35	
G41・G205	0.00	0.10	0.00	0.00	0.00	0.10	
	0	5	0	1	2	8	

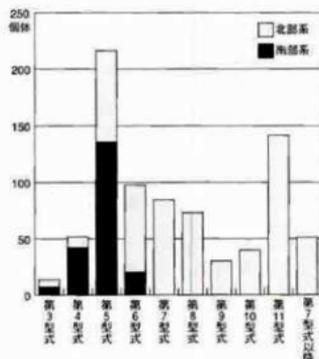


図332 白瓷系陶器碗・皿類の産地別出土量
(底部個体数から算出)

られる碗・有耳壺・水注を確認している。美濃須衛産の碗・小皿といった日用雑器は、一見すると南部系のもと判別が難しく、これまで消費地での分類はほとんど行われてこなかった¹⁹⁾。今回の調査では確実なものは2点出土しているが、上記の理由から実数はさらに増えると考えられる。また、産地不明中世陶器と分類した中でも美濃須衛産のものが含まれている可能性は高い。土器埋納遺構から出土した広口壺(473)や甕(474)は美濃須衛産と考えてもよいだろう。この他にも同様な壺・甕などの破片が出土している。散布状況(図331)は、調査区のはほぼ全域に渡る。図331に掲載した遺物の散布状況は第3～11型式に及ぶ長い期間であり、時期別にみれば場所による偏りがある(後述)。なお、第4型式・第5型式は南部系の出土量が多いが、第6型式から量比が逆転し、第7型式段階では北部系のみとなる¹⁹⁾。また全体の傾向として、第5型式と第11型式段階で出土量の増加が顕著にみられる(図332)。

古瀬戸 今回出土した古瀬戸製品は、ほとんどが古瀬戸後期のものと考えられるが、前期・中期も少数ではあるが出土している。前期では四耳壺(95)、中期では折縁深皿(266他)・折縁小・中皿(1157他)・卸皿(1060)・底卸目皿(131)・有耳壺(1135)・瓶子(556)・花瓶(1481)などがある。また、古瀬戸片口鉢とした猿投・瀬戸窯産の無軸の鉢もみられる。G区の不詳遺構G13やI区の溝跡I260などからまとめて出土しているが、いずれも古瀬戸後期以降の遺構である。後期になると器種が階段に増加し、表3に示した器種がほぼ出揃う。口縁部個体数では緑釉小皿が最も多く(7.3個体)、次いで播鉢(6.7個体)、天目茶碗(4.6個体)、片口鉢(2.9個体)、平碗(1.5個体)、卸皿(1.5個体)、双耳小壺と続く。破片数では、胴部破片では判別の難しい播鉢を除くと、大皿・深皿などの盤類や瓶・壺類(有耳壺・瓶子・花瓶等)がG区を中心に多数出土している。各遺物の時期判断が完全ではないので時期別の量比は提示できないが、口縁部分類を行った播鉢についていえば、後IV古期から出現し、後IV新期に増加する(図339)。白堊系陶器が第11型式に出土量が増すことを考えると、ほぼ同時期の播鉢の増加は遺跡の最盛期と考えて差し支えないであろう。この他、特徴的なものとしては狛犬の脚部(948)がある。散布状況(図331)は、F区では少なく、中位段丘上では出土量が増加する。一方でG区では依然として出土量が多い。出土した遺構は中位段丘上では溝跡が中心であるが、G区では溝跡に加えて、包含層・不詳遺構から多量に出土している。

大窯 大窯製品は、大窯1期から4期までのものがほぼ切れ目なく出土している。器種は口縁部個体数では灯明皿が最も多い(22.1個体・251点)。次いで天目茶碗(8.9個体)、播鉢(7.0個体)、端反皿(7.0個体)、丸皿(5.1個体)と続く。古瀬戸と同様に各遺物の時期判断が完全ではないので時期別の量比は提示できないが、播鉢では、飛躍的に増加した後IV新期から急激にその数が減少する。大窯1期から2期にかけて減少する傾向がみられ、大窯3期に再び増加する。大窯4期～連房第1段階でピークを迎えるが、その後はそれほど目立たない器種となる(図339)。散布状況(図331)は、古瀬戸でみられた傾向がさらに強まる。下位段丘ではG区を除いてほとんど出土しなくなり、中位段丘上に集中する。なおG区では、大窯1期まではVI・VII層上面の遺構から出土するが、それ以降は、ほとんどが上層の水田層や不詳遺構(G13・G37)から検出したものである。

連房 連房製品は、各時期のものが出土しているが、連房第1段階と第3段階のものが多く、第2段階のものは少ない。第1段階では、皿類の量が多く、反皿(6.4個体)、志野丸皿(6.1個体)、鉄絵皿(3.2個体)、折縁鉄絵皿(2.2個体)、折縁皿(0.4個体)などがある。碗類では丸碗(1.8個体)・天

日茶碗(0.6個体)がみられる。その他の向付(479)・大平鉢・搦鉢(382等)などの鉢類や水盤(620)・大皿(235)などの盤類、德利(229)などがある。第2段階は出土した個体が少なく、器種も少ない。皿類では前段階にもみられた菊皿(0.4個体)に加え、摺絵皿(0.67個体)が出土している。碗類では、天日茶碗(0.09個体)・丸碗(0.05個体)に加えて、腰結茶碗(0.21個体)・尾呂茶碗(0.81個体)がある。その他、片口鉢(233等)や搦鉢(1040)、水滴(419)、半割甕(905)などがあるが数は少ない。第3段階ではC区を中心に出土量が増加する。この段階では第9小期から磁器生産が開始され、今回の調査でも連房製品の磁器が少なからず出土している(2.6個体・104点)。器種は碗・皿類や小瓶がみられる。陶器では、灯明皿が群を抜いて多い(22個体)。これらはC区西調査区の土坑C93や大型土坑C120からまとまって出土したものがある。C93・C120は灯明皿の他に通常の供膳具や調理具に加えて、小瓶や仏道具、瓶掛型火鉢、香炉、合子など様々な器種が出土している。当時期の瀬戸美濃産陶磁器の一括遺物として貴重な資料といえよう。散布状況は、全体をみればやや低位段丘上が希薄であり、中位段丘上とG区に一定の集中がみられる。中位段丘ではA・B区に連房第1段階、C区には連房2・3段階の遺構があり、その遺構のある場所に集中していると言える。G区は水田層と不明遺構から出土したものである。この段階では連房製品が包含層中から出土する 경우가多く、水田化によって調査区全域で生業活動が行われることにより、大窯期よりも遺物の散布範囲が広がった可能性を示していると考ええる。なお、F区中央西調査区の連房製品の集中は、区画整理前まで残存していた曾代用木下有知支線跡(F18)から出土したものである。

土師器皿 土師器皿は中世～近世にかけてのものがあると考えられ、北部系白瓷系陶器に次いで散布範囲が広い。今回の調査では、器高・口径が復元可能な個体のみ調整痕による分類を行った(図333)。その結果を踏まえ、外面の調整を基準に再整理したものが表151である。I類は外面に一段のナデ調整を施すもので、13点抽出した。II類は外面に二段のナデを施すもので、9点抽出した。III類は口縁部外面のみにナデを施すもので、17点抽出した。IV類は外面にナデを施さないもので、114点抽出した。V類はナデ調整痕がみられないもので、2点のみである。出土遺構や既存の研究から判断してI・II類は中世前期(12世紀末～13世紀末)、III・IV類は中世後期でも15世紀後半以降に属する可能性が高い。図334は分類ごとの法量散布¹⁷⁾を示したものである。I・II類では口径が7.5～9cm(①)、11.5～13.5cm(②)、14cm～16cm(③)にそれぞれまとまりがみられる。③の法量をもつものは、第5型式の白瓷系陶器が出土した土器埋納遺構F24のものに含まれている(図122:F24)。また、①・②の法量をもつものは第6～7型式の白瓷系陶器に伴う遺構から出土している。京都系の12～13世紀の土師器皿は年代が降るに連れて口径が小さくなるとされており¹⁸⁾、時期差を表す可能性が高い。III類とIV類(IV c e・IV e類を除く)は、口縁部成形を目的とした内面の横ナデにより、体部と底部が明瞭に区別される形態をもつ。ただし、④の範囲に含まれる1043(図261)だけは全く形状が異なり、口縁部内外面に横ナデがみられるものの底部に丸味がある。これは連房第3段階の陶磁器に伴って出土したもので、明らかに時代が異なる。それ以外は、口径9.5～11.5cm(⑤・⑧)、11.5～13.5cm(⑥・⑨)が共通し、III類のみ14.5～16cmの大型品がみられる(⑦)。またIV c e・IV e類を除くIV類には、⑧の法量に属する口径6.5～9cmの一群が存在する。この一群は細分した各分類の土師器皿が含まれており、III類とIV c e・IV e類を除いたIV類の調整をもつ一群の法量として生産された可能性がある。したがってこの分類には4つの法量が存在することになる¹⁹⁾。IV c e・IV e類とした一群は底部と口縁部を区別しな

表151 土師器皿の調整による分類の組み合わせと点数

分類	外面調整	内面調整	備 考
I	A1	D1-D2	内面ナデをナデ抜くもの(a)、ナデ抜かないもの(b)
		E	底面内面にナデを施すもの(c)
	A1+A3	D1+D3	口縁端部を内外面から組み上げるようにナデしたもの(d)
II	A2	D1	内面ナデをナデ抜くもの(a)
		D1+D3	口縁端部を内外面から組み上げるようにナデしたもの(b)
III	A3	D1-D2	内面ナデをナデ抜くもの(a)、ナデ抜かないもの(b)
		E	底面内面に一方のナデを施すもの(c)
IV	B-C	D1-D2-D3	内面ナデをナデ抜くもの(a)、ナデ抜かないもの(b)、口縁端部内面のみナデするもの(c)
		E	底面内面に一方のナデを施すもの(d)
		F	内面に底面と口縁部を区別しないナデを施すもの(e)
V	C		内外面ともに調整痕が残らないもの

分類	I	I a	I b	I b c	I b c d	I d	II a	II b
口縁部個体数	0.42	1.35	2.42	0.25	0.51	0.27	1.68	0.14
破片数	2	3	5	1	1	1	8	1
分類	III a	III a c	III b	III b c	III c	III d	IV a	IV a c
口縁部個体数	2.13	0.97	1.44	1.74	2.24	1.08	0.19	3.82
破片数	4	1	2	3	3	3	1	6
分類	IV a d	IV a c b	IV a c b d	IV b	IV c e	IV e	V	不明
口縁部個体数	5.39	2.70	2.76	0.63	7.51	46.90	1.22	20.68
破片数	7	8	6	3	11	72	2	37
								192

* 点数は分類したもの(母体遺物)のみ

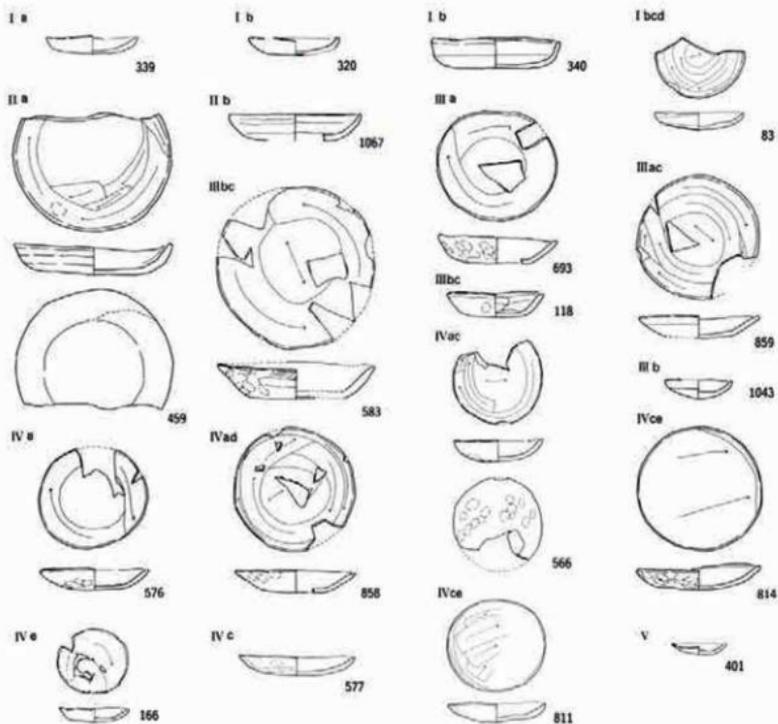


図333 重竹遺跡出土土師器皿の分類

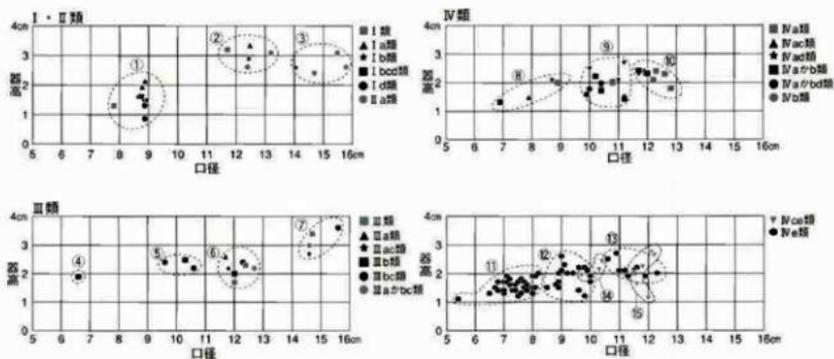


図334 土師器皿の分類別法量散布

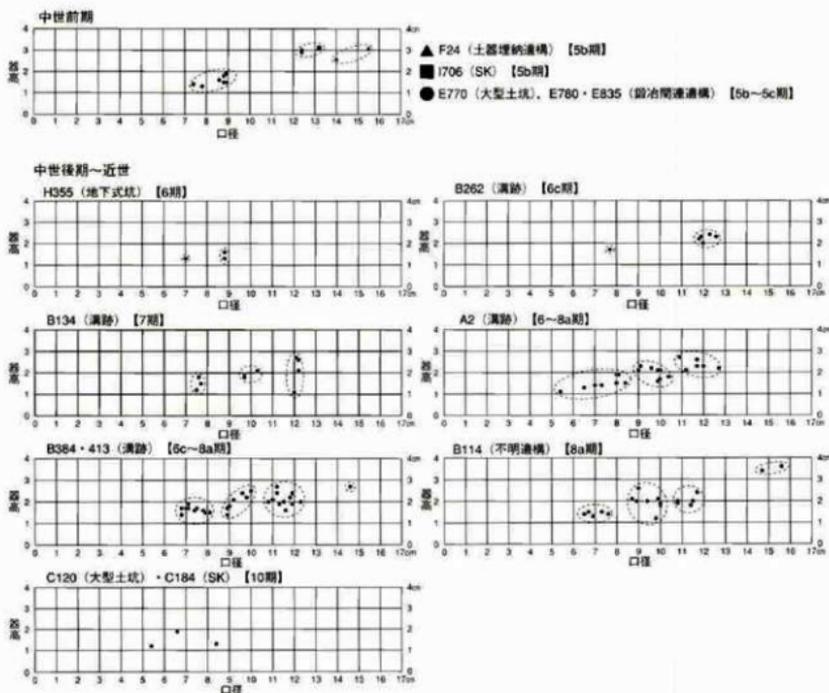


図335 出土遺構別の土師器皿の法量

いナデを内面に施す一群である。IVc e類は、その多くが溝跡B134の底付近から出土した一括遺物であり、輪宝の線刻がある810が同時に出土している。法量の散布はほぼ2ヶ所(⑩・⑪)に集中し、それぞれ上記の⑤・⑧、⑥・⑨に対応する。しかし、IVe群は口径5.5~8.5cm(⑩)、8.5~10.5cm(⑪)、10.5~12.5cm(⑬)の三法量に分けることができ、III類やIVe群を除くIV類よりそれぞれ1cmほど小さいことがわかる。

これが使用方法あるいは製作技法の差であるかは不明であるが、ほぼ同じ法量散布の分類が可能であることも注意しておくべきであろう²⁰⁾。なお、図335には遺構出土遺物ごとの法量散布を示した。B134やB262のように一括性が高いものは少なく、時期幅のある遺構から出土したものが多いため、時期的な評価は慎重に行うべきであるが²¹⁾、上記の法量散布がより明瞭な形で現われていると考える。

中国陶磁器 今回出土した中国陶磁器は青白磁・白磁・青磁・染付であり、時期的にも中世前期~末期を通してみられる。表159は器種と分類ごとに出土数量を記載したものである。中世前期では、青白磁の碗・皿に加えて合子が3点出土している。青磁では龍泉窯系の鎚蓮弁文・蓮弁文が施された碗が多く、大宰府分類I類の青磁碗は底部のみで口縁部は出土していない。白磁は大宰府分類II類・IV類の碗が多い。特殊品として白磁の合子蓋や四耳壺あるいは水注の胴部破片がある。今回出土した中世前期の中国陶磁器は二次加工が加えられているものが多く、破損断面周縁に打ち欠いた痕跡がみられる。後期から末期では、青磁・白磁に加え染付がみられる。青磁は簡略化された蓮弁文をもつ碗類が若干みられるが、細線化した蓮弁文をもつ個体(上田分類BIV類)はなく、口縁部外面に雷文帯をもつ個体(同C類)は1点のみである。無文のD類については、細片では区別が付かないため実数は増える可能性がある。その他、桜花皿(256等)、輪花皿、筒型香炉(1371)などがある。白磁は森田分類のD群に属するものが多く、特に挟りのある皿(254等)が目立つ。

染付は碗・皿・杯がみられるが、分類による多寡は特にみられない。散布状況(図331)は、B区の溝跡、E区の鍛冶関連遺構、F区の土坑に集中がみられる。最も多くの中国陶磁器が出土したG区は、大半は包含層中からの出土である。細片を時期・分類不明としたものが多いため、量的な傾向については明言を避けるが、中位段

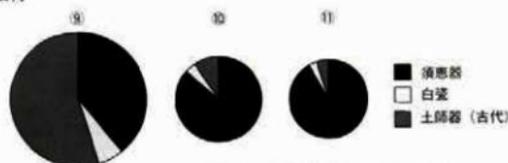


遺物集計を行った範囲

地点番号	地区名	属性	グリッド	
			東西	南北
①	A	居住城(中世)	AO~BE	0~8
②	B	空地・区画溝(中世)	BG~BJ	2~7
③	B	居住城(中近世)	BM~BR	9~11
④	B~C	居住城(中世)	BT~CO	5~11
⑤	C	近世の遺構群など	CT~DC	11~16
⑥	D	居住城(中世)	DF~DS	14~18
⑦	E	鍛冶関連遺構	EI~EL	16~17
⑧	D~F	居住城(中世)	EE~FI	18~23
⑨	F	居住城(古代・中世)	FN~GS	17~32
⑩	G	溝跡(古代~中世) 水田(中世~近世)	HA~HD	53~63
⑪	G~H	居住城(中世)	HB~HE	64~79
⑫	I	居住城(中世)	GJ~GR	93~102

図336 遺物集計を行った範囲

古代



各グラフの大きさの違いは総数の比を表す。
構成比は接合後の破片数から算出。

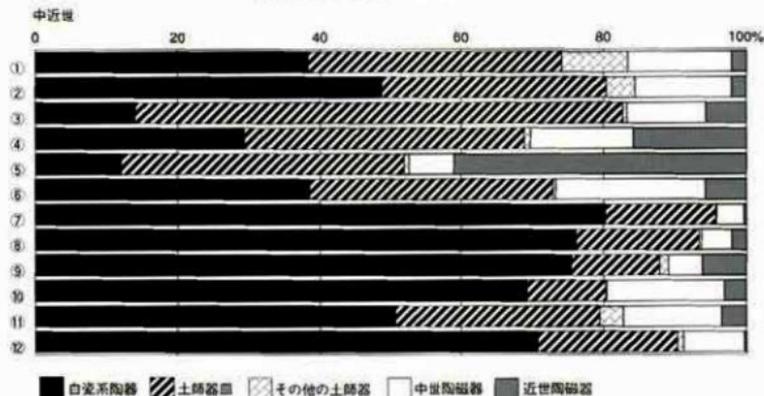


図337 地点別種別別土器組成比

表152 地点別土器出土量 (接合後の破片数)

時代	種別	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	
縄文	縄文土器	0	0	0	2	0	0	0	2	74	12	5	7	
古代	須恵器	5	0	0	13	6	9	10	10	1557	1383	1241	11	
	白瓷	1	0	0	1	0	2	3	10	244	68	47	14	
	土師器 (古代)	3	0	0	0	1	0	7	29	2195	150	67	6	
	白瓷系陶器	675	372	116	680	84	180	2451	1052	2648	3438	3366	1473	
中世	古瀬戸	83	35	15	98	19	49	30	20	37	391	440	66	
	大濠	122	34	30	159	11	26	0	3	6	167	237	15	
	常滑	35	17	11	43	11	22	59	16	29	171	133	83	
	信楽	0	0	19	0	0	0	0	0	0	11	11	2	
	産地不明中世陶器	2	1	0	1	1	0	2	2	35	18	44	3	
	瓦質土器	1	1	10	0	1	0	0	1	1	1	3	0	
	中国陶磁器	14	15	6	32	1	1	28	17	60	61	50	9	
	近世	瀬戸 (陶器)	32	14	46	209	223	27	7	27	177	141	209	6
	瀬戸 (磁器)	2	0	0	3	58	0	0	0	16	7	10	0	
	常滑 (近世)	0	0	0	143	1	0	3	1	16	2	1	0	
唐津	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0		
肥前	2	2	1	2	2	0	0	0	4	2	5	0		
産地不明近世陶器	0	0	0	9	1	0	0	0	3	1	4	0		
中近世	瀬戸美濃製品	62	9	36	84	11	22	0	1	17	168	304	31	
	土師器皿	632	242	567	915	277	161	470	238	433	547	1916	405	
	土師器 (中近世)	163	31	5	21	5	2	4	5	43	4	219	18	
近現代	近現代陶磁器	5	2	1	27	64	3	3	20	150	15	20	0	
その他	土製品	5	3	2	38	55	2	5	16	45	45	29	14	
	不明土師器	3	0	2	4	1	5	28	58	576	122	168	33	
	不明陶磁器	3	4	3	13	9	1	3	6	30	9	9	1	
総計		1850	782	870	2498	842	512	3113	1534	8396	6936	8538	2197	

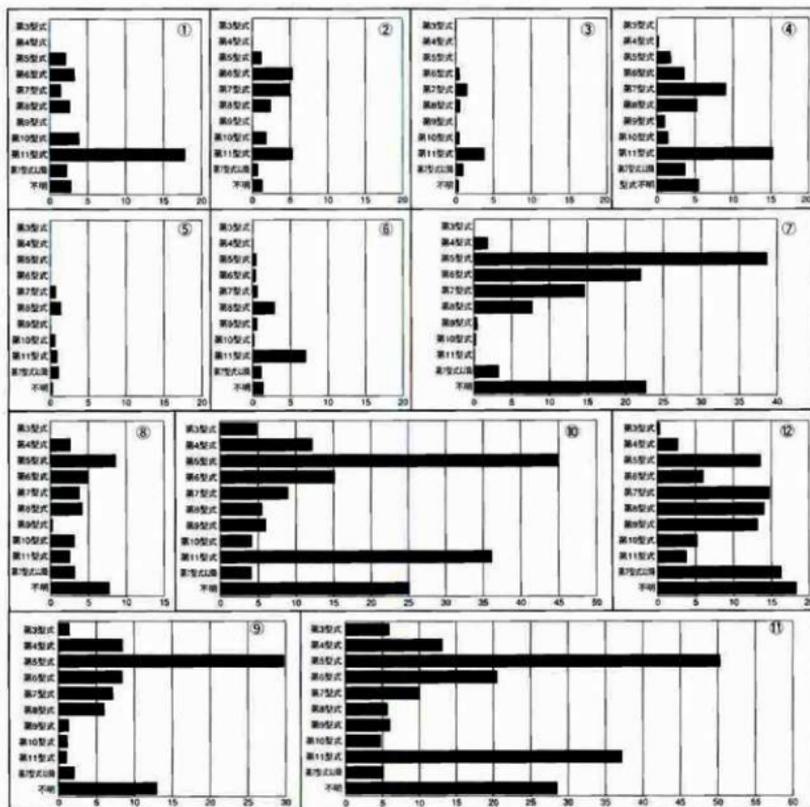


図338 白登系陶器の地点別出土量（底層残存率から算出）

丘上は中世後期～末期、低位段丘上は前期の出土が多い傾向にあり、G区は両者が存在する。

地点別の遺物出土量

ここでは、今回の調査で確認した特徴的な遺構群のまとまりごとに12の範囲を設定し(図336)、その地点別に遺物量の集計を行った。それぞれの地点の特徴については、第1分冊や本章の第1・2節を参照されたい。なお、以下の説明で「中位段丘上」とした場合は①～⑥を、「低位段丘上」の場合は⑦～⑫を指す。ここで土器の集計に用いた数量は、接合後の破片数、口縁部残存率・底部残存率から集計した²⁰個体数である。

出土土器全体 図337・表152は種別ごとの集計結果である。古代の遺物は、⑨～⑫地点で多く確認したが、須臾器・土師器の量比は明瞭に異なる。前述のように、G区の溝跡からの土師器出土量が少ない点が見われていてと考える。中近世では、土師器皿の量比に注目したい。最も土師器皿の量比が高いのは③である。土器全体の70%近くに及ぶ。その他、中位段丘上の①～⑥地点でも軒並み30～40%を占め、一器種の割合としては非常に高いと言える。①～⑥の土師器皿は中世後期以降のものである可能性が高く(前述)、他の土器から同時期のもののみを抽出した場合、さらに割合が増す可能性が高い。低位段丘上の⑦～⑫は土師器皿の量比が低くなっている。これは白瓷系陶器の量比が非常に大きいためであり、点数が少ないわけではない。⑧・⑩・⑪は、中位段丘と同じ中世後期(6a～6c期)の居住地が存在しており、同時期の土器のみを抽出した場合、①～⑥と同じ結果を得ることができる可能性がある。⑦・⑨は中世後期以降の遺構がほとんどないため、中世前期の組成といえるだろう。

白瓷系陶器 図19の分類ごとの底部個体数を図338に掲載した。中位段丘上の①～⑥では、10期の遺構が集中する⑤を除いて第11型

表153 調査区全体の片口鉢の出土量

型式分類	11縁部 個体数	破片数
第3型式併行	0.15	1
第4型式併行	0.14	1
第5型式併行	0.18	3
第6型式併行	0.52	6
第6～7型式併行	0.88	18
第7型式併行	0.66	12
第8型式併行	0.27	6
第9型式併行	0.34	6
第10型式併行	0.65	18
不明	0.18	122

表154 地点別種別別片口鉢出土量(上段:口縁部個体数、下段:破片数)

型式分類	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
第3型式併行	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.15 1	0.00 0	0.00 0	0.00 0
第4型式併行	0.00 0	0.14 1	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0
第5型式併行	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.08 1	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0
第6型式併行	0.00 0	0.28 3	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.05 1	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0
第6～7型式併行	0.00 0	0.18 4	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.14 3	0.00 0	0.00 0	0.04 1	0.04 1	0.04 2	0.15 1
第7型式併行	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.15 1	0.00 0	0.18 3	0.04 1	0.03 1	0.08 2	0.06 1	0.13 3
第8型式併行	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.12 2	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.03 1	0.13 2
第9型式併行	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.06 0	0.00 0	0.00 0	0.20 3	0.03 1	0.03 1
第10型式併行	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.05 1	0.00 0	0.00 0	0.00 0	0.41 9	0.17 6	0.02 1
不明 (割部・底部破片)	0.00 3	0.00 6	0.00 0	0.00 4	0.00 1	0.00 0	0.00 16	0.00 3	0.00 9	0.13 32	0.00 24	0.00 9
合計	0.00 3	0.39 14	0.00 0	0.00 4	0.15 2	0.19 4	0.43 23	0.04 4	0.23 12	0.86 48	0.33 35	0.43 17

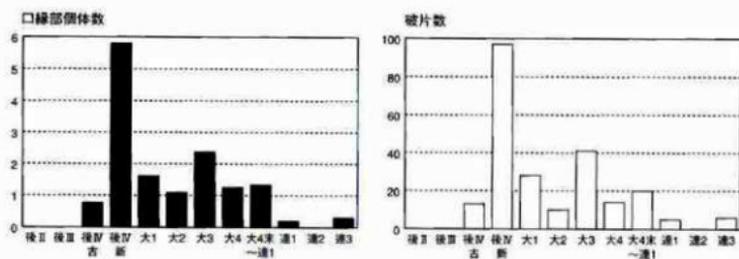


図339 調査区全体から出土した播鉢の時期別出土量

表155 調査区全体から出土した播鉢の口縁部分別出土量

分類	3類	4類	5類	6A類	6A'類	6B類	7A類	7B類	8A類	8B類	8C類	9A類	9A'類	9B類	10A類
口縁部個体数	0.76	1.51	4.29	1.23	0.08	0.23	0.08	0.48	0.23	0.34	0.04	0.32	1.07	0.30	0.25
破片数	13	38	68	21	1	5	1	2	3	4	1	6	19	4	6
分類	10B類	11A類	12A類	13A類	13B類	14A類	14B類	14C類	15類	17類	24類	24B'類	25類	27類	総計
口縁部個体数	0.36	0.08	0.23	0.40	0.08	0.33	0.21	1.33	0.17	0.03	0.10	0.05	0.09	0.06	14.84
破片数	6	2	3	4	1	3	3	20	4	1	3	1	1	1	265

表156 地点別播鉢出土量

地点番号	口縁部個体数	破片数
①	1.49	75
②	0.53	17
③	1.07	42
④	2.25	97
⑤	0.01	13
⑥	0.31	26
⑧	0.05	3
⑨	0.13	18
⑨	2.65	201
⑪	3.50	310
⑫	0.36	34
総計	12.34	836



図340 地点別の播鉢の時期別出土量

ついで口縁部形状により時期分類を行った。ともに底部内面が著しく摩耗しているものが多く、調理具として使われたと考える。片口鉢については既存の研究をもとに分類を行い²³⁾、擂鉢については図20の分類にしたがって集計した。表154は片口鉢の地点別集計である。時期は白瓷系陶器との併行期を示した。③を除いてすべての地点で出土しているが、①・④からは口縁部破片が出土していない。最も古いものは⑨から出土した924、次いで②の833、⑦の318と続くがそれぞれ1点ずつしかない。次段階の第6～7型式併行期の口縁部端部を肥厚するもの(834等)や沈線が入るものが、主に低位段丘を中心に増加する。②にはこの時期の溝があり、ほとんどがそこから出土したものである。それ以降の口縁部外面に緑帯をもつタイプは、ほとんどが⑩～⑫に集中している。中世前後期を通して遺物の多い⑩・⑪と第7～9型式に白瓷系陶器の出土量が増加する⑬に多い点は注目される。逆にいえば、同時期に遺構があったはずの④や⑧から出土していない点も注目されるべきだろう。第11型式併行期には、「擂る」ための調理具は擂鉢に移行するようで、古瀬戸後IV古段階から擂鉢が出現する(図339)。片口鉢の第10型式併行期の増加傾向を受け継ぐように、⑩・⑪では後IV新时期に出土量のピークを迎える(図340)。中位段丘上でも同じ時期に擂鉢がみられるが、大窯期全体を通して一定量入る。大窯期(7期)全般を通して居住域だった①・④、大窯期後半(7b期)から居住域になる③は、それぞれ特徴が現われているといえよう。近世では連房第1段階では一定量みられるが、第2段階のものは出土していない。連房第3段階には若干存在するが、量的には少ない。

中国陶磁器 表157に示した中国陶磁器を中世前期と後期～末期にかけて地点別に集計した(表158・図341)。前期が卓越する地点は②・⑦～⑩・⑬である。②は中位段丘上では唯一前期の方が多い。⑧・⑫は中世後期の集落であることを考えると特殊な状況といえるが、出土数そのものが少ない点で、後期段階では⑥と同じ状況と推察できる。⑦・⑨は中世前期の中国陶磁器が多数出土しており、特に狭い範囲から出土した⑦の状況は特筆される。後期では①・④・⑩の構成比が多い。⑥は1点のみ出土しており、少ないことが逆に特徴といえる。全体の点数では④・⑦・⑨・⑩・⑪が多い。いずれも土器を始めとする遺物が多数出土した地点である。

その他の遺物 ここでは今回の調査で多数出土した、硯・砥石と鍛冶関連遺物の地点別集計を行った。砥石は全地点から出土している(表159・160)。中位段丘上では仕上砥が卓越しており、石材も黄色系の鳴滝砥に集中している特徴がある。⑤・⑥では、荒砥も出土している。⑦は鍛冶関連遺構であり、中位段丘上とは異なる色の鳴滝砥を使用している。また最大の特徴は、大型の置き砥石が遺構内から多数出土した点であろう。⑧は鍛冶関連遺構に近いせいか、①～⑥と⑦の間のような出土状況といえる。⑨は大型の荒砥と伊予の中砥の存在が特徴である。⑩・⑪は手持ちの荒砥が特徴である。仕上砥・中砥もみられる。⑫にも三種類の砥石が存在している。第1部第7章第2節において若干触れたが、仕上砥は消費の盛んな都市遺跡ほど需要が多く、中砥は鍛冶関連だけでなく日常のあらゆる場面で使用される最も需要が多い砥石であり、荒砥は刃物生産に関わる砥石と考えられている²⁴⁾。このことから考えると荒砥が⑥～⑫までの広い範囲から出土し、逆に中砥が⑨～⑫しか出土していないことは傾向としてやや不自然といえる。先述したように、荒砥を中砥の代用品として使用していたことは、手持ち砥石として使用した荒砥の存在から推測できる。また、中砥の可能性のある産地不明の砥石もいくつかみられる。以上のことから、

①周辺では鍛冶が盛んに行われており、荒砥が比較的手入れしやすい環境にあった。

表159 地点別分類別の視・磁石出土土点数

地点名	視	上 げ 紙			電 紙			中 紙			中紙代用?		総計
		置き	置き?	?	手持ち	置き	手持ち	置き	手持ち	置き	手持ち	不明	
①	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
②	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
③	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
④	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
⑤	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
⑥	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	4
⑦	1	3	0	1	0	8	0	0	0	0	0	0	13
⑧	0	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	4
⑨	0	0	0	0	1	2	0	0	1	0	2	0	7
⑩	0	0	0	1	5	2	0	0	1	0	0	1	10
⑪	1	3	0	0	7	2	0	0	0	1	0	0	14
⑫	0	1	0	0	0	1	0	1	1	2	1	0	7
総計	4	19	1	2	14	18	1	1	3	3	3	2	74

表160 地点別石材別の視・磁石出土土点数

地点名	高 島		住 上 げ 紙				電 紙			中 紙			中紙代用?		総計	
	再渡米	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石	磁石	不明		不明
①	0	0	0	3	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3
②	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
③	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
④	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
⑤	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3
⑥	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4
⑦	0	0	1	0	2	1	1	0	0	4	0	0	0	0	0	13
⑧	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	4
⑨	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	3	0	7
⑩	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	2	0	0	1	0	10
⑪	1	0	0	1	0	1	1	0	0	4	5	0	0	0	1	14
⑫	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	2	2	0	7
総計	2	1	1	12	3	3	2	1	1	16	15	1	1	1	6	57

表161 各地点の鍛冶関連遺物出土量（上段：破片数，下段：重量（g））

地点番号	鉄										鋼		計	
	IA	IAb	IA7	IBa	IBb	IBc	IIA	IIb	再結合	製錬?	羽口	切		
①	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	405.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	405.3
②	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
③	5	0	0	0	2	2	0	0	0	0	1	0	0	10
	1032.0	0.0	0.0	0.0	7.2	34.0	0.0	0.0	0.0	0.0	24.5	0.0	0.0	1097.7
④	2	0	1	1	2	1	0	0	0	0	1	0	0	8
	301.2	0.0	154.6	474.7	78.4	24.5	0.0	0.0	24.7	0.0	0.0	0.0	0.0	1058.1
⑤	1	0	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	5
	259.1	0.0	0.0	121.0	35.3	19.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	435.2
⑥	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	3
	0.0	0.0	14.6	0.0	0.0	4.5	0.0	4.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	23.8
⑦	30	4	7	29	69	34	47	24	0	1	46	3	294	
	2085.6	89.2	248.4	386.1	1101.9	507.9	356.5	185.7	0	42.8	782.2	44.9	5831.2	
⑧	49	7	0	28	210	130	65	77	13	0	64	0	643	
	1720.7	270.2	0.0	332.6	1593.2	868.3	338.1	388.2	71.1	0	471.1	0	6053.5	
⑨	0	0	1	2	4	4	0	0	0	0	1	0	0	12
	0.0	0.0	25.4	50.9	25.0	47.9	0.0	0.0	0.0	0.0	19.0	0.0	168.2	
⑩	0	0	0	6	0	1	0	0	0	0	1	0	0	8
	0.0	0.0	0.0	65.3	0.0	19.8	0.0	0.0	0.0	0.0	54.1	0.0	139.2	
⑪	3	0	1	1	0	0	0	0	0	1	3	0	0	9
	274.3	0.0	34.6	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	161.5	30.2	0.0	503.9	
⑫	7	0	2	0	3	3	0	0	0	2	2	0	0	19
	1685.2	0.0	320.8	0.0	85.9	70.0	0.0	0.0	0.0	23.2	121.6	0.0	2306.7	
破片数合計	99	11	13	68	292	177	112	102	14	5	117	3	1013	
重量合計	7763.4	359.4	798.4	1433.9	2926.9	1596.7	694.6	578.6	95.8	252.0	1478.2	44.9	18027.8	

表162 各地点から出土した椀形鍛冶滓の平均重量（g）

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
202.7	206.4	151.9	259.1	14.6	59.1	35.6	25.4	77.2	222.9		

②折損したり消耗した大型の荒砥を中砥として再利用した。

③付近に中砥を産出する砥山が存在した。

ことが想像できる。このことを踏まえると、やはり中砥の需要は高く、特に低位段丘上に分布しているといえる。これに対し、中位段丘上には仕上げ砥が多く、一般的な集落とは異なる様相といえる。現段階では推論に過ぎないが、周辺の調査による資料の蓄積が必要となるだろう。視は今回の調査で最も特徴的な地区といえる④・⑦・⑩から出土している。いずれも多量の遺物がみられる盛んな消費活動を行った人々によって使用されたと考えられる。

鍛冶関連遺物は⑦・⑧からの出土が最も多い(表161)。⑧は6c期の鍛冶関連遺構E500を含んでいるため、周辺からも多量に出土していると思われる。ここで特徴的なのはIA類とした楕円形鍛冶滓である。楕円形鍛冶滓は10地点から出土している。このうち①・③～⑤・⑩からは大型の楕円形滓が少数ながら出土している。いずれも中世後期以降の居住域という共通点があるが、何故鍛冶を行っている可能性が少ないこれらの地点に、鍛冶関連遺構より大型の楕円形鍛冶滓が持ち込まれたのかは疑問が残る。また、この滓の平均重量がよく似ていることも興味深いところである(表162)。この他、II類とした強力磁石に反応しない一群は、鍛冶関連遺構以外からはほとんど出土していない。逆に言えば鍛冶に関わる遺構の周辺では、このような鉄滓が多数出土するといえるのではないだろうか。ただし、II類の滓が分散しない理由も含めて、今後検討する必要があるだろう。

第4節 まとめ

第1～3節から得られた成果をもとに、今回の調査成果をまとめてみたい。まず縄文時代早期には確実にこの地に人の手が及んでいる。当時はまだ土地が安定していない時期であり、定住を行うには至らなかったようである。出土遺物の中には早期以降の土器や石器がみられるが遺構はない。なお、同じ段丘上にある重竹遺跡A地点では、縄文時代中期の竪穴住居跡が検出されている。弥生時代前期には中位段丘と低位段丘の境にある溝跡(自然流路?)に人々の活動の痕跡がみられるが、居住域は不明である。重竹遺跡A地点でも同じ時期の遺物が出土しているが、遺構はみつからない。

時代が降り7世紀後業になると、重竹遺跡A地点の対岸に位置する小瀬の地に、弥勒寺東遺跡の郡衙に推定されている建物群や白鳳寺院である弥勒寺が造営され、重竹遺跡B地点にも大規模な集落が形成される。今回の調査では、この時期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出し、重竹遺跡B地点の古代前期集落がさらに広範囲に広がる可能性があり、少なくとも9世紀前葉まで集落が形成されていたことが判明した。また、B地点の調査で検出した大溝の続きを検出したが、この溝跡はH区北調査区と南調査区の間で田長良川に合流していた可能性が高く、川に連結していたと考えられる。この溝は、道路状遺構としたG81みられるように、溝の肩の保護や底に溜まった砂の除去等溝の保守とも思える行為が行われており、当時の人々にとって重要なものであったことが窺われる。この溝跡の取水については、現在の地形や小俣川周辺の試掘結果から考えると、溝跡の河床とはかなり高低差があるため、田長良川を水源とした場合はかなり上流から水を引き込んでいたことになる。または、東側の丘陵から流れる支流を利用していただ可能性も考えられる。溝の機能として農業用水という説が上げられているが、先に述べたように今回の調査ではその痕跡はみられなかった。現段階では農業も含めた生活用水(取水・排水)としての機能を考えたい²⁵⁾。9世紀後業になると重竹遺跡B地点ではわずかに遺構が

みられるのみである。この時期にも弥勒寺東遺跡の郡衙は機能しているが、集落の検出例はない。同時期の白瓷窯跡は周辺の丘陵に存在する(第1部第2章第2節参照)。9世紀中葉～10世紀の遺構は今回の調査では確認できなかったが、重竹遺跡B地点の調査では竪穴住居跡1軒と土坑が検出されている。ただし、この時期の大規模な集落は県内でもほとんどみられないようである。

11世紀前半にはF区に掘立柱建物跡や土坑がつくられるが、遺物の散布状況や重竹遺跡B地点の遺構をみても、この時期の集落が発展していたとはいえない。しかしこの段階から出土土器に時期的な断絶がなくなるため、開発の初期段階と推測する。12世紀の終わり(1188年)には、重竹遺跡A地点に隣接する場所に下有知御厨が建立された²⁶⁾。この時期の白瓷系陶器の出土量が急激に増えており、生産量や流通量を考慮に入れる必要はあるだろうが、御厨の建立と何らかの関連性を考えたい。また土器埋納遺構F24が設置されたのも同じ時期である。第2節では、この時期以降にF・G区の周辺で一辺70m前後の土地区画が行われた可能性を指摘したが、この区画の一角に重竹遺跡B地点の掘立柱建物群が位置し、その他の区画に小規模な居住域や鍛冶関連遺構など生業を行う地区が設置されるといった景観が想起される。今回の調査では、青白磁や白磁四耳壺といった中国磁器が出土したことや、中世前期の土師器皿が一定量みられることから、一帯の支配者と考えられるB地点の建物群の居住者が一般の人々よりも格の高い人物であったと思われる。この段階で中位段丘上でも溝や土坑が設置されるが、建物はない。

14世紀に入るとH区南・I区北調査区やE区にも建物跡がみられ、逆にF区周辺の遺構は土坑を除いて減少する。遺物量は減少傾向にあるが、H区南・I区北調査区は当時期の白瓷系陶器の出土量を他地区と比較すると群を抜いている。15世紀前半には、上位段丘上に区画とそこに配される掘立柱建物跡や大型土坑が出現する。この区画を元に15世紀後半の土塁や建物群が造成される。低位段丘上では重竹遺跡B地点やG区、E区に建物跡や大型土坑がほぼ集約されるが、G区の遺物出土量は群を抜いているといつて良い。しかしこれに伴う溝による区画はそれほど大規模ではなく、どのような性格の集落であるか今後検討していく必要があるだろう。15世紀末～16世紀の始めにかけては一つの大きな画期といえる。G区周辺やE区の集落は大窩I期の段階で姿を消し、一辺約100mの区画施設をもつ居住域を中心に区画を伴う居住域が中位段丘上に集約される。ただし低位段丘上→中位段丘上の移行は、中位段丘上から出土した土器の出土量だけをみればそれほど大きな変動はなく、G区に住んでいた人々が直接中位段丘上に移動したのではないかもしれない。また遺物の出土量で比較すると、15世紀後半～16世紀前半段階ではD・E区の居住域は少なく、A区・B区の土塁近辺・G区では多い。特に居住域の中心ではないと考えられる場所の調査を行ったのもかわらず、多量の出土がみられたB区の土塁近辺・G区は別格といえる。16世紀後半には土塁の盛り直しや道路状遺構B113の廃絶、街道側溝の付け替えなどが行われ、17世紀後半まで中位段丘上の居住域が存続したようである。重竹遺跡A地点の鍛冶屋敷は、B地点の南側への集約が始まり中位段丘上にも建物がつくられる15世紀から、中位段丘上の多くが遺構群が廃絶する17世紀まで存続している。偶然の一致かもしれないが、当時の支配層や社会背景の影響を同じように受けていた可能性を考えたい。その後、曾代用水の設置とともに大部分が水田化し、街道周辺に集落が集まり現代に近い景観になったと考える。

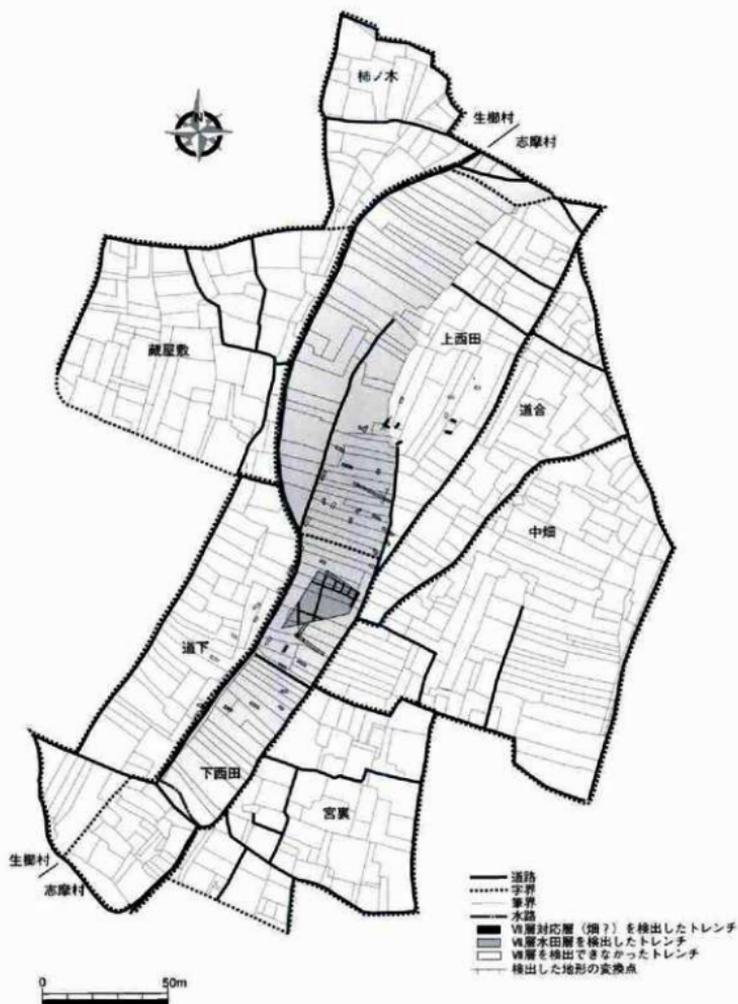


図342 上西田周辺の旧地積図と調査区的位置 (S = 1/4000)

第2章 上西田遺跡のまとめ

最後のまとめにかえて、周辺の旧地籍図をもとに復元した地割から読みとれる上西田遺跡の特徴について若干述べておく。上西田遺跡は、上西田と下西田という二つの字にまたがった遺跡である。旧村の志摩村に属しており、生藩村との境に位置する。図342が旧地籍図から復元した地割である。土地の利用状況はほとんどが畑地であり、集落は宮裏（志摩村）、柿ノ木・蔵屋敷（生藩村）といった字に集まっている。このあたりは地形が高く、現在でも集落がある。単純に考えると、志摩村集落からみて「西」に位置する「田」にあたるのが西田の字名の由来かもしれない。上西田・下西田には北東から南西にかけて蛇行するように長地型の地割が連なっている場所がある（薄いトーンの部分）。位置的に旧長良川の流路の一つと考えられ、現状でも地形が低い。おそらく、水田が造成される前には、ほとんど流れのない湿地状の地形になっていたであろう。試掘確認調査によって確認したVII層は、ほぼこの範囲のみにみられ、そのことを裏付けている。また、VII層対応とした畑の可能性のある層は、すべてこの範囲からはずれた東側に集まっていることになる。

第2部第4章では、水田があった時期の地割りが洪水によって埋没した後も残っていた可能性を指摘した。地割の復元に用いた元図の歪みや縮尺の問題があるため、正確とはいえない点を考慮する必要はあるが、今回検出した畦畔の位置に対応する筆界がいくつかみられる（取水路2等）。旧地籍図が作成されるまでに何度となく洪水の被害にあったはずであり、このことは度重なる被害の後、土地の区画が堅持されてきた結果といえよう。周辺では現在でも、畑の境界や土葬における埋葬位置を示すために川原石を使用する風習がある。砂地であるため、埋もれても見つかりやすく動きにくい川原石が選択されたとすれば、今回検出した畦畔の立石も同様な理由で用いられた可能性がある。今回の調査成果は、当時の水田や畑跡の景観を復元するだけでなく、人々の土地に対する強い執着心を顕在化している点で非常に興味深いといえる。

- 1) この土器は、間延びした山形文を口縁部の内外面と胴部に施文するもので、柳原岩陰遺跡に代表される早期の押型文末期にあたる相木式段階のものとして推定される。県内では指斐郡藤橋村の小の原遺跡のS3類がほぼ同じ内容の土器と考えられる。宇野治幸他1991「小の原遺跡・戸入障子谷遺跡」岐阜県教育委員会。
- 2) 関市教育委員会 1979「重竹遺跡—その1—」。この調査で縄文時代中期の竪穴住居跡が検出されているが、明確なプランは検出面では確認できなかったようで、土坑断面から検出した焼土によって発見されている。また、さらに下層から木炭片が出土しており、さらに古い遺構の存在が予想されている。
- 3) 内堀信雄他 2002「美濃地域における中世集落の様相」『東海の中世集落を考える』第9回東海考古学フォーラム尾張大会資料集。中世前期のモデルとしてB地点の屋敷地についてふれられている。
- 4) 地籍図は岐阜地方方法務局関出張所に保管されているものを複写して使用した。
- 5) 地籍図の収集・合成・トレースは柳崎幸テクノス（現中部テクノス岐阜支社）に委託して作成した。そのままの状態であると実際の地図と齟齬を生じるため、昭和23年撮影の米軍の空中写真や現況地図を用いて可能な限り歪みを補正している。
- 6) 後藤光伸 1996「第九章 古代の交通と生産」『関市史通史編』自然 原始 古代 中世。残っていない理由として長良川の氾濫が上げられている。
- 7) 岐阜県教育委員会 1982「歴史の道調査報告書 郡上街道」によれば、「現在の下有知保育園のあたりから一五六号線を通して、左手に低い田んぼの地帯を見ながら一段と高い河岸段丘の縁を通って行く」とある。しかし、今回行った図化や米軍の空中写真からはここに記された道の位置を特定できず、また、段丘崖端に近いD区の調査区内から道路らしき遺構を確認することはできなかった。少なくとも調査区の付近では、現在の国道156号線と近世の郡上街道とが重なっていた可能性を考えている。

- 8) 掲載遺物については、各遺物に造詣の深い研究者の諸氏に実見していただき、ご教示を得ている。未掲載遺物については、石製品・鍛冶関連遺物を除いて、報告者の判断によるものがほとんどである。
- 9) 重竹遺跡B地点の報告書では、出土遺物としてA類が5点、B類が15点掲載されている。今回の調査と同様な傾向といえるのかもしれない。
- 10) 吉田英敏 1984「B地点 II 古代の遺構と遺物」『重竹遺跡—その3—』関市教育委員会 P123。
- 11) 吉田英敏 1984 前掲。P129に「第2期で増加し、第3期では実に半数ちかくをしめるようになる」とされている。
- 12) 堀正人 2001「4. 製塩土器について」『針田遺跡・東坪之内遺跡・田中浦遺跡』御岐県文化財保護センター。
- 13) 県内では、城之内遺跡、柿田遺跡から出土しているのみである。
- 14) 藤澤良祐氏は、鎌倉市内の遺跡における入子の出土量に着目し、武家屋敷地からの出土が目立つことや、鎌倉以外の出土例が極めて少ないことから「四耳壺・甕子・水注などの地輪陶器以上に遺跡の性格を反映する可能性が高い」としている。藤澤良祐 2003「古瀬戸陶器—入子再考—」『季刊考古学』第85号。
- 15) 小野木学 2004「中世美濃須弥室に関する基礎整理」『美濃の考古学』第7号 美濃の考古学刊行会。
- 16) 小野木氏は、県内の報告書に掲載されている山茶碗から西濃・岐阜・中濃・飛騨の5地域について均質手・荒肌手の分布状況を調べ、その流通過程とその背景の推測を試みている。その中の中濃地域について、今回の調査で得られた結果と一致する状況が推定されている。小野木学 2003「岐阜県における山茶碗分布と流通」『美濃の考古学』第6号 美濃の考古学刊行会。
- 17) 歪んだ個体の計測は、最大値を基本としている。口縁の残存が半分以下のものは、復元可能なものについてその数値をグラフに掲載した。
- 18) 伊野近富 1995「1. 土師器Ⅲ」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社。
- 19) 千登敷遺跡（恩田祐之 2000「第5章第2節7期の遺物について」『千登敷Ⅲ』御岐県市教育文化振興財団）でも、4段階の法量があることが示されているが、最も小さい口径Ⅰ群（6.5-8.0cm）に、Ⅲ・Ⅳ類（Ⅳc e・Ⅳe類を除く）に該当するG類の土師器類がないことが示されている。
- 20) 上記の千登敷遺跡や鷺山仙道遺跡（高木見 2002「第5章第3節鷺山仙道遺跡の出土遺物について」『鷺山仙道遺跡』御岐県市教育文化振興財団）でも口径18cm以上的大型品を除けば、今回の法量分布と同様な結果が出ている。ただしⅣc e・Ⅳe類に該当する分類とⅢ・Ⅳ類に該当する分類の法量分布の違いについて指摘はない。計測方法の違いもあるが、遺跡の特性なのかどうかを今後検討する必要がある。
- 21) 不明遺構B114出土の土師器は、多量のレキと連房製品とともに一括して出土しているものが多い。遺構内の出土遺物はそれよりも古い遺物も多いが、一括性を考えても良いと思われる。
- 22) 口縁部計測法と同じ原理で底部も測定を行った。
- 23) 藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館。藤澤良祐 1995「瀬戸古窯址群Ⅲ—古瀬戸前期様式の編年—」『御瀬戸市埋蔵文化財センター—研究紀要第3号』御瀬戸市埋蔵文化財センターなどを参考にした。
- 24) 汐見一夫 2001「2 石製品の流通」『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会。
- 25) この遺跡について、運河ではないかという説を宇野隆男・渡邊博人両氏よりご指摘を受けた。もし運河とすれば、物流の拠点として集落が機能し発展していたという考え方もできる。ただし本文中に述べた比高差や溝の規模の問題があり、今後の検討課題としたい。
- 26) 後藤光伸「第十二章 荘園と郷」『関市史』通史編 自然 原始 古代 中世 関市教育委員会。

《付篇》 洞雲戶遺跡

付篇：目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	1 (坂東)
第2節 調査の経過と方法	1 (坂東)
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡周辺の環境	3 (坂東)
第2節 神光寺について	3 (坂東)
第3章 遺構	
第1節 基本層序	4 (坂東)
第2節 遺構の概要	6 (坂東)
第3節 検出した遺構	6 (坂東)
第4章 遺物	16 (小野木)
第5章 自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定	23 (山形)
第2節 合子 (SX4出土) 内側付着塗質物の顕微赤外分光分析	25 (藤根)
第3節 出土炭化材樹種	27 (植田)
第6章 まとめ	29 (坂東)

挿図目次

図1 遺跡の位置	2	表6 小石観察表	18
図2 遺跡の地形	4	表7 土器観察表	19
図3 遺構配置図と基本層序	5	表8 放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果	23
図4 SX1・SX7遺構図	7	表9 出土炭化材樹種	29
図5 SX2・SX3遺構図	9		
図6 SX4・SX5・SX6遺構図	11		
図7 C区遺構配置と検出した遺構	13		
図8 SX1-SX4出土遺物	20		
図9 SX4-SX7出土遺物	21		
図10 SX7・包含層出土遺物	22		
図11 出土した合子のマイクロスコブ写真	25		
図12 付着物と生漆の赤外吸収スペクトルと赤外吸収の強度および強度	26		
図13 洞雲戸遺跡経塚出土炭化材樹種	28		
図14 遺構の変遷	30		

表目次

表1 SX (祭祀遺構) 一覧表	15
表2 SP 一覧表	15
表3 和鏡観察表	18
表4 刀子・小刀観察表	18
表5 その他 金属製品観察表	18

図版目次

図版84 洞雲戸遺跡遠景・神光寺・山頂より松鞍山を望む・調査前風景・山頂の巨岩・SX1青白磁平形合子蓋出土状況・SX1小刀出土状況・SX1完掘状況	
図版85 平田部伐採後風景・作業風景・SX2検出状況・SX2完掘状況・SX3検出状況・SX3完掘状況・SX4完掘状況・SX5和鏡出土状況	
図版86 SX5完掘状況・SX6完掘状況・SX7検出状況・SX7完掘状況・C地区石列検出状況・SB1検出状況・山頂部完掘状況・西側斜面完掘状況	
図版87 洞雲戸遺跡出土遺物①	
図版88 洞雲戸遺跡出土遺物②	
図版89 洞雲戸遺跡出土遺物③(4)	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

洞雲戸遺跡は、関市下有知地内の神光寺の裏山に位置する遺跡である。国土交通省岐阜国道工事事務所による東海環状自動車道（関～美濃加茂）建設事業に伴い、平成11年9月8日に岐阜県教育委員会・岐阜県文化財保護センター・関市教育委員会の合同で山頂から山麓にかけて踏査を行った。その結果、山頂部付近で巨岩の露出、及びその周辺で人頭大の川原石を2～3個発見した他、すぐ東方山麓でも巨岩の下部に小さな岩陰があることを確認した。これらは祭祀に関連した遺構の可能性が考えられたため、平成14年7月2日～5日に15m²の調査を行った。山麓部の岩陰周辺部においては遺構、遺物とも皆無であったが、山頂部の人頭大の川原石が散乱していた箇所では、川原石の下部で遺構1基を検出したので、記録をとって掘削した。この遺構からは、青白磁の合子、白磁の小壺、短刀等、経塚を思わせる遺物が多く、周辺部にも遺構が広がる可能性が考えられたため、山頂部の約300m²の範囲で低木のみを伐採し10月7日～18日に継続調査を行った。

第2節 調査の経過と方法

当遺跡の調査は、調査地内の区割りを行わずに調査に入った。掘削はすべて人力で行い、表土を除去した1層基底面に遺構検出を行った。遺構が多く検出された山頂部と西側斜面においては、岩盤に掘り込みが多かったため、最終的に岩盤上面まで掘削して確認した。山頂東部においては、窪んだ箇所、岩盤が切れた箇所等を中心に掘削した。その結果、掘り込みがいずれも浅く不定形で、内部から川原石や遺物の出土もなく、遺構とは考えられなかったため、西側斜面を中心に調査を行った。遺構実測は、すべての遺構について、任意の座標を決めて実測を行った。そして、調査終了後、地形測量（岐阜県テクノスに委託）を行うとともに、それらの座標の位置を記録し、遺構配置図を作成した。

〈調査の経過〉

- 7月2日 山頂の川原石周辺部及び巨岩南部の調査。倒木により表面に浮いていた川原石を除去し、精査したところ、SX1を検出した。記録をとり、半割すると、青白磁の合子、短刀が出土した。
- 7月3日 山麓部の調査。岩陰の前に1本、やや北部に2本のトレンチを入れたが、遺構、遺物ともに皆無であった。
- 7月4日 当センターの試掘検討委員会で、SX1及び山頂部周辺部の状況を確認し、今後について検討した。その結果、山頂平坦部を中心として雑木を伐採し、遺構の有無を確認することに決まった。
- 7月5日 SX1を完掘し、記録をとった。
(伐採の許可等の事情で、一時中断)
- 10月7日 山頂平坦部の雑木を伐採し、地表面の枯れ枝等を箒で掃く。西側斜面において、数十個の川原石を検出した。東側部分では、表面に見える川原石は一点もなかった。

2 第1章 調査の経緯

- 10月8日 山頂より西側斜面にかけての表土（腐葉土）を取り除いた。
- 10月9日 SX 2、SX 3、石列及び人為的に造成された平坦地を検出した。
- 10月10日 削平して平坦にしたと思われる面で、SP 1～SP 5を検出した。
- 10月11日 SX 2、SX 3を半割した。SX 2の底部より炭化物が多量に出土した。
- 10月15日 SX 4、SX 7を検出した。SX 2を完掘した。石の下でつぶれた状態で青白磁の合子が出土した。
- 10月16日 SX05を検出した。山頂部のSX 7を半割した。炭化物とともに多くの遺物が出土した。SX 3、SX 4、SP 1～SP 5を完掘した。SX 3からは、小刀が出土した。
- 10月17日 平坦地の盛土を除去したところ、下部でSX 6を検出した。SX 5、SX 7を完掘した。SX 6からは小刀が、SX 5から和鏡が出土した。
- 10月18日 SX 6を完掘し、西側斜面を岩盤まで掘り下げた。（この時点でSP 6、SP 7を検出した。）
- 10月30日 山頂付近の地形測量を行うとともに、遺構の位置を記録にとった。

平成14年度試掘確認調査の体制は以下の通りである。

理事長	服部 卓郎	調査部長	武藤 貞昭
専務理事兼事務局長	成戸 宏二	調査部次長	片桐 隆彦
常務理事兼経営部長	福田 安昭	調査担当者	坂東 肇
経営部次長兼経営課長	福田 照行		古屋 寿彦

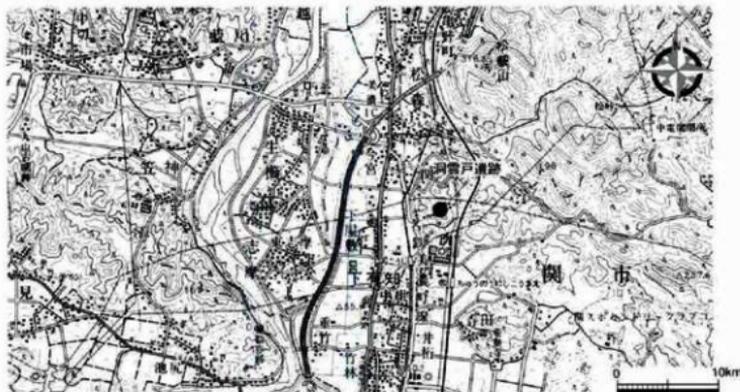


図1 遺跡の位置（S = 1/50000、国土地理院発行1/50000地形図を使用）

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の環境

当遺跡は、関市下有知地内を走る関・美濃線（県道281号線）東にある神光寺及び白山神社の裏山にあたる高さ120m程の小高い丘の上にある。西部は南流する長良川によって三段の河岸段丘が形成されており、この付近一帯に重竹遺跡が広がっている。この遺跡からは、縄文～近世にわたる数多くの遺構・遺物が見つまっている。東部は郡上郡付近から続く山地が南に向かうにつれて高度を下げ、丘陵化してくる地域である。ここには、砂行遺跡をはじめとして、深橋前遺跡、南青柳遺跡、櫻ノ木洞遺跡、末洞遺跡等、古墳時代～古代にかけての遺跡が集中している。

当遺跡は、丁度両者の境目に位置する。この丘陵上部のほとんどはチャートの岩盤よりなっており、特に山頂部には巨岩の露出がみられ、何か祭祀的な場を想像させる。この巨岩の南にあたる斜面には古墳が数基ある。

第2節 神光寺について

当遺跡の南東山麓には神光寺があるが、この寺は中世において白山信仰の重要な拠点であったと考えられている。寺の成立時期については定かではないが、平安時代後半であろうと推定される。

この寺には、平安時代の後期に作られたと考えられている十一面観音像がある。「華嚴経」「法華経」などには、観音菩薩が様々な身を変じて衆生を救済するさまが記されているが、十一面観音は、その変化観音の代表的なもので、日本では天平時代以降に信仰されたものである。そして、この観音は、白山信仰においては、白山権現の本地仏にあたるものである。また、鎌倉時代の地藏尊像、大日如来像、泰澄大師像や、室町時代の白山曼陀羅図がある。特に白山曼陀羅図は、白山信仰そのものを本地垂迹の考えに基づいて図化したものであり、白山信仰との大きなかわりか伺い知れる。

由緒書には、「養老三年（719）に泰澄大師が洲原神社（美濃市）に次いで神光寺を創建し、次に願成寺（岐阜市大洞）を創建した」とある。「養老三年（719）に泰澄大師が」というのは、事実とは考えがたいが、白山信仰を広めた泰澄が創建したと由緒書にあることは、注目に値する。またこの地区では、白山信仰が発展してくる中で、重要な拠点として下山七社が編成されてくるのだが、神光寺は、美濃市にある洲原神社とともに七社の一つと考えられている。このように、神光寺は、この地区において、白山信仰の一大中心地になっていたであろう。

この寺の宗派であるが、平安時代末期において、白山美濃馬場の白山寺、平泉寺、長瀬寺がいずれも延暦寺末となっていることから、それにつながる神光寺も天台宗系の密教寺院であった可能性が考えられる。ただ、これらのことについて確実な史料は残存しておらず、いずれも推定の域を出ない。

なお、その後一時衰退した神光寺は、慶長元年（1596）高野山山谷増福院の真栄によって再興されて、高野山派の真言宗寺院となり、現在に至っている。

第3章 遺構

第1節 基本層序

基本層序は、次の通りである。

I層 黒褐色土 (7.5YR3/2)

表土。ほとんどは腐葉土である。粘性、しまりはなく岩盤と同種の小礫を含む。

II層 褐色土 (7.5YR4/4)

地山土。岩盤上を覆っている土である。当遺跡の山頂部付近の場合、その多くの部分で岩盤が表出しており、この土は岩盤が窪んだり、隙間が広くあいた箇所に多く堆積していた。

III層 岩盤

チャートの岩盤で、遺構の多くはこの岩盤への掘り込みである。

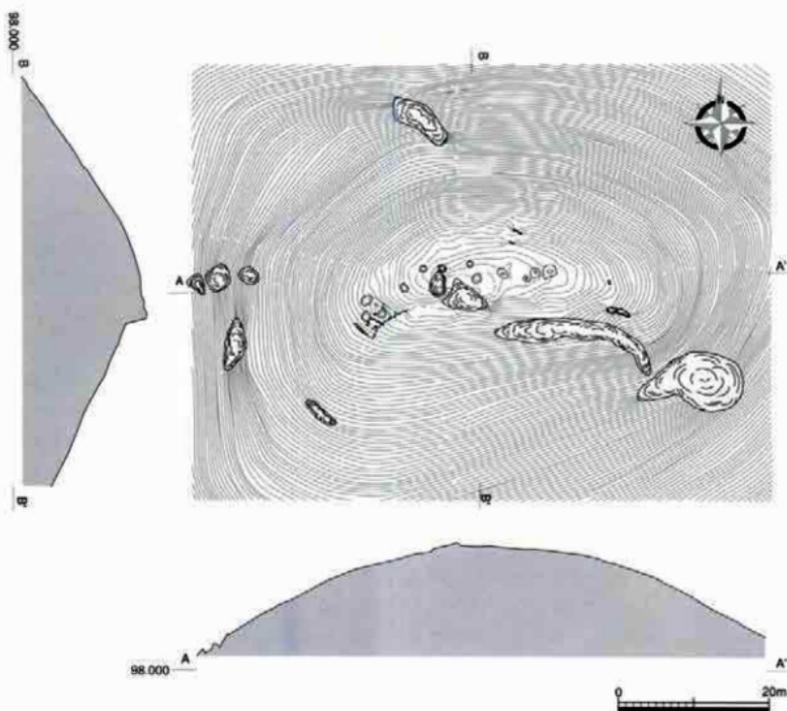


図2 遺跡の地形 (S = 1/670)

第2節 遺構の概要

検出した遺構は、中世を主体とする。遺構の種類の内訳は祭祀遺構7基、掘立柱建物跡1棟、ピット3基、石列1基、溝1条である。祭祀遺構のうちSX2以外は、例外なく岩盤を削って掘り込まれたものであり、掘立柱建物というのは1間×1間の小規模なものであった。また、石列を含む区域は、岩盤を削り、階段状に造成した形跡がみられた。

なお、遺構の種類は次のとおりの原則を用いる。

- SX (祭祀遺構) ……………径0.5mをこえる穴で、祭祀に関連していると考えられるもの
- SH (掘立柱建物跡) ……………ピットが対をなして並ぶもの
- SP (ピット) ……………平面がほぼ円か楕円を呈する径0.5m以下の小穴
- SA (石列) ……………人為的に組まれた石の列
- SD (溝) ……………細長い形状をもつもの

また、当遺跡の調査においては、区割りがしてないので、便宜上、山頂平坦部をA地区、山頂部より削平地までの西斜面をB地区、削平地も含めて西部をC地区とし、このC地区の削平地を上部から削平地①、削平地②と呼称して稿を進める。なお、東部については、尾根筋に沿って岩盤の切れた箇所、窪んだ箇所等、4箇所を掘削をした。しかし、いずれの箇所も岩盤に人為的に掘り込んだ形跡がないこと、浅く不定形のプランをなすこと、西斜面の遺構にみられたように川原石や遺物が出土しないことなどから、遺構ではないと判断し、西部を中心に調査を行った。

第3節 検出した遺構

1. 祭祀遺構 (SX)

SX1 (図4) 位置 A地区の巨岩の北に位置する。

検出状況 踏査した当初に、この地点で苔むした川原石2個をみつけている。今年度調査に入った時点では、この2個の川原石の間に太さ20cm程度の檜の根が露出した状態で倒れていた。つまり、この2個の石は倒木によって掘り起こされ、はね飛ばされた状態であった。これら2個の浮いた石と倒木を取り除いた後、川原石と角礫で組まれた遺構を検出した。

平面形態は、直径0.8mのほぼ円形で、深さ約0.3mを測る。下部は岩盤に掘り込まれたものであり、⑦の川原石の周囲では刀子片が2点、底部では白磁の小壺が横位で出土した。④のSX1上部石組みのブロック状角礫の中央下に、礫に接し腐葉土上に設置されたかのような状況で小刀が出土した。酸化による腐食があまり進んでおらず、完全な形を保っていた。土坑中央上部では青白磁合子の蓋部分、約0.2m下部で身の部分と白磁碗片が出土した。また、SX1の周辺部、及び遺構北斜面では、陶器片が多く出土した。

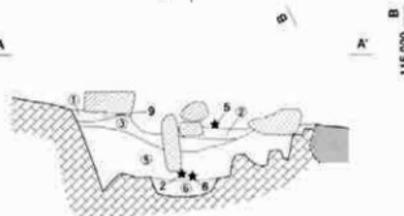
この遺構の構造であるが、底部は岩盤を掘り込み、そこに埋納物を納め、上部には石組みとともに盛土がされたと考えられる。その後、この盛土がやや流れた状態で木が成育し、やがて、木が倒れたことによって、根とともに遺構は掘り返され、遺物は散逸したと考えられる。

SX1



*数字は遺物番号

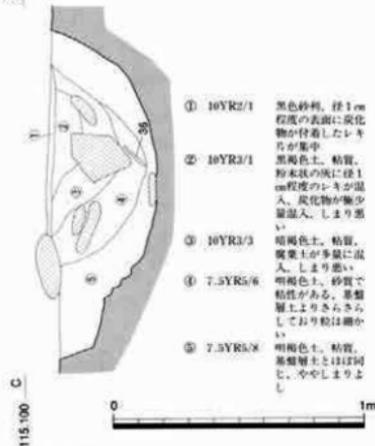
115,000



SX7



C



- ① 5YR1.7/1 黒色土、粘質、黒褐色の腐葉土が多量に混入、しまり悪い、空洞になっていた可能性あり
- ② 7.5YR1.7/1 黒色土、粘質、径3~5cm程度の黒褐色の腐葉土とともに角レキが多量に混入、砂混じり、しまり悪い
- ③ 7.5YR4/4 褐色土、径3~5cm程度の角レキが混入、①より腐葉土の混入が少ない、砂混じり
- ④ 7.5YR3/2 黒褐色土、粘質、炭化物が混入、角レキ片が混入、しまりよし
- ⑤ 7.5YR4/3 褐色土、径5~10cm程度の角レキが少量混入、ややしまりよし
- ⑥ 7.5YR3/3 暗褐色土、角レキが少量混入、ややしまりよし

- ① 10YR2/1 黒色砂状、径1cm程度の表面に炭化物が付着したレキ片が散在
- ② 10YR3/1 黒褐色土、粘質、粉末状の炭に径1cm程度のレキが混入、炭化物が極少量混入、しまり悪い
- ③ 10YR2/3 暗褐色土、粘質、腐葉土が多量に混入、しまり悪い
- ④ 7.5YR5/6 明褐色土、砂質で粘性がある、基盤層上よりさらさらしており粘は弱かい
- ⑤ 7.5YR5/8 明褐色土、粘質、基盤層土とはほぼ同じ、ややしまりよし

図4 SX1・SX7遺構図 (S = 1/20)

出土遺物 青白磁平型合子(5・6)、白磁壺型合子(4)、白磁碗片(2)、白瓷系陶器壺片(3)、白瓷系陶器碗片(1) 小刀(9)、刀子(7・8)。

所屬時期 青白磁平型合子から考えると12世紀末～13世紀初頭である。

SX7(図4) 位置 A地区のSX1と巨岩の間に位置する。

検出状況 表土を除去した時点で、プランの検出を行った。プラン内の中央部やや東よりに炭化物を多く含む黒色土の層が広がり、遺構の中央部には、直径約0.2mのアラクシ属の木が生えていた。

遺構は岩盤がほぼ円形に掘り込まれたものであり、直径約1.2m、深さ約0.45mを測る。検出プランの中央には、炭化物を多く含む土の層があるが、これは遺構上部がほぼ平らになった後、火を焚いた痕と考えられるが、この遺構を意識して行った宗教行事かどうかは不明である。内部には角礫も含めて、多くの円礫が入っていたが、これらは内部に埋納されたものが土圧で圧縮されるか、引き抜かれるかした後、上部にあったものが落下したものと考えられる。実際に経筒底部と考えられる遺物が、中央部の角礫下から底部のみが抜け落ちたような状態で出土している。岩盤への掘削は、SX1より丁寧に細かく削り、ほぼ円形であった。この遺構は、経筒外容器片及び経筒片が出土していることから、経塚と考えられる。尚、山頂部には、SX7とSX1は並んでいるように見受けられるが、対にして作られたとも考えられる。

出土遺物 白磁碗片(26・30)、経筒外容器片(35・36)、経筒片29点(32～34)、常滑甕片4、白瓷系陶器片22点(27～29・31・37・38)。遺物出土点数は、59点で最も多くの遺物が出土した。

所屬時期 白磁碗片から考えると12世紀末～13世紀初頭である。

SX2(図5) 位置 C地区の削平地①の北部に位置する。

検出状況 上部は扁平な円礫が数個積まれたような状態で地表面に出ている。その礫の重なり具合からみると、上部にあった石積み、中央部遺物の抜き取りか埋納物の土圧による陥没などの理由により、内部に落ち込んだものと考えられる。

平面形態は楕円形で、東西約1.6m、南北約1.2m、深さ約0.5mを測る。山の北斜面でII層の厚い箇所掘り込んだもので、底部でも岩盤には達していなかった。SX1～SX7で、岩盤にまで掘り進んでいない遺構は、この遺構のみであった。底面付近には、炭化物のかたまった層があり、木炭状になった角材も出土した。特に土坑の東内面は土が焼けており、側面に表出した礫も被熱していた。青白磁壺形合子は、底部に近い箇所、上から落ち込んだと考えられる円礫に押しつぶされる形で出土した。また、白瓷系陶器片は、青白磁壺形合子より上層(②層)から、まとめて出土した。

出土遺物 青白磁壺形合子(11・12)、白瓷系陶器片8点(10・13)。

所屬時期 青白磁壺形合子から考えると12世紀末～13世紀初頭である。

SX3(図5) 位置 C地区の削平地②の北側斜面に位置する。

検出状況 地表面に、多くの円礫、角礫が積まれたような状態で露出していた。この遺構もSX2と同様で、上部の礫が下部へ落ち込んだものと考えられる。

平面形態は、ほぼ円形で、南北約1.4m、東西1.2m、深さ0.7mを測る。岩盤に掘り込んだもので、

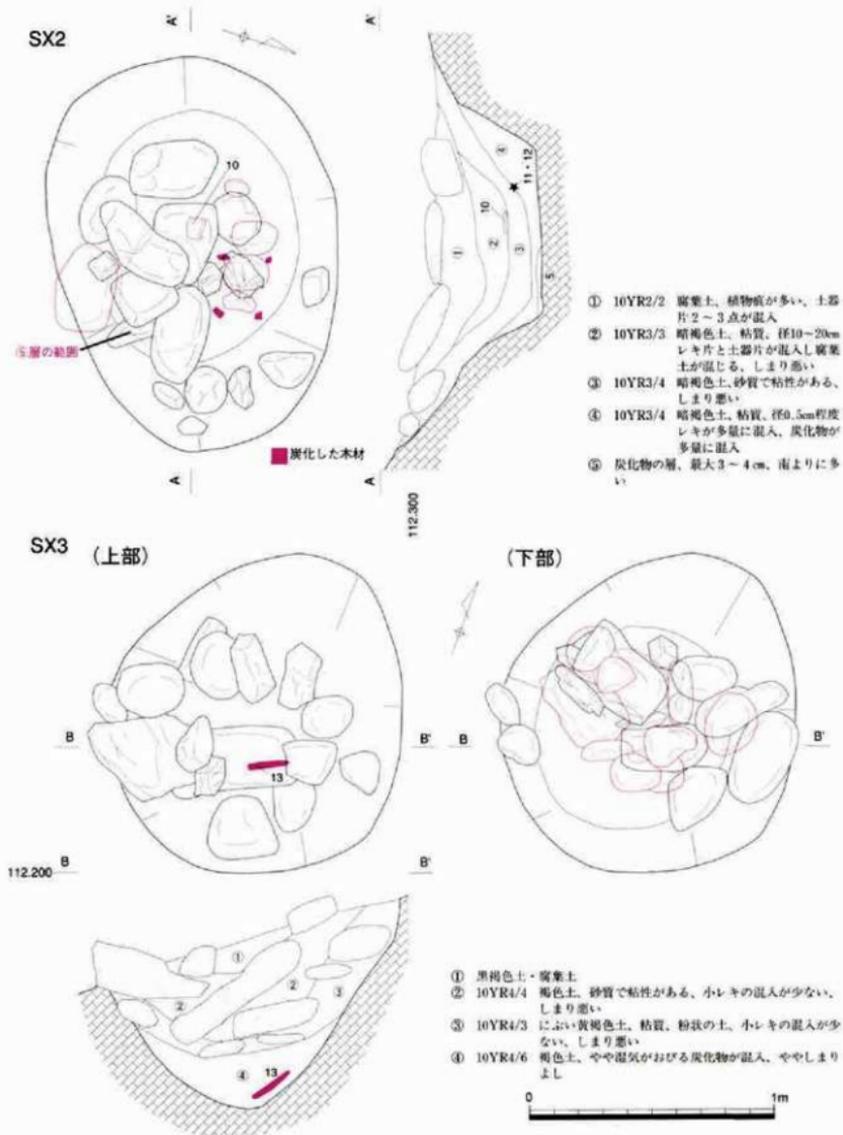


図5 SX2・SX3遺構図 (S = 1/20)

円礫、角礫が多く残存していた。中央部で斜めに落ち込んだ石は、縦0.6m、横0.4m、厚み0.1mの扁平で隅丸方形の墓標状のものであったが、表裏両面で文字、線刻等は確認できなかった。④層では、炭化材が出土^(*)したが、SX 2のように層をなして堆積しているわけではなかった。また、底部側面に近い箇所でも小刀と白磁碗片が出土した。小刀は底部に近い④層の縁辺部から、棟を上にして錠子がやや上向き加減になった状態で出土した。

出土遺物 白磁碗片 (14)、小刀 (15)、小石。

所属時期 白磁碗片から考えると12世紀末～13世紀初頭である。

(*) 炭化材の分析によると、SX 1がマツ(中央の本はアラカシ亜属)、SX 2～4がアラカシ亜属というように、いずれも常緑樹である。常磐木として意識的に使われた可能性も考えられる(第5章第3節参照)。

SX 4 (図6) 位置 B地区の西向き斜面に位置する。

検出状況 表土を除去した時点では、この遺構のプランは明確にわからなかった。ただ、この部分において岩盤が切れていたため、再度精査してプランを確認した。

平面形態は、1.2m×0.9mの隅丸方形に近い形で岩盤に掘り込まれており、深さ0.3mを測る。内部中央には扁平な円礫があり、その底部周辺から青白磁合子蓋の破片が出土した。この青白磁合子蓋の内面には、漆の付着が認められた。

この土坑を見る限り、上部の石組み等はみられないが、調査当初北西部の3m程度下方に、大きいのは0.45m×0.35m、厚み0.07mのもの等、円礫の集中区があり、SX 4付近から落ちてきた可能性が考えられる。

出土遺物 青白磁合子蓋片 (17)、白瓷系陶器片 4点 (16・18・19)。

所属時期 青白磁合子蓋片から考えると12世紀末～13世紀初頭である。

SX 5 (図6) 位置 B地区の北斜面上部に位置する。

検出状況 表土を除去した時点では、この遺構のプランは分からず、岩盤の切れ目により遺構の範囲が想定できた。内部には円礫が2個あったが、他に比べ最も急な斜面に作られたせいか、上部遺構のほとんどは流れてしまっており、付近にもほとんど円礫は認められず、上部に石組みがあったかどうかは不明である。

岩盤に掘り込まれており、平面形態は0.9m×0.8mの隅丸方形で、深さ0.3mを測る。この遺構の南部縁辺からは、和鏡が出土した。裏面を上にして伏せられた状況であった。地表面に近い箇所であったが、周縁部の欠損は少なく、保存状態はほぼ良好であった。ただ、上部遺構が崩壊し、和鏡の直上近くまで土が流れていた関係から、埋納の状況については明らかにできなかった。

出土遺物 和鏡 (21)、白瓷系陶器片 (20)。

所属時期 和鏡から考えると12世紀末～13世紀である。

SX 6 (図6) 位置 C地区の削平地①の盛土下中央部に位置する。

検出状況 削平地①の盛土を除去し、岩盤部分まで掘り下げた時点でプランが確認できた。完全に岩盤に掘り込まれた土坑で、他のものと違い上面、及び埋土中には円礫が1個もなく、上層には15cm前

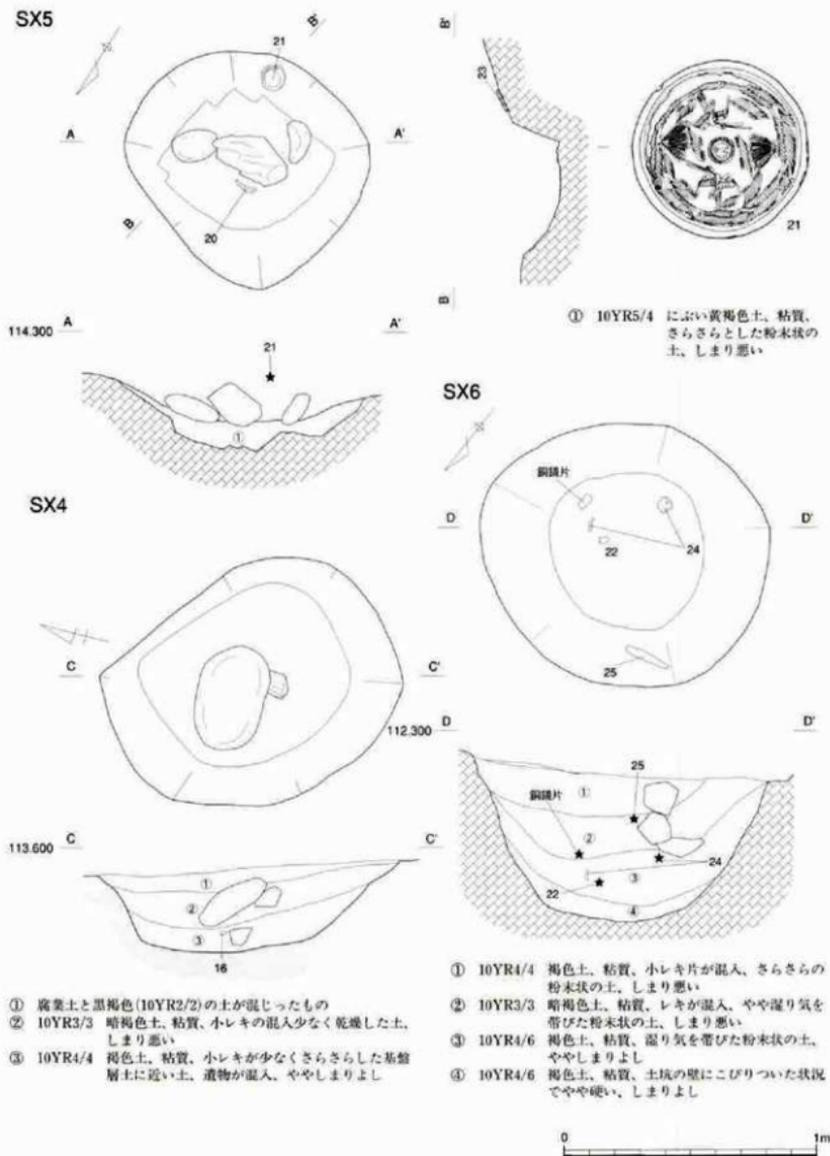


図6 SX4・SX5・SX6遺構図 (S = 1/20)

後の角礫が数個入り込んでいるのみであった。後になり、SH 1が作られた時に削平され、円礫も除去されたものと考えられる。

平面形態は1.2m×1.0mの楕円形で、深さは0.6mを測る。中位の側壁では、小刀が刃先を上にし、錠子が上向き状態で出土した。また、図示していないが、中央部で和鏡片が②層の下層部より出土した。保存状態はよくなくて、細片がほとんどであるが、鈕の部分とわずかに文様のみえる破片があった。鏡の全体に広がる文様は不明ながら、和鏡(21)に見られる草花の一部分と考えられる文様はみられた。周縁部が残存しておらず、詳細は不明であるが、径は21より大きく約100mm程度ではないかと推定される。また、③層より経筒外容器片、白磁皿片が出土した。この埋土は、SX 7に似て粒の小さい砂質の褐色土で、底部の側壁に近い部分には粘性の強い褐色土がこびりついていた。また、遺構の北部周辺(aの部分、C地区遺構配置図参照)には岩盤を約5cm削り低くした箇所があるが、SX 6に伴うものかどうかは不明である。

この遺構も他の遺構と同様に、岩盤を掘削して、小刀、和鏡、経筒外容器、その他埋納物等を納めた後、上部には石組みをしたものと推定できる。そして、後の時代に上部が自然に崩落するか、人為的に崩されるかした後、建物を建てるために再度岩盤面を削平し、新たに盛土を敷いて、建物を建てたと考えられる。

出土遺物 小刀(25)、和鏡片、白磁皿片(22)、白磁碗片(23)、経筒片(24)。

所属時期 白磁皿片から考えると12世紀末～13世紀初頭である。

2. 掘立柱建物跡(SH)

SH 1(図7) 位置 C地区の削平地①に位置する。

検出状況 当初、この削平された面には、B地区の上部から滑落したと思われる円礫が十数個あった。それらをすべて取り除き、盛土上面で精査したところ、SP 1～SP 4の4基の柱穴を検出した。いずれも明確におかるものであったが、すぐ下が岩盤のため、深さは0.1m程度であった。

この建物は、この面を削平し、盛土をした後に建てられたものと考えられる。ただ、盛土西端に設置された石列と軸がそろわず、その両者の関係は明らかではない。1間×1間(1.7m×1.4m)で、祠のような小さなものと思われるが詳細は不明である。長軸の方位はN30°Wである。図示していないがSP 1の埋土上部より銭貨が出土した。鉄銭で周縁部にやや厚みがあるものの、ほぼ半分が欠損していた。その他、盛土中より鉄釘、小石が出土した。

このSH 1周辺部及び、C地区で出土した14個の小石についてであるが、SX 3の埋土から1個、それ以外はいずれも盛土の上面か内部より出土したものである。川原石であるから、人の手によって他から持ちこまれたことは明らかである。表面に文字が書かれていた形跡はなく、意図的に埋められていた可能性も薄い。むしろ、この山頂部に詣でた時に信仰に関連したのとして持ってきたものであろうと考えられる。時期は、不明としか言いようがないが、盛土中から多くが出土したことから、SH 1と同時期である可能性はある。

出土遺物 銭貨、鉄釘(47)、小石(盛土中)。

所属時期 出土遺物からは判定できず、不明である。

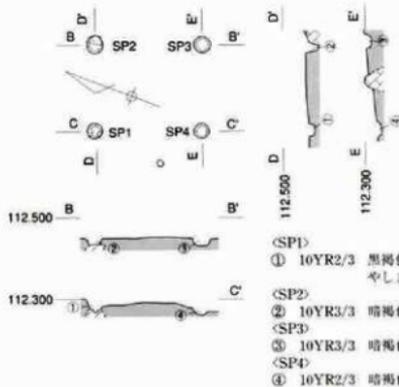
C地区 遺構配置図



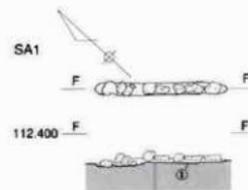
* a~cは盛土上面に設置された可能性が考えられる円レキ

- ① 10YR3/3 暗褐色土、ややしまりよし
- ② 10YR3/3 黒褐色土、やや粘質、腐葉土が混入、しまり悪い
- ③ 10YR4/3 濃い黄褐色土、粘質、小レキが多量に混入、しまり悪い 盛土
- ④ 10YR4/3 濃い黄褐色土、粘質、②よりやや大きめの石が多量に混入、しまり悪い 盛土

SP1~SP4



- 〈SP1〉
- ① 10YR2/3 黒褐色土、腐葉土が少量混入、粘質、ややしまりよし
- 〈SP2〉
- ② 10YR3/3 暗褐色土、粘質、ややしまりよし
- 〈SP3〉
- ③ 10YR3/3 暗褐色土、粘質、ややしまりよし
- 〈SP4〉
- ④ 10YR2/3 暗褐色土、粘質、しまり悪い



- ① 10YR3/3 黒褐色土、やや粘質、腐葉土を少量混入、しまり悪い



図7 C区遺構配置と検出した遺構 (S = 1/40)

3. ビット (SP)

SP 5 位置 C地区の削平地②の石列寄りに位置する。

検出状況・出土遺物 石列に隣接して、一段低い箇所で見出された。岩盤への掘り込みではなく、石列下の盛土に掘り込まれたものである。径約0.05mで、杭のようなものの痕と考えられる。SH 1との関係で考えると、SP 1と SP 4の中央部といえなくはない。

出土遺物はなく、所属時期は不明である。

SP 6 位置 C地区の削平地②に位置する。

検出状況・出土遺物 径約0.2mの円形のビットで、岩盤上部の盛土をすべて取り去った時点で確認できた。この遺構は、盛土上面から掘り込まれた可能性が高い。岩盤からは約0.25mの深さであった。

出土遺物はなく、所属時期は不明である。

SP 7 位置 C地区の削平地②に位置する。

検出状況・出土遺物 0.24m×0.2mの楕円形のビットで、SP 6と同様で、岩盤上部の盛土をすべて取り去った時点で確認できた。遺構は岩盤に約0.18m掘り込まれていた。このSX 7とSX 6は対であると考えられ、この2遺構を結ぶ線は石列の軸と同じくする。

出土遺物はなく、所属時期は不明である。

4. 石列 (SA)

SA 1 (図7) 位置 C地区の削平地①の西端に位置する。

検出状況・出土遺物 表土を除去した時点で検出できた。盛土がくずれないように石列が作られていると考えられる。使用されているすべての石が横長の角礫であった。それぞれの石の周りには掘形があることから、まず溝状に掘り、それぞれの石を設置して周りを固めたものと考えられる。

出土遺物はなく、所属時期は不明である。

5. 溝 (SD)

SD 1 (図7) 位置 C地区の削平地の東端に位置する。

検出状況・出土遺物 削平地①の盛土を精査した時点で検出できた。SH 1の柱穴 SP 3で切られている。この溝は、深さ0.05m～0.1m程度のものである。

出土遺物はなく、所属時期は不明である。

表1 SX (祭祀遺構) 一覧表

地区	遺構名	掘り込み状況	法 量			石 組 み	出 土 遺 物	時 期	備 考
			長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)				
A 山頂部	SX1	岩盤へ掘り込み	0.85	0.75	0.32	上部で壺門礎が散乱。下部に石組み。	青白磁合子・白磁合子・白磁碗片・白瓷系陶器片・小刀・刀子2	12~13C	山頂部。上部に壺門礎が散乱する。周辺部II層上面から陶器片が多く出土する。
	SX7	岩盤へ掘り込み	1.35	1.2	0.43	上部に石組みなし。内部に石組み残る。	白磁片2、経筒外容器片、経筒片29、常滑薬片4、白瓷系陶器片22	12~13C	山頂部。上部に焼いた痕跡と思われる炭化物の層がみられた。
B	SX4	岩盤へ掘り込み	1.14	0.88	0.33	内部に壺門礎1個残る。	青白磁合子蓋片(内面に漆が付着?)、白瓷系陶器鉢片4、白瓷系陶器碗片	12~13C	掘り込みは浅く、遺構の残存状況はよくなかった。
	SX5	岩盤へ掘り込み	0.93	0.82	0.28	内部に壺門礎2個残る。	和鏡、白瓷系陶器蓋、白瓷系陶器碗片	12~13C	掘り込みは浅く、遺構の残存状況はよくないが、上層部で和鏡が出土した。
C	SX2	II層へ掘り込み	1.62	1.16	0.52	上部で石組みの確認ができる。	青白磁壺形合子、白瓷系陶器片8	12~13C	掘り込みの側面に焼けた痕がある。底部に炭化物の層が認められる。
	SX3	岩盤へ掘り込み	1.37	1.23	0.71	上部で石組みの確認ができる。	小刀、白磁片、(小石)	12~13C	上部の石組みが、遺構内部に落ち込んだ状況であった。遺物は少ないが、いらばん石の多い遺構である。
	SX6	岩盤へ掘り込み	1.16	1.04	0.64	石組みなし。	小刀、白磁片2、経筒片、和鏡片	12~13C	後に上部が人為的に削平されたと考えられ、上部にあったと思われる石組みはみられなかった。

表2 SP 一覧表

地区名	遺構名	掘り込み状況	法 量			出 土 遺 物	備 考
			長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)		
C 削平地① (西側斜面・上部盛土)	SP1	盛土上面からII層への掘り込み	0.24	0.24	0.12	銭貨1(時期不明)	SB1底部がすぐに岩盤にあたり浅い。
	SP2	盛土上面から岩盤へ少し掘り込む	0.28	0.26	0.12	なし	SB1内部に角礫が入り込んでいて、岩盤へ少し掘り込む。
	SP3	盛土上面からII層への掘り込み	0.26	0.24	0.1	なし	SB1溝(SD1)を切っている。埋土が砂質土である。
	SP4	盛土上面からII層への掘り込み	0.24	0.22	0.1	なし	SB1ピットの南部が斜面の崩落により削られる。
削平地② (西側斜面・石列下)	SP5	杭の抜き取り痕か?	0.05	0.05	0.23	なし	石列西の一段下で検出した。プランは明瞭である。
	SP6	盛土上面から?岩盤へ掘り込み	0.2	0.2	0.25	なし	盛土を除去した時点で検出できた。
	SP7	盛土上面から?岩盤へ掘り込み	0.24	0.2	0.18	なし	盛土を除去した時点で検出できた。

第4章 遺物

遺物は接合後の破片数で133点出土した。その内訳は白瓷系陶器(美濃須衛産)88点、白瓷系陶器(東濃産)5点、中国磁器15点、土師器2点、鉄製品7点、銅製品2点、石器14点である。

陶磁器のなかでは、白瓷系陶器(美濃須衛産)が圧倒的に多いという特徴がある。美濃須衛産は胎土が砂質であり、含有物は石英(灰色燧)よりも長石(白色燧)の方が多い。また、胎土中には空隙が多くみられる個体もある。東濃産のいわゆる均質手のものとは容易に区別でき、尾張産のいわゆる荒肌手のものとは若干区別が難しい個体もあるが、概ね砂質の具合で肉眼による区別が可能であった。甕は口縁部形態や外面の様相が常滑のものと酷似するが、胎土が全く異なるので識別は容易である。このように、1遺跡において、美濃須衛産の中世陶器が卓越して出土する事例の報告はあまりなく、今後は十分に留意すべきである。

以下に、遺構毎に遺物の概要を説明する。なお、中国磁器、常滑、白瓷系陶器などは、重竹遺跡の参考文献と同じなので割愛する。

SX1 (1~9)

白瓷系陶器(1・3) 1は東濃産の碗であり、底部内面全体が大きく窪み、高台が底部外面周縁に貼り付けられていることから、北部系8型式の大谷洞14号窯式に分類した。3は美濃須衛産の丸底の壺、ないしは経筒蓋の可能性があり、外面の調整は粗い。

中国磁器(2・4~6) 2は白磁碗である。大宰府分類のV類かV類に比定される。4は白磁壺形合子身である。底部は上げ底で体部は肩部で屈曲し、口縁部周辺は整形最終時に強く横ナデされる。体部外面には先端が丸い棒状工具により縦方向の沈線が施されている。なお、体部内面にわずかに煤が付着しているが、その用途は不明である。5は青白磁平形合子蓋であり、6の青白磁平形合子身と重なり合い、総高は3.3cmである。5の天井部はやや膨らみをもち、体部最大径は口縁部上方にくる。蓋表面全面に28の小菊状の花があり、花びらはいずれも8枚である。なお、口頸部外面に縦方向の沈線が入る。6は底部は上げ底で体部下方は斜めに立ち上がり、上方はほぼ垂直である。受部はシャープなつくりで、受部面は窪む。体部外面には縦方向の沈線が入る。5、6ともに口縁端部が部分的に細かく打ち欠かれているが、これは焼成直後の蓋と身の剥離の痕跡と考えられる。

金属製品(7~9) 7・8は刀子である。7は本体そのものはしっかりしているのに、小刀の一部分の可能性があり、8は腐蝕が激しくもろい状態であった。9は小刀である。腐蝕がさほど進んでおらず、残存状況が最もよく、茎の部分に柄の一部と思われる木片が付着している。

SX2 (10~13)

白瓷系陶器(10・13) 10は美濃須衛産の鉢であり、口縁端部が水平に面取りされている。残存部位において、顕著な使用痕は認められない。13は美濃須衛産の甕である。おそらく経筒外容器に転用されており、10の鉢は外容器の蓋であったと考えられる。

中国磁器(11・12) 11は青白磁壺形合子蓋であり、12の青白磁壺形合子身と重なり合い、総高は4.8cmである。11は天井部外面が丸みを帯び、受部との境に段を有する。受部は粘土紐を貼り付けており、

外面が内傾する。天井部外面には芯をもつ菊花を表した花形文が施されている。12は底部が輪高台状に張り出され、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は尖る。口縁部外面は強い回転ナデが施されるため、緩やかに窪んでいる。体部外面には菊花を表した花形文が施されている。

SX 3 (14・15)

14は中国磁器の白磁碗である。大宰府分類白磁碗IV類に比定される。15は小刀である。棟の部分がやや厚くなっており、目釘穴も残存している。

SX 4 (16~19)

16は東濃産の白瓷系陶器の碗である。体部がやや浅い。17は中国磁器の青白磁平形合子蓋であり、当道跡出土の他の合子蓋よりも直径が大きい。口頸部外面中程に明確な稜を有し、天井部外面に唐草文らしき文様をもつ。なお、内面に漆が付着している(第5章第2節参照)。18・19は美濃須衛産の白瓷系陶器の鉢であり、18は体部の立ち上がり急で、内面が摩滅している。19は口縁部が外反気味で、内面が摩滅していない。

SX 5 (20・21)

20は美濃須衛産の白瓷系陶器の経筒蓋である。口縁端部がほぼ水平に面取りされている。21は「波貝双鳥鏡」といわれる和鏡である。径82mm、縁高3mm、縁幅3mmであった。文様^(*)は、外区から内区にかけて水波文を表し、鈕を挟んで対称位置に、帆立貝と小鳥の文様を2個ずつ配置するというように、非常に珍しい文様構成である。このように貝を意匠とする平安末〜鎌倉期の鏡はきわめて稀で、出土鏡としては他に例がない。平安後期〜鎌倉期の鏡としては小ぶりである。鏡胎も特徴的で、幅広の周縁が低く外傾気味に立ち上がるもので、花形座の低い鈕に、鑄造時に鈕孔となる軸を設定した痕跡が残っている。こうした鏡胎の特徴をもつものは、鎌倉時代初期あたりの年紀をもつ経塚からよく出土する。

(*) 鏡の文様等については、その多くを京都国立博物館の久保智康氏のご教示によった。

SX 6 (22~25)

22は中国磁器の白磁皿である。体部内面中程に明瞭な段をもつ。23は中国磁器の白磁碗である。大宰府分類のIV類に比定される。24は美濃須衛産の白瓷系陶器の経筒もしくは経筒外容器である。口縁部外面に「十」字状の刻書がある。25は小刀である。15に比べ茎の部分が長く、銚子の部分が少し欠損している。目釘穴は残存している。

SX 7 (26~38)

中国磁器 (26・30) 26は白磁碗である。大宰府分類白磁碗V類かⅧ類に比定される。口縁端部に輪花を有する。30は白磁碗であり、口縁端部の軸は拭い取られ、体部内面に1条の沈線をもつ。また、軸には貫入がある。

白瓷系陶器 (27~29・31~38) 27・28は美濃須衛産の経筒蓋であり、口縁端部が丸みを帯びている。29は美濃須衛産の碗であり、体部が全体的に厚く、直径も小さいことから、経筒の蓋の可能性もある。31は美濃須衛産の鉢であり、口縁端部が外反し、体部内面は摩滅している。32~34は美濃須衛産の経筒であり、同一個体である。底部外面には回転糸切り痕が残り、体部はほぼ直線的に立ち上がる。口縁部はやや内傾し、端部は丸みをもつ。体部外面には2条の沈線が上下に施され、ヘラによる刻書が3ヶ所以上にあるが、その判読は不明である。他の美濃須衛産陶器よりも焼成が甘く、体部内面に粘

土紐の積み上げ痕が残る。35・36は美濃須衛産の経筒外容器の可能性が高い。35は体部外面に2条の沈線が施され、36は平底である。37・38は美濃須衛産の甕である。37は口縁端部が明確につまみ上げられており、端部外面には緑帯をもつ。常滑編年の4型式(1190~1220)の甕の形態と類似している。

包含層出土遺物 (39~47)

白瓷系陶器 (39・42~45) 39は碗である。北部系6型式の白土原1号窯式~北部系7型式の明和1号窯式に属する。42は美濃須衛産の経筒外容器蓋であり、天井部外面に2条の沈線が上下に施されている。また、頂部にはつまみが付く可能性が高い。43・45は美濃須衛産の鉢であり、43は内面が摩滅しているが、45は摩滅していない。44は美濃須衛産の壺である。

中国磁器 (40・41) 40は青白磁平形合子蓋である。41は青磁碗である。大宰府分類龍泉窯系青磁碗I-2類に比定される。体部内面に草花文が施され、軸には貫入がある。

土師器 (46) 46はロクロ土師器で、柱状高台の皿である。底部外面に回転系切り痕が残り、脚柱部は中実である。

金属製品 (47) 47は釘である。鉄製の角釘で、表面が腐蝕しており頭部は欠損している。

表3 和鏡観察表 (重量以外の単位はmm)

掲載番号	遺物名	出土遺構	径(cm)	縁径(cm)	紐高(cm)	鏡胎厚(cm)	縁高(cm)	縁幅(cm)	重量(g)	名称	備考	挿図番号	写真図版番号
21	和鏡1	SX 5	8.2	0.7	0.3	0.1	0.3	0.3	29.74	渡貝双鳥鏡		9	88
-	和鏡2	SX 6	(約10.0)	0.9	0.4	0.1	-	-	-	-	小破片	-	88

表4 刀子、小刀観察表 (重量以外の単位はmm)

掲載番号	遺物名	出土遺構	全長(cm)	身長(cm)	身厚(cm)	身幅(cm)	茎部長(cm)	茎部幅(cm)	茎部厚(cm)	重量(g)	備考	挿図番号	写真図版番号
7	刀子1	SX 1	(5.9)	-	0.5	2.3	-	-	-	12.0	折れた破片か?	8	87
8	刀子2	SX 1	(6.3)	-	(0.3)	(2.2)	-	-	-	6.0	小破片	8	87
9	小刀1	SX 1	28.3	24.5	0.7	2.9	3.8	1.7	0.7	190.0	茎に木片付着	8	87
15	小刀2	SX 3	26.5	21.7	0.7	2.7	4.8	1.7	0.5	89.0	目釘穴が残存	8	87
25	小刀3	SX 6	25.0	18.6	0.5	2.8	6.4	1.7	0.5	89.0	目釘穴が残存	9	87

表5 その他金属製品観察表 (重量以外の単位はmm)

掲載番号	遺物名	出土遺構	全長(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考	挿図番号	写真図版番号	
-	銭貨	SP 1	埋土上部	2.5	0.1	1.29	腐蝕がはげしく、文字の判読不能	-	-
47	角釘	厩平地①	盛土上部	8.9	0.5	7.97	盛土上部で、SD1付近より出土した。	9	87

表6 小石観察表

No	出土区(遺物番号)	場所	法量(mm)			重量(g)	備考	
			長径	短径	厚み			
1	C (142)	SX 3	②層	44.5	35.5	24.3	53.0	厚みがあり、楕円形をなす。
2	C (143)	厩平地①	盛土内	35.9	30.2	23.1	33.0	厚みがあり、ほぼ楕円球状をなす。
3	C (144)	厩平地②	盛土上面	40.3	33.1	16.1	30.0	扁平で、楕円形をなす。
4	C (145)	厩平地②	盛土上面	36.9	31.9	19.7	34.0	扁平で、三角形のおにぎり形をなす。
5	C (146)	厩平地②	盛土上面	40.7	28.6	18.6	33.0	3面が平滑になっている。
6	C (147)	厩平地②	盛土内	43.9	25.2	12.8	19.0	他と比べて丸みのない円盤。
7	C (148)	厩平地②	盛土内	40.6	31.7	30.9	53.0	球形に近い形状をしている。
8	C (149)	厩平地②	盛土内	42.1	38.2	18.6	43.0	扁平で、ほぼ円形をなす。
9	C (150)	厩平地②	盛土内	36.5	25.8	18.6	24.0	厚みがややあり小判状の形をなす。
10	C (151)	厩平地②	盛土内	45.7	32.2	22.1	46.0	厚みがあり小判状の形をなす。
11	C (152)	厩平地②	盛土内	24.2	18.1	12.2	8.0	他と比べて1/4程度の小さな円盤。
12	C (153)	厩平地②	盛土内	48.1	38.8	17.7	49.0	扁平で隅丸方形に近い形状をしている。
13	C (154)	厩平地②	盛土内	36.9	22.4	13.7	16.0	小さめで、細長い。
14	C (155)	厩平地②	盛土内	48.5	32.4	15.1	35.0	扁平で小判状の形をなす。

表7 土器観察表

図録番号	出土遺構	種類	器種	器名	説明	調査・文様	粘土色	質量 (g)			横断面 (4/72)	断面 (形式・縦寸)	注目点		
								自重	底径	高さ					
1	SK1	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	11.0	14.0	-	2.3	3.5	底部が平型式	8	89
2	SK1	中国陶磁器	白磁碗	内外面刷毛ナシ	白磁碗(白YR6)		2.5Y7/2YR6	14.9	-	-	1.3	-	大平肩分型白磁碗 YR6(黄)	8	89
3	SK1	北沢面	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	-	-	-	-	-	黄褐色	8	89
4	SK1	中国陶磁器	白磁碗	内外面刷毛ナシ	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	2.6	2.7	4.6	12	12		8	87
5	SK1	中国陶磁器	青白磁碗	内外面刷毛ナシ	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	5.2	5.1	1.8	12	12		8	87
6	SK1	中国陶磁器	青白磁碗	内外面刷毛ナシ	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	4.6	4.6	1.9	12	12		8	87
10	SK2	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ			2.5YR6/2.5 →黄	28.0	-	-	2.5	-	黄褐色	8	89
11	SK2	中国陶磁器	青白磁碗	内外面刷毛ナシ	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	3.2	-	-	1.1	12	12	4	87
12	SK2	中国陶磁器	青白磁碗	内外面刷毛ナシ	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	4.9	3.6	4.1	12	12		8	87
13	SK2	白磁系陶器	碗				2.5YR6/2YR6	-	-	-	-	-	黄褐色	8	89
14	SK3	中国陶磁器	白磁碗				2.5YR7/2YR6	16.0	-	-	1.1	-	大平肩分型白磁碗 YR6	8	89
16	SK4	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ			2.5YR6/2.5 →黄	15.0	-	-	1.5	-		8	89
17	SK4	中国陶磁器	青白磁碗	内外面刷毛ナシ	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	17.0	-	-	1.0	2.9		8	87
18	SK4	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	-	-	-	0.5	-	黄褐色	9	89
19	SK4	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	12.0	-	-	1.3	-	黄褐色	9	89
20	SK5	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ			2.5YR6/2.5 →黄	15.0	-	-	1.5	-		9	89
22	SK6	中国陶磁器	白磁碗				2.5YR6/2YR6	10.0	-	-	3	-	大平肩分型白磁碗 YR6	9	89
23	SK8	中国陶磁器	白磁碗				2.5Y7/2YR6	16.0	-	-	0.8	-	大平肩分型白磁碗 YR6	9	89
24	SK6	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	21.0	-	-	1.3	-	黄褐色	9	89
26	SK7	土器(木 の下の)	中国陶磁器	白磁碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	17.0	-	-	0.8	-	大平肩分型白磁碗 YR6(黄)	9	89
27	SK7	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ			2.5YR6/2YR6	-	-	-	0.3	-	黄褐色	9	89
28	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	-	-	-	0.7	-	黄褐色	9	89
29	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	11.0	-	-	0.6	-	黄褐色	9	89
30	SK7	中国陶磁器	白磁碗				2.5YR6/2YR6	15.0	-	-	2	-		9	89
31	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5Y6/2YR6	12.0	-	-	1.5	-	黄褐色	9	89
32	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	19.0	-	-	1.8	-	黄褐色	10	88
33	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	1.4	-	黄褐色	10	88
34	SK7	土器(木 の下の)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5Y7/2YR6	-	-	-	2.0	-	黄褐色	10	88
35	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2YR6	-	-	-	-	-	黄褐色	10	88
36	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	0.8	-	黄褐色	10	88
37	SK7	土器(木 の下の)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	14.0	-	-	1.2	-	黄褐色	10	88
38	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	-	-	黄褐色	10	88
39	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	-	-	黄褐色	10	88
40	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	-	-	黄褐色	10	88
41	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	-	-	黄褐色	10	88
42	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	-	-	黄褐色	10	88
43	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	-	-	黄褐色	10	88
44	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	-	-	黄褐色	10	88
45	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	-	-	黄褐色	10	88
46	SK7	土器(土 層の上)	白磁系陶器	碗	内外面刷毛ナシ		2.5YR6/2.5 →黄	-	-	-	-	-	黄褐色	10	88

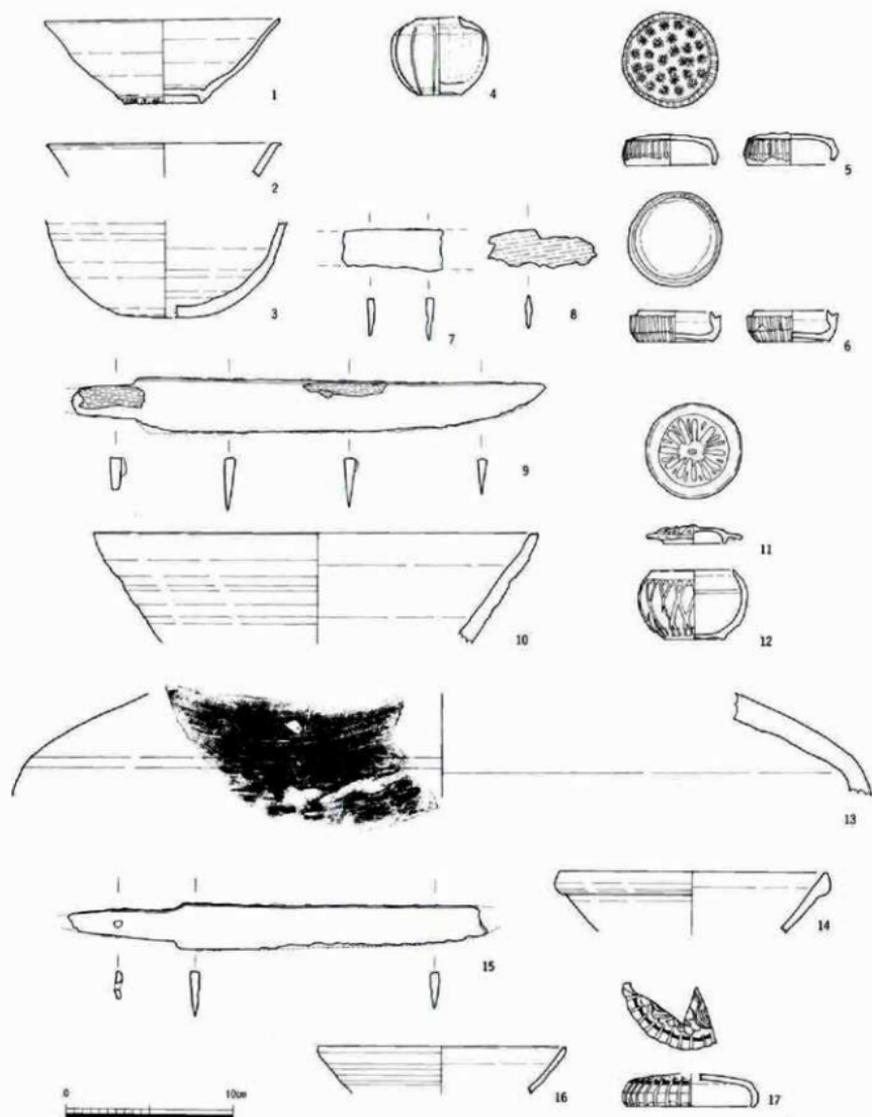


図8 SX1~SX4出土遺物 (S=1/3)

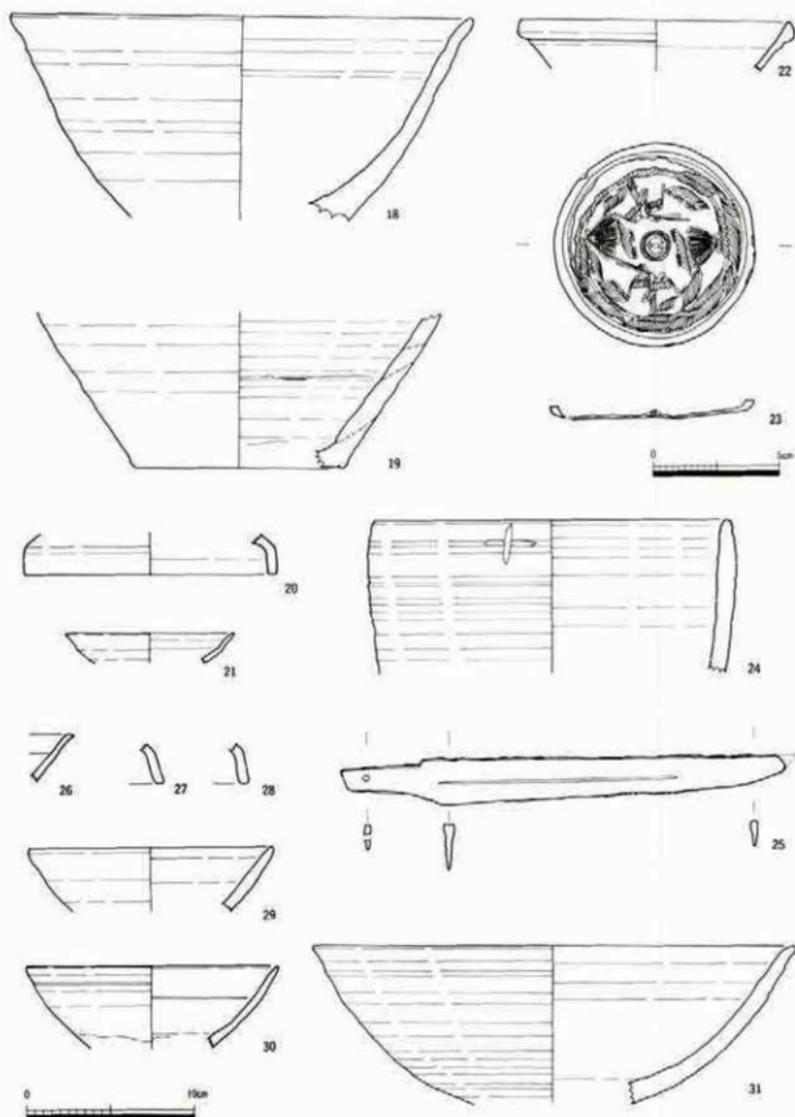


図9 SX4~SX7出土遺物 (S=1/3、23はS=1/2)

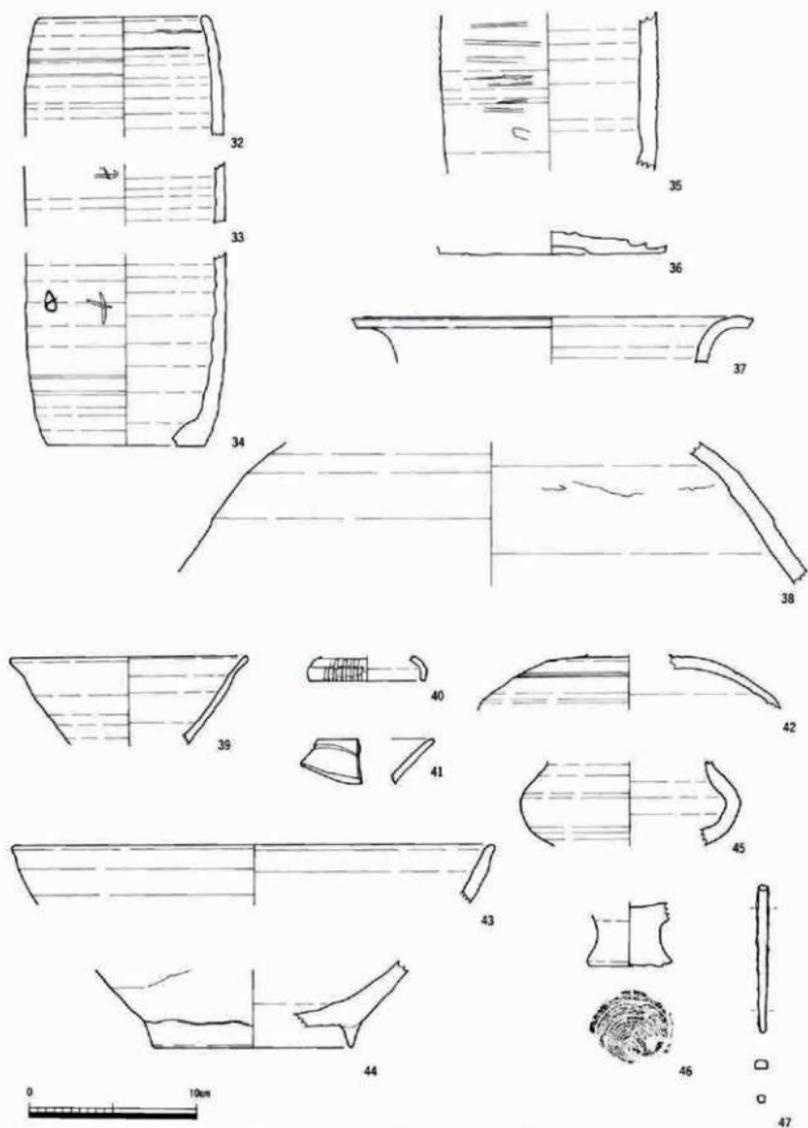


图10 SX7·包含層出土遺物 (S=1/3)

第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

山形秀樹 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

洞雲戸遺跡より検出された炭化材の加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、SX 3 から出土した炭化材 (アカガシ亜属) 1 点である。試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

表 8 に、試料の同位体分別効果の補正值 (基準値 -25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値 (yrBP) の算出は、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が 68% であることを意味する。

表 8 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{perm}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-1827 (AMS)	炭化材 (アカガシ亜属) 02HU SX 3	-26.3	1005 \pm 30	cal AD 1020	cal AD 995-1035 (100%)

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5,730 \pm 40 年) を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の編状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正

曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に校正した年代を算出する。 ^{14}C 年代を暦年代に校正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代校正値は ^{14}C 年代値に対応する校正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に影付け部分で示した。

4. 考察

試料は、同位体分別効果の補正および暦年代校正を行なった。暦年代校正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、SX3から出土した炭化材(アカガシ亜属)の年代は cal AD 995-1035年が、より確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代、p. 3-20。

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p. 215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.

第2節 合子 (SX4出土) 内側付着漆質物の顕微赤外分光分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

洞雲戸遺跡の調査では、12世紀末～13世紀初頭の経塚と思われる遺構から合子が出土した。この合子の内側には、茶褐色の漆質物が残存していた(図11)。ここでは、この漆質物について顕微赤外分光分析を行い、漆の可能性について検討した。

2. 試料と方法

試料は、手術用メスなどを用いて1mm角程度の試料片を薄く採取した。採取した試料片は、厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光株式会社 FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

3. 結果

図12に、試料(太線)と生漆の赤外吸収スペクトルを合わせて示した。なお、縦軸は透過率(%T: Transmittance)、横軸が波数(Wavenumber (cm⁻¹);カイザー)である。

試料の吸収スペクトルに示した数字は、赤外吸収の位置を示す。

4. 考察

漆を同定する場合、漆の成分すなわち赤外吸収位置がより多くの位置において一致することが同定のポイントとなる。合子内面に付着していた漆質物は、生漆の赤外吸収位置がほぼ一致していたことから漆と同定される。

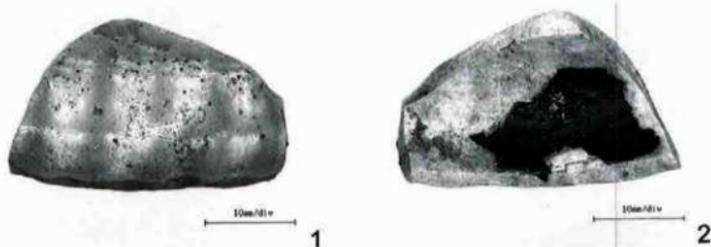
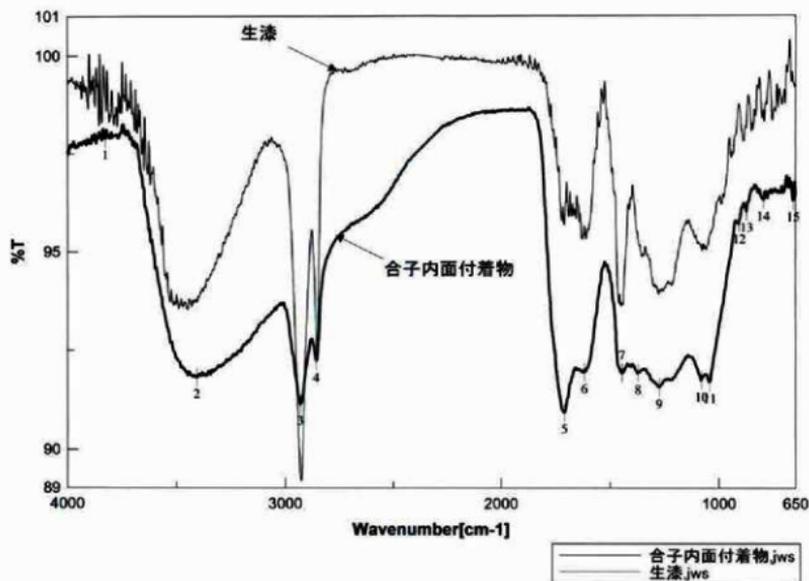


図11 出土した合子の顕微鏡写真

1. 合子の外側 2. 合子の内側付着物



ピーク検出結果

No.	位置	強度	No.	位置	強度	No.	位置	強度
1:	3827.04	87.0324	2:	3407.60	61.8010	3:	2932.23	58.9698
4:	2858.95	63.5053	5:	1709.59	58.0849	6:	1617.98	62.3148
7:	1445.39	62.2593	8:	1372.10	62.1988	9:	1274.72	60.7425
10:	1081.87	61.4646	11:	1044.26	61.2696	12:	909.27	78.0678
13:	874.56	79.3026	14:	797.42	80.4969	15:	660.50	80.4135

図12 付着物と生漆の赤外吸収スペクトル（縦軸は透過率%T、横軸は波数 cm^{-1} ）と赤外吸収の波数および強度

第3節 出土炭化材樹種

植田弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

ここでは、12世紀末から13世紀初頭の経塚 SX 1・2・3・4 から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

経塚の炭化材がどのような経緯で炭化し埋積したかは不明であるが、今後この経緯を解明する基礎資料として、樹種を明らかにしておく必要がある。

2. 試料と方法

炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大した材組織の観察をもとに同定した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

同定結果の一覧を、表9に示した。SX 1の微破片は、マツ属複維管束亜属であった。SX 2・3・4から採取された炭化材は、すべてアカガシ亜属であり、比較的大きな材破片であった。

マツ属複維管束亜属は針葉樹で、アカガシ亜属は広葉樹であるが、共に常緑樹である点は共通している。神事や仏事には栄木として常緑樹種を供えることが多い。炭化材はそのような意図的に選択された樹種であったかどうかは、経塚における炭化材樹種調査がなされた事例はほとんど知られていないので判らない。

材組織記載

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図13 1a-1c (SX 1)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材である。分野壁孔は窓状、放射仮道管があり内壁は肥厚している。マツ属複維管束亜属のアカマツまたはクロマツである。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図13 2a-2c (SX 2)

集合放射組織を挟み、小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材である。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列と細胞幅が広く大型の集合広放射組織があり、道管との壁孔は孔口が大きく開いた櫛状・交互状である。

表9 出土炭化材樹種

経塚遺構	樹種	備考(最大破片の断面形状など)
SX1	マツ属複雑維管束亜属	微破片 石組内 小壺出土地点付近
SX2	アカガシ亜属	直径6.0cm破片など大きな炭化材多数
SX3	アカガシ亜属	6.0×3.0cm破片など年代測定 PLD-1827
SX4	アカガシ亜属	2.0×2.5cmなど

放射方向×接線方向

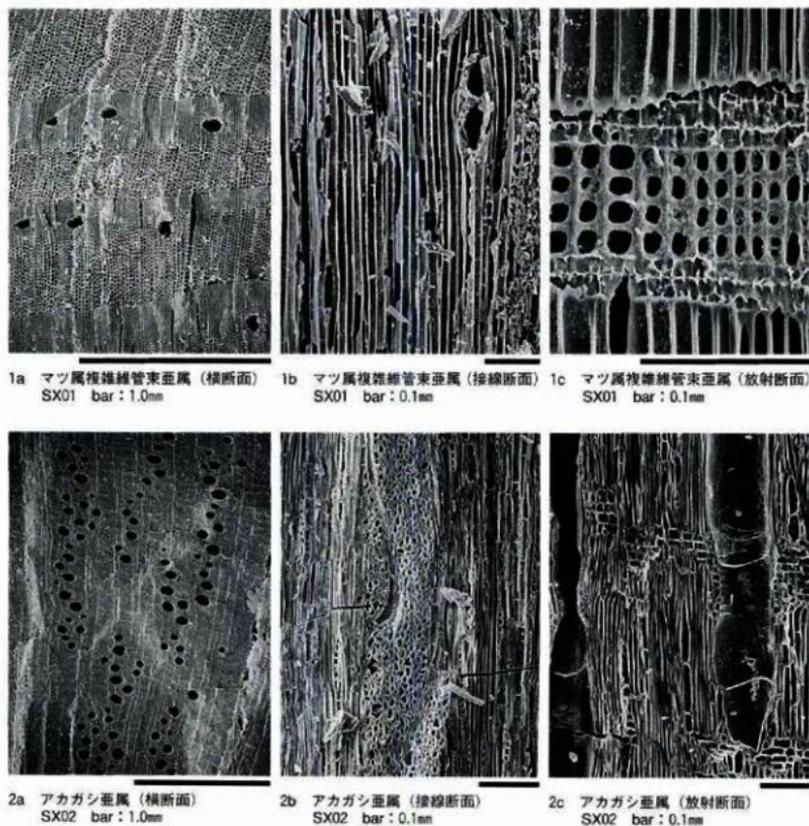


図13 洞雲戸遺跡経塚出土炭化材樹種

第6章 まとめ

関市下有知の東部には、中世において白山信仰の拠点であった神光寺と白山神社がある。この白山神社は、小高い山の中腹にあり、山頂に奥院をもつと伝えられている。この奥院は、白山を遠く拝む場所として作られたと考えられるが、残念ながら山頂から白山は見えない。ただ、山頂に立ち北を望めば、松鞍山が美しく見える。この松鞍山の頂には、神光寺の由緒書と同様に「養老3年(719)僧泰澄によって創建」と伝えられる社が鎮座する。

洞雲戸遺跡は、神光寺裏山の山頂部を中心として西斜面に展開する。遺跡の時期は、大きくわけて2時期が考えられる。それは、SX1～SX7が営まれた時期(Ⅰ期)とSH1及び石列、SP5～SP7が営まれた時期(Ⅱ期)である。まず、祭祀関連の遺構7基が作られ、やがて、それらが崩壊、あるいは破壊された後、西斜面において一部削平して整地してSH1、及びSP5～SP7が造られたと考える。

Ⅰ期は、SX1～SX7の遺物からすると12C末～13C前半と考えられる。7基の祭祀遺構があるが、SX6とSX7は、経筒片や経筒外容器片等が出土しており、教典そのものはみつからないが経塚と見てよいであろう。SX1～SX5は、まとまった遺物が出土しておらず、それ単独においては祭祀遺構としかいえない。しかし、SX1～SX7は山頂から神光寺側の西斜面にかけて連続して作られていること、いずれも岩盤への掘り込みで石室を作っていること(SX2を除く)、出土遺物が、青白磁合子、白磁片、小刀、和鏡、経筒、経筒外容器の破片というように、経塚を思わせる遺物のいずれかが出土していることなど、総合的に考えると、いずれも経塚であると思われる。

それぞれの遺構の残存状況は違いますが、SX4、SX5は掘り込みが浅く、最も急斜面に造られたことから最初に崩壊したと考えられる。SX1、SX7は、崩壊あるいは経筒等の抜き取りなどによって上部遺構が破壊されたものの、下部においては遺物が多く出土した。SX2、SX3は、表土を取り除いた時点で川原石の集積が明瞭に確認できことから、破壊の程度は最も小さかったと思われる。いずれも中央部に向けて石が落ち込んだような様相を呈しており、内部に埋納したものが土匠によって陥没したこともあったと思うが、それより中央部にあった物が埋納してさほどたない時期に抜き取られた可能性が強いと考えられる。

これらの遺構の作られた時期は、神光寺が創建されて間もなくの頃だと思われるが、両者の関係については、それを示す文献等もなく不明である。ただ、西部下有知地区には、古代から中世にかけて集落が広がっていたと考えられ、人々はその集落の周縁部にあたる小高い山を聖地として定めたと考えられる。もともとこの地は、山頂部には信仰の対象になるような巨岩があり、南斜面には古墳が数基あるなど、古くから聖地として見られていた地だけに、その後もずっとこの地域の聖地として生き続けていたように思える。

Ⅱ期については、時期が明確にわかる出土遺物がなく不明な点が多いが、神光寺は慶長元年(1596)に高野山南谷増福院の真栄が再興するまでのしばらくは衰えていたこと、調査した山頂部付近で近世の遺物が1点も出土していないこと、さらにSH1を含む周辺遺構は、白山神社の奥院との関連が想定できることなどから、白山信仰が広がりを見せた14～15C頃と考えられる。Ⅱ期の遺構は、西斜面

を中心として展開しているが、それらは地表面、あるいは岩盤まで削平して盛土をして造成したものである。つまり削平地①は、SX 6の上部を除去し、岩盤上面を削って平坦地とし、その後、土を入れて整地してSH 1が建てられたと考えられる。このSH 1とSP 6、SP 7の関係は、軸がそろっていないため判然としませんが、SP 6、SP 7は、石列とは軸も揃うことから考えると、下から奥院への参道に立てられた島居などの柱穴の可能性もある。

これらの遺構とともに、SX 1～SX 7の上部が崩壊、あるいは削平された後の重要なものとして、山頂部のSX 7上部の炭化物層がある。これは、火を焚いた跡と考えられ、宗教的な行為の跡のようであるが、他の遺構との関連性は明らかにできなかった。

II期は、神光寺、あるいは白山神社方面からの参道、及び奥院が整備された時期で、白山信仰とのかわりが強かった時期ではないかと考えられる。

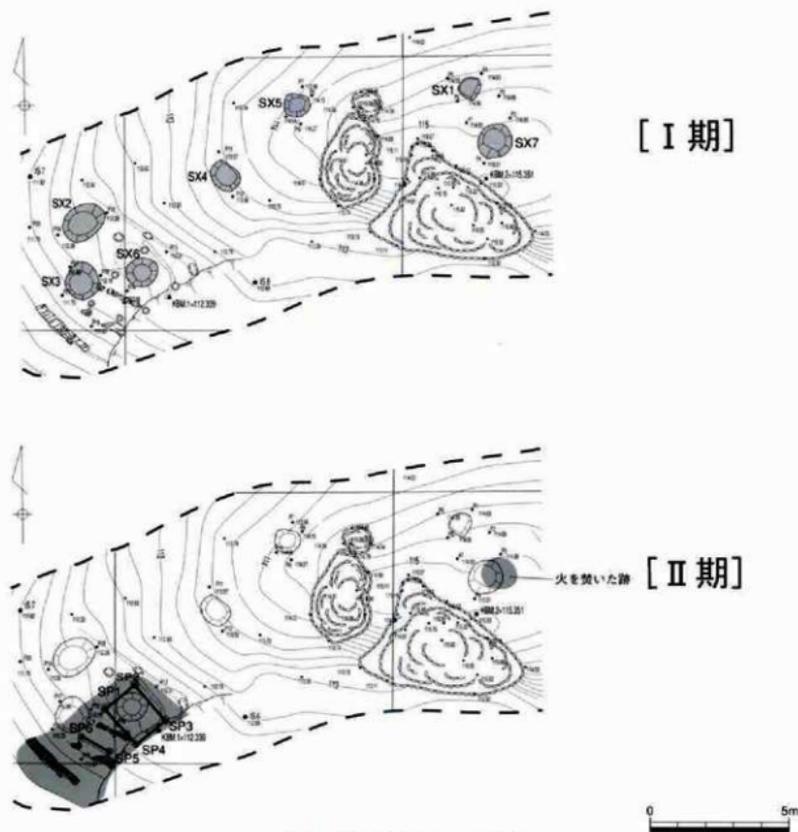


図14 遺構の変遷 (S = 1/180)

写真図版



重竹遺跡調査前全景



重竹遺跡周辺米軍撮影写真（昭和23年当時）（上が北）



A区遺構配置 (上が北)



B区遺構配置 (上が北)



C区遺構配置 (上が北)



D区遺構配置 1 (東調査区・中央調査区) (上が東)



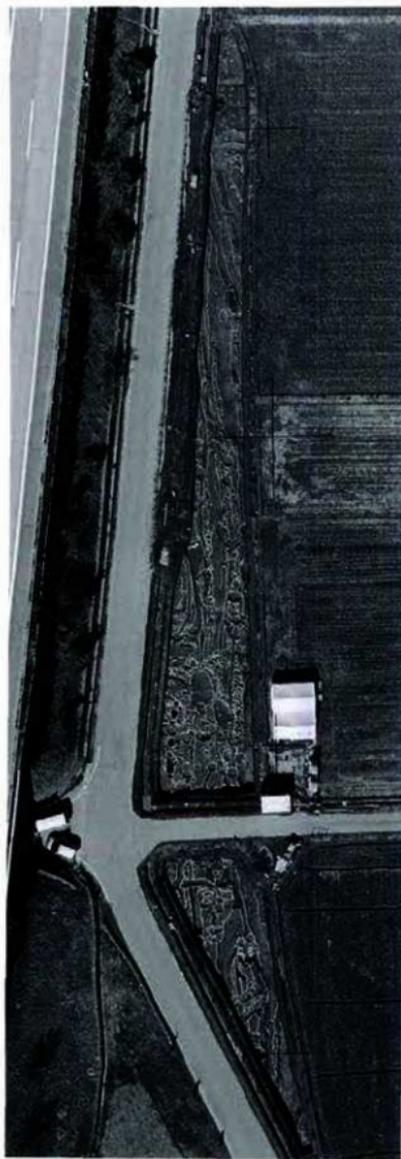
D区遺構配置 2 (西調査区) (上が北)



E区遺構配置（上が北）



F区遺構配置（上が北）



G区(VI・VII層上面)・H区北調査区遺構配置(上が北)



H区南調査区・I区遺構配置図(上が北)



SH1 (南から)



B区掘跡区画内遺構 (西から)



B523 (SH12 柱穴) 層位 (南から)



B749 (SH14 柱穴) 完掘状況 (南から)



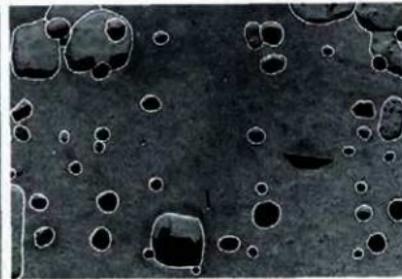
SH22・23 (南から)



SH26 (北東から)



SH31 (上が北)



SH34・SH35 (上が北)



SH33 (東から)



SH38 (南から)



SH39 (西から)



SH47・48 (西から)



SH53 (東から)



SH54 (西から)



SH55 (南から)



SH59・60 (北から)



F区ピット列とSH52 (上が北)



G区ピット列 (上が北)



B区土壁下部遺構完掘状況 (南から)



B387 (南北の堀跡) 遺物出土状況



B413 (東西の堀跡) 完掘状況



B413 (東西の堀跡) 層位



C71 (東西の堀跡)、C72 土壘完堀状況



C71 (東西の堀跡) 層位



C72 (土壘) 盛土の状況



C72 (土壘) 盛土断ち割り



C72 (土壘) 下面遺構



E500 (鍛冶関連遺構) 完堀状況 (南から)



E830 (鍛冶関連遺構) SK1 レキ検出、炭化物検出状況 (南から)



E830 (鍛冶関連遺構) SK1 炭化物検出状況 (南から)



E830 (鍛冶関連遺構) SK2 完堀状況 (南から)



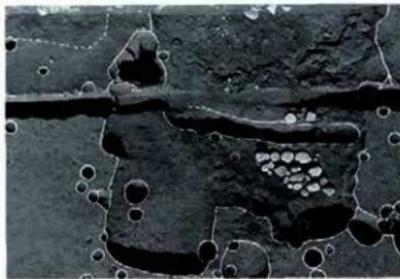
E830 (鍛冶関連遺構) 完堀状況 (上が北)



E831 (鍛冶関連遺構) レキ検出状況 (南から)



E831 (鍛冶関連遺構) 完堀状況 (南から)



E831・E780・E835 (鍛冶関連遺構) 完堀状況 (上が北)



E780 (鍛冶間連遺構) レキ検出状況 (北から)



E780 (鍛冶間連遺構) 荒磁検出状況 (東から)



E780 (鍛冶間連遺構) 河原石散き施設検出状況 (南から)



E780 (鍛冶間連遺構) の被熱部分 (西から)



E835 (鍛冶間連遺構) 砂利散き検出状況 (南から)



E835 (鍛冶間連遺構) 粘土塊検出状況 (南から)



E747 (鍛冶間連遺構) SK1検出状況 (西から)



E747 (鍛冶間連遺構) 完壁状況 (上が北)



A3 (大型土坑) 完掘状況 (南から)



A4 (大型土坑) 完掘状況



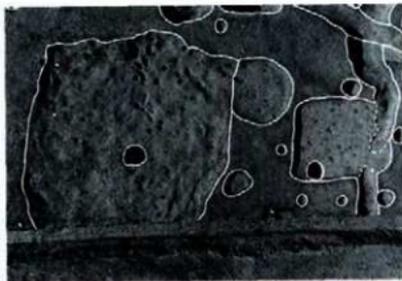
B132 (大型土坑) 完掘状況 (西から)



B542 (大型土坑) 完掘状況 (北から)



C120 (大型土坑) 完掘状況 (北から)



E100・E245 (大型土坑) 完掘状況 (上が西)



F568 (大型土坑) 完掘状況



F60 (大型土坑) 完掘状況



G605・G644・G645 (大型土坑) 完掘状況 (上が西)



G635 (竪穴建物) 完掘状況 (上が西)



G635 (竪穴建物) 焼土検出状況 (西から)



H100 (大型土坑) レキ検出状況 (北から)



H318 (大型土坑) 完掘状況 (北東から)



14 (大型土坑) レキ検出状況 (北から)



I308 (大型土坑) 完掘状況 (南から)



I250 (大型土坑) レキ検出状況 (南から)



遺物埋納遺構遺物検出状況 1 (西から)



遺物埋納遺構遺物検出状況 2 (西から)



遺物埋納遺構遺物検出状況 3 (西から)



遺物埋納遺構完備状況 (西から)



A100 (井戸跡) 検出状況 (西から)



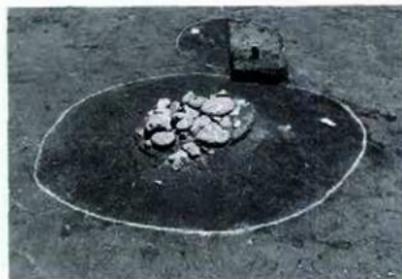
A100 (井戸跡) 断ち割りの状況 (西から)



B725 (井戸跡) 検出状況 (南から)



B725 (井戸跡) 断ち割りの状況 (南から)



B639 (井戸跡) 検出状況 (北から)



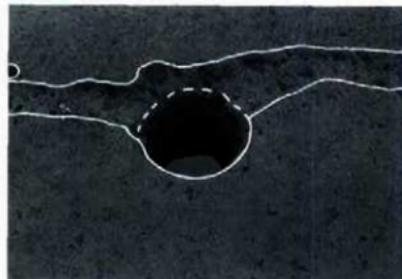
B639 (井戸跡) 埋土堆積状況 (北から)



D6 (井戸跡) レキ検出状況 (南から)



D6 (井戸跡) 完掘状況 (南から)



D186 (井戸跡) 完掘状況 (南から)



D100 (井戸跡) 断ち割りの状況 (東から)



D460 (井戸跡) 堆積状況 (南から)



D460 (井戸跡) 完掘状況 (北から)



C132 (地下式坑) 完掘状況 (上が北)



C132 (地下式坑) 壁面の工具匱 (南から)



C132 (地下式坑) 堆積状況 (東から)



C132 (地下式坑) 入り口のレキ検出状況 (南から)



H355 (地下式坑) 堆積状況 (東から)



H355 (地下式坑) 完掘状況 (南から)



B区 道路状遺構 (上が北)



B113 (波板状遺構) 検出状況 (南から)



波板状遺構断面 (北から)



H15 (特殊土坑) 完掘状況 (北から)



H108 (特殊土坑) 検出状況 (北から)



H108 (特殊土坑) 石積の様子 (あるいは完掘) (北から)



H137 (特殊土坑) 完掘状況 (北から)



H302 (特殊土坑) 埋土堆積状況 (東から)



H302 (特殊土坑) 完掘状況 (南から)



H398 (特殊土坑) 埋土堆積状況 (南から)



H398 (特殊土坑) 完掘状況 (南から)



A390 (不明遺構) 完掘状況 (南から)



A390 (不明遺構) 横木検出状況 (南から)



B114 (不明遺構) 完掘状況 (上が北)



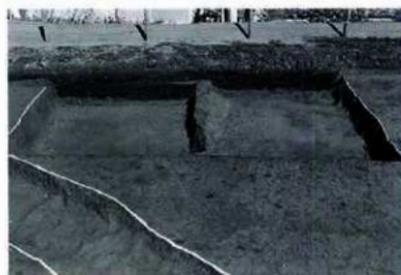
B114 (不明遺構) 遺物出土状況 (北から)



D115 (不明遺構) 完掘状況 (東から)



D110 (不明遺構) 埋土堆積状況 (南西から)



D110 (不明遺構) 完掘状況 (西から)



A1(溝跡)、A390(不明遺構)埋土堆積状況(南東から)



A2 (溝跡) 構内配石遺構検出状況 (南から)



A380 (溝跡) 池状部分完掘状況 (南から)



A435 (溝跡) 埋土堆積状況 (南から)



B139・B140 (溝跡) レキ検出状況 (南から)



B134 (溝跡) 土師器皿出土状況 (東から)



B134・B141 (溝跡) 埋土堆積状況 (南から)



B262 (溝跡) 遺物出土状況 (東から)



B743 (溝跡) と掘立柱建物跡完掘状況 (西から)



C123・C215 (溝跡) 完掘状況 (北から)



C123・C215 (溝跡) 西側の硬化層 (北西から)



C123・C215 (溝跡) 底面の工具痕 (東から)



C55 (溝跡) 埋土堆積状況 (東から)



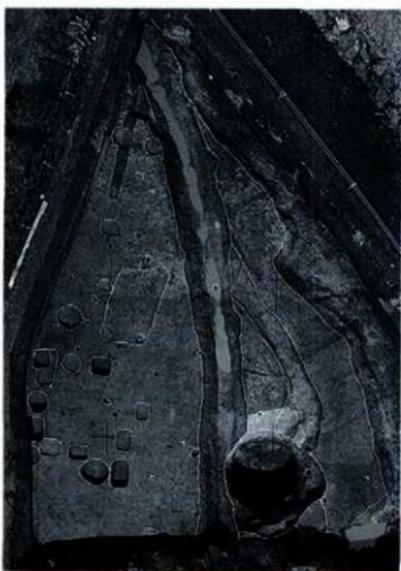
C56 (溝跡) 埋土堆積状況 (北から)



D4 (溝跡) レキ検出状況 (北東から)



D410 (溝跡) 埋土堆積状況 (南から)



D410 (溝跡) 完堀状況 (上が北)



F732 (溝跡) 埋土堆積状況 (東から)



F848 (溝跡) 埋土堆積状況 (南から)



F368・F369 (溝跡) 埋土堆積状況 (南から)



F210・F281・F301・F293(溝跡) 完堀状況 (東から)



G39・40 (溝跡) 埋土堆積状況 (西から)



G831 周辺溝完堀状況 (上が西)



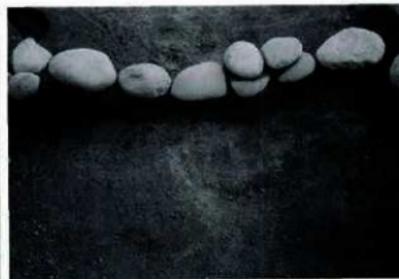
G831(溝跡) 土坑状部分完堀状況(レキ検出)(南から)



H1・H4・H5 (溝跡) 埋土堆積状況 (西から)



H1 (溝跡) 狛犬脚部出土状況 (北東から)



H1 (溝跡) 飛び石状遺構検出状況 (南から)



I 260 (溝跡) 完壁状況 (南から)



I 260 (溝跡) レキ堆積状況 (南から)



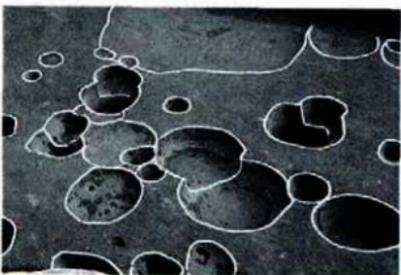
I 275 (溝跡) レキ堆積状況 (南から)



I 715 (溝跡) 埋土堆積状況 (東から)



I 275 (溝跡) レキ検出状況 (南から)



B 区北調査区 CC 6~ CD 7 グリッド周辺の土坑群 (南から)



B 456 (土坑) 遺物出土状況 (西から)



C93 (土坑) 換土検出状況 (南から)



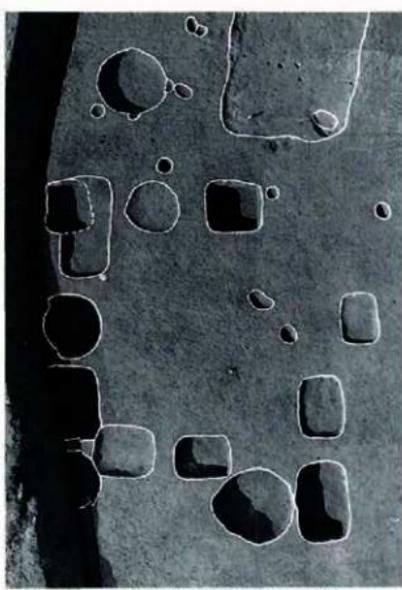
C93 (土坑) 完掘状況 (東から)



C137 (土坑) 埋土堆積状況 (西から)



C137 (土坑) 完掘状況 (西から)



D 区西調査区方形の土坑配置 (上が北)



D60 (土坑) レキ検出状況 (南から)



E 区東調査区の土坑群 (西から)



E761 (土坑) 層位 (南から)



F758 (土坑) レキ検出状況 (西から)



F693 (土坑) 炭層堆積状況 (南から)



F39 (土坑) レキ検出状況 (東から)



F39 (土坑) 完掘状況 (東から)



F242 (土坑) 遺物出土状況 (東から)



F255 (土坑) 遺物出土状況 (南から)



F243 (土坑) 配石検出状況 (南から)



G155 (土坑) レキ検出状況 (北から)



H82 (土坑) 土師器皿出土状況 (東から)



H337 (土坑) 完堀状況 (北西から)



I145 (土坑) 粘土検出状況 (西から)



I区中央調査区 二列に配置された土坑群 (上が北)



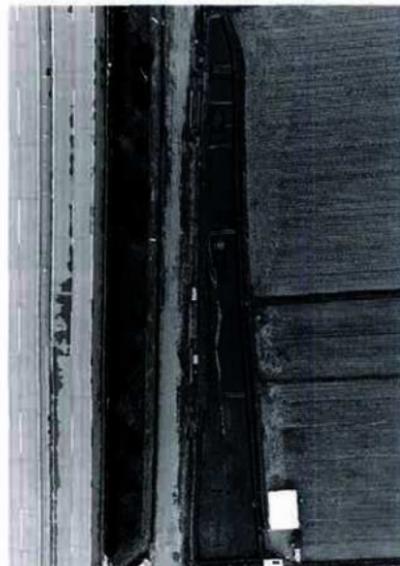
I区南調査区 集中する土坑群 (上が北)



I460 (土坑) 完掘状況・層位 (東から)



I705 (土坑) 遺物出土状況 (西から)



G区 G III 層上面遺構検出状況 (上が北)



G区 G IV b 層上面遺構検出状況 (上が北)



SL5 (集石土坑列) 検出状況 (南西から)



G1 (道路状遺構) 検出状況 (G III 層上面) (北から)



G1 (道路状遺構) 検出状況(G IV b 層上面)(東から)



G1 (道路状遺構) 断面層位 (西から)



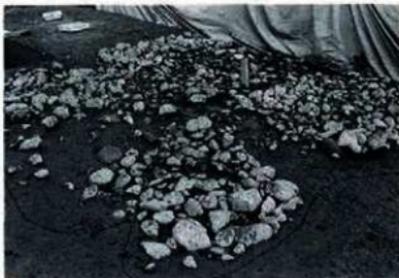
G7 (土坑) 検出状況 (西から)



G13 (不明遺構) 検出状況 (西から)



G13 (不明遺構) 遺物出土状況 (南から)



G37 (不明遺構) レキ検出状況 (南西から)



G37 (不明遺構) 遺物出土状況 (東から)



G37 (不明遺構) 完掘状況 (西から)



G39 (溝跡) レキ検出状況 (南から)



G39 (溝跡) 埋土堆積状況 (南から)



G39 (溝跡) 完掘状況 (上が北)



G38 (不明遺構) レキ検出状況 (南から)



F区竪穴住居跡群 (東から)



F4 (竪穴住居跡) 検出状況 (南から)



F4 (竪穴住居跡) 貼床面検出状況 (南から)



F4 (竪穴住居跡) 完掘状況 (南から)



F4 (竪穴住居跡) カマド断ち割り状況 (東から)



F4 (竪穴住居跡) 段状遺構 (西から)



F189 (竪穴住居跡) 完掘状況 (西から)



F284 (竪穴住居跡) 完掘状況



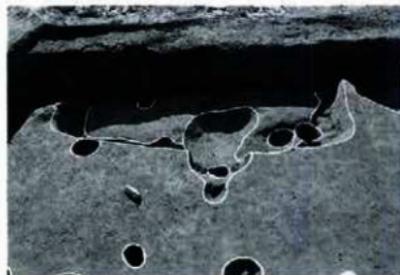
F374 (竪穴住居跡) 完掘状況 (北から)



F374 (竪穴住居跡) カマド検出状況 (南から)



F374 (竪穴住居跡) P2 遺物出土状況 (北から)



F384 (竪穴住居跡) 完壘状況 (北から)



F384 (竪穴住居跡) カマド付近遺物出土状況 (南から)



F384 (竪穴住居跡) 埋土堆積状況 (西から)



F477 (竪穴住居跡) 内遺構検出状況 (東から)



F477 (竪穴住居跡) SK 4付近焼土・遺物検出状況 (南から)



F477 (竪穴住居跡) 完壘状況 (西から)



F478 (竪穴住居跡) 完壘状況 (東から)



F529 (竪穴住居跡) 遺物出土状況 (北から)



F529 (竪穴住居跡) 完堀状況 (北から)



F575 (竪穴住居跡) 検出状況 (東から)



F575 (竪穴住居跡) 貼り床・カマド検出状況 (西から)



F575 (竪穴住居跡) 完堀状況 (東から)



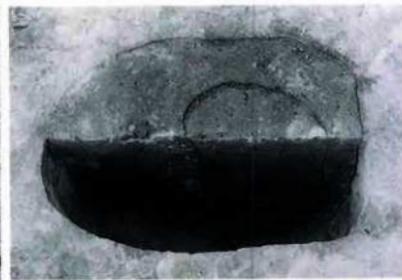
SH41・SH42 検出状況 (西から)



SH44・SH45・SH46 検出状況 (西から)



SH49 検出状況 (上が北)



F1 (SH49 柱穴) 埋土堆積状況 (南から)



SH52 検出状況 (南から)



F771 (土坑) 遺物等出土状況 (東から)



F779 (土坑) 完壺状況 (南から)



F1143 (土坑) 遺物等出土状況 (北から)



F794 (埋納ピット) 遺物出土状況 (南から)



F794 (埋納ピット) 遺物出土状況 (南から)



G868 (道路状遺構) 検出状況 (南から)



G868 (道路状遺構) 断面層位 (北から)



G41 (溝跡) 完堀状況 (南から)



G201 (溝跡) 遺物出土状況



G617 (溝跡) 埋土堆積状況



H7 (溝跡) 埋土堆積状況



H3・H4 (溝跡) 埋土堆積状況



H区北調査区溝跡完堀状況 (南から)



F区中央東調査区欵状遺構検出状況 (上が北)



D420 (溝跡) 遺物出土状況 1



D420 (溝跡) 遺物出土状況 2



D420 (溝跡) 埋土堆積状況



F区中央西調査区地山確認トレンチ層位 (南から)



F区中央西調査区地山確認トレンチ遺物出土状況 1 (南から)



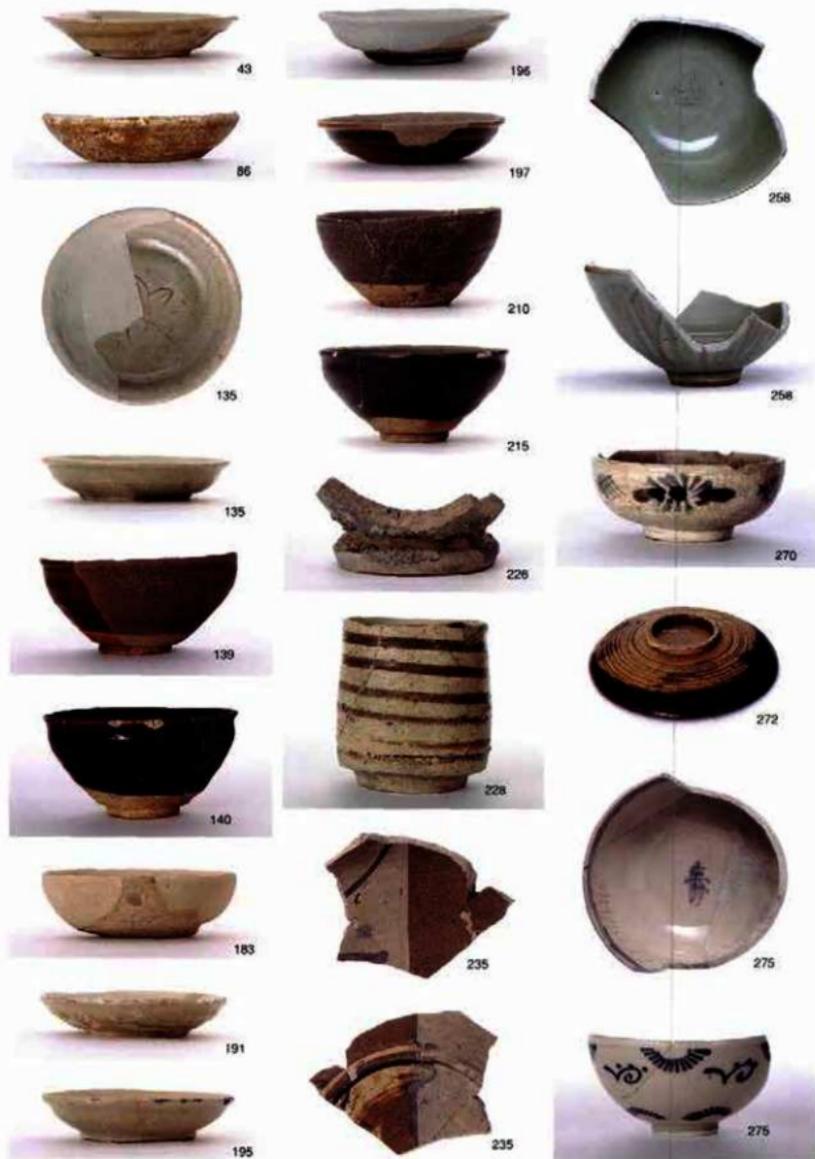
F区中央西調査区地山確認トレンチ遺物出土状況 2 (南から)



G530 (ピット) 遺物出土状況 (東から)



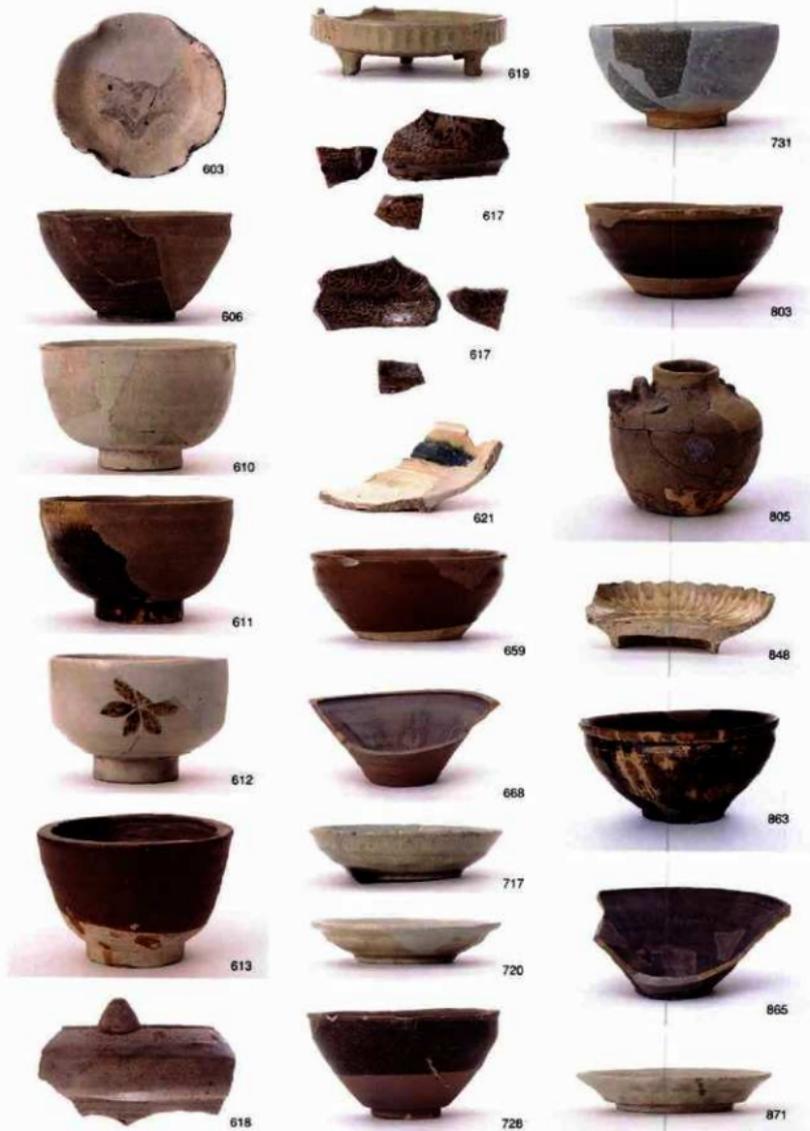
F365 (溝跡) 遺物出土状況 (南から)



中近世遺構出土遺物 (1)



中近世遺構出土遺物（2）



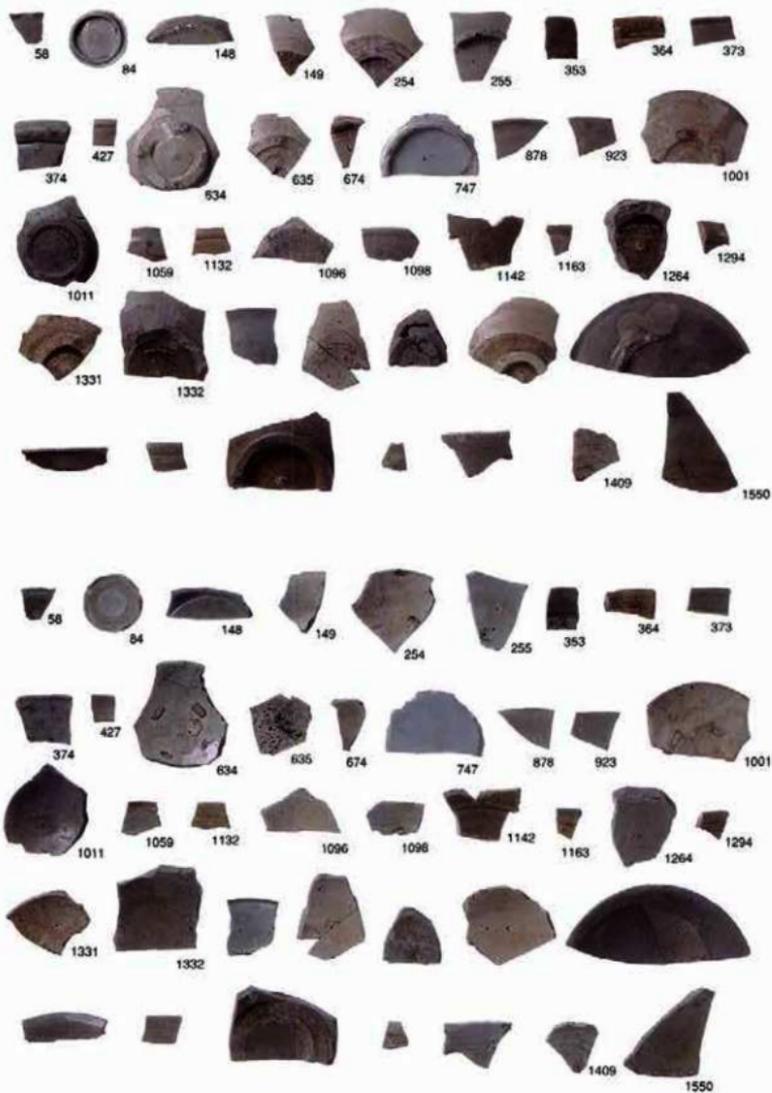
中近世遺構出土遺物 (3)

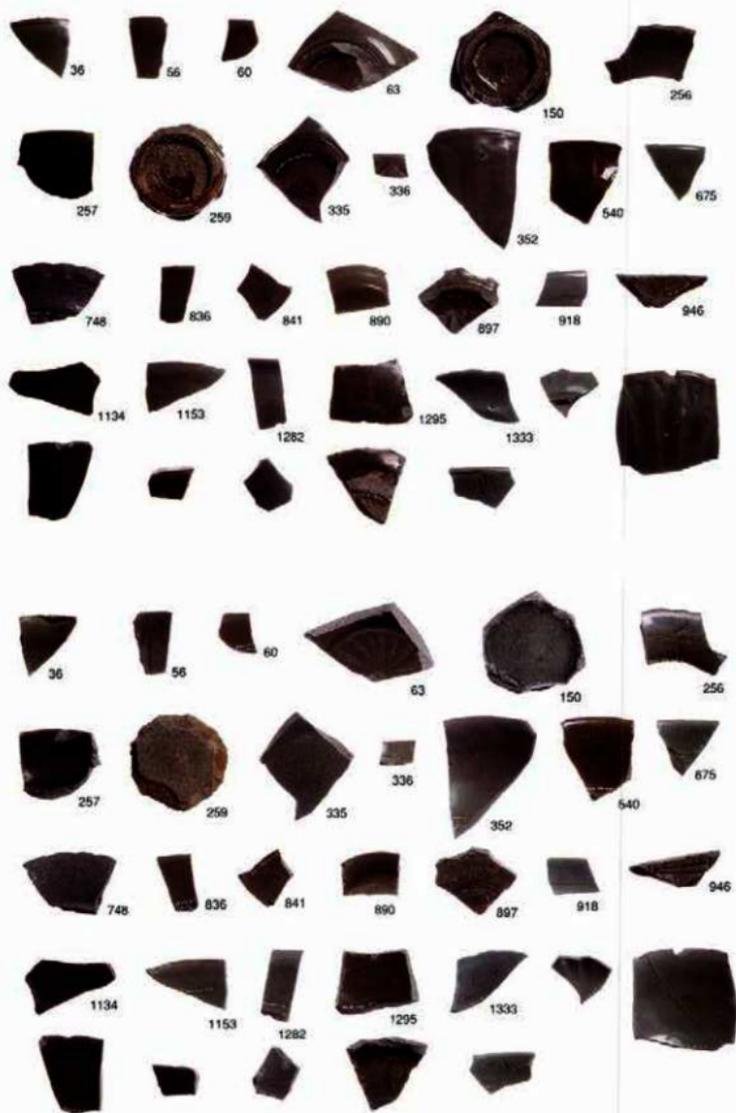


中近世遺構出土遺物（4）

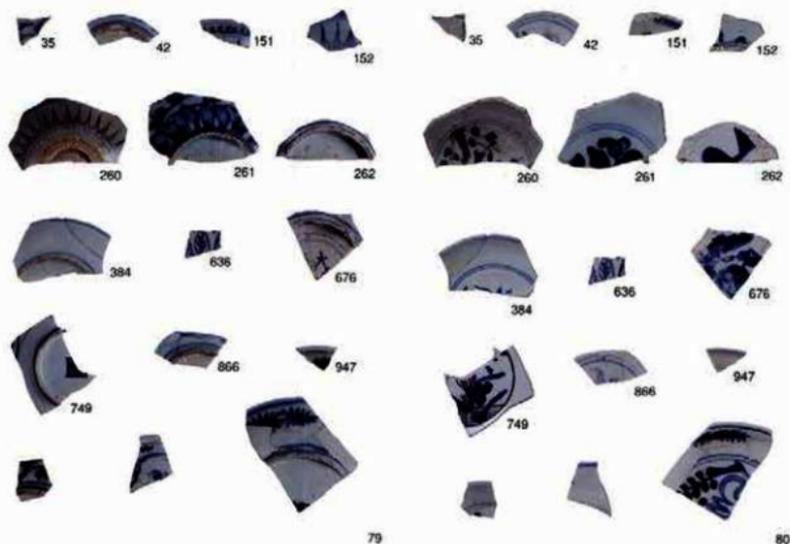


中近世遺構出土遺物 (5)





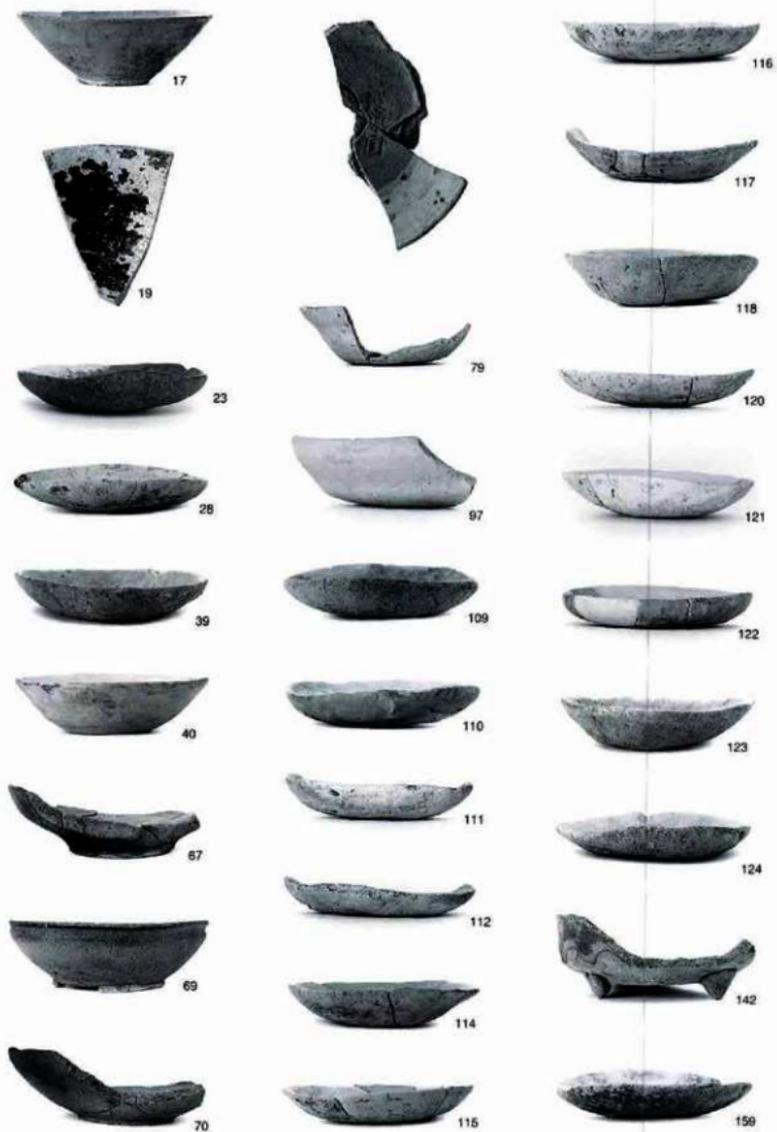
中国陶磁器 (青磁)



中国陶磁器 (染付)



砥石の紙面顕微鏡拡大写真



中近世遺構出土遺物 (6)



161



165



166



167



168



169



170



171



172



173



174



175



185



198



204



219



250



251



270



294



294



306



310



322



323



325

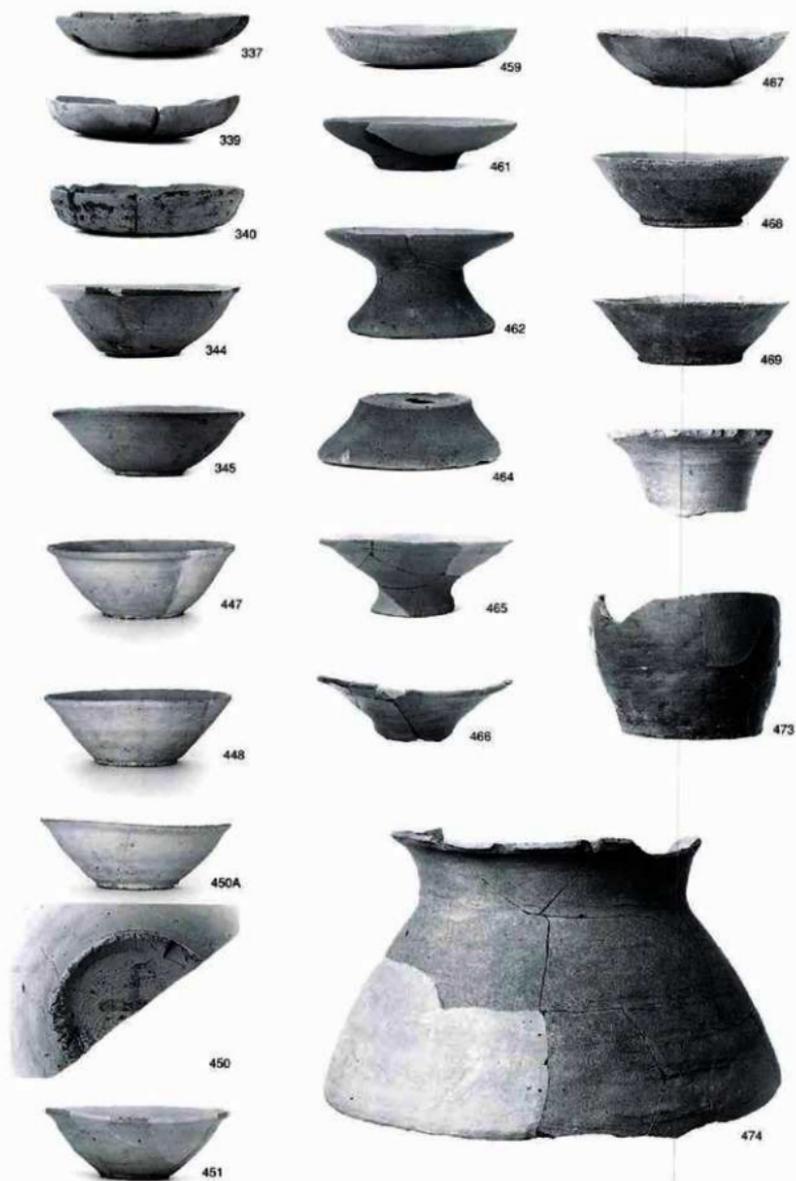


328

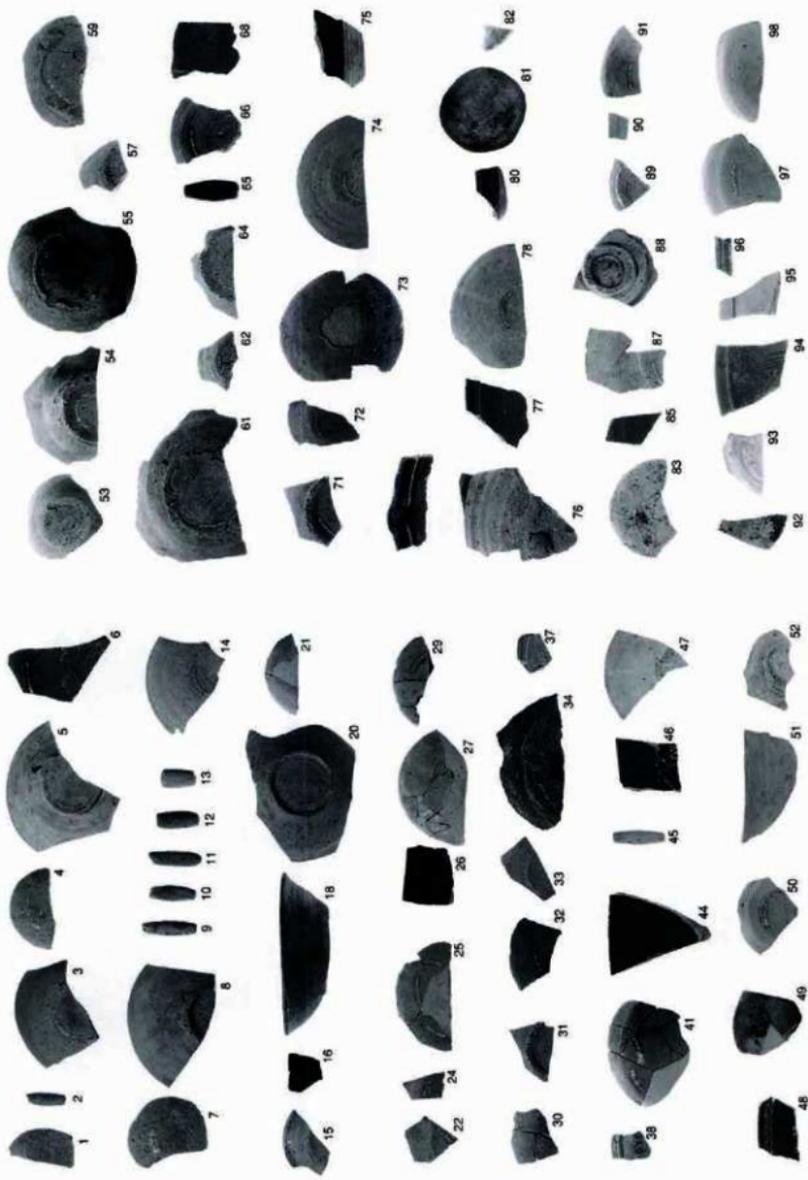


330

中近世遺構出土遺物 (7)

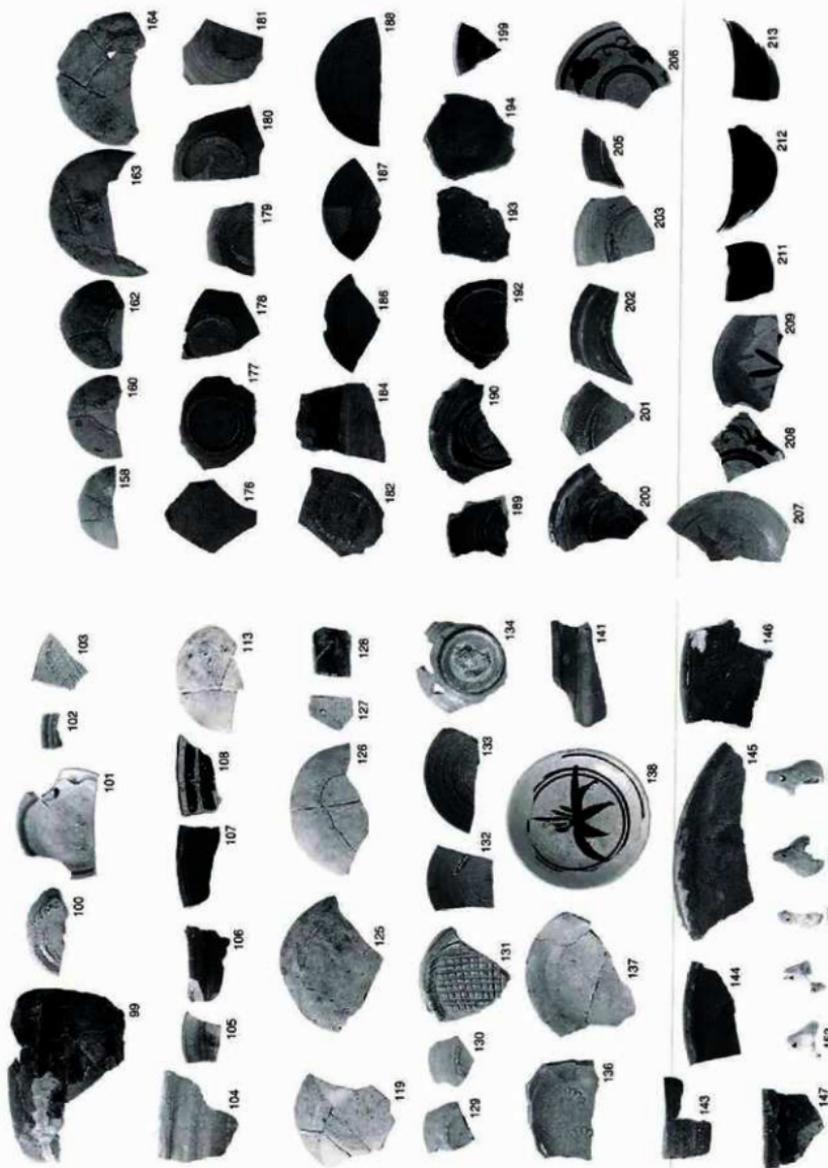


中近世遺構出土遺物 (8)



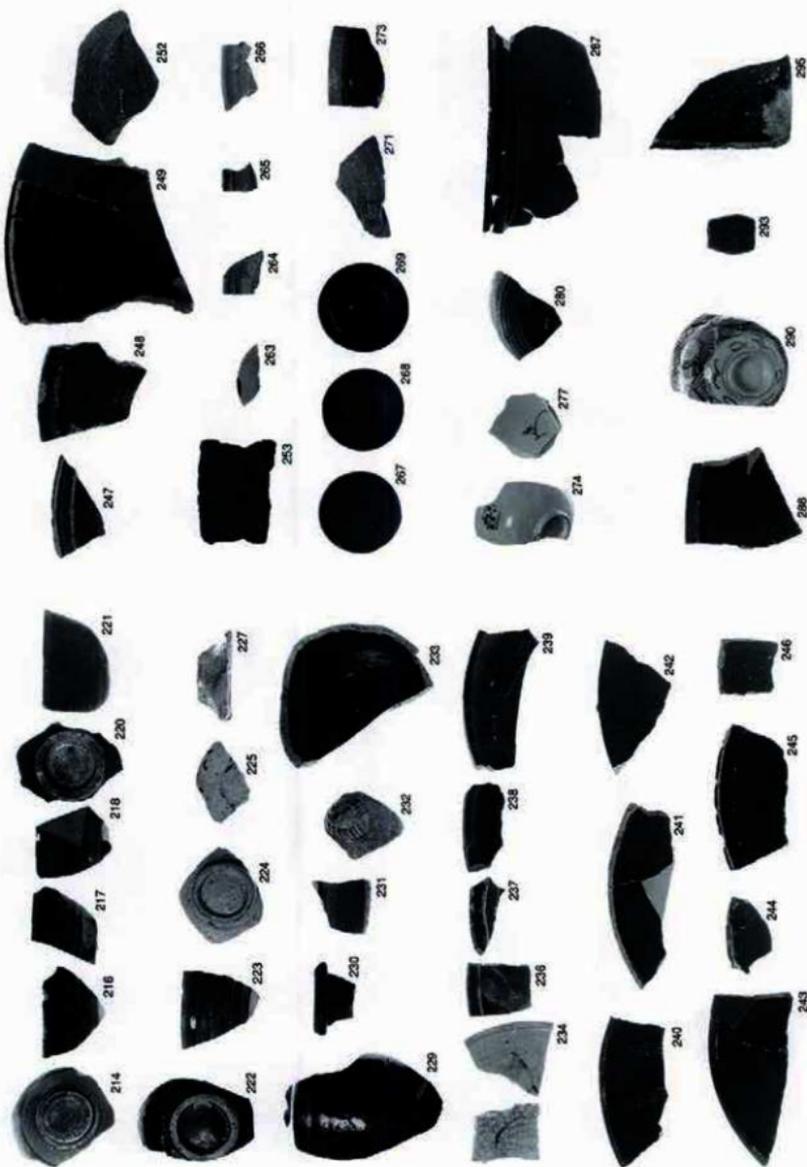
掘立柱建物跡、その他のビット出土遺物 (1)

その他のビット出土遺物 (2)



土器 (C72)、南北の埋跡 (B387) 出土遺物

東西の埋跡 (B413) 出土遺物 (1)



東西の埴輪 (B413) 出土遺物 (2)

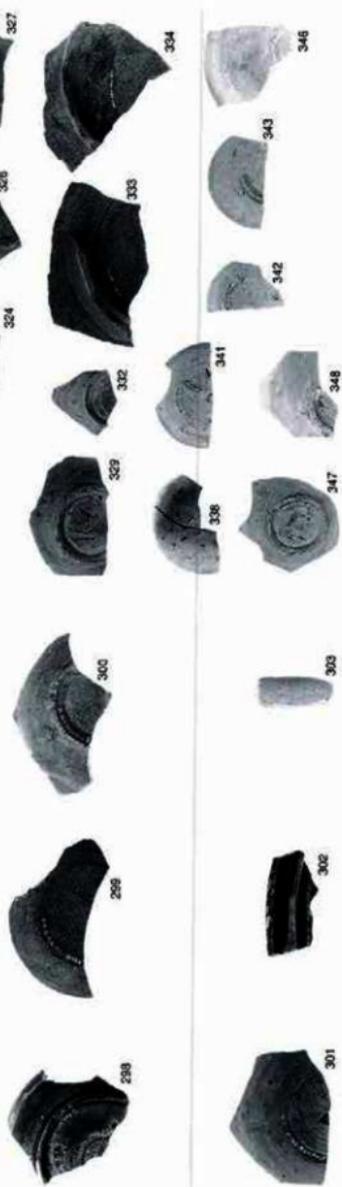
東西の埴輪 (B413, C71) 出土遺物 (3)



東西の埴跡 (C71) 出土遺物 (4)

土壁下部遺構出土遺物

銅冶間遺構出土遺物



土壁下部遺構出土遺物

銅冶間遺構出土遺物



480



483



486



514



519



524



525



526



541



543



545



546



547



559



560



561



562



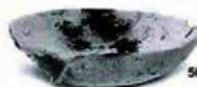
563



564



565



566



568



569



571



572



572

中近世遺構出土遺物 (9)



575



576



577



578



579



580



581



582



583



591



594



601



616



638



639



642



679



680



681



682



686



687



688



690



692

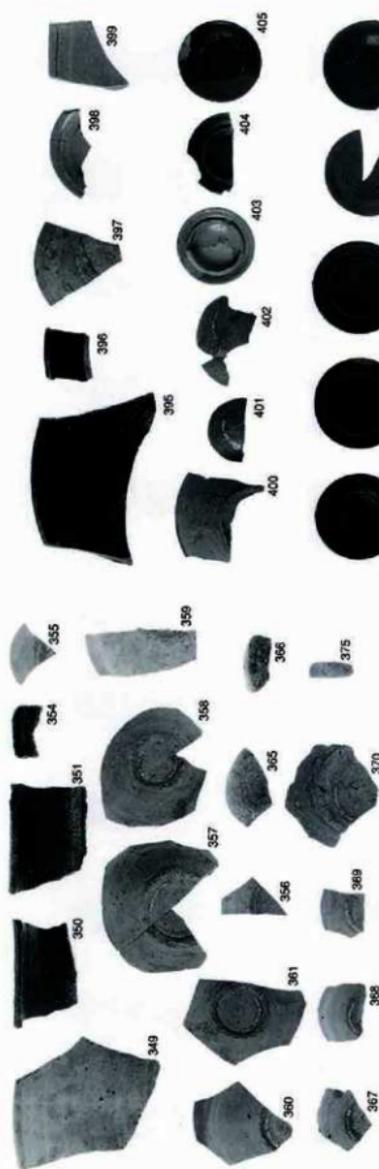


693

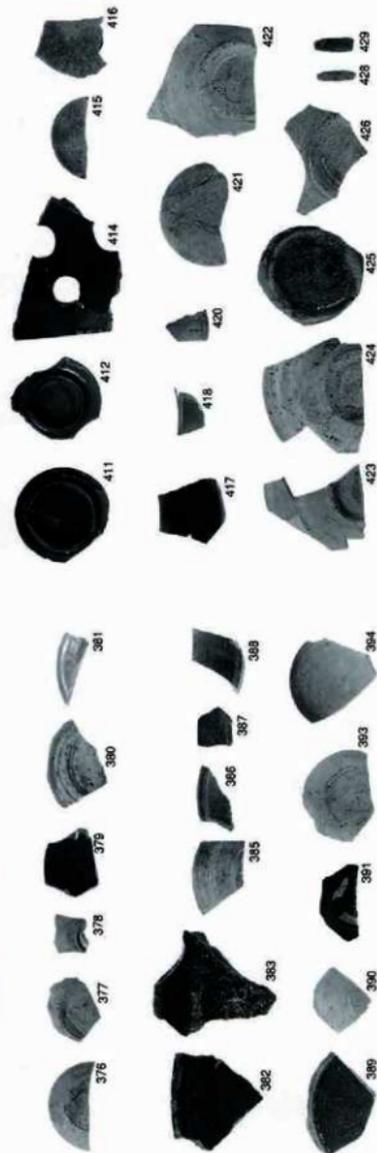


694

中近世遺構出土遺物 (10)

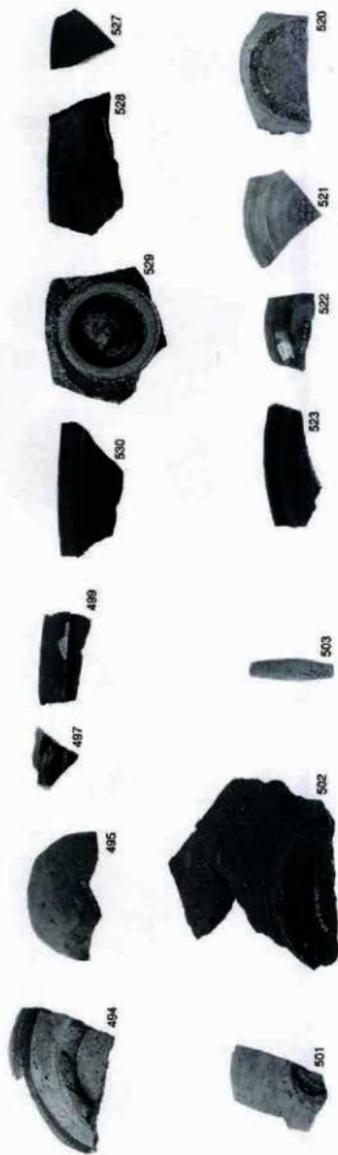


窑穴内遗物、大型土坑出土遗物 (1)



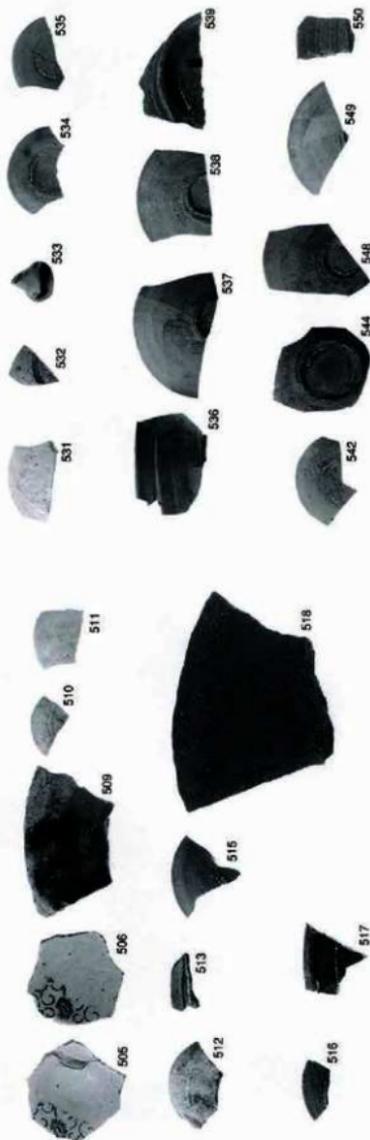
大型土坑出土遗物 (2)

大型土坑出土遗物 (3)



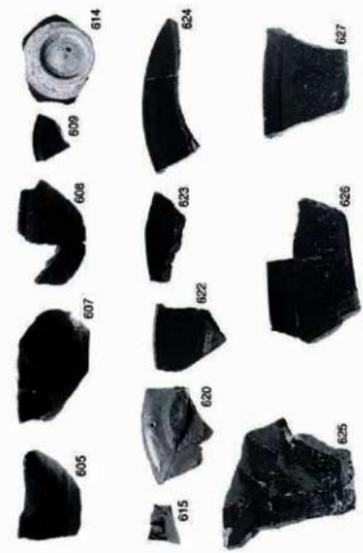
井戸跡出土遺物 (2)

道路状遺構の側溝出土遺物

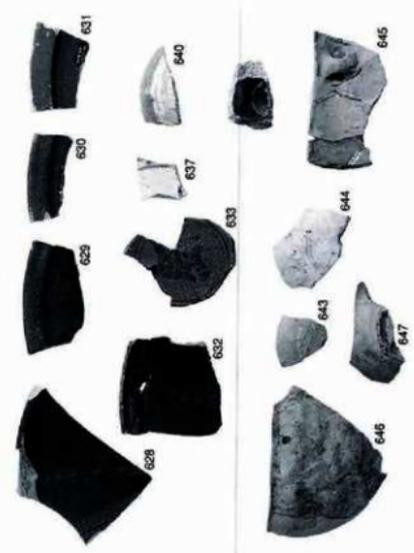


地下式坑出土遺物

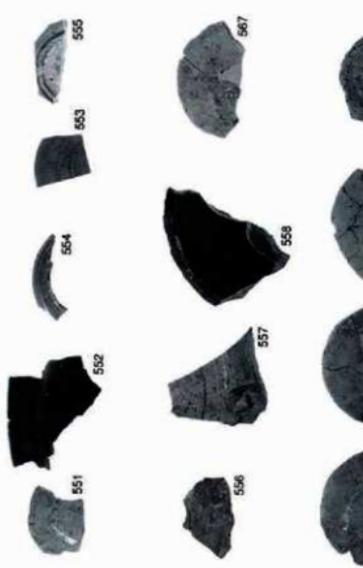
特殊土坑出土遺物



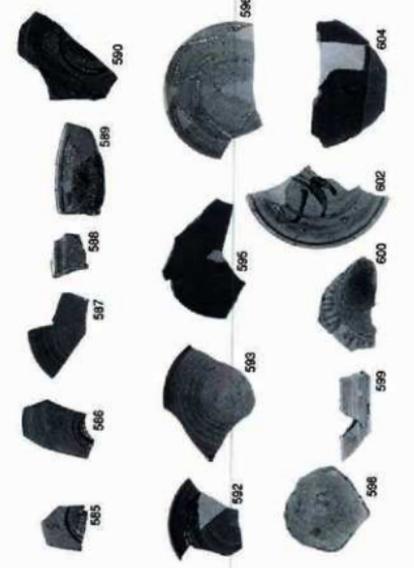
不明遺構出土遺物 (2)



不明遺構、溝跡出土遺物



不明遺構出土遺物 (1)







859



860



879



884



891



904



911



920



921



931



937



945



952



938



936



953



955



957



973



968



966



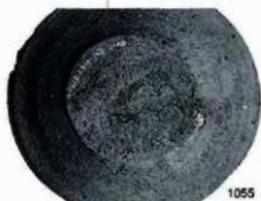
1087



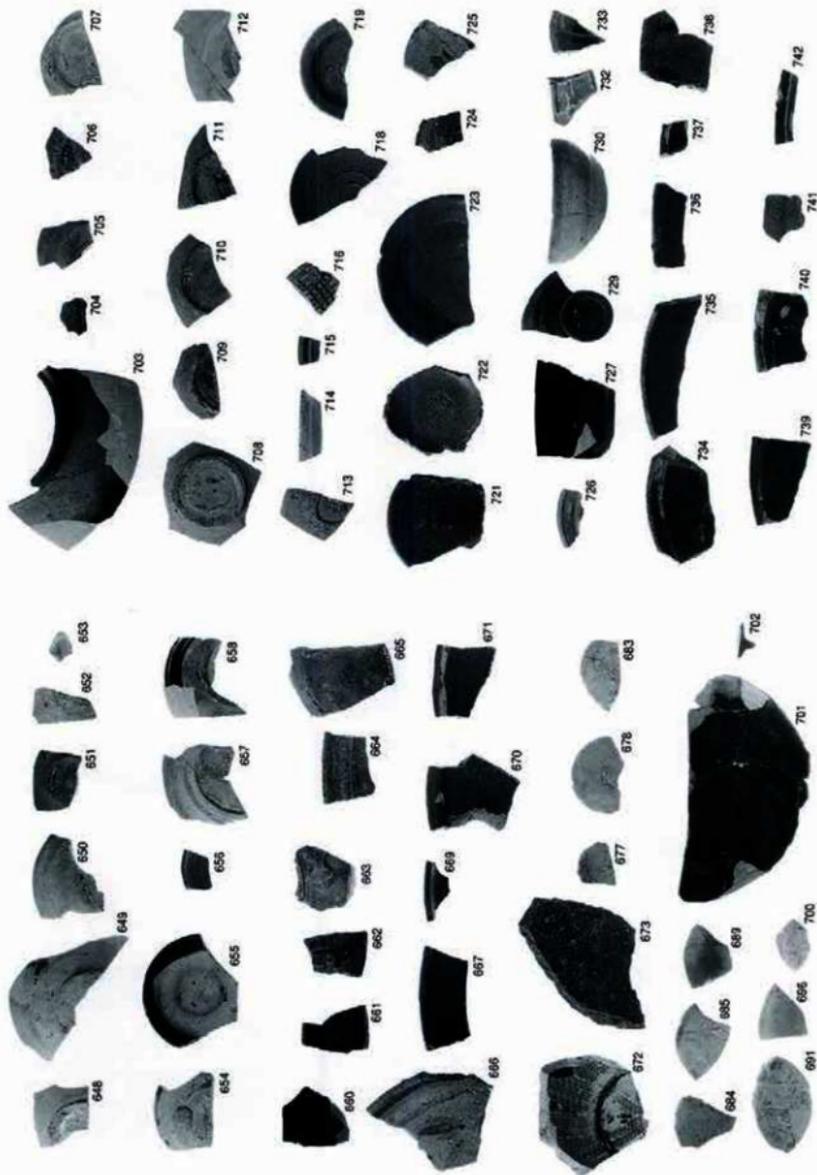
1043



1055

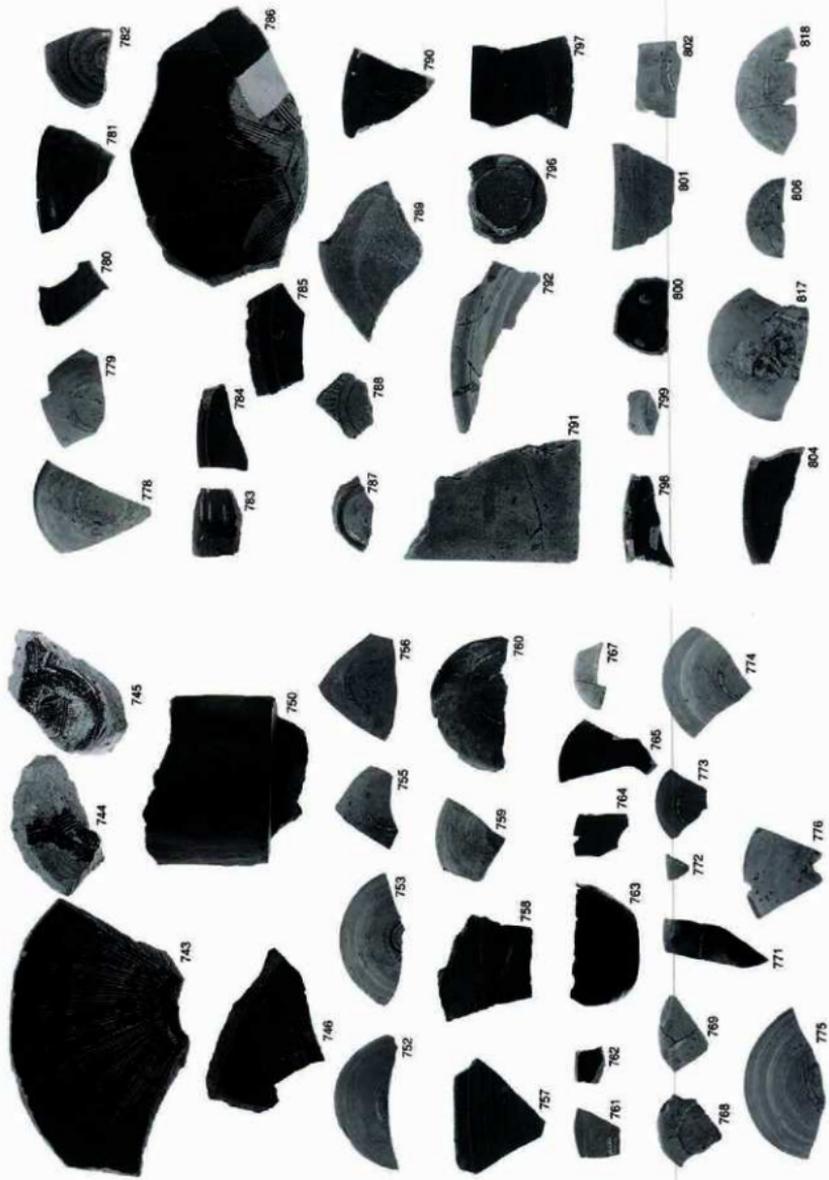


1056



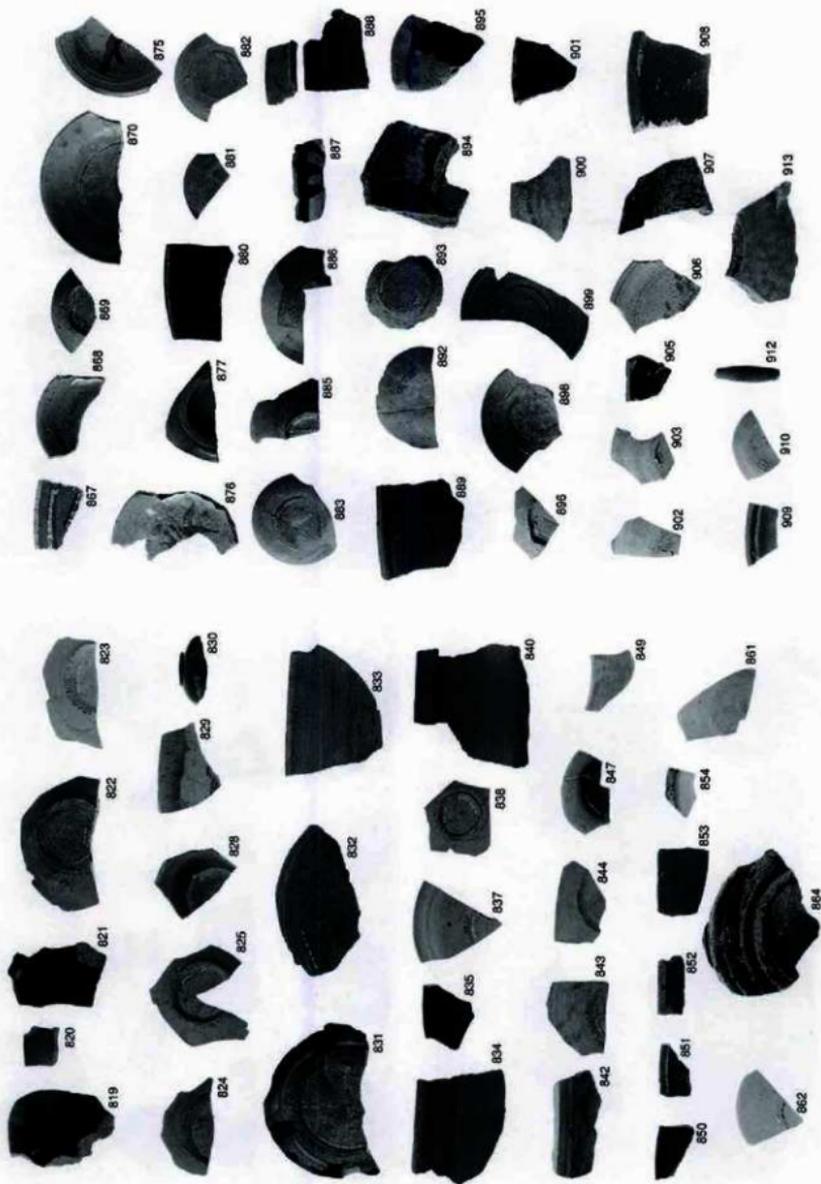
漢路出土遺物 (1)

漢路出土遺物 (2)



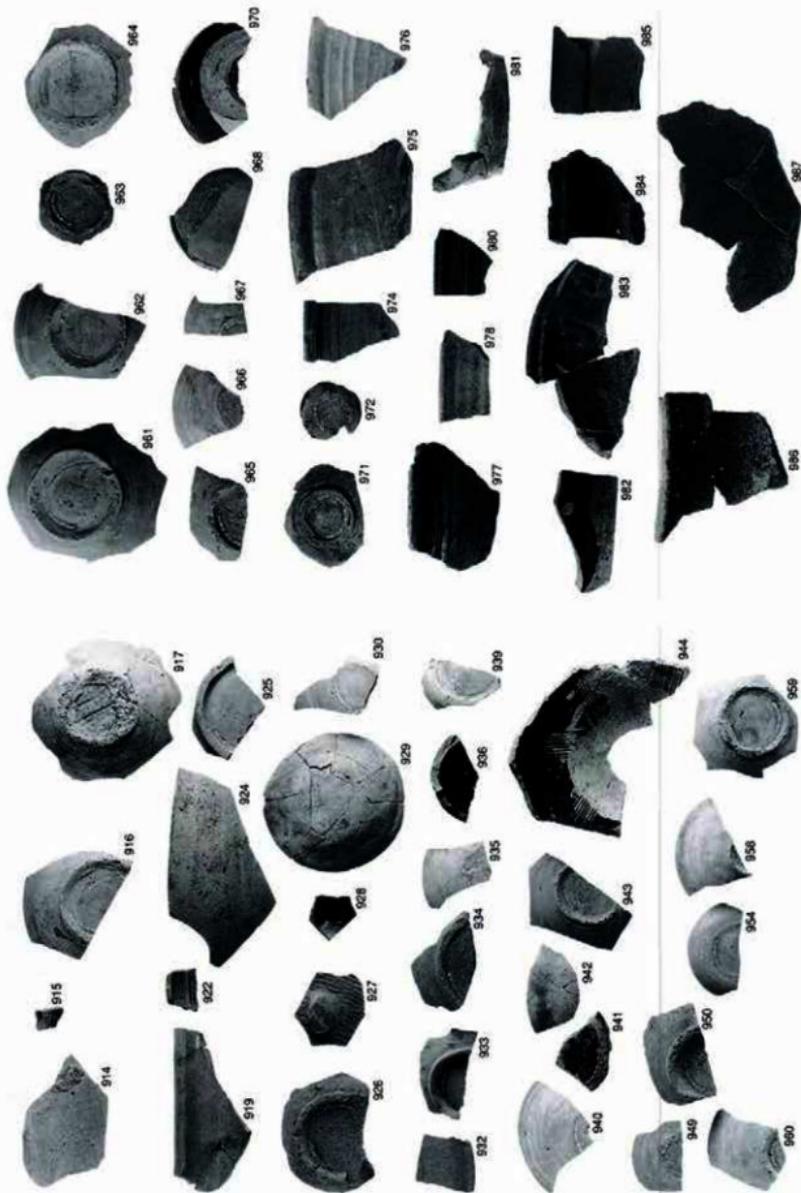
漢代出土遺物 (3)

漢代出土遺物 (4)



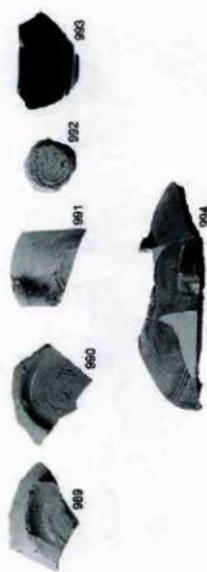
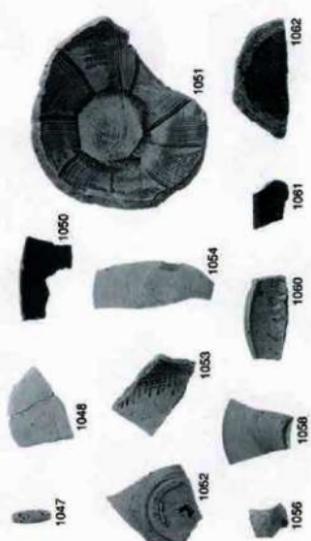
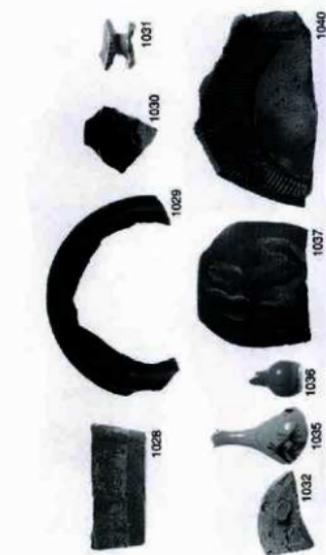
漢代出土遺物 (5)

漢代出土遺物 (6)

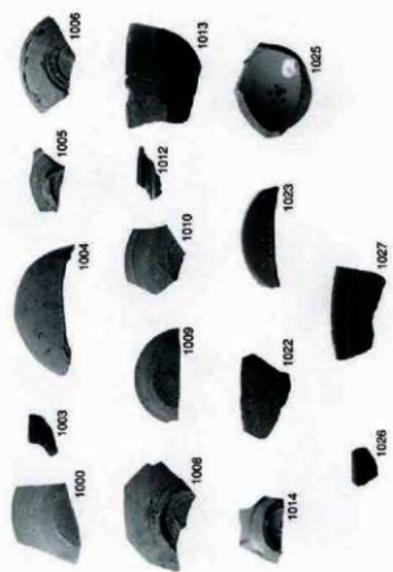


清跡出土遺物 (7)

清跡出土遺物 (8)

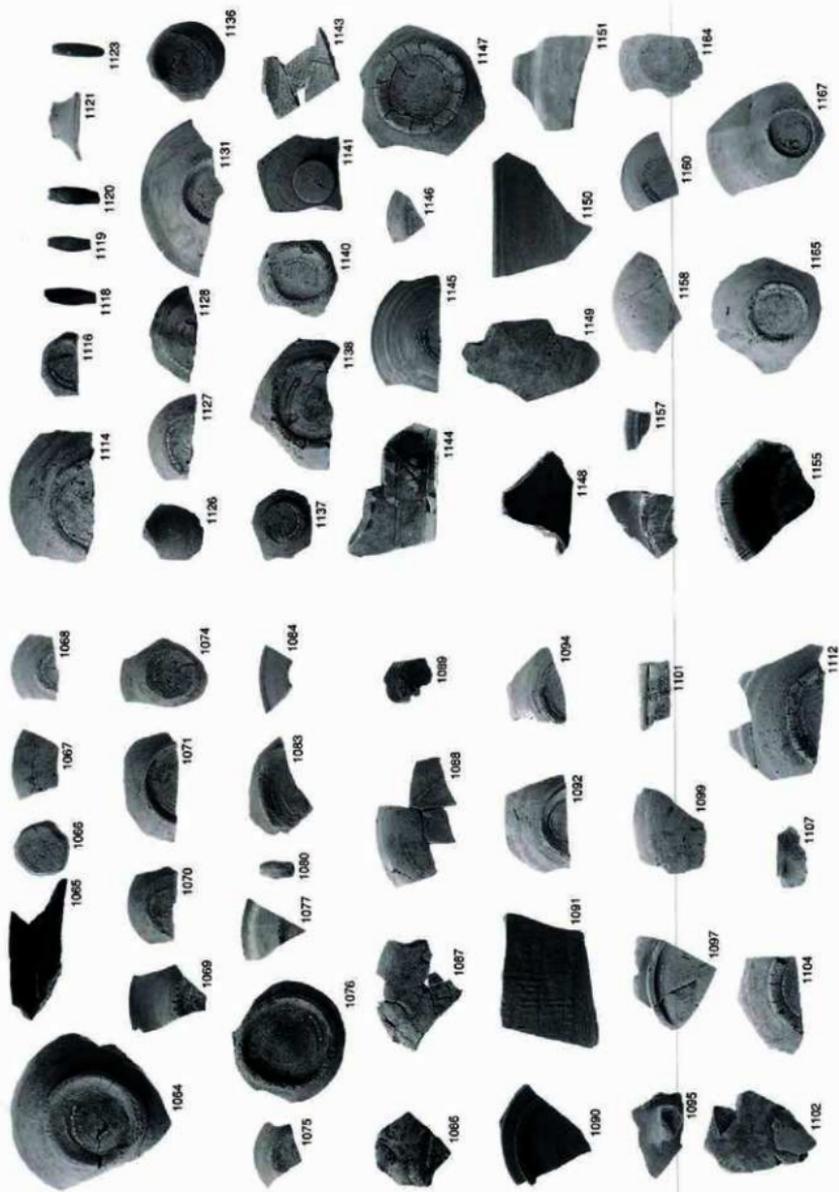


溝跡出土遺物 (9)



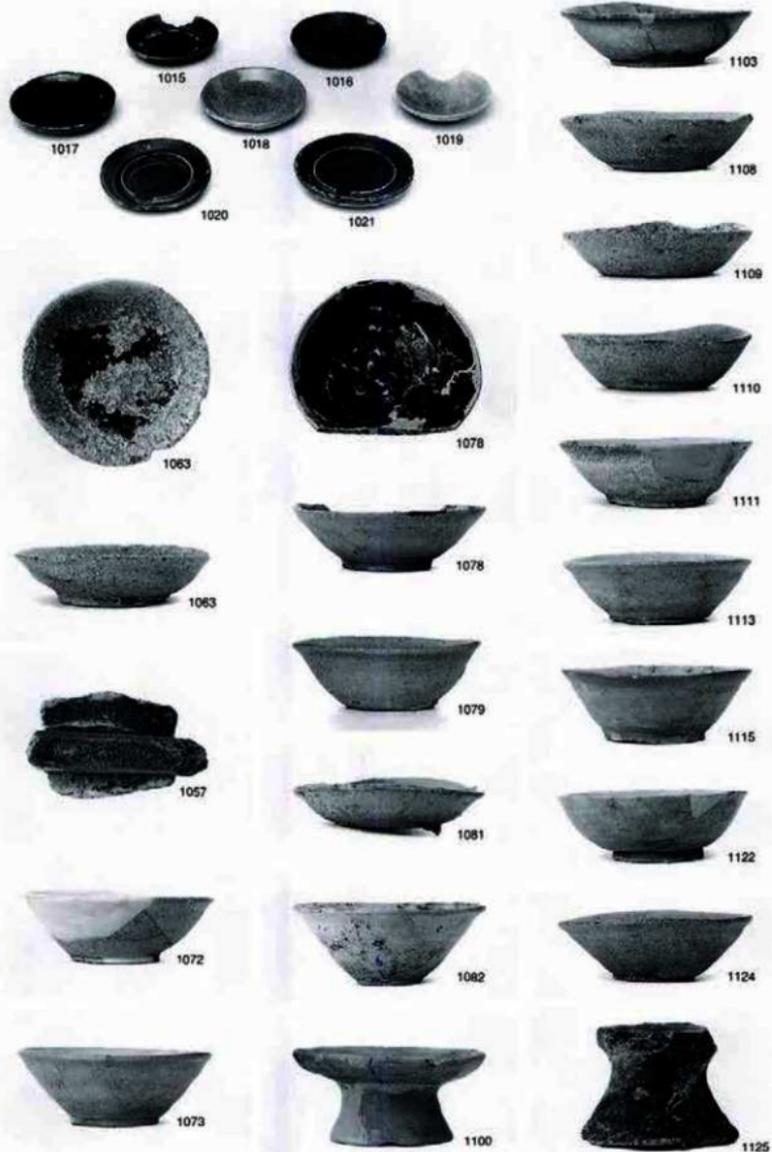
土坑出土遺物 (1)

土坑出土遺物 (2)



土坑出土遺物 (3)

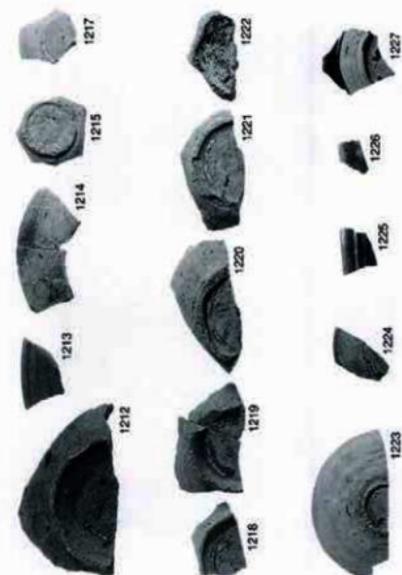
土坑出土遺物 (4)



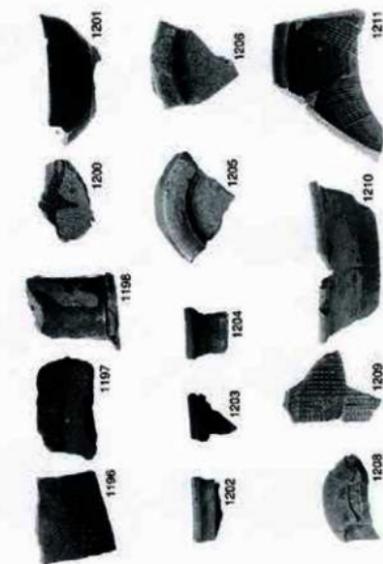
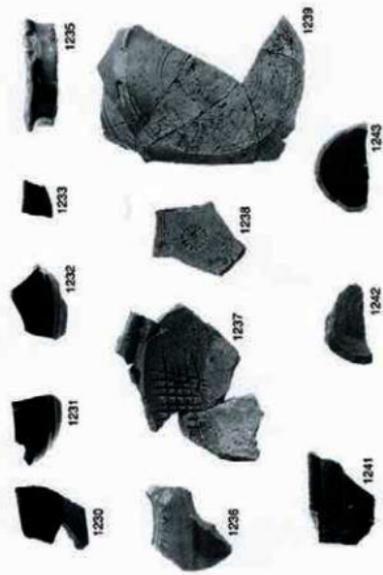
中近世遺構出土遺物 (13)



中近世遺構出土遺物 (14)

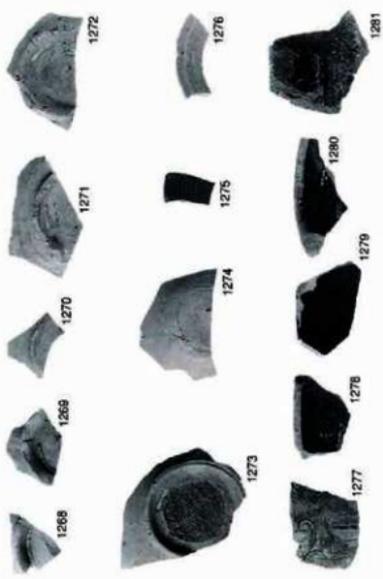


土坑出土遗物 (5)

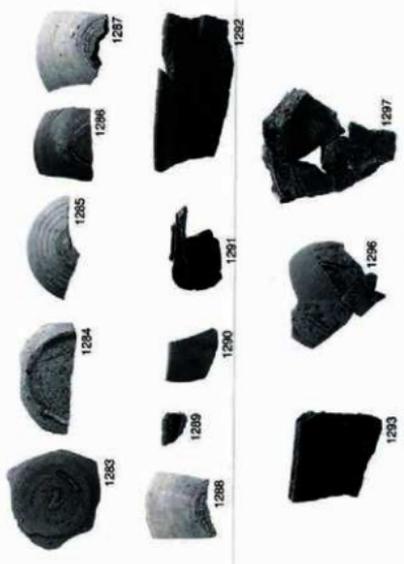


土坑, G区Ⅲ层水田出土遗物

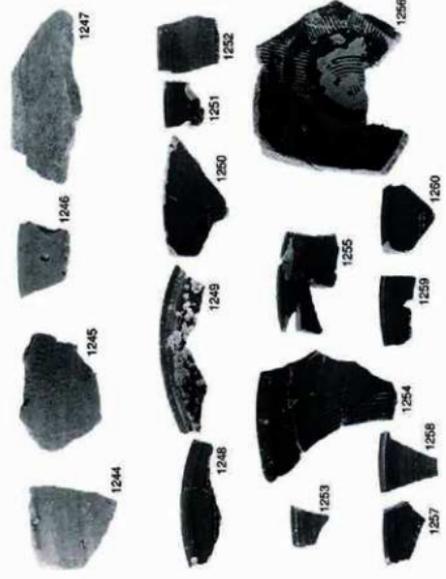
G区GⅢ·Ⅳb层上面道路状遗物, 不明遗物出土遗物



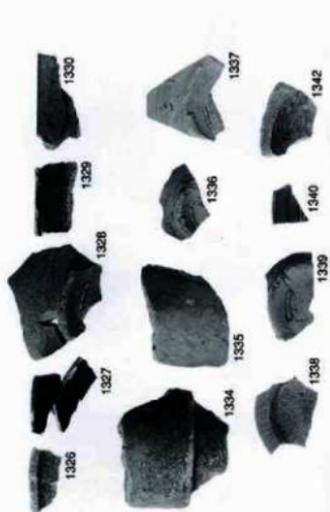
G 区 G IV b 層上面不明遺構出土遺物 (2)



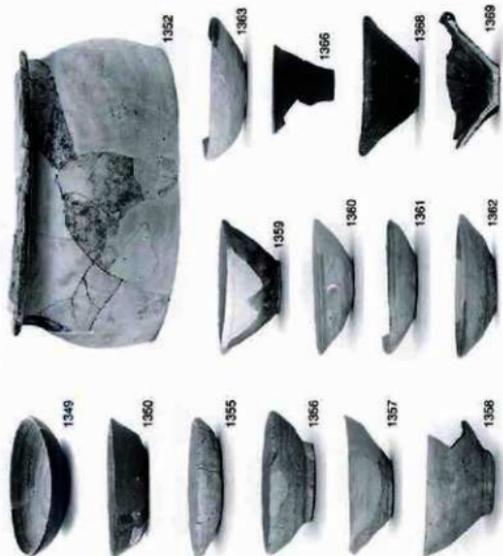
G 区 G V 層上面遺構跡出土遺物



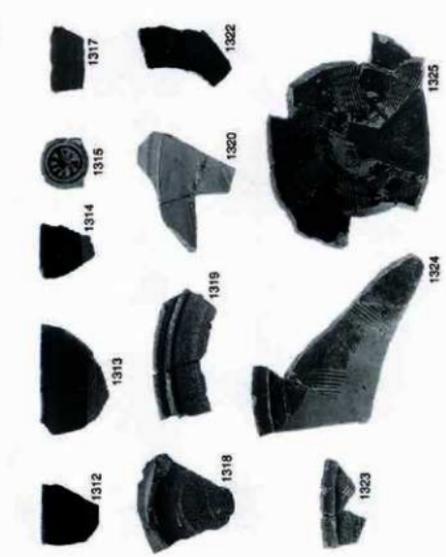
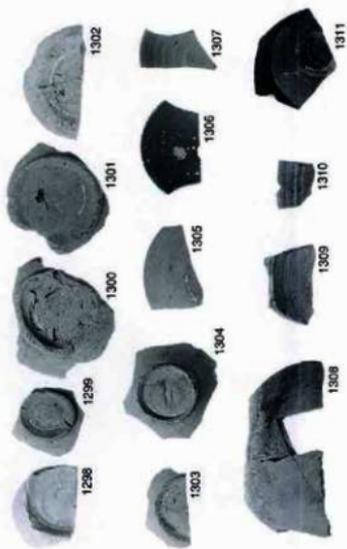
G 区 G IV b 層上面不明遺構出土遺物 (1)



G区G V层上面不明遗物出土遗物(2)



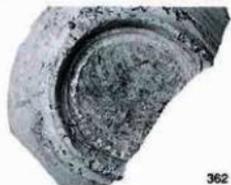
中近世遗物出土遗物(10)



G区G V层上面不明遗物出土遗物(1)



331



362



363



371



372



453



500



504



956



1093



1105



1117



1135



1185



1354



1405

黑書土器





1472



1490



1508



1473



1495



1518



1480



1501



1523



1489



1501



1533



1525



1563



1564



1530



1557



1565



1530



1558



1566



1554

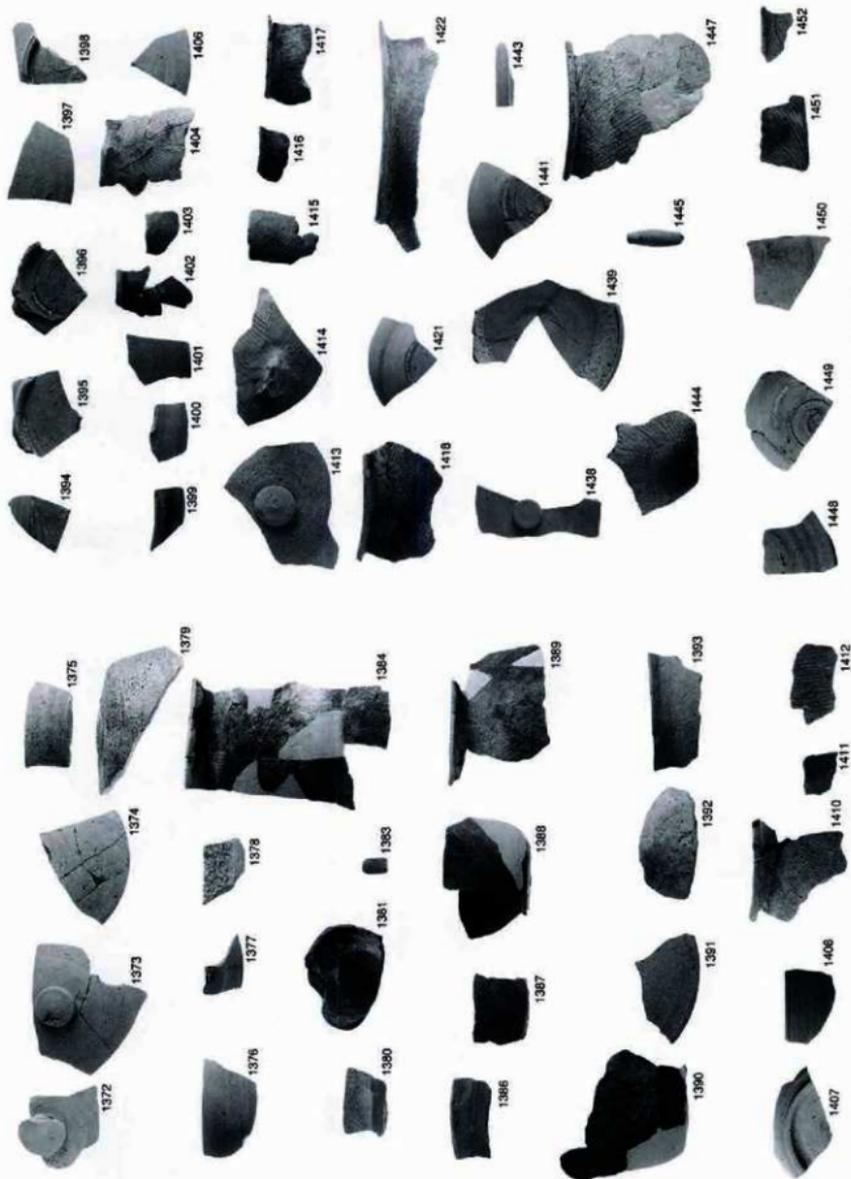


1562



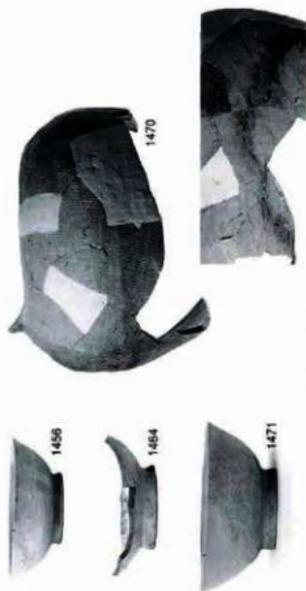
1567

古代遺構出土遺物 (2)

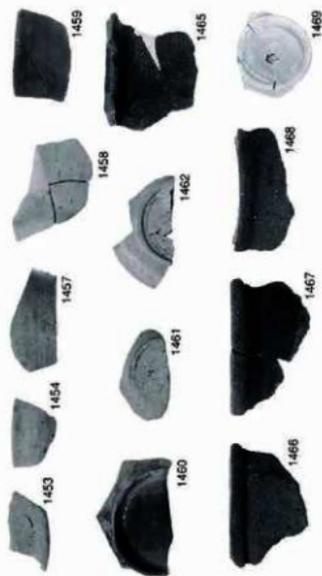


型穴住居跡出土遺物 (2)

型穴住居跡出土遺物 (1)



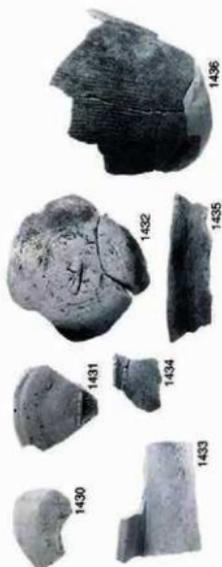
土杯、埋納ビット出土遺物



掘立柱建物跡、土杯埋納ビット出土遺物



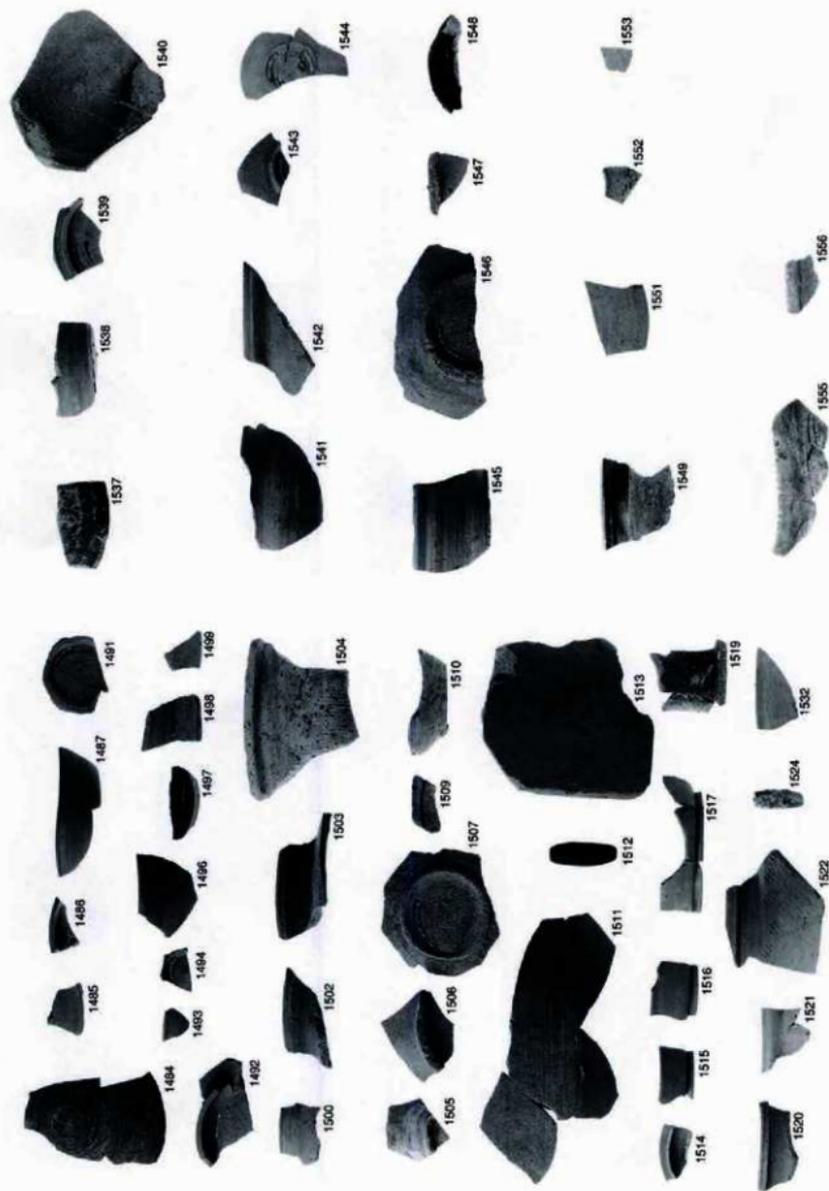
溝跡状態遺構、溝跡出土遺物



竪穴住居跡出土遺物 (3)



溝跡出土遺物 (1)

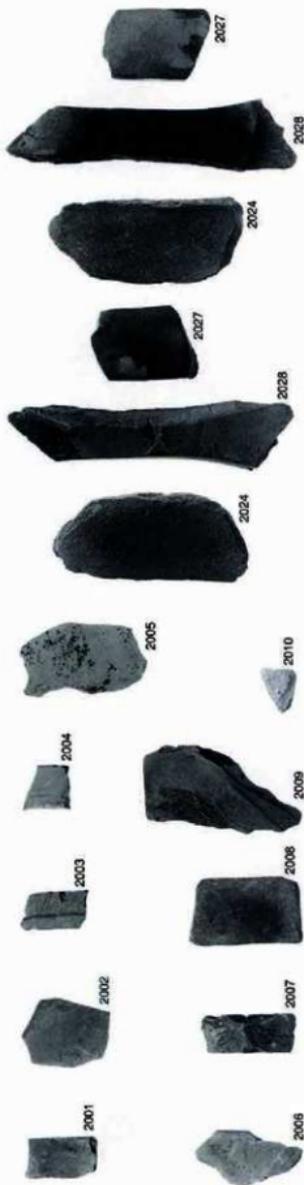


溝跡出土遺物 (2)

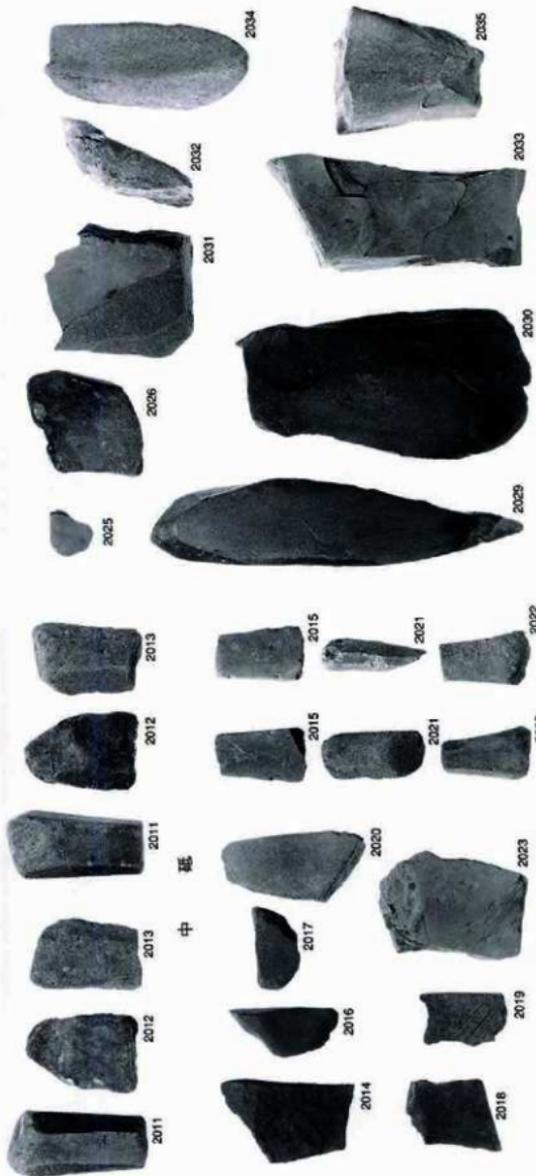
溝跡出土遺物 (3)



その他の時代の遺物



荒 砥 (3)

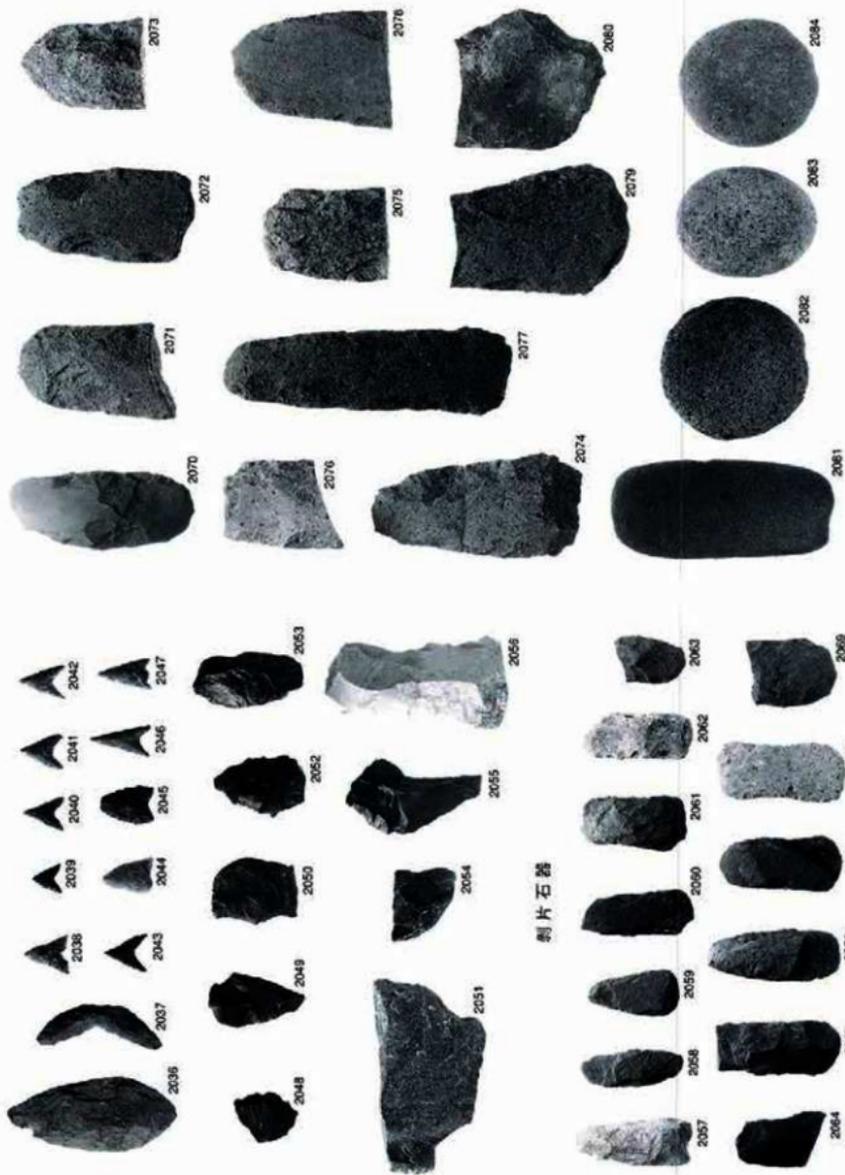


中 砥

荒 砥 (1)

荒 砥 (2)

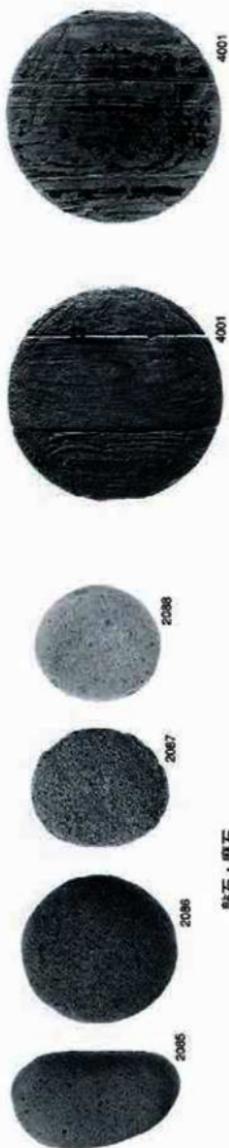
荒 砥 (4)



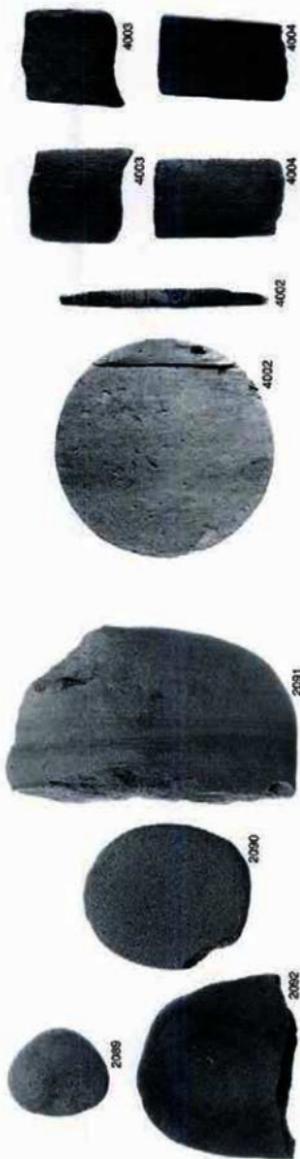
石楯・礮石・磨石

刮片石器

打製石斧



緑石・磨石



摩耗礫

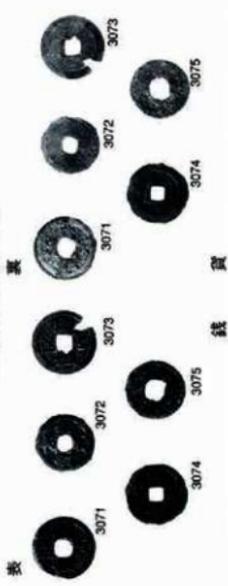


その他の石製品

木製品



金屬製品、銅冶関連遺物



貨

錢



金屬製品、銅冶関連遺物



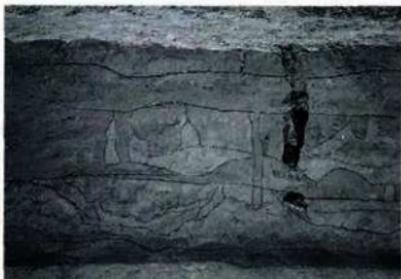
金屬製品



上西田遺跡調査前風景 (上が北)



上西田遺跡の基本層序 (調査区西壁)



上西田遺跡の基本層序 (調査区北壁)



第1調査面検出状況 (南西から)



畝溝跡を完掘した状況 (北から)



第2調査面検出状況（南西から）



取水溝の状況1（北から）



取水溝の状況2（北から）



水口の状況（東から）



水口・尻水口の状況（東から）



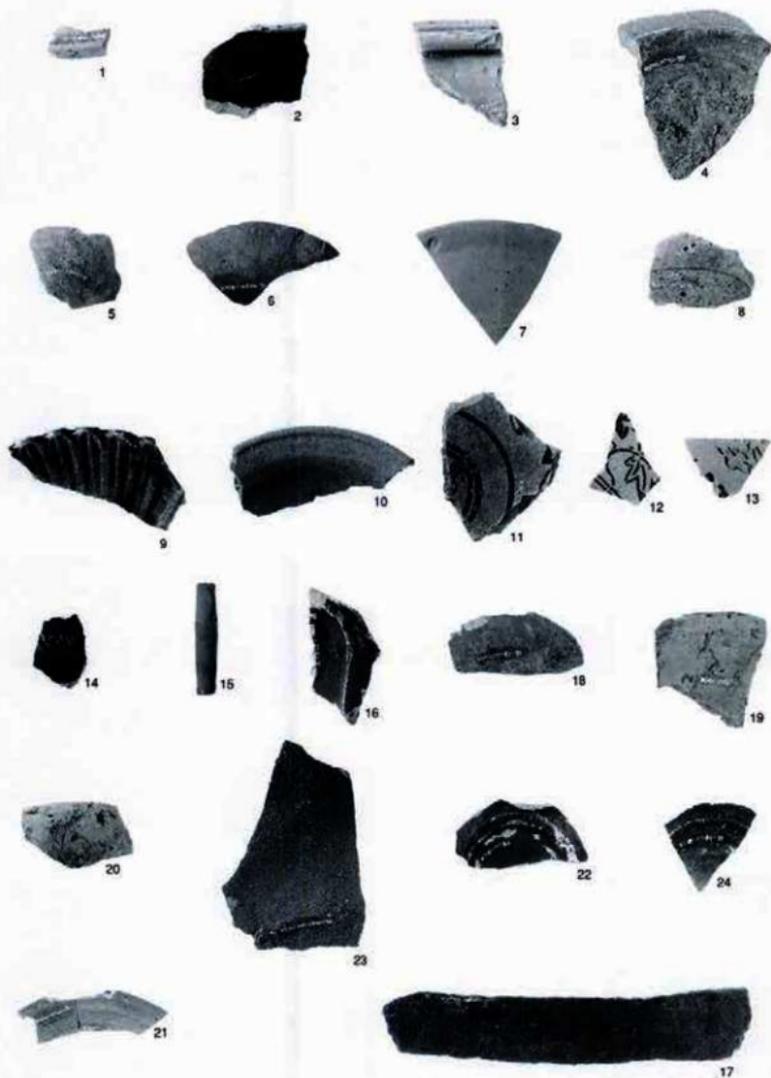
立石の状況



足跡検出状況（東から）



足跡を完掘した状況（北から）





洞雲戸遺跡遠景



神光寺



山頂より松鞍山を望む



調査前風景



山頂の巨岩（南西から）



SX1 精白磁平形合子蓋出土状況（南東から）



SX1 小刀出土状況（南西から）



SX1 完掘状況（南東から）



平坦部伐採後風景 (西より)



作業風景 (南より)



SX2 検出状況 (北から)



SX2 完掘状況 (北から)



SX3 検出状況 (西から)



SX3 完掘状況 (南西から)



SX4 完掘状況 (東から)



SX5 和鏡出土状況 (北から)



SX5 完掘状況 (北から)



SX6 完掘状況 (北から)



SX7 検出状況 (東から)



SX7 完掘状況 (東から)



C区石列検出状況 (西より)



SB1 (掘立柱建物跡) 検出状況 (東から)



山頂部完掘状況 (南から)



西側斜面完掘状況 (南から)



洞雲戸遺跡出土遺物 (1)



21



銅鏡の破片



3



32



33



34

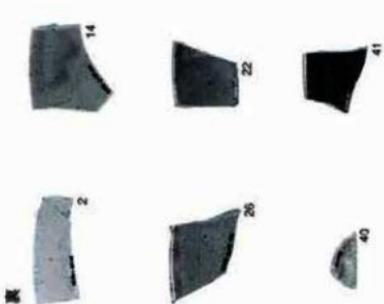
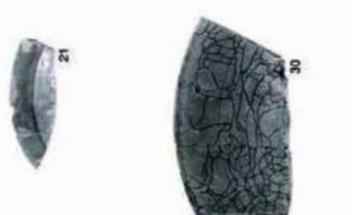
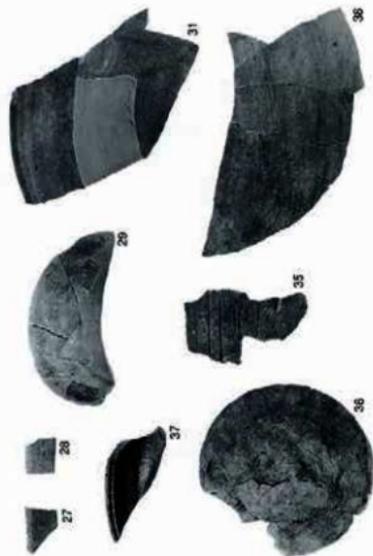
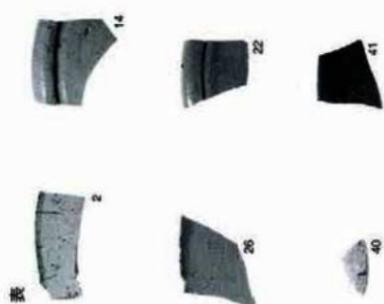
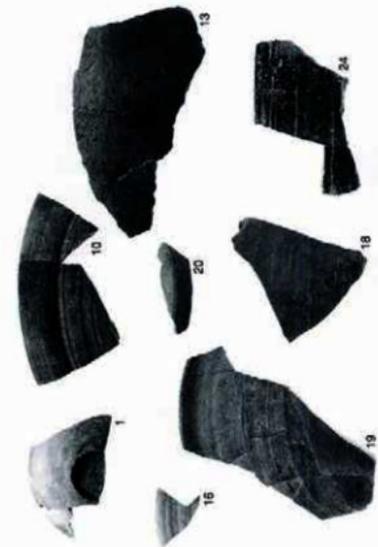


線刻 1



線刻 2

洞雲戸遺跡出土遺物 (2)



高城戸塚遺跡出土土器物 (4)

高城戸塚遺跡出土土器物 (3)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しげたけいせき・かみにしだいせき・ほらうんどいせき						
書名	重竹遺跡・上西田遺跡・洞雲戸遺跡						
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第91集						
編著者名	長谷川幸志、坂東肇、伊藤利巳、古屋寿彦、小野木学						
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター						
所在地	〒 502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058 (237) 8550						
発行年月日	西暦2005年1月14日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
しげたけ 重竹遺跡	岐阜県関市 しもうち 下有知	21205	04139	35° 30′ 58″	136° 54′ 21″	20010525～ 20020320 12,900㎡	東海環状自動車道 (関～美濃加茂) 建設及び東海北陸 自動車道と東海環 状自動車道の連絡 に係る美濃関 JCT 工事に伴う
かみにだ 上西田遺跡	岐阜県美濃市 しんま 志摩	21207	09629	35° 30′ 48″	136° 54′ 02″	20010920～ 20011119 1,200㎡	
ほらうんど 洞雲戸遺跡	岐阜県関市 しもうち 下有知	21205	10001	35° 30′ 56″	136° 55′ 10″	20021007～ 20021018 300㎡	
所取遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
重竹遺跡	集落跡	縄文時代 ～近世	掘立柱建物跡 62 柱列跡 27 竪穴住居跡 15 大型土坑 58 溝跡 210 井戸跡 7 土坑 976	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器 白瓷・白瓷系陶器 中近世陶器 中国陶磁器 石製品 金属製品(含む鍛冶 関連遺物)・木製品	弥生時代前期の溝跡 古代の集落跡 中世～近世の集落 跡(堀とそれに伴 う土塁、地下式坑、 土器埋納遺構、鍛 冶関連遺構)の検 出		
上西田遺跡	水田跡	中世～ 近世	畝上遺構 水田に伴う畦畔 取水路跡	須恵器・白瓷系陶器 土師器・中近世陶器 土製品	近世の畑跡と考え られる畝状遺構、 中世末の水田跡、 当時の足跡を検出		
洞雲戸遺跡	祭祀遺 跡	中世	祭祀遺構(経塚) 7 掘立柱建物跡 1	白瓷系陶器 中国陶磁器 和鏡・小刀・刀子	12C末～13C前半 の経塚と考えられ る遺構の検出		

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第91集

重竹遺跡・上西田遺跡

2005年1月14日

編集・発行 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1

印刷 西濃印刷株式会社